

# 奇譚クラブ

● 新しい風俗文献誌



1





作・六・鬼 団

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

# 花と蛇 特集号

定価 五〇〇円 略号 『花』

団鬼六作長篇サディズム小説『花と蛇』は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気で満天下のSファンを沸かせた傑作であります。過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三百数十頁の特集に加え四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

## 四馬孝画 口絵

### 美女羞恥責 花と蛇 画集

- 一、恐ろしい浣腸の末排泄を強要される美女
- 一、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
- 一、清純な美女に初めて縄掛けしていたふる
- 一、剃毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
- 一、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
- 一、俵のように縛られて宙吊りにされた美女
- 一、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
- 一、足吊りで強制浣腸を施される全裸の美女

### 本文内容見出し

#### 発端 美女を狙う狼たち

#### 第一章 清純な令嬢の屈服

(カメラと令嬢・女奴隷・口惜しき陶酔)

#### 第二章 人身御供の令夫人

(燃ゆる美体・狼の酒宴・人身御供)

#### 第三章 深窓の美少女とズベ公

(赤いしごき・再び奈落へ・奸計)

#### 第四章 小夜子への執拗な調教

#### 第五章 変性色事師の登場

(二人のシスターボーイ・化物の計画・京子の哀泣)

#### 第六章 生れかわるスター京子

(崩潰する京子・夏の畏・地獄の宣誓・まんじの舞)

#### 第七章 激しいスターへの訓練

(奈落への道・美女と白痴)

#### 第八章 低脳男と令夫人の結婚

(奴隷の花嫁・二対一)

#### 第九章 愛弟子を調教する静子夫人

(蛇の果・悲しき決意)

#### 第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊

(美花の踊り・薔薇と百合)

#### 第十一章 悪魔たちの哄笑

(白い関係・調教日記・手鏡)

#### 第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

(甘い調教・挫折)

#### 第十三章 珍芸を開陳する令夫人

(おとし穴・筆と硯)

#### 第十四章 淫靡な時代劇ショー

(三人の風来坊・時代劇ムード・牢獄にて・フランス式)

#### 第十五章 華々しきショーの展開

(ショーの開幕・楽屋の中・桧舞台)

#### 第十六章 野卑な妾二人のいたぶり

(珍芸・姐の上)

#### 第十七章 ズベ公達の邪悪な責め

(美女と野獣・ある日の回想)

#### 第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち

(美女崩潰・別離)

#### 第十九章 悪党の執拗ないたぶり

(鏡の部屋・卑劣な録音)

#### 第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面

(鏡地獄・断髪令嬢・悲しき対面)

#### 第二十一章 勝ち誇る悪党一味

(受難の姉妹)

#### 第二十二章 中国伝来の秘法

(鬼女よりの招待・中国の秘法・羞しい唄)

#### 第二十三章 緊縛された美女の涕泣

(三悪女の狂態)

#### 第二十四章 新しい餌食への触手

(義兄弟)

#### 第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄

(肉の媒介・美津子の号泣・同志討)

#### 第二十六章 恐怖の責め続く

(地獄の接吻・巨大な責め)

#### 第二十七章 結末なき責めの結末

(調教柱・復讐劇・肉の拷問・京子の珍芸)



「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円  
十組十枚 一〇〇〇円  
二十組二十枚 一八〇〇円  
五十組五十枚 四〇〇〇円  
百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚ですから、お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆  
1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)  
2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)  
3 襲う影に慄のく (佐々木真弓)  
4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)  
5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)  
6 縛られて困るわ (金原奈加子)  
7 私を襲わないで (左近麻里子)  
8 縛られて嬉しい (中河 恵子)  
9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)  
10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)  
11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)  
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)  
14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)  
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)  
16 恥らいの女体美 (中河 恵子)  
17 何故私を縛るの (金原奈加子)  
18 感泣する胸縛り (ローズ秋山)  
19 猿ぐつわの悦虐 (関谷富佐子)  
20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)  
21 足指はく字に (佐々木真弓)  
22 麻紐の柔肌責め (金原奈加子)  
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)  
24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)  
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)  
26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)  
27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)  
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)  
29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)  
30 出臍を晒す縛り (佐々木真弓)  
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)  
32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)  
33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)  
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)  
35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)  
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)  
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む (大島 照代)  
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)  
40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)  
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)  
42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)  
43 縛りの肌を見て (金原奈加子)  
44 私は縛りが好き (金原奈加子)  
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)  
46 麗身を横たえて (左近麻里子)  
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)  
48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)  
49 柔肌に痛む麻紐 (左近麻里子)  
50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)  
51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)  
52 突き出したお尻 (中河 恵子)  
53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)  
54 首縄股間縛の女 (長井葉津子)  
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)  
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)  
57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)  
58 賜られる緊縛女 (長井葉津子)  
59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)  
60 もう虐めなないで (金原奈加子)  
61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)  
62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)  
63 全裸の縛を見て (長井葉津子)  
64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)  
65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)  
66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)  
67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)  
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

69 美体は縄に映る (中河 恵子)  
70 遅ましき臀部晒 (左近麻里子)  
71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)  
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)  
73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)  
74 捧げられる女体 (中河 恵子)  
75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)  
76 麗わしの肌を縄 (佐々木真弓)  
77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)  
78 開股の股間縛り (大島 照代)  
79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)  
80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)  
81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)  
82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)  
83 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)  
84 胴締縛りと猿轡 (長井葉津子)  
85 投げ出された裸 (金原奈加子)  
86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)  
87 開股縛りの女体 (左近麻里子)  
88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)  
89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)  
90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)  
91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)  
92 美しい女の縛り (佐々木真弓)  
93 股間縛りに羞う (長井葉津子)  
94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)  
95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)  
96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)  
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)  
98 人身御供の乙女 (長井葉津子)  
99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)  
100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)



# THE KITAN CLUB

PUBLISHED MONTHLY BY ALASKA SYMPHONY

OSAKA JAPAN



1月号 ¥350



☆ ミキとマキの華麗な悦虐プレイ写真

九月号のカメラ・ハント「飼育の愉しみ」で始めて登場した小池美喜と十一月号のカメラ・ハント「悦虐の昼と夜」で初登場した松山真樹子の二人の美女の写真をマキの方々に紹介します。十二月号のカメラ・ハントでは小池美喜、松山真樹子の二人の美女の写真をマキの方々に紹介します。十二月号のカメラ・ハントでは小池美喜、松山真樹子の二人の美女の写真をマキの方々に紹介します。

縛られた美女二人

小池・松山二嬢 略号四〇〇円  
雪の如き白さの柔肌を誇るマキと若鮎の肢体に小麦色の肌のミキと対照的な二人の美女を後手に縛り上げたマキ好みの資料。

全裸の美女を連縛

小池・松山二嬢 略号四〇〇円  
若さの溢れたムチムチとした全裸の肌を惜しげもなく晒して二人の美女が、それぞれ個性的な美しい肢体を緊縛にゆだねている。

松山真樹子の縛り

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
松山真樹子 略号八〇〇円  
ぽちやぽちやとした真白い柔肌は皮下脂肪が二の腕に喰い込みに埋没してしまっている。

一糸まとわぬ柔肌

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
松山真樹子 略号八〇〇円  
高々と後手に縛り上げられ無抵抗のまま全裸の肌をさらしたマキはその無防備感だけで異常なまでの昂奮を味ったと告白している。

開陳した華麗肢体

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
松山真樹子 略号八〇〇円  
咲き誇ったバラの花のような華やかなマキの肢体は縄の洗礼を受けて一段と美しさを増し微細な肌の皺に至るまで鮮鋭に描出する。

縄に喘ぐ諦観の相

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
松山真樹子 略号八〇〇円  
いみじくも辻村氏が言った真樹子のボーカルフエイスが全裸に緊縛という非常事態に至っても、そのまま平静を保てるだろうか。

マキを責めるミキ

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
松山真樹子 略号八〇〇円  
真白い肌のマキに縄を掛ける小池色の肌のミキ。二人共若やいだ肢体を誇らかに一糸まとわぬ全裸で縛られるマキの表情が凄惨。

縄に通う愛情の焰

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
大手札三枚一組 略号四〇〇円

抱擁する美女二人

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
小池・松山二嬢 略号八〇〇円  
全裸の肢体を互いに相擁しては二人の美女が互いに最高のレスポンスの美しさを演出している。

柔肌と柔肌の狂態

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
小池・松山二嬢 略号八〇〇円  
二人とも極めて若々しい白肌と小麦色肌をびったりと寄せ合って手と足をからめ躍動する若鹿のような肢体はまさに素晴らしい。

相愛の極致を描く

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
小池・松山二嬢 略号八〇〇円  
小池・松山二嬢 略号八〇〇円  
カメラ・ハントで紹介されたマキとミキは相思相愛の純粋な間柄であるが、カメラを前にして燃え上った全裸の二人の狂態を描く。

塚本鉄三

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
松山真樹子 略号八〇〇円  
十一月号で塚本氏が久方ぶりにマゾの女王関谷富佐子さんを責めた記事が「狂乱の一夜」と題して掲載されたところ大変な評判で、その時のフोटを譲ってほしいとい

狂乱の一夜の記録

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
松山真樹子 略号八〇〇円  
十一月号で塚本氏が久方ぶりにマゾの女王関谷富佐子さんを責めた記事が「狂乱の一夜」と題して掲載されたところ大変な評判で、その時のフोटを譲ってほしいとい

鞭に狂う悦虐表情

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
関谷富佐子 略号八〇〇円  
全裸で後手に緊縛された女性の臀部を力一杯鞭打てば自由に狂う顔と肢体の表情の美しさ。

うねる鞭打ち肢体

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
関谷富佐子 略号八〇〇円  
定評のある彼女の表情はマゾの極致としてS人土にとっては垂涎の依って絶妙の肢体を開陳する。

足吊りの被虐肢体

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
関谷富佐子 略号八〇〇円  
両足を逆さに吊って臀部を眼下に晒して、さあいつでも鞭打つてムチ。感泣にむせぶ妙な表情。

美しきマゾの境地

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
関谷富佐子 略号八〇〇円  
後手に縛られた全裸のまま打撃に突出した尻を乱打された屈み、打ち出た尻を打たれた打撃に悦びにむせび泣いている。

「申込先」

大手札三枚一組 略号四〇〇円  
関谷富佐子 略号八〇〇円  
「申込先」ここに発表したい写真、鮮明なものばかりです。お申込みは大阪市阿倍野局私書箱第14号天



# 本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で  
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象  
 として編集しておりますが、青少年の保護  
 育成に関する条例には抵触しないよう、十  
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減  
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの  
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた  
 めの努力はいたしません。



## 奇譚クラブ

△第二四巻 第一号・通刊第二六一号▽

### (昭和四十五年) 一月号 目次

△本 文▽

扉で一言『欲求不満』	.....	K・T生	.....	(9)
通信欄解析私見 S Mと風土	.....	葉月由紀夫	.....	(10)
新連載小説 地獄ホテル(1)	.....	藤見 郁	.....	(14)
歌謡漫談 あなた好みの女になりたい	.....	牧 高志	.....	(26)
懸賞入選 「翻訳ミステリーの サド・マゾ」紹介	.....	シヨール・ ムラカワ	.....	(28)
秋風にももの想う『あるほどの縄を』	.....	早木 夢二	.....	(37)
青春の陥穽 甘い罠	.....	芳野 眉美	.....	(38)
女子プロレス II ロメス・スペツシャルII	.....	山口 広	.....	(46)
連載小説『大噴火』(16)	.....	千葉 青鬼	.....	(50)
足についての12話 拝み・食べる	.....	宝 隼人	.....	(58)
画人晴雨「絵巻・美人十二支」	.....	斎藤 夜居	.....	(64)
殉虐の女 売られる	.....	沖田 史郎	.....	(72)



# 奇 ク サ ロ ン

(232)



SMに耽溺する心

小杉 千恵

SM夫婦雑感

△変りばえしない夫婦プレイ▽

長田

サロン案我記△第六十七回▽

辻村

「SMの芸術化」

花柳

始めて女体を縛る

浅田

奇クに望むこと

栗原美智子

提案「ネオ・ゴムマニア」

菅原 敏夫

関谷夫人の絶叫△十一月号を読んで▽

若井作一郎

編集部だより

編集部

女装M者の願い

中村 純

秋山夫妻「残酷ショー」見学記

香川 実乗

ある真面目なたわごと

須渾 朔

我がフォト「網の中」

赤畑 修造

短信往来「英堅守さんへ」

苦木桃太郎

僕のイメージ画集「健康」

室井亜砂路

Sコレクション「黄金の苦悶」

豪 城二

私のイメージ画「受難の妖夢」

辻 梶太郎

ある娘の独白 イチジクと君子……………緒方 君子……………(82)

女性乗馬考 ヘレン女史の調教……………佐野 寿……………(87)

懸賞入選「地獄への売身」……………横浜 好男……………(92)

我が願望 “複数プレイへの志向”……………松山 壮吉……………(105)

新連載「M派交友録」(1)……………鬼山 絢策……………(110)

三人称告白 麒麟欧二における人間の探求……………麒麟 欧二……………(119)

史実研究 “切腹百年史”△女性篇▽……………中康 弘通……………(122)

幻想曲「八つの変奏」……………宇光 仙……………(126)

SMカメラ・ハント△続・小池美喜・松山真樹子▽

『ミチとマキの華麗なる戯れ』……………辻村 隆……………(136)

灰色のバカンス“危機一髪”……………紫 頭 巾……………(160)

そこで提案「女性は乗馬がお好き」……………馬野鞍之介……………(172)

懸賞告白 奇妙な四角関係……………花田恵惟子……………(174)

告白 私の奴隷生活……………中田 裕史……………(184)

ある記録『カメレオン』(附・余計な……………セトヨシヤ……………(186)

体験告白 “浣腸遍歴”……………伊勢 竜也……………(205)

女斗美小説「ふたり妻」△1▽……………芦浦素舞夫……………(208)

創作「魔性のもの」(前篇)……………保藤 久人……………(220)

読者通信……………編集部選……………(252)



昭和四十三年三月号の奇クサロ

昭和四十三年三月号の奇クサロ誌上で「或る願望に托して」という告白を発表して、本誌の緊縛モデルになりたいというM女性と加子はその後希望通りに辻村氏や山本氏のカメラの前にとその緊縛姿を開陳したのであった。

記事にあるように、カメラハントの振した若妻の女体をカメラの前にはさすこととなつた。満天下妊婦マニアの方々は勿論のこと、緊縛ファンの方々にも貴重な資料となると考へ、ここに編集部の特写を試みたので、御希望の向きは打切りにならないうちに、大阪市阿倍野局私書箱第十四号、天星社宛へ代金同封の上お申込み願いたい。

△妊婦緊縛の部△

大手札三枚一組 五〇〇円

大手札三枚一組 五〇〇円  
金原奈加子 略号△さめ▽  
初めての完全なる逆吊り写真。M  
女性としての金原奈加子の決死的  
の協力があってこそ成功すること  
の出来た稀有の妊婦資料。

大手札三枚一組 四〇〇円

大手札三枚一組 四〇〇円  
金原奈加子 略号△さも▽  
大きなお腹を前面にさらして両  
手を高々と吊られた無防備な姿態  
はM女性奈加子のマゾ心をこよな

大手札三枚一組 四〇〇円

顔に哀愁の表情がにじみ出る。  
 顔なく、豆絞りの猿轡をかまされた  
 赦なく痛めつけている。可憐な素  
 の縄目は脂肪のついた柔肌を情容  
 後手高小手に厳しく縛った胸  
 金原奈加子 略号△さい▽  
 大手札三枚一組 四〇〇円

大手札三枚一組 四〇〇円

大札三枚一組  
金原奈加子 略号 四〇〇円  
小柄ながら均整のとれた肢体の  
奈加子であつたが、今は臨月近い  
太鼓腹を突き出して、その全裸の  
全身像は一種異様なエキセントリ  
ックな美をもし出している。後  
手に縛られた初産婦の全身を見た  
方にはこの集をおすすめる。

大手札三枚一組 四〇〇円

大手札三枚一組 四〇〇円  
金原奈加子 略号△さみ▽  
今まさにはちきれそうな便々た  
るお腹を誇らしげにさらして、き  
りきりと肌に喰い込む細目を甘受  
した若妻は、淋しくうつむきな  
ら自分のさがを悔いている。

大手札三枚一組 四〇〇円

大手札三枚一組 四〇〇円  
金原奈加子 略号△さる▽  
沢山の縄を用いて皮下脂肪の豊  
富な肌に埋もるばかりに力一杯縛  
り上げた若妻の臨月腹を中心にし

大手札三枚一組 四〇〇円

若妻の緊縛妊孕美

大手札三枚一組 四〇〇円  
金原奈加子 略号八さまV  
人妻となつたなまめかしさが全  
裸の全身にそこはかとなく漂つて  
いるが、妊娠という生理的な異変  
は更に彼女の肉体を明らかに変化  
させている。その変化に対して非  
情な縄は女体のべールを荒々しく  
はぎとつてゆくのだ。

大手札三枚一組 四〇〇円

大手札三枚 一組 四〇〇円  
金原奈加子 略号△さむ▽  
授乳に備えて乳汁のしたたるば  
かり膨大となつた乳房を更に強調  
するようになつた乳房の周囲を無  
も締め上げて、飄箏のようにくび  
てしまった。縄に悶えて息づく大  
きな腹部は、まるで太鼓のよう

臨川復全果西人形

臨月腹全裸晒人形  
大手札三枚一組 四〇〇円  
金原奈加子 略号△さち▽  
二十才の若さに溢れた女体ながら妊娠という異常美を宿している

縛りなしの妊婦スードを

躍動する妊婦裸像

アクロバチックな動き

たる形音をさし、若々しい肢  
体は、指示される通りのポーズを  
とって、アクロバチックな動きを  
示す。粘っこいカメラアイは、そ  
の動きを追って次々と躍動する妊  
婦の姿態をキャッチしていった。

大手札三枚一組 四〇〇円  
金京奈加子 客号 冬入 /

大手柄三枚一組  
金原奈加子 略号△さへ▽  
単なるヌードと違つて、妊娠といふ冷徹な事實は、この可憐な少女の肢体を一躍動物的な生ぐささに満ちた女体に変えてしまつた。しかし一面、それは普通では見るここの出来ない女体の美しさを最も高に發揮しているという稀少なものである。貴重で稀少なこの異常美にしばし酔つて頂きたい。

大手札三枚一組 四〇〇円

大 金 恥 来 に  
 手 原 女 妊 女 女  
 札 奈 性 娠 性 性  
 三 加 だ とい だ だ  
 枚 子 け け け け  
 一 組 と 経 事 異 露 出 症 的 フ オ ト 。  
 組 略 号 四 〇 〇 円  
 〆 さ と 〆  
 出 げ

大手札三枚一組 四〇〇円

大  
手  
札  
三  
枚  
一  
組  
四〇〇円

金  
原  
奈  
加  
子  
略  
号  
△  
さ  
さ  
▽

妊  
婦  
マ  
ニ  
ア  
の  
中  
に  
は  
縛  
り  
の  
な  
い

妊  
婦  
の  
ヌ  
ー  
ド  
を  
好  
む  
人  
が  
あ  
る  
。妊

婦  
と  
い  
っ  
て  
も  
経  
産  
婦  
で  
は  
、や  
は  
り

新  
鮮  
な  
魅  
力  
は  
薄  
い  
だ  
ろ  
う。





### 欲求不満

最近SMに關した事項がマスコミに取り上げられることが多い。それ自体、大いに喜ぶべきことだが、それらの中には歪曲され、誇張され、ときには誤解されているものも決して少なくない。そうした商業主義の巧妙な触手によってSMの甘美な花園を踏みにじられている有様を眺めたときは、抱いていた期待とはうらはらに、繊細なマニアの神経は垢だらけの掌で逆なでされたようで淋しくなってくる。SMとは、そんなものではないと、心の中で叫びながらも、それをはっきり口で言いあらわせないもどかしさに、自分ながら齒がゆくなってしまうのである。

傷つき易いマニアの心を温かく包んでくれるような酔生夢死の境地がマニアの理想ではないだろう。か。その意味において陰惨な面のみを強調したSMの取扱い方には組みしないのだ。SMの真髄とはもっとロマンチックで人情美溢れたものでなければならぬと信じている。

(K・T生)



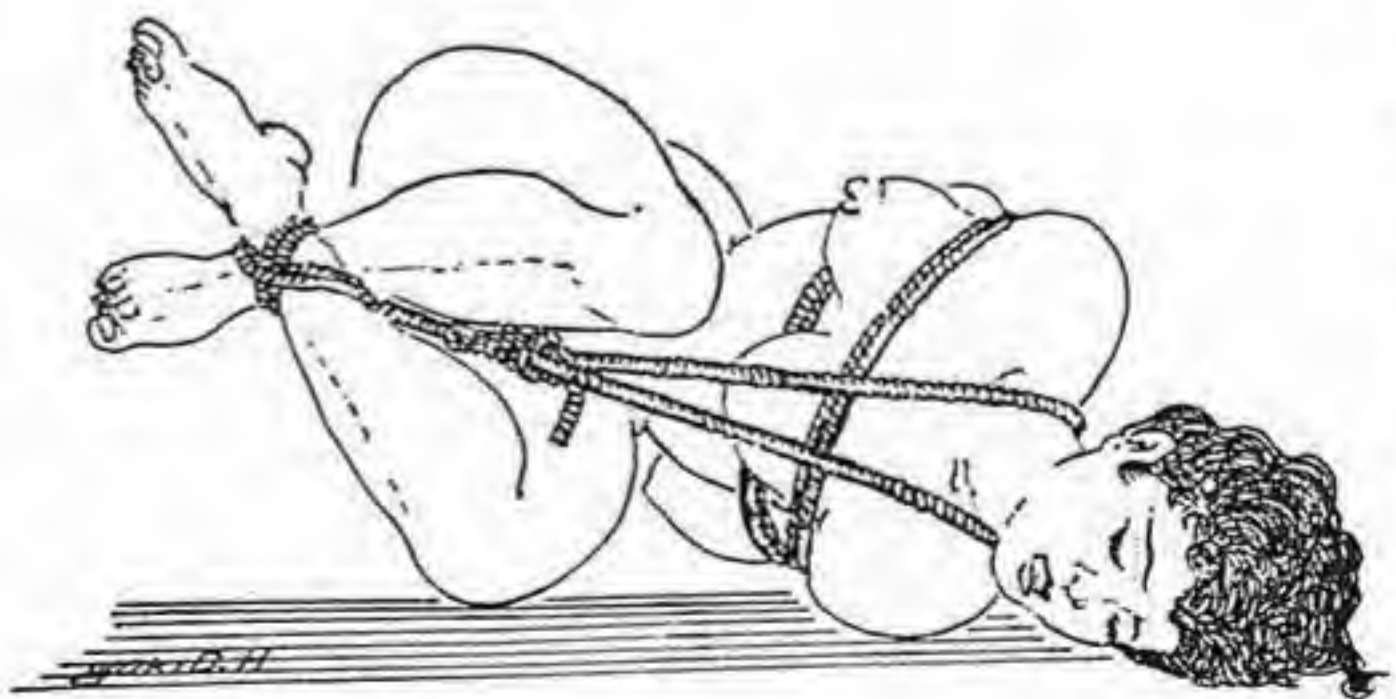
|| 解 || 析 || 私 || 見 ||

# S M と 風 土

|| 通 信 欄 投 稿 者 白 書 小 論 ||

葉 月 由 紀 夫

(カ ッ ト も)



## 一、はじめに

奇クを代表するものの一つに、読者通信欄があり、かつ不可欠のものであろう。そしてこの読者通信欄（以下、通信欄と呼ぶ）は、通信者（投稿者）は言うに及ばず、表面化しない真の愛読者といえる諸々の人にとって幾多の夢と希望、願望、そして同志的繋がり

深めてくれて、美文化、芸術化された、ウワッスベリな常連作家の虚構（失礼！）とは異なり、そこには個人のみしか持ち得ない新鮮な味がある。

夜長の秋の一夜、いたずらっ気と好奇心とおこし、この投稿者（採用者が正確か？）を狙上の鯉として、盲蛇の悪言、雑言を吐いてみることにした。

都道府県とその人数（延人数）は別表に示す如くであり、これに小生なりの庖丁さばきを試みた。もちろん種々、異論はあろうが、あくまでも私の個人的見解であるので、独断を下した点、或いは不明、雲を掴むが如き点についても、一推論に基き帰納的に押し切った点が多いことは、百も承知の上である。

読者諸氏、大かたのご叱正を仰ぎたい。



読者通信欄地区別一覽表 (S.44/4~11月号)

地 方	県 別	通 信 者		地 方	県 別	通 信 者	
		男	女			男	女
北海道	北海道	3	2	関 西	京 都	7	2
東 北	青 森	2	2		大 阪	31	7
	宮 城	1	4		兵 庫	30	9
	新 潟	1	0		三 重	1	0
	富 山	1	1		奈 良	3	0
	福 井	1	0	中・四国	広 島	3	0
関 東	東 京	47	5		山 口	1	0
	千 葉	2	1		岡 山	2	1
	神奈川	16	3		徳 島	2	0
	埼 玉	4	0	九 州	長 崎	3	0
	栃 木	1	0		福 岡	1	2
東 海	静 岡	5	1	住 居 地 不 明 示		10	0
	愛 知	10	1				
	岐 阜	5	0				

## 二、表の解説・怪説

この表は、本誌四四年四月号から十一月号

までの、約八カ月分の投書者数を地区別に分類してみたものである。ただし、この表に於て、人数は一人一単位ではなく、一冊一人一

単位を示すので、当然

重複の難は免れない。

従って実際数（新人投書者）は、かなり低下するものと考ええる。

この集計表では、日本全土を大まかに、北海道、東北、関東、東海、関西、中・四国、九州の七ブロックに分けてみた。そうすると先ず筆頭は関東地方の東京で五二人のうち女性五人。以下ベスト5は、二位・関西地方の兵庫県で三九人女性九人。三位・同地方の大阪府で三八人女性七人。四位・神奈川県で十九人女性二人。五位・愛知県

という結果が出たが、一位から三位までは五人以上、以下は五位まで辛うじて十人台を保っているが、六位からは極端に少なくなつて低数値を示し、一桁となつてることがわかる。因みに五以下位下には京都、宮城、岐阜と続いている。

東京の一位は衆目認める所であろうが、内容度から観ると、やはりこれは関西地区に歩を譲るものがある。俗に大阪の食い倒れ、京都の着倒れ、そして東京の履（掃）き倒れというように、東京とは新しいものを絶えず吸収し、肉とまではしなくとも、外見に飾りつけたがる、いわば烏合の衆の巨大なる集団解放部落であるから、その中の数人がSMに啓蒙し、かつまた、その中の極く限られた人達が奇クに投書しても、これは理の当然であるべくしてなつた一位であらう。

関西地区は近畿府県がその大勢を占め、内容もぐっと濃厚に増加する。特に大阪、兵庫は、その真髓を遺憾なく發揮して、おざなり的な、無味乾燥に帰し易い通信欄に妙味を添えているといえよう。

ただし、常連が多すぎて、その人達のための通信欄になりかねない気味がある。これは製作上、止むなき仕義とは思ふが、それらの



人々の文にのみ走り、解説サディスト、解説マゾヒストたりつつある心根に、一種の憐憫の情を抱かせられる。

住居地、明示なき者は十人程であった。

### 三、背 景

では、なぜ東京が被群位であり、次に関西も特に近畿地方が来るのだろうか……。

すべからく三次元の世界に於ては、その出来事に、必ず因果関係が尾を引いている。従ってここでは、まず「なぜ？」の前に、その因果関係を追求してみよう。因果とは原因に対する結果という事である。端的に言うならば、奇クがかくも逆境の風雪に耐え数多くの愛読者を有する、という結果には、読者の陽陰たる支持、希望、見たい読ませたいという原因に他ならない。

角度を変えよう。ここで花綵列島（日本列島の事）の風土、地理、そして地球上の位置を考えていただきたい。風土、気候は、朝鮮半島と樺太を併わせた程の大きさしかないにもかかわらず、温あり暖あり寒ありと、四季（これ自体、他国に類をみないのだが）に異なり平地は全土の二十％という山地国であり東洋の隅っこ、孤立無援の島である。故に、

ここに於て日本のS・Mは各地方特有の味をもって開花したのである。そしてそれは近代社会の営みを始めた現世に於ても気候に左右され、古代文明文化の影響を十二分に受けて……ここに於て考える。私は、現在の如き近代的SMにまで発展すべき口火を切ったのは平城、平安京の宮廷人ではなかったか、と。煌びやかな生活にも慣れ、平安に倦怠の情を覚えた宮廷貴族、女官が、ひそやかに燃えた火遊びではなかったろうか。儒教を知らぬ時代の人達、複数男女の交わりを不良識と教え込まれなかった人達、そして血を見て胸を滾らせるより嘔吐を催す昔人、愚安人は、緊縛された女官の艶姿を見て欲情し、胸の炎を燃焼させたのではなからうか……。

### 四、かいせきアンド結論

前項に、通信者が示す数値的意味は日本の風土気候、ひいては歴史に負う抛が多いと述べた。それはどう関係するのだろうか。今、一つの問題としている近畿地方の結論から云おう。

京阪神地方は気候、地理学的に平野部が僅少であり、盆地状地形が多いため、（昔、数世紀に亘る首都、文化の興隆地だった影響大

であるが）自然、淫靡、隠微な傾向に走るむきがあった為と考える。拷問様式等の渡来etc、については、薄学の身故、定かではないが、これとて、今の中国に因るところが大のはずである。……考えていただきたい。何故、古代英雄は酒池肉林を桃源境として崇め夢想したのか。そして何故、緑風、緑野が全動物の性的欲望を促進させるのか。前者は、宿命的に負わされた人間の業であり物欲心であり、後者は、ある一定量の緑色、それも薄緑色とのオリジナリティーを見る事により欲情を覚えさせられる、という科学的根拠に基づく縁である。

本題に戻ろう。拷問とは「犯罪者または容疑者のからだに苦痛を与えて、自白をしいること」（広辞林）とある。これを美に、芸術に、または相手をして恍惚境にまで持たせたのは誰なのだろうか。再度云う、それはヒ弱な雅び人ではなかったか、と。

風俗風習、慣習には他国に類をみない日本であり、山間地では、それはしばしば淫乱、陰湿な奇習になり、太平洋に面した地方（太平洋を指す。因みに太平洋と日本海の空の色を比較していただきたい、はたしてどちらが明るく開放的だろうか）には淫靡さはなく、む



しる健全な、微笑ましい行事として残っている。加うるに陰湿さを増すのは、必ずや都を遠く離れた、行政も屈かぬ所謂、僻地にのみ発達している。

ここでもう一度、掲げた一覧表を見ていただきたい。

平均に安定した数値を示しているのは、関西地方の近畿方面である。その他をみると、越後平野、関東平野、近江平野、濃尾平野、筑後平野といった著名な平野部の通信者は皆無に等しく、むしろ同地方に於ても各々、山間狭あい地、盆地地方の通信者が数を増している。一例は近江平野、滋賀県琵琶湖東、西のOよりも山一つの京阪、亦は岐阜の六人というように……。

気候的にみると、寒一色の北海道、東北地方や、暖一色の東海、九州、四国地方の如き単純一様な地方では通信者数は低下し、その暖寒の差がはっきりしている関東、関西地方、その数値は比例的に上昇している。これは、SMが純漠たる長單路ではなくして、多様性に富む一定千変の新趣向に、その趣きを変えるためであらう。真の sadism, masochism とは、刺激が強いだけに飽きるのも早く、かといってSMと縁を切るような勇氣

も持たぬ超内向性加虐者、被虐者たちの移化ではなく漸移なのではなからうか。

## 五、おわりに

最初に記した如く、この数字は絶対最大数であるため、重複分が多いのは許していただきたい。本論に於ては数値にのみ頼り解析を加えた所が多く、この点も反省している。いくらにも、私の筆の拙劣なる故と浅学の身のこと、種々間違いや異論はありましようが、何卒諸氏の寛容を……。

ただ、この小文を通して奇クといわず、S並びにM派の人々が、気候土地柄に左右される傾向にある事を知っていただけたら、幸甚である。

巷にSMが氾濫している現今の世上、この様な書は不用と思われるかもしれないが、然し歴史の否応ない流れにおいては、何十年かの周期でこのSM傾向が巷に流出した事を思い返して欲しい。乱世の時代には芽を出す隙さえないが、平和安泰国家を曲りなりにも形成した時期における性風俗の進展、進歩はどうであつたらうか。

であるから、現代のあまりにも華々しいSM開花を苦々しく思っている氏よ、これは、

否この巷濫SMはいつかはすたれ、いつの日にかは内向性の異常性欲者と称される人々がまた出現しよう。

まずは寛容であると思うが、この潮流を乗り越しても、尚かつSMとの縁を断ち切ることが出来なかったら、貴方こそ真の異常倒錯者——失礼！サディスト或はマゾヒスト——といえるでしょう。

しかし私は、何も sadism, masochism が、高貴な香りたかい異質の芸術、文学などとは思っていないし、また言明もしておりません。ただ、それを探索しているのです。

SMとは、本誌十一月号の奇クサロンの中で、物知仙人がいみじくも言われた様に「人間本来の嗜虐の性質を満足させ、セックスを楽しむ」事に尽きるのでしょうか。いわばこの書は、そのような人達をほんのちよっぴり掠めた程度のカルテに過ぎないのです。

◎尚、一覧表では、『長野県、男1』が集計洩れとなっているので訂正します。



## 新連載

## S 小説

(第一回)

## 地獄ホテル

藤 見 郁



## 1 プロローグ

乙女村は、福島市と白石市の中間に位置する人口二百五十ばかりの小さな部落である。

福島県と宮城県の間境にある山間の、ごくめだたない部落で、手すき和紙と竹細工によって、わずかにその存在を知られていた。数年前、この山間の部落を分断していた東北ハイウエーがつらぬき、かつてはリンゴ畑

であった土地に、最も現代的なサービスエリアがつくられた。

東北ハイウエー。

これは、東京・青森間、約六百キロの距離を、わずか六時間で結ぶことのできる縦貫高速道路である。コースは、東京都内から埼玉県岩槻、小山、宇都宮、白河、郡山、福島、仙台、盛岡を縦貫して、青森市に達する。

このハイウエーの建設によって、乙女村と東京との距離は、わずか二時間に縮まった。

そこで、ある実業家が、この乙女部落のはずれの山裾を切りひらいて、地上十階、地下五階というデラックスな観光ホテルを新築したのである。

その資本家の名前は、ホテル業界でも、観光業界でも、実業界一般のあいだでも、まったく知られていなかった。背景に政財界の大物がいることは噂されていたが、表面に出た経営者の名前は、いわば新人であった。

このホテル建設は、しかし、だれの目からみても、無謀な計画であった。

会津若松や磐梯朝日国立公園へいく観光客は、郡山インターチェンジを利用する。裏盤梯や米沢へむかうドライバーは、福島インターチェンジをぬけていく。さらに、蔵王国定



公園の雄大な風景に接しようという観光客はこの乙女村をはるかに素通りして、白石インターチェンジを利用する。

乙女部落の山麓にデラックスな観光ホテルを新築して、いくら宣伝に費用をそそぎこんでも、客が訪れるはずがなかった。

ホテルの周囲に、客を呼べる観光資源は、なにひとつ存在しないのである。温泉すら湧きでない土地である。商売にならないのは当然だった。

ホテル業者たちのあいだに、ひとしきり話題をまいたこの乙女観光ホテルは、オープンしてから半年後に閉鎖した。業者たちは「それみたことか」と嘲笑した。

しかし――。

このホテル事業に投資した資本家は、けっして無謀でもなければ、無計画でもなかったのである。

わずか半年後に閉鎖することは、彼にとって予定の行動であった。

地上十階、地下五階という現代の建築科学の粋をあつめて造られたこの巨大な建物の内部は、はじめから、べつの目的のために設計されていたのだ。

観光ホテルという名前と外見は、あくまで

もカモフラージュにすぎなかったのである。

彼は、自分を嘲笑した人間たちを、ひそかに嘲笑した。彼の本当の事業は、すでに始まっていたのである。

彼は、このホテルのなかでは『王』とも

『キング』とも呼ばれていた。

まさしく『王』であり『キング』にちがいはなかった。

彼は、このホテルの巨大な内部において、絶対の支配力をもつ権力者であった。

## 2 美貌との対面

四方の壁や天井の内側からは、蛍光灯のような淡い光が放たれて、室内をほどよく快適に照らしていた。人工的な色ではなく、それは、あくまでも自然に近い、あたたかみのある、やわらかい光線だった。

壁からは照明だけではなく、やさしい音楽が、にじみでるように低く流れていた。

しかし、装飾とか、調度品とかいうものがほとんど無く、その意味では殺風景ともいえた。

ここが地下一階にある『接見室』だった。

スチール製の大きなデスクを前にして、王

はゆったりと葉巻をふかしていた。その葉巻の優雅な香りが、しずかな室内にほのかな色をひきながら軽くただよっていた。

室内の温度は適切に調節され、換気装置の機能も申し分なかった。

王は、ソファに腰を沈ませて、壁からひびいてくる音楽に耳を傾けているようだったがふとデスクの端に置かれた時計をみて、

「遅いな。もう着いてもいいころだ」と、つぶやいた。

「さようでございますね。三分おくれています。さいそくしてみましようか」

と返事したのは、王のデスクの左側の壁際に、これもスチール製のデスクを前にした女秘書であった。年令は三十歳前後、おそろしいほど整った美貌をもつ女性で、黒い革のスーツを上品に着こなし、黒い革の長靴をはいていた。

彼女のデスクの上には、電話機とインターホンの装置があった。

「いや、いい。もうすこし待ってみよう。べつにあわてることはない」と王はこたえ、ふたたび葉巻を唇にくわえた。

そのとき、女秘書の前のインターホンが、



みじかいチャイムを鳴らした。

「東京から、三笠英子が到着いたしました」

若い女の声が、インターホンから明確にひびいた。感度のいいインターホンで、ほとんど肉声と同じようにきこえた。

「ご苦勞でした。すぐこちらへ」

と、女秘書は事務的な口調で命令した、つぎにデスクのひきだしをあけ『三笠英子』と書かれてあるファイルを取りだすと、それを捧げるように持って、正面のデスクに坐る王の前にさしだした。

王はそのファイルをひらき、期待にみちた視線をそそいだ。

まもなく金属製の自動ドアがひらき、ひとりの娘がたどたどしい足どりで、室内にはいつてきた。というより、突きとばされてきたのだ。娘は、うすいピンク色のワンピースをきていたが、無残にも白い縄でうしろ手にきびしく縛りあげられ、足には鎖があった。

足の鎖は、左右の足首を三十センチほどの間隔でつなぎ、よちよち歩きができるようになっていた。

素足であり、靴ははいていなかった。この部屋の赤い絨毯の上に、その素足は光るような美しさだった。

手や足を縛られていても、ひと目で均斉のとれた美しい姿態だということがわかる。

娘の口には、白い布のさるぐつわがはめられていた。さるぐつわの上の両眼が、恐怖のためにとびだすように大きくみひらかれていた。鳩のような愛らしい瞳であった。

王の目が異様なほどつよく光って、娘を凝視した。

「つれてまいりました」

縛られた娘の背後に、もうひとり真紅の革のスーツを身につけた若い女がいた。その女が、王に一礼して報告した。

「これが三笠英子です。東京電波広告株式会社社長、三笠剛一郎のひとり娘です」

その女の片手は、娘の縄じりをしっかりと握っていた。女はその縄じりで、娘の尻を背後から、ピシリッと打った。そして、

「前へでなさい」

と、命令した。

娘は肩をふるわせ、鎖を鳴らしながら、のめるように歩いて、王の前にすすんだ。縄目のあいだに盛りあがった乳房が、その不自由な、あゆみとともに揺れた。

王の前に立ちどまった娘のそばに女秘書が近寄り、機械的にいった。

「さるぐつわだけは解いてあげましょうね。

あなたのことは、もうなんでも知っていますけど、本物のお顔をよく見せていただきたいの。まあ、だいぶ強く縛ってあるわ。東京からこのホテルまで二時間、ずいぶんつらかったでしょう」

女秘書は娘の背後にまわり、白布のさるぐつわを解き放った。

娘は鼻孔と口を大きくひらいて、むさぼるように息を吸いこみ、吐いた。その白い頬には、さるぐつわのあとがくっきりと刻みついていて、清潔な美貌に、それはむしろ魅力のあるアクセントを加えていた。

娘は、室内をみまわし、不安にあえぎながらいった。

「これは、どういうことなんです。ここは、一体、どこなんです！」

かすれてはいたが、かなり激しい語気で、女秘書につめ寄る動作をみせた。その目には憎悪と、敵意と、傲慢さがあった。ショートカットの髪の毛が乱れて、目の上まで垂れさがっていた。

「あなたがたは、だれなんです。なんのために私を、こんなところへ……」  
「元氣がいいわね、英子さん」



女秘書は、さえぎるように強くいった。つめたく冴えた上質のガラスのような美貌に、かすかな微笑をよぎらせた。

「たのもしいわ。その元気な自分を、いつまでも忘れないでね」

王は無言のまま、ファイルに貼りつけてある写真と、娘の顔を注意ぶかく見くらべていたが、

「よろしい、結構だ。三笠英子にまちがいない。写真よりも実物のほうが数倍よろしい」といって快心の笑顔をみせると、ソファから腰をあげ、ゆっくりした足どりで、三笠英子のそばへ接近した。

そして、ワンピースの裾に手をかけると、ひょいとまくりあげた。それは、どこか愛嬌のある、ユーモラスな動作だったが、

「ひいッ！」

という、みじかい悲鳴をあげて、英子は本能的に身をひねった。

ワンピースの下に、パンティーは無く、悲鳴をあげるのは当然だった。東京で誘拐された直後に、ストッキングと一緒にむしり取られてしまったのだ。

王は、形のいい脚のすべてを見た。想像していた以上に色が白く、むっちりとした艶をもつ

た肉づきであった。王は遠慮のない目で、太腿のつけねあたりまでを執拗に調べた。若い女のもつ原液のような濃い体臭を、王は自分から浴びるようにして嗅いだ。

「いやッ、いやッ、やめてッ！」

英子はもがいたが、両手は背中に縛りあげられていて、王の頭を手で払うことはできなかった。足には鎖がまといっている。

なおも肩をふってあばれる英子を、女秘書と縄じりをもった女が、左右からつよく押さえつけた。

いくら抵抗しても駄目だった。

英子は、屈辱にうめきつづけた。

王は下半身の点検を終えると、ワンピースの裾から、ようやく手を放した。

「よろしい、ますます結構だ。とりあえず、

地下二階A号室へいれておけ」

命令すると、王はもう一度ワンピースの裾をすばやくまくりあげて、英子の裸の尻を、ピタピタと平手で叩いた。

「ひいッ」

と、英子は弓のように背中をのけぞらせて黄色い声をあげた。その唇に、ふたたび白いさるぐつわが噛まされた。

赤い革服の女が、英子の縄じりを引いた。

そして、王に一礼してこたえた。「かしこまりました。三笠英子を、地下二階A号室にいれておきます」

自動ドアがひらき、女に縄じりをとられて背中を小突かれながら、英子の姿が廊下に消えた。

室内には、英子の残り香がかすかにただよっていた。王は余韻を楽しむかのように、英子の去ったドアを見送っていた。恍惚と満足の微笑を唇にただよわせながら。

### 3 孤独の抵抗

金色の浮き出し文字で『A』とドアに記された地下二階の監禁室のなかで、英子は身を固くして不安におののいていた。

三方の壁はあついコンクリートだが、一方の壁には、よく磨かれた鏡が一面に貼りつけてあった。この部屋に一步はいったとき、英子は自分によく似た娘が、同じようにうしろ手に縛られて閉じこめられているのかと錯覚した。しかし、それは巨大な鏡にうつった自分自身のみじめな姿だった。

窓は、どこにもなかった。天井からは、にぶい白色の蛍光灯が、うそ寒いような冷たい



光を放っていた。

室内の中央に、かんたんな構造のベッドがあり、その横に奇妙な形をしたいすが置いてある。それから、プラスチック製の便器が、ベッドの足もとの片隅にあった。

英子は、この部屋につれてこられた瞬間から、倒れこむようにベッドの上に突っ伏していた。

なにか考えようとしても、思考は錯乱してひとつのことがまとまらない。

両手は背後に、まだ縄でぎっちり縛りあげられていた。自分が、なにものかのために誘拐され、監禁されているということだけはわかる。その相手が一人や二人でなく、かなりの組織をもつ集団だということも想像できる。しかし、それ以上のことは、なにもわからないのだ。

その思考を断ち切るかのように、縄は英子の腕や胸にじわじわとくいこんでくる。直接縄に締めつけられた部分は、すでにしびれきっていた。

足の動きを束縛していた鎖だけははずされていたが、さるぐつわはまだ英子の口を固くおおい、頬にくいこんでいた。

呼吸が苦しかった。死ぬかも知れない、と

思った。このままじっとしていると、気が狂いそうになる。英子は勇気をふるいおこし、せめて、さるぐつわだけでも解こうとした。絶望してはいけない。こんな無法なことがあってたまるものか。なんとかして、ここから逃げださなければ……。

しかし、さるぐつわを解こうにも、両手は背中に高く縛りあげられている。もがけばもがくほど縄はいっそう皮膚にくいこんできて泣きたいほどつらく苦しい。乳房の下にかかっている縄が、ぎりぎり呼吸をしめつけ、ときどき、ふっと気が遠くなる。

それでも英子は氣力をふりしぼり、ベッドに頬をすりつけた。顎を動かし、首をふり、必死にさるぐつわをこすった。息がいっそう苦しくなり、汗がにじみでてきた。

ようやく、さるぐつわがゆるんだ。英子は顔を上にむけて、大きく呼吸をした。

両眼をとじ、唇をひらいて、犬のように舌をだしながら、しばらくは呼吸を整えた。汗にまみれたそのみじめな表情を、壁の鏡がうつしだしていた。

ひと休みののち、英子はふたたび半身を起こして肩をふり、背中の手首をこすりはじめた。こんどは、なんとかして上半身を縛って

いる縄をゆるめたい。

しかし、それは無理だった。麻酔薬を嗅がされ、意識を失っているときに、念入りにかけられた縄だった。

いくら身を揉んでも、手首の縄は一センチのゆるみもみせなかった。ワンピースの裾がまくれあがり、白い太腿がさらけでるだけだった。その太腿が鏡にうつり、羞恥に襲われて、英子は思わず動きをとめた。うつったのは、太腿だけではなかった。英子はパンティ―を、はいていなかったのだ。

英子は疲れ、その顔がくしゃくしゃにゆるんだ。

「だめだわ、どうしても解けない」

英子は、おびただしい汗にぬれながら、絶望的なうめき声をあげた。がっくりと全身の力をぬいて、身悶えをやめた。

ベッドに顔を伏せて、英子はのどの奥から声をだして泣きはじめた。

マットレスには、あまいような、すっぱいような臭気がしみこんでいた。

それは、英子の前にこのA号室にとじこめられていた幾人かの不運な娘の体臭だった。なみだや、汗のにおいもしみついていた。

英子は、涙をながしながら、ふと、ねむけ



に誘われ、うとうととした。心身の疲労に負けたのである。

頭のうしろがしびれたように重くなり、それは不思議なくらいにこころよい眠りへの誘いだった。うしろ手に縛られたまま、英子は猫のように、まるくなって眠りはじめた。

その可憐な寝顔を、壁にはめこまれた大きな鏡が、すっかりうつしだしていた。この鏡がマジックミラーであり、隣室から王が、英子のもだえのすべてを観察していたことを、英子は、むろん知らない。

一時間も、たったろうか。

この監禁室の自動ドアがあいた。

英子は、ハッと目をひらいた。現われたのは、さっきの美貌の女秘書だった。あいかわらず黒い革製のスーツをきて、光った黒い革の長靴をはいていた。

女秘書の背後には、二人の若い女が従っていた。二人とも赤い革の服をきていた。その上着のポケットには、みじかい革の鞭がさしこまれていた。

「おや、さるぐつわをはずしてしまったの。勝手なことをして、しょうのないお嬢さんねえ。まあ、いいわ。それじゃ、こんどは絶対にとれないものを噛ませてあげるわ」

と女秘書はいつて、二人の部下に身ぶりで合図した。

女のひとりが英子に近づいた。そして英子の縄じりをつかんで、手もとに引いた。

英子は抵抗の姿勢を示したが、乳房の下にくいこむ縄の苦痛に耐えかねて、ベッドから起きあがった。

もう一人の女の手には、革製のさるぐつわが用意されていた。それは小さなベルトで、犬の首輪に似ていた。

英子はそれを見ると悲鳴をあげて首を横にふり、逃げようとした。しかし、縄じりをつよく引かれて、すぐに横倒しになった。

二人の女は協力して英子をおさえつけ、無理やり口をひらかせて、革のさるぐつわを噛ませた。

「アア、アア、アアッ……」

英子の口から、言葉がもぎとられた。涙のたまった目で、顔を左右にふりながら女たちをみあげ、無言の哀願をした。

しかし、女たちは容赦しなかった。革のさるぐつわは、形こそ小さいが、完全な性能を備えていた。

「さあ、こんどはべつのお部屋へ行くのよ。早くお立ちなさい。泣くのは、まだ早いわ。」

ぐずぐずしていると、お尻が痛いわよ」

赤い革服をきた二人の女は、みじかい革鞭をポケットから引きぬくと、ひゅうと宙に鳴らして、英子を追い立てはじめた。

「さあ、いつまで寝ているつもり！」

女秘書が、金属的なつめたい声をはりあげた。また鞭が宙に鳴った。

縄じりを激しく引かれたために、英子はベッドから落ちた。絨毯の上に両膝をうちつけてころんだが、また縄じりを引かれて、よろよろと起きあがった。

「あまったれていないで、早く歩くのよ」

鞭に追われて、英子はこのA号室を出た。そして廊下を歩きはじめた。また涙がこみあげてきた。

縄じりを握っている女は、子どもがいたずらでもするように、歩きながら英子のまるい尻に、ピシピシと鞭を鳴らした。

十メートルほど進むと、エレベーターの前に来た。

ボタンを押し、エレベーターの扉をひらくと、まず女秘書が乗った。つづいて英子が肩を突かれて乗り、縄じりを持った女と、もう一人の女が乗った。

エレベーターは下降をはじめた。



四人とも無言だった。しかし、その沈黙を意識する間もなく、エレベーターは地下五階でとまり、扉がひらいた。

目の前に廊下があり、その廊下のむこうに海の底を思わせるような深い緑色のドアがあった。

女秘書を先頭にして、英子と二人の女は、その緑色のドアのなかに、はいった。

そこは、かなりの面積をもった部屋になっていて、まぶしいほどにあかるい照明が溢れていた。

地下室のせいか、天井はあまり高くなかった。その低い天井一面に、不気味な形をした鋼鉄製の道具がびっしりと組みこまれているのを見たとき、英子は自分のこれからの運命を予感し、慄然とした。

「やあ、お待ちしていました」

ふとい声がひびいて、ひとりの大男が、女秘書と英子の前に大股で近寄ってきた。

「將軍、三笠英子をお渡しします」

と、女秘書はいいかかわらず事務的な口調でいった。

將軍と呼ばれたこの大男こそ、この地下五階に設備された訓練室における最高の責任者だった。將軍は、やはり黒い革でつくられた

大きな上着をきていた。

「なるほど、いいお嬢さんだ。これは楽しみだ」

將軍は腹をつきだし、目をほそめて、英子の顔から胸、腰のあたりの肉づきから、足までを見おろした。

英子は屈辱を感じて、顔を下にむけた。こういうあぶらぎった男の容貌を、英子は最も嫌悪していた。

「お願いします」

女秘書はそういうと、一緒にここまで来た二人の部下に目くばせした。

縄じりを握っていた女は、その縄じりを將軍の手に渡した。

二人の女は將軍に一礼すると、ふたたび女秘書の供をして、廊下へ出ていった。

英子の身柄は、こうして女秘書の手から、將軍の手へ、きわめて事務的に移されたのである。

英子は、新しい不安におののいた。しかし英子の進むべきコースは、王の計画図によって、すでに決定されていたのである。

將軍は、若々しい起伏を示している英子の

全身を改めて見渡した。その目の奥には、わずかではあったが、好色の光が、うごめいていた。

「いつまでもうつむいていないで、顔をあげたらどうかね」

やさしい声音で、將軍がいった。しかし、英子は頑強に下をむいた。

將軍の右手に握られている細い鞭が、すばやく英子の尻に鳴った。

するどい痛みを感じて、英子は身をよじった。尻の肉が切り裂かれたかと思うような痛みだった。しかし、それでも英子は顔をあげなかった。

「まあ、いい。お前のような娘のほうが、教育するにも、やり甲斐がある。その反抗心を除去するのが私の役目だ。私は安易な仕事よりも、困難をともしなう仕事のほうが好きだ。むずかしければ、むずかしいほど、情熱をそそぐことのできる性質でね」

英子の反応を楽しむように將軍は一語一語を区切っていった。それから、英子の背後にまわると、両手首を縛った縄目に手を触れ、その結び目を、ゆっくりと解きはじめた。

厳重に縛ってあるために、縄はなかなか解

#### 4 將軍と美少年



けなかった。すぐにゆるまないほうが、將軍には好都合だった。この男は、わざと手間取っているような動作で、英子の皮膚のあちこちに手を触れながら、その作業をつづけるのだった。英子がパンティーをはいていないことも、彼はその手でたしかめたのだった。

ようやく縄が解けたとき、英子は羞恥と疲労のために、思わず床の上に膝を折ってしまった。ワンピースの袖からむきでている腕にむごたらしい縄目が刻みついていていた。

英子は、リノリュームの床の上に腰を落としたまま、しばらくは荒い息をついていた。自分のこれからの運命に対する恐怖と、それから、その恐怖をのり越えようとする意志を整えているようにみえた。

「こんどは両手を前にそろえて出すんだ」  
將軍が、厳肅な声音でいった。同時に、その行動を開始した。大男にも似合わず、その動作は機敏だった。

將軍は、英子の両手首をひとつかみにすると、用意しておいた革手錠をはめた。一瞬もがいたが、將軍の腕力はつよかった。いったん自由を得た英子の手は、ふたたび無抵抗の状態になり、彼女はくやしげに大きく顔をそむけた。

英子の両手首をくくった革手錠に、さらに鎖がつけられた。その鎖は天井から垂れさがってきたもので、細いが強靱な性質をもっていた。

英子は、自分の両手首からその鎖が直接、天井にのびていることを知って慄然とした。  
「ムッ、ムッ、ムムッ！」

不気味な鎖からのがれようとして、英子はめす犬のように腰をひいた。革手錠が手首にくいこみ、ちぎれるかと思うほど痛かった。

將軍は、壁際に三十ほども並んでいるボタンとスイッチボードの前に、あゆみ寄った。

そして、なにやら記号がついているボタンのひとつを、指さきで押した。すると、英子の手首からのびている鎖は、軽快な金属音をひびかせながら、天井へまきあげられていくのだ。革手錠が、鎖の巻きあげと同時に、宙に吊りあがっていく。

「ウ、ウ、ウッ……」

機械の力で両手首を上吊りあげられ、肩のつけねがもぎとられそうになった。英子はよろよろと立ちあがった。腰を下に落として抵抗しようとしたが、メカニズムの非情な力の前には、むなしいあがきだった。

鎖は天井に装置されている滑車に、正確な

速度でまきあげられていく。

英子の胸がのび、かがめていた腰も、ついにまっすぐになった。

やめて、やめてと英子のはのどの奥でうめいた。ついに両手が頭の上まで吊りあがり、腰がのびきり、足ものびて、つまさき立ちになった。

「さあ、どうかね。いくら反抗しても、結局はこの通りになるのだ。そのままのポーズでちょっと我慢していなさい。からだを点検させてもらうからね。それが私の仕事なのだ」  
將軍が、腹をつきだすようにしていった。

そして、上着の胸ポケットから小さなハサミを取りだして、英子のきいているワンピースを切り裂きはじめた。

小さなハサミだったが、それはおそろしいほど、よく切れた。

まず襟もとから、みるみるうちに切りひらかれていく。

ブラジャーの紐を、パチリと断ち切る。

英子の素肌が、乳房から大きく露出した。

革のさるぐつわの奥で、英子は屈辱と恐怖にうめいた。鎖に吊られている四肢を、必死になんてくねらせた。革手錠が針金のようにするどく手首にくいこみ、骨と骨とがこすれ



あった。

頭上から天井にのびている鎖が、かるい金属音をたてながら揺れた。

「おとなしくしていたほうがいい。あばれると、手が痛いぞ」

ハサミの手を休めた将軍が、英子の耳たぶをなめるほど顔を接近させて、そっとささやいた。そして、羞恥にゆがんでいる英子の表情をたしかめてから、ふたたびハサミを動かしていく。英子の身にまとった布を、つぎつぎに切り離していくのだ。

左右の肩口の部分を切り裂いたとき、ワンピースは、するすると英子の肌を無心にすべり落ちた。

つぎには、スリッパの紐を切る。これは、かんたんだった。将軍の楽しむ余裕もなく、みじかいスリッパは、ひと握りの白い布きれとなって、英子の足もとにうずくまった。

みごとな裸身が、若さにあふれた体臭のすべてを放ちながら、将軍の前に現われた。

「ううむ……」

と将軍はうなり、しばらくのあいだ、両手を頭上に吊られて、かすかに揺れている美しい犠牲者を凝視した。

一点を除いては、どこもかも透きとおるよ

うに白かった。清浄な白さのなかにも、みずみずしい魅力につつまれた裸身は、屈辱と苦痛のために淡いピンクの色に染まり、若い女性の羞恥を、すべてむきだしにして激しく、あえいでいた。

もう一度、将軍は「ううむ……」と声にだしてうなり、吸い寄せられるようにその乳房の先端に手をのばそうとしたが、ハツとして思いとどまった。たとえ将軍といえども、ここでは私情を禁じられているのだ。

鎖が鳴り、吊られている裸身が、腰を中心にして大きくくねった。

羞恥にくねるそのポーズもまた、魅力にあふれるものであった。もし、神々しいエロチシズムというものがあるとすれば、目の前にゆれている肉体が、それであった。

英子の裸身には、それがどんなになまなましい香りを放っていても、犯しがたい気品がただよっていたのである。

乳房の形も、胸のくびれも、腰部の弾力にみちた肉づきも、太腿のつましやかなふとさも、膝から下の長さも、そして皮膚全体のなめらかさも、まったく申し分なかった。

そのどれもが手垢の汚れというものを一点も持たない、新鮮な雪の白さに輝いていた。

「すばらしい。なんという迫力のある、しかも、やさしい美しさを持った肉体なのか！」

みつめながら、将軍はうなりつづけた。

この種のいけにえを見慣れているはずの将軍が、つぎの作業にとりかかるのを忘れ、息をのんで見惚れていた。

しかし、いつまでも見惚れているわけにはいかない。

将軍は上着のポケットから、微妙な性能をもつ伸縮自在の万能メジャーをとりだし、それを英子の肉体の各部にあてて、長さや、厚さや、カーブなどを綿密に計りはじめた。

とくにきわだって美しい隆起や、曲線や、周囲や、深さを計るために、スチール製のベつの器具や、拡大レンズが遠慮なく英子の各部にあてがわれた。

ある部分は小さな鏡を使って、必要以上に時間をかけて調べられた。それをいちいちメモに書きこんでいく。

英子は羞恥と屈辱に乳房をふるわせてもだえた。涙がこぼれて、革のさるぐつわをぬらした。左右の腕がだるくなっていた。

いくらもがいても、頭上に吊られた革手錠はすこしもゆるまず、鎖だけがむなしい音をたてて鳴った。



あるときは英子の足もとにかがみこんで、將軍は熱心に作業をつづけた。

この検査風景が、カラーテレビのカメラによって、すべて王の部屋に送られていることを、將軍はもちろん知っていた。

壁、天井、そして床などに装置された五台のテレビカメラは、英子の肉体の微妙な部分までを、あるときはクローズアップで、王の目の前にうつしだしていたのである。

そして、精巧なマイクロホンによって、英子の苦悶の声も、残らず送られていたのだった。

王はソファによりかかり、ブランデーを口にふくみながら、英子の肉体のすべてを觀賞しているのだった。

しよせん、將軍も、王の演出による演技者のひとりにすぎなかったのである。

その検査がようやく終了するころ、英子の前に、また新しい人物が現われた。

ぴっちりと密着した革のズボンで下半身につけ、上半身にも革のしゃれたジャンパーをきた少年だった。

目鼻立ちは女の子のようにやさしく、唇は口紅をぬっているかのように、つやつやと光っていた。うっかりすると少女そのものに見えた。

ええ。

からだつきも細く、なで肩で、足がすんなりと長かった。小柄で、身長は英子よりも低い。

「將軍、これはすばらしい素材だ。おどろきましたね」

と、感嘆の目で英子をみながら、その少年がいった。容貌のやさしさ、美しさに似ず、その声はふとく、やはり男であることがわかった。

「まったくすばらしいよ、ピーター。このお嬢さんを、きみの手にまかせるのは、惜しいくらいだ」

万能メジャーをポケットにしまいながら、將軍がいった。

ピーターとよばれた美少年は、媚びたような笑顔で將軍をふり仰ぎ、指をパチンと鳴らした。

「將軍、まあ、ぼくにおまかせください。きつとうまく調教してごらんにいますよ」

この少年は、笑うと左の頬にエクボができるのである。倒錯の魅力をもった妖しい美貌であった。

「きみのことだから、安心してまかせておけるがね」

將軍は、おだてるようにいった。

ピーターは、バラ色の頬をふくらませて、いたずらっぽい表情をつくった。真珠のような歯が、光ってこぼれた。

このピーターこそ、英子にあてがわれた訓練係であり、調教師だったのである。

女のような美貌と、柔軟な四肢には、若いライオンのような闘志と、残忍性が秘められていたのだ。

これからの英子にとって、最もおそろしい相手が、この美少年だったのである。

「たのんだぞ、ピーター」

と念をおして、もう一度改めて英子の肌のすみずみにまで目をやってから、將軍はこの部屋から去っていった。

美少年の調教師と、天井から鎖と革手錠で吊られた英子だけが室内に残った。

ふと、数秒間の静寂があった。

「本当にすてきなスタイルね。お顔もきれいだし……。ねえ、英子さん、仲よくしてね。ぼくは美しいものにあこがれているの。ぼくの名はピーター」

無邪気な笑顔をつくり、しかしその裏側には嫉妬を秘めた声音で、美少年はいった。

革のさるぐつわで口を封じられている英子



に、返事はできない。

返事のかわりに、救いをもとめるかのよう  
に左右の乳房がふるえた。うす赤い、愛らし  
い乳首のさきが、固く縮まっている。隆起の  
谷間に、汗がひとすじ流れていた。

ピーターはその汗を人差し指のさきで器用  
にすくいとった。それから、その指のさきを  
なめながら、壁際のスイッチボードの前まで  
歩いていった。

ボタンのひとつを押し、英子の両手を吊っ  
てある鎖をゆるめた。

英子は、のどで声をあげ、そのまま床の上  
にくずれ倒れた。

この休息はありがたかった。英子は俯伏せ  
になったまま、むさぼるようにして、筋肉の  
疲れを癒やした。

しかし、この休息は五分間で打ち切られ、  
ピーターの声が英子の頭上に降った。

「さっそくだけど、始めるわ。ちよっと重い  
けど、まずはじめに、この服をきるのよ」

パーティーにでも出かけていくような、楽  
しげな口調でピーターはいった。

この部屋のやや奥のほうの一隅に、黒いび  
ろうどのカーテンが垂れさがっていた。その  
カーテンを左右にひらくと、金属製の各種の

拘束具が、玩具店のウインドウのように並ん  
でいた。

かるくハミングしながら、少年調教師は慣  
れた手つきで、そのなかのひと組をえらびだ  
した。

首輪と、その首輪に鎖で連結している手枷  
と足枷だった。ぜんぶが金属製で、黒く塗ら  
れていた。それらは鎖と触れ合って、つめた  
い非情な音をたてた。

「さあ、おねえさま。新しい服をきてちょう  
だい」

妙にうるんだ目で、ピーターはいった。  
服とは言ったものの、それらの拘束具は、

英子の素肌をかくす役目のものではない。む  
しろ英子の白い裸体を強調するもののように  
あった。

ピーターの額にかかった栗色の巻き毛が、  
風もないのにそよいだ。彼はこの作業が、楽  
しくて楽しくてしようがないのだった。

英子の両手首から革手錠がはずされ、かわ  
りに、金属製の手枷がとりつけられた。

まだ疲労の残っている英子は、人形のように  
無抵抗だった。美少年の出現と、その行動  
に、あっけにとられたというような呆然とし  
た表情で、されるがままになっていた。

この澄んだ瞳をもった愛らしい少年が、自  
分の心と肉体にひどい攻撃を加えるなんて、  
とても信じられなかった。

うまく話をもちかければ、私を助けてくれ  
るかも知れない、と英子は思った。

しかし、つぎの瞬間、英子の足首には、が  
ちゃり、がちゃりと新しい黒い鉄の輪がはめ  
られた。左右の足首のあいだには、三十セン  
チほどの鎖があった。

「おとなしいのね、おねえさま」  
と、美少年がいった。なぶるような視線の

光と、皮肉をふくんだ声音だった。  
白い肌にくいこんだ黒い鉄の枷は、たしか

に鮮烈な対照だった。ピーターは、この効果  
に満足した。

「立つのよ。さあ、いつまでも坐っていない  
で、お立ちなさい」

調教師のやや長い革鞭が、英子の鼻のさき  
を小突いた。英子は、ハッとわれにかえり、  
屈辱にうめいた。しかし、すぐに立つことは  
できなかった。

鞭のさきが、また英子の形のいい鼻の頭を  
小突き、つぎに反転して尻をたたいた。さっ  
きはワンピースの上からだった。こんどは  
尻の肉に直接あたるとのだった。肉にくいこむ



ように痛かった。

英子は、瀕死の虫のように、背中と腰をくねらせて、うめいた。

両手と両足をつないだ鎖が、そのたびに非情な音をたてた。この音もマイクロホンを通じて、王の耳を楽しませているのだ。

「さあ、世話をやかせないで、いいかげんに立つのよ」

ピーターの声が激しさを加えた。

氣力を失っている英子は、わずかに腰の筋肉をふるわせたただけであった。

二度目の鞭が英子の尻に鳴ったとき、英子はようやく両手を床について、起きあがる姿勢をみせた。手枷と足枷のために、なかなかうまくいかなかったが、ようやく四つん這いになって膝をそろえた。

それは、犬のポーズだった。まる裸のめす犬だった。自分のその姿を意識したとき、英子は、あまりのあさましさに涙をこぼした。「まだ泣くのは早いわ！」

ピーターの鞭が、つづけざまに英子の尻に打ちおろされた。白いふくよかな尻がしだいに赤く腫れあがり、その屈辱と苦痛に、英子は顔をふるわせて泣いた。

英子は無意識のうちに哀願のポーズをとっ

ていたが、ピーターは容赦しなかった。英子が泣きやまないと見ると、鞭のさきに狙いをつけた。

ピシリッと脇腹から巻きつけるようにして英子の乳房をたたいた。

「ぐうッ！」

といううめき声をのどから発してその苦痛を耐え、それから膝に力をこめて、英子はよろよろと立ちあがった。のど首から胸にかけて、あぶら汗がじっとりにとにじんんでいた。

東京電波広告株式会社社長、三笠剛太郎のひとり娘英子は、こうして女奴隷への第一歩を踏みだしたのである。

東京電波広告株式会社というのは、いわゆる広告代理業で、資本金は二億五千万、年商百八十億というAクラスの存在であった。

社長の三笠剛太郎は、私財数十億と噂される富豪である。

英子は、いまだきの、しかも富豪の娘にしてはめずらしく堅実な、つつましい性格をもち、白桃女子学院への通学は毎日自宅から国電を利用してほどこであった。

几帳面に勉学の日を送り、学校から帰宅する時刻も、よほどのことがない限り、ほぼ一定していた。遅くなる場合は、かならず母親

のもとへ電話で連絡した。

無断で外泊することは、過去に一度もなかった。英子が失踪してから三日後に、父親の剛太郎は、たまりかねて警察に届け出た。

あるいは営利誘拐かと考えられたが、それにしては犯人からなんの連絡も脅迫状もこなかった。

ボーイフレンドは数人いたが、一緒にゆくえをくらますような深い関係になっている男性が存在するとは、とても考えられない。

警察としても、富豪のひとり娘の失踪事件を放っておくことはできなかった。英子のゆえを求めて、秘密裡に行動を開始した。

しかし、英子を誘拐した犯人は、おそろしく手際よく、なんの証拠も手がかりも残さなかった。

それは当然のことであった。

誘拐という仕事にかけては、最高の手腕を発揮するグループが、周到な計画のもとに、英子連れ去ったのだ。

このグループもまた、乙女観光ホテルの、王とよばれる謎の実力者の直属精鋭機関だったことは、もちろんである。

(つづく)

カット・野江 三郎



## たかしの歌謡漫談



# あなた好みの女になりたい

牧 高 志

物価高は、ひどく気に喰わぬが言論自由なご時勢は何とも有難い。ある日突然、天から急降下したような奥村チヨ唄う「あなた好みの女になりたい」即ち「恋の奴隷」という唄の文句は全く奇クびったり……でもあるまいが、70万枚売れて、それもあらかた男性が買っていくから妙ですね——とはレコード屋の話だそう。

実は、こんなレコードを久しく待っていたんですよ。ピンク映画の方が進んでレコード

の方が遅れていたのかも知れない。タイトル「恋の」は、どこでもお目にかかれる字句だが、いきなり「奴隷」ときめつけたあたりは、憎いじゃありませんか。新婚生活も二、三カ月立つと、そろそろ、お互いの肌の匂いが鼻についてくる。「どうだい、ここいらで一つ、俺好みの女にならないかい？」

「どうなさるおつもり？ 妻の飼育って、それ、どういう意味？」

「つまり早い話が奴隷になることだよ、奴隷にネ。昔なら身売りの証文一つで売買された女郎さ」

「縛られた女なのネ」

「そうだ。その縛られた女に、君がなるんだよ。嫌かい？」

「ううん、演ってみようか知ら。だって、あなたが、そもそも、こんなこと、お好きなンでしょ？ 本当にお縛りになってもいいわ。うんとお苛めになって……そして可愛がってネ。だったら今からでもいいわよ」

「じゃ、パーティー帰り早々、着物姿で相済まんが、一丁荒縄で縛ってみるかナ」

「両手をこんな後ろに回すンでしょ？」

「奴隷になったンだから、いちいち文句をいっちゃいけない。でないと……」

「あなた好みの女になれないと仰言りたいンでしょ？ あッ、痛い……痛いわよ」

「まだまだ……俺好みの女になるには、もっともっと残酷で、こぼれるようなお色気があって辛抱強くて、しかも髪をふり乱して、そして万事、絵のようにならなくちゃ駄目だ。女って、そんなものだよ。いつでも何処でも絶対、服従のこと……」

「判ったわ。どんなことでも、あなたの仰言



ることなら、その通りにしてよ。死ぬ程愛して頂けるなら、たとえ、人様の前で裸にされようと平気。だから……だから急いで、あなた好みの女にして頂戴、お願い。結婚して、あたしの身体も変ったけど、もっともっと変えて頂戴。思い切り奴隷になるわ。いえ、して頂戴……嬉しい、とうとう縛られたのネ。随分と、ひどくお縛りになったのネ。嬉しいわ……」

こんなことを続けても意味がないから、ここで「恋の奴隷」の替え唄を、ご披露してみよう。奴隷さ加減を今少し強調したつもりだが、その方面の文才が至って乏しいから、むしろ改悪となって叱声を受けるかも知れないが、ご笑味頂けたら幸い。

## ○

## 責めの奴隷

一、あなたと逢った その日から

責めの奴隷に なりました

あなたの縄に 縛られる

手毬のように

だからいつも そばにおいてね

責めのポーズが

悪い時は どうぞ折檻してね

あなた好みの あなた好みの

## 女になりたい

二、あなたを知った その日から

縛りの奴隷に なりました

後ろ手と言われりゃ 後ろに手を廻わし

とても幸せ

お荷物のように 縛られるわ

気にしないでね

好きな時に

お縛りになってね

あなた好みの

あなた好みの

女になりたい

三、あなただけに

責められたいの

可愛い奴と

好きなように

私を縛って

あなた好みの

あなた好みの

女になりたい

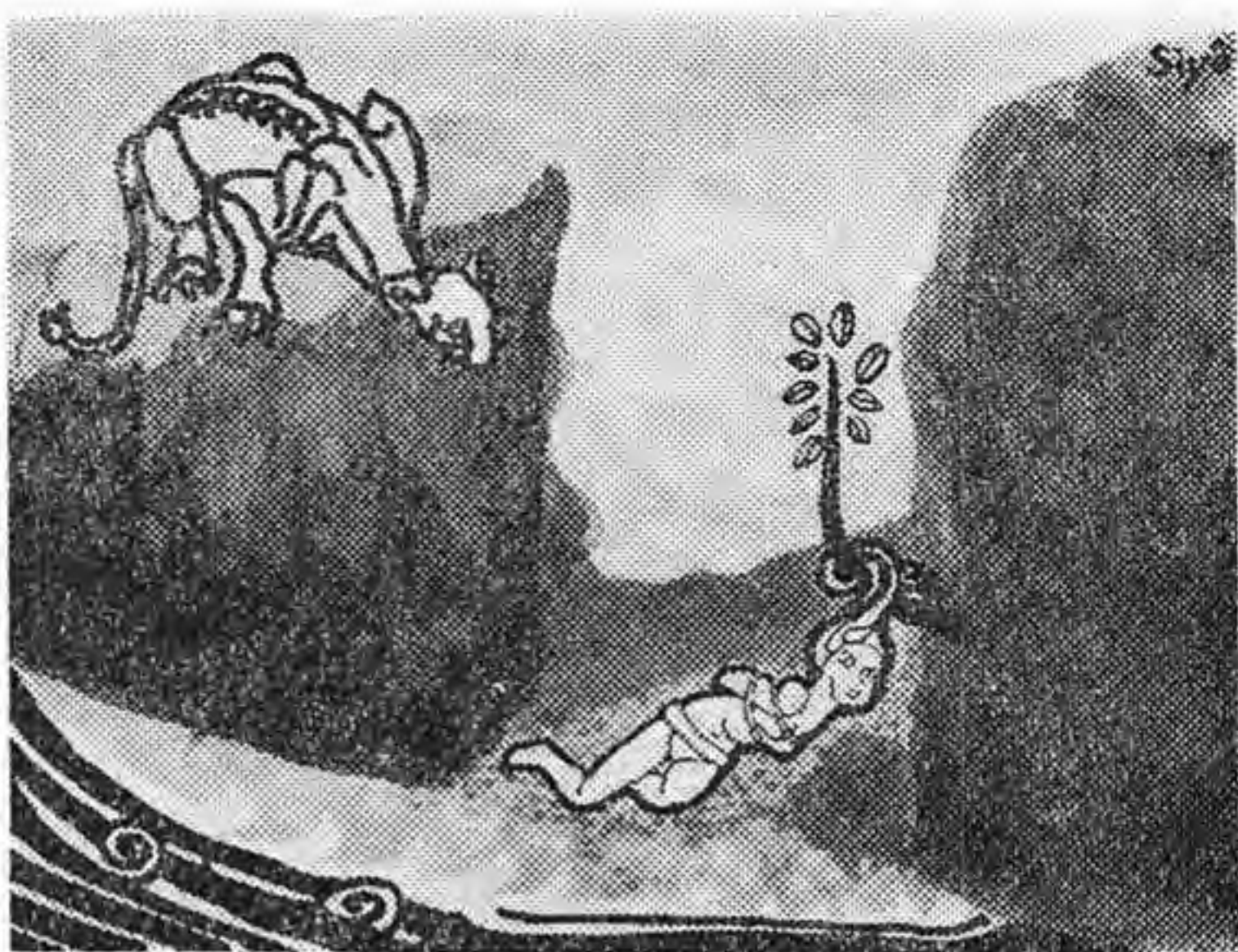
民放TVは誠に敏感である。十月七日東京10NETのおひる番組、桂小金治司会のアフタヌーンショーで早速この唄を取上げて、20才台とお見受けする50人余りの娘さん達から根掘葉掘、執拗に喰い下ってアンケートを求めていた。

「あの——悪い時はどうぞぶってねとありますけど、皆さん素直に彼からぶたれて平気？相手に依りけりですって。ぶたれたい、結構

ですよ。あなたは、ぶち返す。おだやかじゃありませんね。でも、ぶたれたいというかたがあるので安心しました。（などと一人で感心しないで、実はこれが夫婦の妙戯ですぞ……と強調して欲しかった。しっかりして下さいよ）……というように訳で、結局、あなた好みの女になりたいと奥村チヨさんは唄ってるんですが、結婚して彼好みの女になりたいというかたは1のボタンを、決してなりたくないとは断乎ハネつけるかたは2のボタンを押して下さい。ハイッ、出ましたね。おお、50対50。嬉しいですね。安心しました。世の男性諸君、大丈夫ですよ。あなた好みの女になつてくれるそうです……」

映画監督ではないが、起承転結のドラマを結ぶために、再びファーストシーンに還りましょう。つまり、上ることはあっても、下ることのない、せち辛い物価高の世の中に、せめて、もと手要らずの女房を、ああでもないこうでもない……いえ、進んで一つ、そのこと、あなた好みの女にして頂戴と、縄目を受ける秋の夜長のひとときこそ、この世の天国、よきものとお思いになりませんか。どうも失礼しました。





最近、外国特に英米のミステリーが、隠れた勢力をもって流行している。  
なかでも特に、サディスティックな色彩の濃い「スパイ・アクション物」が売れているようだ。

シリーズものに映画化され、スクリーンまたはブラウン管に登場し、話題をさらったこの種のものも少なくない。

懸賞入選

## 『翻訳ミステリーの

## 「サド・マゾ」紹介』

——(イアン・フレミング)——

ショー・ラムワカ

(カットも)

とくに、これら「スパイ」ものの特色としての色付けは、美女を配し、拷問を課することの、無理のない下地があるだけに共通の山場となっている。しかし、心理的機微はやはり映画では描き難いだろう。  
今日はそれらのうちから『ダブルオーセブン』  
今日ではそれらのうちから『ダブルオーセブン』で有名なボンド作家イアン・フレミングを取り上げてみる。

○  
フレミングの処女作は「カジノ・ロワイヤ

ル」であるが、ストーリーは英米派スパイのボンドとロシア派スパイのル・シツフルの対決である。

前半の山場は、フランスの保養地、ロワイヤルと称する地のカジノにおける「カード賭博」であり、後半の山場は、ボンドがル・シツフルに拷問されるところである。

このボンドなる人物は、たいへんな食道楽かつ「カーキチ」であり、まわりから女っ気がなくなったら空気にでも溶けこみ、微妙な



分子となり消滅してしまうんじゃないかなろうかと察せらる人物なのである。

フレミングはそれぞれに対し「うんちく」を傾けて色どりを添えているのだが、それらは割愛し、ここでは本題のサドシーンのみを展開してみよう。

フレミングは、主だった作品にはすべて、女性に対するサドシーンをえがいているが、この作品にだけは「処女作」としての遠慮があったものか、女性に対するサドシーンはなく、代りに、ボンド氏自身に拷問を受けさせている。

しかもこの拷問シーンは、後半のクライマックスにしてあるだけに、描写はこまかく、なまなましい。

○  
『ボンドは部屋のまんなかで、すっぱだかで立っていた。

白いからだには、あざがなまなましく、疲れと、これからどんな目にあうか、わかっているので、顔は蒼白な仮面のようなだった。

「そこへ坐るんだ」ル・シッフルが目の前椅子に顎をしゃくっていった。

ボンドはそこにいって、腰をおろした。やせた男が銅線を出してきた。銅線でボン

ドの手首を椅子の腕に、足首を椅子の前の脚に縛りつける。胸にもふた巻きばかり脇の下に巻いて、椅子の背に縛りつけた……略……椅子の脚は下に大きくひらいているので、ボンドは、椅子をゆすることすらできなかった。……略……尻とからだの下部が、椅子の座より下につき出ているのだった』（井上一夫訳「カジノ・ロワイヤル」創元推理文庫一三七頁）

この椅子は小型の肘掛椅子で藤の座をナイフで切りとり、丸い木の輪の座のみになっている。

責め手のル・シッフルは、ボンドの前に置いた玉座のような椅子に坐り、タバコを吹かし、コーヒを飲みながら、一時間にわたり責めるのである。

女性のサディストにとっては、こたえられぬ場面であろう。

『藤の絨毯たたきを手にとると、柄を持ちいい格好に膝の上にのせ、三つ又になった先をボンドの椅子の真下にやる。

じっとボンドの目を、まるでなぜまわすような目つきで見つめた。やがて、膝の上の手首をいきなり上にはねあげる。

効果は驚くべきものだった。

ボンドの全身が、思わず痙攣したように弓なりになる。顔は声にならない悲鳴にゆがみ唇がまくれ上がって歯がむき出る。

同時にガクンと頭がうしろにのけぞり、首筋にはピーンと張った筋が浮かぶ。一瞬、全身の筋肉がぐっとこわばって張り出し、爪先と指先が真っ白になるくらいいつぱる。

やがて、ぐったりとなって、全身から玉の汗が吹きだす。

ボンドは腹の底からうなり声を立てた』（前記第一三八頁より抜粋）

ここで引用文の文面上の注意「手首を上にはねあげた」というところの手首はル・シッフルの手首で、ボンドはそれによって、最も神経過敏な部分を責められたのである。この意味を取りちがえぬ事。

ル・シッフルは、肉体への拷問ばかりでなく、言葉での拷問も行なっている。

『拷問というものは、恐ろしいものだ……略……だが、拷問するほうにとっては、簡単なものなんだ……略……

相手が男なら可能なかぎりの必要な苦痛をあたえてやる事ができるんだ……略……ただ直接的な苦痛だけでなく、自分の男性としての根元が、だんだんに破壊されていく



と思わなきゃあ、ならんし、……略……

最後までかぶとをぬがなければ、しまいに  
は、一人前の男性ではなくなってしまうんだ  
な』(前記第一四二頁より抜萃)

○

以上のように責める訳だが、ここに一つ注  
目すべき解説がある。

『拷問というものは、最初がいちばん辛いこ  
とをボンドは承知していた。

苦痛というものは、放物線を描くものだ。

急に上昇して、最高潮に達し、それから  
神経もにぶって、だんだんに反響は弱まり、  
しまいには意識を失うか死ぬかしてしまうの  
だ。……略……

ドイツ人や日本人の拷問を受けて生き残っ  
た同僚から聞いたことだが、

しまいには一種の性的な薄明状態ともいう  
べき、すばらしく、ほのぼのとした無気力状  
態がくるというのだった。

そうなると苦痛は快楽に変わり、拷問者に  
対する憎しみや恐れが、自虐的なあこがれの  
ようなものになってしまふというのだった。

そうなったとき、この一種のグロッキーに  
なった混乱状態を相手に見せないようにする  
というのが、意志の最大の試練なのだと、ボ

ンドは教わっていた。

ちよつとでもそんな事を感じかれたら最後  
すぐに相手は無駄な手間を省くために殺して  
しまふか、さもなければ、また苦痛の放物線  
を最初から味わうことができるくらい神経を  
回復させようとすることになる、というのだ  
った』(前記第一四〇頁より抜萃)

この解説は実に意味深である。世のマゾヒ  
スト達の心理と肉体的快感の謎に、二歩も三  
歩も足を踏み入れている。

先日、ボクシングの解説で白井さんが、  
「ノックダウンされた時はいい気持なんです  
よ」とっていたのが、むべなるかなと感ず  
る。

○

第二作は「死ぬのは奴らだ」である。  
ストーリーは、ニューヨークはハーレムの  
黒人スラム街に巣くう「ミスター・ビッグ」  
にボンドが対決する物語。

これにカリブ海を中心に十七世紀後半に暗

躍した海賊「血まみれモーガン」の財宝がか  
らみ、いどりにビッグの女がボンドと濡れ  
場を演ずる。

サディストにはミスター・ビッグ御大がし  
やしゃりでている。犠牲者には三角関係の女  
ソリテア。

サド場面としては、ビッグが、捉えたボン  
ドに対して精神感応術をやっているソリテア  
に訊問させようとした時にまず現われる。舞  
台は、怪奇なブードウ教の神像サメディ大公  
のある、おどろおどろしたミスター・ビッグ  
の室である。

『彼女はボンドの右ひざにふれ合いそうに近  
々と腰を下し、じっと彼の目を見た。

顔色は青白かった。長年南国で暮した白人  
の一族の持つ肌色の青白さである……略……  
目は青くて、尊大に輝いていたが、ちよつ  
とふざけるように彼の目に見入った時に彼は  
何か意味ありげなものを感じた。……略……

あごの線はすっきりと美しく、決断力の  
強いことを示していた。また、意志の強さは  
まっすぐな先の尖った鼻すじからもうかがえ  
た。その美しさは、一つには妥協を許さない  
という、そういう顔立ちにあるようだった。

生れつき人を支配するようにできている顔



立ちである。フランスの植民地の、奴隷を使っていた家柄の娘だ。

彼女はじっとボンドの目に目を合せて、何気なく両ひじをひざの上についた。……略……  
 いいたいことは分りきっているし、それに応えるような温かさが、ボンドの冷い、あごを引いていた顔にも現われたのだろう。

急にミスター・ビッグが机の上の小さな象牙の握りのついた鞭をとり上げ、彼女をびしりと打ったのである。

鞭はうなりを上げて空を切り、彼女の肩に残忍な打撃を加えて当たった。

ボンドの方が彼女よりも身を縮めた。

彼女の目は一瞬、燃え上ったようだが、すぐにまたぼんやりした目付きになった。

「お立ち」ミスター・ビッグがやさしくいった。

「自分を忘れたね」(井上一夫訳「死ぬのは奴らだ」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック三六六号六四から六五頁)

○

以上のように、ほんのささいな場面なのであるが、鞭打つ男ビッグは、身長六フィート半、体重が二百八十ポンド。フットボールの球のような大頭。顔は一週間も川につかって

いた土佐衛門のようにむくんで光っている灰色。髪は耳の上にもやもやと生えているだけの禿げ頭。眉毛もまつ毛もなく、目は黒い瞳孔の廻りが金色の瞳で獣のように燃える。唇は何かいう時まくれ上って桃色の歯ぐきまで見える黒人だ」としているし

女は先刻の抜萃のように「奴隷を使っていた家柄という誇り高き白人娘であるが、やむをえず飼育されている」となっている。

それやこれやで、なかなかバッグ・グラウンド・ミュージックがきいているので、単純なシーンではあるが印象深い。

次なる場面は大詰めに現われる。

ビッグは再度捕えたボンドとソリテアを縛りつけて、モーターボートで海中を曳きずり珊瑚礁で傷だらけ血だらけの餌に化した処で鮫やバラキューダに食わさんと企らむ。

『ソリテアの服は、ナイフで破り取られた。青白い体で、全裸で立っている。彼女は顔を伏せた。ふさふさした黒い髪がぱつぱりと顔にかかった。……略……』

ミスター・ビッグの指示で、二人の腕の縄は解かれた。二人の体は、向き合せてびつたりと押しつけられて、腕で互に腰を抱き合って、一緒にしっかき縛りなおされた。

ボンドはソリテアの柔らかい胸が彼にびつたり押しつけられたのを感じた。

彼女は頸を彼の右肩にもたせかけている。「こんなやり方で抱かれるつもりではなかったわ」彼女が囁いた。……略……

棧橋の上には、パラヴェインにつないだ巻いた縄の山があった。……略……

反対側の端は、二人の腋の下を縛って、二人の首の間のすき間に固く結んである。……略……ミスター・ビッグは二人に最後の一瞥を与えた。

「脚は自由に動かせるだろう。そうすれば脚が魚の食欲をそそる生き餌になる」……略……

セクター号は珊瑚礁の方へ、水を切って進んでいった。……略……パラヴェインが静かに船の後を追って進み出した。……略……

二人の傍の縄の山が、さっと生きもののようにくずれていった。

「そらっ！」ボンドは女をしっかりと抱いてあわてていった。

棧橋から海に引き込まれた時は、二人はまるで腕が附根から引き抜かれるようだった。

一瞬、二人はぐっと深く水中に沈んだが、すぐに水面に出て結び合された二人の体は激しく水を切って曳かれていった。



ボンドはゆがめた口の端ではしる波としぶきの間に、息をあえいだ。

耳の端でソリテアがあえいでいるのが聞えた。「息をしろ、息をし！」彼は押しかぶさる水の間をくぐるように叫んだ。

「脚をぼくの脚にしっかりからませるんだ」聞えたのだろう、彼女のひざが彼の脚の間にわりこんで来るのが分った（井上一夫訳「死ぬのは奴らだ」ハヤカワ・ポケット・ミステリ・ブック三六六号一九四〇一九六頁）

○  
この後、ボンドが捉まる前に船に仕掛けておいた爆雷が爆発して二人は助かる。

この処刑法は、なにもフレミング氏の独創ではない、十七、八世紀の海賊達が盛んにもちいた「キール曳き」と称する、クラシックなものなのである。

以前マローン・ブランド主演の映画「戦艦バウンティ号の叛乱」でこの船底曳きが行なわれたのを見た事がある。

○  
第三作は「ムーンレイカー」で、ストーリーはドイツ・ナチスの残党がロンドンに原爆ミサイルをぶちこまんとし、ボンドがそれに對抗する物語である。

サディストとしてはヒットラー・ユーゲントの人間狼と呼ばれた、クレップス。生贄はボンドの相棒の婦人警官ガーラ・ブランドである。

ガーラは話の終り近くで捉えられて部屋に監禁され、椅子に縛られて責められ、又自動車にのせられて基地に移されるのだが、その辺を抜き書きしてみると……

「……ときどきガーラの前に立っては、鼻をほじったり、いやに考えこんだみたいに歯をせせったりするのだった。

ガーラの前に立つ時間がだんだん長くなり機械のことなど忘れて、腹をきめようと考えているようだった。

そこで、その手がドレスの上のボタンを、はずすのを感じて、思わずびくっと身をすくめ、しかたなしに真にせまうなり声で、いま意識をとりもどしたという默劇をやらなければならなくなった。……略……

椅子を彼女の前にすえ、椅子にまたがるようなすわり方をして、椅子の背に顎をのせ、青白いだらんとした目ぶたの下から、さぐるように彼女を見つめるのだった。……略……クレップスは舌なめずりした、黄色いしよぼしよぼしたひげの下の赤い小さな口がひら

き……略……彼の目が意味ありげに食いつきそうになる。

椅子を前にずってきて、顔がわずか一フィートで向かいあうくらいになり、彼の息の毒気に包まれてしまう。……略……

「ここはほかにだれもない。悲鳴を聞きつけてくれる人間はいないんだぜ」……略……「もう一度いってみな」話がおわるとクレップスは、ささやくようにいった。「こんどはもちっとうまく答えられるだろう」

だしぬけに、その目が残忍な熱っぽさを見せ、両手が椅子の背から伸びてきて……

すつとばすメルセデスの後部座席で、ガーラは歯ぎしりして、からだをそっとなぜまわし、さぐったり、つねったり、ひっぱったりしていた指先の記憶に泣くのだった。

その間も熱っぽい、うつろな目はふしぎそうに彼女を見つめているだけで、とうとう彼女は口の中に唾をためて、彼の顔に吐きかけてやったのだった。

クレップスは顔をふこうとしなかったが急に本当に彼女を痛みつけたので彼女は、ひと悲鳴をあげると、神の慈悲か気を失ってしまったのだった（井上一夫訳「ムーンレイカー」創元推理文庫二二九～二三一頁）



以上の処が「ムーンレイカー」においては唯一のサド場面である。

サドのテクニックとしては全然みるべきものがなく、辻村隆氏の「SMカメラハント」の方が余程内容が濃い。しかし小説のプロットやシチエーションの設定等による緊迫感の中では結構たのしめる。

ここで一つ、辻村隆氏について気のついた事を書いておく。

それは彼の「カメラハント」が相当強烈な縛りや責めがでてきても陰惨な影がなく、からっとした明るさがあることだ。

そこでフレミング描くサディストと責め手としての辻村氏を較べてみた。( )内が辻村氏である。

野獣が(ヒューマニストが) 嫌がる(納得ずくの) 清浄な(だいたい経験の有る) 婦人を(女を) 乱暴に(フェミニスティック) 責めて(プレイして) 苦しめる(喜ばせる)。

それに彼のプレイには血と(メンスはフェチ的色彩として除外して) 後遺症がないことである。

結局、性欲発現の(バリエーション) 一変形であるサディストに対し、辻村氏のそれは、愛の発現のバリエーション

「ションを追求するプレイヤー」であるというのが、より適切と思われる。

彼が現在のこの姿勢を崩さない限り、麻薬中毒的、または死に至る病的な影に冒されずに、サドプレイにいつまでもハッスルできるだろうし、小説中の悪漢のように滅ぼされることもないだろう。

○

第四作は「ダイヤモンドは永遠に」で、まずストーリーであるが、これはアメリカのダイヤモンド密輸業者とボンドが、アフリカのダイヤを巡り、死闘する物語である。

サディストとして殺し屋「吹きっさらし」のウィント。犠牲者として、ボンドの協力者で、ラスベガスにあるカジノの「札まき」であるティファニー・ケイス。

ところでこのティファニー・ケイスであるが、作者のフレミングは女性の拷問場面にまだまだ気弱な処をみせていて、この女性の性格設定の処で大分予防注射をうっている。：年令を二十七、八才。母を淫売屋の女主人ケイスは女学生の頃やくざに輪姦されて家出各地を遍歴しその間、受付け、エキストラ、ウェイトレス、ダンサー、アル中、病院、女賭博師、密輸の連絡係の経歴を持つ。したが

ってタフな女として拷問には充分耐えることができるんだぞと、文中おおいに宣伝これつとめて、拷問シーンのショックの軟化に、けんめいである。……

サド場面はボンドが敵の首領を倒しアメリカからイギリスに帰る船中に発生する。

○

『丸い窓のなかでゆっくりゆれるカーテンを通し、ボンドは耳をすました。

自分がクイーン・エリザベス号の船腹の途中に、まるで蠅みたいにしがみついていることを忘れ、はるか下の海の音を聞かないようにし……略……

小さな船室の中で、ぼそぼそと声が聞こえる。男の声が二言、三言いうと、こんどは女の声が「ノー」と叫ぶ。

ちよっと静かになったと思うと、こんどはびしゃっとなぐる音。銃声のような大きな音だったので、ボンドのからだは、なわにでも引かれたように、ぴくんととび上って窓のなかに乗りだした。……略……

船室のまんなかあたりまで、ぶざまなとんぼがえりを打ってしまったが、ボンドは立ち上がると低く身をかがめて……略……

「ようし」ボンドはゆっくりと、まっすぐ立



ち上がりながらいった。……略……

この場を牛耳っているのはボンドだし、彼の銃口がそうすべきだと語っている。

「だれにいわれてきた？ まだ貴様の出る幕じゃねえ」でぶがいった。

何かがこもっているような口調だった。恐怖ではないし、驚きでならない。

「カードをやるには、ひとり足りないから相手をして来てくれたのか？」……略……

化粧テーブルに、横向きに腰をおろしている。汗ばんだ顔で、小さな目が、ぎらぎら光っていた。

その前にはボンドの方に背を向けて、ティファニー・ケイスが布ばりのスツールに腰かけている。

短い肌色のパンティー一枚という姿で、両膝を大男の腿でがっちりさはまれている。

青い顔に、ところどころ赤くあざができていた。

その顔がボンドの方にふり向く。その目はわなに落ちたけものように、血走っていたが、夢ではないかというように口をぱっくりあけている。……略……

「ティファニー」ゆっくりと、よくわかるようにいった。

「膝をつくんだ。そろそろと、そいつから離れていけ。頭を伏せて。部屋のまんなかに出てくるんだ」……略……

いま彼女は二つの的のじゃまにならなくなった。

「きたわよ、ジェームス」ケイスの声は希望と興奮にふるえていた。

「立ってまっすぐ浴室へはいれ。ドアをしめて湯舟にはいつて横になってるんだ」

ボンドの目が、ケイスがいうとおりにして、かどうかをたしかめようと、ちらっとそっちに向く。

ケイスは立って、ボンドのほうに向っていた。白いからだ一面に、赤い手の跡がついているのが目にはいる（井上一夫訳「ダイヤモンドは永遠に」創元推理文庫二七五頁～二七七頁）

このあとボンドは二人の殺し屋と撃ち合っで倒すのだが、サド場面の愛好家にとっては前作同様やはり少々もの足りない。

○

第五作は「ロシヤより愛をこめて」

これはショーン・コネリーのボンドで映画化されて大評判になった。映画の題名は「○七危機一発」だったと思う。主題歌のほう

は「ロシヤより愛をこめて」のままにしてあった。

ストーリーは、ボンドに散々てこずらされたロシヤ側スパイ組織スメルシュが、美しいロシヤ娘を囹にして、ボンドをおびきよせ、暗殺せんとする物語である。

これには本筋の方に、サド・マゾ場面はなく、ボンドの協力者として登場するイスタンブールの情報部支局主任ケリムの生い立ちの回想の中に出てくる。

○

『母という名の女の大ぜいいる大家族だね。親父おやじというのが、女の抵抗できないというタイプの男だったんだ。女というやつは、みんな男にひきかたがれたがるものでね。

夢の中では、男の肩にかつぎ上げられ、穴倉にはこびこまれて強姦されることを待ち望んでるんだ。親父の女の扱い方というのが、まさしくそれだったんだ。……略……

女とあればみんな手に入れたくなり、ときにはそのために男を殺したこともある。

そのくらいだから自然子どもの数も多かった。それがみんな、だだっ広い古い屋敷の塵蹴みたいところに、重なりあうようにして暮らしてたんだ。



その「小母ちゃん」たちが住めるように手を入れたりしてね。

まるで小母ちゃんたちの数は、ちょっとした後宮ぐらいだったね。……略……

子どものころは楽しかったな。小母ちゃんたちもよく喧嘩したが、われわれ子どもたちもよくやった。ジプシーのキャンプみたいだったな。親父がむちでぶんなぐって、みんなを統率していた。

女も子どもも、うるさいとなるとむちだ。

……略……二十になる頃には、私も自分の舟をもって、自分でかせいでいた。……略……

そこで悪運にまわられてね。つまらんベツサラビアのあばずれ女をつかんでしまったんだ。……略……ジプシーの何人かと決闘してその女を手にいれたんだがね。

ジプシーどもは追ってくるが、こっちは女を舟に乗せちゃった。まず女を、気を失うまでなぐっちゃまわなければならなかったわけ。

トレビゾンドに帰っても、まだ女は私を殺そうとねらっているの、しかたなしに自分の家につれていくと、服をはいで、テーブルの脚に裸のまま鎖でしばりつけてやったよ。飯を食うときは、犬にやるみたいに残りものをテーブルの下に投げてやった。女もしか

たなしに、かぶとを脱いだ……略……

ところが、母がだしぬけに私のところへきたんだ。……略……そこで女を見つけちゃった。……略……すっかり逆上しちゃって、私を人でなしの悪党で、むすこと呼ぶのも恥ずかしいというんだ。

女をすぐもとのところへ帰せという、母は家から自分のきものを何かと持ってきた。

女はそれを着たが、いざとなると私を捨てていくのはいやだという』（井上一夫訳「ロシヤから愛をこめて」東京創元社の世界名作推理小説大系二十五号一三八―一三九頁）

# ○

これまでのところ第二作より第四作に至るサド場面は、美女が悪漢に責められるといった冒険談の薬味の要素が濃かったが、第五作には初めて、女を責めて、身も心も自分のものにしてしまうという形がでてきた。フレミングは、その道に一步ふみこんだというところか。

# ○

第六作は「ドクター・ノオ」である。これは「〇〇七は殺しの番号」として映画化された。ション・コネリー主演のボンド物の第一作である。尚「ロシヤより愛をこめて」は

映画化第二作であったし、「カジノ・ロワイヤル」は、デヴィット・ニーベン等の主演で映画化されたらしいという記憶がある。

ストーリーは、カリブ海に浮かぶ孤島においてアメリカのロケット実験を妨害せんとする野心家ドクター・ノオと、そうはさせじと反撃するボンドとの対決をえがいている。

サディストとして、ドクター・ノオ。犠牲者として、ハニー・ライダー。

『私は、苦痛というものに興味を持ってるのだ。それに人間の体というものが、どのくらい苦痛に耐えられるものかも知りたいと思ってる。……略……』

この島はクラブ礁島と呼ばれているが、蟹が多いからそういう名前がついたんだ。

陸蟹——ジャマイカでは黒蟹と呼んでるやつだ。知ってるだろう。一匹の目方が一ポンドぐらいもあり、大きさもコーヒーの受皿ぐらいあるぞ。

いまごろの季節になると、そいつらは海岸の穴から出て、何千匹と群をなして山の上に登ってくるのだ。島の奥の、珊瑚岩の岩地で、また岩穴にもぐって、子を産むんだ。

一ぺんに何百匹ずつも群をなして、登ってくるんだぞ。あらゆる障碍をつき破り、のり



こえてくる。ジャマイカでは、通路に当たった家の部屋のなかまで通り抜けていくんだ。

……略……この蟹というやつは、途中にあるものは片っぱしから喰い尽していくんだ。

なあ女、いま蟹どもは、行進をはじめてるぞ。この山腹に何万匹とよってくるんだ。赤とオレンジと黒の大きな波のようにな。ごそごそとあわてて、この頭上の岩に向ってな。

それに今夜は、ちょうどその通路に当るまんなかあたりで、杭に縛りつけられた裸の女を見つけるわけだ。やつらにとっては、目の前にひろげられた大変なご馳走だ。やつらははさみで温かい体をさぐってみるだろう。

そのうちに一匹が、はさみで傷をつける……それから……つぎからつぎに……」

ハニーの口から呻き声がもれた。頭ががっくりと力なく胸に下る。ハニーは氣を失ってしまったのだ』（井上一夫訳『ドクター・ノオ』ハヤカワ・ポケット・ミステリ・ブック第五一一号一九〇〜一九一頁）

○

この作品でもフレミングはヒロインの人物像にショック・アブゾーバーをつけている。

ここでは蟹責めにあうハニーを、地下壕に住むみなし児でマングースや蛇やさそりなど

の、けものや虫と住んでいると設定し、その為黒蟹の性質を百も承知で、このシーンも上手に切り抜けることができるとしている。

ことほどさように、フレミングは登場するヒロイン達をかばっている。彼は自分でえがくヒロイン達に恋してしまっているようだ。

その為に彼女達に対しサドに徹し切れずにいる。しかし第七作の「ゴールドフィンガー」からは若干冷たくなってきて、ときおりヒロインに残忍な死を与えるようになる。

ところでヒーローのボンド氏だが、作者はそのタフネスぶりを示さんと力をいれすぎ、かえって「貴方好みの、貴女好みの」マゾヒストに仕立ててしまっている。

第一作では急所責め。

第二作では船底曳きと小指を折られる。

第三作では自動車事故で怪我させられた身を針金で縛られ、その針金を焼き切る為のパ

ーナーを手に入れんと、相手に散々悪口を言

って、自分をなぐらせて気をそらせ、今度はそのパーナーで針金を焼き切るのだが、この時自分の体も焼ける。ついで脱出にうつり約三〇米の排気孔を傷だらけの身で這いのぼり、高温、高圧の蒸気をあびせられる。

第四作では八分殺しのリンスを受け

第五作では毒で刺され

第六作では耐久実験材料として地下の要塞から金属パイプの送風管の中を通過して脱出させられる。途中電気ショック、真赤に焼いた処、毒ぐもタランチュラの群、百フィート以上からの水面への落下、水中の大烏賊などの障碍が待ちかまえる。

以上のごとく責めにつぐ責めである。タフなんてことだけではとうてい身がもたない。苦痛を楽しむ境地になって初めて耐えられるものかと思われない。つまるところ「ジェームス・ボンドはマゾヒスト」である。

○

さて、あとボンド物は長編六冊、短編集一冊が残っているが、書きづかれしたので紹介は次回とし作品名のみ記してお茶をにぞす。

第七作 ゴールドフィンガー

第八作 ○〇七号の冒険（短編集）

第九作 サンダーボール作戦

第十作 わたしを愛したスパイ

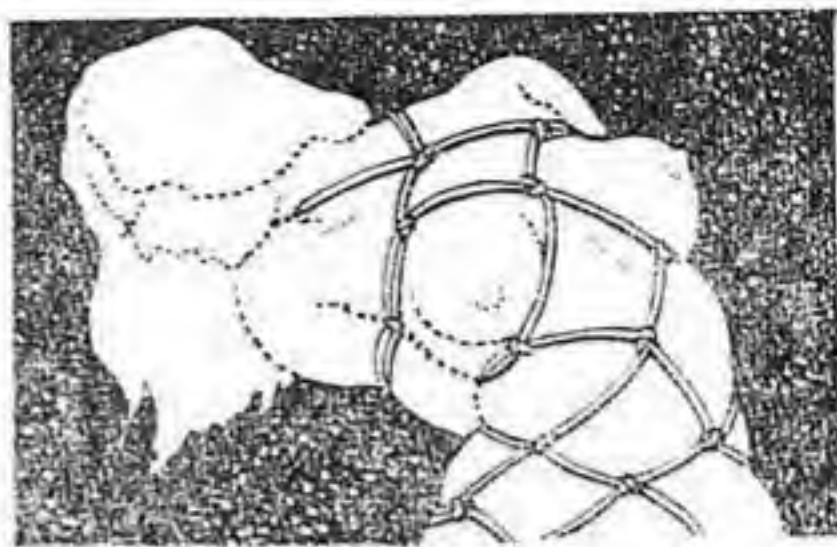
第十一作 女王陛下の〇〇七号

第十二作 ○〇七号は二度死ぬ

第十三作 黄金の銃を持つ男（遺作）

作品の新しさが増すにつれ「サド指数」も高まってくる。次作が楽しみである。





秋風にももの想う

## あるほどの縄

\*\*\*\*\*

早 木 夢 二

あるほどの花投げ入れよ棺の中。  
夏目漱石が美しい女人の死をいたんだ句である。

あるほどの縄投げ入れよ棺の中。  
私の場合、こう願いたいものである。

それにしても、こんなことを考えるほど、私は年をとった訳だし、私の好伴侶だった縄との生活も、そう長くはないのかと思うと、この上なく淋しい。

菱縄に憑かれた男の生涯、何と美しくはないか。ひとりよがりではあるが、ちょっと悲壮ではある。

ずっと前、小川真由美が菱縄を打たれていてテレビ映画を見逃した無念さを、恨みがましく思ったことがあった。

そのシリーズの再放送が始まったので、胸をときめかして待っていたのに、お目当てのやつは寸前でなくなってしまった。

菱縄縛りなんてそうザラにある訳ではないので、無念さ一汐であった。

また、あるわよ。

そんな私を、彼女はそういつて慰めてくれるし、私もそうであってくれと、大げさにいえば祈るような気持だが、その日は、彼女をいつもよりきびしい菱縄縛りにして、心ゆくばかり責め上げたのは、彼女にとって思わぬ災難であったかどうか――。

「女犯刑罰史」を見た。

久しぶりで菱縄縛りをたっぷり見たが、この頃は、やはり体と一緒に気も弱くなってい

るのか、あの拷問シーン、阿鼻叫喚といったらしいような、凄まじい拷問シーンには、ちよつと参った。

静かな拷問、なんてあるまいが、せめて、全裸にがちり菱縄を打たれた女囚の姿をじっくり写してほしいと思う。

私が近ごろ、彼女と或はひとりで、さかんに菱縄縛りを行なっているのは、こんな心のあせりの現われであろう。

ある深夜、独りでテレビを見ながら、ふと思いついて、私は縄をこっそり取り出すと、裸になって胸と下腹に菱形の縄をかけた。

そのままテレビの前に坐って、この頃余り飲まないウイスキーをちびりちびりやりながら、テレビの画面の移行行く間に、ちらちらと写る菱縄姿をたのしんだ。

慶子は、ぐったり隣の部屋で寝込んで、恐らく気がつかないであろう。気がついたとしても、そうびっくりもすまい。

その縄も、棺の中に入れてあげるわよ。

彼女は、そういつてくれるだろう。

私は、この上なくいいという気持で、自分の衰えた肉の上にはっている縄を、しげしげと見入るのだった。





(2)

芳野眉美

A

首だけをだした生埋めとはいえ、土を固めたわけではなく、後手に縛られてはいたが、足まで縛られていたわけではない。もがけばどうにか穴から逃げ出せそうであった。

が、三田の車のほうが早かった。

葉子はすばやく庭の隅にあったむしろを取り、泣きだしそうな顔をして葉子に救いを求めている勇の顔にかぶせた。ごみを焼く穴が

盛り上がっているのに三田が不審をいだけば葉子と勇の火遊びがバレてしまうかもしれないが、そこまで考えるひまがなかった。

車はいつもごみの穴の手前で止まる。勢いあまって穴に落ち込むこともある。それだけ三田は妻の葉子を溺愛しているのだろうが、今夜ばかりは、どうしても穴の前で完全に車を止めなければならなかった。

勢いあまって勇の顔を車で轢いてしまったらとりかえしがない。生埋め殺人、残酷

な鬼夫婦、新聞の見出しが想像出来る。

葉子は土の中の勇をかばうように、むしろの前に立った。その瞬間、ライトを全身に浴びて顔をそむけた。ライトが消える。

「葉子、どうしたんだい？」

葉子の前で静かに車を止め、三田はドアを開けて顔をだした。庭に、まさか葉子が立っているとは思わなかったらしい。

「あら、あなたの車の音がしたから、庭にでてみたのよ。おかしい？」





「いや、ただ葉子が、まさか出迎えてくれるとは思わなかったからね。驚いたんだ」

「そうでしょうね、出迎えたことなんか一度もないもの」

葉子は、ちょっとスネてみせる。

「違うよ、そういう意味じゃない。有難う。うれしいよ」

三田が近づくと前に、葉子は抱きつくと、  
「さびしかったわ。とてもひとりじゃ寝られないの」

甘えた声で三田の口に吸いつき、三田の視線から、むしろが少し動くのをかくし、首にかじりついたまま、赤ん坊のように全身を、三田の両腕にあずけてしまった。

「今夜は、おとまりじゃなかったの？」

「葉子に会いたくて、無理に帰って来てしまったんだ。芸者と寝たってつまらない」

「そうなの。うれしいわ」

三田は葉子を抱いたまま家に入った。夫婦の甘い会話なんかどうでもいい。早く穴から出してくれと、生理めの勇は半分泣きべそをかいていた。今夜は主人が帰らないから、たっぷり可愛がってあげるわ、という葉子の言葉がふいになったばかりでなく、もし葉子の主人にみつきりでもしたら、どんなに暴力を

ふるわれても仕方がない。

「おや、これはまたどうしたことだ」

おどけた三田の声がし、

「たまにはお掃除しないと、あなたにきらわれてしまうもの」

と葉子が調子を合わせている声が勇の耳にも、とどいた。まさか、隣りの留守番の男が葉子にいたずらされながら、せっせと掃除をしたとは思うまい。

「いや、こんな事をする葉子らしくない。

葉子は何もしなくっていいんだ」

「あなたをいじめてあげるだけでいいの？」

「そうさ。葉子にいじめられていれば、俺は幸福なんだ」

「庭におりたから、足がきたなくなっちゃった。泥がついているわ。綺麗にして」

「よしよし、洗ってやるよ」

「いや。あなたの舌で舐めて」

廊下の雨戸は、まだ閉めていない。布団は敷きっぱなしであった。

畳に坐って足を投げ出した葉子の前に、三田は這いつくばって、うやうやしく両手で、葉子の泥だらけの足をささげ持った。

むしろをかぶされた勇からは三田の背中がおぼろげに見える。葉子は、三田の頭越しに

むしろを見つめている。

「くすぐったい」

三田の厚い舌が足の裏を舐めるたびに、葉子は、くっくくと身体をよじって笑った。

「葉子の足は綺麗でしょう」

「綺麗だ。ガラス細工のように美しい」

よだれを流しながら葉子の足を舐める三田は、葉子の足の爪に泥がはいっているのも少しも気にしないようであった。

一本一本の足の指は、すんなりとのびやかで、三田の称讃は別にオーバーではない。ぐっと削いだように細い足首も、むだ毛が一本もないすべすべした下肢も、そして、膝頭から急激に肉づきがゆたかになって、むちむちと固く緊まった、まっ白な太腿も、すべてが美しかった。

葉子の足の裏の泥を舐めつくし、三田の舌は、繊細な葉子の下肢を上に登って、成熟し切った惱ましい太腿にかかろうとしていた。

「だめ」

葉子の足が三田の顔を蹴飛ばし、葉子は立ち上って、三田の背中にまたがった。

「ほら、便所まで歩け」

三田の腰紐を三田の首にかけて手綱にし、器用に足の裏をそろえて三田の頭を踏み、スリッパ



で三田の尻をひっぱたいた。

頭をこづかれて、廊下にでても三田の顔はうつむいていた。馬上の葉子は、むしろを、もごもご動かしている勇に向かって手を振った。愉快そうに笑っている。

「おすわり」

便所の前に三田を正座させ、便所の戸を開けたままで、葉子は便器をまたいだ。着物の裾をまくり、ふとうしろを向いて三田の顔を見た。

「なによ、その顔。まるで食いつきそうな顔をしている」

「ああ、食いつきたいよ。葉子の、そのまるまっちいお尻に」

「あと始末をさせてあげるから待っていていらっしゃい」

葉子は少し経ってから、深い嘆息をついて全身の力をぬいた。

「そんなににらんでいたんじゃ、でるものでないわ」

着物の裾を持って立ち上り、

「早くう」

三田が、あわてて紙を取ろうとすると、

「馬鹿、紙なんか要らないだろう」

首に巻きつけた手綱を引っ張って、三田の

顔を便器の上に突き出させた。

「ほら」

三田の髪をつかんで、ぐいと引き寄せた。それが罌だった。葉子は、三田が顔を近づけたとき、それまでためていたのを一度に放出したのである。

「うっぶ」

逃げるひまなく、どっと顔中に浴びせられて、三田は海でおぼれたような声をだした。

「飲んでみたいっていった奴は誰だい」

顔だけでなく、三田の上半身は濡れそぼった。

「おやおや、便所を汚してしまったじゃないか。掃除をしたら、すぐお風呂に行っておいで。まだ閉まっていけないよ」

掃除道具をかかえた三田は、しばらくごそごそしていたが、ゆかたに着がえてタオルをぶらぶらさせながら外に出て来た。

「早く帰って来てね。お酒の仕度をしておくから」

急に優しくなった葉子が、三田を送り出すと、むしろをまくって土の中から首だけだしている勇に接吻した。

「ごめんね。今、だしてあげるよ」

「御主人にあんなひどいことを……」

「あんなことをされるのが好きなんだから、いいのよ。あれ、そんなことをいつている勇さんだって。誰でしたっけね、便所の汲み取り口に顔を突っ込んでいたのは」

「それをいわないで下さい」

ようやく勇は穴から脱けだし、葉子に縄をほどいてもらおうと、かくしてあった服とサンダルを返してもらって、ほっと一息ついた。

「一時は、どうなることかと思いました」

「わたしだってそうよ。庭の奥まで車をいれられたら、勇さんを轢かなかったにせよ、車の下になってしまふから、そうだったら、どうしようかと、とても心配だったの」

「明日の朝まで生埋めにされていたら、死んじゃいますよ」

「まさか、死にやしないでしょうけど、主人には、みつかってしまふわ」

葉子は勇の泥を落としてから、

「勇さんもお風呂に行っていていらっしゃい」

「ええ。御主人がお帰りになってから、ひとつぱしり行って来ます」

「あら、お風呂でなら会ったっていいじゃない」

「とても、そんな勇氣はありませんよ」

「そんな氣の小さいことでどうするの。それ



でわたしと姦通するつもりなの」

「奥さんは不思議な魅力があるひとだ」

「有難う。明日、主人が働きに出掛けたら、遊びにいらっしゃい。お布団はそのままにしておきますからね」

顔を見合わせて二人は笑った。

「おやすみなさい」

垣根を越えようとした勇に、

「お風呂から帰ったら、雨戸の節穴から覗いてもいいわよ」

と葉子はいった。勇は首をすくめた。

## B

三田と入れ違いに勇は風呂に入った。熱い湯に全身をひたしてやっと人心地がついた。三田の車が庭に突っ込んできたときは、そのまま轢き殺されるのではないかという恐怖にとらわれた。冗談じゃない。

葉子が夫に小便を浴びせたのは、風呂に行かせてそのすきに勇を助けだすつもりだったのだろうが、全く派手なことをする女だと感心する前にあきれた。

炊事洗濯掃除のきらいな葉子を承知で妻にした三田も変っていると思うが、葉子は妻というタイプではなく、二号か情婦と呼んだ方

がぴったりする。愛玩用にはかわりはない。

部屋に戻って一服すると、勇はそわそわと落ち着きがなくなった。隣家の雨戸は全部閉められている。三田夫妻の戯れがもう始まっているかもしれない。

そう思っただけで、胸の鼓動がどきどきしてくるのである。心臓が高なって、坐っていても心は宙に浮いていた。

雨戸の節穴から覗いてもいいわよ、という葉子の声が勇をけしかける。誰にも窃視願望はある。本能とっていい。

タバコをもみ消すと、勇は足音を忍ばせて隣家の垣根を越えた。この境界線は有っても無いのと同然であった。

三田の背中が見えた。お膳の上にお銚子とビールが並んでいる。酒の肴と並んで、片足がお膳の上に乗っている。葉子の足らしい。三田の影になって葉子の姿は見えない。どうやら、葉子は布団に寝たまま、片足だけお膳にのっけているらしかった。

三田の箸が赤貝を摘み、なにかいっているらしい。葉子の、笑い声がした。このスケベおやじ。三田はその赤貝を葉子の片足の上のほうにおろし、それから、さもうまそうに口に運んだ。

節穴を変えたが、三田が何をしているのかよくわからない。ただ、タコであれ、マグロであれ、三田の箸は葉子の片足の上のほうと口をしつっこく往復した。

「もういいだろう。くすぐったいと思ったらありやしない」

「そんなにおこることはないだろう」

「気持が悪いから、ふいてよ」

かなり運はき葉な葉子の声がして、三田が身体をこごめると、布団に寝ている葉子の顔が勇の眼に飛び込んできた。

その瞬間、視線が合った。

はっとして勇は節穴から眼を離れたが、葉子の眼は決して怒っているようには思えなかった。勇はおそろおそろまた節穴に眼をつけた。

葉子の足元のほうに見える三田の頭が、盛んに動いている。葉子は勇のほうをじっと見つめていた。再び視線があっても、葉子は笑っていた。

やにわに葉子が身軽にはね、葉子のまっ白な太腿が三田の首をはさんだ。

「ほら、このほうがいいだろう」

葉子のふくよかな太腿は三田の首を締めつけ、交錯した足が背中に垂れて、五本の足の



指が内側に曲がっていた。

三田は銚子をとりあげた。

「あたいは盃じゃないよ」

葉子は下卑た口調で三田にいい、そういいながらますます強く太腿で三田の首を締め、

三田は、ぜいぜい、のどを鳴らした。

ようやく葉子が、三田から離れて立ち上った。緋の長襦袢が勇を恨ませる。

前をはだけたまま、だらしない恰好で葉子は廊下に出ると、勇がやもりのようにへばりついている雨戸の前で立ち止まった。

勇がそこに居ると知って立ち止まったのはわざと勇に見せつけるためなのかどうかはわからない。

「さあ、オシッコでもしてこよう」

勇に聞こえるようにいい、葉子は便所のほうに歩いていった。

勇が汲取り口を開けたのは、便所の電気がついたあとだった。葉子がいつものようにしていれば、下は暗くてわからないはずであった。が、暗くなかったのである。葉子は便所の中で立っていた。勇が覗くのを待っていたのである。

「手がふるえていたでしょう。ごとごと音がしたわよ」

上から見下ろされては覗くにも覗けない。

廊下のひとりごとは、勇をからかうつもりでいったのかもしれない。

「顔を見せてよ、勇さん」

勇は仕方なく汲取り口から少し顔をだした。おかしいことだが、便所という印象からくる不潔感は消えていた。すべてが無臭だった。

あるといえば、それは葉子の匂いである。

「これから面白くなるから、まだ帰っちゃだめよ」

「御主人にみつかりはしませんか」

「大丈夫よ、わたしに夢中で、それどころじゃないわ」

「なんだか、御主人が憎らしくなった」

「あら、嫉妬しているの」

葉子は長襦袢の裾をからげた。

「ひっかけてあげようか」

下が暗くなった。

葉子は勇の顔をめがけたのに違いない。

勇が雨戸の節穴にもどったとき、長襦袢の裾をからげたまま、お膳に腰掛けた葉子が、前に立たせた三田のゆかたを脱がせているところであった。

そして三田を後手に縛り、細い鎖を持ち出して目茶苦茶に三田の上半身に巻きつけた。

上半身緊縛の三田を立たせたまま、葉子がニンマリと笑った。

「トルコのサービスって、どうやるの」

「どうやるって、おまえ」

そのあとは声にならなかった。

見ているほうがおかしくなった。勇の全身は慄えていた。雨戸を支える手も、立っている脚も、音をたてて慄えが止まらない。これでは覗いているのがわかってしまう。

勇は節穴から眼をそらし、空を仰いで首を振った。頭が、かっかっとしてきて、思考力が無くなってきたようであった。

気になって、また雨戸にへばりついた。こうなれば終るまで覗くつもりであった。

葉子は、三田の腰を繃帯でぐるぐる巻いていた。その意味がやっとのみこめたのは、繃帯の目的がなにであるかに気がついたからであった。

白い繃帯は、丁寧に、きつく包んで、まるで添え木したようである。

そして、こともあろうに、葉子はメロンをぶら下げたのであった。

「そのくらい強ければいいわ。弱い男って、きらい」

かなり重いらしく、三田は葉子の言葉など



耳に入らないようであった。

「顔を前へおだし」

「――」

「顔をだせ」

三田の耳を引っ張り上体を屈折させると、お膳に立て膝をしたままで、葉子は口紅で三田の顔にいたずら書きを始めたのである。

――ブタ

「おまえはブタだ」

「――」

「返事をしないか、ブタ野郎」

「そうです、葉子」

「葉子さまとおいしい」

「はい、葉子さま」

「ブタは排泄物をたべるんだぞ。おまえにはあたいのをたべさせてやるから有難く思え」

「はい、葉子さま」

――イヌ、と額に書いた。

「おまえはイヌだ。見境いなしにベタベタしていたいスケベジイだから……」

――スケベジイ

と葉子の口紅は三田の頬に書きなぐった。

「……スケベだから、毎日あたいにひつついていたいだろう」

「はい、葉子さま」

「そのとおりです、とはっきり、おいしい」

「はい。そのとおり、間違い御座居ません」

勇は思わず吹きだしそうになった。ああいう遊びもあるものかと、三田か葉子かどちらが考えたのか知らないが、あきれながら感心した。

「まったくおまえはヘンタイだよ」

葉子は憎々し気に、三田の眉間から鼻に、

――ヘンタイ

と乱暴に書きなぐった。

「ヘンタイなんだから、煮て食おうと焼いて食おうと、あたいの勝手だからね」

「はい。葉子さまになら殺されてもかまいません」

三田の顔に落書きをすると、葉子はメンス用のネットのパンティを三田の頭からすっぽりかぶせ、

「女王さまに踊りをお見せしろ」

と三田の尻を蹴飛ばした。

三田はメロンをぶら下げたまま、よたよたと踊り始めた。

「馬鹿、音楽はどうした、音楽は」

三田の口から、聞き覚えのある民謡が流れだした。

「いいぞ、いいぞ。もっと尻をふれ」

ビールを飲みながら、葉子は盛んにはやしたてた。

「もっと腰を前に突きだせ」

ちらちらと視線を雨戸の勇のほうにやり、ビールの空瓶を握ると、さかんに何かをしたらしいが、勇からは見えなかった。

そのビールの空瓶が、太いソーセージに変わり、そのソーセージを三田の口にほうばらせた。たりした。

「ほら、もっと踊れ」

コップでビールを三田の顔に浴びせ、長襦袢を脱ぎ捨てた葉子は、お膳を台にして、三田に肩車した。

「歩け、ヘンタイ野郎」

葉子を肩車した三田は、今にもくずれそうになりながら、メロンをぶらぶらさせて、部屋中を、のろのろと歩いた。

## C

翌日、勇が眼をさましたのは昼近かった。雨戸にへばりついていいるのも、大変な労力と忍耐を必要とするものである事をいやというほど知らされた。肩車はえんえんと続き、葉子は、わざと勇が覗いている雨戸の前に近づいて節穴のあたりを足で蹴飛ばしたりしたの



である。

鎖で縛られ、メロンを吊るされ、重い葉子を肩車にして歩くことは、いくら三田の好みとはいえ、寝床に入る前にグロッキーになっ  
てしまうと思われた。

いや、夫婦生活そのものより、こういった奇想天外な遊びが、三田夫妻にとってはSEXなのかもしれない。

この遊びは、はっきりした終りがないように思えた。強いていえば、疲労困憊してぶっ倒れたときが終りなのだろう。

事実、三田は葉子を肩車したまま、布団によろけて倒れ、軀をかき始めた。

腰に巻かれた繃帯とメロンはとったが、葉子はあとはそのままにして、縛ったままの足を足台にして裸のまま寝てしまった。かなり酔っているようであった。

頭痛がするのは、神経を一点に集中したせいか、寝不足のせいか、葉子に痛めつけられたせいか、いろいろ原因はあるだろう。

起き上がると習慣的に窓から隣家を見た。

三田の車はなく、軒下に葉子のものらしい下着が乾してあった。食事の仕度と洗濯と掃除をすませ、三田は日課の通り出掛けていったらしかった。全くタフな男である。

雨戸は一枚だけ開けられ部屋は暗かった。

葉子が寝ているのが、障子にはめられたガラス越しに見えた。勇は忍び足で葉子に近づいた。障子を開ける気配にも葉子は気がつかず軽い寝息を立てている。

勇は、葉子の頭のほうにまわり、しばらく葉子の寝顔を見下ろしていた。起きぬけの顔は見られたものでなく、化粧ですっかり化けてしまう女が多いが、葉子の素顔はそれほどみにくくはなかった。

口許は小さく整って、唇はむしろ薄いほうだが、唇が性的快美感をあらわすものならば葉子は、最高の女ではないかと思えるのである。

掛布団から、まろやかな、すべすべした裸の肩が覗いていたが、葉子は全裸で寝たままなのかもしれない。

衝動的に勇は葉子に接吻しようとして顔を近づけたが、葉子の目蓋が動いたような気配を感じて、はっとして顔を持ち上げた。が、葉子は別に眼をさました風でもなかった。

一度思いとどまると、二度と接吻しにくくなる。勇は葉子の足の方にまわり、おそろおそろ布団を持ち上げてみた。

やはり、葉子は何も着ていなかった。

勇は、ごくりと生つばをのんだ。我ながらおかしいほど手が震えている。

不意に葉子が足を引き、片膝立てたので勇はびっくりしたが、葉子の寝息を聞いて安心した。昨夜の疲れが死んだように眠らせてしまったものと思われた。

むちむちと固く緊まった太腿に、勇の心臓は破裂してしまいそうなほど早鐘を打つのである。

片膝立てたのが倒れ、眠っている葉子が勇をからかっているみたいで、勇は「畜生」と心の中で叫んだ。

叫んだが、それから先の勇気が、なかなか湧いてこなかった。

「重たいなあ」

いきなり、二つ折りされた掛布団が飛ばされ、何一つ着ていない葉子が、横になったまま、濡れ濡れとした眼を光らせて勇を見つめていた。

「ぐずねえ、意外に」

「知っていたのですか」

「障子を開けようか開けまいか、ぐずぐずしていたときから知っていたわ」

葉子のほうが、何枚もうわ手であった。

葉子の全身が暖かそうに艶めいて、しなし



なした腕が今にもからみつきそうであった。  
「抱きたかったら、さっさと抱けばいいですよ」

そうまでいわれれば遠慮することはない。  
勇は待ち構えている葉子におどりかかった。  
と、くると葉子が逃げた。

「待って」

「今更、何を……」

「違うわよ。わたし、さっき夫をやっつけたばかりなの。それでもいいの」

「そんな……」

勇の返事は否定とも肯定とも、とれた。

朝になって葉子は三田に起こされた。鎖をとかなければ便所に行くにも不自由だし、朝食の仕度も出来ない。

鎖をとくまえに、葉子は三田に馬乗りになった。まさに女上位である。

「あっ、葉子。これから仕事だ。今朝だけはかんべんしてくれ」

「フフ、だめよ。浮気封じなんだから」

「葉子がいるのに、浮気なんかするものか」  
「そうかしら。外に一步出たら、何をしたいかわからない」

昨夜から被せっぱなしの黒いネットのパンティを三田の顔から脱がせて、べったり坐っ

た。

「あたいのことを忘れるんじゃないよ」

後手に縛られていては葉子のいいなりになるより仕方がない。ぎっちりと上半身に巻きついた鎖が、三田の呻くたびにぎしぎしと音を立てた。

「どうする」

葉子は、勇を促した。

「どうするって、このままじゃ……」

「このままじゃ、どうしたの」

「そういじめないで下さい」

「それなら早く脱ぎなさいよ。裸になるのが先よ」

勇がセーターを頭から脱ごうとしたときであった。交錯した腕に手錠がからまったのである。

あっという間の出来事で、不意をくらった勇は、葉子のこの襲撃をさけることが出来なかった。葉子は手錠を布団の下にでもかくしておいたものらしい。

セーターは半分脱ぎかけで顔をおおってしまっていた。脱ぐにも脱げない状態にしておいて、葉子は三田を縛ってあった鎖で、セーターの上から勇の顔をぐるぐる巻きにしたのである。

「こうでもしないと、燃えないのよ」

布団に勇を転がし、葉子は笑った。

「だらしがない恰好」

あまりサマにならない勇の姿とともに、その意気込みも葉子の不意打ちに、すっかり元気を失ったようであった。

「でも、可愛いわね」

「……」

「あらあら」

セーターで眼かくしされて、勇は葉子が何をしているのか、触感だけしかわからない。

「三田と、どっちが強いかしらねえ」

葉子に罵られていたうちに、勇はもうどうされてもいいと思い始めた。

「ためしてみようか」

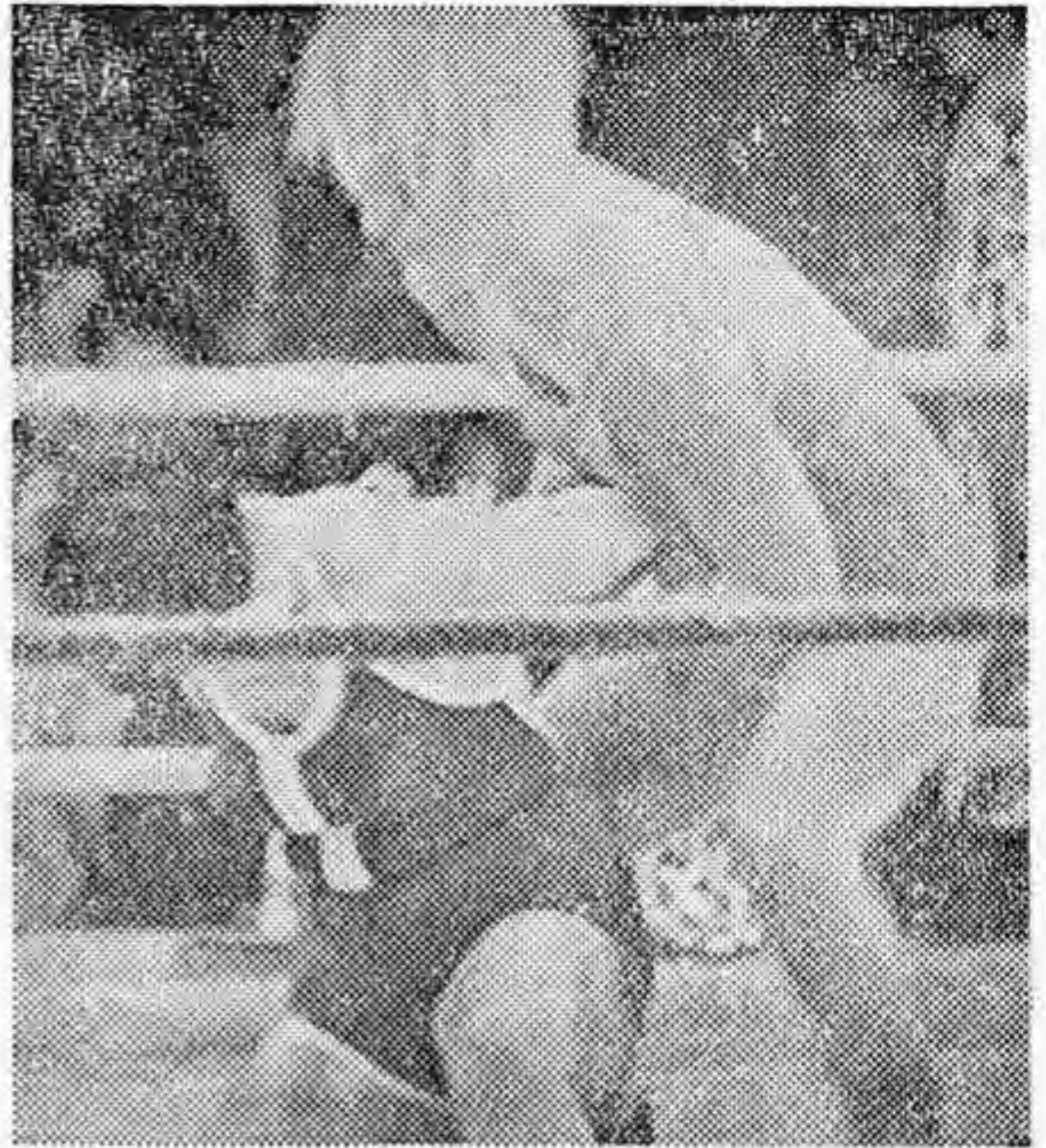
という葉子の声を、勇はおぼろげに聞いたが、それがどういう意味かわからなかった。

やがて、鎖でぐるぐる巻きに縛られたままの勇に馬乗りになった葉子は、じわじわと勇を締め上げ失神させていった。

一枚だけあいていた雨戸から、一人の男が顔を覗かせ、驚いて顔を引っ込めたのを、葉子も勇も気がつかない。

(カット・春川ナミオ)





## 女子プロレスの魅力に酔う

# ロメロ・スペシャル

山口 広

むさぼり読み、また、この願望を満たすどころか、失望の方が大きい事を知りながらピンク映画を見る。この感情、サディズム或はそれを裏返したマゾヒズムを、満足させる行為を実行したのではない私は、小説を読み、写真を見ながら、登場人物に自分を置きかえて、感情を休めているのだろう。

### 一、女子プロレスのSM

美しい若い女性を捕え、緊縛し、羞かしめそして、意に従がわせたいと云う願望が、私の秘められた内側にある。この、ひそやかな願望は、この実社会の生活では勿論実現はし得ないし、たとえ現実から隔絶された離れ小島、或は人里離れた山中に、そのような美女と二人きりで置かれたとしても、その願望を実行できる自信はない。だが、私の心の片隅に根強く生きている願望を満たすために毎月の発売日には、いそいそと「奇ク」を求めて

自分を置きかえて、感情を休めているのだろう。

このひそやかな私の願望を満たしてくれるものが案外に手近にあった。それは「エロである」「いや、スポーツだ」と論議を巻き起こしながらも続けられ、テレビで放映されている「女子プロレス」である。

おそらく全国でテレビネットワークによって見ることができであろうが、ある人はスポーツショーとして見ているであろうし、他の人は一種のエロチックショーとして見ているであろうが、私はこの「女子プロレス」を

るであろうが、私はこの「女子プロレス」を一種のSMプレイとして、この上もない見ものであると楽しんでいるのだ。

三、四年前の本誌の分譲品には限定グラビヤ、「美8」（女斗緊縛競艶場面写真集）があった。この中には山原清子、鈴木晃子、大塚啓子の三人が、或は水着で、禪姿で、闘い緊縛し、責める場面が百ポーズもあった。

男子のレスラーと同じように鍛えぬかれた女子レスラーが、時には反則技をまじえながら闘う「女子プロレス」には、当然のことながら、縄も、猿ぐつわもない。水着姿で、素手と素手でたたかいながら相手の抵抗をうばって、最後にフォールしたり、ギブアップさせたりするプレーは、私にこの上もない満足を与えてくれる。

男子のプロレスと同じく、女子プロレスも投げ技、つかみ技などの立ち技や、パンチや



キック、力道山ばりの空手チョップなどの反則すれすれの技があるが、やはり女子プロレスの妙味は寝技であろう。腕の逆を取られ、或は脚を固められてマットに這いつくばり、取られた腕や足をふりほどこうと必死にもがく美女の柔軟な姿態は、たしかに「エロ」を感じさせることがある。それ以上に急所を押えられて抵抗することができず悲鳴をあげ、歯をくいしばりながら反撃のチャンスをうかがうレスラーの姿に、私は「サド」を、時には「マゾ」を感じ、背骨を打たれたようなショックを受ける。

## 二、ロメロ・スペシャル

女子プロレスは、鍛え抜かれた力と女性特有の柔軟な体から、男子のプロレスと同様の高度の技が見られる。ハンマー投げ、岩石落とし、キーロック（腕固め）などは、どのレスラーも自由にこなす。それどころか4の字固め、回転えび固め、コブラツイストなどの高度の技も飛び出す。

レスラーにはそれぞれ得意な技があり、観る方にも好みがある。それだけでは決め技とはならないが、じわじわと相手のスタミナを奪う技の巧妙なレスラーもある。そのような技を見て楽しむ玄人筋の人もある。その反面

一発きまればそれだけで相手の死命を制してフォール、或はギブアップ確実と云う大技はすべての人に受けるであろう。

一発必勝の大技は幾つかあるが、現在は女子プロレスで時折り見られる、「ロメロ・スペシャル」が飛び出すと、幾分マゾの混ったサディストの面を、心に深くしのばせている私の心臓は大きく鼓動し、背骨がじーんとなるような気分を感じる。

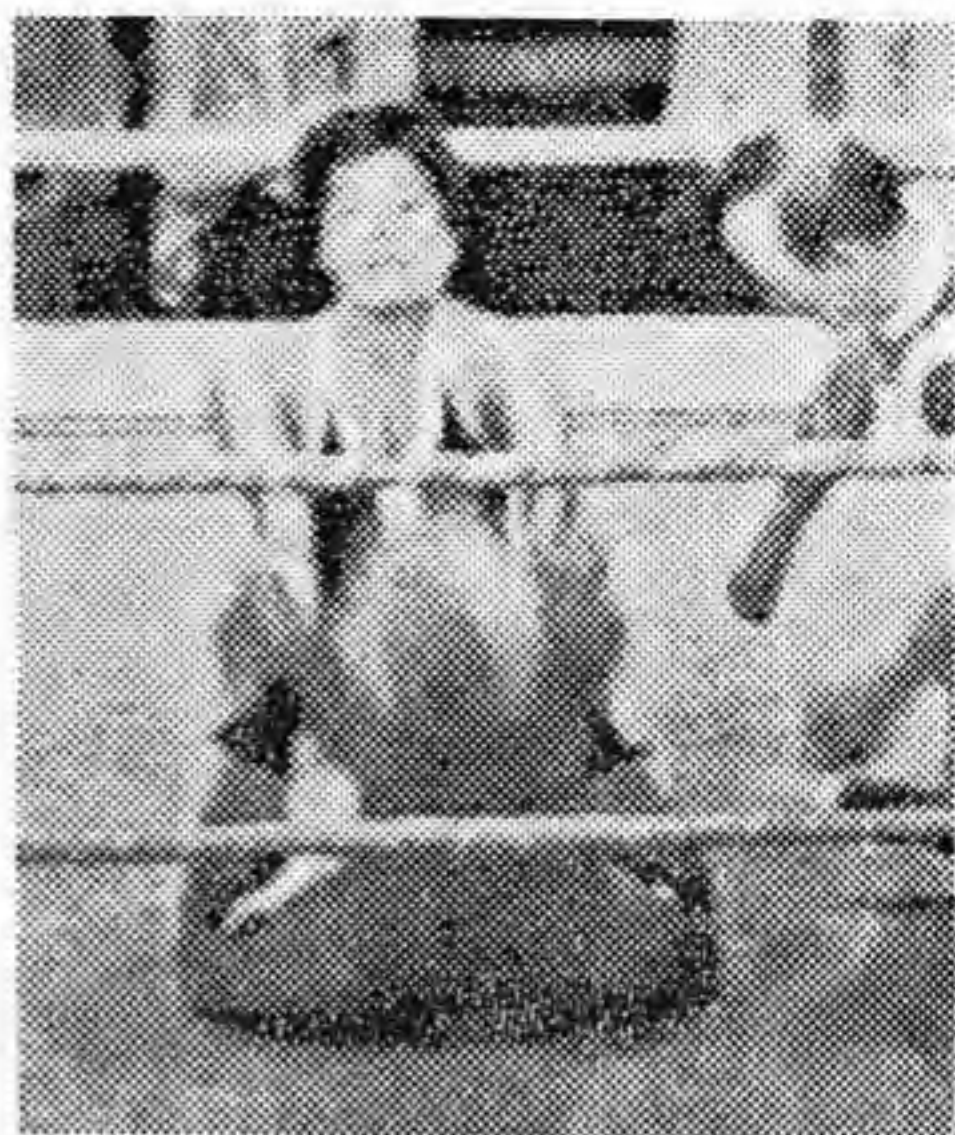
メキシコのレスラー（男子）ラウル・ロメロが創始したこの極め技、ロメロ・スペシャル



ルは、「ゆりかご」とか「吊り天井」とか云われるが、背骨を攻める大技で、かかったら逃れることは絶対に不可能で、数秒の間にギブアップしなければ再起不能になりかねないと云われる。

腹這いになった相手の背後に立ち、両腕を背に逆をとる。ここまでは波乗り攻めと同じであるが、両腕で相手を弓なりに引上げながら腹這いになった相手の両膝の裏をしっかりと踏みつける。膝裏を踏みつけられた痛みに思わず折り曲げ、無意識のうちに攻める相手の足を外そうとして足首が上になった相手の脛にからみつく。攻める方は、時に相手の足首が脛にからなければ腕を離して、足首を脛にからみつかせることもある。こうして四肢を後に折り曲げられて、マットに這いつくばる相手を、自分から体を後に倒して引き起こし、仰向けにマットに背をつけて手と足だけで相手の手足を支えて宙に差し上げる。四肢を後にとられて空中に仰向けに支えられた相手は、勿論まったく抵抗できず、逃れることは絶対不可能で、それどころか、折られた膝を支点にして背骨を激しく痛めつけら





れて、ギブアップ（降参）してしまう。

弱々しい声でギブアップしたレスラーは、背中をレフエリーに支えられてやっと解放されるが、その後はマットに這いつくばったまま、自分で起き上がることもできない。セコンドに肩をかしてもらってやっとのことで、立上り、勝利に喜ぶ相手を見もしないでリングから引上げる。

縄もロープもないが、このロメロ・スペシャルは、レスラーの自由を完全に奪って逆えび縛りに捕えたような感じがする。このシーンがあれば、これだけで私の希む女子プロレスの醍醐味はつきると云えるのだ。S気味の人もMの傾向の強い人もこのシーンには満足

が得られると思う。

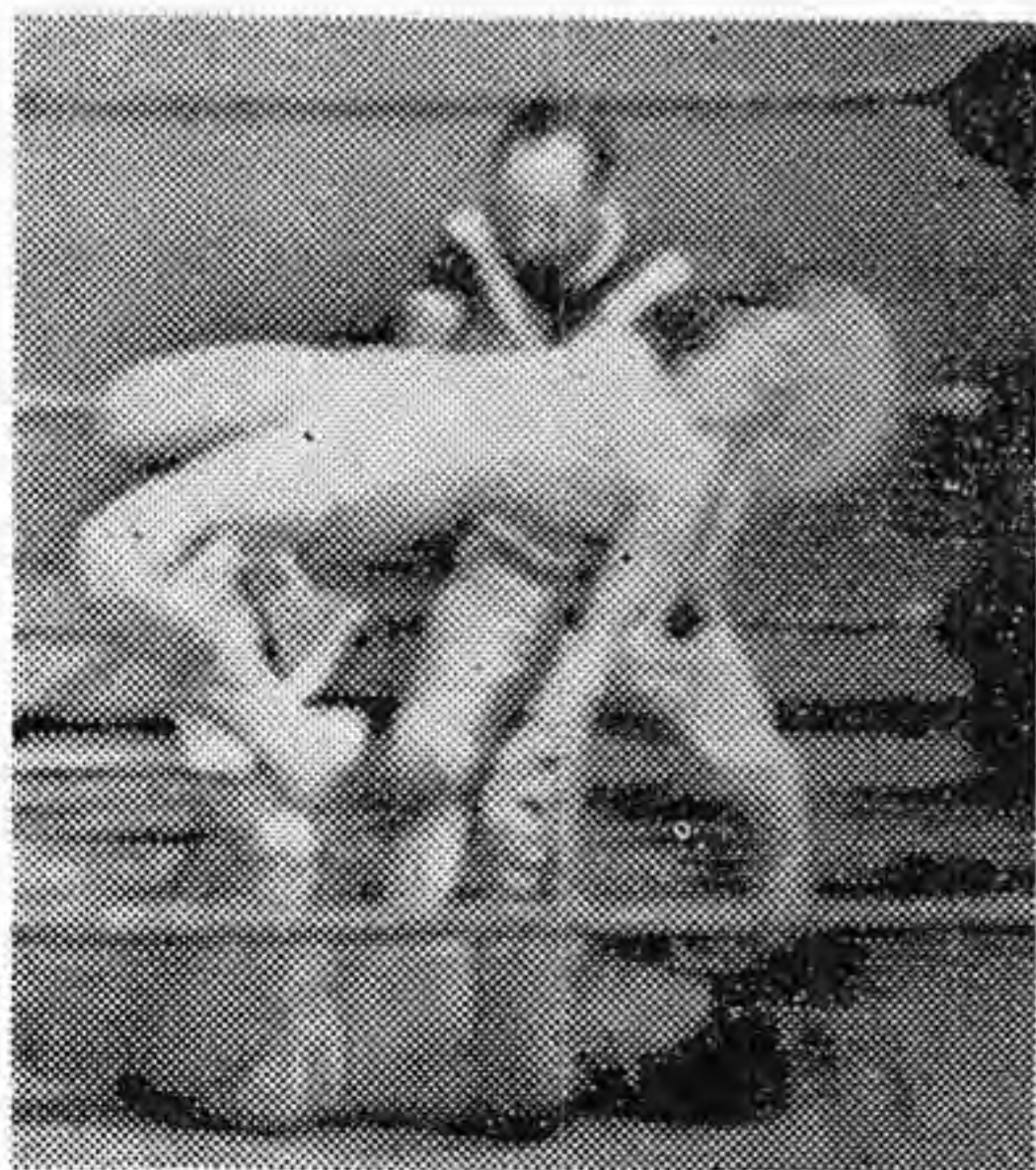
### 三、ロメロの女王

男子プロレスには、殆ど見るこのできないこの必殺技、ロメロスペシャルは、女子プロレスで、時折り見ることが出来る。しかし何しろ高度の技であるので、使いこなせるレスラーは極めて少ない。

この技を完全にマスターしているのは、日本女子プロレス協会のIWWAチャンピオン「東洋の魔女」と云われる小畑千代選手である。テレビで、殆ど毎週、彼女のファイトが放映されるので、ファンは全国に広がっているであろう。私も熱烈なファンの一人で、特に彼女がフィニッシュをロメロスペシャルで飾ったときは、テレビの前で思わず声が出てしまう。

昨年、IWWA（国際女子プロレス協会）の世界チャンピオン、ファビュラス・ムーラの残していったIWWA世界チャンピオンを、「メキシコの女王」リタ・マルズと争って最後にこの得意技、必殺のロメロスペシャルによって獲得して以来、小畑千代はチャンピオンベルトを保持している。

次々にベルトを狙って来日するアメリカのレスラー達を相手に、奮闘する小畑は強



剛を片っ端から撃破してきた。「メキシコの女王」リタ・マルズ。「カリフォルニア州チャンピオン」タティ・オハラ。「ブロンズの女戦士」コーラ・コンブス「謎の宇宙仮面」アストロ・エティマスク「西部の女殺し屋」ベティ・フォスター。「美貌の女殺し屋」ジーンシユレル。「ブロンズの弾丸」シャロン・リー。「テネシーの女豹」シルビア・ハックニーなど、一度はエティマスクの「謀略」によって奪われたベルトも、二日後に取返し、これらの「女殺し屋」の殆どを、得意のロメロ・スペシャルで空中高く吊り上げた小畑千代は、まさに「ロメロの女王」とたた



えることができるだろう。

私は小畑千代が健闘し、そのロメロに磨きをかけることを祈っている。

#### 四、観戦記

I W W A世界タイトルマッチ、(一月三十日) 挑戦者、タティ・オハラ。

オハラのセコンド、リタ・マルズとフラインドの助太刀で、飛び蹴り(ドロップ・キック)二発でマットに沈み、一本目を失った小畑は、全く同じ技、ドロップキック二発でオハラを逆に体固めにきめてお返しをしてタイにこぎつけた。相手と全く同じ技でフオール

をうばうとは、さすがに小畑は強いですよ」解説者も感心する。

三本目、若いオハラの、ウェイトを乗せたキックの連発でピンチに落ちた小畑は、一瞬の隙を見つけて、オハラの足をとってマットに倒した。仰向けにコーナーの近くに倒れたオハラの両足を脇にかいこんだ小畑。足を脇に抱えこんでオハラの体を裏返して背にまたがり、逆えび攻め。と思った私は、あっと目を見はった。逆えびにゆかずに、小畑は両膝の上にオハラの尻を乗せて自分から体を倒して頭ごしにオハラの体を抛り投げた。水平投げとか、シーソー投げと云われる強烈な投げ技である。五メートルも飛ばされ、水平にマットに胸と腹を打ちつけて、立上れないオハラの体を裏返して、もう一発、水平投げ。小畑は、グロッキーになってマットに這いつくばったオハラの背後に走りよって、両膝をしっかりと踏みつける。オハラの膝が折れた。足首が小畑の脛にからむ。小畑は、オハラの両腕をとったまま、肘でオハラの足首を脛にしっかりと、からみつかせる。準備完了。

小畑は体を後に倒す。両腕を引上げられて弓なりにそったオハラの体がぐぐーっと両膝を支点にして起きる。小畑の背がマットに着く。オハラの体は四肢を背後にとらえられたまま空中高く吊り上ってしまふ。金髪をばらばらにして悶えるオハラ。レフェリーがかけよる。「ギブアップ」

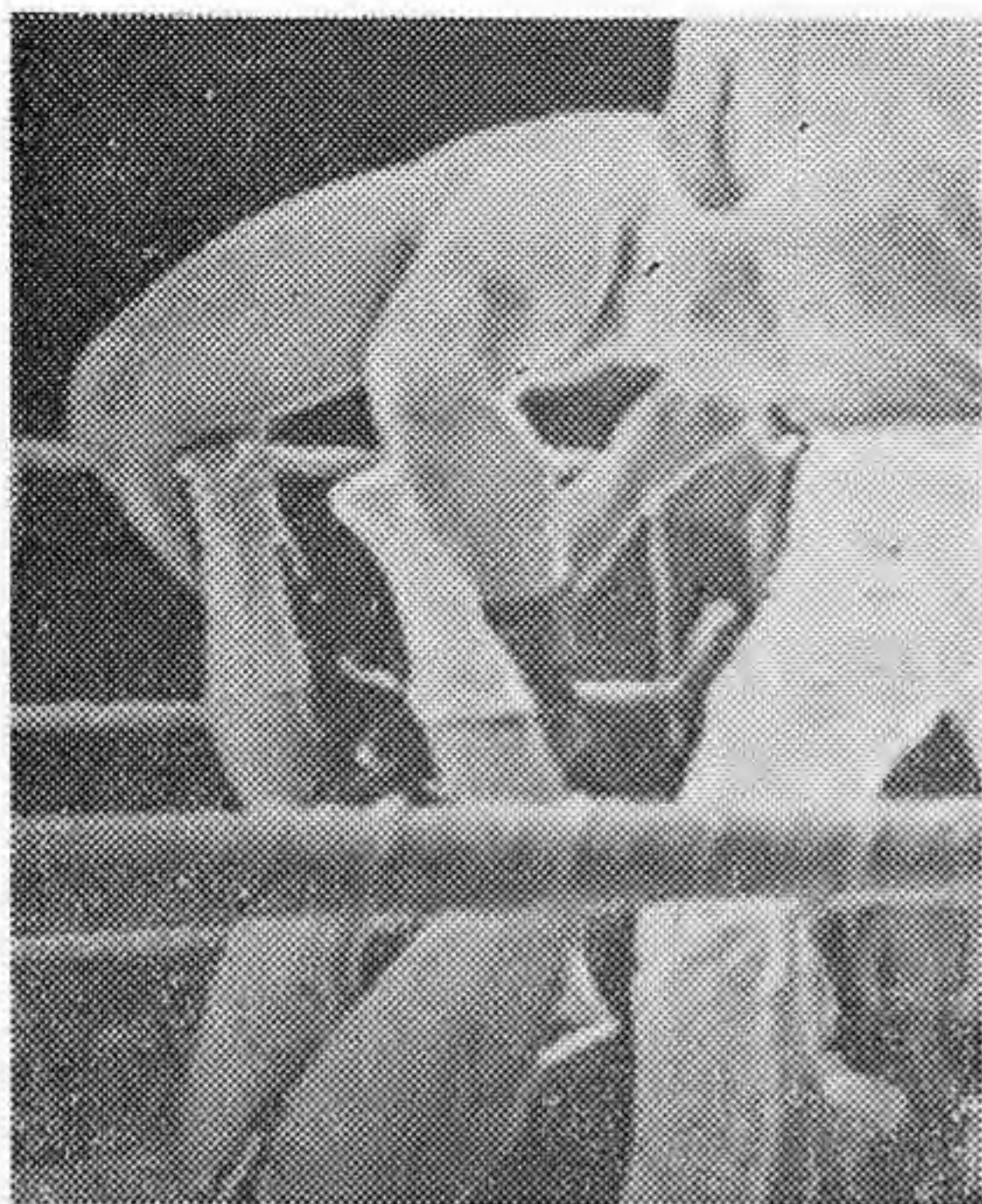
おろされたオハラはマットに長々と伸びてしまふ。セコンドのマルズとフラインドがそっとオハラをかかえ起こす。高らかに右手をレフェリーにあげられた小畑。セコンドにかえられてマットを降りるオハラ。タイトル防衛なる。

このように小畑がロメロ・スペシャルでとどめを刺した試合は少なくない。

縄もロープも使わないで、しかも相手の四肢の自由を全く奪うこのロメロ・スペシャルこそは、スポーツショーとして女子プロレスを見る人だけでなく、SMファンの私たちにも、この上ない贈り物であると思う。

テレビ画面を写した写真をそえて、「ロメロ讃歌」をお送りした次第。

(終り)





## 蛋 民 舟

話は多少前後するが、新津はイーラの両親が一夜にしてすっかり変ってしまったのに手を焼いていた。九分九厘まで協力してもらえぬものと信じていたのに、彼等は貝のように口を閉ざし心を開かなくなってしまったのである。新津にはその理由がわからなかった。それより何より、も早や「恋」といった方が適切になってきている彼の慕情がイーラの身辺に関する不安感と相まって激しく動揺するのを、どうすることも出来ない。

イライラしているところへ、山本百合子捜索の密命が出てしまった。舌打ちする思いだったが、大臣より偉い山本幹事長令嬢についての極秘調査指令である。拒むことは不可能と云ってよい。後髪をひかれるような気持で彼はホンコンへ出発した。

運命の糸は、ここでも彼を有明へと結びつけようとする。彼は未だ一連の美女失踪事件と有明とを結びつけることを知らない。しかし、パリからテル・アビブ、テヘラン、次々と数奇な事件に巻き込まれて行くにつれて、何か途方もなく大きな組織があって、コンピューターのような正確さで美女を奪い去って



第十六回

前号まで謎に包まれた有明は世界の各地から手段をえらばず数百に及ぶ美女を誘拐している。その行方は不明だが、原潜ネプチューン号がその美女達をいずれかへ運び去っているらしい。その魔手はいよいよ日本に到達した。すなわち、有名な政治家、山本万蔵の一人娘百合子は巧妙な手口で有明の手に落ちた。一方、インド人との混血娘イーラは、麻薬密輸組織に囚えられ、ともすると仲間を裏切るうとする両親を脅迫する材料にされていた。国際秘密警察の新津は有明の依頼で、薄倖の美女林美玉を東京にいる蔡樹理の手に送り届けた。



いることを感じとっていた。一体、彼女達は殺されてしまったのか、それとも、どこかに人知れず監禁されているのだろうか。ホンコンでは再び有明と会おうと心に決めていた。

羽田を発ったとき、隣に坐ったのはメキシコ人らしい青年だった。やたらにおしゃべりで、忽ち新津を親友のように見立てはじめたのか、問わず語りに自分の名前がホセ・アマビスカというギターひきで、ホンコンでかせるのだといったことを話しかけた。「アマビスカ」、どこかで聞いたことのあるような名前だと考えて、たちまち新津は全身がカッカッしてくるような昂奮を覚えた。

パリでピエール捜査官から提示されたリストのうちに、マーサ・アマビスカという歌姫の名があったのを思い出したからである。彼女は交通事故で死亡したことになる。それは焼爛した死体により確認されていた。しかし、ピエールはその死体が本当のマーサだったろうかと疑っていたのである。ことによったら、他人の死体とスリ替えられたという可能性もあった。それで、マーサ・アマビスカは「要注意者」のリストに加えられ、新津謙介の記憶に留まっていたというわけ。メキシコ人にアマビスカという姓は少なく

ない筈、というので、さりげなく、

「奥さんは？」

とたずねると、これも又大げさな身振りで「オオ、オオ私ほど不幸な者はありません。愛し愛された妻は、交通事故で死んでしまったんです」

思わず身を乗り出しそうになるのを辛うじておさえた新津は、さりげなく

「ホウ、それはお気の毒ですね。で、どちらで事故を起こされたのですか」

「サンフランシスコなんです。トレーシーというところのハイウエーで、立体交叉の橋ゲタにぶつかっちゃったんですよ。何しろ車が燃えちゃったんで逃げだすひまもなかったんですよ。可哀そうなヤツですよ」

「もちろん、あなたは死体をご確認なさったんでしょうね」

「それはひどいものでした。焼けただれて、オオ、あんな美貌が焼きリングみたいになっていました」

「では、お顔では見分けがつかなかったでしょうに」

「そうですとも。だが私にはスグ彼女とわかりました。指に結婚のときプレゼントしたダイヤのリングをはめていましたから。それは

由緒のあるダイヤで、私にも一目でわかるような特別なカットがしてありました。そのダイヤも焼けてしまって、台だけが残っていたようなわけですがね」

「そのほか何か奥様とわかるような点がありましたか」

思わず職業意識が出てきて畳みかけて質問してしまう。さすがに奇妙に思ったのか

「あなたは妙なことに興味をお持ちですね。

どうして私が自分の愛妻のなきがらを見間違えうとおっしゃるのですか」

と、露骨に不快そうな顔つきになったのでこれはいけないと話題を変えることにする。

「アマビスカさん。つまらぬ質問をして失礼したことをお詫びします」

「どういたしまして。おかげで又、私の中に愛妻のおもかげが蘇ってきました」

と、大げさに涙をこぼすのである。

「ところでホンコンでは、どんなお仕事をなさるんですか」

「わかりません。ただ、大変なスポンサーがついたんです。半年分の契約金を前払いで、切符までつけて送ってくれたんですから」

「ホウ、それは珍しいことですね。どんな人なんですか」



「なんでも興業界の蔭のボスで、蔡樹理という人です」

「蔡樹理？」

おうむ返しに繰返す。発音が違っていたかも知れないと確認したのだ。

「そうです」

何も知らない相手は平気なものである。しかし新津は何か見えないところにあった糸が次第につながって行くような思いだった。

そんなわけで、東京、ホンコン間の三時間は、またたく間に過ぎて、飛行機は海に突き出した啓徳飛行場に迂り込んだ。

その頃にはホセの機嫌も直って、自分の公演には必ず来てくれるようにと、新津の滞在するホテル名をノートしたりした。新津は日本の商社員という触れ込みだった。

その二人を見送るようにして、同じフライトで着いた一人の若い男が足早やにタクシーに乗込んだ。尾行者は交替になる。

一時間とたたないうちに、その男は蔡樹理の邸にいた。

「いよいよ新津君は、危険人物になってきたね」

落ちついた声で隣に坐っている星恵美子に

話しかけたのは、まぎれもなく有明だった。彼は、あのまま、蔡の邸に滞在していたのであろう。

山本百合子に扮してホンコンへ帰った星はもう星恵美子と名乗るわけに行かない。星恵



美子は南支那海で行方不明になっているのだから。青帮の組織をもってすれば、パスポートの偽造などはお茶の子さいさいであった。それどころか本物のパスポートを偽造することだって出来た。星恵美子には帰化人証明がまことしやかに作られ、辛愛蓮という可憐な名前がついていた。

有明がホンコンに留まっている理由は、蔡樹理の要請によるもので、共同して彼等の敵中共系麻薬シンジゲートに周少姐のための復讐を加えることだった。しかし、これは大変な仕事だった。麻薬組織は全世界に網をはっていたし、その実態は殆ど雲を掴むようなものだったからである。しかし、蛇の道は蛇でこちらも青帮という秘密結社である。お互いに地下組織を持っているのだから、どこかで接触するところが出てくる。

種々のデータを総合すると、麻薬シンジゲートの最高ボスが東京に移動していることがほぼ確実になってきた。しかし、これとともそのボスが男であるか女であるか、白人か東洋人かサッパリわからないのである。蔡と有明は、必死にそれを探索していた。

陽気なアマビスカとつれだって新津が訪問



したとき、有明はわざと驚いた風に二人を迎えた。

有明は林美玉を無事、東京へエスコートしてくれたことについて、新津に丁寧に礼をいった。そして、新津の使命が極秘裡に山本百合子の行方を探すことにあるのだと知って、出来るだけ協力すると約束した。

中一日を置いた深夜、グッスリ寝込んでいた新津を揺り起こす者があった。ギョッとして飛び起きてみると、どこから入ってきたのか、まだ十四、五才にしか見えない啞の少年で、持っていた紙きれを見せるのだった。

「山本嬢の行方がわかった。この少年と一緒に来て貰いたい。あなたは見張られているので、今すぐコッソリと抜け出して下さい」

有明が読み終ると少年はスグにその紙切れを呑み込んでしまった。

窓をあけると空はまっ暗だったが、白い壁に黒々と縄梯子が下がっているのが見えた。

少年が先にスルスルと降りると、新津について来いという身振りをした。そして、新津の足が地面に着くや否や何かの仕掛けを動かして鉤を外してしまった。

曲りくねった小路を十五分程歩くと、クリークがあつて小橋の下にかくれるようにして

一艘のサンパンがあつた。少年の指図でその小舟に乗る。いわゆるダルマ船で、長さが三メートル位しかない代りにズングリと幅が広い。啞の少年は敏捷に櫓をとって漕ぎはじめた。舟は小刻みに揺れながら進みはじめた。もう一人の乗客が有明であることは、すぐにわかった。

しばらく行くと川中が広くなってコンクリートの岩壁が船着場のようになっている所に出た。油蔵地として知られる蛋民部落の一つである。似たような小舟がギッシリ詰まっているなかに、少年は上手に舟を押込んで停めた。ものの十分と待たなかったであろう。高層アパートの谷間から、一台のタクシーが出て来て、岩壁の突端に止まった。その中から一人の女性が降り立つ。そして、タクシーが帰るのを見届けてから、ヒラリと側にあつた小舟に乗り移るのが見えた。

「あれだ、追え」

有明が低い声で少年に命令した。

十米程離れて追跡を始める。深夜だというのに、紅青のランタンを灯した小舟の行き来が多いので怪しまれるおそれはなかった。

ソバや清涼飲料水などを売る物売り舟が、先を行く女の舟に近づいて行った。その明り

で櫓をあやつる女性の姿が照らし出された。新津は息をつめた。その服装は山本百合子が家出をするときに着ていた筈のスーツに間違いなかったからである。そのスーツを着て撮した写真を、新津は見えて来ていた。

何も買わないと断られたらしく、物売り舟はやがて離れて行った。山本らしい女性は巧みに舟を進めて行く。

次第に舟の数がまばらになって行った。水上生活者の集団をやや離れたところに、ここだけは、バカに明るい舟だまりがあつた。外部は同じようなダルマ船だが、明け放った船内は色とりどりに飾られ、真中に一組のベッドがしつらえてある。一艘の舟に必ず若い女が一人ずついて、殆どがパジャマ姿で嬌声を放って客を呼んでいる。所謂パンパン舟なのである。うまくお客がつくと、四方のカートンがパラリと落ちて、あとは小波に揺られながら春をひさぐのである。

およそ五十隻もあつたろうか、そうしたパンパン舟の間を縫うようにして山本百合子は進んで行った。あとをつける新津たちは、左右から起こる客引声に悩まされなければならぬ。ホンコンの売春婦の中でも最下等に属するだけに、さすがに物凄いもので、女を買



わないでヒヤカすだけでも結構ゲンナリする程度の場所であった。中国女性の習慣として舳にシヤがんでいても膝を合わせることをしないから、ショートパジャマでは全くと開帳となってしまう。それをど丁寧に指さして口々にガヤガヤとワメキ散らすのだから色気どころの話ではない。

さすがの新津もドギマギして女たちの手を払いのけるのに忙殺されていると、有明の落ちついた声が、

「あそこだ」

といった。ハッとわれに返った新津は、山本百合子らしい女性が、前方のいかがわしい舟の一つに乗り移るのが見えた。あかるい照明の下で、前からその舟で待っていたらしい男の姿が、山本にからみつくのが見えた。しかし、すぐにカーテンがおろされたので見とどけることが出来ない。

「コッソリ漕いで近づいてくれ」

小声で有明が指図をした。少年の漕ぐ、はしけは水音を殺して接舷して行った。

その間、数分を要したろうか。しかし、カーテンのカーテンから、僅かの隙間を通して新津が覗いたその船内の光景はあまりにも残酷なものだった。

ただ見る。狭い船室は全部がベッドといってもよかった。それも「営業用」だから毒々しいばかりのケバケバしさである。その上に着衣を剥がれた山本が両足を宙におどらして倒れていた。左手首Ⅱ左足首、右手首Ⅱ右足首がそれぞれ細紐でククられている。所謂、コサック縛りというやつだ。暴行などにはもってこいの縛り方といえよう。ただ一つ例のトンボ眼鏡だけは奇妙に彼女の身に残された唯一の被覆物といえよう。

黒い男の影が不気味に、この無抵抗な肉体に襲いかかって行こうとしていた。

## 汚 辱

イーラの両親は、はた目でもそれとわかる程ゲッソリとやつれ果てて見えた。

毎夜行われる深夜のテレビ特別番組が、彼等をどれだけ苦しめていたか。裁判の進行によって彼等の供述がいよいよ核心に近づいて行くにつれ、テレビの画面ではイーラは虐め抜かれる度合を増して行った。法廷での一寸した失言が、たちまちイーラを苦しめることになった。ある日の裁判で、ある人物の、それも麻薬シンジケートと関係のありそうに思

えない名前をフト洩らしたことが、忽ち組織を怒らせてしまった。

それ以来、イーラは全裸で暮させられる他に両手の自由も奪われてしまったのである。彼女は高手小手に縛りあげられて、寝る間もそれをほどももらえなくなった。こうなっては犬猫のようにして喰べ、且つ排泄しなければならぬ。テレビの画面はこうした残酷な光景を執拗にとらえて、これでもか、これでもかというように、イーラの両親を脅迫した。彼にとっては、いっそ一思いにイーラが殺されてしまった方があきらめがつくかと思われる程の苦しみとなった。

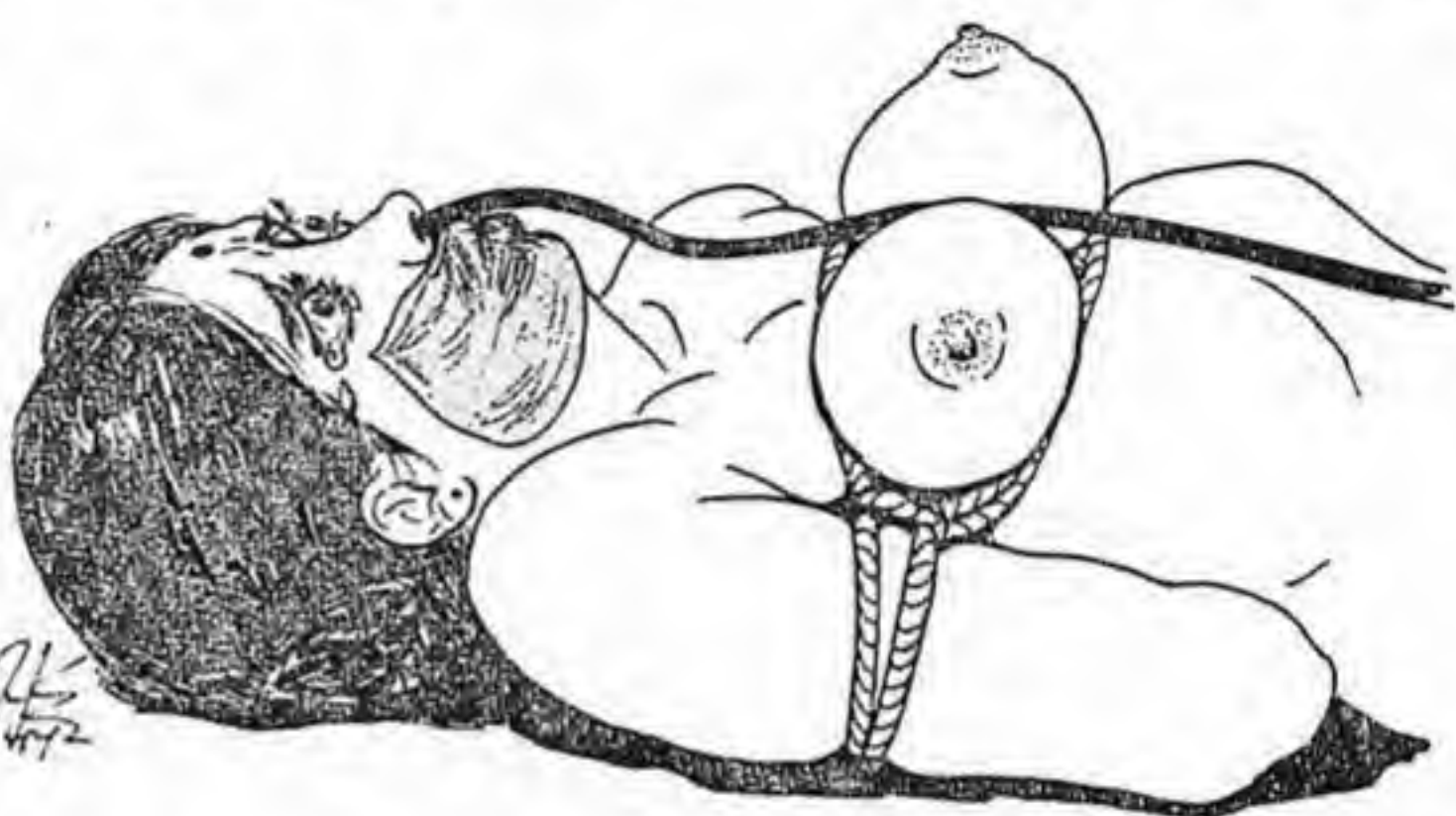
異常な責めが激しく加えられるようになったのはもう一つ理由があるように思われた。というのは、その頃からきまって責め手となつて画面にあらわれる女がいたからである。いいかえれば、この女が出現してからイーラに加えられる拷問は一層強化されたように見えた。いつも覆面しているので顔はわからぬいが、ほっそりした美しい肢体を黒いパンタロンと黒いセーター、つまり黒一色に包んでいた。イーラの両親は知らなかったけれどもイーラにはそれがデリーでの第十五号であることがすぐわかった。限度を知らない残酷さ



は、あの女性登山家達に加えられた数々のはずかしめを見てもあきらかだった。彼女が姿をあらわした日から、イーラは完全に打ちひしがれてしまった。丁度、蛇に魅入られた蛙のように、抵抗する一切を失ってしまったのである。

例の防音装置を施した地下倉庫が今のイーラの居室だった。といっても打ちっぱなしのガランとしたコンクリートの倉庫である。その一隅にライオンでも入れるような檻があった。正確に言えば、その鉄柵子の中こそ、彼女の住み

家というべきかも知れない。毎朝、つんぼの爺さんが洗面器のようなボールに入れた飯を運んでくる。少しばかりの残飯らしいのに、やたら味噌汁がブツかけてあった。残飯だけに肉の切れはしや野菜のカケラが混ざっていたけれど、普段のイーラにはとても喰べられる代物ではなかった。けれども、一日に一回しか、これだけしか与えられない食事では空



腹を如何ともし難かった。しかも、残せば又きびしい懲罰が待っていた。日を重ねるにつれて無感動にそれを口にするようになったのも無理はない。しかも、両手を縛られてからは、獣のように口を突込んで啜るしかない。屈辱の涙がそれに混じる。

この倉庫は、夜になるとスタジオになる。イーラは一人、両親に向かって、はざかしい画像を送らなければならぬ。もっとも、イーラは何も知らされていなかった。もし自分のあさましい姿を、両親が死ぬより怖ろしい思いで見守っていることを知ったら、おそらく気が動転してしまったかも知れない。

その時刻になると、今までまっくらだった倉庫に煌々と照明がつく。

それが合図だった。

条件反射のようにイーラの全身が鳥肌立っ

てくる。責める方法は無数にあった。刺戟に馴らさないように、いつもフレッシュな苦痛を感じさせるように、手をかえ品をかえて加えられる拷問は毎晩ちがっていた。

今夜も室内がギラギラと照らし出された。闇になれた目はそれを受けつけない。まぶしさに細まった視界に、仁王立ちになった十五号が入った。いつものように覆面をして、黒のセーター、黒のパンタロンに身をかためていた。そして蜂の胴のようにウエストを巾の広い黒皮のバンドでしめあげている。

ガチャガチャと音を立てて檻が開かれた。

「出ておいで」

猫なで声がいっそ怖ろしさをつのらせる。低い出入口をイーラは犬のようにいざって這い出さなければならぬ。両手の自由を奪われてから、それが実に困難となった。

「何をぐずぐずしているの」

髪を掴んで引きずり出されてしまう。イーラの口から忽ち悲鳴の第一声がとび出す。

音もなくテレビカメラが近づいてくる。二人の男が二台を使って別々の角度からイーラに焦点を合わせはじめた。

「正座して、よくお聞き」

十五号の黒エナメルハイヒールは、おそ



ろしく高かった。その踵でイーラの細腰を軽く蹴った。電気にかかったようにビクッと慄えたイーラは、あわててザラザラのコンクリート床に膝をそろえて正座する。

「いいかい。おまえの両親さえ、しっかりしていりゃあ、こんな目に会わないで済んだのだ。いけないのは、あいつらなんだよ。あいつらがヘマをするたんびに、おまえに加えられる罰も重くなるんだ。覚悟をおし」

「私は何も知らないんです」

弱々しい声でイーラは、うったえた。毎日同じセリフの繰返しでは、云ったところでどうにもならないとは思ってみても、これしかいうことがないのだ。

「私の父が何をしたかも知りません。若しご迷惑をおかけしたのなら、何としても償います。とにかく一度、父に会わせて下さい、お願いします。そして、一時も早く私をこんなひどい目に会わせないようにして下さい。お願いします、お願いします」

美しい額をコンクリート床にすりつけるばかりにして哀願するのを、十五号は冷たく見下ろすばかりである。そして、

「それじゃあ、チットばかりよいことを教えてやろう。おまえさんは毎晩、両親に会って

んのサ。このテレビは一旦、録画されてからおまえの両親の家の近くにある秘密の家にテープを運び、こっそり埋設された有線を使って真夜中に放映されてるんだ。毎晩、おまえの両親はテレビにしがみついて見てるよ。視聴率百パーセントだね。フフフフフ」

——ひどい！——思わず目の前がぐらくなつて行つた。裸の全身から血がひいて、まっ青になつて行くのがアリアリとわかつた。

絶望のドン底に叩き落とされながら、かえって一つの考えが泛かんだ。彼女は大声でさけんだ。

「お父さま、お母さま。助けて下さい。イーラは何もわるいことをしていないのに、どうしてこんなことになってしまったの」

あとは言葉にならなかつた。慟哭が突きあげてきて、彼女の発声機能を奪ってしまったからである。

はげしく嘆くイーラは、滂沱と流れる涙を拭うことすらできない。

「泣きたいだけ泣くがいい。叫びたいだけ叫べばいい。それも今が最後だから」

冷ややかに、男のような声で言いながら、十五号はイーラの髪を指に巻いて、無理にレンズの方へ顔を向けさせると、自分もそれに

向かつて並びながら、

「お年寄りの方々。今日もあなたは失敗をしました。法廷でのあの態度は裁判官の心証をわれわれに不利にしました。どうして私たちの指命通りに出来ないのです」

いいながらイーラの髪をギュッと引きあげる。けたたましい悲鳴とともにイーラは中腰になった。

「あなたのお嬢さんは何ていい声なんでしょう。毎晩この声をきいてあなた方もさぞかしタンノウされたことでしょう。でも、これからは罰をもう一段重くして啞になつてもらいます」

いきなり床にねじふせると馬乗りになつてイーラの顔を両膝でハサミつけた。後手縛りでは逃げることも、避けることも出来ない。二台のテレビカメラが、あわただしくその動きを追った。一台は恐怖におののくイーラの顔を大写しにする。その口に大きな荷造りテープがベッタリと貼りつけられた。布製で顔の下半分を覆うほどに大きい。たちまちイーラの口は完封されてしまった。

「今夜から一つづつイーラちゃんの内自由になる筋肉を奪って行くことにします」

勝ち誇つたように十五号は、テレビに向か



っていった。

「それでもう口は動かさないでしょう。明晩はどこにしましょうか。オシッコの管にカテーテルを差込んで狸の徳利のように大きなポリ袋を繋いで吊ってあげる計画もあります。括約筋にリングをハメ込んで垂れながしほうだいという手もあります。これにはオシメが要りますわね。そうそう、この綺麗なオメメにタガをはめて、ねむるときでも目をあけたままでもいいかならないというアイデアはいかがですか」

馬乗りになったまま十五号の長広舌がつづいた。そして、

「あ、ご心配なく。お口にフタをしても、お

嬢さんにはチャンと餌をあげます。こうしてビニール管を……」

いやがるイーラの鼻の穴に細いビニール管が徐々に挿入されて行った。

「それでもう好き嫌いはなくなるでしょう。お嬢さんは何でも召上ります。何なら下の管とコレとを連結してみましようか。イーラちゃん、ご自分のものを、おいしいおいしいって召上るはずですよ」

悪魔のような洪笑が部屋中に響き渡った。

イーラの両親が突然、自宅で首を吊って自殺しているのが発見されたのは、その数日あとだった。彼等の死により、事件は再びウヤ

#### 〔伝言板〕

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます故、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚 フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛願います。○御送金は、現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありましても最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号晩出版株式会社へ願います。

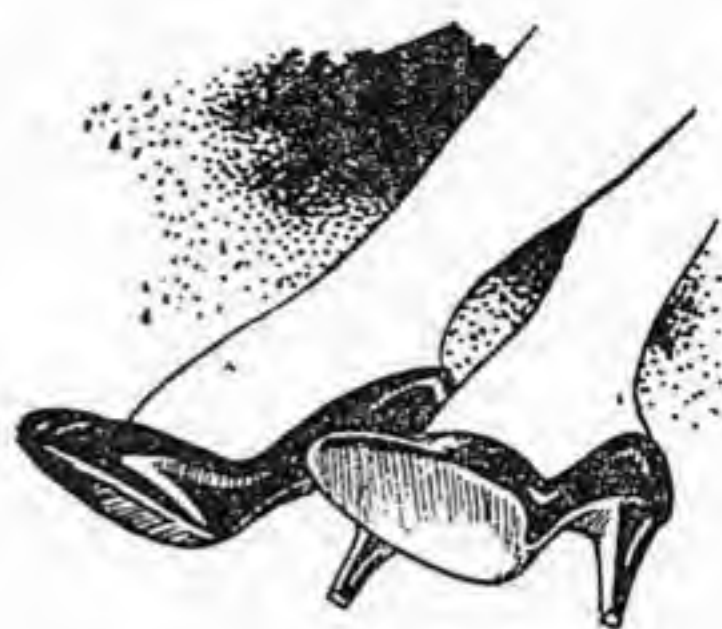
ムヤになってしまった。哀れな両親は自分達の死を代償にしてイーラを自由をあがなおうとしたのであった。有線テレビの配線は巧みに撤去されていたので、捜査当局の目に触れないで終わった。

両親が自殺の意思を決定的にしたのは一端で、イーラのウレートルを貫通した細いビニール管が、その一メートルばかりのもう一方の端を鼻の穴から食道まで押込まれる光景を見せつけられた夜のことだった。実際、イーラは自分の分泌した千CC以上の液体を、自らの意欲でなくて胃袋に戻させられてしまったのである。渴きと嚥下本能は嘔吐することすら彼女に許さなかった。尤も口を蓋されているのだから、嘔吐が起ったら呼吸困難というひどい責苦をイーラに与えたであろう。

イーラには勿論、両親の死は知らされなかった。ただ毎晩のテレビ出演だけは中止になり、檻の中ではあったが手足の自由も再び与えられた。組織は、いずれ何等かの方法で彼女を遠く中近東へでも売り飛ばそうと考えていたであろう。少しずつ、麻薬を与えはじめた。女を自由にする最上の方法であり、又彼等の常套手段だった。

（未完）





—— 足についての楽しい12話 ——

と人

拝み

食べる

たから宝

はや隼

足は、あるくためだけにあるのではない——というのが、本篇のテーマです。

ただし、ここに登場ねがうのは、ぜんぶ女性のアシにかぎります。

男のアシなんてものは、思っただけでもムシズが走る——というのは、本文の筆者が、男だからであります。

アシの夜長を、ゆっくり味わってください。

—— 筆者 ——

女性の足に

美を感じた近代最初の作家は大谷崎といっても過言ではな

いでしょう。谷崎潤一郎は、この美食を我々

に教えてくれました。「富美子の足」は、あまりに有名です。

まこと、女性の足ほど、魅力深い存在は、他にないでしょう。

本篇では、主として「食べ物としての足」をとりあげました。楽しく明かるいメニューとして、お楽しみください。

フランスパン

女性の力カトの、まろやかなまるみ。やわらかで、そのくせシンが固く、表面はザラザラ。軽く歯をあてると、かすかに表皮がへこみ、舌の上で溶けてしまいそう。

上品な塩味。うすく剥がれた表皮には、細かい食塩のかすかな苦味。

くちいっばい含むと、マリのような弾力。そして、そのいろは、キツネいろ。たなごころにのせ、眺めているのも、楽しく快いもの。

五、六〇キロの体重を支え、下からはハイヒールでつきあげられるため、赤ちゃんのころのやわらかさは失せ、意外とシンは固い。真うしろから、顔をよせれば、特有の香気と、無数のシワ。

力カトは、まったく上等なフランスパンみたい、しゃぶりつくつと汲めどつきぬ泉。文豪谷崎潤一郎の作品にも、このフランスパンを、好んで賞味するシーンがあったけれど、何時間でも、舌のうえでころがすパンの味はすばらしい。



わたしは、女性の力カトの味覚を愛する。

# クイズ

素足で、トイレに入った彼女が、用を終えて出てくるなり

わらいながら、いった。

「わたし、失敗しちゃった。ちょっと、アノヨにひっかけてしまったの。右足、左足のどちらにかけたか、あなた当ててごらんない」

あわてんぼの彼女、ろくろく終了の確認もしないで立ったひょうしに、ちいっとひっかけて、シズクで濡らしたらしい。

「あてたらゴホービあげる。ヒントは、そうね、ニオイかげばわかるでしょ」

すなわち、テーブルのうえに、両足をそろえさせ、足首をつかんで、右と左の両方を嗅ぎわけろ。まるでケイサツ犬みたいに。

気のせいかな、アセとはちがう、刺激臭が、かすかにツーンときた。両足ともなんだ。

「拭かずに出たから、ハッキリ判るハズよ」

彼女、足をひっこめようとしな。

けれど、せっかくだが、指の股のあいだを嗅いでも、どちらの足が、浴びせられる光榮に浴したのか、わからない。

えーい、デタラメいってやれ。

「右ーだろ」

「ちがった、ざんねんでした。両方よ。あなたのハナって、バカねえ」

ちがうんだ。

こんなプレイで、足の香りをスマートに嗅がせてくれようという彼女の心づかいがうれしい。ボクはもういちど足首に顔をよせた。かすかな刺激臭は、まだのこっていた。

# お湯

小オケに、八分めほど水を汲んだのを、床におく。

クツ下をぬぎ、水中にドップリ漬ける。

「お店で、一日じゅう立ちっぱなしでしょ。

ムレて、ほてって、たまらないのよ」

水中に、しろい魚が二ひき、およぎ、水の表面に、軽くさざなみ。

澄んでいた水は、かすかに濁りはじめ、つめたかったのが、とろんと温まってきたみたい。

「ねえ、洗って……」

スポンジに、わざと石けんはつけない。

魚の一ぴきをつかまえて、ゴシゴシ。

「ワア、くすぐったいわ」

魚は、手のなかを逃げまわる。

「そっちも、出すのだよ」

またゴシゴシ。

一日のアセと、アブラと、アカと、そしてかすかな、剝離した皮膚の細粉と、クツ下のセニイのホコリと、ときにはアムモニア。

これらが融け合い、混ざりあって、水は湯に近い。

でも、石けんは使わなかったから、とてもコクのある、まざりけのない、彼女の足の味そのもの。

「階下の、お風呂場にすててきて」

と、たのまれたが、そんな勿体ないことはできません。いきなり、小オケのフチにくちをつけ、ゴクゴクと呑む。

「ン、マア、きたないわ」

「何いってるの、きみの足だもの、きたなくなんかないさ」

一リットルほどの、お湯は、かくて彼女専用の、ピスポットにおさめられる。

注Ⅱピスとは、不用の水。おしっこのスラングである。

# ミズムシ

ミズムシ出たよ、搔ゆいよ。イッヒッヒ。

美女だって人間だから、水虫の訪れは、むろん避けられない。



お行儀がよいから、クツ下は、いつもはか  
れており、ムレる。

ムレは、水虫の天国。

忘れてるときは、なんともないけど、いっ  
たん痒くなったら、さあ、たいへん。

カユイカユイカユイ。

イッヒツヒ。なんて言ってもらえません。

搔いて搔いて掻きまくる。ポロポロと甘皮  
がむけ、指の股からはヤニが吹きだし、ひど  
いときは、傷口から血がにじむ。

ところがですよ、水虫には、まだ完全に治  
るクスリがないそう。バイキンの種類、わか  
ってるだけで二〇余種。

「ねえ、水虫には、お線香の灰をつけると、  
きくんですって」

会社の用務員のオジサンに教えられた。

「キンチョーの灰じゃ、だめかしら」

蚊取り線香の灰は、さてどんなものでしょ  
うか。

ねえ、もっとキクくすり、知ってるんだけ  
どな。え？ 知りたいって？

よろしい、教えて進ぜよう。

それは「人間のツバキ」です。

これを患部に塗るんですな。

「イヤだわ、そんなにたくさん出やしないじ

やない」

ご心配めさるな。ボクが供給してあげます  
よ。恥ずかしそうにそっとだされた指を押し  
ひらき、その股に、そっとくちを寄せる。

特有の、すえた臭いがムツとくる。

でも、いいや。これで治ったら、信用は絶  
大だろう。

「わるいわ、あたし。あなたの唇に、水虫う  
つしたら、どうしよう」

ナカせるねえ、このセリフ、

でもだいじょうび。ツバキの供給元の唇に  
うつるわけがないでしょ。

水虫は、ちょっぴりからく、そしてまたと  
きに甘いハチミツの味。ワカメの三杯酢にも  
ちょっと似てる。

十日たったら、なんとふしぎ。ボクのデタ  
ラメ療法は、水虫の味を味わいたい一心から  
のアイデアだったけれど。

「すっかり治ったわ」

お医者さまにみせるみたいに、桜貝のよう  
な指の、あいだをひろげてみせた。

でも、ざんねん。治っちゃったら、特効薬  
のツバキのご用はなくなり、あの妖しい味を  
思うぞんぶん賞味することはできなくなっ  
ちまった。

「こんなことなら治してやるんじゃないかっ  
た」

**ツチフマズ**

ヘンペイ足のひとにはツチフ  
マズはない。あたりまえだ、  
ないからヘンペイソクなんだよ。

足のうらで、いちばんやわらかいところは  
どこ？ 答え、それがツチフマズ。

とにかくやわらかい。女性によっては、赤  
ちゃんの肌そっくりの、懷紙をもんだみたい  
な、ソフトタッチ。

このタッチにボクは、よわい。

口やハナをペツタリ押しつけられ、そっと  
その香りを嗅ぐのは、いい。

「くすぐったいわ」

女王さまは、身をよじる。

一年中（海へ入ったときやプールは別にし  
て）陽が当たらないから、ゾーゲのように白く  
まん中のあたりがなだらかにくぼんで、無数  
のシワがある。

ところが、ここが意外と敏感なんだ。

指でつまむと、ニワトリの皮のように、プ  
ルンと手ごたえがくる。

つまんどいて、歯をあてる。プリプリと、  
ちようどカンテンみたい。



カンテンで思いだしたけど、酢と塩と化学調味料と、そして磯の香りが、ここにはあるようだ。

ツチフマズは、まるでスーパーマーケットの食料品売場みたいなんだな。

チヨコチヨコと撫でると、

「コソバイわ」

と答えるのは、上方の女性。関東では、これをクスグッタイと申します。

みておきたい天国であります。

ツメ

パチン、パチンと、ツメを切る音がきこえます。

寝そべった枕もと、五〇センチはなれたところで、彼女ペデキュアの準備に、ツメを切っています。

ピシッ！ 三日月さまみたいなツメの一片が飛んで、ボクの顔面に落下。

指でつまんで、観察すれば、それは、おやゆびのツメのようでした。

すてる、なんて勿体ないことはできませんそっと気づかれないように口へ。

コリコリ、シコシコ。

ときどき、先端のとんがった部分が、口のねんまくにあたり、かすかな痛み。

味は、まったく無し。あたりまえだのクラッカー……。クラッカーで思いだした。前歯で、ギョッと噛んだら、プチッ！ 二つに割れた。

クラッカーより十倍も二十倍ものうまさ。

しばらくは、無念無想で、モグモグ。

なんとかして食ってみたいな。

「ねえ、なにたべてらっしゃるの。ふとんのなかで、モノを食べるなんて、おギョーギわるいコ」

ヒトのあたまたの卓上で、ツメを切り、破片とばして、顔面へ命中させた、あなたは、まったくオギョーギがいいですね。

けんめいに噛んだら、やや、やわらかくなったみたい。やがて彼女、作業終了。

女王さまは、おちたツメを集めて、ティッシュ・ペーパーに包んでクズカゴにすてた。

そいつを、そっとぬすみだし、土ナベで、何日間もゴトゴト煮たら、クラゲのようになりまい食べ物ができはしまいか。

全国のわかい女性から、不用のツメを集め加工したら、新食品が生まれないだろうか、

これを輸出して、ひとモウケ、なんて、ユメは無限にひろがる。くちのなかのツメは、だいぶ、やわらかくなった。

ツメアカ

おなじく、ツメのあいだにたまるアカ。だらしないヤツに「エライ人のツメのアカをせんじてのめ」

てなことを忠告するセリフ。これは、江戸時代の小説にもでてくるのだから、古い。

これを、なんとか手にいれたいと、かねがね思っていた。

チャンスは、あんがい早くきた。

彼女が、ツメと肉のあいだに、トゲをたて、とれなくて困っていた。

それも、右足の親ゆびである。

サンダルつかけて、買い物に行く途中でのサインンとか。

「たいへんだ。ヒョウソウになるぞ」

おどかしといて、

「ボクが、抜いてやろう」

公然と足を抱き、親ゆびに目を近づけられるのだから、トゲサマサマ。

太いトゲだったので、近視のボクにも、わけなくとれた。

「ツメのあいだにアカためて、トゲをさしたら、きつとヒョウソウにやられる。アカの中には、バイキンがウヨウヨなんだ」

苦しまぎれのボクの学説。親切めかして、十本の指のアカを根こそぎ収集、



スキをみすまして、そっと舌にのせた。  
無味無臭。

胃の検査でのまされた、ヴァリウムみたいな、おかしな舌ざわりだった。

### 指の味

足には、五本のユビがある。  
あたりまえだ。日本人の親ユ

ビと人さしユビ（足のである）は、他の三本にくらべ、とても力がつよい。

これは、ゾーリ、ゲタをはいた名残りで、ハナ緒をはさむためにそうだった、なんてのはマユツバ。

ところで、ユビの一本一本は、たしかに、味がちがう。味に五味あり。五味とは、すなわち、甘、酸、苦、鹹、辛也」と、料理書にあるが、五本のユビのそれぞれにも、それがあるのは、おもしろい。

中ユビが甘、薬ユビが酸、小ユビが酸、小ユビがちよっぱり鹹（カライこと）なんて、一本一本がちがうのだ。

ウソだ、なんていうヒトは、ためしてごらんなさい。

バカに、化学調味料の味みたいな持主があった。きいてみたら、この女性、化学調味料の研究所につとめる栄養学専攻の学者だった

ーてえオハナシは、どうかしら。

### ぬくもり

冬、床のなかへ入っても、足がつめたくて仲々寝つかれない。悩んだお師匠さま、弟子に命じて、床のなかへ半身いれさせ、その胸に、冷えた足をのせて、暖をとった。

お弟子さんはそのとき虫歯を病んでいた。顔をスッポリふとんの中へ入れたので、息がこもり、またまた、ほっぺたがほてりだし、虫歯がウズキはじめた。

お師匠さまのおみあしは、まだ凍ったようになつめたさ。氷のうの代りになりそう。

お弟子さん、そっと、寝息をうかがいながら、熱をもったほっぺたに、つめたい足をあてがい、冷やしていた。

あきらかに命令違反。おこったお師匠さまは、いきなり、そのほっぺたを、ちからまかせに蹴った。

ひどいショック。おかげで、虫歯の痛みがケロリと治った。

右は、たしか大谷崎だかの作品で読んだ記憶がある。

映画にもなった「お琴と佐助」原作「春琴抄」ではなかったかしら。

寒い床のなかで、こたつ（湯たんぽといったほうが正しいかな）の代りをさせられたりするそのほうから、夜具のなかへ顔をさし入れさせたり、あぐくには、イヤというほど、けとばされる。お師匠さまが、若く美しく、目の不自由なひとだけに、サディスティックな作品に感動したものだ。――ワタシは、湯タンポになりたい――

### 甲 高

足は人により、甲の高低に格差がある。これは男女とも同じだが統計によると甲高は女性に多いとか。

甲の高い人は、ハナも高いというが、これは未確認。

クツを買うとき、甲高女性は、とかく苦労するそうだけど、甲低より甲高のほうが、見てカッコよいようだ。

ところで、足の美のキメテは、実は甲にある、と力説するのは、友人のプレイボーイ、E・A氏。

「よく手入れされた甲は、一種の工芸品。足の裏のような不潔感はなし、目にふれるところだけに持主？ も、ここはよく手入れするから、磨きぬかれている」

E・A氏は、そういうながら、ここを、唾



液でぬらすクセがあり、女性たちの人気もたかい。というのは、ここへさわられると、

「おんなはヨワイ」

のだそうだ。おまけに、足のうらにさわったりすると、エッチよばわりされるおそれがあるが、その点、甲なら、きわめて自然にちっと話をしながら、じゅうぶん楽しめるということであります。

### ハシ・フォーク

親ユビと人さしユビに、  
ハムやソーセージ、サシ

ミの一とひらをはさみ、

「お食べ」

と、つきつけられる「食事サド」シーンは  
こんにちでは珍しくなくなった。

万感ムネにせまる思いで、それを口に受け  
ついでに、たれおちて、ユビをよごしたソー  
ス、しょうゆ、汁、マヨネーズのたぐいまで  
一滴あまさず舐めとることの、胸にくる無常  
感。若干のテレくささ。

—ああ、オレは、こんなこととしていいのかな  
？ 同僚は、まだオフィスのデスクで、汗を  
流し、仕事と取っ組んでる時刻というのに、  
オレは、イヌ。

とはいふものの、調子にのって、ついでに

つきつけられた指の根本まで、むさぼること  
の白昼のユメ。

### 煮 る

ジャガイモ、ニンジン、ゴボ  
ウ、玉ネギ、そういったヤサ  
イを、細かくきざみ、水煮する。じゅうぶん  
やわらかくなったら、ナベを火からおろし、  
さます。

つぎは肉の番。

肉といっても、牛やトンは高くなっちゃまっ  
て、手が出ない。

持主におねがいして、肉の代りに、ナベに  
両足さしいれてもらう。

これをトロ火にかけて、ゆっくり煮込む。  
肉は肉でも生きてる肉なんだから、注意し  
て、うんとトロ火にしないでダメ。

それこそ、人肌をいくぶんきつめにしたく  
らいが、頃合いだろう。

足がだるくなり、よろめくとキケンだから  
イスに腰をおろしてもらい、足だけを提供し  
てもらうのが無難でしょう。

トロトロ、ゴタゴタと煮込むこと三、四〇  
分。そう、それくらいがいいところでしよう。  
せっかくの肉の味をダメにするおそれがあ  
るから、塩、しょうゆ、調味料、コシヨーの

たぐいは、いっさい使用禁止。

それじゃ、味がまるでないじゃない、なん  
てご心配は無用であります。

そら、れいの甘、酸、鹹、苦、辛の五味が  
ほどよくとけ合い、うまくすると、アムモニ  
ア、アルカリから肌に生じた凝脂、おまけに  
水虫の残がいままでゴチャゴチャにまざり合っ  
て、マキシム・ド・パリ、ホテルオークラ、  
インペリアル、精養軒など一流ホテルの料理  
にもヒケをとらないすばらしいぜいたく料理  
が楽しめるのではなからうか。

「肉が、こう高くなっちゃあ、スキヤキもで  
きねえや。マトンで、ジンギスカンでもやろ  
うか」

なんて、ミミッチイことはいわないでくだ  
さい。

ナベのなかのとりどりのヤサイにまじって  
雪のように白い、きれいな足が、かすかにふ  
るえるのを横目に舌ツツミなんてえのは、最  
高のゼイタクと思うんですがね。

ただし、これは「そうなの。いいわ。おま  
えなんか私の足のダシがいいとこね」とか  
なんとか、サド気のあるヒトがあつてのハナ  
シ。さて、そんなヒトがねえ……。



## 画 人 晴 雨 の 真 随

## 絵 巻 ・ 美 人 十 二 支

斎 藤 夜 居

晴雨会のこと――。

伊藤晴雨の絵巻美人十二支を語る前に晴雨会について記す。晴雨先生を囲む会というのは、戦前にあつては同好者間の往来だけであつて、風俗考証・演劇知識通としての晴雨と語り合つたグループと、責めや縛りの大家として接近した人達とは、おそらくは別種の人柄であつて、江戸と東京の近世風俗をも語り変態性慾談にも耳を傾けるといふのは無かつたろうし、特に「会」と称するものがあつたかどうか今日ではよく分からない。戦前における責めファンの殆どは晴雨にとってはむしろ旦那筋であつて、後援者たちであつたことは、晴雨実写の責め写真一枚キャビネ判を五

円で頒布したと聞いたことがあり、既に物の値段ではなかつた。また個人的には晴雨に接近しても、愛好者間の横のつながりは無かつたらしい。

戦後になつて粹古堂（伊藤敬次郎、竹酔）が古本屋兼帯の趣味の小出版を始めると、以前の『三十六気竟』や『美人乱舞』の縁故でしきりに晴雨画集の一枚刷（石版画）の刊行をすすめて来た。これが、のちに

恵の露 十二枚

女人地獄図絵 六枚

となるのだが、この時に粹古堂がでっち上げたのが「晴雨会」なのであつた。

晴雨会々報第一信は、肉筆Ⅱ女の責場絵Ⅱ

頒布趣意書、となつており「此の原画たるや所謂一夜作りの製作品でなく先生が多年に渉り莫大な費用を投じ、その道のモデルを使つて、或時は月明の庭園に、或時は大雪の実景を利用し写生で及ばぬところは写真に撮つて而して是等を骨子として、云々」と最大級の褒辞が重ねてあり、先着百名限りとし、この肉筆御申込みの方は晴雨会に入会しなくとも会員とみなし、引き続き晴雨会々報を送ります。と頒布要項にあることから、この「晴雨会」なるものは、晴雨肉筆（実は版画）頒布を主目的とした伊藤竹酔の苦肉の策だつたことが知れる。

このころ『枕』（昭和23年）と題する本物



## 絵巻・美人十二支の内『子』



愛書出版狂の竹酔は造本にこってしまつて、思いがけぬ余分の出費を重ね実はまとまった会員数をキャッチしていなかったのだ、当時二百部の画集や本が実際に売れていたのか、これは疑問である。従つて晴雨に対する謝礼も充分だったかどうか、その点も不明であった。然し、それら刊行物は小型本一点でも現在では価が出てきているので、その点では竹酔さんも以て冥すべきだと思ふ。

晴雨会第四信に、肉筆浮世絵・晴雨傑作選集「さるぐつわ十二景」を予告しているが、おそらくこれも刊行されていないと思う。毎月二枚宛揮毫、六カ月を以て完成、会費月五百円ではその頃でも「肉筆」だったら無理な話だと思ふが、一点でも竹酔の粹古堂から入手された方があったであらうか。

所が、この竹酔の晴雨会とは別に純粋に責め縛り愛好家たちの「晴雨会」なるものが確かに在って、例えば『責の研究』（昭和25・5）非売品私家版には映入りの特製版がありこれの頒布に当たっては某料亭において記念会を兼ね、その書に晴雨がサインをいれ当日

の景物として、晴雨自ら女形某を縛りの実験台に供したという——。真実「晴雨会」を称するのならこの日集合の十数名を云うのが正当だと思ふが、私はくわしいことは知らない。

更に次ぎに有光書房の坂本篤が同社より、『風俗野史』を復版した記念に、昭和四十二年三月三日浅草公園伝法院に於いて、「晴雨忌」会を開催し、翁長女の菊女史も参会せられ、盛会だったといわれるが、これは出版社の新刊書の宣伝会であつて結局一回限りで終つてしまった。これを契期として極く少数者でもよいのだから、別段有名人士をかつがないで「晴雨を偲ぶ会」が結成されたら良かったと思ふ。惜しいチャンスを逸したと今では残念でならぬ。伊藤晴雨の如く稀代の人物の研究に当たっては、むしろ表面的な交際を重ねた人たちよりも、隠れた面で接触のあった人たちからの翁の真面目をきかせてもらいたいものである。

◇ ◇ ◇

晴雨会々報第二信には、「晴雨先生益々健在、目下銀座三越に開催中の防犯展覧会に於て先生の肉筆責の画と嘗て粹古堂で発行した『女三十六景』がグロテスクな現場写真の中に異彩を放っています……」

の桐のへぎをそのまま表紙に応用した小型珍本を刊行し『日本変態刑罰図譜』を予告したり『裸体画の研究』などその後いつになっても出版されなかった本をも広告している。いずれにしても二百部足らずの発行で、印税というより謝礼の件で、この老伊藤ふたりは何時ゴタゴタしていたらしい。



新春を寿ぐ意味で『肉筆美妖十二支』の揮毫をお願いし御承諾を得ました。十二支に美姫を配したのは晴雨先生が始めてです」云々。

とあり、美人十二支は始め美妖十二支として発表し、内容の説明としては、

「十二支は東洋の民俗と切り離すことのできないもので、外国にも十二支はありません。伊太利の十二支にはキリンがあり鰐があり、いろいろその国に依って多少の差違はあっても、世界各国に十二支に近いものがあるそうです。邦俗では自分の干支から七ツ目の動物を縁起とする風習があります。迷子札の十二支は浅草仲見世でナメクリ彫りの名を残し、十二神将は奈良の都に天平時代の芸術を遺し、十二ヶ月の汁粉、十二の神楽、家を建てれば十二の柱、磁石の廻りはこれまた十二支、昔の時計は十二刻、何れも十二支に因みがあります。地震の歌も、人の名も子太郎、丑松、宙吉、卯三郎辰造、己之助、等委くこれ生年月に因みをつけたものです。

十二支と人、人が十二支か、十二支が人か……この因縁浅からざる十二支、色気タップリな美人を配して、皆様をアツと云わせる趣向、書斎の飾りに好適な芸術作品で

す」

当初は巻軸仕立にするつもりはなく、十二枚で一組の体裁を予定した。また画題も実際に描き上げたものと予告とは一部に変更があった。

この時、伊藤晴雨七十二才で、老いて益々さかんなものであった。絵巻とその説明は次ぎに掲げる——画技円熟して奇想また湧出、動坂町人と号した市井における平俗な浮世絵

師としての、あくまでも軽快な運筆の妙を此処にたのしむことができるものだ。

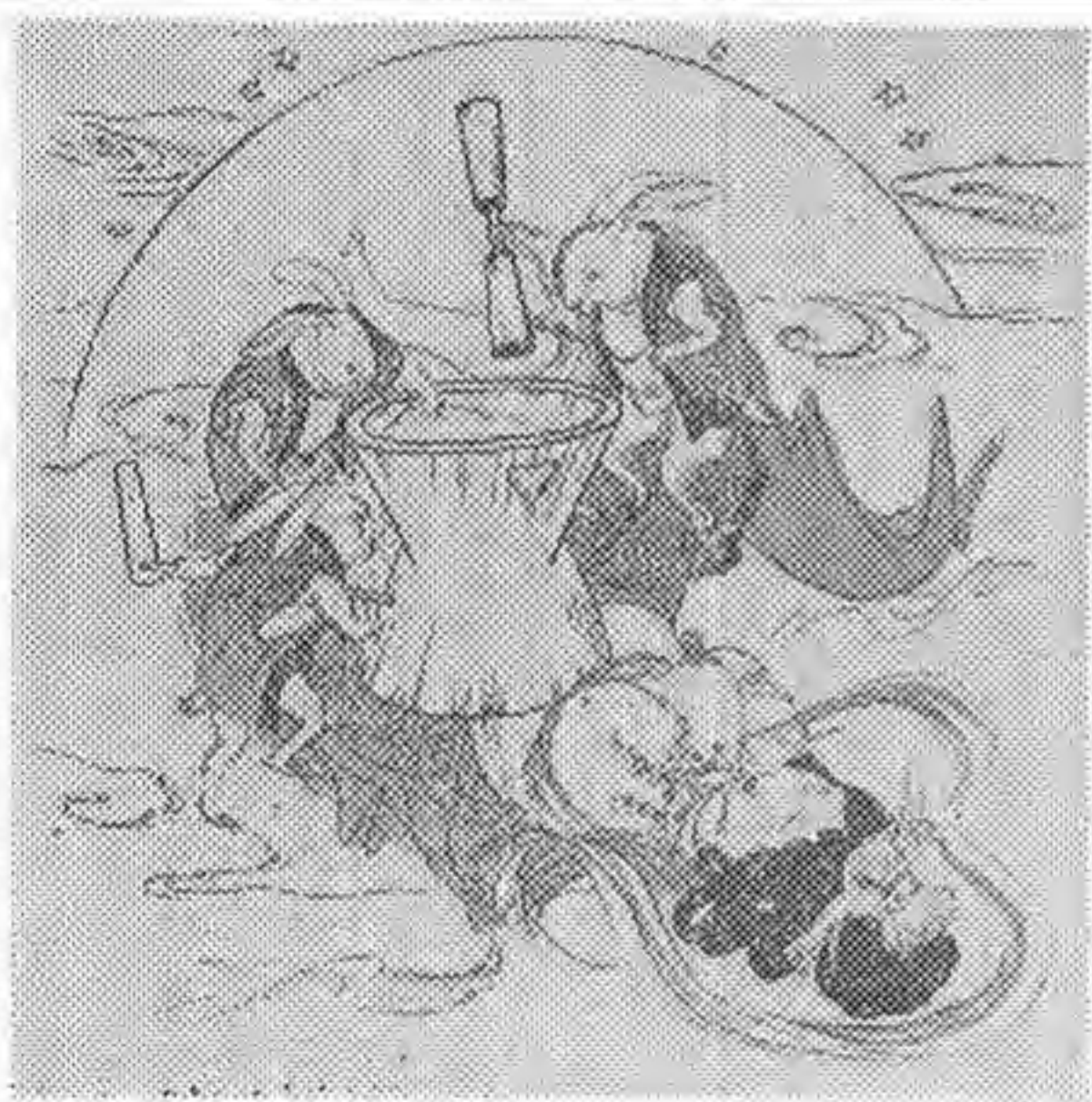
#### 美人十二支解説

##### 子（ね）

曲亭馬琴作「月氷奇縁」にある話で近江国の大名倭文が、金翅鶏という珍しい鳥の卵を或る人より貰って大切にしておいた。何時の間にか紛失して居た。腰元の漣（さざなみ）が盗んだものと思って漣を桜の木に吊し上げて厳しく拷問したが白状しないので責め殺されてしまった。其後或る夜の事で、うたたねをして居ると鼠が二匹卵を引いて行くのです。一匹の鼠が卵を抱え一匹の鼠が卵を抱えた鼠の尾を銜えて引っ張って行った。之を見倭文は扱ては漣の所為では無く卵の盗賊は鼠であったか。漣の死を憐れむ心持が起こった時神経作用で漣の亡霊に悩まされて、盗賊の為に非業な最期を遂げるといふ筋である。これは昔からあった話を馬琴が小説にしたものである。

##### 丑（うし）

「稻荷山藁人形に打つ釘は糠に打つほ



絵巻・美人十二支の内「卯」



どききめなからん」と蜀山人の詠んだといわれて居る、呪いの釘を打つ丑の刻参りは今の午前二時で、草木も臥る丑満の頃というが、

科学的にいつても午前二時という時間は大氣が全く沈滞して夜と昼との境界になっているので、万物皆活動を停止する時であるという此時間に深山に呪いの釘を打つ女の姿は凄惨もので、三七、二十一日の満願日に自分の姿を他人に見られたら、其の願望は成就せぬと云われて居るので、或人がそうした姿の女に出遇った時、女の無念相な姿は物凄惨い形相であつたと昔の老人が語った。筆者の知人である法華宗の山伏に聞くと、呪いの行（ぎょう）を用いて居ると、広い原一杯の大片が現われて行の妨げをする事があつて、此場合にオンパコ（車前草）の露を手を受けて飲むといいと伝えられて居るそうである、演劇や講談に現われる丑の刻参りは黒田騒動のお秀の方や、滝夜叉姫が筑波明神へ源家調伏の祈りの姿である。

# 寅（とら）

明治三十七年の冬、日露戦争の時日本軍が露軍の租借地旅順港を包囲した時、露軍の中に囚われて居た日本婦人を虎の檻に入れて喰わしたという事がまことしやかに伝えられて

当時唯一の画報であつた処の近事画報の改題戦事画報に茂木習古画伯の口絵で、物凄惨い絵が載せられてあつた。

# 卯（う）

月宮殿の嫦娥が兎に囲まれて餅をつかれて居る戯画をある昔しのY本で見たことがある之を露骨に表現する事はできないので今は大略にしておく、女の腹の上で餅つきをやつたらしい音がするだろう。ペッチャンコペッチャンコと。

# 辰（たつ）

祇園祭礼信仰記金閣寺の段は、元人形芝居から出て松永大膳と木下藤吉とが碁を斗す件が呼物であつた事と、昔しは見る事の六ヶ敷かつた金閣寺の大道具をセリ上げたのが呼び物になって、大入を続けた狂言であるという狩野の息女雪姫が父の仇大膳に迫つて名剣を滝にかざせば竜の影を写すという事を知つて墨絵の竜の揮毫に事寄せて名剣の威徳を試す件がヤマになっている、雪姫が桜の木に縛られて落ち散る桜の花びらを集めて、足で鼠をかくと、鼠が姫の縄を喰ひ切るという件は画聖雪舟が幼時の伝説を取り入れた物である事はいふまでもない。

# 己（み）

信濃国伊那郡の或る村に横暴な庄屋があつて、小前の百姓の美しい娘を小間使にして居た、娘の美しさに思いを焦した庄屋は娘を口説いたが、どうしてもうんと云わないのに業を煮して、僅かな粗相をタネにして、娘を縛つて箱に入れ、穴をあけて沢山の蛇を入れて之を天竜川へ流した。娘の母親は流れにそつて、娘と別れを惜しんだ。而して庄屋の一族を呪えと云つて自らも天竜川へ沈んだ。それから庄屋の家には怪異が続いて、一家は遂に死に絶えてしまつたという（伊那の伝説）

# 午（うま）

馬の背に女を縛り付けて放つことは、これも曲亭馬琴の殺生石後日譚の中に「秋しく」という女が百姓の馬に縛られて殺された事が記されてある。昔、或る女が享主の体が小児の様に小さいので神様に願をかけて、相撲取りの様な大男にして貰つたが、余り大き過ぎるので工合がよくない、再び神様をお願いして元の小男にして貰ふことになり、首が小さくなり手が小さくなり足が小さくなり胴が小さくなつて来て、最後に……彼の一物迄小さくなろうとすると、女は急に、神様を止めて「ああ神様其所丈けは馬の様にしておいて下さい」といった小咄がある。



未（ひつじ）

世界中の動物の中一番性慾の強いのは羊であるという。山野に簇生する野草にひつじ草一名碇草という草がある。碇に似た小花を開き、之を影干にして飲めば精を増すと伝えられ、江戸時代には毎年三月十五日麻布笄町の長谷寺に於て、これを諸人に施すので有名であった。此の碇草は一名を淫羊藿（註・めぎ科の多年草、やまどりぐさ、いんようかく、うむきな）といって、精を増し腎を整うと漢方に伝えられ強壯剤として盛んに用いられ、採集されて現在では石川県の山中温泉と丹波の或る一部に産する外、殆ど採り尽されてしまったそうである。之を独逸で精製して、或る種の薬品になって戦前に日本に逆輸入して来たという。羊は紙を喰うというので、江戸時代の両国の見世物に羊と女の見世物があつたというが、私は見た事はない。

申（さる）

木曾の猿神伝説は大江山の鬼ほど有名ではないが「木曾の猿神」と云って恐れられて居たらしい。嘗て岡本綺堂氏が此の伝説を一篇の小説にまとめ上げて新聞に発表したことがある。猿が人身御供を取って喰った話しは、信濃の赤穂村（日本アルプス赤穂岳の山麓）

と遠江国見附に残っている、この猿を犬が喰い殺したというのだから、犬と猿は、昔から不仲であつたものと見える。其の外に岩見重太郎の狒々退治の故蹟というのが岐阜県の和良村に残っている。

酉（とり）

三莊太夫の伝説を仕組んだものに「由良の港千軒長者」というのがある。三莊太夫が諸国の人を誘拐して来て残酷に労働させて暴富を積んで居ると、その娘が鶏の真似をする。これを癒すには酉の年酉の月酉の日に生れた女の生血をとって飲ませるに限るというので、旅からさらって来た少女を責め殺すといった様な筋の、覗きカラクリを見た事があつた。お涙頂戴の出鱈目に違いないが、少年の頭には強い刺戟を与えた。此の狂言は故沢村宗十郎が明治三十年頃宮戸座で演じた外、見た事がない。

○（いぬ）

八犬伝で有名な伏姫の物語りは、中国伝来のものらしく思われるが、馬琴が「トヤマ」といって居る上総の富山は、土地の人は必ず



絵巻・美人十二支の内『辰』

「トミサン」と呼んでいる。「トヤマ」では土地の人には通じない。標高の少ない山で馬琴の小説にある様な深山ではない。嘘も方便そこが小説である。犬と人とが交つたという伝説は維新前に折助や仲間が、犬に梅毒を移せば癒るという伝説を信じて、怪しからぬ行



為に及んだものもあったというが、これは詳説を避ける。

### 亥（いのしし）

天に摩利支と名づくる者あり屢日を覆う「日彼を見ず彼能く日を見る」とあるから、黒雲の上に乗った三面六臂の神様をそういつて居る様である。下谷の摩利支天横町に今は土地の人でも知って居る人が少なくなったが、相撲の守護神で足が達者になるという所から



絵巻・美人十二支の内「己」

の信仰である。摩利支天に見放されたという稲川のセリフにもある通りで、下谷の摩利支天は相撲の参詣者が多い。猪に乗って居る神様である。猪の肉を山くじらという、猪の肉を包むには昔は竹の皮を用いず、今の貼紙を用うるのが定めであって、明治時代本所回向院前のもんじ屋豊田屋で猪の肉を売っていた。猪の肉は「山くじら」といって、ししにぼたんというシャレから出たので、看板には牡丹の花が書いてあった。（以上晴雨記）

○昭和二十八年九月二十五日印刷、三十日発行、非売品、著者伊藤晴雨、発行者粹古堂伊藤敬次郎

○全十二図（解説別刷）タテ17cm、ヨコ21cm、表装を除く



ところで、この美人十二支には△秘版▽があった。このことは早くから一部の好事家に知られていたが、仲々現物が拝めぬ所から、戦後版行の竹酔の十二支に対してひそかに期待するむきもあったが、やはりこれは無理というものであった。

伊藤晴雨における石版印刷の秘巻・秘帖は左の三点が確認されている。

十千十二支（巻物）

沢村田之助（巻物）

論語通解（折帖）

製作年代はいずれも彼が城北書院と動坂の自宅を称し、『いろは引、江戸と東京、風俗野史』を手刷の石版印刷器で発行していた昭和六年——八年頃と推定できる。文芸市場その他軟派出版の花盛りだった。時流に乗って渋いながらも、いぶし銀のような艶を見せ、独自の芸域を示したものだ。発行部数は五十部前後といわれ、ごく少数の趣味人士の手に渡っただけのものが『論語通解』は筆禍事件を起こし世の噂にも上ったので自身の随筆にも度々述べる所となったが、他の二点については終生、沈黙のままだった。

秘巻十二支の図柄は左の如きもの。

子（ね） 桜の木に乱れた姿態で縛り付けられた桜姫にしのび寄った妖しい鼠三匹、姫にけしからぬことをしかけているが、人体同様に小さいながらもちゃんと備えて順番を待っている。

丑（うし） 猛牛と美女で、丑の刻参りの女が行の妨げに遭ったところ。

寅（とら） 虎がやに下って美女とたわむれているという、まったく有り得ぬ滑稽図。



卯（う） 月宮殿の兎が杵にあやしげなものを結び付け、裸女を搗いている。一体どんな餅ができ上るのであろうか。

辰（たつ） これは弁天様と龍神を扱い、すさまじい図柄である。蛇のその時の姿態を研究したと思われるリアルな筆致が、一寸おそろしい位である。

己（み） 女の背景は墓場をあらわしている。突如はい出してきた長虫が、おどろくべし、潜りこんでしまったのだ。

午（うま） 馬妖と美女の乱舞。

未（ひつじ） 羊が樹の幹を利用して独悦にふけっている。精力のつよすぎる老爺をおもわせる醜怪さがある。

申（さる） 狒々のために人身御供にされた処女が襲われている。

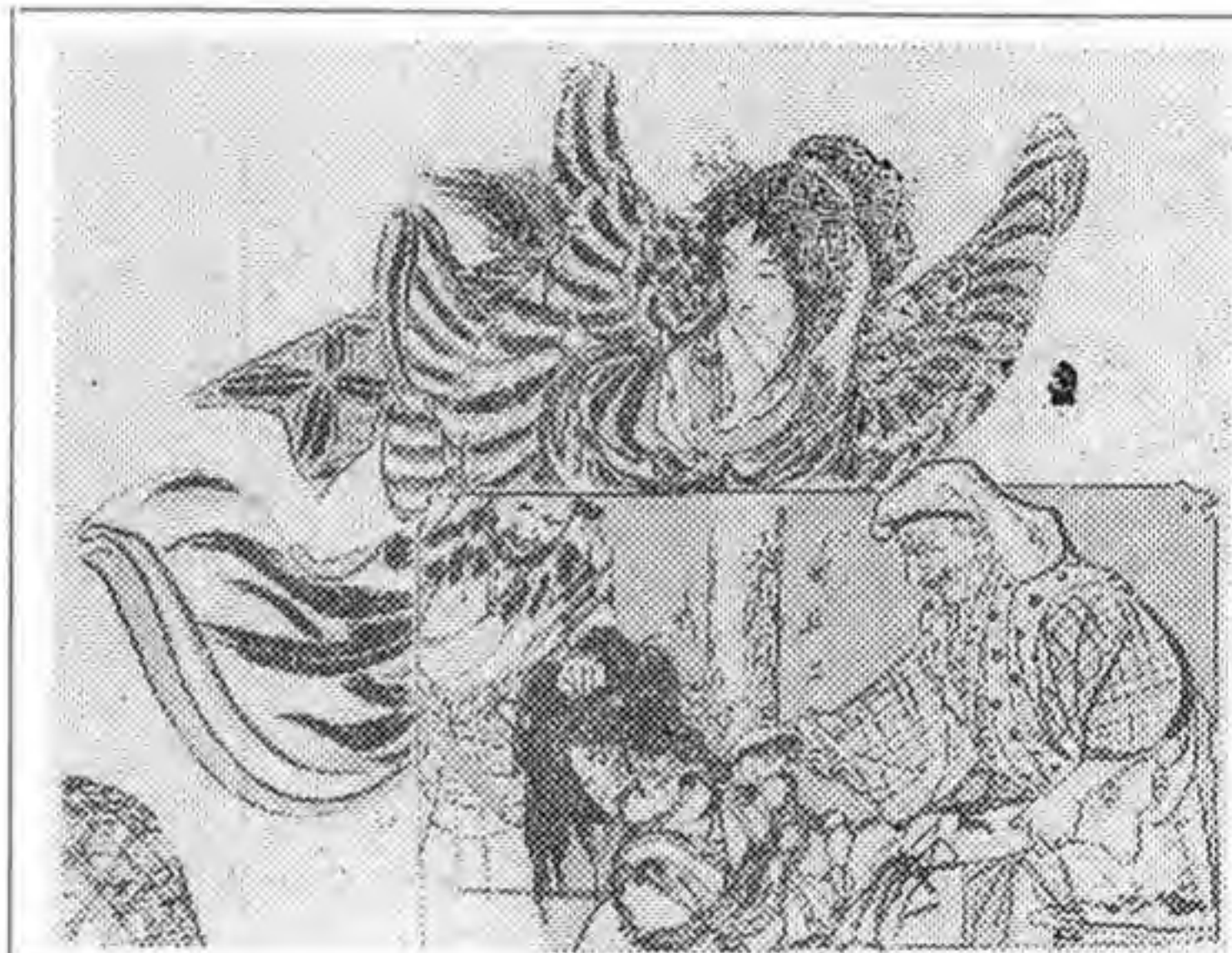
酉（とり） 文字通りの鶏姦の図。

戌（いぬ） 犬と女で、なんとなく対象に飢えた哀れな女を感じさせる。

亥（いのしし） チベット辺のラマ教の怪神像からの影響の濃い図柄である。

クラフト・エビングはその名著『変態性慾の研究』のなかで、反自然的猥褻行為のうち

繪卷・美人十二支の内『酉』



動物に対する性的暴行、つまり八獣姦Vを次の如く説明している——大意のみ記す——  
「獣姦は奇怪なる醜行には相違ないが、これは必ずしも精神病的基礎の上にのみ成り立つものではなくて、精神の健全なる者も時としてこれを行うことがある。道德の低級なるこ

とと、欲求の強烈なことから、自然的満足を得る機会の缺乏とが、人をしてかかる反自然的方法に至らしめる最大の動機である。ボラークの研究によれば、ペルシャ人は淋病が治癒するという迷信から獣姦を行うのである。これは恰度欧州において、少女との性交が花柳病を治し得るという迷信が行われているのと同様である。牝牛や牝馬に対して獣姦の行われるのは決して珍しいことではない。時としては山羊、牝犬、牝鶏に対してさえも行われる。

フレデリック大王が、一人の騎兵が牝馬に対して獣姦を行っているのを発見し「彼は豚の如き男だ、彼を歩兵にせよ」と云ったのは有名な話である。

婦人の場合かかる行為は、その対象が犬に限られている。マシユカの報告によれば、巴里においてある女が、よく馴らしたブルドッグと猥褻行為をなして、秘密にこれがある種の遊蕩者等に見物させて、一人につき十フランずつの見料を取った者があった。

獣姦の中には、全く病的基礎の上に成立するものがある。即ち、重篤なる遺伝、体質性神経病、婦人との性交における陰萎、および衝動的にかかる反自然的行為をなす者がそれ



である。病的なる猥褻の発見を説明することは困難である。一種のフェティシズムとして説明しようとする学者もあるが、それは性的動物愛好の場合は可能なるも、病的猥褻の場合には当て解らない。

絵巻美人十二支は言葉をかえていうならば猥褻絵巻と称すべきで、美女に野獣を配する

思考にしてから、既に晴雨のサディズムを見るべきであろう。そのことは、鼠、兎、龍、馬、羊、犬、猪、などの露出している図柄を見ると、いずれも八人間／＼同様にそなわっていることであって、晴雨の描かんとした思推の語られざる内在（潜在意識）を想像するところが出来そうだ。

## ●躍進記念● 百萬元懸賞 △原稿募集▽

### ▽賞 金△

入選作品 一席 1篇 五万円 10篇	入選作品 二席 1篇 三万円 10篇	入選作品 三席 1篇 一万円 10篇	入選作品 四席 1篇 五千元 20篇
--------------------	--------------------	--------------------	--------------------

### ▽内容△

一、特異な風俗文藝誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、新読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェティシズム、一般女性切腹、男性切腹、男女性、美、女相撲、女斗美、生首狂、変装、風俗嗜好、見世物、奇態、珍聞、奇習、珍奇風俗、風俗文、献、その他古今東西に亘る特異風俗に關する題材を広くとりあげて下さい。

一、題名を大いに新分野の開拓による力作を歓迎します。特に従前本誌にて余り扱ってない分野の傑作をお待ちします。

### ▽規定△

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。作者、書名などに引用部分があれば、その出処（何者、何書など）を明記願います。

一、原稿は二枚綴り、A4用紙、縦書き、右側綴じ、表裏両面に書きます。原稿は必ず二枚綴り、A4用紙、縦書き、右側綴じ、表裏両面に書きます。原稿は必ず二枚綴り、A4用紙、縦書き、右側綴じ、表裏両面に書きます。

一、原稿の締切日は毎月十五日です。入選作品は順次、次号の誌上に発表いたします。他の一般原稿と区別するため、懸賞第一頁に「懸賞」とお書き下さい。

一、返信料、投稿の原稿は、その旨添記して下さい。返信料、投稿の原稿は、その旨添記して下さい。

一、函第41号、送出版先は、大阪市住吉郵便局私書箱第111号、送出版先は、大阪市住吉郵便局私書箱第111号、送出版先は、大阪市住吉郵便局私書箱第111号。

一、原稿募集係宛。必ず郵送（第一種郵便）によります。採否は誌上発表を以てご承知願います。

つまり牝獣を姦するというのではなくて、彼の獸性が美女を犯すという様々な思念の現われであったから、画品も辛うじて救われているし、滑稽も亦生じている。成（いぬ）のほかに美女の表情に暗さがなく、人形なのは、そのためである。

また、画技として運筆の妙を云うならば、（この点こそ本来さきに記すべきだったが）

実に素晴らしいもので『北斎漫画』や『月耕漫画』の骨子をよく自己流に消化しきっていることと、着想の非凡なこと、構図のたくみなことは画人晴雨の真隨を發揮して余りあるものと思う。巨きな動物と女体を組み合わせで不自然を感じさせないポーズは、一見なんでもないような八絵そらごとだが、よくよくみれば、画想と構図との神変不思議な鬼才に只おどろくばかりである。

備考。十二支そのものの研究考証としては『南方熊楠全集』第一巻、第二巻が「十二支考」となっており、十二支に關する百科事典で、くわしい珍しい記事で満載されている。

（おことわり）この稿の資料として「美人十二支」及び「秘巻美人十二支」全図の複写を添付していただいておりますが、都合により割愛いたしました。（編集部）





殉虐に喘ぐ女

売 ら れ る

沖 田 史 郎

痣

「子供の前で縛られたり鞭で打たれたりするの、困るわ……くみ子も、もう四月から幼稚園に行く年ですから、分かるのよ……母親が裸にされて責められる図は見せたくないわ」

窓辺の椅子につくなり、新倉葉子はささやくようなちいさな声で、甲谷に云う。甲谷は聞流して、ウエイトレスにコーヒーを二つ注文すると、あとは葉子に横顔をむけて窓の外に目を投げて口をきかない。うすいレースのカーテンのかかった喫茶店の窓の外は、雨がぱらつきだして、人通りがいつそう慌しい光景だ。街に明るく陽がさしていたのが、急に

空が暗く翳ってきて雨が落ちてきた。

「地雨になるのかしら……」

葉子は、つぶやいた。

「それじゃ、もう家で責められるのは、いやだというのか」

ゆっくり顔をめぐらして、新倉葉子の美しい鼻すじを眺めながら甲谷は微笑した。

もう三十五、六になる男だが、笑うと八重歯がのぞいて、この男の顔は一種の童顔だ。

「ホテルに行けば金がかかるし、僕のアパートはせまいし、壁越しになんでも聴こえちゃうからなあ……」

「いやよ、あなたのアパート、話声だって筒抜けなんですもの……」

「だったら、どうしたらいいんだ」

甲谷は、いきなり葉子の柔らかい二の腕をつねりあげた。痛い。葉子は目をとじて眉を寄せる。ふくよかな二の腕のその一点から被虐の感覚が全身にはしって、

「ああ——」

葉子は小さく叫んで身悶える。

「よ、よして……」

「ふっ」

と、甲谷は笑って手を離した。ウエイトレスがコーヒーを運んで来たからだ。ウエイトレスが去ると、葉子は水色のスーツの袖をめぐって白い腕を露わにし、

「ひどい痣——」



赤穂を見せて、ほほえんだ。

「イー」

と、男にむかって可愛く舌を出す。一児の母とは思えぬそのコケティッシュな少女風な感じが、甲谷にはたまらぬ魅力であった。

「鞭打ち、覚悟しろよ」

甲谷は云った。しかし場所はどこにしたらいいのだろう。

新倉葉子は猫目石の指輪をしている。繊維品の貿易会社の受付係をしているビジネス・ガールの、それは唯一の貴重な宝石であったが、白い指からぬいて、質に置いた。

柿色の色褪せたのれんのかかっている質屋の店口を出ると、まばらな雨脚に髪を濡らしながら、葉子はふっとその美しい顔に佗しい色を宿した。

大切な宝石がもう一生この指に戻らないような思いがしたのだろう。甲谷はすぐ受出してやるからとはいったものの、この男は先頃不動産屋をクビになって、貯えもなく、ウロウロと職を探しているような有様で、葉子は甲谷の言葉に信が置けなかった。

「行こう」

甲谷が葉子の肩を押した。

繁華街の裏通り、連れ込みホテルが幾つも

目につく場所で、葉子は気隠れしながら甲谷に手を引かれて歩き出した。

## 黒 髪

桃井苑というホテルに甲谷はいった。前栽に桃の木が列植されており、本館は奥まっでいて、葉子も否はいわなかった。

中年のメイドが応待に出、甲谷は二階の部屋を希んだ。

青い絨氈を敷いた階段をメイドに案内されて登りながら、甲谷は、葉子の頭に手をかけた。髪をつかんでひっぱるのだ。

「あ……」

葉子はうめき、その声でメイドがおどろいてふりかえったが、すぐに見て見ぬふりをした。つややかな光沢を宿す美しい黒髪がほどけて、しりまで垂れさがった。ハッと息をのむようなみごとな、たわわな黒髪である。

「あ、ううっ——」

甲谷は長い髪を腕にからめてひき絞り、葉子は苦しげに天井を仰いで階段を登る。

「よ、よして……」

この男は他人の見ている前で責めを好む傾向があることを、葉子はいまははっきりと知った。職業柄そしらぬ表情を保っていても、内

心、メイドが興味を感じて神経をくばっている気配が、葉子の胸につたわり、彼女は髪の根がぬけるような痛さとともに羞恥の苦しみが加わった。

メイドが洋室にとおすと、葉子のその小柄な体は不意に宙に浮きあがって、それから壁際のベッドの上に、荷物のように抛り出された。水色のスカートがめくれ、白い太腿が露わになって、狼狽する美貌の女の姿態をメイドは横目で眺め、無言のまま室を去る。

「葉子——」

叫んで、甲谷が馴れたけもののように跳躍すると、葉子は怯える兎のように背をまるめてうずくまる。うずくまりながら葉子は、防音装置が十分らしいこの室の中であつたら、泣いても叫んでも外に洩れる気づかいはないとそのことに安堵し、胸の底で被虐への願望が芽生えた。胸の芯が疼くようなそのときめきは、この色白な美しい女の顔に妖しいバラいろのつやを刷いた。

「脱いじまえ、葉子。みな脱いじまえ」

「脱がしてくださいまし、素っ裸に剥いでくだい……」

わたしは変った、と葉子は思う。元々こうではなかった。死別した夫との夫婦生活に於



いては、そこにマゾティックな投影があったとは思えぬ。打つとか縛るとか浣腸とかいった形態は、夫婦の営みに一度として現われたことはなかったし、それを必要とするものではなかった。

「この美しい、めす犬め……」

上品な水色のスーツを甲谷は手荒に剥ぎとっていく。うしろからスカートのいっきに剥ぎとられる。

「めす犬、おまえはめす犬だ。めす犬！」

白いスリップの腰に甲谷の平手打ちが炸裂した。びしっ！ びしっ！ と、若く緊まった腰部の肉が鳴る。スリップの肩紐が千切れる。甲谷はスリップを逆さまに頭から剥ぎ取ると、乱暴にブラジャーを除く。

「ああ……」

反射的に、露出した乳房を両手でかこう。

「めす犬！」

ふくよかな曲線を包む純白のうすい下着に手をかけて甲谷は嗤った。ひきちぎるように彼は女体の最後の布をとり除いた。

「ああ、あなた——」

「うつくしい……美しいこの躰……」

甲谷は不意に声をふるわせて、しっとりとしたクリームいろの女体の曲線を貪るように

見つめ、ひととき彼は沈黙して手を出すこともなく、ひたすら新倉葉子のすばらしい肉体を鑑賞した。

一絲まとわぬ姿で葉子はベッドからおろされる。裸婦画のかかっている壁の前にうしろむきに立たされ、恰好のいい白いしりを半ば覆うみごとなロングヘアを自らゆすり波うたして、その髪でもって自分の肌を打つ責めを科せられた。

「黒髪の踊り」

と、甲谷が称する責めだ。

葉子はスネーク・ダンス風に腰を揺すって全身を運動させ、その反動で黒髪が波うち、はねあがり、サワサワと音を立てて、自らの肌を打つのである。

さわさわと黒髪は風の如き音を立ててみごとに膚を打ちしばいた。

## 芋 虫

もう日が暮れたのであろう。紫いろのカーテンの垂れた室の窓の外に、街のネオンの光彩がうすくにじんんでいる。今日は土曜日である。あいにくと小雨降る冷たい初冬の土曜日の夜だが、やはり街はひとしお賑やかな模様が。

葉子は、麻縄でうしろ手に括られて、ベッドにつっぱしている。うめき声が断続的に青ざめた唇から洩れて、こぼれて見える乳房にも赤く鞭痕がしるされていて痛々しい。わけでも背中から腰部にかけては爛れるような紅条の乱跡だ。背中もヒップも変形したように鞭脹れて、肉がもりあがった感じだ。

「もっと鞭を喰べさしてやろうか」

シーツに顔を埋めて呻吟する葉子の耳を男の熱い息がくすぐり、

「もっと打たれたいんだろう、めす犬」

甲谷は悦楽の微笑を目に湛えてささやく。「もうかんにん……かんにんしてくださいまし……」

毎週の土曜日の夜の責め。それがもう半年もつづいており、斯くして甲谷という男のサディズムに馴致し、すでにマゾヒズムの開花を見せているような葉子の肉体感覚は、男のささやきによって再び煽られており、かんにんするというせりふとはうらはらに、その両腕を縄で扼された姿態は、微妙にうごめいて鞭打ちを誘う色気をこぼす。

又も鞭が唸りを曳いて狂う。

「ああッ！ かんにん！……ううっ！」

柄に朱色の房飾りがつき、桃色に染められ



た外国製のなめし革の鞭で、長さ一メートル程もあるものが、びゅーと宙に唸って、びしーっ！と女体に炸裂する。

「ひーっ、うわわ——」

葉子は目をつりあげて狂おしく口をひらいて、甲高い悲鳴をあげる。縛られて不自由な牀が苦痛のために芋虫のように蠢く。

びしーっ！

「ひーっ、うわわ——」

カチリ、とライターをならして甲谷は煙草に火をつけ、くわえ煙草で又鞭をふりかざして惱ましく身悶える白い芋虫めがけて烈しくふりおろす。

「ひーっ、うわわ——」

鞭を床に捨てて、まだ長い煙草を灰皿に押しつぶしてから、甲谷の牀が躍りかかる体勢をみせた。

## サ タ ン

男が、いとも満足したことを葉子は彼の表情から察する。甲谷の表情はまるで精薄児童のように白痴めいて、うつろに瞳を宙に据えて、石のように沈黙する。それがこの男の満ちた証拠で、一種放心状態におちいつているのである。それでもものろろと手を動かし

て麻縄の結びめをほどき、葉子の縛めをゆるした。両腕が自由になっても、葉子はぐったりとのびたままで身動き一つしなかった。ただうす目をあけて自分よりひとまわり年上の奇妙な童顔の男の、放心の横顔をぬすみ見していた。

「何を見ている……」

ふと気付いて甲谷がいう。

「あなたのお顔よ」

葉子は少し声をたかめて、

「わたしを、こんなマゾ女にしまった悪魔の顔を眺めているのだわ……」

「悪魔だと……」

「そうよ、あなたは悪魔だわ……五十円で私を誘惑して、鞭の味を教えこんでしまったんだから……」

五十円で誘惑した、と葉子という意味はこうだ。

葉子が勤めている貿易会社は、十階建の貸ビルの五、六階を占め、七階には得体の知らない商事会社や広告代理店や不動産屋などが雑居しており、甲谷はその七階の小さな不動産屋で働いていた。この男はいつもみすばらしい恰好をして、五階まで降りて来て、その会社の受付に坐っている葉子に頼んで、電

話を借りることがあった。葉子は別に聞耳をたてていたわけではないが、この不動産屋の社員が会社に内緒で余禄稼ぎをしていることはありありと分かった。そもそも会社の電話が使えないからこそ他人の会社に電話を借りに来るのだった。受付は前に大理石が張っており、背後も仕切られていたから、葉子が承知さえすれば甲谷は重宝に電話が使えた。料金箱がないので、甲谷は十円玉を葉子のブラウスのポケットにいれた。そのとき彼の手はさりげなく葉子の胸のふくらみに触れた。電話を借りるたび甲谷は葉子の乳房に触れて十円玉をポケットに落とした。彼は五度目に電話を借りに来たときに、葉子を食事にかこつけた。葉子はためらった末に承諾した。その夕方、レストランで食事をし、そのあとさらに誘われて行ったスタンド・バーで、葉子はうまうまと睡眠薬入りのカクテルを飲まされてふらふらになって連れ出され、タクシーの中で完全につぶれた。彼女が気づいたとき、その肉体は旅館の一室ですでに甲谷に奪われていた。

「ねえ、僕を恨みはしないだろう？」

とそのとき甲谷はいった。

葉子は黙っていたが、恨みの言葉は何も吐



かなかった。甲谷の指が乳房に触れて来ると会社の受付でブラウスの上から怪しく触れられた感触を葉子は思い出した。十円玉を握った手が胸にさわることを五度も許容していたこと自体、すでに葉子には甲谷をうけいれる感情の下地が出来ていた、といえよう。ただその最初の情事に於て、葉子が悲鳴をあげて拒否を示したのは、浣腸責めを強制されたときである。甲谷は力づくで葉子の脉を縄で縛した。縛られて葉子はあるとあらゆる哀願の言葉をつづって、浣腸責めを拒んだが、無駄であった。

「やっぱり、あなたは悪魔だわ……」

あのときのつらさを思い出したのだろう。

葉子は裸形のまま軽く寝返りを打って、足の爪先で甲谷の毛脛を軽く小突いた。

「憎い悪魔——」

鞭打ちで朱く彩られた四肢を葉子はゆるやかにくつろげ、それから片肢を高くあげて、甲谷の肩にのせる。鉄筋のコーポラスとはいえ一間きりの彼女の住居で、土曜日の夜は子供の居る前で甲谷の責めにあえぎ、葉子はその家の中ではこう放恣に肢体をひらいたことはなく、それは甲谷の目に新鮮にうつった。

「もっと責めてよう——」

葉子は、うるんだ甘え声をだした。

「めす犬——」

甲谷の放心したような目に光が射し、彼はふたたびなめし革の鞭を把り、両足で葉子の四肢を股裂きにかけて、鞭をふりかざし、その絹のように純白な柔肌へ打ちおろした。ぴゅーっと血を噴くような一条の鮮烈な紅が女体にはしった。

## 銀 色

「寒い……」

ホテルの門を出ると、甲谷は鼻をおさえてくしゃみをこらえ、

「きみ、寒くない？」

「あなた、寒いのか？」

雨はやんでおり、少し荒い風が出て、街の上空には銀色の月がうかんでいた。気温は下っているかもしれないが、鞭打ちで全身疼き火照っている葉子は寒いどころか、その愛らしい白い顔には汗をにじませている。葉子はスーツの胸元を覆っているスカーフを外し、背伸びして男のくびにかけてやった。

「ありがとう」

甲谷は妙に神妙な口調だった。

「どうしたの？ 急にふさぎこんじやったじ

やないの？」

路地を辿りながら葉子は言った。質屋の前を通りすぎるとき、葉子はあの猫目石に未練を覚えた。いつ自分の指に戻ってくるのか不安だ。

「俺、もう乞食にでもなるより仕方がない」と甲谷はいう。色々と仕事をさがしてみたが、この物価高の時世に一人前喰えるだけの給料を出すところはどこもない。と甲谷はいらだたしげに舌うちしてそう言った。彼はふてくされたようなせりふを吐き、

「世間の奴は目がねえ。みんな、馬鹿ばかりが揃ってやがる」

「やけにならないで」

「いいかげん、やけにもなるさ」

寒いといっていた甲谷が、吹きさらしの公園のベンチに腰かけると、

「五十万ほど金を都合してくれ」

「そんなお金——」

ないわ、という前に甲谷の平手打ちが葉子の頬にとんだ。つづいて黒髪を絞りあげて、

「その気になったら作れる金だぞ」

「どうしろとおっしゃるの——」

「競売」

「え？ 競売？」



「そう、おまえの軀を売るのだ」

「——」

「立て」

髪をひっぱられて、葉子はふらふらと立ちあがった。

「どうしようというの？ 変な冗談おっしゃらないで……」

「めす犬」

甲谷の服のポケットからずるっと蛇が這い出したような感じで鞭がとり出されると、ぬらりと宙にくねってびしーっと葉子のしりに炸裂した。

「ああ——」

髪の毛を引き絞られている葉子には、それは不意の鞭打ちで、がくっと腰が折れて、地面に膝をつく。つづけて鞭の二撃目が白い細くびを打つと、葉子はまさに犬の姿で四つばいになり、

「許して——」

と、ふりむいた目に、夜空の銀色の月が映って、その皓々とした銀の色がもの哀しく、「なにもこんなところで責めなくても……」葉子の目から銀のなみだ……。

## ゆ め

甲谷を乗せた電車がパンダグラフから青いひかりを発してホームを離れて行くと、葉子はふかい溜息を吐いて、かたわらのベンチの端に腰をおろした。椅子に触れる腰部がづきづきと疼いて、男の責めのなごりがそこに凝固している感じだった。葉子が乗るべき下り電車はまだ来ない。葉子は閑散とした夜の駅のホームで、両目をつぶり、自ら愛撫するように腰をなげた。疼き痛む腰になまなましい恋情のようなものがあって、葉子は自分のこの軀が競売にかけられることに不思議と悔いはなく、殉虐の陶醉のようなものさえその胸に漂っていた。

電車は空いていたが、葉子は吊皮を握ってガラス窓から街の夜景を眺めた。会社のビルが見え、ついさっきまでその一室で男の責めにあえいだホテルのネオンも、屋根並の間に一瞬、目にうつって過ぎ去った。

郊外のS駅で電車を降りて、そこからバスで十五分ほどついやして、葉子はアパートに帰り着く。

「ママ——」

葉子のヒールの音をききつけて、ひとり娘のくみ子が隣のドアから飛び出して来る。甲谷とのデートで遅くなる場合、葉子は残業だ

といつわって、電話で隣室の住人にくみ子の守りを頼むのだ。

「すみません、お世話になりました」

葉子は丁寧に礼をいって、駅の売店で買ったチョコレートと、その子供と自分の娘とに分け与えた。

くみ子と一緒に風呂にはいると、可愛いちいさな娘は母親の白い軀を彩っているむざんな朱線におびえ、黙ってまじまじみつめる。

どうしたの？ とおきかず、恐怖して沈黙しているのだ。葉子も何も言わず、まずくみ子の軀を洗ってやり、そのあとでぬるま湯をかけて全身に淡くシャボンの泡を立てたが、膚になめし皮の鞭のその香ばしい革の匂いがしみついていくような気がした。

葉子はその晩、奇妙な夢を見た。

背景は曠野である。

草木の影すらない焼け爛れた赤褐色の曠野に鉄道のレールが赤錆びて曲りながら地平線まで達しており、その地の果てに灰色の夕陽が沈み、レールに沿って一列に佇んでいる全裸の女群が灰色の逆光を浴びて灰色のシルエットで浮かび立っていた。それは囚人の様な静かな行列であった。首には名札がかかっており、そしてめいめいその若い白い腹部に墨



で金額をしるされていた。

女たちは、いっせいにしゃがんでレールの脇で小用を足し、身を起すのもまた同時であった。小皿のブドウを喰べるのもまた揃って喰べた。ブドウを喰べながら全裸の女奴隷たちは少しずつ前へ進んでいるのだった。

「いそげ！」

と甲谷が葉子の裸の背を鞭打った。

「ひー」

と泣きながら葉子は走った。

走っても走っても追いつかぬ。

「走れ！ めす犬！ 走れ！」

背骨も尾底骨も砕けるほどに鞭打たれ、甲谷の長皮靴がしりを蹴上げる。葉子は、けんめいに、はしる。しかし、走っても走っても追いつかぬ。そのもどかしさに葉子はうなされ、そしてそこで、ふっと夢が切れた。

葉子が目をあけると、娘の大きくひらいた目とぶつかった。葉子は、うなされて余程声をあげたのだろう、くみ子は、その声で、めざめたらしい。

「ママー」

怯えてすり寄るのを抱きしめながら、葉子はパジャマの下で自分が腋の下に汗を掻いているのを知った。

## ビニール布

日曜日の朝は平日よりアパートの中は静かだが、外の遊び場は子供たちの声がかまびすしい。

葉子が漸く床を離れたとき、くみ子は部屋の中に姿がなかった。ひとりで着替えて、外の遊び場で遊んでいるのだろう。念のために葉子がカーテンをめくって外を見ると、くみ子は活発にブランコ遊びをしている。その揺れるブランコの向こう側から、ひとりの男がぶらぶらと近寄って来ているが、見るとそれは甲谷だ。

(あッ)

と言って、葉子はいそいで鏡の前にはしまった。臉の脹れた起きぬけの素顔を見られるのがいやで、あわてて朝の化粧である。

甲谷は室に入るとすぐ、葉子に浣腸責めをおこなった。言葉少なな、一種事務的な、或は儀式的な雰囲気で、葉子はつらい羞かしい責めに甘んじた。

「変な雰囲気……」

と葉子はつぶやいて、あとは腸内に充満した薬液のもたらす当然な強烈な作用と、その作用を意志ではばまねばならない言語に絶す

る抑制の苦痛にうめき声をもらし、畳を爪で掻き裂きながら苦悶する。

五百CCのガラス管にこぼれるほど満たされた薬液を、いっきに注入されるのだから、葉子は、たまらないくるしさだ。

課せられた五分の忍耐時間の、その刻のすみが気の遠くなるほど長い。

「ゆるしてください……あなた、許して……」  
「どうした、五分や六分なんでもないだろうが……ウフフ」

甲谷は煙草をくゆらして笑う。昨夜来の空気の濃んだ部屋の中で、煙草のけむりが青い帯のように宙に漂い、その帯の下で断末魔のうめきにも似た凄絶なうめき声が畳を這って流れる。なみだを流し、化粧した頬がすっかり青ざめて、新倉葉子は苦悶する。

甲谷は時計を眺め、その長針が五分の経過を示すと、やおら畳の上に二米四方もあるう広いビニール布をひろげる。

「さあ、やれ」

と彼は言った。

「畳をよごさぬように、淑女らしく、つつましくやれ」

「ああ——つらい——」

「さあ、やれ、めす犬！」



鞭が葉子の柔肌をしばいた。

## 太 腿

甲谷はその責め一回きりで、あとは手をくださなかった。縛られ鞭打たれ、さらに数度にわたる浣腸責めを執行されることを覚悟していた葉子は、はっとするというより、むしろもの足りぬもどかしさを胸底に覚えた。

それは彼女の目にあらわれて、

「娘が居るから、家で責められるのはもういやだなんて昨日は言っていたが、結構その気になってるじゃないか」

と、身づくろいをする葉子を横目に見て、

甲谷は做った皮肉なうすわらいをうかべて言った。葉子は言葉を返さず黙ってパンティを腰にまとった。

葉子が隣に子供のことを頼んで前の広場に出ると、甲谷はさすがに人目をきづかう様子で、電柱の陰に後姿を見せて佇んでいた。

暗れていたのが曇ってきていた。

うそ寒く、葉子はトキ色の合コートを着て来ている。

「お待たせしました」

その均整のとれた小柄な軀を、これから競売にかけられるための外出である。

「すまん……」

タクシーを拾うために表通りまで歩きながら、甲谷がそういうと、葉子は胸が迫って目頭がうるんだ。

「今夜ひと晩だけだ、辛抱してくれ」

「私の軀で、ほんとにまとまった金が出るのですか……」

「十万でもいい……とにかくそれだけでも、まとまった金が出来れば俺は立直れる」

あてにならないと葉子は思う。

「辛抱してくれよ、なあ葉子……俺が立直って事業を始めたら、おまえに会社勤めなんかさせはしない」

くみ子も連れて、三人でハワイ旅行にでも行こう、という。

「そうね、そうなりたいわ」

葉子は淋しく笑った。この男のいうことはますます実のないたわ言のように聴こえる。

こんな男に身を犯され、あぶていっくな肉体の奉仕をし、そうして奴隷同然に身を売られる……

奴隷同然ではなく、まさに奴隷そのものだと葉子は思い、怒りとも哀しみともつかぬ感情で小刻みに軀がふるえる。

表通りに出ると風が強い。葉子はコートの

袖を立てる。甲谷は大きく手を振ってタクシーをとめた。

「元井町へやってくれ」

と甲谷は命じた。

やはりそうなのか、と葉子は思った。

元井町という区域は、いわゆる暗黒街で、秘密興行、売春、悪徳金融等が暴力団の組織体の中で、巧妙で大規模な営みをしており、県警の刑事が過去に二人もその界限で行方不明になったままだといわれる。

新聞にも伏せられているそういう物騒な話を、葉子の耳にいれたのは、葉子の亡夫であった彼女の夫は、生前、印刷屋の外交員をしており、警察関係の印刷物も担当していたのでいわば警察通であった。

「わたし恥かしいよりも怖くなったわ……」

走る車の中で葉子は、ちいさな声で甲谷に言った。

「何もこわいことなんかないさ」

甲谷はそういうと、ポケットから手を出して葉子の膝に置くと、ゆっくり太腿へ滑らせた。手が胸へのび、乳房を弄られだすと葉子は半ば受け入れるように半ば拒むようにふかくシートに身を沈めた。甲谷の手の動きはた



ちまち責めに変る。乳首をちぎれるようにつまみ、鼓を打つように腹を打ち、太腿の柔肉をぎゅーっと人差指と親指で力いっぱい握りあげる。つねられるたびに葉子はウウン……とひくく苦しげに呻き、

「ゆるして……」

その声に、ふと妖しい陶醉のひびき……

葉子の全身に被虐の感情が波打ち、スカートをめくって、雪のように白い太腿の膚に印されたむざんな赤痣を甲谷に見せ、頭を垂れて自分も眺める。

「私を売って……」

この男のために人肉市場の競売台<sup>せり</sup>に立たされるのが、しびれるような幸福感で今、新倉葉子の胸をみたした。

「おお、売ってやるとも」

「ああ、早くせりにかけられたい……」

目をつぶって、葉子は吐息のように胸の奥からその言葉を吐き出した。

元井町はたしかに暗黒街だが、しかし葉子が連れて行かれた場所は、この町にあって勇敢にも暴力追放の標語ポスターを扉に貼っている法律事務所であった。法律事務所という看板がかかっているが、ふつうの家屋で、つまりは弁護士の家であろう。

手狭な庭に植込みをあしらひ、窓には青いカーテンがいっぱい引かれてひっそりと静まっております、日曜休業で、一家中、留守しているといった、その家の印象であった。

迷路のような路地の奥の穴倉か、ビルの地下室、又は豪華なマンションの一角……そうした場所を予想していた葉子は意外な思いをしたが、しかしかえって一面ぶきみでもあった。

甲谷が玄関の木製のドアをノックすると、葉子にはわかにおびえたふうにあとずさって「葉子！」ピシッと甲谷の平手打ちが頬に飛び、葉子は打たれた頬をおさえておとなしくなった。

のぞき窓から眼鏡の顔がのぞいた。うすい茶色の色眼鏡だ。

## 売 ら れ る

薄茶色の色眼鏡をかけた中年の男は、二人を中に入れて扉をしめると、葉子の肩に手を置いてじっと顔を見つめたが、

「なるほど、美人だな、甲谷さん」

「いいタマでしょう、瀬越さん」

と甲谷は答えた。

「躰はどんな工合だろう、早速拝見するぜ」

瀬越という名のその男の声はひくく、口調はやくざっぽい。容赦ない手つきで瀬越は葉子のスーツに手をかけた。

「ああ——」

うそ寒い廊下で生まれたままの恥かしい姿にされると、葉子は両手で顔をおおって泣き出した。

「すばらしい、めす犬だ——」

きゅっとくびれた葉子の腰をなでて、瀬越は賞讃し、

「甲谷さん、いい犬を飼っているネ。うらやましいぜ」

葉子をうしろむきにさせて、男はその美しい背面を眺める。男の眼が背骨の節を数えるように撫ぜ、尾底骨まで撫でおろして、それから前むきにさせて丹念に検べ始めた。きわめてみだらな検査ぶりだった。冷酷な視線が這いまわる間、葉子は濡れた目をとじたりあけたりして、まさに犬のようにあらい息を吐いていた。

「それでは会場へご案内しよう」

色眼鏡の奥で男の目がまだみだらに光っているのを、葉子は見返しながら、

「早くせりにかけてくださいませ」

「ほほう、いい度胸だね、お嬢さん」



そこは書斎であった。畳数にすれば八畳ほどの古ぼけた洋室で、古風なマントルピースの棚にも法津書があふれていた。

男が二十人ばかり、色あせた緑色の絨氈の床にあぐらをかいて坐っており、全裸の姿で登場した新倉葉子のその羞らいに満ちたういういしい容姿に、いっせいに拍手をおくる。まるで割れるような拍手の音がしばらく鳴りひびいた。葉子は顔色がまっさおで、人の姿も物のたたずまいもスリガラスのようにぼやけて、殆ど目にはいらなかった。ただ男たちの拍手の音が嵐のように耳の中で鳴るばかりだった。

「登れ！」

耳元で甲谷の声がわめいた。

「……」

「さあ、早く！」

びしっ、うしろからふくらはぎをしばかれて、葉子の鹿のような脚が壇へかかる。

ブロックを積みあげ、がんじょうな舟板をさし渡した競売台。

その台上にすでに三人の女が並んでいる。

いずれも一絲もつけない裸身で。

ロープで両手を括られて万才をしたかっこうで。

葉子は右端に立たされ、両手を吊るされて腋の下まで露わにして万才の姿になった。その作業をしたのは銀髪の中年の男であった。いかにも紳士然としたインテリ風な男だったが、この家の主人であろうか。その態度からして、どうもそうらしかった。

弁護士の前頭とりで、せりが始まった。

まず左端の奴隷から、せりにかけられる。

二万、三万、四万……と値はせりあがって弁護士が奴隷の裸身に鞭を入れると、奴隷は哀れな悲鳴をあげて苦痛に腰をくねらせ、すると一そう男たちは興趣を高めて、値はさらに高額になっていく。

二人の女が、せり落とされて三人目のせりが始まった頃から、葉子は気が鎮まって来ており、壇上高く万才をさせられた姿で、静かに甲谷の顔に視線をそそいでいた。

甲谷は金を受取ったら、そのまま姿をくらしまして都落ちしてしまう気ではあるまいかという疑惑が、いま葉子の胸に生まれている。見つめれば、ふっと目をそらす甲谷の様子から葉子は、そういう予感が生じた。

(私を売って、逃げてしまう気だ……)

葉子は甲谷の心を読んだ。

(あの猫目石の宝石も、もうこの手にはもど

らない……)

葉子は悲しかった。宝石に未練がなくなつた。

葉子の番が来た。

たちまち十万円台のせり値になった。

葉子は裸身に鞭を入れられ腰をよじって泣くと、二十万！ という声がかかった。

さらに、せりあがる。

「もっともっと、高く買ってくれ！」

甲谷が叫んで壇上に躍り上ると、弁護士の手から皮鞭を奪って、白い裸形に烈しく鞭を入れた。

「ああ！」

葉子は苦痛に身悶えて、それがきわめてエロティックな踊りに映るのだ。

「ああ！」

葉子は、なみだを流す。

「ああ！」

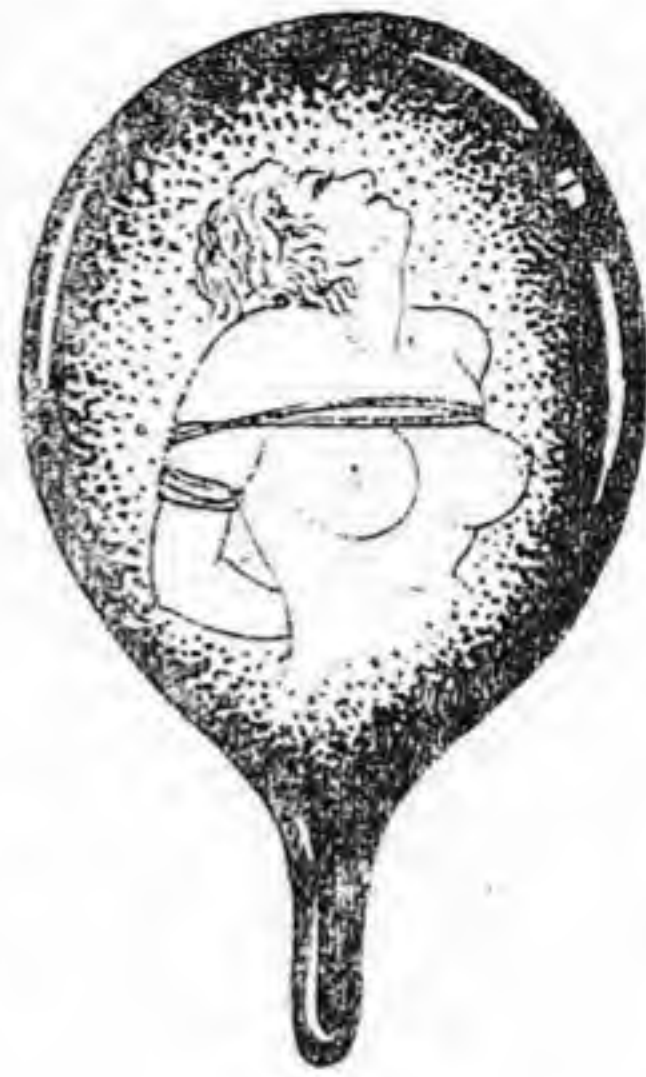
新倉葉子は悩ましく全裸の腰をくねらす。その黒い濡れた瞳は殉虐の愴美と恍惚のいろに、ぬらぬらと妖しく耀いていた。

(了)

(カットの筆者・連絡乞う)



## ある娘の独白



## 「イチジクと君子」

## 緒 方 君 子

「かんちょう」それは何と素晴しく、しかも魅惑的な文字であり、言葉なのかしら。

すくなくとも君子にはそう思えてならないのです。君子の愛読する奇クには「エネマ」と書かれている事も多い様ですが「エネマ」と云う単語より「かんちょう」と云う言葉の

ニュアンスが、たまらなく好きなのです。

「エネマ」と云う単語には、何となく医療を目的とした冷たい感じを受けますが、浣腸と云う言葉には無限の親しみを感じるのです。

空然、こんな不躰な事を申し上げる、しかもまだ二十才になったばかりの小娘である君子の事を、世間一般のお嬢様方とひどくかけ離れた「変態女」と思われた事でしょね。

どの様にお思ひになろうと、弁解は致しません。全くその通りの女ですから。

でも、君子が狂おしい迄に「浣腸」を、正確に申しますなら「イチジク」を愛する事を除けば、他のお嬢様方と何ら異なるところはないと思います。

今一つ、強いて異なる事と云えば、君子と同じ年代のお嬢様方の多くが、深い肉親の愛情に包まれながら、再びやって来る事のない青春時代を謳歌していらっしゃるのに比べ、君子の場合は、小さい時に両親を失った為に中学を卒業すると同時にこのお店に住み込み早朝から夜更けまで働き続けているという事です。肉親といえは佐賀県の寒村で細々と

農業を営んでいる「おじ夫婦」がいるだけで忙しさも手伝って、ほとんど出かける事もなく、今ではすっかり疎遠になっています。

でも、そんな生活環境の違いだけで、他は少しも普通のお嬢さん方と変る事はなく、むしろ平凡で控え目な娘だと思っていますし、そんな事で一度としていじけた気持ちになった事はありません。常連のお客さん達も、君ちゃん君ちゃんと云って可愛がって下さいます。

それは君子だって二十才の娘ですもの、お店にやって来る若い幸せそうなカップルをみると、人並みに、恋というものに憧れることもあるし、思い切り遊んでみたいと思う事もしばしばです。だけど、私の働いているスナ



ツクは、小さいながらも結構忙しく、その上従業員と云えば、高子お姉ちゃんがやめて以来、美佐ちゃんと二人だけなので、お休みもろくろくとれず、好きな人がいたとしても、とてもデートするひまなど見つかりそうにもありません。

だけど君子は、それを特につまらないとは思っていません。だって君子にはかけがえない素敵な恋人がいるのですもの。ピンク色の可愛らしい形をして、いつでも君子をなぐさめてくれる恋人「イヂクちゃん」

お店に来るお客さんの中には、昨日までも仲の良かった二人だったのに、今日は、目にいっぱい涙を浮かべた女の子を残したまま冷たく去って行く男の人がいます。どんなわけかは知りませんが、傷つくのはたいていが女性でしょう。だけど君子には、絶対精神的に傷つけたり裏切ったりする事のない素敵な恋人イヂクちゃんがいるのです。

× ×

君子の一日の時間の中で、一番早く訪ずれるのは黄色の時刻、次にやって来るのは赤い時刻、そして褐色の時刻、最後に君子の安らぎ、青い時刻がやって来るのです。静かに雨の降る青い時刻は君子によって最高にイカシ

タ時刻です。

スペシャルブルータイム。その時刻に君子はイヂクちゃんとのデートをするのです。小説なみにいえば、苦痛と陶酔の中に身を投じもたえる君子の時刻です。

美佐ちゃんは通勤なので、午前零時になると帰って行きます。後は完全なプライベートタイムとなり、誰からも君子の秘密をのぞかれる事も、わずらわされる事ありません。ゆったりとした気持で好きなコーヒーを綴りながら、イヂクちゃんのズングリと愛嬌のあるウェストからスナリと伸びた触角の先で、手のひらに「浣腸」「かんちょう」「KANCHYO」と文字を綴ると、くすぐったくて思わず肩をすぼめて、くすっと笑ってしまします。

どうして君子は、これ程までにイヂクが好きなのでしょう。先天的という言葉をよくみかけますが、そんな要素もあるのではないかと思います。浣腸の器具にはガラスの注射器みたいなものや、ゴム球のついたのがある事も知っています。でも君子には、興味は大いにあっても何だか怖い感じで、やっぱりイヂクが最高です。

さっき先天的にと申しましたが、君子がま

だずっと幼なかつた頃、まだ小学校に入学する以前から、近所の子供達とお医者さんゴッコをさかんにやっていたのを覚えています。大抵、男の子が先生で、女の子が患者になっていた様です。その時男の子の「先生」が診察するところも大体きまっていた、いたずらする事を好んだ様ですが、君子は浣腸の真似をされるのが、とても好きでした。

ある日君子は、家の救急箱から本物のイヂクを持ち出し、男の子に浣腸されて着物を汚し、当時病身ながらまだいて呉れた母さんに、ひどく叱られたりしたことをおぼえています。その頃のイヂクは、今みたいなやわらかいポリ容器ではなく、かたいセルロイドで出来ており、指でつぶす際、ポコンポコンと音を立て、一度つぶれてしまったらなかなか元に戻らないものでした。それに比べると現在市販されているイヂクはすぐ元に戻るしお薬のほとんどが無駄にならず大変便利だと思ひます。

君子は、一度使用したイヂクの容器をすてないで、それにお薬を吸い込ませて何回も使用する事にしています。貧しさから出た知恵といったところでしょう。

薬局で三十瓦二個入りのイヂクを購入す



ると八十円で、一個当りの単価が四十円。最近は一度に三個も使う時がありますので、君子が一カ月間に消費するイチジクは四十コから六十コという計算で金額にすれば二千円前後にもなるのです。それに「奇ク」も買いたし、君子のこの小さな楽しみには、月々二千五百円以上のお金が必要です。わずかなお給金の中から、それだけの出費は楽ではありません。そこで考えついたのが前記の方法なのです。五百瓦のグリセリンを三百二十円で買って来て、それを二倍に薄め、一度使用したイチジクの容器を利用すると、一個の単価は十円以下となり、経済的になりました。でも、一個のイチジクでいつまでも使うとなると、とてもわびしい気持がしますので、十回使ったら、そっと裏の小川へ流す事にしていきます。

それが、君子のささやかな贅沢といえは贅沢なのです。

こんなにひんぱんに、しかも多量の浣腸を行なって体に害がありはしないかと思う事もないではありません。たまに行なう程度なら健康の為に良いかもしれませんが、君子のようにならぬことでは、害があるのが当然でしょう。激しい下痢が続くかと思えば、ひどい

便秘のくり返しで、もとはグラマーの方だった君子なのに今は幾分やせて来たようです。きつと長生きは出来ないでしょうね。それでもいいんです。今の君子は、イチジクなしでは生きて行けそうにもありません。決してオーバーではなく、少しぐらいの害は、君子を夢中にくれるイチジクちゃんへの恩返しだと思っています。

「奇ク」に掲載されている、お姉様方の浣腸記事に、薬局に出かけてイチジクを買い求めるのが、とても恥かしいと書いておられるのを見かけますが、君子はもうすっかり度胸がついてしまって、平気で買えるようになりました。むしろ薬局へ出かけて「イチジク下さい」と言うことが楽しくさえ思えます。「奇ク」の購入にしても全く同じです。いえ、奇クの場合は恥かしくないとは申しません、やはり特殊なものですから。でもグズグズしては買えないのであります。だから発売される二十七、八日頃になると、ひんぱんに書店に足を運ばなければなりません。何カ月かまとめて出版社に注文すれば、そんな悩みも解消出来るでしょうけど、現在の君子には出来ません。でも、やはり君子にとって「奇ク」と「イチジク」は切り離せないものです。

さっき、君子は先天的に浣腸を好む女なのかもしれないと申しましたが、小学校に入學してから、母の死と云うショックな出来ごとなどもあって、いつとはなしにお医者さんゴッコもしくなり浣腸の事も忘れていました。

ところが、突然に、ほんとうに突然に、忘れていたものが騒ぎたつ事件にぶつかったのです。それは、君子がこのお店で働くようになってから二カ月程過ぎた夜の事でした。

美佐ちゃんはまだいなくて、高子お姉ちゃんと二人で働いていました。お姉ちゃんは、以前ナイトクラブで働いていたとかで、一口に言えば、いわゆる姐さんタイプの人で、とても気が短く、口のきき方も荒っぽい人でしたけど、根は単純でお人よしで、君子がおねえちゃんと呼ぶのが、とても嬉しいらしく、何かと可愛がってくれていました。お姉ちゃんも住み込みでしたが、時々ヤクザみたいな人がやって来て、その人と外泊していたようです。

ある日、お店をしめてから、お姉ちゃんを銭湯に誘いましたが、風邪ぎみだからという事だったので一人で行ったのですが、銭湯は何かのことで臨時の休みだったのです。仕方



なくお店に帰り、いつものようになにげなくお姉ちゃんの部屋のドアをあけてびっくりしました。ドアを閉じる事さえ、しばらくは忘れていた程の驚きでした。

その時、お姉ちゃんの顔に、狼狽の色が走りました。しばらくするとそれが怒りに変わり、君子をキッとにらんだお姉ちゃんの顔はそれまで見た事のない怖い顔でした。ようやく我に帰った君子は、ドアを閉じるなり自室にかけ戻り、ドキドキする胸を押えかねてポーツとしてしまいました。

それはとても信じられない程の光景だったのです。下半身を露出したお姉ちゃんが自身自身の手でイチジク浣腸をしていたのです。只それだけなら、便秘の手当をしていたと考えられませんが、不思議な事にお姉ちゃんは、自分の足首と大腿部を、ひもでしっかりと縛っているではありませんか。(今の君子にはその意味が充分、理解出来そうです)

しばらくすると私の部屋のドアが、荒々しく開かれ、お姉ちゃんが、幾分青い顔をして入って来ました。しかも、その手にはイチジクが握られていたのです。

「君子、あんた見たわね」

とても低い声でした。私は何と答えて良い

のかわからないまま、只おどおどするばかりです。

「何とか言ったらどうなのよ」

「ごめんなさい。あたし、知らなかったから……お風呂お休みだったの」

「そんな事はどうだっていい事さ。私の秘密をのぞいた以上、只では済まないよ」

「ごめんなさい、ほんとに悪気はなかったのです」

「うるさい」

お姉ちゃんは言うより早く、君子の頬を激しく打ちました。

「もしお前が見た事を誰かにしゃべってごらん。その時は、どんな事になるかしれないよ」

君子の目からは涙がポロポロとこぼれました。頬を打たれた事より、君子にだけはいつも親切にして呉れたお姉ちゃんを怒らしてしまった事が、たまたまなく悲しかったのです。

「いいかい。さあ、お前も私と同じ事をするんだよ」

「えっ」

「自分で浣腸しなって言ってるのさ」

お姉ちゃんは、私の目の前にイチジクを投げたのです。

「お姉ちゃん、許して。ほんとに誰にも言わ

ないから」

「いいから下着をとるんだよ。早くしな、もっとなぐらいたいのかい。ええ」

お姉ちゃんは、とうとう君子を押し倒してしまいました。君子が激しく抵抗すれば何とかさけられたかもしれませんが、でも、その時のお姉ちゃんの表情はすごく、君子はふるえ上ってしまったのです。

「お前が私のを見た以上、私もお前が浣腸する所を見る権利はあるさ」

「お願い。他の事なら、どんな事でもお姉ちゃんの言う事をききます。だから、かんにんして」

「あまったれるんじゃないよ。よし、それなら私がやってやる。こうするんだよ」

と言うより早く、お姉ちゃんは、いきなりイチジクをつき立てました。かすかに痛みが走り、君子は声を上げて泣きました。まるで子供のように。

でも、不思議な感情でした。お姉ちゃんの仕打ちが悲しいというのではなく、甘ったるいような、何か説明のつかない気持。お姉ちゃんの怒りを静めるためというのでもなく、敵わないからじっとしていたわけでもありません。恥かしい事ですが、君子は快感を感じ



とったのです。

「いいわね。誰かにしゃべったら承知しないよ」

私は、今にも暴発しそうな便意を必死にこらえながら、お姉ちゃんの言葉にコックリとうなずきました。

そんな事があってから間もなく、高子お姉ちゃんは、お店をやめて京都へ行ってしまいました。君子が、長らく忘れていたものを思い出し、再び浣腸の虜になったのは、その時以来のことです。

もしあの時、お姉ちゃんに浣腸されなかったら、君子はこんなに楽しい秘密を持つ事もなく、只あくせくと働いているだけだったかもしれません。今ではお姉ちゃんの事が、なつかしくてなりません。

お姉ちゃんがこのお店にいる間に、恥かしくても、君子がとても浣腸の好きな事を打ち明けて、お姉ちゃんに思い切り浣腸をしてもらわなかった事が悔まれてなりません。

「イチジクと君子」それは絶対に離れられない仲です。

でも最近、君子だけの秘密にして置く事が淋しいと思うようになったのです。大それた事かもしれないけど、どなたか素敵な男性

にイチジクで責められたい（責められるという言葉も奇クで覚えました）と思うようになってきたのです。他人の手で浣腸され、極限いやそれ以上になっても許されないで、泣き叫びながら苦痛を耐えさせられる。……それは、どんなに素晴らしいことでしょう。

今では自分でイチジクを注入してから、浣腸で女の人が責められている小説を読む事にしています。そうすると、いつの間にか君子自身が小説の登場人物になったような気分になれるのです。そんな時、君子は両手を背中に組んでゴロゴロ転げ廻る事を覚えてしまいました。

きっと、君子は生まれつきの「変態」なのでしょうね。こんな君子の事を、きっと手のつけられないズベ公で、処女なんてとくに失くした女を想像される方もいらっしゃるでしょう。でも信じて下さい。君子が病的に浣腸を好む異常な女である事は間違いありませんが、でも今日まで男の人と深くつき合ったことは一度もありません。高子お姉ちゃんとのことで、再び浣腸に目ざめてからは一層純潔を守り続けるようと思う心はつのるばかりです。君子はただ、ほんとうに君子の事を理解して下さる男性に上げたいと思う一心です。こん

な君子を理解して下さって、精神的にはほんとうに愛して下さる素敵な男性が現われたら例えその方の行為が君子にとって耐えられない程、荒々しく苛酷なものであっても君子は喜んでその責めを受けたいと夢んでいます。

でも、君子のいつていることは空想に近いのかとも考えます。心ではだれよりも愛しながら、行動では苦しめたり責めたりするなんて、実際に出来ることでしょうか。あんなに可愛がってくれた高子お姉ちゃんだって、あの時には本当に怒って、君子に恥をかかして自分を守ろうとしたに違いありません。それはお姉ちゃんと、今、君子が考えている素敵な男性とは一緒にならないでしょうが、奇クに出てくるような「愛情の責め」って、あるのかなとも思います。

実際には運命を待つしかないでしょうが。せめて誌上でだけでも結構です。どうか奇クファンのお兄様。思い切り君子に浣腸を下さい。お姉様でもいいんです。五月号の有田久美子お姉様のまねをしてしまいました。久美子お姉様。ごめんなさい。あの高子お姉ちゃんは、今頃どうしているでしょう。私と同じ事をしているかしら。もう一度お逢いたいものです。



## 女性乗馬考

## ヘレン女史の調教

佐野 寿



今回は、婦人騎乗者に関しての従来の固定観念やマンネリに陥る危険のある空想的概念に、少しばかり批判のメスを入れて考えて見ようと思います。そうしますと、私共は非常にしばしばアマゾンに関してある種の間違った錯覚に陥り、その思考による空廻りというあやまりを犯している事に気づきましょう。

第一に、以前に少し私が指摘したように、「馬に乗る婦人」なるものが、ただちにサジスチンであろうといった固定概念に基づく誤った憶測による事が多々あることでしよう。殊にマゾヒストにとっては程度の多少はあっても、彼が婦人の乗馬に関するシーンや読物やその方面のフォトを眺める毎に、何かそれとは別の（例えば人間馬に跨る女神等）ものを容易に連想し、微弱ならざる刺激を脳裡に

浮かばせるということは、あながち不自然だとはいえませんが、確かにそれはそれなりの理由はあります。従ってある気の弱いマゾヒストが今問題にしている、馬に乗る女性というものを理想化、概念化により強烈なサジスチンとして自分を男奴隷馬とし、その上に支配してもらいたいというM的欲望にかられるという心理的過程は、かのフロイト学説にもある如くアブノーマルではないのです。

ところが現実には、たとえどんなにM男が『馬に乗る婦人がSであれば良いのに』という期待にも拘らず、アマゾンの大部分というものは、彼女等が乗馬を純粋なスポーツと考える限りに於て、恐らくSである等と断定するのはおろか、憶測することすら、むつかしいということを知ったならば、一種の意外さに驚くことでしよう。

故にM男の馬化願望というべき一種の空想的希求なるものが「乗馬する女性」と「サジスチン」をダイレクトに結びつけようと試みるわけですが、この試みが往々にして失敗に帰するという悲哀を残す原因を生むのでしよう。勿論それが皆無とはいえませんが、馬に乗る女性が偶然サジスチンである場合は、私共が想像する程多くはないことは確実にいえ



ます。けれどもいえますことは、非常にしばしば、例えば貴族、上流家庭のお嬢さん達が周囲の人々からその美ぼうと馬に騎<sup>の</sup>れるということで、ちやほやされて次第に思ひ上がるようになつたり、召使いを人とも思わなくなり、激しい口調になり、気性が荒々しく男勝りになるというケースは、洋の東西を問わず昔からあることですが、これと生来のS性と直結出来るとは考えられないことでしょう。

従って、それは周囲の環境により後天的に



サジスチンとなり、馬に対しての徹底した服従を要求するようになるのです。

ここに実例として写真をご覧下さい。これは最近の傑作、怪奇映画「黒馬の哭く館」の一場面ですが、ジェーン・フォンダ主演の目の覚めるような鮮かな乗馬シーンからのものです。余計な解説はいたしません、特にサイブツ姿でお尻丸出しの姿での海辺での乗馬シーンは、マニヤを喜ばしむるに十分で、又ラストシーンで、暗やみの中へ殆ど全裸の

アマゾンが、猛然と青年の死霊の乗り移った黒馬に騎乗して疾風の如く駆けまわるあたりは、興奮のあまり胸がむずかくなる程でした。このフィルムでも、女主人のごうまんな思ひ上った様子が殊の外よく描かれていました。女乗馬者の壮絶美が、かくもリアルに映された怪奇映画も珍しいでしょう。すっかり感服してしまいました。

特に黒光りのする気味悪い大きな馬に、勇敢にも思い思いのスタイルで激しく騎乗する女主人フレドリックは忘れ難く、気品を失わない程度に充分エロティックでありました。やはりアマゾン物に関しては、ジャンヌダルクの

伝統以来のフランスあたりが、先駆者じゃないかと思えます。ラストシーンは、人馬一体となって山火事の起こっている沼沢地へと死をめざして飛び込む所ですが、本格的なアマゾン映画といえましょう。

話は変わりますが、今年の夏に私は知人の別荘のある旧軽井沢へ一週間程行って参りましたが、ある小さな湖辺のそばで偶然、外人別荘地帯を通り、そこで外人宣教師のグループの人々の生活を、ほんのわずかばかりでしたが見学するチャンスがありました。中でも一番ショックだったのは、二、三人の中年の背のすらりとした外人の女の方々が、非常にたくましく小麦色に日焼けした肌を大胆に見せつつ、ショートパンツ姿で、これ又スタイルのすばらしい栗毛の愛馬にずっしりと堂々と跨って、蹄の音たからかに進んで行かれる姿で、思わず足がすくみ、すばらしい光景に夢ではないかと思いつつ、立ちつくしてしまいました。

乗り手の鞍前方に白樺のこずえで作った答がさしてあり、上品な亜麻尼油色の髪を黒のリボンで結び、白いシャツポをかぶった婦人もいましたが、もう彼女等は乗馬が日常のこととなっているらしく、誠に落着いた、リリ



しい騎乗ぶりで、めいめいの美しい顔にかすかにえみさえ浮かべて、ずしつとばかり優越感と征服感に満たされつつ、馬を進めて行くシーンは、あたかも別天地のようなフレッシュな印象を受けずにはられませんでした。

ショートパンツ姿の外国婦人達は、すばらしくよく発達した乳房を馬の上下振動とともにゆらせながら、たくましく太い股と、すらーっと長い足でギュウギュウ馬胴をしめつけ馬に何かかん高い、又なやましいが厳しい声で命令していました。馬は普通の体格でしたがグラマーな婦人に禦されては、まるでかなわないと思われ至極従順さを見せていましたし、気の毒な程に見えました。

三人のうち中年の二人の女宣教師は、ノースリーブにショートパンツで、足にはいわゆるロースの皮ひも式のしゃれた靴を、他の十七、八才の人は、ビキニではないが水着で、誰はばかりことなく堂々と静じやくな湖畔を乗りまわしていました。私には、どうしても夢だとしか感ぜられませんでした。こんなすばらしい光景が我国でもあるのかと。

中年の外人女の人のショーツのポケットに人蔘が見え、腰には黒い小型のバッグがついていて、その首には金色の十字架がビーズに

つながって垂れ、ゆれ動いていました。後で判ったのですが、この外人別荘又は部落では、夏期に農家から乗用の馬を数頭月ぎめで借りて、自分達だけで馬を乗りまわしたり世話をするのだそうです。キャンプ所から遠くない空地には、ちゃんと馬場すら出来ていましたし、電灯が四、五コあり、夜でも馬術を楽しめるようになっています。

さて先刻の三人のアマゾン別荘地帯から七、八百メートル離れた所まで野菜、果物を買いに来たらしいのです。かなり大きな荷になった五つの袋のうち四つを夫々の馬の鞍の後部に吊るしましたが、残りの一つを持て余しているのを見て私は担いで行くことを申し出ました。一番グラマーな女主人はヘレンさんといい、アメリカのユタ州から来た宣教師だということは後で聞いたのですが、彼女達は私の申し出を少しも遠慮せずに受け入れてくれました。

私は一日ハウスボーイにでもなったつもりで、フウフウいいながら彼女等の後から荷をかっいで従って行きました。ヘレンさんは十二才の時から乗馬を始め、オハイオ州立高校では障害飛びBクラスに入賞した程の人でしたので、当時からすらりと体格の立派な美し

い娘だった筈です。夕日が次第に傾き、涼しい信州の風が白樺の森をさらさらと音を立てるように吹き、あたかもモーツァルトの軽快な美しい音楽でも聞いているかのような、のんびりした情景でしたので私が感嘆すると、幸いにヘレンさんが外人用の空のバンガローを二日位なら借してもいいから、サービス（礼拝）に私が出るようにさそってくれました。私は喜んで承知し、彼女のために庭を清掃したり、馬の水を取りかえ、わらを敷いたりして色々手伝いました。私にあてがわれたバンガローは、白ペンキで塗られたファンのついたモダンなもので、本棚には、あちらの色ずりの雑誌が二十冊ほどあります。

礼拝は夕七時から三十分程であり、外人男女三十人位で英語でしたので、さっぱり説教の方はチンプンカンプンでしたが、その天使の歌うような讃美歌が絶妙でした。食器の後かたづけを手伝ってから私は、ヘレンさん以下数名の女性のグループの後に従って空地の馬場へと急ぎます。気温が又一段と下り、遠くの湖面に沿って電灯の光が四つ五つ、にぶく輝き出します。馬場は、そんな大きなものではありませんが、白いさくで仕切られ、中央にはいろんな色彩で塗られた障害用の丸太



や、その支持台がありました。

数分程待っていますと、ヘレンさんを先頭に全部で六人の外人女性は、軽快な馬装姿で三頭の馬を引きつれてこちらに近づいてきました。先刻のショーツ姿とは一変し、いかめしく夫々キュロットに長靴をはき、その中の四人は拍車をつけています。気がつくともどりは相当暗く、五つの裸電球が枝から下って馬場を辛うじて照らし出しましたが、それが何ともいえない程不思議な印象を与えます。



映画「黒い馬の哭く館」より

二頭の栗毛と一頭の白灰色のまだらの仲々よい馬でした。その半明りの辺りを林で囲まれた小ぎれいな馬場で、今や待望の外人女性による馬の練習が行なわれるのを、かたずをのんで見えていますとヘレンさんは灰白色の馬にひらりと飛び乗り、他の二人の女性も夫々の栗毛に上手に乗り、手綱をやや長めにして長方形の馬場に沿って、さくさくと砂をふんで馬を進め出します。三頭の馬は女主人を夫々乗せて、きちんとした間隔をおいて次第にテンポを増し、その都度、砂じん

がかすかに立ちのぼります。

十分も乗らない内に、すでに各女騎手はじんわりと汗ばみ、ヘレンさんは上着を脱ぎ私に渡し、それをさくに掛けるように命じ、その瞬間彼女の香水の、かおりが狂おしいまでに匂い、同時に豊かな上半身の乳房も含めたラインがくつきりと夜の馬場に浮かび上がります。左手に六十センチ以上もある調教用笞を彼女は持ち、拍車のついた長靴のかかとで圧するように馬腹の前方をけりますと、各馬は一斉にヘレンさんを先頭に猛然と

ギャロップで十周、十五周と全速力で駆走します。各馬は時折グループから遅れないように、するどく笞がピシッピシッと左右両馬腹及び、たて髪下部に入れられ、一層そのテンポを上昇させて行き、エネルギーに運動をつづけて行きます。

ヘレンさん以下、背中を真すぐに両手を股のつけ根近くまで下ろし、両足を馬腹に密着させ、やや股を外方に開き、拍車が垂直に且効果的に入るようにし、臀部はきわめてどっしりと、まるで馬の背や鞍にぴったりとくっついてるかのよう安定した姿勢で、股間の動物を時にはいたわるように、時にはことの外、激しく責め立てるかのよう、少しもタクトを乱さずに三拍子のワルツのようにギャロップする姿は、近づき難い気品とやりしきで圧倒せんばかりでした。各馬の呼吸は一段とせわしくなり、苦もんするかのよううめき声が低く聞かれましたが、未だ口もとには泡はふき出してはいません。なにしろ外人の女性は重い上に、その命令が一段ときびしく更に強度な服従を要求しますので、少なからずこたえたに違いありません。汗のため、やや馬体、特にたて髪の部位がしっとり変色しました。





やがて「もう許してあげるわ」といわんばかりにヘレンさんはテンポをゆるめて手綱を長くしてやり、臀部を心持ち鞍から浮き上げ、上半身を前へ傾け、馬首のたて髪の辺りを軽くいたわるようにたたいてやるのを見てはっとする程でした。彼女はキュロットのポケットから角砂糖を出し、左手をうんと前に突き出すようにして愛馬に与えます。小休止後ヘレン女史は、おもむろに灰白色の愛馬の手綱をつめて、パサージのかなりきびしい訓

練を馬に施し、一同が見つめてる中を馬場を縦横に思いのままに速歩で乗りこなし、左右前後、ななめ前後と、くまなく乗り廻し、馬の各筋肉が運動で十二分に柔軟になり、殆ど疲労せんばかりに虚めたてましたが、馬は黙々と女史の意のままに屈服するかのようになされてゐるのを見てびっくりしました。

ヒューッピシーと答がうなり、拍車がかなりひんぱんに加えられるのが見られました。女史は、かなり馬が従順であるのに、荒々しく、かん高い声で叱責し、クライマックスでの答の乱打はちよつと怖い程でした。見てゐる自分は、それにより少なからずエクスタシーを感じずにはおられぬ位でした。私に女史は直ちに障害用バーの組立てを命じましたが彼女は家来にどなるように、早くせよと、せかしました。

私が気がついて時計を見ますと十時をすでに廻っていましたし、夜空には星がまたたき裸電球のまわりに昆虫や蛾が群がっているのが見え、又一方、女史に乗り廻されてるあわれな馬は火のような息を吐き、口からは粘っこい唾液をたらし出し、その両眼は明瞭に苦痛をうったえているのでしたが、エクスタシーに狂ったと思える女史の調教は、延々と続く

のでした。疲れた馬がバーを落とすはしないかと、ひやひやしていると、案の定、馬は辛うじて息が出来る程度にぐいっと手綱をしぼられ、散々な目にあわされ、殊に二段平行バーの飛び越えの猛練習では、乗り潰される寸前までしごかれるのが見られました。

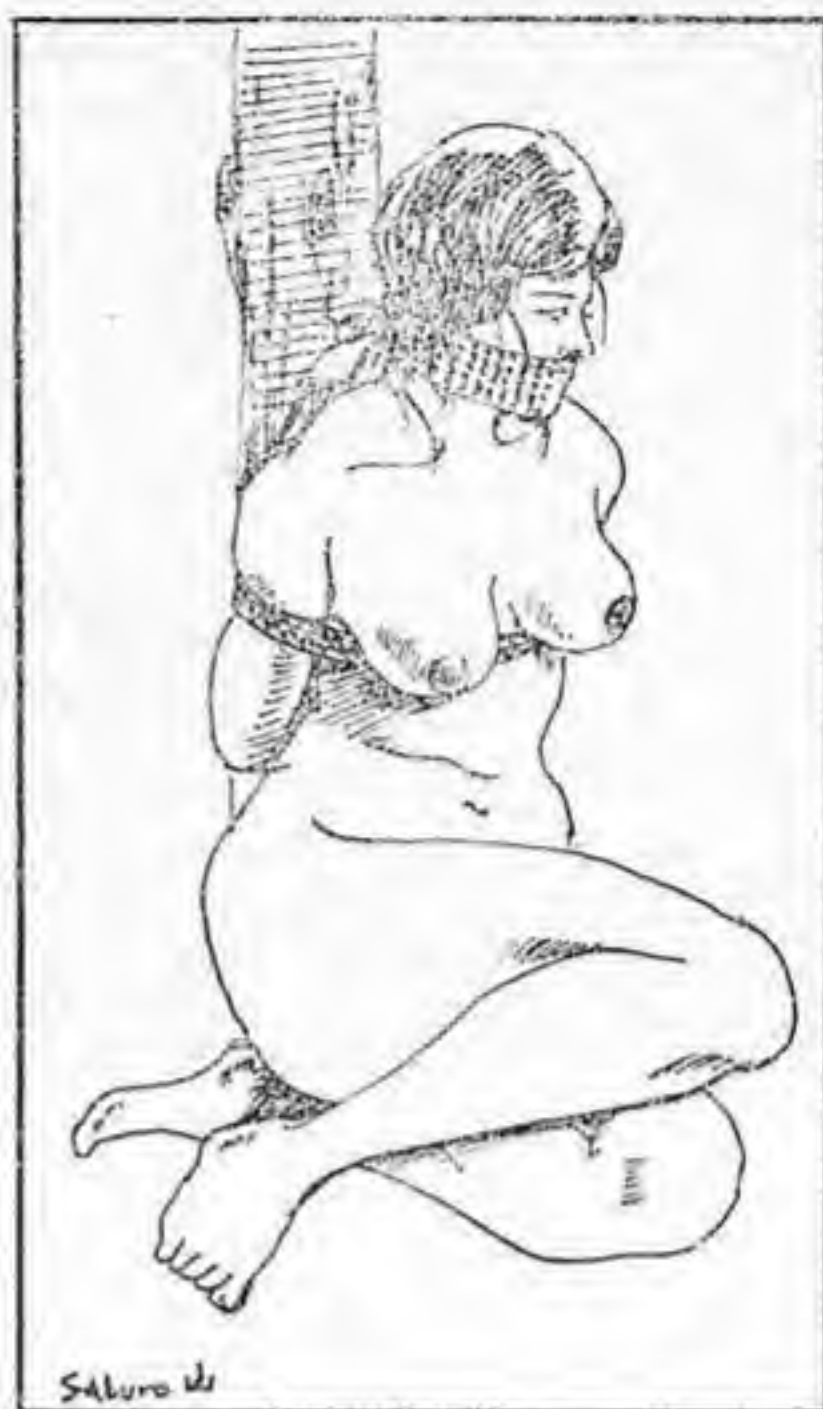
深夜の森の馬場での外人女性達による乗馬練習シーンは、誠に異様に妖しい強烈な魅力にあふれ、特に女史の如く一方では神の福音を説き、他方では罪のない動物を虐待するかのよう酷使するシーンには、この世のものとも思えない怪奇で不思議なインプレッションを感じられずにはおられません。別の外人女性がいてましたが、普段はヘレン女史は非常におしとやかな優しい人ですが、一旦、馬の調教となると、殊に癖馬の乗り込みにはあたかもサジスチンの如く性格が急激にきびしく荒れ狂う如く一変してしまうとのことでした。

このヘレン女史の性格の中にサド的な一面があるとは、たったこれだけのことで断定出来るまいでしょうが、以上のように私が感じたことはどうしようもありません。

サジスチンを求めるための私の思いすごしでしょうか。



## 懸賞入選創作シナリオ



## 地獄への売身

横 浜 好 男

## 証券会社河田商事の社長室

女社長の河田花子（五十才位）が電話をかけていたが、用件を聞き終えろと満足げに受話器を置いて、ソファに腰を掛けて様子を窺っていた息子である副社長の河田一郎に話かける。

花子「旨くいったわ。三村証券は、とうとう倒産したそうよ。もうこれで、三村幸平も娘の冴子も浮かぶ瀬がないね。乞食同然よ。」

反対に我が社の利益は三千万円位」

一郎「フフフ。さすがの三村幸平も、妾の桃江と子飼いの屋敷田総務課長までがグルになって、ガセネタを掴ませていたとは気がつ

かずに買い向かってきやがって。しかも売り方には大証券がついているとも知らずにさ。恐らく、三村証券は、もう逆さにして振っても鼻血も出ねえ。いい気味だ」

花子「しかし想い出すねえ。お前が冴子に恥も外聞もなく恋こがれてしまった挙句、振られてしまったてさ。口惜しかったねえ、あの時は。まあ、私としては可愛い息子が袖にされて悩んでいるのが見ていられたと言おうよりは、河田商事が三村商事の財産を目当てに、馬鹿息子と証券小町を一緒にしようとして蹴られた、なんていう噂の方が頭にきたんだがね」

一郎「可愛さ余って、今では憎さ百倍。でも親子でこんな復讐劇を練り上げて、見事成功するとは思わなかった」

花子「それは、私の頭の良ささ。見事なもののだろう。これで後は計画通り冴子をお前の妾にでもして、慰んでやる事が出来れば、万事OK。そろそろその方にも取り掛かるかい」

一郎「そりゃ勿論さ。例の一千万円の件でだろう」

一郎、受話器のダイヤルを廻し始める。

三村冴子の自宅の廊下

力なく、受話器を置いた冴子。放心したよ



うな顔で歩き出すが、やがて足早に幸平の部屋の方へ歩き出す。

### 三村幸平の部屋

幸平が、がっくりと肩を落とし、両肘を机について考え込んでいる処に、冴子が乱暴に障子を開けて這入って来る。

冴子「お父さん、本当なの？ 偽株券を担保に、信用金庫から一千万円借入れしたっていうのは」

幸平、驚いて顔を上げる。

幸平「そんな事、一体誰から聞いたんだ」

冴子「誰からだっていいでしょ。でも、本当なのね」

父親の顔を見て、冴子も放心したように肩を落とす。

幸平「今度の投機買いは、桃江が丸丸化学の社長から直接、聞いたという情報もあったし、屋敷田君の調査報告も確実に買いに有利なものだっただけに、欲が出過ぎたんだ」

冴子「それで、偽株券はお父さんが考えて作らせたの」

幸平「考えたのは、屋敷田だ。しかし、責任は私にある」

冴子「ひどいことになったのね。倒産で無一文になっただけではなく、詐欺の刑事犯ね」

お父さん」

幸平「そうなんだ」

頭の毛を、かきむしる幸平。遠くの方を見ているような冴子の顔。

冴子「お金、一千万円だけでも、作るほかないわね」

無言のままの幸平。

冴子「口にするのも不潔で嫌らしいけど、桃江さんの自宅を売らせれば、五百万以上にはなるし、料亭の方を担保として使えば五百万円以上は借りられるわ」

幸平は弱々しく、首を振る。

幸平「あれが私の妾だったのは、五年前までのことだ。不動産の名義も桃江のものだ」

冴子「でも、外に方法あるの？ それに元はと言えば、皆、お父さんの財布から出たものじゃない」

立ち上って、出て行こうとする冴子の後姿に、幸平がつぶやくように言う。

幸平「無駄だ」

幸平の昔の妾、桃江の部屋  
長火鉢をはさんで、桃江と冴子が対面している。

桃江「冗談じゃないよ。あんた、女子大まで出てさ、そんなに常識がないのかい。この

家とあの料亭はネ、私が身体を張ってさ、いわば女の一生を賭けて手に入れた汗と涙の結晶だよ。今更、誰にだって渡せるもんかい。

考えてもごらんよ」

冴子「それなら、一千万円だけ貸して戴ければいいんです」

桃江「笑わせないでよ。倒産した三村商事の小娘に、何が出来ると言うんだよ。それとも何かい。私みたいに、女の身体を張ってまで返済する気持あるのかい。身体まで張ると言う位なら、考えてもいいんだよ」

桃江の顔は、何か魂胆があって、せせら笑っている。

桃江「前は令嬢ぶって、あいさつもしなかったのに、都合の悪い時だけ来やがってさ。帰っておくれよ」

うなだれる冴子。

### 街の中

放心したように歩いている冴子。やがて、ふと電話を目に止めて、暫く考えこむが、受話器をとり、ダイヤルを廻し始める。

### 河田商事の社長室

ニヤリと笑って、受話器を置く一郎。

一郎「おっかささんよ。冴子が、とうとう逢いたいって言ってきたぜ」



満面に笑みを浮かべて、背広を着ながら出掛けて行く一郎を花子可笑しそうに見送る。

### 或る喫茶店の一隅

牙子と一郎がコーヒーを前にして、話している。

一郎「矢張りどうしても一千万円は欲しいと言うんだね」

牙子、肯く。

一郎「どんな条件でもかい？」

牙子不安げに、大きな黒い瞳で一郎を見上げる。

一郎「あんたは二年前に、俺の心を傷つけた女だ。お袋の体面とやらも傷つけた。あの時、あんなに氣障で、陰湿な人は大嫌いと、あんたが言ったという噂も聞いているよ。それ相応の仕返しもしてやりたいし、失恋の痛手も慰めて貰いたいんだよ」

無言で、下を向く牙子。

一郎「つまり、卒直に言えば、あんたは俺の妾、いや奴隷妻になれと言っている訳だ。そうでなければ、いくら三千万を稼いだ河田商事だって、一千万円は出せねえ」

コーヒー茶碗を手にした牙子の白い手が、屈辱のため、かすかに震えている。もう俺の勝だと言わんばかりに、牙子の薄いグリーン

のセーターの下のふくらみや、えりもとを無遠慮に眺め始める一郎。

牙子「仕方ないわ」

絶望したように言い放って、コーヒー茶碗を下に置く牙子。強く、陶器の音。

一郎「期間は五年。お前さんの青春時代の残りの凡てだ。その代り、信用金庫の借入は河田商事が代位弁済の形で、少し宛、分割弁済してゆく。五年経ったら、担保の偽証券は全部あんたに返す。つまり、あんたは偽証券のため、五年間を河田親子等の復讐を受ける訳だぜ。それでもいいな」

力なく肯く牙子。

一郎「親父にはいま直ぐ手紙を書くんだ。文章は俺が考える」

### 三村幸平の部屋

幸平険しい顔で、手紙を読んでいる。ナレーションで、牙子の声。「破産してしまっから、お父さんの顔をみるのがつらくて、私遠い処に旅立つことにしましたの。捜さないで下さい。お父さんも厳しい鬼のような債権者から逃げ出して下さい。最後の親孝行に偽証券の分だけは始末しておきました」

机に打ち伏す幸平。

### 河田花子の私宅。茶の間。

部屋の中央にうなだれて坐っている牙子。

その横に一郎。長火鉢の向こう側から花子がタイトスカートから覗いている膝の辺り、スカートを形よくふくらませている股から腰、などらかな震えている肩先などを、小気味良さげに眺めている。

一郎「さ、早くさっきの命令通りに、あいさつするんだ」

邪慳に肩を小突かれ牙子、よろめきながら恨めしげに一郎を見上げる。

花子「何だい、その態度は。一郎、なめられてはいけないよ。信用金庫に電話して、告訴するように言うんだ、直ぐに」

牙子「待って。それだけは勘忍して」

牙子、必死の面持で、花子を見上げる。

一郎「それなら、言う通りにするんだ」

又肩を小突かれて、唇を噛みしめながら、畳に両手をつく牙子。やがて、決心したように土下座する。ショートカットの白い襟足が物悲しい。

牙子「今日、お宅の若旦那の一郎様に一千万円で奴隷として買い取られて参りました、三村牙子でございます。一郎様の慰み者として、せい一杯、務めますことは勿論、社長様の奴隷としても忠節を尽しますので、宜敷く



お願い申し上げます」

頭を下げたままの冴子。

花子「フフフ。河田商事の若旦那を袖にした気位だけ高い三村商事の御令嬢が、いいさまだわネ。此処へ来て顔を見せてごらんよ」

涙を湛えて顔を上げた冴子の顔のアップ。

花子、その顔へ平手打ちを喰わせる。

花子「メソメソするんじゃないよ。この位で涙が流せるような身分じゃないんだよ」

一郎「立て。立つんだ、部屋の真中に」  
髪を掻まれて、おずおずと立つ冴子。又泣き出しそうな顔つき。

花子「高い買物だから、本当にそれだけの値打があるかどうか品定めが必要だし、あなたには随分と口惜しい想いをさせて貰ったお礼に虐め抜いてやるのさ」

花子、一郎に眼くばせる。一郎は冴子の手を掴んで、頭の後で両手を組ませる。

花子「いいかい、そのままの恰好で、ゆっくりと身体を廻すのさ。一回転したら、着ているものを一枚脱ぐ。そしたら又手を頭の後に組んで、ゆっくり私の眼を楽しませるように一回転して、終わったら又一枚。分かったね」

一郎「返事ぐらいハッキリとしろ」  
尻を思い切り一郎に叩かれて、かすれた声

で、「はい」と返事する冴子。やがて冴子の身体が、ゆっくりと廻り始めて止まる。

靴下を脱いでいる冴子の足のアップ。やがて素足が二本並び、それがゆっくりと、恥ずかしげに、回転を始める。

同じく河田花子の茶の間

矢張り部屋の中央に立っている冴子。今やスリッパも身に付けておらず、後巡しながらブラジャーの肩紐に手をかけている。

花子「じれったいねえ。往生際が悪いって言ったらありやしない。高い買物を押しつけたのはお前さんの方だろう。中までよく見せるんだよ」

ブラジャーを外す冴子。邪慳にそれをひったくる一郎。パンティ一枚だけの姿となってしまった冴子、胸を両手で掩い立っている。閉じ合わせた両膝の辺りから徐々にアップとなる。白い太股、張ち切れそうな薄手のナイロンパンティ。よく締った腰つきと中央の臍両腕の端からこぼれる胸のふくらみ、訴えるような恥辱に満ちた顔。

一郎「ほらほら、約束が違うよ。手は此処だよ、此処」

一郎、冴子が未練がましく、なお抑えようとしている両手を胸の上から外して、再び頭

の後で組ませる。

一郎「この頭の後で組んだ手を外したりしたら、承知しないよ。若し外したりしたら今までの話は、ご破算よ」

かすかに肯く冴子の尻を一郎、張りつめたパンティの上から軽く平手打しながら、

一郎「返事は？」

冴子「はい」

投降してきた兵隊のように無防備な形で胸を曝け出した冴子の全身のアップに、花子等の声が飛ぶ。

花子「駄目、そんな前屈みじゃ。ちゃんと胸を張って」

一郎「肘が前に出過ぎている。もっと両肘を横に張って」

丸見えになった上半身。よく締っているが丸味があつて、少々大きめな乳房が大きく息づいている。

花子「今度はいいと言うまで、ゆっくり廻って全身を曝すんだ。いいね」

ゆっくりと廻り始める冴子のパンティ姿。  
花子「かぶりつきたくなるようなオッパイだよ」

乳房と、唇を噛む冴子の顔のアップ。  
一郎「いい腰つきしている」



廻りながら、かすかに肉の揺れるウエストのアップ。

一郎「パンツがはじめてしまいそうじゃない、見事なお尻」

僅かずつ移動を続ける薄いパンティに包まれたヒップのアップ。

一郎「そろそろお母さんは引き取って、俺に独占させて下さいよ、この牝猫をさ」

花子「フフフ。恋こがれた女だものね。でも、もう少しお預けさせて貰うよ、お母さんは復讐のために参加してるんだから。処女の牙子にとって、あの最後の一枚を取り去られるのが一番つらい処。だけど、そう簡単には宅ってやらないの。一寸お預けが長くなって悪いけど一番つらい方法と、それに相応しい場所で、ゆっくりと料理するのさ」

花子、部屋の隅の卓上電話をとり上げて、機嫌よく誰かと小声で話し始める。依然として、部屋の中央に惨めな姿を曝し、ゆっくり全身の回転運動を続けさせられている牙子。その美しい裸身を喰い入るような眼つきで眺める一郎。

### 同じく河田花子の茶の間

花子「縛り上げて連れておいで」

花子、廊下の外から部屋の中に細引を投げ

入れる。

一郎「あいよ」

細引をとり、牙子の後ろに回る。

牙子「何も縛らなくても。もう私、言われたことは何でも聞いています」

一郎「つべこべ言うな」

後から両手をねじ上げ、ひしひしと縄掛けしてゆく一郎。上下を強く縛られて、盛り上った乳房のアップ。縄尻をとられて、よろめきながら立ち上った牙子のパンティのゴム紐に手をかけ横に大きく引張っては放す一郎。

一郎「これから、この最後の布切れの除幕式を、いい処でやるんだってさ」

背後から、縛られて自由を失った牙子の首を左手で巻き、耳に口吻し、右手で肌をまさぐる一郎。悶える牙子。稍々あって部屋の外から声。

花子「何しているの、早く連れといで」

舌打ちして、邪怪に牙子の肩を突き、追いたてる一郎。たたらを踏む牙子。

### 廊下

俯向き加減に両手、両腕を縛り上げられ、小突かれながら歩いている牙子。

### 河田花子の家の駐車場の前

花子、レインコートを持って立っている。

花子「夜でも外に出る以上、目立っては具合、悪いからね」

一郎に命じて、縛り上げたままの牙子の半裸身にコートを掛けさせる。

### 車の中

一郎が運転。後部座席には花子が抱きしめるように寄り添い、耳許で何か囁いている。

### 夜の街

走り続ける花子等の車。ヘッドライトが交錯する。

### 夜の道路

メインストリートから脇道に折れてゆく花子等の車。

### 車内

花子等の車、屋敷の中に這入って行く。三山桃江の表札にびっくりしたような牙子の顔の短いアップ。

### 幸平の妾、桃江の家の玄関

玄関の戸が開いて、レインコートを脱がされた後手縛り、胸の上下もきっちり縛り上げられたパンティ姿の牙子が、一郎に追いつて這入って来る。横に寄り添う花子。

花子「いいわね、さっき車の中で命令したように、あいさつするのよ」

唇を噛みしめながら肯く牙子。



## 同じく玄関先

玄関の廊下の上から、哀れな冴子を見下ろす桃江の後姿。

桃江「最後は身体まで張って、一郎さんに拝みこんだんだってねえ。フフフ。何よ、その恰好。お嬢さんがオッパイ丸出しにしちゃってさ。いいさまだわねえ。ま、立ってないで這入りなさいよ」

応接間に引き立てられて行く冴子。その尻を、ぴたぴたと平手で叩く桃江。

## 桃江の家の応接室

ソファには桃江とその娘の朱美、花子、冴子の家の番頭格だった三村商事総務課長屋敷田が坐っている。縄尻を一郎にとられて、部屋の中央に立たされた冴子。屋敷田と朱美の存在には驚いた様子。

冴子「何故こんな処にいるの。出て行って頂戴、屋敷田さん」

冴子、必死の面持で屋敷田を睨みつける。

一郎「何さ威張りやがって。屋敷田課長は今では河田商事のマネジャー。女奴隷のあんたにとっては御主人の一人。お床を一緒にしろと言われりゃ逆らえねえんだぜ。こんな花恥ずかしい恰好にまでなって、そんなに威張るんじゃないよな」

一郎、背後から両手で、冴子の乳房を揺ぶる。頭を垂れる冴子。揺られて躍動する二つの膨らみ。

朱美「全く哀れなもんね。でもいい気味。

私ね、前にこの冴子と女子大の頃、顔を合わせたことがあるのよ。あいさつしようとしたら、妾の子供なんか汚らわしいと言った顔ですましているのよ。随分、癪に触ったわ」

桃江「本当にいい気味だよ。だけど何と言っても一番喜んでるのは一郎さん。蝶々を捕えて喜んでる子供みたい」

一郎に胸を翳られている冴子のアップ。

## 同じ応接間

花子、一郎をソファに坐らせ、替って冴子の縄尻をとっている。

花子「坐るのよ、此処に」

花子、冴子の肩を押しつけるようにして絨氈の上に正座させ、片足を肩の上に乗せて押しつける。

花子「あんたには椅子はないのよ、身分が違うからね。床の上があんたに相応しい席。いいわね。（間を置いて）返事をおしよっ」

花子、縄尻で冴子の肩を搦つ。

冴子「は、はい」

花子「此処にきちんと正座して、皆さんに

私が教えた通り、ごあいさつするのよ。ほらっ、返事」

又、肩を縄尻で叩かれる冴子。

冴子「はい」

悲しげに、又恨めしげに花子を見上げる冴子。その冴子の耳許に小声で囁く花子。

花子「さ、最初は桃江さんにごあいさつ申し上げる訳だけど、桃江さんも今はご主人、おかみさんと呼ぶんだよ」

桃江「まあ、おかみさんなんて、まるで私は、やりて婆みたいじゃない」

笑う桃江。小突かれて、正座の腰を浮かせて膝ずりしながら桃江の前ににじり寄り、再び正座する冴子。

花子「先ず土下座して」

面白そうに又縄尻で肩を叩く花子。唇を噛みしめた冴子の顔のアップ。やがて冴子、仕方なく頭を下げ額を絨氈にすりつける。なだらかな肩、白い背中に、首筋近くまで括り上げられた繊細な手首が痛々しい。

桃江「顔を挙げて、早くそのごあいさつとやらを聞かせてよ」

桃江、手にしている竹鞭で肩を軽く叩く。顔を挙げる冴子。

花子「姿勢を正しく、胸をもっと張って」



桃江「顔も上に向けて、ハッキリとこっちを見て言うんだよ」

竹鞭で冴子の顎をしゃくり上げる桃江。

花子「早くするんだ」

督促されて、桃江の顔を見上げる冴子の乳房から上のアップ。アップのままの科白。

冴子「おかみさん、私こと三村冴子は、借金担保として売られて参りました女奴隷でございます。一千万円の大金で買われたこの身でございますから、大枚を投じて頂きました皆様のご命令には何でも従う所存でございますので、宜敷くお引き立て下さいませ」

桃江「ふん、いいよ、いいよ」

桃江の薄笑いした顔のアップ。そして又、冴子の乳房より上のアップ。

冴子「河田社長様のおことづけでは、思いついて妾風情と馬鹿にしていたおかみさんの家で女にされ、さんざ慰んで頂き……」

絶句する冴子。桃江に大きくつねり上げられてふくらむ冴子の両頬。

桃江「どうしたんだい、冴子さん。決心が鈍ったんなら、いいんだよ。ここで契約ご破算とゆくかい？」

冴子、両頬をつねり上げられて、自由のきかない変形したおかめのような顔を、かすかに振る。

に振る。

桃江「そうかい。では続けるのね」

桃江、やっと手を放す。再び冴子の上半身アップ。

冴子「慰んで頂き、又お仕置を受けることによって、おかみさんにも喜んで頂くようにとのことでございます。どうぞ、ご存分にお慰み下さいませ」

言い終えて、消え入りそうに肩に顔を埋める冴子。

花子「ねえ、桃江さん。一寸刻み五分刻みに辱かしてやるんだから、先ずあんたが先口でパンティを二纏だけ下げてやってよ」

小突かれて、正座の腰を浮かさせられる冴子。桃江の手がパンティの紐にかかる。

パンティが二纏だけ引き落とされる。

冴子「いやっ」

のけぞる冴子の顔のアップ。

膝ずりして絨氈の上を歩く冴子。少し下げられたパンティの紐跡が腰に稍々赤ずんで見える。

冴子「立場が入れ替って、お蔑みになられるのは朱実お嬢様でございます。今はこのような哀れな女奴隷になり下った冴子をお罵り下さいませ」

朱美「フフフ、いい気味。ねえ一郎さん、初夜の儀式が終わったら、素裸のまま縄がけして私の部屋に連れ込んでよ。その時にたっぷり蔑んでやるわ。いいわね」

真赤になって、俯向く冴子。

朱美「私も除幕式のお手伝ができるのね。ほら、腰を浮かせて」

冴子悲しげに膝から上を直立させて観念した様子で、朱美の手を待つ。又少しずり下げられてゆくパンティ。

膝ずりして絨氈の上を歩く冴子。下げられたパンティの上に、尻の丸味が僅かにのぞいている。

カメラ、屋敷田の斜め後から冴子の裸身を見下ろすような位置。冴子、花子に耳許で囁かれながら、屋敷田を見上げている。

冴子「屋敷田様。先程は、いくら貴方がもと私の家の番頭さんだったからと言って、怒鳴ったりしてごめんなさい。貴方が河田商事の人になった以上、ご主人としてお仕えし、どんなご命令にも従います」

屋敷田「一郎さんのお床が済んだら、俺にも抱かれるかい」

冴子「はい」

屋敷田「さっきのお詫びに、ちょっと触ら



せるかい」

冴子「はい」

花子に小突かれて、屋敷田の膝下に身を寄せる冴子。屋敷田の手が肌をまさぐるのに耐え、屈辱にまみれる冴子の顔。

屋敷田「さあ、私も除幕式を手伝うかな」  
身体を伸ばして、屋敷田の手がパンティに伸びてくるのを待つ冴子。屋敷田の大きい手が紐にかかる。

花子「さあ、立って」

縄尻を引きたぐって、部屋の中央に冴子を引き立てる花子。パンティは更に引き下げられており、全員の前に直立させられて、今や落花寸前の冴子。パンティはヒップの一番張り出している部分より少々下目の処で不安定に止まっており、くびれた腰とヒップの丸味が艶めかしい。

花子「一郎、もう一寸ギリギリまで下げてください」

一郎ニヤニヤ笑いながら、ゆっくりとその最後の布切れを本当にギリギリまで下げて止める。冴子が落ちないように身体を固くしている。

部屋中が笑い出す。真赤に上気した顔のやり場がなく、狼狽する冴子。

花子「さ、もういいだろ。この位虐めてやれば私も満足よ」

朱美「あとは、すっぱりと言う訳ね」

屋敷田「いよいよクライマックス」

花子が冴子の前の絨氈の上に一米幅位にスリッパを置いてから、又冴子の耳許で暫く囁くが、やがて肩をぴしゃりと叩いて、冴子の決意を促す。

冴子「私、本当はつらいんです。裸なんか見せるの。未だ私の親にも見せたことのない大事な身体なんですもの。でも、奴隷になり下った冴子です。どうぞ存分に辱かして下さいます」

朱美「いいわよ、存分に笑ってやるわ」

屋敷田「私は楽しいですね。お嬢さんには何の恨みもある訳じゃないが、若い時から高嶺の花で、夢の中でしか見られなかったお嬢さんの全ストをかぶりつきで見られるんですからねえ。ほら、七ミリも用意してあるんですよ」

花子「全く用意のいい人だこと。でも丁度いいわ。除幕式の模様を早速、写してよ。脱がされる時どんな哀れな顔つきになるか、よく撮っておいてよ」

一郎「では、そろそろ、とりかかるか」

ウェディング・マーチを口ずさみながら、一郎、冴子の後ろに回ってパンティのゴムを掴み、冴子の顔を覗く。

一郎「覚悟はいいですか、お嬢さん」

冴子「どうにでもして」

やけっぱちに言ったが堪え切れず、肩に顔を埋めるようにして、顔をそむける冴子。

一郎「だめだめ、カメラもあることだし、綺麗なお顔は前に向けるの。大きなお目めもパッチリとあけて、カメラの方を見るの」

一郎、ゴム紐を放してショートカットと顎を抑え、紅潮した冴子の顔を正面に向ける。

一郎「よしよし、そのままにいるんだよし又、俯向いたりしたら契約不履行。分かっているね。はい、よし、カメラ、スタート」  
屋敷田、カメラを廻し始める。一郎、冴子の顔を覗き込む。一瞬、息をのむ花子等。

一郎「さあ、いよいよ世紀の祭典、開幕」

花子等の哄笑。顔を正面に向けることを強制されているので目のやり場もなく狼狽する冴子の顔。空しい抵抗と解っていないながら、ゴム紐の落下を支えようと無益な努力を続けるためにくねっている腰とヒップ。顔、腰とヒップを交互にアップで捉えるカメラ。

冴子「ア、あっ」



悲鳴を挙げる妙子。

一郎「さあ、これで、さっぱりしただろ。

さっぱりした処で、よく見て貰いましょうね  
ほら、このスリッパを履くんだ」

先程、花子が一米幅に並べたスリッパを指  
さす。股をきっちりとしり合わせて、腰を後  
に引き、少しでも皆の視線をのがれようとし  
ている牙子、かぶりを振る。

一郎「皆さん、この女奴隷はこの場になっ  
て未だ往生際が悪く、命令を素直に受けな  
いんですが。如何しましょう」

花子「本当にしょうのないヤツね。私もい  
い加減、胸がすっとしてゐる処だし、話は元  
に戻そうよ。私にすれば、牙子も苦々しいと  
思っではゐるけれど、あの時のことでは一郎  
の縁談を断ってきた幸平の方にも、恨みが半  
分位あるんだから、牙子にはこの辺でお引き  
取り願って、幸平の奴を刑務所にぶち込んで  
やろうよ。さあ、出て行って」

縄尻を引いて、部屋の外へ連れ出そうとす  
る花子。

牙子「待って、ごめんなさい、社長さん」  
引かれるのが嫌で、もだえている犬のよう  
に足をふんばる牙子、必死の形相で花子を見  
上げる。

花子「私はぐずぐずしているのが嫌いな  
だよ。言うことを諾くのかい、諾かないのか  
い。どっちなの」

牙子「ききます。済みませんでした」

花子「もう手古摺らせないと約束する？」

牙子「はい、約束します」

花子「許してあげるのは、これが最後よ。  
今度は容赦しないから」

牙子「はい」

花子、再び部屋の中央のスリッパを並べて  
ある場所に牙子を引き立ててゆく。一瞬、息  
をのむ朱美。ポカンと口をあげた屋敷田の顔  
皮肉な笑みを浮かべる桃江。ぎらぎらとした  
目つきで凝視する一郎の顔。

カメラは二つの間隔をあけられて並んでい  
るスリッパを写す。アップで牙子の膝から下  
だけが画面の中央に。右足が少し開いてスリ  
ッパの片方を踏む。左足が少し宛、反対側に  
開いてゆく。足の移動と羞恥心にゆがむ牙子  
顔のアップ交互に続く。

ソファに坐っている花子、一郎、朱美、桃  
江、屋敷田の後姿の向こうに人の字型で、う  
なだれている牙子。

花子「顔を上げて、そう。胸も、ちゃんと  
張って」

桃江「腰が引けてる。もっとしっかり立て  
ないの！」

オズオズと顔を上げる牙子。

桃江「ねえ、一郎さん。さっきから、じり  
じりしてお待ちなんじゃない」

朱美「そうね。こんな姿、眼に毒だろうか  
らね。一郎さん、頭にきてしまうわね」

朱美、立ち上って、牙子の横に立ち、ショ  
ートカットを掴んで顔を自分の方に向けさせ  
る。

朱美「このざまったらないわね、フフフ。  
もっと慰んでやりたいけど、一郎さんが待ち  
切れないご様子なんで、今晚はこれで勘忍し  
てやるわ。後で又、うんと笑ってやるから  
ね」

無抵抗の牙子の肩を小突いて、一郎の前に  
追い立てる朱美。

花子「河田家からの結婚申込の時にうんと  
言っていれば、こんな惨めな姿は曝さずに済  
んだのにねえ」

桃江「でもまあ、いいでしょう。一郎さん  
も嫌い抜かれた恋人を、こうやって奥さんよ  
りも自由にできるんだから」

朱美「そうよ。これだけの見識高い美人を  
思うがままに扱えるんなら、かえっていい気



分よ。ほら、冴子。嫌いに嫌った男だけど、今はそんな我儘きかないのよ。寝室に行く前に皆の前でキスしてみせて」

ニヤニヤ笑って立ち上る一郎。悄然と目を閉じて立つ冴子。依然として人の字型にされている。

朱美「これから可愛がって下さるという殿方の前で目を閉じるといふ法はないよ」

なお朱美、冴子の耳に何か命令する。じつと一郎を見据える冴子。

冴子「一郎様、お願い。キスして」

声が小さいと繰返し復唱させられる冴子。

花子等の嘲笑。

### 桃江の家の離れに通ずる庭先

後手縛りのまま、縄尻を一郎にとられて歩く冴子の裸身が夜光灯の光に浮かぶ。

### 離れの八畳の和室の前の廊下

一郎「やっと二人だけになれたぜ、冴子」

冴子の頬を両手で挟むようにしてキスを催促する一郎。今は諦めて、唇を寄せる冴子。

一郎「どうやら朱美が言うように、結婚するより、何も彼もしたい放題という点で、こんな結ばれ方のほうがよかったぜ。いいかいお前さんは俺の妾、情婦、奴隷妻、慰み者、いやコールガールより低い身分なんだぜ。だ

から、せいぜい俺がこれから言う通りにしてご機嫌を取り結ぶんだ。いいな」

肯く冴子の耳許で、何か囁き始める一郎。

### 母屋の応接室

屋敷田「今頃、一郎さんハッスルしているぜ、きつと」

朱美「フフフ。妬かない妬かない」

桃江「お下がりはお前にも廻すからさ、がつがつしないですよ」

皆の高笑い。

### 離れの八畳の和室

部屋の中央の座椅子にもたれて、ウイスキーをグラスに注いでいる一郎。廊下の障子が少し宛開く。苦勞して膝をつき、口と鼻で障子を開けている冴子を眺める一郎の後姿。部屋に這入った冴子、又苦勞して障子を閉めると、振り返って一郎を正面に見据えて正座する。深く深く土下座して又、一郎を見上げる冴子。

冴子「一郎様、私が高慢な女だったため、あの節はお気持ちも汲めないで、本当に申し訳ございませんでした。今更、一郎様のお嫁さんになどとは申し上げられない私でございませ。どんなことでも致します。どうぞ、あの時の恨みを果たすため存分にお慰み下さいませ」

せ」

一郎「よし。間違いないな、どんな命令にでも従うな」

冴子「はい」

一郎「では此処へ来て俺の側に立つんだ」  
坐ったまま、目の前に立った冴子を見上げながら、用意してあった腰紐で冴子の膝の少し上を強く括り合わせてゆく一郎。今度は立ち上って細引を取り出すと、首に三重に巻き余りを膝上の腰紐と強く短く連結する。逆「く」の字型となり、尻を大きくつき出し辛うじてバランスを保っている冴子。

一郎「その姿で、部屋中を歩くんだ」

膝上を縛られたため、よろよろ歩きで、突き出した尻を恥かしげに振りながら、下向きとなった乳房を妖しくふるわせて歩き続ける冴子。心地良げに眺めながら、ベルトを外してズボンの中から下帯を取り出して、部屋の隅に投げ出す。

一郎「拾ってくるんだ」

屈辱の面持で横眼に一郎を見た冴子。思い直して部屋の隅に向かう。下帯を口にくわえようと身を屈めて、無様に横倒する冴子。叱責され、もがく艶めかしい姿を一郎に十二分に味あわせた処で、やっと姿勢を立て直し、



跪ずき、口を下帯に近づけてゆく冴子。口にくわえて、恨めしげに一郎の方を見上げる冴子の顔のアップ。一郎、冴子呼び寄せるとその下帯で猿轡を噛ませる。

一郎「ご主人様の体臭をよく嗅いで、覚えておくんだ」

鼻まで掩う下帯の猿轡をされた冴子の屈辱の眼差し。

### 母屋の応接室

朱美、大きなあくびをしている。

朱美「明日がお楽しみね。さ、もう寝ようかな」

卓上のコーヒーを、まずそうに飲み干す。

### 離れの八畳

一郎、縄尻を手に次の間の襖を開ける。電気スタンドに照らされる華やかな寝具と二つの枕。顔を肩に埋め恐怖の表情の冴子、追いつてられ、寝具の前に正座する。白々とした裸身。

### 寝室

布団の上に膝をつき、全身を翻られながら唇を合わせている冴子。

### 母屋の応接室

花子「今晚は本当にいい気分だったわ。もう皆さん、寝みましょうよ」

桃江「そうね」

朱美「私も。だけど、その前に一寸だけ悪戯させて」

受話器を取り上げて、ダイヤルを廻し始める朱美。

桃江「止めときなさいよ、折角の処を」

朱美「いいじゃない、直ぐ済みますから」

### 寝室

枕に腰掛けている一郎。布団の上に俯伏せになり顔だけ上げている冴子。枕許の電話になる。不機嫌そのままの姿勢で受話器をとる一郎。

朱美の声「ごめんなさい。いま、面白い最中でしょうね」

一郎「解っていたら、電話なんかするな」  
朱美の声「悪いわ。でも一声だけ、冴子の声を聞いてやりたいのよ」

一郎「仕様がないな」

俯伏せになっっている冴子の顔を引き寄せて膝の上にのせ、受話器を冴子に近づける。

一郎「朱美が一言、感想を伺いたいとよ」

朱美の声「冴子かい」

冴子「はい」

朱美の声「もう済んだの、除幕式」

冴子「はいえ」

朱美の声「じゃ、何しているの」

冴子無言。一郎に頬をつねり上げられる。

一郎「正直に言ってやれよ」

冴子「裸で……」

言いかけて絶句する。

朱美の声「裸なことは解っているわよ。裸で何しているのよ」

冴子「……後手に縛られたまま……」

朱美の声「まあ、ホホホ。そうなの。まだ解ってもらえないの。まあ、ゆっくり慰んで貰いなさい。明日が楽しみよ、ホホホ。一郎さんに悪いから、この辺で切るわ」

いまいましてに受話器を置く一郎。冴子を又、先程の姿勢に直すと、俯伏せの冴子の両頬に手をかけ顔だけ上を向かせる。

一郎「どうだ、口惜しいか」

かすかに、嫌々首を振る冴子。

一郎「フフフ、いいさまだ。しかし未だ夜は長いぜ、これからなんだ。朝までには何回も縛られ直されますって、いってやりゃあよかったな」

### 離れの建物の夜景

一室にだけ明かりが点いている。

### 離れの寝室

窓、カーテンは明け放されている。陽は既



に高々と昇り、陽光が部屋の中に注ぎこんでいる。一郎、腹這いで煙草を吸いながら、今は縄をほどかれて、派手な長襦袢姿で命ぜられるままに鏡台の前に坐り、乱れた髪にブラシを入れ、入念な朝化粧をさせられている。牙子の後姿を眺めている。牙子の真白な首筋に点々とするマークが未だ消えないのを見て、一郎、満足そうである。

一郎「口紅は、もっと濃い目にするんだ」

手にした口紅で、強く唇を塗る牙子。

一郎「此処の台所でも、コーヒートベーコンエッグ位は出来る。作って来いよ」

### 離れの八畳

食事をしている二人。

一郎「こんな姿は新婚さん並みだがな」

俯向く牙子の顔は厚化粧と長襦袢の赤さが映えて妖艶である。

### 母屋の応接室

朱美「一郎さん、未だ起きてこないじゃない。もう一時よ」

桃江「疲れて未だ眠っているんだろ」

朱美「いい気なもんだ」

### 離れの八畳

一郎「昨夜は、お前さんも楽しかったんじゃないか」

## ☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供にしましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

やなかったかい」

牙子「うなだれて、嫌々をする。」

一郎「フフフ。初心な処は可愛いぜ。だけどこれから、新しい趣味で母屋のおばさん方のお楽しみが始まるんだ。その前に俺も楽しませて貰うがね」

牙子、きつとなって顔を挙げる。

牙子「一郎さん、お願い。こんな姿を皆さんの前に曝すなんて止めて下さい。その代り私、一郎さんのご命令なら何でも……」

一郎「フフフ。そうは甘くないぜ。皆んな楽しみにしているんだからな。それよりさ、艶っぽくなった牙子の凡てを、この明るさの中で、とくと見せて貰おうか。嫌われ抜いた女をものにした征服感を、じっくり味わいたいんでね」

一瞬、俊巡していたが、牙子、決意したように立ち上り、帯に手をかける。

滑り落ちる長襦袢。

一郎「手を昨日のように頭の後で組むんだ足は大きく開く」

命ぜられるままに、全身を曝す牙子。坐ったまま、満足そうに見上げる一郎。

一郎「フフフ。少しは女らしくなってきたようだぜ。いいか、俺の言った通りに言うん



だ」

冴子「はい」

一郎「昨夜、一郎様に凡てを捧げました冴子の誇らしいヌード姿でございます。どうぞよくご覧下さい」

復唱させられる冴子。

一郎「ご満足頂けなかったかもしれませんが、今日も一日、一生懸命、努めますので、お好きなようにして下さいませ」

復唱する冴子。

一郎「今日は、これから直ぐ縛って頂き、母屋の皆さんに笑って頂きたいと思ひます。どうか宜敷くお願い致します」

涙ぐみながら復唱する冴子。

### 寝室

布団の上に打ち伏す冴子を細引をしごきながら見下ろす一郎。

一郎「さ、手を後ろに回すんだ」

冴子「ね、一郎様。一生奴隷でも構ひません。だから、もう縛ることだけは……。お願いです」

一郎を見上げながら、必死に訴える冴子の両手を強引に振り上げ、細引を口に咬え、残忍な笑みを浮かべる一郎。

高手小手に縛り上げられ、余りの縄で首を

四重に巻かれた上、更に両手首に戻して強く絞り上げられたため、首筋近くまで上った両手首。首筋の近くで、冴子の細い白い指が花のように震えている。

一郎「これでいいだろう。皆んなに、うんと笑って貰えるぜ。今日は後手、首縄だけだから、じっくり見て頂けるといふ寸法だ。フフ、首縄がよく締って顔も下げられず、いい恰好だ」

一郎、思案していたが、箆笥の中から、ピンク色の腰巻を取り出す。

一郎「ピンク色の腰巻なんて、まあ上品な趣味だろうな。ま、お妾さん、これ着けてやるよ。剝ぐ楽しみもなけりや、皆んなも、つまらないだろうからな」

うなだれることも出来ず立ちすくむ冴子の腰に、腰巻を着ける一郎。今度は冴子の両耳を掴んで廻りながら、

一郎「昨夜は私を女にして頂き有難うございました。楽しかったわ。貴男、大好き。と言つてキスを求めるんだ」

復唱する冴子。唇を寄せるが、

一郎「駄目駄目、もっと感情をこめて！」

二度、三度と復唱させられる冴子。やっと許されて唇を重ねる、キスシーン。

### 離れの八畳

一郎、冴子を廻りながら、電話している。

一郎「一寸ハッスルし過ぎて眠いしさ。それに一寸小恥ずかしいから、俺は寝かせて貰うぜ。冴子は離れの前の常夜灯の柱に縛りつけておくから、連れて行ってくれよ。フフ」

### 離れの前庭

常夜灯の柱に括りつけられた冴子の前に立っている朱美。

朱美「何よ、図々しい。もとお妾さんの腰巻、盗んできてさ。オホホホ。ま、いいわ皆様お待ちかねよ」

括りつけた縄をほどいて引立てる朱美。白日の光の中を、まぶしい程白く、滑らかで、清らかな肌が光っている。

### 冴子の声（ナレーション）

冴子の声「これが女奴隷として、自らを売ってしまった冴子の第一日なのです。長い二十四時間でした。でも、この一日というのが契約した日時から見れば、たったの二十分の一位にしか相当しないのです。まだまだ先は長いのです」

（終）

（カット・山岸三郎）



## 我が願望考察

## 複数プレイへの志向

松山 壮吉



近來所謂エリートビジネスマンが愚劣な痴漢行為で一生を棒にふる例がしばしば報道されるその裏面には、夫の性的な好みを妻が理解せず変態呼ばわりする結果、索漠とした謹厳実直な生活が続けながら、心の底に自分自身明確に形のつかめぬ不満が鬱積され、それが突如として爆発したといった、不幸な例も多々あるうと思われる。事件が起こると夫は軽蔑され妻は同情されるが、実は、責任は妻にある場合も多いだろう。

それに比するまでもなく、相

互理解の上で夫婦プレイを楽しめる者は、まことに幸福だと云わねばならない。だが夫婦プレイはどうしてもマンネリに陥らざるを得ない宿命にあるようだ。通常の性生活も多くは全くのマンネリで、しかしそれはそれで生活上不可欠の存在なのだし、夫婦プレイもマンネリのままでそれなりに意味はあり、プレイを知らない人々に比すれば、ずっと幸福だとも言える。

だが時にはマンネリを打破して、より進んだ、より豊かな気持を味わう時間、通常の世界の約束から暫く解放された特別の時間、人生のヴァカンスもあって良いと思うのだ。そして私は、SM夫婦プレイのマンネリを打破する途は、複数プレイにしか求められないように思われるのである。

しかしその場合、参加者の間に生ずる感情問題が、夫婦の信頼関係にヒビを入れるようなことにならないか、特に女性の場合プレイはプレイとして明確に処理出来るかどうか。そこが重要な問題であると思う。

この疑問に対しては、より豊かなセックスを求める欲求に支えられて、生活に余裕があり、相互に監視の眼の厳しくない都会の上流階級から夫婦交換や第三者交渉の波が起こっ



て、次第に中流階級にまで広まりつつあるらしいことが、既に解答を与えてくれているように思う。この傾向は喜ぶべきか否かは別として、避け得られない時の流れであり、宗教の力の弱い日本の場合、この波が大きく広がって、現在のアメリカの、知識層の殆どはその経験があるという一つの風俗の線にまで、追いつき追い越すのは、大方の予想以上に近い将来であろう。そして此のような現象は、これに参加する女性達が、遊びは遊びとして割り切り、生活の基本にひびを入れず、むしろ夫婦生活の良い刺激として有効に利用する技術を、急速に身につけつつある事によって実現していることに注目したい。何故なら、遊びを遊びとして処理し得る女性層の急速な拡大は、SM複数プレイが、夫婦生活の基本に対する加害要因とならず、夫婦生活への刺激ともなる楽しいプレイとして成立し得る地盤の存在を保証しているからなのである。

SM複数プレイの場合も、基本型は通常の複数プレイと同様であり、SMのテクニックを中心とした、ワイルドパーティーであり、夫婦交換であり、第三者交渉であろうが、さしあたり、Mである私が魅力を感じて、望んでいるのは、次の二つのタイプである。

### 交換プレイ

妻S、夫Mの両夫婦が、相互に組合わせをかえてプレイするのである。

夫婦プレイがマンネリ化する要因は、プレイのテクニックの型が定まってしまう、意外性と、それに伴う緊張感がなくなること。日常の夫婦関係から遮断された別天地を作るにはある程度の演技力が必要であり、ともすると女王様と奴隷の絢爛たるプレイの中に、至って世帯じみた現実の匂いが侵入してしまうこと、等にあるようだ。別天地の確立がうまくいかぬ場合、夫S、妻Mよりも、夫M、妻Sの方が障害が大きくなる。

その点、夫婦の交換プレイであると、相手が代ることで意外性も緊張感も期待し易くなるし、何よりも日常性との遮断が出来易くなる。相手が夫ではなく、いわば別世界から奴隷として提供された存在であった場合、女性の残酷性は自由に発揮されて、ずいぶん厳しい責めも実現し得ると思われる、M男性にとっては楽しい期待が持てる。その上、少なくとも当分の間は、夫婦交換ということが、在来の道德感覚なり世間の秩序なりに逆らう「罪の匂い」「秘密の楽しみ」という、贅沢な味付けも楽しめて、一段と気持を高めようと云

うものである。又、新しい男性に対しての責めプレイで、一度壁を突き破った責め経験が生ずれば、次からは夫に対する責めも、一段と飛躍することも期待出来るだろう。

プレイは別室に分かれず一室で行なうべきであろう。妻の目前で他の女性に責められることも刺激になるし、他の女性が夫をしたたか責める場面を見る事は、妻にとっても大きな刺激となり、彼女の振る鞭をより荒々しくすることに貢献するだろう。お互にぞんぶんに男を責めた後で、男共を縛り上げた前で、或は鎖に繋がれた男達の、縦横に鞭痕の走った体をソファとして、女どうしが愛を語るなどという方に発展しても面白いだろう。

プレイと貞操の問題については、私は遊びは遊びと割り切る理性さえあれば自然に解決するように思うが男M、女Sの場合には、責めと奉仕を徹底して、通常の交りは無い方がSMプレイの趣旨は貫けるのではないかと思っている。男S、女Mの場合にはどうだろうか。

### 三人プレイ

このプレイの基本型は、夫を縛っておいてその前で妻と男とが戯れる、或は更に妻と男とで夫を責めるという処にある。これはMの



嫉妬心を刺激するとともに心理的被虐感を強める意味で、単純な夫婦の交換プレイよりも一歩味わいを深めたプレイであるといえよう。二匹の雄ライオンが雌を争って斗った時、雌ライオンは無条件に勝者に追従するのが自然界の鉄則である。このプレイの場合、夫は自から負けたライオンの位置に身を置くのだから、妻の側で、プレイはプレイとして割切る心構えが、交換プレイより一段と明確になっておらねばならないだろう。生活の基本型さえ夫婦が明確に掴んでおれば、遊びとしては夫にとっても妻にとっても、ごく興味深いものだと考える。

「毛皮のヴィナス」の最後では、青年は毛皮のヴィナスたるワンダの手で縛められ、彼女の鞭を待望している時、ワンダは恋人の若いギリシア人を呼出して青年を鞭うたせる。青年は怒り狂うが、容赦のない鞭の下で悲鳴をあげ、ワンダは哄笑してこの様子を眺めている。この経験で青年のマゾヒズムは「治癒」し、ごく圧制的な、典型的ユンカーとして、「更生」するのだが、この結末はマゾッホが当時の社会の常識と妥協したまでのことである。マゾッホがその私生活において、自から嫉妬に苦しもうとするために、ことさらに妻

に他の男との逢引を強制したというエピソードは、彼が自から、若いギリシア人に鞭うたれる青年であることに強い刺激を感じ、高笑いしているワンダに魅惑されていた心情を明らかにしている。

結局この場面は、否定し教訓する形で最も刺激的な場面を示すという、八犬伝から際物映画迄にお馴染みの方法の一例なのである。まだ若かった当時の私も、男に鞭打されるなどまっぴらだと、表面の教訓に同感しながらも、妙に強い刺激を感じるという形で、感覚的には作者のねらいを理解していたように思うのである。

やはりずっと以前に読んだもので、ストーリーも作者もあまりさだかではないが、部分部分の印象の鮮かに残っている作品がある。これもマゾッホの中篇であったかと思う。

男S、女Mなのだが、窮極は死に至る美しいSMの集まりがある。そこで一人の純真で美しい女が「恋しい人の手で拷問されて、なるべく長い時間、苦しんで死ぬのが最高の快楽だわ」と口走る。むろん、現実にはそういう状態になる事など少しも考えていないとっさの発言だが、その言葉が、この作品の重要な伏線となり、主題ともなるのである。やが

て主人公である美青年は、その女と純愛といっても良い恋におち、結婚して田舎で静かに幸せに暮すことになる。しかし青年は青雲の志止め難く、淫虐の名の高い女帝エテカリナの支配する都、ペトログラードをめざして出発する。女は既に心中に不幸な結末を予感して悲しむ。都に出た青年は、女への愛情を純一に守りつつ、一方女帝の寵愛を受けて栄達する。女帝は、青年の心中に他の存在のあることを好まない。青年は遂に女を裏切り、女の住む場所を明かし、女帝は兵士を派し、女を捕えて都に連行し、女帝と青年が酒宴を楽しみ戯れ合う前で、刑吏に命じて女を拷責させる。生命を捨てて女を救うことと、女を見捨てることの間にあって悩んでいた青年は此の時、平然と女の苦悶を眺めつつ女帝と楽しみ、時には自から刑吏に手を貸して女を責め、ほとんど丸一日の言語に絶した責めで、苦痛を十二分に味あわせて死なせてやる。これは裏切りであるが、同時に愛情でもあり、女もそれは諒解していると青年は考えるのである。

当時の私は、このストーリーに対する道徳的反撥が強く、あまり面白い作品とも思わなかったが、前記の責めの場面のみは僅かに



二、三行の叙述であるにもかかわらず、強烈な印象を受けたことを覚えている。今にして見れば、マゾッホは自からをその女の立場に置き、こういう死を最高の快楽として憧れ、つまり女の前記の言葉をモチーフとし、テーマとしても検証するためにのみ、この作品を書いたのだと思われる。

私が、作者の意図を此の様に理解するためには、これらの作品に触れた後からおおよそ十年ばかりの時間と、その間のSMプレイの経験が必要であつたわけである。

遠藤周作の「白い人・黄色い人」の中に、青年がマルセーユのSMの家で「苦痛か恥辱か」と問われて、恥辱を選ぶ場面がある。苦痛を好むのは初歩であり、真のMは恥辱を好むものだと言われている。遠藤周作にSMがわかるとは思わないが、巷間にこういう判断がある事は事実であろう。

私は、苦痛を好む者であつて軽蔑されることは好まない。勿論、死に至ることは最も好まない処であり、現実には妻を奪われることも大いに好まない。しかし前記のようなマゾッホの心情が理解出来るようになったことは、ある局面においては、少なくとも擬似的には恥辱を好む心理的な要素も強まって来たわけ

であろうし、それはそれで、Mとしては一段深化した境地に達したように思うのである。

生命だの生活だのは決して賭けない。堅固な日常性の基盤はたいせつにしながら、一つの別世界、古人のいう壺中の天地に遊び、それなりの演技によって味付けされた、苦痛と恥辱と快楽とを求める複数プレイは、現代において最も豊かな性的快楽であるように推測されるのである。

鞭打一つにしても、妻はワンダのようにソファにもたれ、グラスを片手に、如何にも楽しい気にはほえんでいる前で、厳しく緊縛されて、男の手で徹底的に、鞭打ちされる。妻が「ほら、その筋のついた所をそらさずに続けて打つよ」等と指示して、私の悲鳴を絞り出させるなど、通常の鞭打よりずっと面白と思う。

責められた上、二人が楽しむ寝台の脚に繋がれて奴隷としての奉仕をしたり二人がサイドテーブルで夜食を摂る時、足下に鎖で繋がれて投げ与えられる骨をしゃぶりスリッパにキスしたり、男と妻とがいろいろと厳しい責めを考え出しては次々と私の体に試み、猿轡の奥から悲鳴をあげ、涙を流し、悶え苦しむ御慈悲に縋ろうとする、その呻きと涙を絶好

の刺激として、妻と男とが楽しむ等にMとしての醍醐味があるように感じ、息苦しくなるような、刺激に富んだ想像をするのである。

日本の家屋の構造では通常鞭打プレイは不可能なので、私は、それに代えて厳しい縛りによる拘束の夫婦プレイをしばしばやって来たのだが、その時にも真に効果をあげようとするれば、第三者が現われて妻と楽しく過ごす事が必要なのである。

仮に、私がある一日、中庭に首だけ出して埋められていたとしても、妻は休日には私と外出をしたいと思つていたので駄目になって一人でテレビでも見る以外に仕様がなくなつたとすれば、これはSMプレイではなくなくなつてしまふ。別の男が現われて平常の私の座にすわり妻と楽し気に過ごしている様子を、私は猿轡された首だけ出して一センチも動けず馬鹿みたいに見ているという情景があつてこそ、はじめてSMプレイになつて来る。

相手が男ではなく、レスボスの相手であっても同様である。夫S、妻Mで、Mの妻を、夫と他の女とで責める場合も同様であろうがこれは夫Mの場合よりも心理的危険性は少ないだろう。何故なら遊びを遊びとして処理する技術は、経験的にも生理的にも男の方がよ



く身につけているし、夫が権威を持っている方が、夫婦の日常生活は安定したものになり易く、夫Sの傾向は日常生活の秩序とあまり衝突しないので、日常世界と別世界との障壁

### 毎月確実に入手されるために

### 本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)
		郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替(大阪四二

が、夫Mの場合ほど細心丹念に構築されなくとも無事に過ごせる可能性が存在し得るからである。

ともあれ複数プレイは、夫婦プレイに比し

七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

て、ある程度の危険性を伴うが、それだけに楽しみも大きく、危険を処理しうる「危きに遊ぶ」能力を持った、現代性に富んだ素質の高いマニアとしての遊びであると思われる。

しかし、事がごく重いプレイバシーに属するものであるから、双方とも全く何も知らずその場でのみ会って別れる事の出来る様な信頼すべき場があれば格別だが、そうでないとすれば、双方とも身元を確認し、どちらにとっても暴露はマイナスであり、プレイバシーの確保に努力しなければならぬ位置にある事を確認する必要がある。性病の感染率が素人の女性間で急速に高まっているという現状では、あらかじめ関係者相互に健康状態の確認までのことを考える必要も生じて容易ではないようだ。

現在既に複数プレイを楽しんでおられる幸福な向きもあるようだが、まだ私同様に、夫婦プレイの限界の壁にぶつかって悩んでいる方々の方が遥かに多いであろう。論理を基礎としてではなく、私自身の感覚にもとづいて限界を打破したための考察を試みてみた。大方の御高見を承ることが出来れば幸である。

(カット・東京 赤ちゃん)



新連載 II アブ紳士行状記

# M 派交友録

鬼 山 絢 策

奇妙な結びつき

春木俊野――

まことに奇妙な姓名であるが、本誌の古い読者なら記憶されている人もあるだろうと思う。私の親友である。

春木君とはすでに二十年近い交際である。

二人の交際は何によって結ばれたか、それがまた世にも奇妙な事柄によって親密な信義を交すようになった。

普通、社会常識で考

るなら、親友とは、学校

の同級生とか、同じ会社の同僚、或いは先輩

後輩といったところが一般的で、最も多いも

のであろう。

だが、春木君と私の場合は違う。

では仕事を通じての交りかというところ、これ

がまた、てんで無縁の仕事をしているのである。

彼は或る交通関係の会社の経理課長から

現在は庶務課長であり、私は雑誌の編集長で

ある。もちろん私の雑誌は、交通関係とは全

く無縁である。

仕事に関連がないとすると、金銭的な

がりは？ という順序になるが、十七、八年

間の間に、僅かな金銭貸借が一度だけあった

が、もちろんすぐ返済された。いわゆる時借

り程度のもので、まず金銭関係は皆無だと言

ってよい。

金銭関係が生じないからこそ、二人の交際

が永く続いたのだと私は信じている。





学生でもなければ、同僚でもなく、仕事を通じてでも、利害関係でもない。もちろん縁続きでも、同郷でもない。私は酒はいけないう方だから飲み友達でもない。

ギャンブルは、私はやらないものはないが彼は勝負事は一切やらない。

では一体、何で結ばれたのか――

その結びの神は、何と本誌「奇譚クラブ」なのである。

あれは昭和二十八年頃であったが、私が本誌の誌上をかりて、M派の人士に交際を求めたことがあった。

反響は凄くあった。

天泥盛栄君（アマッド・モリエールをもじったペンネームで、本誌の古い時代の筆者。現在は別のペンネームを用いている）森山美歌さん、黒田史郎君、とやまかずひこ氏、その他、非常に多くの方々から手紙を頂き、私は次々と交際した。

そしてそれ等の同好の士女とは、現在でも断続的に交際してはいるが、親友とまでは残念ながら行っていない。

余人はさておき、春木君に的を絞ろう。

多くの手紙の中に「H」という名前を見た時は、大して気にも、とめなかったが、文中

「私が春木俊野です」とあり、彼の傾向が全く私と似ているので、是非会いたいと日時を約束した。

「M派」と一言で片づけても、実際には、それを分類すると、またいろいろに区別されるのである。

苦痛派、屈辱派、フェチズム偏向派、

同性派、女性リード派、女性追随派、

女性敬慕派、女性蔑視派、複数関係派

ちょっと頭に浮かんだだけでもこの位あるが、腹を据えて分類すれば、この何十倍もに分かれるであろう。

春木氏と私とは全く同方向を指し、年月と共に私も多少変化したけど、彼もまた私と同じ方向に変化してきた。

### 慎重居士

あれはいつだったか忘れたが、日曜であることは確かだった。

池袋駅の西口の改札口で待合わせを手紙で打ち合わせて、約束の時間に行ってみた。

来ていない。

「まだかな」と思って煙草に火をつけようとした時、ツカツカと歩み寄ってきた長身の男

が

「鬼山さんですか」

と警戒気味に、あたりをばかるとような声をかけてきた。

相手が警戒の眼でこっちを見れば、必然的にこちらも相手を警戒的に観る。

宿屋の客引きのように、頭のとっぺんから

足の先まで値踏みするような下品な見方はしなかったが、それとなく、相手はこちらの人物を観察している風だった。

少なくとも私には、そう感じられた。

というわけで、会った時の第一印象は必ずしもよいものではなかった。

だがその後いろいろの人と会ってみて、私は相手を警戒するくらいの方が、信用がおけるのだということが分かった。

要するに、彼は極端な秘密主義の人物であった。

ここにも戦前派と戦後派に区別されるものがある。戦前は出版、興行等の規制もきびしく、風俗取締りに警察が絶対権をもち、また一般風潮としても、アブの世界というものに認識が足りず、アブの世界の人士自体も、内心では恥じていたから、勢い秘密主義になるのであった。



その彼が、喫茶店で三〇分も話し合っているうちに、幸いにも私を信用してくれたのか「春木俊野」はもとよりペンネームであり、手紙に書いた「H」もまた変名であること、手紙の住所も実は友人の住所を借用して、友人を通じて私と連絡したことを打ち明けてくれた。その位い慎重だったのである。

実は本名はこれこれ、住所はここと、知らせてくれた。

度重なうって会う毎に二人の間には友情と信頼が深まり、それから二人でいろいろなプランを立て、実行した。

彼の家庭にも訪問し、奥さんにも会った。奥さんには、自分がMであることをかくしているというので、私はおくびにも出さなかった。

爾来十八年、彼は会社の地位も着々として堅め、いまでは押しも押されもせぬ堂々たる人物となり、家も十坪ほどの小さな家から、三十坪の鉄筋入りの文化住宅を建てて、内外ともに立派な紳士として成長、円熟してきている。

仕事は仕事として、第一義に働く人間が私は好きである。道楽は道楽、仕事と道楽を混同してはならない。そこに信用をおく基礎と

もしている。

また家庭は家庭として、堅実に自己の城を守って行くことも大切である。

そして第三に、この方面のたのしみを趣味として、他人に迷惑をかけぬよう、法に触れぬように節度をわきまえて永く楽しんで行く人物が理想である。

春木君はその理想的な人物であったのだ。

何しろ十八年もつき合っているから、いろいろな事があり、もっと面白い話もあるのだが、これから書くことは、事件としては、ごく平凡で小さなことである。だが我々がマニアとして、この道にどれだけ労力を払うか、実地に経験したことを、そのまま粉飾を加えずに綴るのである。頭の中で空想として描いたものではない。

その苦心談のお粗末にお眼をとめて頂きたいのである。

### 髪<sup>たち</sup>の毛の乱れるバー

彼とは、M派の人々の辿ること、望んだことのひと通りのことはやりつくした。

既に十数年も交際して、いわゆる熟知の仲として、互いにかくしごとは何もない状態で

つき合える唯一の友として、月のうち多い時は十数回も会ってきた。

その後、私の仕事が忙しくなり、一応やりつくして、Mの探求が一時お休みになった時期があった。

そんな時にかきたてる火つけ役は、いつも彼であった。

いろいろなニュースを持ちこんでくる。これも、そのひとつである。

彼は、実にこの道に対しては、まめな男でMの記事の出ている書籍は、雑誌、週刊誌、単行本を問わず映画、演劇もよく観ている。数年前のことだったが、彼は週刊誌の「頭髪の乱れるバー」という東京の遊び場紹介の記事を話してくれた。

それは面白いと思っていると、別の週刊誌にまた同じ記事が出たが、どうもその店は同じ店らしいと言う。

元来私は酒の飲めぬ質<sup>たち</sup>なのだが春木君に誘われて、その頃はバーに行くようになった。行き出すとキャバレー、アルサロ、クラブ、飲み屋、おでん屋、スナック、小料理屋と手当たり次第に行くようになった。

さてその問題のバーの記事を読むと、お客が帰るときは、みな髪の毛がモジャモジャに



なって出てくるというのである。

どういうサービスをするのか、はっきりは書いてないが、どうもMのお客の相手をするバーのように見える。

それに記事によると、暴力バーとは違って勘定もお客と相談の上で、予算を決めてからにするという極めて良心的な店だとある。

「どうです。これを、ひとつ探険してみませんか」

どうもいま考えると言い出したのは私の方からだったと記憶する。いつも彼が水を向けて、踏みきるのは私ということが多いが、彼はまめな男だから、調査は慎重にやる方である。

「探険」することに話が決まると、まず店の確認である。

雑誌には浅草の雷門の奥の「K」という店とだけしか書いてない。

恰度その夜は渋谷で会ったが、どこで飲むのも同じだから、早速行って見ようと、地下鉄で浅草まで行き、仲見世を通過って観音さまに「探険」の成就を祈願して、さて右に行くか、左に行くか、まず右の方を見て歩いたがあまりバーはない。

それから左の方へ行くと、六区のひょうた

ん池（今はないが）の方へ抜ける途中に、かなり、にぎやかなバーが並んでいる。

その中で「K」の頭文字のつく店を探すと二軒ばかりあったが、どうも店の様子を見ると、違うようである。

「第一此処は観音様の奥とは言わないでしよう。だいたい離れちゃいましたよ、此処じゃありませんよ」

と私は再び観音さまの方へ引き返した。

馬道の方へ入って行くと、通りは淋しくなっていたが、それでもところどころにポツリポツリとバーや小料理屋がある。

その中に「菊水」というバーがあって、店の外から様子を見ると、何か異様なムードが漂っている。

「何だか此処のような匂いがしますね」

「そうらしいですな」

とは言ったものの、どうも入りにくい。

いい年をした大の男が二人、店の斜め前に立ってシユンジュンしているとは、まだ純情カレンさが抜けていない証拠であろう。

ふと見ると、そのすぐ前に「黒田」という小さい店がある、これなら気軽に入れる。

「ここで向かいの店の様子を聞いてみようじゃありませんか」

ということ、まずそこへ入った。

六十位の婆さんが一人で店番をしていたが私達を見ると、

「なみ江や、お客さまだよ」

と二階へ声をかけた。

お燭がついた頃に、二階からいま起きたというような顔で、三十位の女が下りてきて、酌をしてくれた。

春木君が向かいの店の様子をそれとなく尋ねてみると

「さあ菊水さんですか。あすこのママさんは浅草の顔役のおかみさんで、面白い気性の人ですよ」

と言う。やくざの女房がやってるとなるとちょっとヤバいと思ったが、女の子は何人位居るかとか、何か変わったサービスするのではないかと、春木君の質問が段々と核心に触れて行ったが、どうも違うようである。

何しろ一時間以上も寒い夜の道をあちこち歩きまわり、それからこの店に入ったので、もう相当、遅い。

二人ともくたびれたので、唄の文句じゃないが今夜はこのままお休みグッドナイトにしようじゃないかといひ加減にしてきりあげた。

「どうも簡単にみつかると思って出かけてみ



たが、イザ探してみると見つからないもんですね」

「ちょっと軽挙モウドウでしたな」

「やっぱりこれはアテのある方法を選ばなければだめだな。そうだ！ その週刊誌の編集部へ電話して、店の名前が何というのか、場所も、もう少し委しく聞いてみるべきですな。」

その方が確実ですよ」

もともとこの話は彼の方から出たのだから調査係は彼の役目である。

### 阿呆を絵に描いた

翌日、すぐ春木君から電話があった。

ちよつと会いたいというので、私の社の近くで会った。

「今日あの週刊誌の編集部へ電話してみたんですよ。最初はなかなか教えてくれませんでしたよ。で、あの記事はデタラメなんですかと言っちゃったら、イヤそんなことはない、ちゃんと行って調べたんだと言うんです。じゃあ教えて頂けないんですかと言うと、あなたはどこのどなたですかと聞くんですよ。こゝうなりやこつちも行きがかりでしょうがないから本名を言いましたよ、するとあなたの会

社の電話番号は？ と言うので、それもしようがない、伝えたんですよ」

春木君が受話器を持って額に汗を浮かべている図が想像されて私は思わず笑い出した。「笑いごとじゃありませんよ。でね、すると一たんこの電話を切って下さい、と言うんです。で話を打ちきって受話器を置くと、すぐベルが鳴って、今度は向こうからかけてきたんですよ。それでようやく場所と名前を教えてくださいました」

「なるほど、なるほど。それは良心的なやり方ですな」

と私は感心した。

「やはり、編集部としては、相手方の人物を一応確認するのがニュースソースに対するモラルを守る上で大切なんですな。変なチンピラみたいのが乗り込んで行って、店に迷惑をかけては悪いし、またその筋の關係の人が調査に行かれるのを手引きしたことになってもそれが正しいか正しくないかは別として、個人的な信義を裏切ることになりますからね。相手がごく普通の社会人であると認めた時に知らせたわけですよ」

とにかく春木君の努力を買って、では早速今夜、再「探険」に行こうと話が決まった。

生憎とその夜は、小雨がしとしとと降る中を御苦労さまにも、また雷門まで出かけたのである。

「その店の名前は『小春』というのですよ」お断りしておくが、私はリポートを書いているのもガイドを書いているのでもない。いまでもその店がそこで営業しているかどうかは知らないが、営業を続けているとすれば、店の実名をのせるのはどうかと思うので一応これは仮名にしておこうと思う。だからこの文章を読んで小春という店を探してもムダである。

「何でも仁王門を潜って鐘つき堂の横を右へ入ったとこだと言うんです」

なるほど鐘つき堂がある。昨夜もそこは探した所なのだが、右へ曲ると二、三軒の飲み屋があったが、小春という店はない。

トコトコ歩いて行くと、山谷の電車通りへ出てしまった。

「こんな方じゃないな、おかしいな」

雨がだいぶひどくなってきた、寒さが身にしみてきた。早く目標を見つけ出して、ともかく一ぱいやりたい。

また引き返して、小路という小路を出たり入ったりした。



「こうまで苦勞するなんて、いいお父さんが二人揃って、アホーを絵に描いたようなもんですな」

二人がバー通いをするようになったのは、いろいろの目的があつてのことだが、その中のひとつに「女にだまされて見たい」という慾望が強くあつた。これは彼よりもむしろ私の方が強い。精神的なMである。グラマーでセクシーな魅力のある女性に、一応は惚れてみる。熱くなつてせつせと通うと、相手はよきカモが網にかかったとばかり、腕によりをかけて金を絞り取るために、手練手くだを用いる。そこで或る程度金を絞り取られ、アホーみたいにだまされてみたいのである。

これもM派の思い立ちそうなことで、春木君は実行はしなかったが、観念的には私の説に賛成してくれた。

いま、底冷えする雨の中を、二日ばかりで「髪の毛の乱れるバー」を根気よく探し求めている、このアホーさが、およそM派の人なら、心情が分かつて貰えると思うのである。

「この苦勞が、この馬鹿馬鹿しさが、我々には、こよなく楽しいんですよ。ねえ、そうでしょう」

「ハハハ、まあそうですね」

山へ登るのは、或る程度苦しいのは覚悟していても、雨とか霧とかのアクシデントに遭うと、やめたくなる、そこを励まし合つて、頂上を目指す。我々も、途中でばかばかしくなったり、面倒くさくなったりすると、一方がこうして励ます？のである。すると片方も同調してくるのだから、やっぱり二人は気が合うのであろう。

さんざ探したが見つからない。諦めようと思つたが、ここで諦めては男がすたると、妙なところで意地を張って、何度もスタート地点の鐘つき堂へ引き返しては探したが分からない。

仁王門の向こう側には交番がある。

「交番で聞いてみましょうか」

と春木君は私の顔をうかがう。

「そうねえ」

とは言つたが、どうやら聞き役を私におしつけている気配である。

存外、二人とも気が小さくてお人好しなところがあつて、お互いにそれを暗黙のうちに認め合つていたのである。

別に交番に聞きに行くのが恥かしいとは思わないが、何となく面倒くさくなる。一人だったら聞いていたかもしれないが、二人とな

ると、多少依頼心が双方におこる。そのくせその何倍も面倒くさいことを、昨夜からやつているのであるが。――

そういう矛盾も、根が道楽だから許されるので、これが仕事だったら恥かしいとか面倒くさいなどとは言つていられない。

「あ、そうだ。もう一本見残した通りがありましたね。あの通りを行つて見ましょう」

と私は彼の提唱のはこ先をかわして、もう一度、鐘つき堂から横へ入った。

すると何のことはない、眼と鼻の先に「小春」という看板が眼に入つた。

「ああ、やっと見つけた」

「この幸せは誰にもやらない」というのはキングトーンズの文句だが、苦勞してやっと頂上へ登る道を発見した時の氣持にも似た安堵感を覚えて二人は顔を見合わせたのである。

實際他愛ない愚かさを、四十にもなった大の男がウロチョロとやっている光景は、我ながらいま思い出してもほほ笑ましく思うのである。

### 犬の居る飲み屋

さてこの「小春」なる店は、一見したとこ



ろ、何の変哲もない平凡な小料理屋でしかない。しかも何か田舎臭い、浅草のまん中にある店とは思えない泥臭さがある。

バーだと思っていたら小料理屋であった。どっちが先に入るか、ここでまた二人は無言のうち「どうぞお先に……」という態度が出る。

だがそういう時は大概、私の方が先に立ってしまうのである、それだけ彼よりも私の方が、よりお人好しでオッチョコチョイというわけである。

まず入る前に、外から中の様子をうかがって見る。

ひっそりとして、お客が一人も入っていない様子である。何となくうそ寒い感じで、中の作りも一ぱい飲み屋の域を出ない。

しかし、ことここまで立至っては、店に入るしか他に手がない。私が先に立って店の格子を、からからと開けた。

「あら、いらっしゃい」

と奥から出て来た女性を見ると、これがまた東北の山の中からいま出てきましたと言わんばかりの、頬ぺたの赤い「山出し女中」さんタイプの女性である。

「寒いわねえ……」

愛想のつもりで言ったのだろうけれど、ズウズウ弁のアクセントまる出しで言われたのには、こっちのファイトを大いに鈍らせた。

案の定、店の中には、客は一人も居なかった。左側がカウンターになっていて、外側に丸椅子が置いてある。粗末な雑作だ。

何となく、モソモソとその丸椅子を股の間に押し込むようにして腰かけて、お酒を二本注文し、春木君の顔を見た。

期待が大きく外れたことは僕の責任ですと言わんばかりに、申し訳なさそうな顔をしている。と言うところにも彼の人の好きがにじみ出ているのだが――

この「やま出し女中」嬢の、「やま出し女中」と違ふところと言えば、さすがに飲み屋の女らしく、初対面のお客でも、そらさずによくしゃべることである。ツータカツータカと、ズウズウ弁で一人前の飲み屋の女らしく一応、愛想はいい。

奥へ酒を取りに行つて、戻ってくると、そのあとに続いて異様な面相をした犬が五、六匹ぞろぞろと顔を出して、もの珍しそうに我々を観察している。

ボメラニアンという犬種であろうか。いい「見せ物」が来たというあんばいに、露骨な

視線で五、六匹が一斉にキョロキョロ眺めまわされたのには驚いた。飲み屋にこんなにもたくさん犬を飼っているというのは珍しい。

とにかく人間様を見世物扱いにされては癪だから、恐い顔をして睨めつけると、何もくれそうもないと見切りをつけたか、奥へ引込んでしまった。

「ずい分犬が居るんだねえ。どういうわけ」「ウン、家には前から犬が居るんだ」

と山出し嬢、何のふしぎもなさそうに答える。もっとも飲み屋で犬を飼って悪いという法律はないから構わないようなもんだが……さて――と

落ちついたところでポツポツ探りを入れなければならぬが、

「これはあんたの番だよ」と私は知らぬ顔をして、すっ呆けて世間話ばかりしている。

すると又一人、奥から女性が出てきて、酒の肴を持ってきた。これはちよつといける女である。洋服のセンスもいい、第一おメンがハクイのである。

途端に二人ともファイトが出てきた。げんきんなものである。

それと奥の小座敷の方から嬌声がもれる。



「ハハア、奥に小座敷があるな」

と、二人、同時にさとした。

「奥に部屋があるの？」

「エエ」

と、このいける女性はすこぶる冷たい返事である。山出し嬢と違って、ひどく不愛想である。

「どうです、奥で飲みますか」

と春木君は水を向けてきた。だが私にはもひとつファイトがわいてこない。それはこのちよつといける女性がやせていた事と、その冷たい返事が気に入らなかつたからである。現に春木君が私を誘っているのを聞いていながら、知らん顔をしているということは、私達を歓迎していない証拠である。

普通我々くらいの年輩の者は、どのバーへ行っても最初はおもてするものである。もて薈が行

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に氏名を書かれずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメーヅ画も）毎に、住所氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用縦書きと共にお願い致します。

ついて、ぜいたくになつてゐる我々としては大いに自尊心を傷つけられた。

もっともこういう時にもっと冷たくされたというM心理が働くこともあるが、それには相手の美しさが、もひとつ足りない。

私がチギシユンジュンしているのを見ると春木君もそれ以上は言わなかつた。

話をしながら、我々の神経は、奥の小座敷へ集中した。

時々奥から顔を見せる女が二、三人居て、どうもこの店は五、六人以上の女が居るらしい。して見ると、店のカウンターはほんのついたりで、ほんとは奥の小座敷で商売しているらしい様子である。

顔を見せた中には、よさそうなものも居たがブスも相当まじっている。それにしても我々の相手をしている山出し嬢は最低である。どうもひどく見下げられたものである。

今夜は、ひとまず引き揚げようと思った。

時計を見ると十一時を廻っている。

私は近いからいいが、春木君はかなり遠くまで帰らなければならぬ。

「そろそろ引きあげましょうか」

春木君は私が気のりしないのを見ると、同意した。

勘定をと言うと、これが何と三百六十円である。お酒二本と、突き出しに肴を一品とつてこの値段は、ばかに安い。

「ハハア」

と私はピンときた。

### 禿頭の紳士

勘定を済ませて帰ろうとする時、格子戸が開いて一人の紳士が入ってきた。

「あーらターさん。何だよ、こんなに遅くまでどこウロついていたんだよ」

常連と見えて、山出し嬢は大きな声で親し気に呼びかけた。

このターさんなる人物、頭はツルツルに禿げ上り、かなり酔っぱらっていて、足もとがフラフラしている。禿頭が熟柿のように真赤に色づいて電灯の光を受けて、みごとに輝いている。

山出し嬢の大きな声が奥まで通つたと見えて、のれんを分けて奥の方から着物を着た女が出てきた。ちよつと肥つてはいるが二十七八の、なかなかの美人である。

「よう、エッちゃん！」

禿頭の紳士はエッちゃんと言うその女を見



ると、派手に両手をひろげて抱きついた。

禿頭紳士の方は土間に立っている。女の方は上りがまちに立っているから、そこに背丈の上でかなり差があった。紳士が抱きついたのは彼女の腰のあたりだった。

「ダメダメッ。こんな遅くまでよそで、浮気して来る奴なんて、上げてやらないよッ」

エッちゃんは腰を抱かせたまま紳士の禿頭を見下ろして、突っけんどんに言い放った。

「すまん、すまんです」

「そんなベロベロに酔っぱらって。今夜はそのまま帰りな」

女の言葉はかなり荒っぽい。いくら親しいお客かも知れないが、それにしても命令口調で、しかも上から見下ろして言うのだから、一層、荒々しく聞こえた。

「ま、そう言わんでくれよ。折角きたんだからさ、一ぱいだけ、一ぱいだけ、な」

「じゃ浮気してきた罰にあやまれ」

「あやまる、あやまるからさ……」

「ダメだよッ、そこへ手をついてあやまれ」

「どうもすみません」

「そんなことじゃダメだよ、そこへ土下座しな。土下座してあやまれ」

紳士は土下座はしなかったが、上りがまち

に両手をついて、女の着物の前へ禿頭をこすりつけるようにして深く下げた、だが足もとが定まらないので、左側へよろける拍子に、女の足に抱きついた。

「何だよう、こんなに酔っぱらってきやがってッ。帰れッ！」

足を抱かれて、女もヨロヨロとしたが、その時、あろうことか、エッちゃんなる女性は着物の裾をひるがえして足を高々とあげると紳士の肩を踏んで

「酔っぱらい、帰れッ！」

と足蹴にしたのである。

足をあげたとき赤い腰巻の中からチラリと白い太腿が見えたが、その足を宙にあげて蹴とばした時、かなり裾がまくれ上って、大胆に白い内股の奥まで露出した。

だがそこで「エッちゃん」は私達が眼をむいて見ているのに気がつき、私を見てニッと笑い、舌をベロッと出して首をすくめた。その表情は意外に女らしく、愛嬌があった。

一方、足蹴にされた禿頭紳士は土間にガマ蛙のようにころがったが、別に怒る様子もなく、ノロノロと起き上って

「そう邪険にするなよ」

とまた脚に抱きつこうとする。そこへまた

奥から女が一人出てきて

「まあまあターさん、どうしたのさあ、こんなに酔っちまって」

この女は三十をだいぶ出た年増だったが、草履をはいて土間に下りると、ターさんを後から抱きあげた。

「サアさ、靴を脱いで！」

女は靴を脱がせて廊下へ押しあげた。

だが紳士の足もとは相当、危なく、のれんを潜って奥へ入ろうとして、抱えられたままよろけて廊下へ倒れた。

のれんが下っているために、廊下の下の方しか見えなかったが、起き上がろうとして、四つん這いになったところへ、傍に立っていた「エッちゃん」が、サツと足をあげて背中へ跨がったのが、女の下半身だけ見えた。

裾がつれて赤い布の下からふくら怪がほの暗い中に、しろう浮かんでいる。

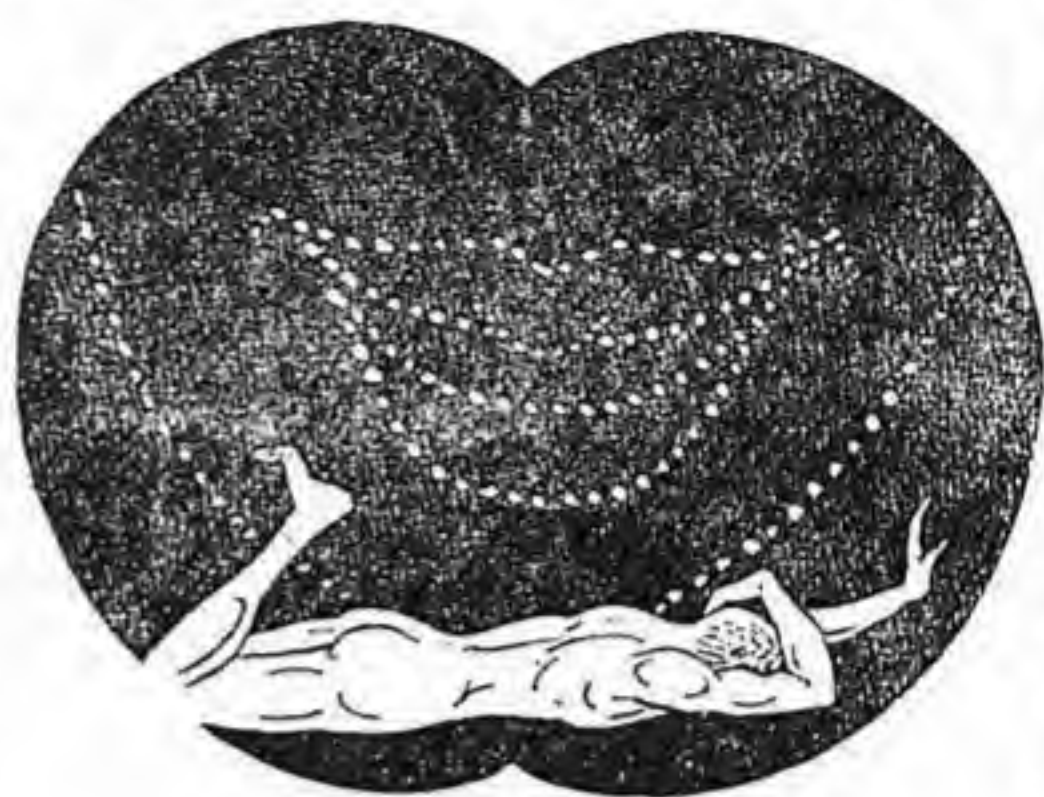
これを見た春木君は、もう眼の色が変わっている。

立ちかけた腰を、また丸椅子にドッカと下ろしてしまった。

(続く)

(カット・春川ナミオ)





### ＜三人称的告白＞

## 麒麟田欧二における人間の探究

麒麟田 欧二

って書いたものは、だから、そうした職業作家の「商品」とはおのずから異質である。そこには、迎合も妥協もない。あるのは真実だけである。

作品はいわば彼の分身であり、一字一字は彼の顔、彼のはだかの心である。それは文字による彼自身の定着にほかならない。

四十四年の四月号から十一月号までに発表された彼の作品は、そういった意味で一つの人間像、心的状況を浮き彫りにしている。

麒麟田欧二——その心的人間像を図式化すると、次のようになる。

臀部フェチズム  
ペニスナイド (あるいは Phallus-worship) — ナルシズム  
オナニズム

彼が、「痴夢」(四月号)「讃臀譜」(五

月号)「白い牡」(八・九・十月号)で描いた臀部への、異常な偏執、「彼の中の世界」(七月号)で熱っぽく告白したファルスへの憧憬、「鎖された夜」(十一月号)での自体愛オナニズム——この三つの性的欲求を頂点にして結んだ三角形の中に彼の全心的人間像は集約される。

これら個々の性向は、いずれもその現象面でホモに酷似した形で発現されるため、第三者の目から彼は往々にしてホモと解される。それというのも、多くのホモの場合と全く同質の固着が彼の中にあり、彼のリビドーもまたホモのそれと最も近い退行軌道をとるといふことが理由と考えられるが、彼が能動的にも受動的にもホモでないことは、「白い牡」の「彼」と「私」、「鎖された夜」の「彼」

現代のような迎合の時代にあって、アブノーマルな小説を書いたからといって、その作家が変態者とは限らないし、同時にアブノーマルな性格をもつ作家が必ずしも変態小説を書くとは限らない。

しかし、麒麟田欧二の場合、第一に彼は作家ではない。ということは、人気や稿料のために迎合的作品を書く必要は毛頭ないし、白々しい虚構を、もっともらしく書いて、読者を惑わすほどの器用さもない。彼の書くものが小説と呼べるかどうか、また、その巧拙は別として、彼が、彼なりの己みがたい契機によ



の場合で、はっきり否定されている。

さて、彼における三つの性向——これらはいわば水面に開花（それは隠花かもしれないが）した三つの別々の花だが、その茎を水中に辿れば、それぞれが一つの根に拠って水底に没している。三つの願在的性向は彼の中に深く潜在する一つの根から分化したものだ。

一つの根——それはナルシズムである。

彼のリビドーの中核をなすのは本質的に自体愛、ナルシズムであり、彼の性的欲求は常に自己へ回帰する。現象的に他者の臀部あるいはファルスへの欲求と見える場合も、それは自己の「代物」としての他者であり、この場合、当然自己に極似したものとして男性が選ばれることになるが、これはホモとナルシズムの相互関係と全く同じ回路である。ホモの場合も、対象（同性）の中に自己を見るという点では、彼の場合と異ならない。しかしホモの場合は、自己の代物としての対象を、「全体」として、把握する。つまり、自己の「全体」を対象の「全体」に投影することにより対象のすべてが性的目標になるのに反し、彼の場合は、そこに明瞭なフェチズムの要素が加わり、対象を全体としてではなく、全体から完全に切り離れた「部分」

自己の一部位の代物としての「部分」としてしか見ないのである。

「痴夢」の中で北国生まれの力士の恰もロースの小山のような白い臀部に狂的な愛撫を加えたのも、それがいわば自己の肉体の同じ部位に対する彼の願望であり、また「彼の中の世界」における黒人兵士の黒く逞しいファルスに対する偏執も、それを自らのものにしたという彼の熱望の裏返されたものだ。

ロースの小山のような臀部と、漆黒に輝く巨根を具えた自己を空想し、自らの肉づきを自ら愛撫し、自らの灼熱したものに自ら口づけすることこそ、彼の唯一無二の欲求であり現象的な他者愛撫は、この充たされぬ欲求の「すりかえ」にはかならない。むしろ、このすりかえの場合にも、心的対象は自分自身に向かっていることは言うまでもない。

ところで、外在者としての性的対象は、自らの性に酷似したという意味で当然男性となると前に書いたが、厳密に言えば、本来、対象を全体として指向することのない彼にとって、性別は殆ど問題にならないというべきだろう。全体としての女性に無関心であると同様、全体としての男性も、もちろん彼にとって意味がないわけで、だから彼が、男女のい

ずれを対象としようとして、それは全体としての相手を愛することとは全く関係がない。その全体を愛するが故に、その一部をも愛するという一般的な愛のかたちとは本質的に異なるわけで、したがって、彼は同性愛者でないと同じ意味で、異性愛者の範疇にも、むしろ属さない。言うところの自体愛者——ナルシストである。

しかし、その自己をも彼は全体として愛さない。彼の性的対象として、自己もまた「部分」に過ぎないわけで、こうした自己に対するフェティッシュな愛がすり変わったものが「部分的代物」としての他者ということになる。彼の妻も、その例に洩れない。

彼の家庭における性生活（といえるかどうかはしらない）が、それを裏書きしている。彼は、肉づき豊かな（これが何にもまして結婚の第一条件であり、結婚後も彼は、妻にいつそう肥ることを強要した）妻の臀部を愛しその間、妻は彼を唇で愛撫する。つまり、妻の臀部を自らのそれに置きかえたと同時に、自らの唇を妻のそれに置きかえたのであり、それ以外のかたちで、彼が「自分のために」妻の唇や性器を求めたことはない。彼の妻は女性として、あるいは全き肉体として存在す



るのではなく、単なる「臀部」として、それも彼自身の代物としてしか存在しない。彼にとって、妻とは一つの「部位」に過ぎない。

これは、対象が男性の場合も同じで、相手がどんなに美少年であろうが、どんなに美しい唇、美しい瞳を具えていようが、それは彼のリビドーとは全く関係がない。この場合、美少年を抱きしめ、その唇を求め、その瞳に口づけしたいという欲求は、対象を全体としてとらえるホモのものである。彼にとって少年は、ただの「臀部」あるいは「ペニス」に過ぎないわけだが、多くの場合少年の小さな臀部やフィモーゼのペニスは、彼の欲求を充

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いません。致しておりますの故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

ただだけの「部分」的価値に欠けている。ペニスナイドあるいは Phallus-worship とは、自分よりあきらかにすぐれたもの、より完全なものへの志向であるからだ。彼にホモ的な美少年嗜好が存在しないゆえんである。

その逆に、彼がパッシブな同性愛者と見あやまれるのは、ペニスナイドが往々にして受動的ホモと結びつくからである。彼の場合も、それが Fellatio に対する願望という、ホモと全く同じ形であらわれているのは「彼の『世界』」にある通りだが、ホモと彼の違いは、全体の中の一部としてそれに対する前者と、全体とは切り離れた局限された一部としてそれに対する後者という内者なものだけである。このように、現象とはうらはらに彼がホモたり得ないのは、何度も繰り返したように、彼にとって他者とは「部分」に過ぎないからである。彼のリビドーの外的対象としての形をとりながら、その「部分」はすべて彼の中に回帰し、包摂される。

麒麟欧二はナルシストであり、それを根にいくつかの象をかえた欲求が彼の心的状況を派生し、さらにそれが彼の作品の契機となっているのである。

彼のナルシズムをいまさらその幼児性欲や

遺伝因子にまで遡って分析したところで、あまり意味はない。

すくなくとも彼はごく平凡な社会生活を営んでいる。朝、新聞を読み、保守党政治に常識的批判をもち、ゲバルト学生に五〇パーセントをやや上回る理解を示す。

文学的嗜好においては、ランボー、サルトルを敬慕し、サドを肌で感じ、ジュネを受け入れ、クロソウスキーに共鳴すると同時に、ノーベル賞の川端文学に反吐を吐く。

社会という虚構の中では、彼もまたとりつくるった一個の社会人に過ぎないが、その彼にとって、真実なものが一つだけある。——文字である。すべての見せかけの中で、迎合も妥協もしない文字に、自らを定着させることによってのみ真実を見いだす術を知った彼は、これからも細々とながら、その真実への巡礼を続けることだろう。

〔追記〕彼がつねに残念に思うのは、公刊物というカセによって、彼の真実（文字）がかなりの削除または手直しのためありのままの姿で誌面にあらわれなかった（ことに「彼の『世界』」にそれが多かった）ことである。



切腹百年史

女性篇

中 康 弘 通

切腹という行為は、その発生ではどんな事情があったか判らない。しかしその後、それは勇烈とか潔白、廉恥などの美德を示すものとされた。新渡戸稲造博士の「武士道」をはじめ、幾つかの著作がこの解釈に拠ってなされ、また、戦後にはかえって、狂気の沙汰としてその発生を否定されて来た。

ところで筆者が過去二十年にわたり、田谷敬生、壬生三郎（「切腹七部集」の著者）片岡政則、黒部竜二、鳴海大介、故須藤律夫諸氏をはじめとして、多数読者の方々のご協力をも得て、文献を通じたりもして集録した、明治百年の切腹例のうち女子の分をここに一覧リストとして発表する。（人名は伏せた）

実は、是が傾向分析の作業に移る前に、更に是ら、またこのリストから逸しているに違

いない相当数の例について、事件発生当時を報道する新聞（なるべく詳しいローカル紙や中央紙のローカル版）あるいは雑誌等の正確な写しをご提供下さる方がありはせぬかと思うわけである。よろしくお願いして、以下時代別、発生順に簡記しておく。

凡例

年月日 発生年月日

地名 発生府県市名（東京のみは郡市区名）

職業 家業又は本人の職業を簡記する。

年令 発生当時の発表のまま、従って戦前は数え年、戦後は満年令。

原因動機 極力簡記する。

転帰 既遂（死亡）未遂（重軽傷）の別

を明らかにする。

一、明治時代

年月日	地名	職業	家業身分	年令	原因動機	転帰
7 4 27	新潟	(不詳)	不貞自責	未遂		
8 5 23	牛込区	(不詳)	25 26 (不詳)			
11 6 20	鹿児島	士族の妻・?	投獄	未遂		
12 10 8	品川区	不明・未婚	24 ヒステリ	未遂		
17 8 12	浅草区	娼妓(吉原)	36 痛苦	重傷		
24 5 20	京都市	女中・離婚	27 憂国	死亡		
33 5 15	福岡県	不明・未婚	17 発狂	未遂		
36 3 1	牛込区	(不詳)	55 ヒステリ	死亡		
36 5 7	本所区	女中・未婚	19 家庭不和	死亡		
36 6 16	深川区	娼妓(川崎)	21 情死	死亡		
36 8 21	佐世保	不明・既婚	30 痴情	重傷		
37 3 20	浅草区	不明・既婚	40 病苦	未遂		
37 12 6	深川区	不明・既婚	28 嫉妬	重傷		





45	2	11	日光町	芸妓32 挙動不審連行中未遂
44	12	22	赤坂区	古物商の娘・18 気うつ症死亡
44	7	18	久留米	女中・未婚・20 精神異常?
44	7	14	本郷区	女中・未婚・20 窃盗被疑未遂
44	5	2	静岡県	女工・未婚・23 (不詳) 重傷
44	3	15	新潟県	不明・既婚・32 ヒステリ死亡
44	1	5	熊本県	不明・既婚・72 病苦 未遂
43	12	29	福岡県	不明・既婚・? 発狂 死亡
43	8	4	長野県	不明・既婚・23 (不詳) 死亡
43	6	26	静岡県	公務員の妻・23 (不詳) 危篤
42	8	24	神奈川	不明・既婚・74 (不詳) 未遂
42	8	14	神奈川	不明・既婚・28 病苦 危篤
42	8	4	群馬県	農業・未婚・24 継母不仲死亡
42	7	?	門司市	不明・既婚・30 精神異常重傷
42	5	26	群馬県	農業の妻・37 家庭不和死亡
42	5	14	栃木県	不明・未婚・22 私生児殺未遂
41	12	2	深川区	娼妓(州崎) 24 失恋 未遂
41	9	1	京橋区	理髪師の妻・54 病苦 未遂
41	8	17	大阪市	女工・既婚・27 離縁話 未遂
41	7	25	神戸市	職工長の妻・22 嫉妬 未遂
41	7	?	大阪市	娼妓(不詳) 23 情死 未遂
41	5	22	本郷区	小説家・未婚 29 (不詳) 死亡
41	1	18	不明	(不詳) 76 精神異常死亡
40	8	20	下谷区	不明・既婚・68 精神異常危篤
40	7	22	深川区	漁師の妻・40 精神異常死亡
39	4	26	麴町区	(不詳) 24 精神異常危篤
39	1	14	麴町区	不明・既婚・44 精神異常未遂
38	3	18	京橋区	不明・離婚・30 生活苦 未遂

## 二、大正時代

45	6	29	日本橋	歯科医の妻・34 ヒステリ未遂
1	8	7	熊本県	不明・既婚・25 (不詳)
1	10	19	栃木県	(不詳) 28 (不詳) 死亡
2	4	26	埼玉県	不明・寡婦・31 生活苦 死亡
2	7	7	佐賀県	酌婦 23 厭世 未遂
2	8	9	水戸市	下宿屋養女・19 姉弟心中死亡
2	8	10	茨城県	不明・既婚・27 夫の乱行死亡
2	8	20	栃木県	(不詳) 21 家庭不和死亡
2	9	11	高崎市	不明・既婚・67 精神異常未遂
3	1	6	名古屋	不明・既婚・21 復縁苦 未遂
4	5	?	千葉県	尼僧 30 (不詳)
4	6	26	本所区	公務員の妻・夫婦喧嘩未遂
4	7	6	横浜市	会社技師の妻・離縁話 未遂
5	?	?	京都市	製鋸業の妻・39 (不詳)
6	3	22	大分県	小学生 13 切腹を模す未遂
6	8	7	福島県	不明・既婚・38 無理心中未遂
6	8	22	釜山府	酌婦 27 失恋 未遂
7	4	11	静岡県	芸妓 ? 失恋 危篤
7	7	25	葉山町	女中・未婚・25 窃盗嫌疑死亡
8	1	26	山梨県	(不詳) 27 精神異常死亡
11	11	2	上諏訪	資産家の寡婦 45 夫を追う死亡
11	11	9	下谷区	モデル 20 (不詳) 死亡
11	11	22	赤坂区	医師の未亡人 53 (不詳) 死亡
11	11	28	茨城県	(不詳) 23 病苦 危篤
12	3	16	尼崎市	雑貨商の妻 21 病苦 死亡
12	5	6	京都市	軍人の妻・24 (不詳)
12	7	2	?	綿商の妻・37 (不詳)

## 三、昭和・戦前

12	12	19	埼玉県	(不詳) 23 (不詳) 未遂
13	5	13	上諏訪	不明・既婚 36 病苦 未遂
14	5	12	不谷区	不明・既婚 27 家庭不和危篤
14	7	24	山形県	不明・既婚 36 (不詳)
15	2	10	神奈川	生花師匠? 42 (不詳) 死亡
15	10	17	前橋市	不明・既婚 45 (不詳)
2	5	15	台中市	職工の妻 32 憂うつ症未遂
2	5	16	大阪市	映画人の妻・24 (不詳) 未遂
2	10	10	千葉県	(不詳) 22 (不詳)
2	10	17	戸塚	神職の妻 30 精神異常危篤
2	12	24	世田谷	漬物商の妻・24 不眠症 死亡
3	3	23	北海道	農業・寡婦・30 厭世 死亡
3	4	4	茨城県	農業・寡婦 64 家庭不和危篤
3	4	6	福島県	(不詳) 55 (不詳) 危篤
3	5	10	宇都宮	不明・寡婦 54 精神異常危篤
3	5	22	甲府市	酒商の妻 24 夫姑虐待死亡
3	6	7	静岡県	僧侶の妻 22 家庭不和死亡
3	6	18	上諏訪	資産家の娘 20 失恋 未遂
3	6	29	神奈川	農業・寡婦 41 神経衰弱未遂
3	7	3	宇都宮	不明・寡婦 53 神経衰弱死亡
3	7	13	府中町	洋食店の妻 43 神経衰弱危篤
3	9	21	福島県	公務員の妻・21 家庭不和死亡
3	10	24	福知山	軍人の妻 ? 病苦 危篤
3	11	4	埼玉県	農業・既婚 45 生活苦 死亡
4	7	3	下谷区	不明・既婚 22 生活苦 ?
4	7	9	神奈川	(不詳) 21 病苦 ?
4	10	22	大阪市	履物商の妻 23 狂言自殺危篤



5 3 13 東京府	精肉商の妻	32	一家心中死亡	5 ? ? 兵庫県	不明・既婚	? 病身	死亡	33 7 12 京都市	旅役者・既始	20	一家心中未遂
5 6 17 福井市	豆腐商の妻	37	家庭不和死亡	10 5 ? 大阪市	料理屋女将	? (不詳)	死亡	33 11 20 大阪市	会社員・妻	41	一家心中死亡
5 8 30 大阪市	貿易商内妻	31	身持を苦死亡	6 5 ? 神戸市	不明・既婚	? (不詳)	死亡	34 33 ? 福岡市	工員の妻	36	原因不明死亡
6 6 24 板橋区	不明・既婚	53	精神異常死亡	四、昭和・終戦(略)				34 5 7 荒川区	調理士の妻	25	三角関係未遂
6 12 19 深川区	娼妓(州崎)	26	病苦 未遂	五、昭和・戦後				34 11 6 佐賀県	劇場勤務寡婦	38	病苦 死亡
8 9 15 品川区	公務員の妻	23	情死 危篤	25 12 26 下関市	無職・未婚	18	税金苦 危篤	35 2 24 京都市	女子大生未婚	21	失恋 未遂
8 9 20 静岡県	農業・未婚	26	躁うつ症死亡	26 3 22 群馬県	工員の妻	36	無理心中未遂	35 6 21 仙台市	不明・既婚	25	(不詳) 未遂
9 4 17 横浜市	芸妓	32	ヒステリ死亡	26 9 24 目黒区	会社員・妻	34	母子心中死亡	35 7 25 岩手県	不明・既婚	24	(不詳) 未遂
9 5 28 神奈川	不明・未婚	20	同性心中未遂	27 26 ? 徳島市	不明・未婚	20	(不詳) 死亡	35 ? 9 大分県	農業の妻	28	母子心中死亡
9 8 31 京都市	不明・既婚	28	家庭不和未遂	27 2 23 足立区	工員・未婚	23	失恋 未遂	35 11 25 山形県	公社員の妻	48	無理心中未遂
9 9 7 吉祥寺	不明・既婚	63	(不詳) 未遂	27 3 11 南多摩	農業の妻	43	病苦 死亡	36 1 6 島原市	旅館女中未婚	20	同僚不和死亡
10 9 19 京橋区	芸妓	21	情死 未遂	27 8 ? 広島市	不明・未婚	17	母を慕う危篤	36 2 22 広島県	農業・未婚	22	ワキガ苦死亡
10 11 10 北海道	精肉商の妻	40	(不詳) 死亡	28 7 13 大阪市	公務員の妻	27	母子心中死亡	36 3 13 京都市	工員・未婚	17	無断欠勤母兄叱責死亡
11 3 14 世田谷	請負師の妻	26	ヒステリ死亡	28 8 4 大阪市	不明・寡婦	52	発狂 死亡	36 4 19 仙台市	(不評)	78	病苦 ?
11 5 6 静岡県	農業の妻	37	(不詳) 死亡	28 ? 6 島根県	中学生・未婚	14	病苦 死亡	36 4 22 練馬区	(不詳)	71	病苦 ?
11 12 17 深川区	不明・既婚	30	ヒステリ死亡	28 10 ? 広島県	街娼・未婚	19	厭世 死亡	36 5 21 因島市	無職・未婚	22	精神異常死亡
12 12 15 板橋区	不明・既婚	32	精神異常死亡	28 12 24 世田谷	漬物商の妻	24	原因不明死亡	36 7 5 日上市	無職・既婚	57	神経衰弱死亡
13 3 18 京都市	漬物商の妻	45	夫婦心中重傷	29 1 31 大阪市	工員の妻	48	病苦 未遂	36 9 28 名古屋	無職・離婚	29	無理心中未遂
13 4 6 神戸市	カフェエマダム	37	美容失敗死亡	29 5 13 大阪市	公務員の妻	28	無理心中重傷	36 11 10 岡崎市	土建業の妻	24	原因不明死亡
13 5 26 本郷区	不明・既婚	47	神経衰弱死亡	29 5 28 大阪市	神具製造業妻	43	妾を斬る重傷	36 12 7 中央区	無職・内妻	28	無理心中未遂
13 7 15 下谷区	派出婦	31	情死 未遂	30 4 25 神戸市	無職・既婚	24	母子心中未遂	37 6 5 所沢市	公務員の妻	35	(不詳) ?
13 12 30 大阪市	人夫・既婚	39	難産 死亡	30 7 13 神戸市	不明・未婚	24	(不詳) 未遂	37 8 18 大館市	店員・未婚	18	父と不和未遂
14 1 19 広島市	軍人の妻	48	夫を激励死亡	30 8 10 奈良県	化粧品店の妻	51	家庭不和死亡	38 4 22 渋谷区	学生・未婚	23	無理心中未遂
14 7 19 横浜市	(不詳)	28	ヒステリ未遂	30 8 14 広島県	看護婦・未婚	29	ヒステリ未遂	38 5 29 岡山市	不明・既婚	29	無理心中未遂
15 7 10 山口県	教員の妻	43	(不詳) 重傷	31 1 3 岩手県	農業・離婚	20	無理心中未遂	38 7 12 彦根市	工員の妻	41	病苦 死亡
16 4 29 浅草区	(不詳)	70	(不詳) 重傷	31 11 3 千葉県	不明・既婚	53	母と心中未遂	38 8 16 八尾市	公務員の妻	28	神経衰弱重体
18 6 14 ?	農業・未婚	19	心中 死亡	32 1 8 田辺市	不明既婚	52	病苦 死亡	38 8 28 西宮市	船員の妻	29	株暴落 死亡
20 3 28 千葉県	農業・既婚	25	姑と不仲死亡	32 6 24 江東区	不明・既婚	49	病苦 重傷				



38 9 11 田川市	女子大生未婚19ノイローゼ	死亡	40 12 1 渋谷区	美容師・未婚16心中	死亡
38 9 14 島原市	ブロック業妻31離婚	死亡	40 ? 20 宮崎県	(不詳)(不詳)	
39 1 8 佐賀市	公務員の妻41ノイローゼ死亡		41 2 19 熊本県	(不詳)(不詳)	
39 1 11 人吉市	無職・未婚22無理心中 死亡		41 2 25 春日井	不明・既婚・49(不詳)未遂	
39 1 31 名古屋	無職・未婚23ノイローゼ死亡		41 2 25 秋田県	(不詳)(不詳)	
39 5 22 大阪府	会社員の妻32ノイローゼ死亡		41 7 20 東京都	不明・未婚・20(不詳)重体	
39 5 27 大垣市	会社員の妻25ノイローゼ未遂		41 7 22 栃木県	農業・既婚・40病苦 死亡	
39 7 30 横須賀	船員の妻 30ノイローゼ未遂		41 7 30 千葉県	農業・既婚・69無理心中死亡	
40 1 1 横浜市	飲食店の妻25夫婦喧嘩 死亡		41 8 1 葛飾区	大工の妻 32母子心中重体	
40 2 27 板橋区	無職・離婚・34三角関係未遂		41 8 27 武蔵野	美容師・既婚32	
40 4 17 ?	(不詳)(不詳)		42 1 1 佐伯市	不明・既婚・28姉妹喧嘩死亡	
40 4 27 西多摩	無職・未明・23原因不明死亡		42 8 30 大阪市	会社員の妻・24無理心中未遂	
40 4 28 群馬県	女優・未婚・22心中 未遂		43 3 12 川崎市	大工の妻 26原因不明死亡	
40 5 10 千葉市	無職・寡婦・24母子心中重体		43 4 19 京都府	商業の妻 29ノイローゼ未遂	
40 6 17 守口市	工員の妻 36ノイローゼ未遂		以上、明治百年のニュースからとりあげて みたリストである。		
40 8 18 京都市	工員・未婚・28原因不明未遂				
40 10 31 徳島市	(不詳)(不詳)				

## 天星社刊

### △限定版グラビア写真集▽

### 在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」一部一〇〇〇円(送共)略号「美1」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」一部一〇五〇円(送共)略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野

郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

終戦当時の事例は、口頭や私信による伝達が多いので、一応保留した。

また昭和16年から25年頃までは、殊に新聞用紙の不足からニュースの省略が多かった。従って市井の事件については報道もれが多いと思われる。また女性の場合、新聞社でも遺族の要望で記事を發表しないこともあると聞くなり上廻るものと見てよいであろう。

地方紙は記事が詳しく、地方の図書館、資料館によく保存されているので、よろしく読者の方々のご協力をお願いしたい。原文そのままの写しをお寄せ願えれば幸いである。

小企業に勤め、夏休みも土曜半休もなく、と云って日曜祝日は図書館が休館なので一年に、わずか秋の一日、従業員の慰安旅行日や有給休暇に振りかえて、地元の図書館に、やと数カ月分の古い新聞綴じを漁るしか機会のない筆者としては、皆さん方のご協力以外何のよすがもないのである。ともかく皆さんのご厚意で筆者のノートを埋めることが出来たら、と希求して筆をおく。

× × ×

本誌十一月号にご寄稿の西条夏氏、新しくお目にかかるお名前だが、今後のご健筆を願いたいものである。それにつけても、田谷敬生氏、渋谷四郎氏など古く活躍された方々の筆を絶たれたのは残念である。





## 第一変奏 馬

「娘に会わせて下さい。後生ですから」

——ほほう。マダムは、ハダカになれたことが嬉しくてたまらないとみえますな。でも娘さんは目を丸くされますよ。ああ、そう。娘さんの目には、ちっとも毒とは思いいらないのですか。

「……………」

——そうですね、マダム。

「あなたは獣です。いや、それ以下だわ」

——おや、今になってお気づきになられましたか。少し、お鈍いですなあ。

「主人に会わせて下さい」

——主人？ 主人はおれだが。

「違います。わたしの主人です」

——これは聞きわけの悪いマダムだ。よろしい。もっと責めて欲しいというのなら叶えてやれないこともない。

「触れないで。汚らしい手なんかで」

——主人に命令なさる？ それもよからう。

でもあなたは今ご自分の身体に起こっている

おれと奴隷の幻想曲

## 八つの変奏

宇 光 仙

変化を知らぬ存ぜぬではすまされませんぞ。目を細めてうっとりとしている。おお、よしよし、可愛い花よ。

「あなた、助けて」

——マダムよ、あなたの夫は、わたしにあなたをたくされたのです。だが特別の計らいを与えてあげられないこともない。マダムよ、あの木馬に乗せてあなたを夫のもとにお帰しよう。さあ、歩け。しりごみをするな。鞭が欲しいか。ええい、さっさと歩け。

「わたしが悪うございました。それだけは、どうぞお許しになって下さい」

——踏み台を用意してやったぞ。一気に跨る



のだ。夫のもとに逃げ帰れ。おれが如何に恥知らずな獣であるか、報告するがよい。そう。お前の大好きなキャンディに似た鞍を支えにして、馬から振り落とされないようにするのだ。しかめっ面をするな。そうだ。それでいい。それでは鞭をくれるぞ。馬は尻を振り上げて、お前をのけものにしようとするだろう。

「へええい。ああ、お助け下さい」

——すっかり首にしがみつけ。落馬するぞ。

「しずめて下さい。振り落とされるうッ」

——あわてるな。まだ馬に鞭をくれたばかりだ。もう十分間は耐えろ。そうしたら、お前の夫は、お前を助けてくれよう。

「どんなご命令にも従います。どんな辱しめでも受けます。お願いです。馬をしずめて下さい」

——わめくな。もう十分間は耐えろ。快適な乗り心地だろう。それにしても、この馬は、いやにあげられることが好きらしい。田舎で育てあげられた馬が、いきなり都会で自動車のクラクション責めにあったにも似ている。

「あああ……」

——だから、しっかりとしがみついていると忠告してるのに。おやおや、腰を振り払われ

て、馬の首に腕をからませているだけになった。如何に、その細い腕に力をこめたところで、じきに振り切られてしまうだろう。

「お許し下さい」

——そうら、落ちた。馬鹿な奴。もう、お望みの夫のもとへは帰れんぞ。せっかく計らってやったのに。

「すみません。お許し下さい」

——だからといって、別にお前の心臓を刃で突き刺すようなことはしない。さあ、立て。そして水槽にすっぽりと身体を浸し、涙を洗い流すがいい。恐れることはない。ちょっとは手荒かも知れないが水浴びのつもりでいたらい。水は冷たいが凍りつくこともない。身体を沈める。ようし。ご機嫌だ。それを百遍、繰り返せ。馬に乗っている時は振り落とされる心配があっただろうが、今度は安心するがよい。お前の動きは水という名の荒馬を乗りこなしているのにも似て見た目に、すがすがしい。ご機嫌だ。

## 第二変奏 鞭

おおよそ、わたしが今あるように、理由もなく不幸を強いられている女性は、この世に二

人とおりませんでしょう。わたしの一日は鞭のひと打ちに朝を迎え、鞭のひと打ちに夜を迎えるのでございます。ああ、ゼウスさま。お哀れみ下さいまし。加害者は、そのようにわたしを虐げながら後悔ひとつせず、こともあろうに「奴隷」呼ばわりするのです。しかも加害者はまだ二十六の若者にすぎません。自分では「文学に噛まれた」なんぞと体裁のよいことを人に宣伝しているらしいのですが実際のところは何のこともなく、自慰的創作に精を出す小僧にすぎないのです。わたしはその点を、多くの方々に正しく知っていただきたいのです。だけど皆さんは、下をうつむかれたり横に目をおやりになる。それは、鉄格子の向こうから朝の光がもれ出した時に、決まって、わたしの心が、あの若者の鞭の空を切る音を待ち焦がれ出すことを、もうとっくに、お見抜きになっっているためかも知れません。確かにそうです。だからといって、わたしが被虐愛好者だなどとお思いになられますことは、正しいことではありません。わたしは単に朝の光に感動しているだけのことなのです。

朝の光は闇を突き破り、大きく怒張し、まさしく、この世の明るさや希望や幸せの象徴



であると同時に、それらを導く先頭者にふさわしい風格と気品があり、そのことが、わたしの心を、とらえるのです。わたしは、その一寸の狂いもなく繰り返されるこの世の人々にとって欠かすことのできないものの目覚めともいふべき厳肅さに、日々感動を覚えるのでございます。

しかしながら運の悪いことに、たまたま、わたしが、もっとも感動するのが、丁度、若者の鞭が空を切るのと一致するのです。少しお考えになれますなら、すぐにおわかりいただけますことでございますが、一体この世に、犬や馬ごときと同類に扱われて喜ぶ者がありませんか。わたしは文明人であって、しかも、もっとも高等な文明を習得した者でございます。さらに、野蛮人ごときに辱しめを受ける覚えなど、どこにもありません。

こんな風にお話し申しあげている内に、もう闇が去り、朝が始まる時刻になったようです。わたしの胸の高鳴る一刻です。わたしはベッドの上に大の字に張りつけられながら、神の祝福を受けるのです。鉄の手枷や足枷の冷やかさが、如何に強固でございましょうとも、わたしの心を縛りつけることなどではきないのです。

「おできになるなら、やってごらんさい」と、わたしは、いいたい。

若者が、鞭をピュッピュッとさせながら、一見、如何にもいかめしい顔つきでやってくる時刻でございます。愚かなる野蛮人は、すっかり悪に染まりきっているのでしょう。野蛮人は小僧にふさわしく、わたしが、どんなに責めたてられようとも、決して屈しないことに気づいていないのです。わたしの背に神がおられますことにも気づくことはなく……「奴隷よ、朝だ。やい、目をさませ」

と乱暴きわまりない口調でいいながら、いつものように、わたしを鞭打つことでございます。あ、あ、慈悲深いゼウスさま。わたしがこの身で、全身で鞭を受け止めます。どうぞ、お顔をお出しになったりなさいませんように。わたしにとって鞭は、もはや苦痛などではございません。

### 第三変奏 唾

奴隷は、近頃おれの調教に、驚かずにいられない喜びの声を発し、おれを悩ます。第一に、おれより十歳も年上である奴隷の肉声はことさら声帯が具合よいと見えて、壁に突き

当たりざまハネ返って、おれの心をチクリチクリと刺すのである。奴隷のしおきは豊かに高々と持ち上がり、それはおれの鞭を怒らせる。しかしながら奴隷が気に入っているのはしおきに受ける鞭ではなく、両手を万才のようには開いて天井からの鎖でとらえ、片足を床からの鎖で固定し、片足を真横上方に、ほぼ百二十度位の角度になるまで天井の滑車を利用して持ち上げ、固定した状態で受ける胸部や腹部への鞭であることにおれは気づいた。

それは明らかに、文明の持つ羞恥や偽善のひとかけらも入り込む余地のない状況をつくり出され、ひたすら自然で美しい秩序をいやがうえでも受け入れなければならず、さらに重要なことは、それを受け入れても自分の置かれている状況からそうならざるをえなかったという口実を、十分に裏付ける言葉を、かもし出せるところにある。

おれの鞭が空を切るだけで、奴隷は身体をくねらせ目を閉じて、できうる限り多くの快楽を、痛みの中から汲みとろうとやっきになる。おれの鞭が空を切ることを重ねるたびに奴隷は、うっとりとして憧れに似た目でおれを見つめるようになる。それは奴隷が、文明社会では口に出れない部位を打ちつけてくれるこ



とを望む、意志表示である。しかし、おれは  
 そ知らぬそぶりで胸部を打ちつける。おれは  
 そんな時によく、匿名の特権で書かれた公衆  
 トイレの壁面の、巨大で精巧なデッサンを思  
 い出さずにはいられない。そこに閉じ込めら  
 れたエロスは、所詮、血の通わない対象にす  
 ぎないが、それは作者の、世の女性すべてが  
 文明という自由の鎖によって性的に開花する  
 ことのできない立場に追い込まれ、囲われ、  
 その理由によって自分の手の届かないもの  
 になっていることに對する憤りの表明でもある  
 それを、その作者に知らしてやりたいと思う  
 のだ。ひとたび真の自由に触れると、あの鼻  
 持ちならぬ上品という服なんぞ脱ぎ捨てて、  
 自ら手を差しのべて、快楽に向かって顔をあ  
 からめながら、態度と言葉でもって救いを求  
 めるということ。

おれの鞭が、ほんの少しだけ奴隷の望みを  
 かなえた時、奴隷は打ち寄せる波のようにう  
 ねうねとくねり、全身に真珠のような汗の粒  
 を見事に光らせ、その吐息は花の香りにも似  
 て甘ずっぱくなるのだ。

今や奴隷は、おれにもっとも端的な言葉を  
 使い、もっとも通俗的な旋律を、フルウトの  
 音色で繰り返しながら求める。しかしおれは

奴隷に唾を吐きかけてやる。奴隷が身を揉ん  
 で嘆願する時は、奴隷を束縛する鎖のこすり  
 合う音が密室に響く時でもある。

#### 第四変奏 目

若者の手下でありましょうか。クリーム色  
 の袖なしのセーターだけを身体につけた十  
 八、九の少女は、いとも気安く、わたしに命  
 令いたします。

「わたしの、お見せした通りになさい」  
 恥すべき自分に、全く気づくこともできず  
 にいる少女に、わたしは同情せずには、いら  
 れません。この少女を、こんなにも動物的に  
 したのは、わたしと少女とのやりとりを、す  
 ぐそばで椅子に腰かけて、じっと見つめてい  
 る野蛮人に違いありません。かえすがえすも  
 憎い若者です。若者の頭の中は、おそらく恥  
 ずべき刺激以外に反応を示すことがなくなっ  
 ているのでございましょう。若者を、このよ  
 うにかりたてたのは、一体、何でありまし  
 ょうか。

それにしても、いやな目です。若者は女性  
 を熟知した老人きどりで、わたしを見つめて  
 いるのです。いいえ、見つめているというよ

りは観察している目なのです。

「もたもたせずに、早くお始めになって」

と、少女は蠟を取り出して火をともしなが  
 らいます。小さな火は一気に大きな炎をゆ  
 らめかせました。少女は、まさしく若者の手  
 下にふさわしく魔女顔まけのあくどさです。  
 わたしは半身を床に縛りつけられているため  
 に、思い通りにもてあそばれても蠟涙の一滴  
 すら避けることができません。

「どうなさるの」

と、少女は勝ち誇ったように、わたしの頭  
 上で嘲笑います。耐えられる？ というよう  
 に、ますます蠟涙を、わたしの肩に胸に膝に  
 降らすのです。正気の事とは思われません。  
 いいえ。ここでのわたしは、正気を保とうと  
 しても不可能なように、しくまれているらし  
 いのです。

若者が立ち上がり、鞭を取り出してピュッ  
 ピュッと空を切って、すごみます。そして、  
 いきなり、わたしの胸といわず背といわず、  
 無差別に滅茶苦茶に降らすのです。わたしは  
 ついに、いたたまれずに、

「やめて！」

と、叫ばずにはいられない事態に陥ってい  
 ました。若者は、にやりと不敵な笑いを口元



に浮かべて、わたしを見下ろしています。少女は、わたしの足元に腰を下ろしました。さきほどまで、わたしを襲った蠟涙のことも、乱れ飛んだ鞭のことも信じられないほどの静けさが、わたしを包擁しました。

わたしは両手でおそろおそろ、四個の目が命令しているとおりに従いました。わたしはどんなにためらい、その手をとめようかと思つたことでしょうか。しかし少女の片手には蠟が握られていて、さらに若者の手には鞭がしなっています。

「そうよ。それでいいのよ。しっかりね」

という少女の声が、わたしの耳に飛び込んできました。正直なところ、わたしは理性を失いつつありました。

「うわあ。素晴らしく美しい芸術品ですこと」

という少女の高笑いが響きましたが、その時わたしは、そのことが強いられることか自らの望みによることかの区別がついていなかったかも知れません。そのまま、わたしは気を失ってしまいました。

気がついた時、太陽の日差しが部屋の中に長く延びていました。自分の近くで人の奇妙な声が聞こえていました。不思議に思い身体を起こした時、わたしは思わず目をおおっ

てしまいました。

袖なしのセーターをつけた少女が、若者と抱き合っているのです。でもどうしたことかわたしは好奇心にあおられ、おおった目が「見たい」と希望しているのです。

少女の目が、わたしをとらえました。しかし少女は、わたしに全く冷たく無関心を保つたのです。しかも、わたしを無視しての狂態は、いよいよ激しさを増しました。そして、わたしは、この時ほど自分が女性であることを痛感させられたことはありません。思わず「あああ……」という大きな泣き声を響かせて床に倒れ崩れてしまいました。わたしは、この五体の中に、もう一人のわたしが存在していることを、確かに認めないわけにはいかないようです。

受け入れがたい世界が、そのわたしを待ち構えているらしいことは予想できるのですが、それでも、もう一人のわたしを認めないわけにはいかないようです。

わたしは、身体をねじ曲げるようにして視野をひろげました。わたしの目は、眼前で、わたしを無視して若者を独占している少女を嫉妬しているのかも知れません。

## 第五変奏 像

人間の羞恥心をくすぐることが、いかに愉快この上ないことか、多くの人たちが脳裏に刻み込まれていることであろう。おれの調教ははかどおり、奴隷は奴隷である自分をよく自覚し、しかも、そのことに快楽を盗み取る術を心得出したようである。さらに都合のよいことは、奴隷はどんな事態にあっても、常に自分をつくろおうとする羞恥心をあらわにする。

おれの助手が集めてきたズベ公的女流カメラマンや、その卵を前にして行なわれた撮影会などは、奴隷を死ぬような狂乱に追い込んだほどである。奴隷は「舌を噛む」といっておれを少しあわてさせた。しかし、おれが、その唇に好物のキャンディを与えて、なだめてやると機嫌を直し、小さな声で、

「お仕事が、お済みになったら……ネ」

という約束を、とりつけるありさまであったが、その時の奴隷の顔のほてりは、不鮮明なカラー写真でも明確に記録できるほどのものであった。その撮影会の圧巻は、天井から片足吊りにされた奴隷と助手の鞭打ちであっ



た。彼女らをあやしい気分にあおったのは、奴隷に対する加虐の異様さのみにあるのではなく、助手の袖なしセーターと、高いヒールだけの装いにあったようだ。

しかし今おれは、さらに新しい責めを考えている。それはすでに、奴隷に自分にピッタリの犬のぬいぐるみをつくらせることから始めているのである。万事、おれは手ぬかりのない男であるつもりでいる。その犬のぬいぐるみは、さらにコリイの剥製を利用して、本物のコリイに装うのである。おれは完成のあかつきには奴隷を引きつれて外出し、電信柱をトイレ代りにさせるつもりでいる。

その様子を奴隷の夫が見つめる時、彼はどんなに厚ぼったい感謝の言葉を浴びせることであろうか。彼は妻の氣どった様子に、うんざりしていたのである。しかしながら、それでも彼は妻の本質を見抜いていたから、辛抱に辛抱を重ねながら、それとなく妻から文明の匂いをぬぐい去る努力を続けた。なぜなら妻を悪妻にしているのは、とりもなおさず文明の匂いであつたからである。ところが不幸なことに、彼は日頃の劣等感に押しやられていた自分から脱け出すことはできず、あげくの果ては以前より悪い立場に陥り出したので

ある。彼の申し入れを受けたおれは、直ちに快諾した。なぜなら、おれは助手との間に加虐被虐の関わり合いを持っていたが、見知らぬ第三者をその中に持ち込むことは、この上ない刺激をかもし出さずにおかないものになることは明らかであつたからである。人間の感情の糸は実に繊細であつたが、中でも新しい刺激に対しては、たとえ、それが如何に、ささいなことであっても、大きな反応を、かもし出さずにおかないものになることが常である位いは、己れの体験から押し計つても、きわめて確かなことであつたし、事実そうなつたのだ。

我国には快楽を追求する者を、さげすむ風潮の人種がいるが、これは悲しむべきことである。でも、おれは、ひるみはしない。彼らは、心の内では齒ぎしりしていながら、単にそうすることのできない自分ゆえに、いらだち、口から出まかせを、いつているにすぎない。彼らは嫉妬しているのだ。例えば奴隷の行状などは、よい見本である。奴隷は口をひし曲げて、おれと助手を露出狂呼ばわりにした。その声は、ふるえていたし、一向に説得力をもたなかった。そんな自分に気づくと、奴隷は涙で場をつくらおうとする。なんで、

そんな田舎芝居に、おれの目が狂わされようか。奴隷は「欲しい」といいたいのに、露出狂呼ばわりにしているにすぎないのである。

でも今の奴隷は、ふぬけとののしつた夫にさえ、この上ない感謝と真心を込めてあらゆる奉仕を捧げるであろう。奴隷は、まさしく奴隷の口ぐせである「不幸な女」にふさわしかったが、じきに幸福な女に、なるはずである。それも、そんなに遠くない明日に。

奴隷は、おれの思い通りにポーズをとり、おれは奴隷を鞭なしで泣かす。助手はカメラをかまえ、パチリパチリと写しまくる。奴隷は、おれに苛責される自分を恥じらいながらも、一方では、そんな自分を誇るかのようふるまい出している。助手のカメラの中で結ばれる像は、さぞかし明確で簡潔で鮮明であろう。

## 第六変奏 舌

「とても、お似合いよ、あなた」

と少女は、わたしの首に犬の首輪をまきつかせてから、うっとりとするようにいいました。わたしは四つん這いの姿勢で、じっとしているより他になすすべがありません。



少女は、わたしの姿を点検して、すでに拒否しない、わたしの気持を見抜くのです。

「もう少し、膝をお上げになって」

と少女は、わたしの見抜いて欲しくないという気持を、嘲笑うように冷たく命令し、拒否できないわたしを見詰めて「ふうん……」と一人、呟くのです。わたしは、命令どおりいっばいに膝を持ち上げます。

「そう、とてもお上手。明日はごほうごにコリーのぬいぐるみを着せてあげましょうね」

と少女は、わたしが口惜しさと悲しさを、じっとこらえているのもかまわずに、あけすけにいつて笑声を張り上げるのです。実際わたしは、この同性の身体を責めるのが好きな少女によって、もう三日も前から犬にふさわしい動きを身につけるための訓練を強いられているのです。少女は例によって袖なしのセーターだけです。そして、ちょっとしたことで肌はすぐに顔を出します。少女が、わたしを手招き導きますと、わたしは少女の命令どおりにしなければなりません。ああしろころの訓練で、ひと汗をかくと、少女は鎖を取り出してきて、ジャリジャリと鳴らしながらわたしの様子をうかがいます。そして満足気に眉を吊りあげてから、首輪にその鎖を結び

つけます。

「あなたは犬にふさわしい歩き方と仕草を、いつも忘れちゃいけないですよ」

と少女は鎖を引きながら、いいます。わたしは返事の代りに、「ワ、ワン、ワン」と吠えなければなりません。少女は部屋の中を歩きます。わたしは少女の歩調に合わせながら這うのです。しかし、じきに少女は、わざと立ち止まり、わたしをにらみつけます。

「少し甘い顔を見せると、すぐにこのざまだわ。何よ、その吠えざまは」

と口から唾を飛ばさんばかりに、吐き捨てるようにいうなり、わたしの背にハイヒールの踵を乗せて、ぐいぐいと、こじくりまわしさらにわたしのわき腹をけり上げるのです。わたしは仰向けにひっくりかえりますが、すぐにもとのように四つん這いの姿勢をとらなければなりません。そして少女のハイヒールをなめながら、許しを請うのです。少女が鎖を上につまみます。わたしはその時、ちんちんスタイルをとって少女を見つめなければなりません。両手の具合が少しでも気に入らないと、少女は鎖をふりおろすのです。でも幸いなことに、今日の少女のご気嫌は、すこぶるよいようです。

「わたしが、どうしても声を張り上げずにいられたかったか、おわかりになって」

と少女は、いいます。わたしは、すかさず「ワ、ワン、ワン」と、答える必要があります。少女は身体を少し折り曲げて、わたしの唇に顔を近づけます。わたしは舌をいっばいにのばして、少女のあごや頬をペロペロなめまわします。

「さあ、それではいい子だから、おトイレをしましょうね」

と少女は鎖を引きます。お恥ずかしいことですが、これも日課なのです。

少女は、わたしを廊下に引きずり出し、階段を降り、トイレに連れて行きます。その途中の部屋のドアが開け放されていて、若者が昨日からやってきた新しいご婦人に対して、天井吊りの責めを加えているのが、のぞかれました。トイレは通常のトイレとは違い、いわば一つの部屋の広さで、中に西洋式便器と日本式便器が並んであります。少女は日本式便器の前まで、わたしを連れてくると、

「ここに電信柱があるつもりでね」

と、いいふくめます。わたしは従うほかはありません。せいぜい犬らしく振舞うことが少女の、いいえ、わたし自身の気持を満たす



ことに気付いているからです。

いつもなら少女は、わたしの全身をホースの水で洗ってくれるはずになっていましたがどうしたとか、今日はそうしてはくれませんか。わたしが、まごまごしていると、

「さあ、あちらへ行きましょう」

と、わたしを引くのです。わたしは戸惑いながらも少女の指し図通りにするしかありません。少女は、わたしを、さっきのぞいた部屋に連れて行ったのです。ドアが開け放ってあったのは、計画的だったかも知れません。

そこには、わたしより年下と思われる婦人が、うずくまっていた。若者は、わたしに五十センチ位の高さの台の上にあがるようにいました。それから、ご婦人に、わたしの身体の汚れを舌で清めるよう、うながしたのです。

ご婦人は、おそろおそろ、わたしに近づきました。顔をしかめました。

「どうだ。君の先輩のかぐわしい香りだよ。この世の香りとは思えないだろう。信じられないだろう。君の先輩は実に後輩思いだ。本来なら、君なんぞは姿をおぐこともかなわないところだが、おれが特別に計らって、この機会をつくっていただいたのだ」

と若者は、ご婦人の両手を台の上に置かせました。そして、

「先輩よ、前足は折られた方がいいようだ。その上に、後ろ足をいっぱいにお開きになれるなら、さらにいい」

と冷ややかに命令するのです。わたしは命令通りにしました。

鞭が空を切る音がし、ご婦人の悲鳴が聞こえました。わたしは、じっと姿勢をくずさずにいました。悲鳴が何度も何度も聞こえた、鞭のするどい音とともに……。

## 第七変奏 空

早朝の散歩ほど気分のさわやかなことは、またとない。予定通り公園に自動車を乗りつけた時、すでに彼は待っていた。彼はおれが自動車から引き出したコリーを見た時、目を丸くして

「おお！」と感嘆の声を発した。彼はコリーの鎖をとった。コリーは実に従順に彼の指し図通りに行動した。彼は、ひと回りして帰ってくると、おれの耳元で、

「排泄の方も大丈夫でしょうな」といった。

「大丈夫かどうか、お確かめになられた方が手っ取り早いことですね」

と、おれが答えると、

「じゃ、もうひと回り」

と彼はコリーを引っ張って行った。そして帰ってくるなり彼は、

「実に素晴らしい」

と頬を上気ながら、いったものだ。

「お嬢さんのお馬のかわりにもなりますよ」

と、おれが暗示をかけると、彼はすぐに、おれの助手が相手している自分の娘を連れてきた。娘は満五才でかなりの知恵を持っていたが、コリーが自分の母親であることを見抜くことはできなかった。

おれは彼からコリーを受け取った時に、彼に三冊のアルバムを渡した。彼はアルバムをパラパラとめくってから赤い目でおれを見て苦笑にも似た笑みを浮かべた。

「信じられないほど美しくおなりでしょう」

と、おれが尋ねると、

「ええ」

と彼は脂汗を浮かべながら答えた。その脂汗は、多分に画面の妻が、常におれの攻撃を受けているか、受けようとしていることを氣にとめての脂汗らしかった。



「後三週間で、お約束通り、もっとみがきをかけてみせます」

と、おれはいった。彼は自動車の中から紙包みを取り出して、おれに渡してきた。それは調教代の残金であった。

「このアルバムはもらってよろしいですか」と彼はいい、

「もちろんです。ですけど、お嬢さんのお目につかないところに保管なさった方がよろしいと思いますよ」

と、おれは答えた。その時どうしたことかおれは、彼が、妻の汚される姿を想い浮かべることによって快楽を得ているらしいことを感じたが、言葉にはしなかった。

コリーは落ち着いて、静かに去って行く自動車を見送った。

おれは助手に自動車を運転させ、後ろの座席でコリーにキャンディを食べさせた。コリーは食べ終わると、おれの靴をペロペロとため、小さくうずくまった。

「さて、これからどんな手でやさしくしてあげるの」

と助手はいった。車は高速道路を制限速度以上で疾走している。このスピード感を何かにこめて奴隷に叩きつけられないものだろう

か。車が坂をのぼり出した時、おれは車があたかも朝の太陽を求めて空にかけ上がるのではないかという錯覚にとらわれた。しかし車はすぐに下降し、そこには空にかわって堅いコンクリートが一面に敷きつめられていた。おれはシートに身体をしずめながら、この手にたくされたマダムが、被虐好きな本性をこうも早く、こうもあらわにしたことに全く満足せずにいられない。これからの調教は空にかけ上がらずにいられないほどの、めくるめく陶酔を持続するものである必要がある。

## 第八変奏 光

——大きな声で、明確に、歯切れよく答えるのだ。

「あなたの触れているのはマゾの奴隷です」

——じゃ、おれは？

「奴隷女のご主人様です」

——よろしい。おれはお前が気に入ったぞ。ところでどうだ、雨曝しになっている感想は。

「身体がきれぎれになるような感激です。特に雷鳴がとどろき、雷光が走る時が一番素晴らしく思います」

——それはよかった。おれは後一時間は、お前をこのままにしておいてやることに、今、心を決めた。

「ええっ？」

——どうだ、嬉しいことだろう。この嵐は、お前を洗い清めてくれるはずである。お前はさらに生まれ変わるのだ。だからといって、お前は、これといって骨折ることはない。万事、大自然が、ことを運んでくれる。後一時間もしたら、お前の身体のみならず心も、おれのもっとも気に入るようになるだろう。どうした？ 眉をひそめて。

「雨が目に突き入るのが痛とうございます」

——そうだろう。今日は天も地も、お前のために血走った目で骨折っているのだから、少々の手違いの生ずるのは、やむをえまい。

「でも、もう……」

——鉄格子に鎖ではりつけになっている具合は、とてもよいものであろう。

「……」

——お前は、とても気に入っているはずだ。どうした。返事をせい。

「は、はい」

——よい返事だ。しかし、お前の身体は冷え出したようだ。



# S.C.R. (性問題相談室) 案内

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

## 他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

## 御遠慮なく相談をお寄せ下さい

「はい」

「ふるえを起こしている。そうだ、鞭をやるう。そうしたら少しは暖まることだろう。」

「でも……」

「何が、でもだ。好ましい奴、骨がくだけるまで打ちおろしてあげよう。」

「……」

「どうした。急に元気がなくなったな。そろ、わめけ！」

「ひえーい！」

「悲鳴をあげるのは、まだ早いぞ。これから腕によりをかけて打ちつけてやる。悲鳴はその時にあげろ。そら、そら！」

「ああ、後生です。お許し下さい」

「そおら、ぽかぽかと暖かくなってきたらう。素晴らしい気分だろう。感謝をこめろ。」

「お許しを」

「雷光よ、奴隷におそいかかれ。奴隷のうっとりとした容子を明らかにするのだ。ようし、ご気嫌だ。もう少し力をこめる必要がありそう。奴隷は、そのことを望んでいる。かなえてあげねばなるまい。雷光よ、奴隷をあらわにするのだ。鞭打つおれの手元を狂わせてはならんぞ。」

(完)

(カット・豪

城二)



## S M カメラ・ハント



ミキとマキの

## 華麗なる戯れ

 続・小池美喜  
 続・松山真樹子の巻

辻村 隆

昨年イレブンPMの『責め地獄』に、始めてテレビ出演してから丸一年振りに、再びアングラ的存在の私に名指しがかかってきた。例のマルキ・ド・サド『美徳の不幸』の主人公『ジュスティヌ』をテーマにしたもので奇しくも昨年、私が出演した『責め地獄』と同月同日の九月二四日に、関西テレビのナイトショウが、逸早くこれを探り上げて鬼六さんの顔が始めてテレビに映り、談志師匠もSMの愛好家であることを表明したのは御存知

の通りである。この企画お先を越されて、何やかやで十月十四日の予定が十一月四日に延期し、その間、企画を練り直して、イレブンの方は、又それなりに趣向を変えてやるつもりだろうが、内容の点もあって、十月二十八日ビデオ撮りということに確定した。映画『ジュスティヌ』の関西封切に歩調を合わせる一方、担当の制作部でもあれこれとバラエティを持たせるべく、私を介して奇譚クラブの代表者ということで箕田氏の出演を要請

してきたが、公開の場に出るのを嫌う彼は体よく断わり、結局私が奇クの代表みたいな恰好になってしまい、さて何を喋ってよいやらと、視聴率の高い番組だけに頭が痛く、況してサド『悪徳の栄え』がワイセツと見做されて、訳者の渋沢氏や関係者が有罪になったニュースなど読んでるだけに、テレビの面からも話はむづかしくなる。結局、先日の鬼六さん、談志師匠のような、分かったような分からないような語り口になるのではなからうか。



しかし反面、Mの代表の、新宮の東氏などはすぐく張り切って積極的で、数人のS女性や芳野眉美等にも彼の一存で声をかけて、一緒にテレビに出てプレイしないかと、しきりにすすめる始末。果ては、以前プレイした、刺青の山原清子さんにも出ないかと奨めたりしい。これは清子夫人、きっぱりと断わったそうであるが彼女にしても結婚した今更、SM気は以前にもまして強くても、公開の席上で刺青の裸身など曝してプレイする気は毛頭なかったであろう。読売制作部の知らない間に、色々の人間が動いていたのである。そんな内輪ばなしは兎も角として、イレブンPMの「サド候爵もびっくり」という仮題テーマの主眼目になる「ジュステイヌ」の試写を九月末日に鑑賞する機会を得たのである。

大阪堂島の毎日ホール六階の試写室で、午後一時から、批評家、芸能ニュース関係者、読売制作部の人々に混って、当夜出演する秋山夫妻と一緒に、この映画を観覧する。

秋山氏夫妻は、十月一日より再起第一回公演を港区のダイコー・ミュージックでやるので、この日、遥々九州より上阪したばかりであった。パンタロン姿に、丈なす黒髪の秋山夫人のスタイルは一同の眼をひいた。

映画は約二時間で終り、読売テレビ制作部の人とそそくさと別れを告げて、折からの煙るような小雨を避けて、秋山夫妻と堂島地下センターに潜って梅田へ向かった。彼等の熱烈なファンの上客が、わざわざ新幹線で名古屋から出てきて、新大阪駅で待っているというので、二人はかなり心を急がせていた。見終ったあと、彼等とゆっくり食事でもしながら、「ジュステイヌ」の内容を、じっくり検討し批評するつもりでいた私のアテは見事に外れたのである。地下鉄乗場まで案内して派手な二人の姿が乗客の列の中に消えると、もう私は所在なかった。

喧噪渦巻く地下街に、独りぼんやり立ち尽くしていると、そぞろ佗しい雑踏の中の孤独が岸々と身に迫ってくる。傘も持たぬ私にとって、外界はソボ降る雨、濡れて歩くも詮ないこと。といって、延々と列を作るタクシーを待って、このまま帰る気にもなれなかった。日頃は多忙なくせに、空洞を吹き抜けてゆくような忙中閑のひとときは、むしろに私を人恋しさにかき立てていった。しばし立ち尽していた私の脳裡にフト浮かび上ったのは、その後、放りっぱなしにしてあった小池美喜と松山真樹子の、若い二人の娘の面影であった。

た。

反射的に頭へ手をやる。散髪して半月ばかり経ったところで、幾分早いだが、人恋しさの感傷が、私の足をいつしか二人の方へ向けていた。幸い地下街つづきで、人の浪に揉まれてゆけば、幾らも道のりのない近さに理容室はあった。ねじり鮎に似た棒ネオンをチラリと横眼でみて扉の前に立つと自動的に開く。

三人ばかり先客が待っていて、十人近い理容師が、めいめいの客の頭と取組んで、我れ勝ちに技を競って、早く仕上げようと慌しく動いていた。手前から理容師の一人一人を眼で追ってゆくと、四つ目の椅子で、小柄な小池美喜が、白衣の仕事着の袖をきりきりとたくし上げて、客の顔に蒸したタオルを当てがっているところであった。動作が新鮮でキビキビしている。一人おいて松山真樹子のボーカルフエイスが、電気バリカンで、客の襟首のあたりの髪を刈り上げていた。

私の存在に、どちらが早く気づくだろうか――。そんな興味を抱いて、なるべく二人からよく見える位置に体を乗り出し、机上の週刊誌も手にとらず、じっと二人の動きを凝視していたのであった。(九月号『飼育のたのしみ』参照)



若い娘の働く姿は実に潑刺として美しい。懸命に仕事に打込む姿に、私は改めて、二人の真摯な日常を見出し出した思いであった。

仲間の理容師諸君！ 客人達よ——君達はこの若い娘二人の赤裸々な、しかもプレイに酔い痴れてのたうつ肢態を誰一人知らぬだろう。想像も出来ぬだろう——それをオレは知っている、裸のミキとマキのすべてを……。私は大声で喋り立てて「あっ」と驚く人々のポカンとした顔・顔・顔を想像し、独り秘かに心を疼かせて北叟笑むのであった。

最初に私の存在に気づいたのは、大柄な松山真樹子であった。バリカンでの下刈りが、一段落して櫛と鋏を握り、何気なく入口の方に視線を走らせた時、瞬間パツタリと眼と眼があった。アラッという表情になったマキは改めて私を凝っと直視し、はっきり私であることを確かめると、慌てて櫛と鋏を鏡の前の台に置き、一人おいて隣のミキに、何か二言三言、話しかけた。「えッ」というようにミキが、振り向く。二人の表情が、期せずしてさっと輝くと、ミキが客に蒸しタオムを当てたまま、足早に私の前にやってきた。

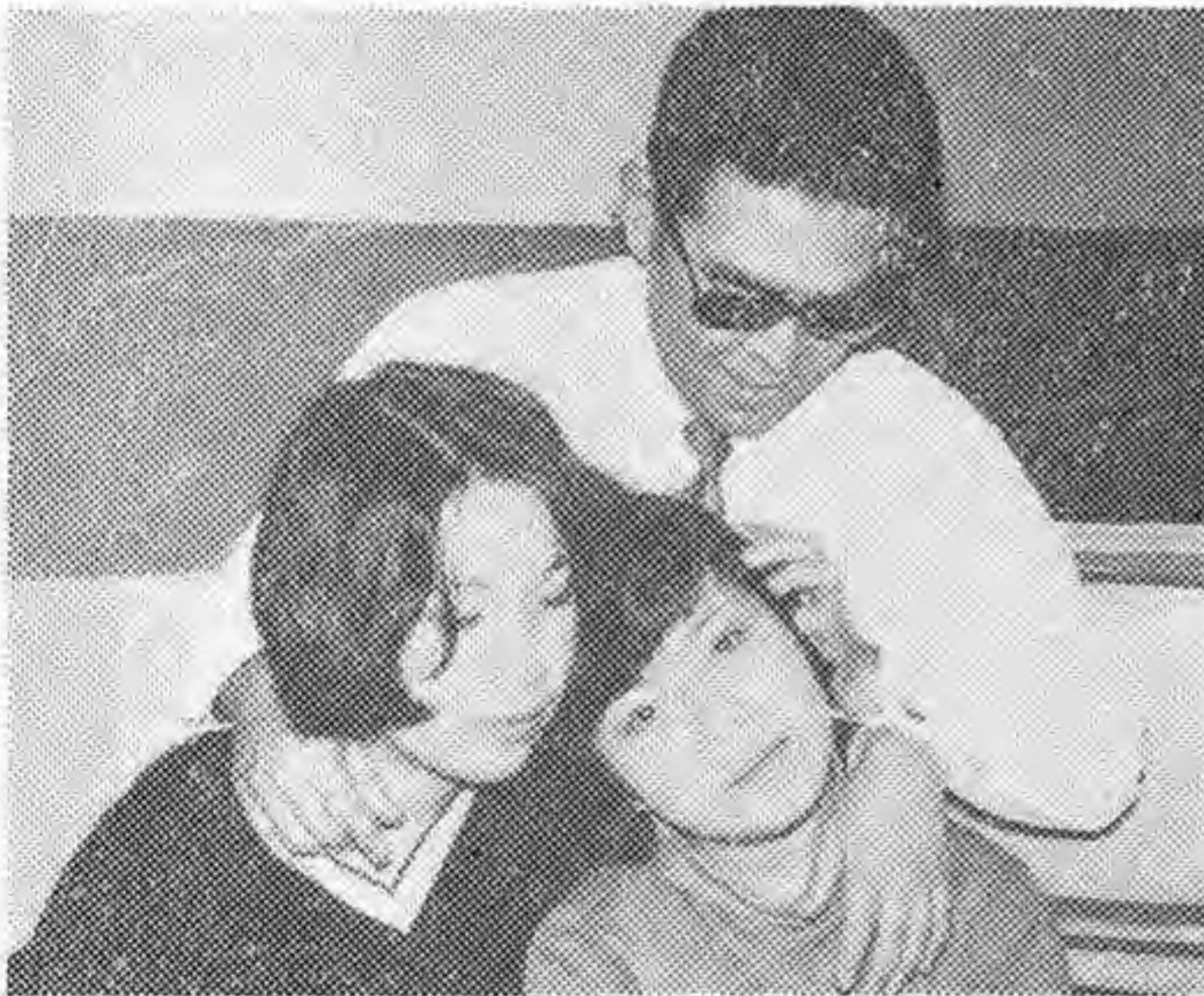
「今日は——いきなり、どうしはったの。びっくりしましたわ」

「ウン、急に二人の顔がみたくなくてね。散髪してくれるかい？」

「少し早いんじゃない？ 何かあったのね、今日」

流石にミキは敏感であった。声を忍ばせて口早にテレビと試写の件を話すと、眼を輝かせて、

「そう、よう来てくれはったわ。一寸待って。あの子よりウチの方が早く終るから、あ



のお客さん早いトコ片付けて呼びにくるわ」嬉しそうにミキは自分の位置に戻っていった。ミキの手許は、たしかに早い。客の方こそ災難であるが、ものの十分も待たぬうち、仕上げ終って、客に恭々しく最敬礼すると私を手招く。

椅子にどっかり坐って、ミキに体を預けて首を右に振ると、マキが客の肩越しに、チラリとウインクして意味ありげに笑った。

「忙しいかい？」

「毎日こんな調子で、バタバタと終ってゆきますねん」

「マキ、何かあった？」

声を殺して、先日のプレイの件について、さぐりをいれると、立居振舞にかこつけて顔を近づけ、隣客にききとれぬ小声で、

「ウチがクニへ帰ってる間に、マキと会ったんでしょ。あの子、白状したの。せやけどあんまり嬉しいなかつたいうてたよ」

さては例の未遂の件まで喋っているのかとヒヤッとしたが、さりげなく

「そうかい、どうしてだろうな」と、とぼける。

「センサーが、あの子はダブルヘッターで疲れてはったんやいうてたわ。カメラ・ハント



ええダシにして、相交わらず次々と違う女の子とばかり遊んで……ウチらのこと忘れてはったんでしょ。薄情なことしたさかい、切ったろかしら……」

「おいおい、カンベンしてくれよ。切られちゃたまらない」

思わず出した声に、両隣の客が、一斉に私達をみた。ミキが慌てて電気バリカンを手にする、すましたポーズで下刈りを始める。しばし沈黙がつづいた。髪型を整えて、蒸しタオルが顔半面を蔽う。剃刀で髭を当たり出した時、近々とミキは顔を寄せて、

「イヤね、大きい声出して——びっくりするやないの。冗談よ。せやけどセンサー悪い人やわ。さんざんウチらの心をじらしといて、ウンともスンともいわんとして、もうあきらめて忘れかけた頃、ひょっこり現われるなんて、ほんまにイケズやわ。又想い出すやないの——。今日だって行く当てがないから、しようことなしに来はったんでしょ」

正に凶星である。私は苦笑しながら、黙って眼をつむっていた。キミの手捌きは鮮かであった。毎日々々の積み重ねが、彼女を短期間の間に、すっかり熟練工に仕上げて、もう一人前であった。眼をつむったままで私は問

いかける。

「今もマキと一緒に暮しているの？」

「まあね。その方が安上りで経済的やもの」

「とか何とかいって、その実、離れられないんだろ」

「フフ、かもね……」

「二人一緒にプレイしてみたいんだよ、いつか言ったようにね」

「ウチはいいわ。マキさえウンといったら」

「ウンといわせてくれよ」

「ウチが？」

「ああ」

「ずるいわ、センサー。自分でマキにいったらいいやないの」

「いっていいけど、ミキの方が言い易いだろう」

「お店では、あんまり話でけへんわ。センサー終ったらすぐ帰りはるの？」

「一緒にメシをくってもいいよ。だけど大分待たされるんだろ」

「ウチらのために待ってて——。偶にいいやないの」

「じゃあ仕方がない、待とう。何時だ？」

「八時、北野劇場裏の喫茶Aで」

「マキも勿論、くるだろうね」

「絶対つれていきます。でも一寸だけ待って。今、聞いてみるから」

念のため、つかつかとマキの傍らへよりそって、耳許で囁いていたが、すぐ戻ってくる、と、

「ウチとセンサーと、二人だけで行ったら恨むっていうてたわ。それみいな……一緒にゆきますよって、おいしいもん奢って——」

私は、うなずいた。心なしか先客に比べ、ミキの剃刀捌きはひどくゆるやかであった。佻しく人恋しかったはずの私の心は、ミキとマキの温い心に触れてすっかりウキウキと弾み出していた。マコトに現金なものである。

× × ×

無聊の三時間のハケ口に、キタの同好者M氏を前触れもなしにひょっこり訪れ、せめて夕食を共にというのを強って断り、引返してくる。M氏がトルコ娘を手なずけて撮った、百数十葉のフォトが、沈滞がちの、私のハント心をかき立てた。いつか折あらば、このトルコ娘を、カメラ・ハントに紹介してもらったことを約しただけでも、M氏訪問は無駄ではなかった。

喫茶Aで十数分待って、あわただしく駆けつけたミキとマキを件うと、私達は曾根崎裏





の、お初天神の食道街に足向けろ。のんでくって、それから二、三軒のスタンドバーをハシゴするうち、私達はすっかり、いい御気嫌になっていた。若い娘二人に、両側から腕を絡まれて歩いていて、悪い気のするはずもない。口当たりのいいバイオレットやピンクレディが、二人の娘の頬を染め、足許を危うくさせていた。

シックレットな、他人に聞かせたくない話

は、個室喫茶に限る。アベックの席へ三人坐って、吐き出す言葉のロレッツも怪しい。酔いが、羞恥を遠くへ追いやって、単刀直入であった。私の前面に、ミキとマキが肩をすりよせて坐っている。二人の指は、くねくねと奇妙に絡み合ってもつれていた。

「さあ、ここは三人きりだ。ぞくばらんでゆこう。マキ、いいだろう一緒にプレイしても」

「いいわよ、面白いじゃない。でもセンセーあたし、一言だけセンセに文句をいいたいことあんのよ」

「いえよ、判っきりと」

「いうわよ。やるんならやるで、トコトンまでプレイしてチョーダイ。蛇の生殺しみたいにはしないで」(十一月号『悦書の星と夜』参照)

酔いにかこつけて、マキは先日私のとのプレイの恨みごとを言っただけだ。ポーカーフエイスはすっかり崩れて、眼を据えたマキはミキの左手を両手ですっぽり抱えこんで弄びしどけなく上半身をミキに凭れかけさせていた。

「三人でどんなことをするのよう、センセー……」とミキ。

「いろいろとプレイのアイデアはあるけど、兎も角、ミキがマキを縛って虐めるんだ。アパートで二人でやっていることを、私の眼前でやってもらいたいんだなあ」

「あたしもミキを縛ってやりたい、思いつきり。いつも虐められてばかりだもん」

マキは、鼻をならして、うそぶく。可愛い二匹の牝獣は、頬をよせあって、洋酒の吐息を粗々しくバラ撒いていた。

「ああ、それも面白いね。ついでに私が二人と一緒に縛ってやる。どうだ嬉しいだろう」

「フン、嬉しいがってるのはセンセーだけ。ああ、やりますよ何でも……。でもタダじゃだめ。高いわよ、やるからには」

「ウン、覚悟の上さ——」

冗談とも真剣ともつかぬマキの言葉に、私は勿論、代償を考えていた。

「じゃあダイヤの指輪買ってくれる？ 買えないでしょう、センセー。覚悟だなんていわないでよう。いいのよ、ジョーダン……。あたいら好きだからやるのよ。それだけ」

「マキ、酔ってるの」

ミキが、あきれ顔にマキをまじまじとみつめる。確かにマキの言葉は絡み調であった。「ああ、酔ってるわよ、ほんのチョッピリ。」



「ミキは酔うてないというの？」

「酔ってるわ、チョッピリ。こんなぐらい」

ミキは、いきなりマキの首を抱えると、私の眼も憚らず、わざと大きな音を立てて、くちづけした。紅い唇が深く歪んで、長いキッス——。やっと唇を離すと、若い娘二人は同時に、けたたましく笑った。

「ミキがSで、マキはMなのかい、今も……」

「SもMもないわ。ウチらくくったり、くくられたり……でも二人きりでしょう。くくるのなんか面倒くさい……ねえ、マキ」

ミキが酔顔でマキの頬をつつく。

「そうよ。そんなことしなくても結構たのしいわよ。ねえ」

紅唇をついて交々に、ハレンチな言葉が飛び出す。二人は、かなり酔っていた。私という人間に安心して、正体を覗かせたのである。うか。クククと笑いを殺して、二匹の若い牝猫が、じゃれ合っているようであった。

「じゃあ、きめた。やはり、月曜日の休みがいいのだろう。善は急げだ、来週の月曜日の六日にしよう」

「六日はダメ。お店の人達とハイキングすることになってるの。夜だったら、いつでもいいんだけどなあ」とマキ。

「夜は午後九時過からになるだろう。それじゃ落着かない。泊るのならいいけど、ミキとマキに狭まれて寝たら、体がもたない。第一泊るとオクサンが怖い」

「ひゃあ。センセー案外、恐妻家やのね。ウチらは構へんし、刺激あっていいやないの」

ミキは、ケラケラ笑った。誠に怖るべき娘達である。

「それじゃ、その次の月曜日、どう？」

「ええわよ、あたいは」

マキは、眼を据えて応えた。

「でも、ウチ……」

ミキは返事を渋る。

「どうしたんやの？」

「アンネちゃんに引っ掛かるわ」

私は少々ウンザリしてくる。しかば、その次というと、十月二十日か——今から約束して、果たしてその日が空いているかどうか自信がなかった。まあ何とか、なるだろう。その時は、その時のことだ。

三週間先のデートを約束して、私は指きりをした。丸々としたミキの小指、冷たくしなやかなマキの小指が、私の両手の小指に絡みつく。



酔いさめて果てた時の悔いが、娘達の心に残らないだろうか。そんな不安がフトよぎったが、お互いに二十日も先のことは誰も保証出来ない。机越しに小指の絡んだ二人の手をぐっと引き寄せると、私は力強く握りしめていた。

× × ×

約束の待合せ場所は、都心の混雑を避けて十三（じゅうそう）公園の入口附近にきめてある。ここなら車だって駐車出来るし、阪急電車を利用して豊中市の庄内のアパートから出てくる二人にとっても、途中の乗換え駅で便利であった。梅田を起点とする阪急電車がこの駅で、京都、神戸、宝塚の三線に分岐す



るだけに、駅前を中心としての近來の繁榮は目ざましかった。駅から数分歩くと、デラックスなアベックホテルが林立しているので、時間の無駄も少ないというものである。

朝から台風気味の強い風が吹き荒れて、空は重苦しい灰色に包まれ、時折、秋雨の粒が車のフロントを打った。連日いい秋日和だったのに、よりによって、また悪い日になったものだ。

都心がかなり混んでいて、公園の入口に到着した時には、約束の正午を十分ばかり過ぎていた。舗道にそって車を止め、辺りを見廻す。その夜以来、ずっと連絡もせず途絶えたままなので、一抹の不安があった。アパートの管理人室へ夜おそく電話するのも気がヒケといて、理容室へ男声で呼出すのも何となくためらわれて、心ならずもそのままになっていたのである。約束通り果たして現われるだろうか——そんな危惧を抱いて、煙草に火をつけかけた時、ミキとマキが小走りにかけてよつてきた。木蔭に秋雨をさけていたらしく木の間洩るしずくに肩の辺りが濡れている。

「やあ、やっぱり来ていたんだね」

安堵と共に、そんな言葉が口をついて出て思わずハッとす。果たしてミキは引っ掛か



ってきた。

「センサー——、時間やかましいから、早くから来て待ってたのに、やっぱりとは何よう。いざとなったら、恥かしくていややというマキを、一生懸命口説いて、やっと引っ張ってきたんよ」

ミキは昂奮気味の顔をやや紅潮させて、私をにらみつけるようにした。

「ごめんごめん。言い方が悪かった。実の処あの夜から全然連絡ないものだから、勝手に独り不安に思っていたんで、ついそういったまでだよ」

「連絡はセンサーの方からしてくるべきよ。変な電話かけて、オクサン出はったら、困るのはセンサーでしょう。二、三日前から、もうかかるかと首を長くていたんよ」

「いや、一言もない。つい忙しくてネ」

「いつも、あんなこといってる」

ミキは、やっと柔らいだ表情になった。彼女は、ささと助手席に乗込み、マキは後部のシートに坐った。主導権は、いつもミキが握っているようであった。

二人をのせてスピードを落としながら数百米ばかり走って、いつも利用するホテルの手前の十字路で娘達を降ろし、ホテルの地下駐車場に車を入れる。受付の女の子に、一時間ばかり食事してから戻ってくると告げて、道路わきに佇んでいる二人と肩を並べる。

「とも角、食事しよう。何がいい？」

「中華料理がいいわ。マキは、どう？」

マキは黙ってうなずく。ポーカーフエイスを崩さない彼女は、酔った時とは、まるで別人のようであった。この十三界限は、食道楽



といわれるくらいに、食べ物屋が軒をつらねていて、それでいて都心よりも遥かに安い。

ビールと一品料理が次々運ばれてくると、娘達は、せっせと平らげ、プレイの気恥かしさを酒の酔いに紛らわせるつもりか、二人ともよく呑んだ。車は既にホテルの地下に納まっているから、私も気をゆるしてビールを傾ける。交通切符制になって以来、独り自戒して運転の際は一滴のアルコールも摂らぬよう心掛けていた。遵法精神からではなく、万一引っ掛かって、点数を記録されたらバカバカしいからに外ならない。

天高く馬も娘も肥ゆる秋である。彼女達の食慾は、あきれるくらい旺盛であった。五本のビールを空にして、昼日中から私達は顔を赤くほてらせていた。

マキは心なしか沈み勝ちで、ポーカーフェイスの表情の奥に、不安と困惑のかげらいを泛かべて、黙々とビールをのみ、食慾をみたしていたが、アルコールが体内に廻り始めたのか、いつしか口が綻び始めて、表情から、かげらいは消えつつあった。私は、アルコールの効能を切実に感じた。彼女に引き換え、ミキは浮々と積極的で、快活に笑い、ドキリとするようなことを私に訊ねては、さも愉し

げにビールをあけていた。こうした陰と陽の性格の違う二人だから、共同生活が反って、うまくゆくのかも知れなかった。二人にレズの陰靡なかげは、全然ない。真性のレズ同志なら、私のような男性とプレイする筈もないし、極端に男性を忌避することを私は知っている。行為はレズ的であっても、それは偶々



プレイ対象の男性がいなかったことであって、二人の行為は、レズよりセックスの刺激を求めていることは燎らかであった。「センチ——昨日、近鉄やっぱりあかんかったわね。残念でしょう」

ミキは私の近鉄ファンをよく知っていて、おもねるような同情の言葉を投げかける。「ウン、正に残念の極みだ。まさか阪急に三連敗すると思わなかった。今日は、やけ酒だよ」

西宮球場のダブルヘッダーに連敗して、昨日、藤井寺球場で止めをさされ、フランチャイズの球場で、憎つくき相手チームの阪急の胴上げをテレビでみて、癪にさわることをおびただしい。パ・リーグ六球団中、優勝経験のないのは近鉄だけだから、力を入れて今年こそはと張切っていただけに、ミキのその言葉をきっかけに、つい愚痴をこぼし始める。私がミキに電話しなかった原因も、白状すると或いは今日の最後の一戦が、近鉄の優勝につながるかも知れないと、一縷の望みを托し、もし今日が決戦になるならば、日生球場へ出掛けるつもりでいたのであった。まさかスツポカしもしないが、昨日、勝っていたら断わりの電話をする腹でいたのである。幸か不幸





か、勝負がついて、今こうして私は二人とヌケヌケと会っている。考えてみれば、悪い奴は私であった。

私の愚痴が一区切りついた時をみて、マキが口を挟んだ。

「センサー、もう男らしくあきらめなさい。それよりか、三人でゆけるようなホテルある

の？ 何だか、とても入るのが気恥かしくて……ヘンな眼でみられるでしょ」

「なあに、とぼけていりゃ、いいさ。カメラ・ハントで編集部とも度々行ってるし、馴れりゃ何でもないんだけどネ。それに向こうさんは商売だもの、気にすることないさ」

とはいうものの、過去に、男二人、乃至、三人とモデル女性一人という組み合わせで出掛け、アベックホテルで断わられた苦い経験も数度で止まらない。その点、モートルは比較的、利用し易かったが、もうここまで呑めば、今更、運転は無理だし、それに予約するような恰好で車を地下駐車場へ預けてある。

私以外にもう一人男性があれば、カップルをつくって、二つの部屋をとって誤魔化せるが所詮は無駄である。

女二人、男一人がアベックホテルの密室にこもれば、当然、奇異の眼でみられるのも覚悟の上であった。何を想像しようとも相手の勝手であるし、それに耐え得るだけの、心臓の強さは、過去のカメラ・ハントで鍛えられている。しかし、こうしたプレイ初体験のマキにとっては、そのこと自体が、既に羞恥の対象であった。

「この十三でのハントに数度、利用したホテ

ルに実は車を預けてきたのだ。箕田氏や、山本一章とも一緒に行ったが、案外いやな顔もせず通してくれるんだよ。アベックの部屋で三人前とられるけどね。まあ任せとけよ」

「十三あたりのお客さんが、沢山お店にくるんだけどなあ」

「地下の駐車場から、じかにエレベーターで部屋まで直行するから、気づかれやしない」

「みつかったら大変だけど、まあいいや」

ミキは承知したものの、職場が近いだけにやはり巷の眼が気になるのか、二人は顔を見合わせて、不安げな視線を交錯させた。

実をいうと、このホテルは、しばしば利用しているのであった。数カ月前、かなり酔ったミキと、ひとときのプレイをしたのも、このホテルであったし、二週間ばかり前、長井ハツコとのデートも、このホテルであった。ハツコから、電話のあった時、あの志摩半島一泊ドライブの夜の強烈な印象が、まざまざと蘇り、早速このホテルへ来たのであった。内心、恐れていたハツコの父親からのクレームも気味悪いほどに一言もなく、その後の動静をききたくもあったのだが、逢えばハツコの方から燃えてきて、結局カメラもそこそこに、モートルな仕儀に相成ってしまった。父



親が何かいってたかときくと、ケロリとして「オジサンと一緒に愉しかったやろ。今度いっぺん父ちゃんをオジサンに紹介してほしいていったで」

とケロリとし、

「もっとホンマのこと書くか思たら、肝心のええところボカしてあるのやね」

と恐れいったハツコの言葉であった。

辺りを見廻しながら、マキとミキを別々に地下に招き入れる。ミキは、何か思い出そうとするように見廻していたが、ハツと胸をつかれた様子であった。傍らにマキがいるので黙っていたが、確かに記憶を蘇らせたに、違いなかった。エレベーターの前に立って合図のボタンを押した時、はしなくもハツコの乱れに乱れた痴態や、ミキの熱いまなざし、谷山久美のMに徹した形相が、次々と胸をよぎり、このホテルで数多の女が濡れて悶えたことを思い出すのであった。ヌケヌケと、今日も二人の若い女性をともなって現われた私にホテルの案内係は、果たしてどのような眼で私をみるだろうか、チラリ良心の苛責めいた後めたさが走る。ミキは私の肘をつつき、チラリと意味ありげに片眼をつぶった。えてしてそんなもので、エレベーターの扉が開き

一礼して頭を上げた女性は、てっきり、先日の案内係であった。無表情の中に、アラッと一瞬、非難するような色が走ったが、それも束の間、黙って私達を四階の、いつもの広い和室に案内していった。

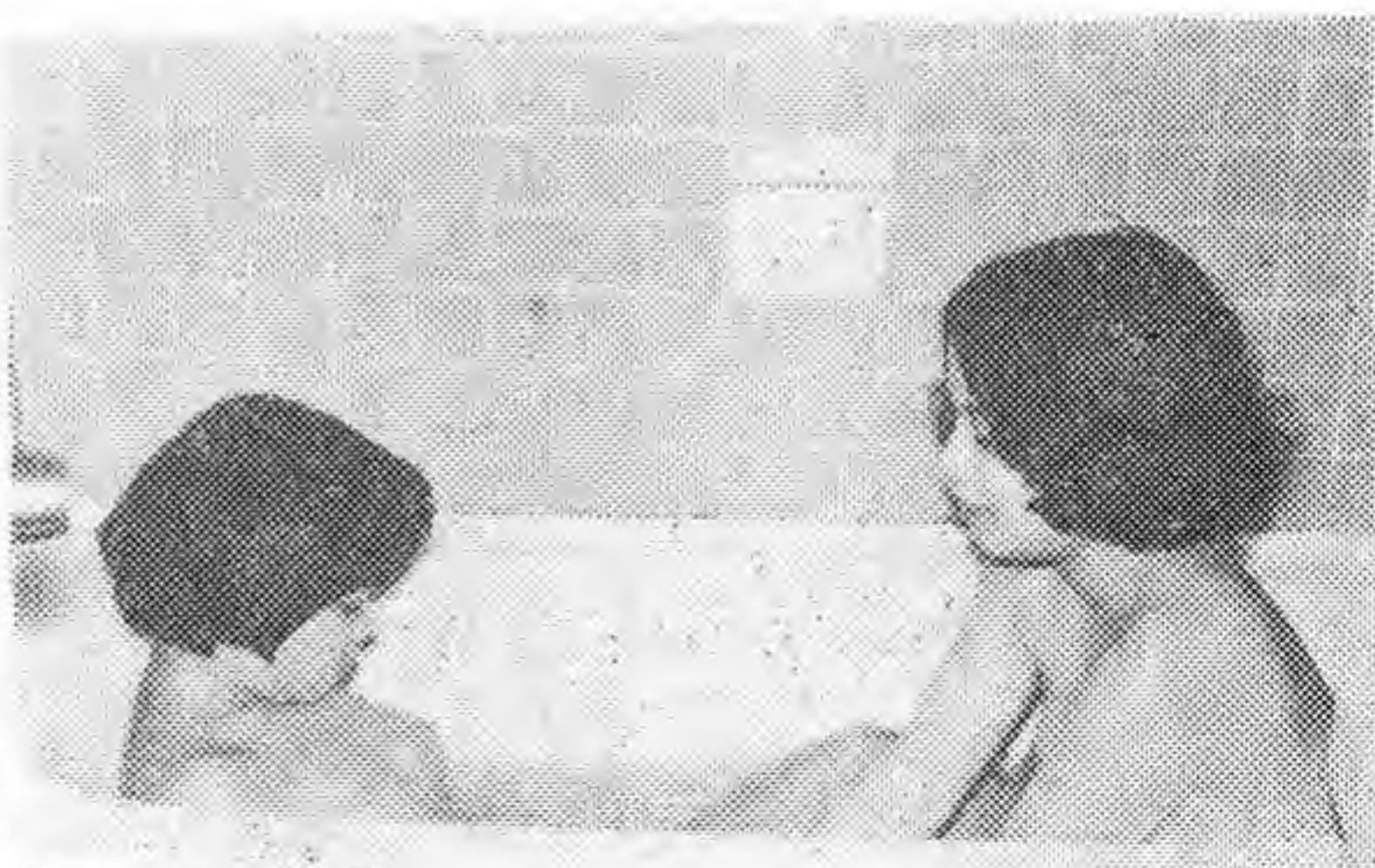
座布団も、湯上りも、タオルも、すべて二つ。唯、湯呑みと茶菓子だけが、己むを得ぬという恰好で三人分、運ばれてきた。お茶のポットをおいた若い案内嬢は、チラリと嵩高い二個の黒革袋に一瞥を送ると、黙って頭を下げて出ていった。

「どう思てはるやろね、あの子」

ミキがホッとした顔で呟くように言った。やはりモーテルの見知らぬところを選んだ方が賢明だったかも知れない。一対二の奇妙なとり合わせに、あの案内嬢の眼は確かに好奇心にみちていたようであった。図太くなった神経のつもりでも、流石に一寸、気恥かしさを覚えたが、さあらぬ体で

「どうせ、モデル写真をとるぐらいに思っているだろうよ。いつもフィルムの空箱を屑かごに捨ててゆくし、革袋に眼をやっていたからね」

私の思い過ぎで、案外そう思っていたかも知れないと思った。



マキは部屋の隅で体を硬くしていた。酔いが現実に直面すると、幾分、醒めてきたのかうそ寒いポーカークフェイスに戻っていた。

一対一なら、欣喜として燃えちしようが、同性のミキの前で裸身を曝し、羞恥にまみれた行為や緊縛のプレイをすることが、マキにとっては、この上もない苦痛であったのかも



知れない。それはミキにとっても同じことがいえるのに、この娘は、むしろそうしたハレンチのプレイを望んででもいるかのように、恬然とした態度であった。初めてミキを知って緊縛したあの頃に較べると、何という女心の妖しい変化であろうか。ミキは二回、マキは一回プレイしたきりであるのに、勃然とSM感情の虜になって、加うるに相呼ぶ魂をもった二人の同棲生活が、更に拍車をかけてミキをすっかり成長させていたのかもしれないかった。

服を脱いでしまう前に、記念のフォトを撮って欲しいというミキの言葉に、私は、そそくさと三脚を引き伸ばしカメラを装填する。或いはハントの役にでも立つかと、サンダースをかけ、テレビの前に坐る二人に閃光を走らせてから、セルフタイマーにすると、二人を抱きかかえるようにして背後に回ったのであった。

× × ×

すべてはスムーズに運んだつもりであつても、さてとなるとマキが逡巡して、煮え切らぬ返事で、うつむいている。羞恥の痴態を、私という異性の前で演ずることが、マキにとつてはどうしても耐えきれぬ様子であつた。

二人に型通り入浴を奨めたが、マキがもじもじしているの、ミキも私の顔色を窺っている。二人一緒だから、お互いがお互いを牽制して、いいたい事もいえぬのであろうか。こうなると一人一人、各個撃破するより仕方があるまい。さして広くもないホテルの一室であるが、何とか二人を引き離す手段を購すべきであつた。とすると、先ずミキをバスへ誘導するのも賢明な策であつた。二人を同時に入浴させようするからモジモジしているのだ。入浴は問題でなくても、すぐその直後に待ち構えているプレイが、二人を何となく、ためらわせていたに違ひなかつた。

私は黙ってミキの手を引っ張ると、バスに近い隣りの小間へ這入っていった。

「いざとなるとマキはためらっている。ミキ先に入ったらどう。あとはうまくマキを口説くから。その方がスムーズにゆきそうだよ」  
「ウン、口説くのはいいけど、マキとイチヤイチャしないだね。それが心配やわ。あの子センサーに気があるらしいもの」

同性の危惧は、やはりそんなところにあるらしかった。私は苦笑すると、そつとミキの顔を両手で挟んで引寄せる。この子は待受けて眼をつむった。相当、体を折り曲げないと

バランスがとれない。蔽いかぶさるようにして唇を合わすと、積極的なミキの舌がぬめり込んでくる。すぐに離すと私はミキのブラウスのファスナーを引き裂いた。

「センサーうまく口説かんとダメよ。あの子ああみえて、案外、強情なところあんのよ」  
「ウン、一対一なら固い殻も何とか開くだろう。脱がしてやろうか」

いいわと首を振って、さつさとシュミーズ一枚になったが、ふとバスの中を覗いて、  
「あらあら、センサー。バスの栓をチャンとしておかなかつたから、全然お湯が溜ってないわよ」

やはり心が焦っていたらしい。あわてて激しく出ているカランの湯水をとめ、ピンクのポリバスの栓をしっかり締め直すと、突然、私に衝動的なS的想念がひらめいた。

ミキを縛ったままバスへ入れておいてドン湯水を出して、その状態で放っておいたらどうだろう。浅いポリバスのことだから、溺れる怖れはあるまいが、溢れくる湯に、ミキは縄目をヒタヒタと濡らして、水分をタツプリ吸った縄は、徐々に彼女の肉体をしめつけてゆくことであろう。既にパンティ一枚になったミキの露わな姿に眼をやって、そんな





妄想に憑かれて、ピチピチ張切った裸形を、じっとみつめている私であった。

「あっちゃへいって……恥かしいやないの」  
ミキの声に我に返って、部屋にとってかえすと、マキの視線を背に感じながら、ストロボ装填のカメラと、一条の縞縄を握って戻ってくる。

パンティをずり下げて、今、正に足首から抜きとろうとしていたミキは、私の闇入で、あわててバスタオルを腰に巻きつけた。

「縛るよ」

ポツリというと、えっ？ という顔になったが、私の手許の縄をみて、

「いきなり、どうしはるの？」

怪訝な表情になる。

「ミキを縛って、バスにつけてやるのさ」

「いやーん」

「いやもくそもない。」

さあ、手を後ろに回して――」

半ば高圧的にいって早くも両腕を捻じ上げる。パラリとバスタオルがこぼれ落ちて、

久し振りにみるミキのふっくらとした乳房が眼近く冴えて、私の視野に飛び込んだ。

軽くあらがいがながらも、既にプレイの気十分のミキは、自分の意志も手伝わして、イヤイヤしつつ両手首を背後で、組み合わせている。馴れ合いで縛り始めるより、こうした小ぜり合いのなかに縛られてゆくのが、ミキにとってもプレイの雰囲気に入り易かったのではなかったか――。

尚も体をくねらせるのを、ぐっと羽搔じめにして、手首を縛った縄を両肩に分けて引きしぼり、胸で交差させて二の腕を縛り、腹で

とめる。濡れるのを覚悟の、一本の縞縄の長さは、もうこれでギリギリ一杯であった。かえ上げるようにして、ポリバスを跨がせ、行儀よく正座させる。立ち上ってバスから逃げだされたら思惑が外れるので、両足首を縛ろうとしたが手許には何もない。ズボンのポケットを探ったら、輪ゴムが二つ指先に引っ掛かった。これこれと、二本の輪ゴムで左右の足の親指を合わせてしっかりと、二重三重にはめて固定させる。たったこれだけのことで、ミキは立とうにも立てなかった。彼女はハアと大きく、ビールの香の漂う吐息をもらした。既に始まったプレイに対し、胸が騒ぐのかも知れない。西洋便器が、バスと一米と離れぬ位置に鎮座していた。輪ゴムをかけ終り、もう一度、軽く唇を合わせると、湯と水のカランを程よく調節して一杯に開く。

激しくほとばしる湯しぶきが、みるみるうちに、ヒタヒタとミキの豊かな腿を蔽って上昇していった。

観念したようなミキの、湯責めのポーズを数枚カメラに納めると、勢いよくパタンとバスの扉を閉じた。落下する湯音が微かになつて、この狭いバスの密室に、ミキはポツンと独り閉じ込められているのであった。二度目





にミキと会った時、この狭いバスの中へ一緒につかって戯れた事を、フト思い出す。あの時は一対一、今日は二対一、ミキ独りに甘い言葉をかけることが、二人の共同プレイにプラスになるかマイナスとなるか——。パイプの刺激で身悶えして狂奔したあの時のミキの痴態を臉の底に思い浮かべながら、私は部屋へ引返す。

このしばしのプレイを、マキは知ってか知らずか、元のままの姿勢を崩さず、テーブルに凭れて、沈み勝ちにうなだれて、何事かあの思いに耽っているようであった。

背後からポンと肩を叩く。

ビクリとして、俯向き加減に振り向いたマキの顔に、私の顔が矢庭に近づく。避けようとするのを両手で挟みこむようにして、強引に唇を合わせようとする。ウムムと呻いて、引離そうとするマキを、尚も力強く引きよせて、蔽いかぶさるように唇が重なった。ミキの唾液でしめりを帯びた唇を開き、マキの舌を引き込もうと吸引を執拗につづける私であった。アルコールの微薫が鼻腔をくすぐり、甘酸っぱい舌端が強引さに負けて腔中に沁り込んできた時、無意識にマキの両手が私の肩にかかってくる。

ミキが傍らにいては、到底果たし得ない情事の一步が、長いくちづけで、前触れもなく始まった。

やっと唇が離れた時、上気したマキの頬が微かに歪んで、突発的な私の行為をなじるように、黒い切長の眸が、あわただしくまたいた。

「やっとな二人になれたね」

「ミキどうしてるの？」

「縛ってバスにつけておいたよ。今頃、湯気濛々の狭いバスの中で、呻いているかも知れない。バスから出られないようにしてあるんだ」

「いいの、そんなことはあって」

「濡れた縄が、ジリジリと、ミキの体をしめつけているかも知れない」

「悪いセンサー」

「マキが羞かしがり屋だから、こんなことになったのさ」

「あたいのせい」

「らしいね」

「でも、そやかて、あたいの羞かしい気持も察してほしいわ。センサーは、こんなこと馴れてはるけど、あたいは二人で羞かしいことみせるの、生まれて始めてなんよ」

「わかってるよ。それだけに尚更、やってみたいんだね」

「本当は、センサーと二人きりで来たかったわ。それやったら、センサーのいいはる通り何でもするんやけど」

「恋の奴隷みたいだね。でもあの時、随分、怒って帰ったじゃないか」

「あとで電話で謝ったでしょ。そやかて、あ



の時のセンサーのやり方、ひどかったんやもの。デリケートな女心、全然、無視しはって……」

「疲れていたんだよ」

「日を変えればよかったのよ」

「謝ってるじゃないか。だから……今日はエンドマークまでプレイしてやるから」

「いやよ。ミキの前で恥かしいわ」

「でも、お互いに気を許しあった仲なんだろう。マキはミキが嫌いなのかい」

「好きよ。私の性質とまるで正反対だから、うまくゆくとしてるの。でも受取る感覚が違いうわよ」

「分かるがね。でも体の隅々まで知り合った二人なんだろう。あの子は陽性だから、テキパキものをいうが、マキに負けない羞かしがり屋だよ、本当は……。思い切ってやってくれよ、私の眼なんか意識しないでさ」

「意識するなといっても無理やわ。あたいセンサーが好きになりかけたんやもの」

マキは私の胸にそっと凭れかかってきた。微かに乱れる吐息が、マキの燃え始めた女体の疼きを如実に現わしていた。眼を閉じた甘い表情は私のくちづけを待ち望んでいた。Vネックの濃紅のセーターの上から、ぐっと乳

房を握んで、ぐいとマキを抱きしめると、再び唇を重ねていった。彼女の頬に、うたかたの陶酔が走る。つと離して、

「さあ、ミキを助けてきてやれよ。もう湯が一杯あふれて、アップアップしているかも知れないぞ」

考えれば危険なプレイであった。

「一緒にいってえ」

甘えて縋りつこうとするのを押えて

「ダメダメ、二人きりの方がいいんだ。きつとマキのくるのを待っているに違いないさ。早くいってやれよ」

私の、せかせかした声につられて、マキは一瞬ためらっていたが、すっと立上ると、あわてて襖の彼方に消えた。

急いで服を脱ぐマキの気配がする。サッと白い裸身が彼方をよぎって、マキはバスのドアを開いていた。私の坐っている部屋の方まで、竄っていた湯煙がゆらゆらと、灰白く流れてきた。

失神してはいなかっただろうか——フト、そんな不安が心をかすめたが、何か声高に喋っている二人の様子に、ホッとした思いで私は煙草に火をつけた。

ウチというミキ。あたいというマキ。一人



称の呼称も違い、まるつきり正反対の性格だから、却って二人はうまくゆくのかも知れない。二人きりになるチャンスのないままに、マキは拗ねていたようであった。私に対して秘かに持ち続けていた慕情のはかし場もなくそれがマキをあおした態度にさせたのかも知れなかった。お互いの女体の隅々まで知っているくせに、異性の私が中に一枚かむと、忽ち相手を牽制し合って、思いを沈潜させ、内



攻させているようであった。

温かい湯のぬくもりが、二人の心をほぐしてくるに違いないと私は信じた。出来得れば私も裸になり、ムチムチした若々しい二つの女体の谷間に陥没したい慾望に襲われた。私を許容している二人は、恐らく拒みはしないだろうと思ったが、狭いポリバスに、三人は所詮、無理とあきらめて、或いは猥らにたわむれているかも知れない二人の裸身を思い浮かべて、想像だけを逞しく膨らせてゆくのであった。

それにしても長い——。かなりの時間が無為に流れていった。そういう風に仕向けたくせ、私の心は、じれて焦立ち始めていた。マキがバスに消えてもう二十分近くなるのに、一向、上ってくる気配もない。待ちくたびれて、しびれをきらした私は、そっと足音を忍ばせてバスに近づく。パチャパチャと湯のうつ音が微かに聞こえる。ドアのノブを静かに廻して、広くもないバスの中へ首を挿し込んだ。

刹那、あっと驚きの声があがって

「いやッ、センサー。あっちゃ、いけ」

仁鶴かぶれの調子で、ミキが叫んだのも道理、洋式便器に跨がって、排泄の最中であっ



たからであった。軽い特有の臭気がバスの中に籠っていて、マキはバスの縁に両手をあてがって、下半身を湯に沈めたまま、そのミキのポーズを見守っていたのである。このハプニングに私のドッキリカメラは直ちに活躍を始めた。パタンと扉を閉すと電池装填のストロボカメラを隠しもって、今度はいきなり大

きく扉を開くと、正にペーパーで始末しようとするミキの羞恥の全景にパツと光らせた。「イヤイヤイヤ。センサーのエッチ。知らない知らない」

ミキは真赤になって立上りかねて、両手で体の前面を蔽って身をかがめていた。思いもかけぬハプニングシーンを撮って、私の胸は異様に燃え始めた。縛ることのみがハントのプレイではない。こうした、女同志の赤裸々なシーンの中に、異常なプレイがひそんでいるのを発見して、私は妖しいレスボスの戯れを、この眼で確かめたくなったのである。

立去らない私に観念したのか、体をそむけながら、ミキは湯桶で、何杯も何杯も汲み上げては、下半身にかけて、ザブリとバスに身を沈めた。

「センサーのいじわる……」

私は黙ってニヤニヤ笑う。

「ウチ、のぼせて、もう死にそうになってたんよ。マキがやっとこさ解いてくれて助かったけど、いつ迄放っとくつもりやったの」

「チャンと計算ずみさ」

口を尖らせて、プーンと膨れてみせて

「ひどいわ、ウチだけ虐めて……」

「だからバスから上ったら、マキをウンと虐





めりゃいいよ」

「いーだ。ねえ、マキ。二人してセンサーを虐めようか」

と逆襲してくる。マキは、はにかんで笑っている。

「それに第一、プライバシーの侵害よ。あんなと撮るなんて……」

「いいじゃないか。二度ととれないドッキリシーンだ。恰度いいや、ニソフの戯れをとってやろう。ミキ抱きつくんだよ」

「羞かしいわ、みていられたら」

「じゃあ、眼をつむって撮ろうか——」

「いいわ、センサー喜ばしたげる。どうせテコでも動かないつもりなんでしょ」

していった。

レスボスのプレイの前哨戦に私の心は逸り立つ。変化する二人のポーズを追って絶え間なくカメラのシャッターは、なりつづけた。

ミキを縛った縋縄は、湯底に沈んでいるのか、その辺りには見当たらなかった。縛られて苦悶するミキを発見した時のマキのショック——。それが否応なくマキ自身を、この甘い戯れに引きずりこんでいったようである。戯れるマキの表情に羞恥のかげはなく、真底から愉しんでいるようであった。

「いつまでやってるの。さあ、もういい加減にやめて、上ったらどうだ」

ミキは沈めていた片手を、すっと抜きとる

ミキとマキは向かい合って、バスの中で互いの体を深く抱き合った。

白い二つの裸身が、狭いピンクのポリバスの中で絡み合っていたが、いつしか二人の頬は上気して、ミキの眼尻に淫らなかがが漂い始め、狭い湯槽の中での連れ合いが、私の眼を忘れて惑溺の淵へと二人を押し流

と、無言でサッと湯をすくって私にあげかけた。あわてて避けたが、しづきが私のズボンをかなり濡らした。

「こいつ……」

「早く出て行って、すぐ出るから」

ミキは陶酔を破られた憤懣の表情で、パイと顔をそむけた。悦楽の境地にひたりつつあった二人にとって、私の言葉は不粋以外の何ものでもなかったらしい。

「見たいのね、ホラッ」

マキの手をとって、俄破とバスの中で一斉に立上る。大小の濡れた女体が眼前にパッと華を開かせていた。咄嗟に閃光を走らせて、もうこれ以上の闇入も益なしと、あわてて退散する。

「センサーの阿呆——」

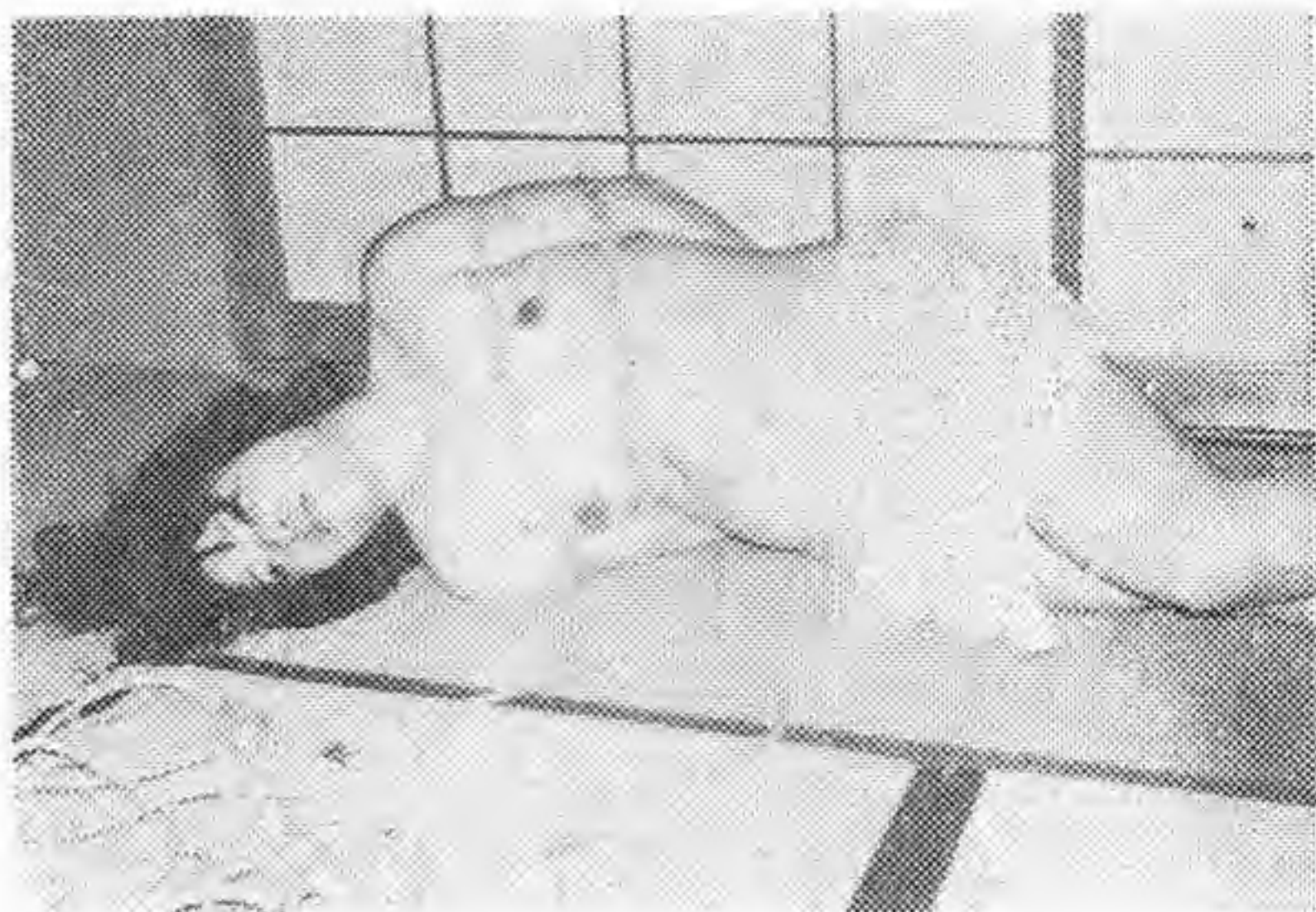
しめたドアの奥から、けたたましい笑いと共に、ミキの罵声が飛んできた。

バスタオルで裸身をくるんで、先に部屋に戻ってきたのはミキであった。一陣の嵐が過ぎ去った物瀬げな表情で、私はその中に満ち足りた飽和を見出した。待ち兼ねて声をかける。

「どうだい、うまくいっただろう」

「知らない——センセのエッチ」





「うまくやったくせに……」

ミキは流石に照れて、はにかみ笑いを浮かべる。

「せやけど、濡れた縄って、ほどきにくいんやね。体が段々しまってきて、大分、痛かったんよ。そうなること知ってたんでしょ」  
「勿論さ。それでマキ、何かいってた？」

「入ってきて、びっくりした顔してたけど、すぐほどきにかかってくれた」

「それから……」

「抱きついちゃった」

「それから——」

「きかんとして、わかってるくせに」

ペタリと坐ると、勝手に冷蔵庫を開いて、ファンタをとり出して、ゴクゴクと旨そうにのんでいる。いつの間にかマキが、顔一杯に羞恥を泛かべて、部屋の人口に佗んでいた。女体をぶつけ合って悦楽を彷徨するナマの姿を、ありありと私の眼前で展開して、さめたあとの空虚感が、ヒタヒタとマキの心を索漠へと押しやっていた。素肌に巻きつけたバス

タオルを、乳房の上で挟み込んで、部屋に入り兼ねていた。私の顔を上眼がちに、眩しいようにみつめながら立ちすくみ、手招きしても、いっかな入ってこようとは、しなかったのである。緊縛のプレイは、奇妙な倒錯の壁に遮ぎられて、もう小一時間も経つというのに、一歩も進まなかった。

× × ×

今、私の眼前に全裸の女同志のプレイが展開しつつあった。私にうながされるや、ミキは女豹のように、さっとマキにとびかかる。

バスタオルを剥がされて、くの字に体をくねらせたマキの背後に回って、撓やかな女体を起こすと素早く乳房を挟んで胸縄をかける。ミキの縛り方は、流石に女らしく簡潔であった。両手首を後手に縛り終ると、ミキは大きく息をついた。私は何一つ指図せず、このプレイの展開ぶりをカメラに納めていた。SMのプレイの方法は、すべてミキに任せきりであった。反ってその方が、私のいつものマンネリを打破して面白いだろうと思ったからである。

ミキは、すっと立上るとマキの髪の毛を掴んで、ぐいと体を起こす。豊かなマキの素肌は、ほんのりと湯上りの桃色に染まり、悦虐の陶酔は既にその顔面に流れ始めていた。私という異性を意識して、羞恥が尚更に悦虐と結びついて、陶酔に拍車をかけていた。縄に挟まれて盛り上った双つの乳房が、しゃぶりつきたいように張切っていた。

「どうしよう、センサー。これから……」

一寸、困った風にミキは私の方をみて、声をかける。

「好きなようにするさ。いつも、どうしてるの。二人で」

「ベッドの上で転げ廻って遊んだり、揉んだ



り、撫でたり……」

「やれよ」

「羞かしいわ」

「パチパチやらないの？」

「余り強く叩いたら、マキ痛がって、痛い方に心走るから、いいことないんだって」

「じゃあ、手加減すりゃいいじゃない」

己むを得ないといった態で、ミキは一条の縄を折り曲げて、左手に握った。軽く撫でるようにマキの肩に振り下ろす。

「ウーン、いたいわ、ミキ。もっとゆるく、ぶってよ」

「これ以上、ゆるく叩けないわ。我慢して」

縄束を叩きつける度に、マキは痛そうに激しく体を左右にねじった。ミキは身を退いてマキの体を押し倒す。どさりと横ざまに倒れて、顔をしかめる。マキの観念した被虐の横顔は、こよなく美しかった。ポーカーフェイスが、今ははっきりと悦楽の表情に変わって振り下ろすミキの、愛の縄ムチを受ける裸身は、大きく揺れ動いていた。豊かな臀部に、続けさまにムチが飛び交う。

「痛いかな、マキ——」

「ウーン、痛い、痛い。痛いけど構わない」

縄束を片手に握りしめたまま体を起こした

ミキは、いきなりマキのふくよかな胸肌を握りしめて、ぐりぐりと揉みしだくと、指先に力をこめていった。唇を噛みしめて声を殺しながらも、絶え切れぬような悦楽の呻きが、マキの口からもれ始めると、ミキの口辺は、だらりと開き、粗々しく息を弾ませて彼女自身このひたぶるな同性への嗜虐の行為に、すっかり酔い痴れている様であった。

あれ程、私を意識していた二人が、いつしか、私の存在を遥かの彼方に追いやって、プレイに熱中し始め、いつかは傍若無人に振舞いつつあった。それは私の思う壺！

虐めるミキも、虐められるマキも、快楽の世界に耽溺を早めようとするかのように、我を忘れ出していた。自由を奪われたマキに、ミキの執拗な手はあちこちに舞い、その泣きどころを適確に襲っていった。思い出したように縄束でぶっては、陶酔を高めようとしていた。マキの腰に尻を据えて、馬乗りになったミキは、肩から胸、そして乳房へと、撫でさするようなムチ打ちをつづけ、右手はいっ



ときも遊ばせず、女体の上を遊弋していた。

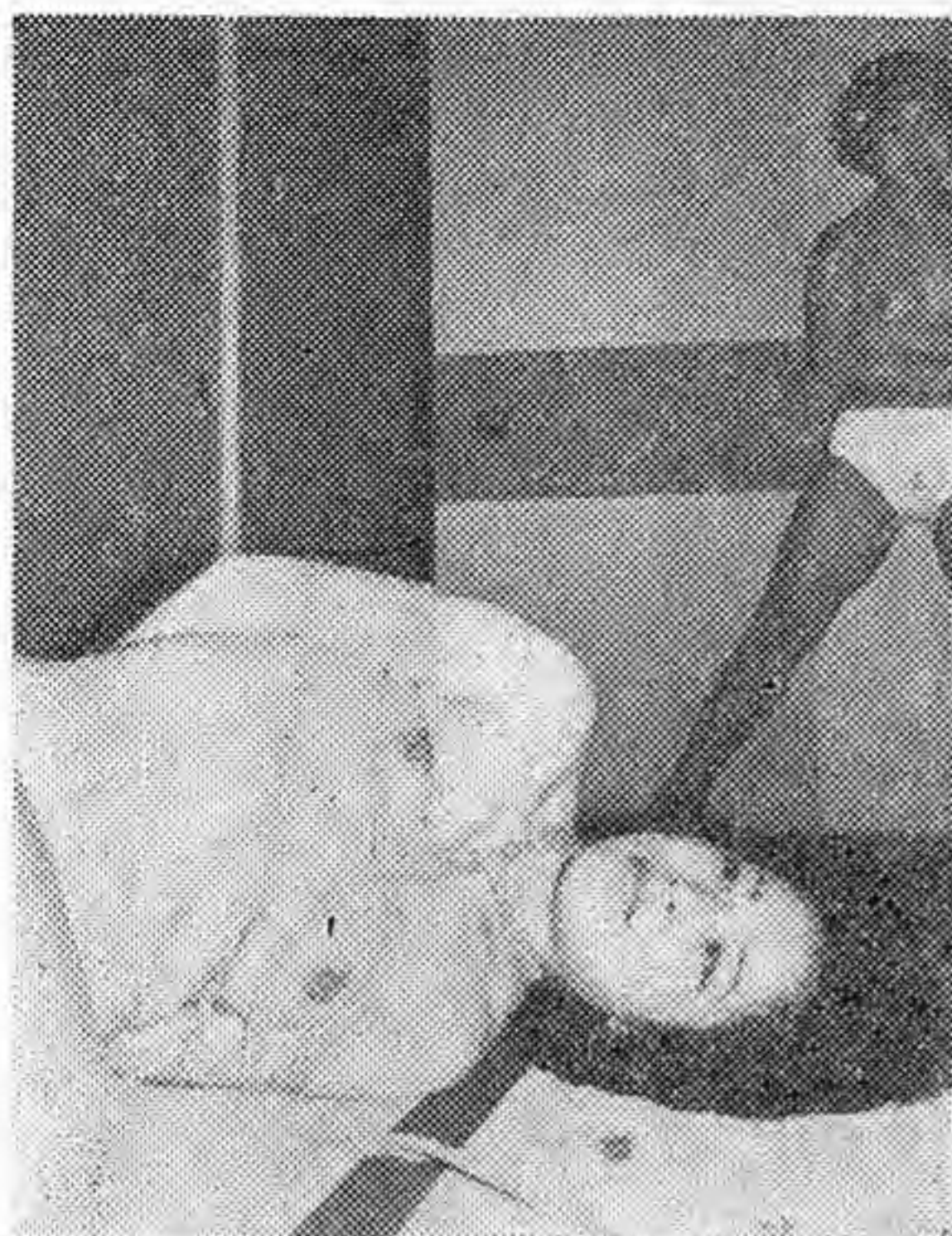
紅潮した顔を挙げて、チラリと視線を送ってきたミキは、私がヘタリ込んで、突きさすように凝視しているのを確かめると、マキの横たわった体の前に回り、さっと体を反らせておどろかかっていた。私の視線から二人の肉体のドッキングがみえない位置に体を横たえると、マキの頭を抱きしめるようにして女同志の激しいくちづけが始まる。じりじりと体をずらせ、胸に乳房に、吸引の烙印を押しながら、ミキの女体は転倒していった。めくるめく、女豹の激しい恍惚の華麗な光景に私の心は妖しく震え、厳肅なまでに真剣なミ



キの行為を、ひたすらに唾をのみこみ、無言のままでもみつめるのみであった。

× × ×

疲れ果てて、仰向きに長々と寝そべっている、二匹の女獣の姿が、そこにあった。プレイのうたげのあとの、真空状態であった。縄を解かれたマキが、のろのろと身をにじらせると、ミキの傍らに近寄っていった、柔らかな素肌をまさぐり始めた。頬をよせ合い、唇を触れさせて、もぞもぞと二つの女体が、私の眼も憚らず、余烬を愉しむかのように、微かに蠢いている。その二つのポーズに、最



早、私の介在する余地はなかった。何故ともなく、このまま、しばらくは、そっとしておいてやりたい気持ちにかられて、静かに立上ると、ミキとマキの残り香の漂い浮くバスへ音もなく消えていった。生ぬるい湯に身を横たえて、余りにもショックだった、あの二人のプレイのなまなましさを、ありありと瞼の底に描くのであった。足指に沈んだ縄がきらんだ。まさぐって指の間に挟み込んで引き揚げた縄はどっぴりと湯を含んで重かった。

ミキと二人、かつてこのバスにひたり、あの部屋で様々のプレイをしたのが最早、遠い過去のような気がする。ミキは思い出の部屋であることを、とつくに知っていたいながら、マキの手前、一言もそれに触れない。私との二人だけの秘密は、そっと胸にしまっておきたかったのであろうか。私がバスに消えたのを知った二人は、今頃、鼠なきして激しく戯れ始め、憚ることなく、喘ぎ、呻いて、お互いの泣きどころを攻撃し合っている、ほんの束の間に、欲びのすべてを燃焼させているかも知れ

なかった。しかしそれは私の憶測であって、バスからは窺うすべもなかったが、この妄想は私の神経を妖しくかき立て、憑かれたようにバスから身を起すと、濡れそぼった体を拭いもせず、足音を忍ばせて、部屋の見える視界すれすれ迄体を乗り出し、猥らな覗き見の興趣に、かり立てられるのであった。

私のあらぬ予想に反して、ミキとマキは向かいあって裸身のまま膝をつき合わせ、何かひそひそと囁き合っている。クク」と声を殺して笑い合っていた。その囁きは聞きとれない距離の遠さであったが、プレイの快楽を反芻しての快心の笑みであるか、はた又、私をあれこれと評価しては、これからの対策を秘かに協議しているのかも知れなかった。

数歩戻って、わざと音を立ててバスを出ると、パンツ一枚の姿で部屋に現われる。ミキが待ちかねていたように声をかけた。

「ねえ、センサー——。やっぱしウチらだけではやりにくいわ。センサーの方で何かしてえ」

マキの膝に腰をおろしたまま、ミキは甘えるように上眼を使って、裸身をヒタとマキにより添わしていった。女同志の束の間のひとときは、軽いペッティング程度に終わったら



しかった。

「それもいいだろう。しかしそうしているといいポーズだね。一寸撮っておくよ」

私は、そわそわとカメラを構える。ミキは抱きついたらままマキの顔色をみた。

「いいわ、センサー。その代り、ウチらにもフोट頂戴ね。キッスするから」

ミキとマキはフレンチなキッスを、カメラによく見える位置で交してくれた。ムチュムチした女体が撓って、二人はその姿勢のまま堂々と倒れ、寄りかかったミキが、マキの首を抱えるようにして深々と唇を吸っていた。あられもない乱れた肢態が、在りのままカメラに次々と納まってゆく。縫れ合っていたら、果てもなく延々と続くように思われた。既にリラックスした二人は、反ってこれみよがしに殊更に露出的に振舞うのであった。私に見せることによって、むしろ彼女等はその想念を燃やし、尚更ハッスルしてゆくようであった。

絡みあってマキの体に蔽いがぶさったミキの肩を、そっと叩く。熱っぽい眸をあげた彼女に、私は縄を振ってみせた。

「一人ずつ代わりばんこに縛ってやろう。ミキからやるよ。いいだろう」

うなずいてミキはマキから体を離した。マキの眼前で、思い切りハレンチ極まる緊縛をやらかして、マキにみせてやりたい気持にかられた私は、一条の縄で、犇々と上半身をよく縛り上げる。マキは体を起こして、じっと私達の緊縛プレイをみつめていた。

縛って長々とタタミの上に押し倒すと左の足首に縄を巻きつけて二、三米さきの柱に強く引っ張って繋ぐ。ミキの体が引っ張られた片足の方に傾いた。

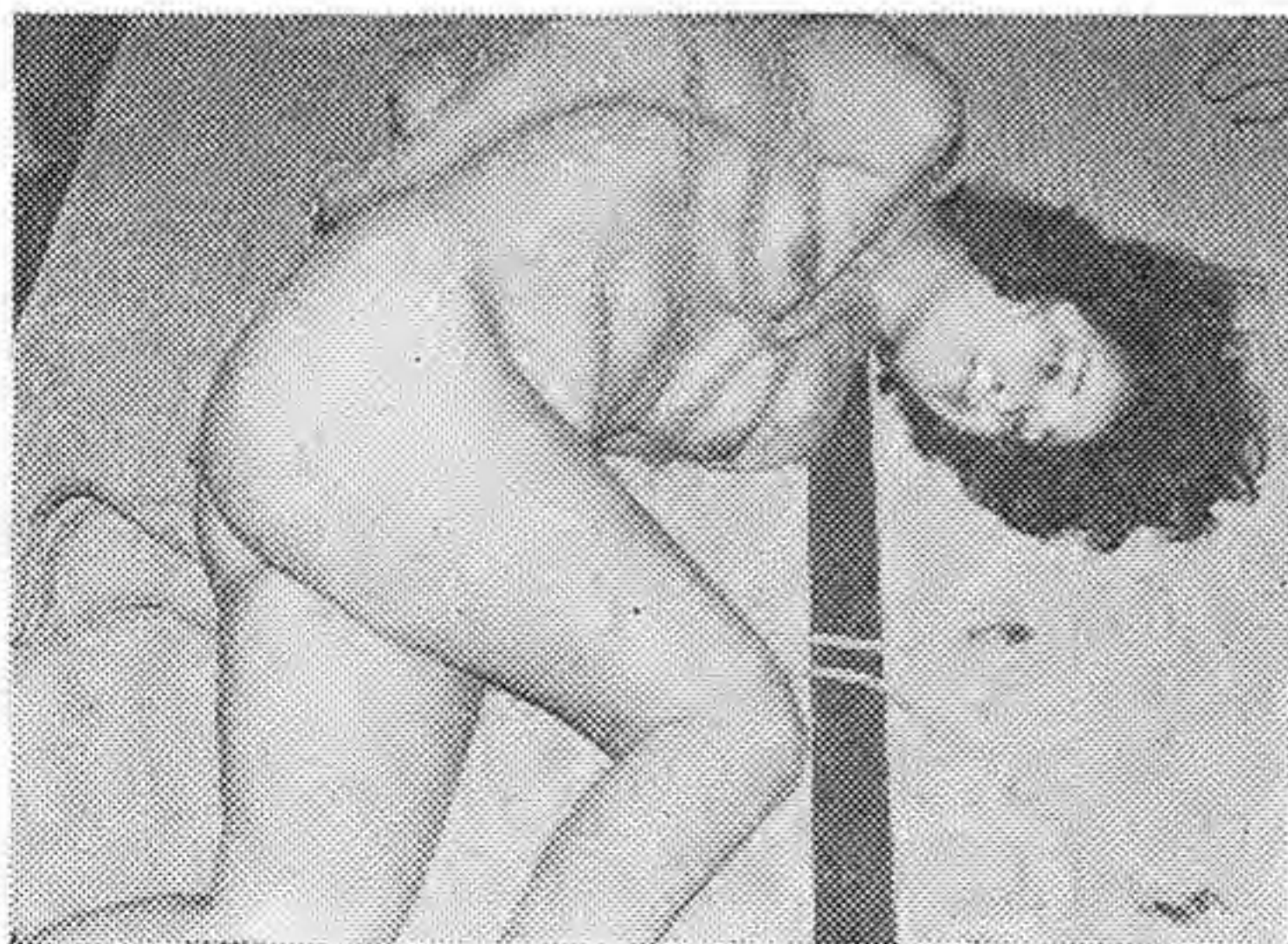
右足首に縄を結んで、私はマキを手招きした。全裸が、やや、ものうげに近づく。

「この縄のはしを引っ張って、股が張り裂けるほどに開いてごらん」

縄尻を渡すと、一寸躊躇していたが、顔をそむけて、ぐいぐい引っ張り始める。ミキは足の付け根に力をこめて、かなり抵抗していたが、マキの力に負けて、がっくりと力が抜けると、すらすらと両足が左右に大きく拡がった。マキの熱っぽいまなざしが、まざまざとみせつけたミキのポイントを、じっと凝視していた。

バッグより愛用の小型のバイブレーターをとり出すと、マキにつきつけ、

「やるかい？」と、きく。



縄尻を握りしめたまま、マキは黙って首を振った。仰向けに打倒れたミキの体に、微かな響きを伝えて私の手からバイブが離れた。微動と共にミキの表情が急速にくずれ、マキの手前、必死に噛みこらしていた鳴悦の呻きが急に高まり始めると共に、激しく顔を左右に振って悶え、いつしか女体が微妙に揺れだしていた。揺れたはずみでバイブレーターが



タタミにこぼれ落ちて、ブルンブルンと蠕動している。今度は落下しないように、縄をかけめぐる。

喰い入るように見下ろすマキの眼下で、ミキは不自由の体でのけぞりのたうち廻った。恍惚がミキの体を包み始めた頃合いを見計らって私はいきなりプレイを中止する。断絶の未練が、私の最初からの計画であった。ぐったりと、あえなくなったミ

キの、閉じられた臉のふちに不満のかげらいが走った。しっかり縄を握りしめているマキに片眼をつぶると、私の意図を察したのか、彼女はアルカイクに微笑んで顔を伏せた。あの日の、欲求不満の最後の苦渋を思い出したに違いなかった。

それは、マキのみに対して、とった行為でないことを示したつもりであったが、一つはそうした未熟のプレイの積み重ねに、残酷めいた欲びを感じるものであった。行きつく処まで行きついた時、女体は歓喜にあふれても、空しく手を束ねて、喜悅の表情を見守るのは外でもなく、はかききれぬ情慾を秘めた私自身の憐れな姿だったからである。女体を喜悅させることは、それはもうプレイではなく、



ひたすらにせつせと、奉仕をくり返しているに過ぎないのを、私の肉体と大脳神経が一番よく知っていた。

ミキの羞恥責めの縄をノロノロ解き終るとすぐさまマキにその縄がかかっていった。上半身の緊縛が終った時、何と思っただか、パンティをつけたミキが、覗きこむようにして私の手許をみつめていた。大きく両脚を拡げて立ちはだかり、両腕を胸で組んでいる。

パンティをつけたミキの行為に、無言のレジスタンスを感じて私は苦笑する。もってゆきどころのない焦燥と不満が、ミキの態度にまざまざと現われていた。

ミキの脳裡には、未遂の情熱の捨てどころを持て余している自分自身の気持と、私がど

うして中絶したのかという疑問が、渦を巻いていたであつたらう。マキは私のそうした中絶の行為を、自分なりに受け止めているようであった。

私はマキに対してはパイプを使用しなかった。同じような未遂の行為を、もう一度、彼女に味あわせたくなかった、と同時に、歓喜の絶頂へつき上げることが、ミキに対して悪い気持も働いていたからである。女二人とプレイすることが、かくも気苦勞の伴うものであることを、私は沁々と肌で知った。どちらへも偏らない平等のプレイの愛情——。それは私の心のうちにひそむ、好き嫌いの感情を或る程度、殺さねばならないシンドサであった。

縛ったマキをその場に立たせ、私は彼方から私達の一部始終をみやるミキに、縄をもって近づいて行く。黙って、胸で組んでいた腕に手をやって背後にねじ上げる。軽く抵抗したミキは、拗ねたような態度で渋々両手をうしろに回した。回した両手の甲を合せて、きつく縛り上げ、胸へ数重の縄をかけて犇々と緊縛した。ミキの果敢ない抵抗を踏みくだくように、パンティをぐいと引下げると、あきらめたように両足を自分から外した。





追い立てるようにしてマキと並ばせて立たせ、忙しくカメラに走って、二、三のポーズをいれたあと、マキの乳房をミキにふくませようとした。膝立てにしたミキにポーズをつけて、唇をつけさせて、カメラを構えると、すぐ離してしまう。大柄のマキはミキのそうした無言の拒否を、無防備の態勢で受けとめていた。そうしたミキの態度に業を煮やした私は、カメラをセルフタイマーにして駆けよると、いきなりミキの髪を掴んで乳房に唇を当てがわせる。数度のセルフタイマーがミキの顔で、マキの乳房や膝下を蔽った。ミキは私の心がマキに傾斜しているように思っているらしかった。未遂の恍惚が、敏感にミキの

心に反映して、協力を拒むように首を振って拒否し、それがせめてもの、彼女の果敢ないレジスタンスにつながっていた。

今日のミキといい、先日のマキといい、断絶のプレイの恨みが、こうした非協力な態度となつて、はねかえることを知りつつ、萎縮する糖尿の欠陥が、あたかも女体への復讐を遂げるかのように、そうした行為に走らせるのは、プレイの上からもマイナスになることが分かりながら、複雑な性愛のギャップに悩む肉体の相剋を、つくづくと痛切に感じるのであった。

羞恥をのりこえて、女性自身やっとその気になって、恍惚に身を委ね、恥かしさをこらえながら、歎歎と呻吟の中に陶醉しようするのを、前に触れもなく中断された時、はかききれぬ恨みと共に、羞恥は倍増して我が身に還元されてくる。それを承知で私は、デリケートな女心を踏みくだいていたのである。

私が又してもパイプを出してきた時、ミキは激し

い口調で、

「もう、ええ加減にやめて——」

と怒鳴るように叫んだ。その声には憤懣が一時に爆発した響きが、こめられていた。

× × ×

連縛の曝しものを着に、数米離れたところから一本のビールをチビチビやりながら、私は変わりゆく二人の反応を、じっとみつめていた。やり遂げずにおかぬ執念が、こりかたまって、犇々と連縛責めにのたうつ、二つの女体。二個の小型パイプが、女心を踏みしだくように震動しつづけているはずであった。

背中合わせの女体を、首縄でしっかりと連結してしめ上げ、胸から腕、胴、手首と、雁字搦目に縛った連縛の極が彼方にある。マキの乳房はポクリと飛出し、ミキのオッパイは平らかであった。

同じ程度の膨らみを持ちながら、縄のかけ方によっては、こうも違うものであるうか。お互いの指先が、相手を後抱きにのびてくびられ、それが奇妙な触覚となって、それぞれ神経を擦っていた。それぞれ一コ宛のパイプに、どちらが先に音をあげるかが、みものであった。快虐にのけぞろうとしてもままたらぬ二人は、粗い吐息と共に身も世もあらず



蠢いて悶えていた。

上半身が身動きもならず、まるでシャム双生児のように、ぴったりとくっついた背と背の骨が、もだえと共にきしみ、正座した太腿が、わなわなとゆらめいている。既に、かなりのフィルムがこれまでに消費され、と共にプレイの結末も近づきつつあった。箕田氏から依頼された分譲フォト用の構図もあって、私は、いつになく撮り過ぎていようであった。

二人のプロフィールに陶醉がありありと浮かび上ってきた。断絶のプレイを一気に吹き飛ばすつもりで、私は被虐の欲びを、二人に等分に与えていたのである。

マキは呻き、ミキは喘ぐ。仰向いたマキの両掌と、対照的に伏せたミキの両手、夫々の指先が宙に跳ねて躍り、同時にググツとのけぞった途端、正座のバランスがくずれて、二人は体を一にして横倒しになった。両脚が乱れて虚空を蹴り上げている。倒れた歪みで首縄がしまったのか、ミキは苦悶の形相をうかべて激しく喘いだ。マキの左腕が、のしかかる二個の女体の重みを受けて、痛々しく、ねじれていた。二コのバイブがタタミの上でブルブルとあえない響きを撒きちらしている。

私は、ゆっくりと二人に近寄ると、二人の片足ずつを握って、いきなり両手で高々とかかげた。ミキの足指が屈折すると、慟哭に似た悲鳴をあげ、その声につられるように、忍び泣くマキの足指が空を蹴った。背中合わせで、お互いの顔はみえずとも、肉体の気配で、二人は相手の動静を肌で、じかに感じとっていたようである。

二人の足を同時に離すと、ミキとマキは、まるで死んだようになってヒタとも動かなかった。ヒタヒタと笑いが、こみ上げてくる。征服の快哉を、私は脳裡で何度となく叫びつづけていたのである。飽くなきハントへの征服慾が、充実したプレイとなって行きつくところまで行きついた欲びは、案外、私一人のものではなかったかも知れない。

× × ×

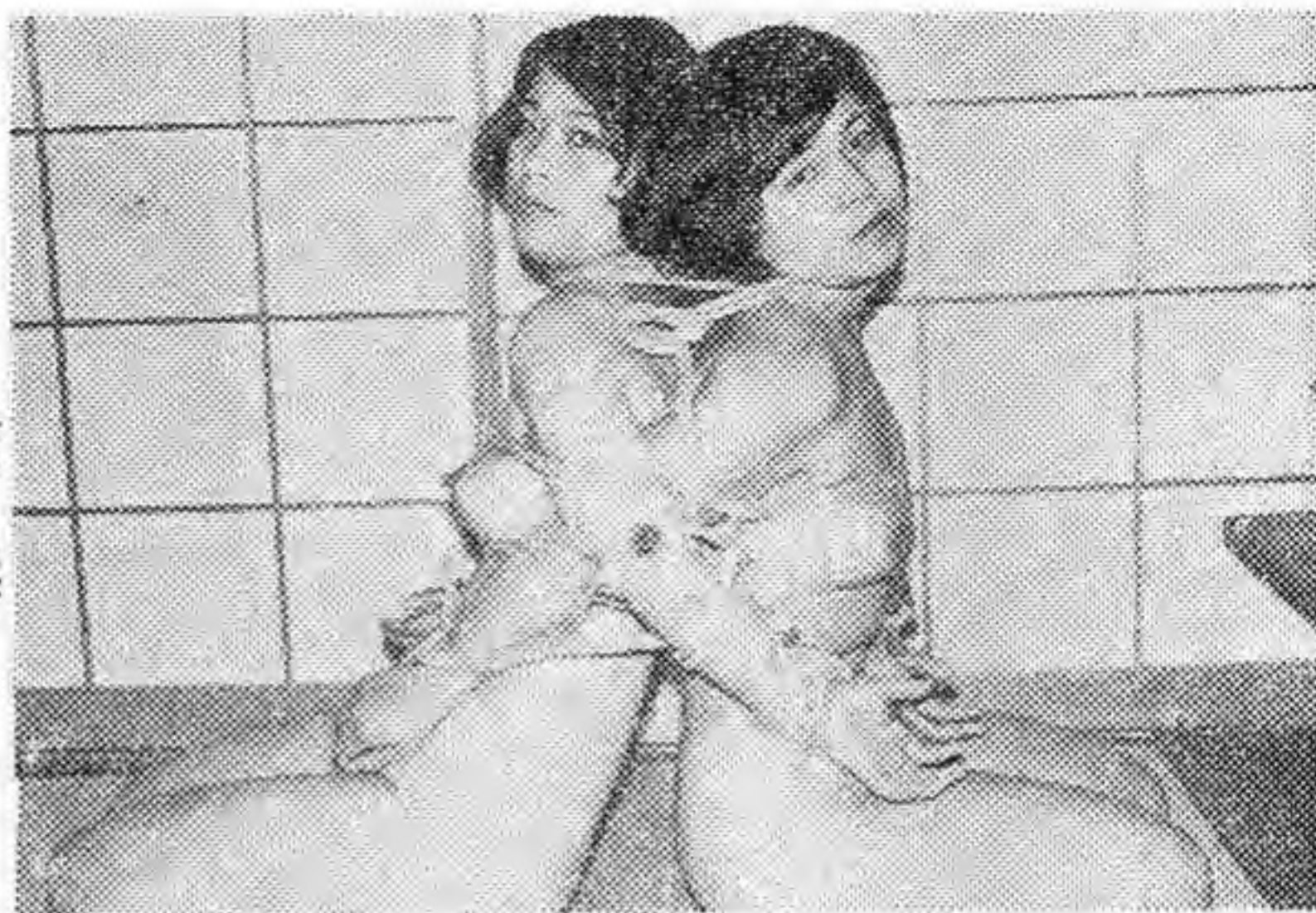
五本持参した三五ミリのフィルムを、全部費消してしまったことは珍しい。箕田氏の要請はあったとしても、ミキとマキの素晴らし



い女体の魅力が、私をして夢中でシャッターをきかせた原因であった。そして今一つは、近頃のカメラ・ハントで、しばしばプレイ半ばで陥り勝ちの、四帖半のプレイに走らずに私自身を圏外において、二人にプレイさせて傍観者の態度の多かったのも、その一因であった。

近頃、頓に肉体の衰えを感じ更に慢性化した糖尿の欠陥が拍車をかけている私である。心だけは矢たけびに逸り立ち、妄想は妄想を呼んで、雁字搦目に縛った二人の間に挟まって、マキの眼前でミキを愛し、ミキの直視を受けてマキをいたがり愛し、果ては、ミキと





マキの二人を同時に御する術など、さまざまに心に描いても所詮は夢の又夢で、現実のプレイはピチピチした美女二人を前にして、さして為すすべもなく、あなた任せの、ひとときに終ったことが、情なくもあり、うたげ果てて口惜しくも思われるのであった。二人共ひいき目ではなく私に好意を抱いているだけに

獸慾をむき出しにして挑みかかれれば、前述の可能性は十分に考えられた。

しかし最近、一対一のプレイですら、碌々ばかり切れぬ私が、燃え上った若い娘二人に等分の満足を与えることなどは不可能に近かった。ハントにくたび果てた諦観の念が、己むなく私を、フォトに重点をおかせたのかも知れなかった。ミキとマキが、今日のプレイによって、果たして充実感を味わったか否かは、それは又、別問題である。

延々、三時間半に亘るホテルでの時間を過ぎて、車が地上に出た時は、既に街は暮れなずんでいた。

ミキもマキも、妙に押し黙って、並んで後部シートに坐っている。軽い悔恨と、女同志の複雑な心境の対立が、二人の脳裡を駆け巡って、プレイのあれこれを口にするのが、忌わしいような気持ちにかり立てられているのであろうか。

私は私なりに、折角のチャンスが無為に終らせたような観念が、ともすれば先走って、今ひとたび、衰えた体にムチ打って、激しいプレイに耽溺したい観念にかられていたのがある。バックに背を向けたまま声をかける。

「これから、どうする?」

「センサーは?」

マキが聞き返した。

「別段急ぐ用もないし、おそくなくてもいいんだ」

「じゃあ、どこかでパーッと騒いでみたい。ねえ、ミキ」

「ウン、センサーにじゃんじゃん奢らしちゃおか。そのくらいの事してもらわんと……」

ミキの声もつられて明るく弾んだ。

もやもやを吹っ飛ばして、パツと騒いでみたいのだな——。それでいいのだ。二人のシヨックは大きくても、所詮はうたかたのプレイ。もう何もかも忘れ果てて、いつものミキとマキに戻ってほしかった。

「よっしゃ、きめた。じゃあキタへ走ろう。」

車はモータープールへ預けておいて、明日にでもとりに行くとするか。のんでくって、ゴー喫茶へでも、父兄同伴のつもりでついてやるよ」

「わあ、うれしい」

ミキがおどけて、運転する私の背後から抱きついて、頬っぺたにチュッとキスをする。

つるべ落としの秋の陽は短い。既に、すっかり暮れ果てた国道を、ヘッドライトの交錯する車の浪にもまれて、私は一路、狂燥の巻めざしてノロノロと走っていた。



創作

灰色のバカンス



# 危機一髪

紫 仮 面

そこは、旧陸軍の秘密兵器研究所跡、といわれてきた。雑木林に囲まれた、草深いこの一角を通る人は稀だった。県道は、はるか彼方を通っているし、いわゆるハイキング・コースとも無関係だ。研究所とはいっても、地上には殆どその姿を見せてはいない。かつての日本のどこにも見られた「防空壕」の入口みたいなものが、おい茂った雑草の間に、わずかに認められる。粗末な扉がはめられており、人一人通れる程度の小さな入口らしい。ただし、扉は鉄製で、いつも嚴重に錠がおろされているため、こじあけて入ってみようと

いうほどの者もない。

噂だけは乱れとんだ。

(暴力団Y組の、秘密の隠れ家だと言)

(いや、その反対だ。秘密探偵社の本部さ)

(秘密の桃色ホテルだろう)

(麻薬のアジトだろう)

(あの錠前をあずかっているのは、どこかの偉い学者でね。今の乱れた世の中を避けて、平和が来るまで、あの中にひきこもっているつもりらしい)

(そんな偉い人が、なんだってこんな山の中へ?! ちがう。ギャングの秘密倉庫だ。あの

奥に、現金だの宝石だのを隠した金庫があるんだが、うっかり入ると、足下には強い電流が通じているので、ふみこめない)

それぞれ見てきたようなことを言うが、本当は、あの中がどうなっているのか、誰も知らない。ある時、村の有志が二人、「武装」して、穴の入口を見張ったことがある。一昼夜を経て、特に変わったことはなかったようだが、その後一週間以内に、二人とも交通事故に遭い、死亡した。現場から数キロ離れた崖ぶちのカーブで、前から来たバスをよけそこね、崖下に転落したのだ。その時、一台の



黒い乗用車が走りぬけていったのを、バスの乗客の一人が、かすかに見た、という。車のナンバーは、残念ながら記憶にない、というよりは、夕闇にまぎれ、見落としたというのがあたっているだろう。

色々な噂が遂に警察の耳にまで届いた。黙殺するわけにもいかず、防空壕の大がかりな搜索が行なわれることになった。ところが、鉄扉をこじあけて見て一同呆気にとられた。なんと、扉の内部は、畳一枚分ぐらいの空間を残して、三方が、シッキイで塗り固められていたのである。みんな、ばからしいやら、おかしいやら、腹が立つやら……確かに、昔は「秘密兵器研究所」だったかもしれない。しかし、終戦と同時に、誰かの手で撤収されるか、又は破壊されてしまったのだろう。「このシッキイをこわして、もっと中を探ってみては？」

との意見も出たが、明らかに外から塗り固めたらしい厚いシッキイの向こうに、とりたてていふほどの秘密が蔵されていそうにも思えなかった。

「ここだわ。確かよ、まちがいないわ」

「そうすると、これは、あの池ってことにな

るけど……。でもこの写真では、もっと広いみたい」

「礼子、地理は弱いね。沼や湖でさえ、年中、形を変えていくのよ。昔、池だったところが今は小さな水溜りってこともあるわ」

「それはそうだけれど、……。でも、たった十年ぐらいで、そんなに、変わるものかしら？」

よく似ている、どうやら姉妹らしい二人の若い娘だった。二人とも色白の、いうことはノースリーブを着ているだけに、余計それが目立つのだが、礼子と呼ばれた妹らしい少女？ は真紅のブラウスに白のストラックス。姉はグリーンのワンピースに白のベルト。

「姉ちゃん、やっぱり、さがしてよかったわね。私たち、幸福になれるわ。きっと。パパはとうとう新薬の研究結果を秘めたまま、殺された。でも、パパの遺志を私たちが継いで私たちは救世主になれるのよ」

「パパは、でも、なぜ、殺されたのかしら？ そんなに立派な仕事をしたのに。それに、利益を独占しようなどと、そんなことにこだわるパパじゃあなかったはずよ。がんの根治療法が完成すれば、パパは日本で最初のノーベル医学賞……」

「パパは、ママの写真を肌身はなさず持っていたそうね。ママの写真は、きっとあるわ。やっぱり、ここよ。そうにちがいないわ」

二人は、こおどりして喜んだ。その時、足音が静かに、二人の後ろに近づいた。

「青山さんのお嬢さんでしょうか？ もし、ちがったら、おわびしますが……」

長身の中年紳士だった。陽はもはや西に傾きかけ、背光にクッキリと浮かんだ紳士の姿は、一見神々しくさえ見えた。緑一色の風景に、黒の開襟が一際、映えてみえた。

「お逢い出来てよかった。私も、今日まで生きてきたかいがあった。あなたは、たしか寿子さん。それから妹さんが、礼子さん。先生から、お話は聞いていました」

ロング・ピースをくわえると、紳士は尚も続けた。

「申しおくれましたが私は大庭と申します。ずうっと、先生の助手を務めさせて頂きました。先生は、あなた方のお母様と別れて、再婚された。寿子さんが五つぐらいの時でしたか……」

紳士はしばし瞑目して、昔を回想するように見えた。

「懐かしいなあ。そして、嬉しいなあ、皆さ



んが、こんなに美しいお嬢さんに成長なされて。いや、こんなところでお話なんですから、とにかく、うちへ行きましょう。先生が私に遺して下さったカタミを、早くお見せしたい。それより、もしもお二人の消息がわかったら、ぜひ渡してほしいと、お預りしている品もあります。もし出来るなら、あの貴重な研究成果を、お嬢さん方お二人の名で、公表したい。そして、私も、なろうことなら、助手として、生涯お力になりたいのです」

男の言葉に、うそは感じられなかった。

「まあ、歩きながら話しましょう。あ、私ですか？ 妻は死にました。色々と苦労させましたからね。今は、妻についてきたばあやさんが、もう十年以上も、身の周りの世話をしてくれています。私は、ふだんはこれでも、大学の講師なんですがね、今夏休みで」

「研究は、やはり……？」

「細菌学……そういうわけです」

松林の蔭に、ささやかな日本家屋が一軒。

それが大庭氏の住居だった。医学者の生活の場というので、近代的な洋館を想像していた寿子と礼子の姉妹は、一寸面喰らった。

「狭い家でびっくりしたでしょう。でも、ど

うぞ御安心下さい。研究室は、ちゃんと、地下に設けてあります。あとでゆっくりお見せしますが、お父様は深慮遠謀に富んだ方だった。原爆はヒロシマ、ナガサキで終止符を打ったわけではない。いや、むしろ、あの二つの大惨事は、原水爆戦争の第一幕が始まったと同じなのだ、とね。だから、先生は郷里の広い土地やその他を売り払って、ここに、地下の研究室を造られたのです」

「では？ これはパパの？！」

「そうですとも。先生は、皆さんもごんじでしょうが、婿養子でした。そんな先生が、郷里の土地を売るといふには、色々と問題もあったのですが、実はそんなことが、あなた方のお母様との別居、更には離婚にもつながった、と考えられなくもありません。で、お父様の遺言によって、ここを、このまま、私が引き継いだのですよ」

ばあやが茶を入れにきた時、青山は二人に彼女をひきあわせた。おたかさんという、品のいい、やせぎすの老女だった。

その日の夜行で帰京するはずだった寿子、礼子の姉妹は、しかし、その夜ずっと、駅には姿を現わさなかった。そのはずだ。美しい

二人の娘たちは、人知れぬ地下の一室で夜を明かしたのだから。それも全裸で、手足を嚴重に縛りあげられたみじめな姿で……。

姉の寿子の方が、まず正気に戻ったが、もはや遅かった。暗い中で、起きあがろうとしながら、彼女は、現在自分がどんな状態を強いられているかを、まず発見した。

「礼ちゃん。礼子。礼子！」

姉の声に、ふっと我に返った妹も、ぎょうてんした。声にならない絶叫を二人は、心中であげた。もはや、絶対絶命だった。(でも、どうして、私たちが、こんな目に?!)

螢光灯に青白く照らされた一室に、全裸姿の美しい二人の娘たちが、引き立てられてきた。寿子、礼子の姉妹であることは言うまでもない。二人を後ろ手に縛りあげた縄尻を、それぞれ握りしめているのは、大庭と称する男の部下らしい。部屋の中央におかれたテーブルに両肘をついて、大庭はニンマリと、ほくそえんでいる。

「ごくろう。そこへ縛りつけるといい」

大庭と真向かいにおかれた二脚の椅子に、二人は固定された。両の足首と膝を、別々にいすの前脚に括りつけられて……。姉妹はも



はや、生きた心地もない。こんなにされた以上、もはやこの場で舌を飲んで死んでしまいたい気持だが、といって、舌をかむということは、昔ならともかく、現在では容易な業ではなかった。

「君たちは、ウン、そこへでもかけてくれ。場合によっては、早速にでも、一役務めてもらうことになるかもしれないからね」

傍のソファに部下たちが腰を下ろすと、いよいよ凄惨な空気が、部屋中に満ち満ちてくる。勝ち誇るように、大庭は口を開いた。

「びっくりしたろう。お前達は今、自分たちがどうして、いきなりこんな目にあわされているかが、分かるまいね。恐らく、誰からもきいてはいまい。だから、これからお嬢さん方に、そのわけをゆっくりと話してきかせてあげようと思うんだ。まあ、楽にしているといい……。おっと、あ、そうか。そのかつこうじやあ、楽にしろといっても、無理だったな。じゃあ、まあ、そのままでもいいや。どうせ、これからお嬢さん方にお茶をいれてもらうわけでもないし、飯の支度をしてもらうわけでもない。だから、手も足も使う必要はないのさ。そうだろう、お嬢さん方。舟だって、乗らない時は、太い縄で岸につないでおくんだ

からね。要するに、お前たちは、ただ、そうやって坐っているだけでいいんだ。黙って、おとなしく俺の話を聴いてなさい。あとで、色々と質問に答えてはもらうがね。どうだね涼しくていいだろう、はだかは……」

はだかと言われて、二人は改めて羞恥と屈辱の涙がこみあげてくるのだった。

「なるほど、やっぱり、口惜しいか。オイ、皆川君。お二人の涙をふいてあげるように」  
皆川と呼ばれた部下は、わざとインギンテイチヨウに、二人の涙にぬれた顔をふくのだった。二人はくやしそうにうつむいたまま、豊かな胸を波打たせている。うつ向けた顔が縄に痛々しくくびられた乳房と直面する。あまりかねて、尚も泣きながら眼を閉じる。

「お前たちのパパを殺したのは、俺だよ。よく見るがいい。この俺だよ」

ハッとして、二人は一瞬、申し合わせたように大庭を睨みつける。

（親の仇！ 憎い！ でも、私たちは今、無防備、無抵抗にされてしまったんだわ）

そう思うと、口惜し涙が、またもや、グツとこみあげて来て、眼のあたり泰然と控えているこの悪党の憎々しい顔がかすんで見えるほどだ。

「どうだ。すぐにでも一一〇番に電話するかね。それとも、その縄をふりほいって仇討ちを果たすかね？ そうして、裸で逃げ出すかね？ ハハ……」

「なぜ、なぜそんなことをしたの?！」

たまりかねて叫んだのは姉の寿子だった。

「だからさ。そのわけをゆっくりと話して聴かせようといってるんだ。オヤオヤ、涙がとうとう、オッパイの方まで流れてきた。ふいておあげ、小松君」

今度は小松という、色の浅黒い男が、小さなハンカチを片手に、ツカツカと近よってくる。

「ヤメテッ！」

「イヤ！」

二人は悲鳴を上げた。

「いいから、いいから……」

小松は、得たりや応と、まず礼子の乳首のあたりにハンカチを近づける。

「だめ！ 赦して！」

実に陰湿極まりない羞恥責めが、早くも開始された。小松がわざと念入りに乳首責めを続けているのを見て、皆川は寿子に近づく。妹が責められるのを、痛ましい気持で眺めていた寿子も、今は同じ責めに泣かされること



になった。

「そのくらいで、やめておけ。話が済んだらまた……」

乳首責めはやっと終わった。姉妹にとって責めが開始されてからどのくらい時間がたったのか分からないほど、それは長く長く感じられた。体中が真赤にほてって、熱っぽくさえ思えた。

「お前たち二人にしてみれば、俺が親の仇に見えるだろうが、そのパパさんはね、俺にとっては恨み重なるペテン師だった。それからここに居る二人にとって、それぞれ妹の仇なのだ」

「ウソ！ ウソです。ウソだわ。パパは、そんな……」

礼子に続いて、寿子も懸命に抗議する。

「まちがいです。そんなことはなにかのまちがいです。誤解ですわ。誓って、パパは、人からそんな恨みを受けるようなことは、していません。私たちの縄をといて下さい。帰して下さい」

「そうはいかないね。では、話してやろう。」

お前が……」

と寿子の方を指さしながら、

「生まれるころ、俺があいつの助手をしていたのは事実だ。俺たちは力を合わせて、ガン

と、ある種の細菌との関係について、研究していた。その間に、俺は、ほんのちょっとした偶然から、貴重なデータを得た。それをあいつは知って、二人の名で共同発表を申し出した。俺はとにかく助手なんだから、快くOKした。ガンとは直接関係があるかどうかは分からないが、とにかく、医学界に革命を起こし得るに足る大発見だと、俺は思っていた。ところがだ。あいつは、そのレポートを、こ

っそりある秘密研究所に高額で売り渡した。

俺がそのことに気づいた時は遅かった。あいつはその金を持ってどこかへ姿をくらまし、

俺はといえば、その秘密結社から命を狙われる破目になったのだ。危うく逃げ出して一時

の難は免れたが、その時一緒に働いていた女医の卵二人は奴等につかまり、離れ島にある

奴等のアジトにつれて行かれ、俺のかくれ場所を白状しろと……。ここまで言えば、もう

判かったろう。拷問さ。奴等はどうせ冷酷非情だ。彼女等がどんな目に遇わされたか想像

がつくだらう。もっとも、想像がつかないとしてもいうのなら、あとでゆっくり実演してみ

せようかね。さあ、どんな拷問かな？ 答え

られるかね」

三人の悪党共は、縛り上げられた二人の裸女を前に、悠々と食事を始めた。時々、姉妹の方をチラチラ見ながら、何かヒソヒソ話合っている。朝食が済んだら、二人をどうやって責めようか、といった相談らしい。

寿子と礼子の姉妹は互いの眼と眼を見交し悲しげに慰めあった。黒い絶望のドン底で寿子はここ二、三日の経過を思い出していた。

『青山先生の最期の場に居合わせた唯一人の男。それが、私、即ち、大庭香一です。先生は、自殺のように言われていますが、本当は他殺です。私は、実に古くさい言い方ですが仇討ちを決意しました。しかし、それが出来ないのです。なぜなら、私は不具者なのです。先生を殺した、あの悪党のため、私も重傷を負いました。それが元で、私は現在、足が不自由なため、遠出はずっとひかえているという次第です。』

勿論、事件直後、警察に届けたのですが、証拠不十分で結局先生は自殺と断定されました。覚えていらっしゃるますか？ 大庭香一……あれから、もう十数年を経過しましたか



らね。二人のお嬢さん方が無事に成人なされたことも聞きました。

この上は、お二人に、先生の残された貴重なデータをお渡ししたいと存じます。私も、先生の遺志を継いで、なんとかこの研究を完成させたいとがんばったのですが、もはや私の生命は、あと一月もつかどうかという状態です。

それともう一つ。ぜひとも、お渡ししたい品がここにあります。一カ月以内にぜひ、表記の場所までお越し下さい。詳しいお話は、いずれお逢いした上で……」

こんな手紙が来たのが三日前のこと。短大生の寿子も、高校生の礼子も、既に夏休みに入っていたので、タイミングはよかった。実をいうと、そういうタイミングを十分考慮した上での呼出しだったのかもしれない。他のこととは違うので、ボーイフレンドも誘わなかったのは、今考えてみれば失敗だった気がする。

（でも、どっちみちだめだったわ。あのばあやが持ってきたお茶に睡眠薬が入っていたらしい。結局は幾人いようと、みんな眠らされていたわ。そして私たちのこんな姿を、ボーイフレンドの見ている前で散々嘲りものにさ

れる……！ いや！ それはもったいや！ ああ、でも、どうすればいいの？ 誰も助けはくれないの！）

悪党共の食事が終わるころ、相談もまとまったようだ。後片づけが済むのと入れかわるように、大きな脚立が持ちこまれた。普通の脚立としても使えるが、両脚を水平に開くと長ばしごに早替りする。別に太い竿が一本。それらを十字型に交差させて縛り合わせると皆川が大庭の合図を待つように、チラッとふり向く。大座が徐ろに口を開く。

「さあ、長らくお待たせしてすまなかったねお嬢さん。二人仲よく、と言いたところだが、ここは礼子ちゃんに御足労願うことにしよう。小松君……」

待ってました、と言わぬばかりに、小松は礼子のいすに歩み寄ると、彼女を後ろ手に縛った麻縄を解きにかかった。しかし、手足の自由がほんの一瞬戻った後、彼女は皆川と小松に左右から白いしなやかな二の腕をぐいとつかまれ、先刻の十字架の方へ引き立てられるのだった。これから自分がどんな目に遇われるのかを、彼女は十分に悟っていた。

（磔だわ。磔にされるんだわ）

「さあ、お嬢さん。おとなしく、お手々を、広げてね。なるべく痛くないようにしてあげるからさ」

「こっちのお手々を、まずこうやって、ちょい。そうして、こっちのお手々を今度は、こうやって、はい、ちょいちょい、と」

「お手々がすんだら、次はあんよだ。さあ、がまんがまん。さ、出来あがり。いいかっこのになったよ」

「美女の磔。中々素敵だね。この素晴らしい姿を、さあお姉さんにも、とっくりと見てもらおうね」

即席の磔柱に雪白の四肢をむごたらしく押し広げ、ひしひしと縛められた礼子の裸身は神々しいまでに美しい。しかし、それを眼のあたり見せられる姉の寿子は、とてもたまらず、両眼を固く閉じて俯向くだけだ。その眼から、そして勿論礼子の眼からも、熱い涙が溢れ落ちる。

（くやしいわ）（くやしいっ！）

大庭が又、口を開く。

「寿子ちゃんに頼みがあるんだが、快くきいてくれるかね？」

「この上、何を、私たちに」

「一筆、書いてもらいたいんだ、この机で。」



葉書に、簡単でいい。右の手だけ、少しの間だけ、自由にしておけるから」

左手と両足は依然として縛られたまま、右手の縄だけを解かれた寿子を、小松と皆川が椅子ごと机の前に運んでゆく。ふと眼を上げれば、そこには妹の礼子が、十字架上に白い素肌を晒したまま悶え泣きじゃくっている。「文面はこのとおりに書くんだよ、このとおりにね。一字一句も間ちがえたりすると、どういうことになるか、分かるかね。だから、素直にした方が、ためだよ」

「ママ。今ごろ何をしているかしら。私たち昨日の午後大庭さん宅へ無事到着しました。想像していたとおり、とてもいい方で安心しました。ただね、とても忙しくなったの。礼子と二人、大庭さんにも手伝って頂き、パパの遺した色々なものを、今整理にかかっているの。まだしばらく帰れそうありません。くたびれるけれど、お手伝いさんが二人もいて、おいしいものを、色々と作ってくれるから大じょうぶよ。帰る時は、前の日に電話するわ。ママ一人で淋しいでしょうけれど、がまんしてね」

大庭に、おどされながら、寿子は泣く泣く

書いた。宛名も最後に。

「さあ、これでゆっくりしていてもらおう二人ともね。皆川君。記念写真を頼むよ、カラーでね」

「承知しました。なるべくいいのをとって、うんと大きく伸ばしましょう」

シャッターが何十回、切られたことか。ものどころついてからというものの、水着姿を人目に晒すことはあっても、こんな丸裸の自分を、凡そ男と名のつくものに見せたためしがない。まして、こんな奴等に、好きなように罵られようなどとは……

「そのくらいでよかろう。あとでまた別のポーズのやつをとらなくちゃあならないから。さて、と。いよいよ取調べに移るかな。知ってることは、正直に答えるだろうね」

「もう、赦して！」

際でされている礼子が泣き声を出した。

「痛い。痛いわ！ 手が、ああ！」

寿子の方も、手紙の後、又元の後ろ手縛りに戻されていたが、妹が苦しそうにあえぐのを、とても黙って見てはいられなかった。「どうして、こんな、ひどい目に遇わすの。私たちに、どんな罪があるのかしら！」

「叫べ叫べ。今に、もっともって叫ばしてや

る。素直に白状しないと」

「あなたたち、今にきっと捕まるわ。ママが今に警察に届けるわ」

「ところがね……」

大庭は不敵に笑った。

「それが、そういえないのさ。ママは恐らく警察へは行くまいよ。そうでもすれば、第一に自分が捕まるのを知ってるからね」

「エ？ ウソ！ ウソ！」

「うそかうそでないか、今に分かるさ。それより、こっちの質問に正直に答えるか、どうだ。強情をはるようだと……、ここに拷問係がちゃんと控えてるからね。皆川君に、小松君。君等の可愛い妹の仇だから、遠慮なく痛めつけてやるといい」

「待って！」

皆川が、いつのまにか右手に古びた革ベルトを握っているのに気づいて、寿子は今にもその鞭の雨が降ってくるのではないかと、おびえている。

「じゃあ、知ってることは、なんでも言うね」

そう言ったのは小松だ。小松の方は、ベルトのかわりに、羽根箒のようなものをもてあそびながらニヤニヤ笑っている。

「彼女等が、お前たちのパパさんのおかげで



どんなむごい目に遇わされたか、今に分かるだろうよ。ではまあ、前置きはこのくらいにして、尋問の幕を明けるか」

そういいながら、大庭が小松に目配せすると、小松は件の羽根箒を手に、礼子の方へとにじり寄る。どうやらくすぐり責めから始める予定らしい。一方、皆川は寿子のものだった赤い表紙のついた可愛らしい手帖を持って寿子と礼子の裸体を半々に觀賞しながら、大庭の傍につっ立っている。いよいよ尋問の開始だ。

「寿子。まず答えてもらおう。ここにあるミユキ——321の1414というのは、誰だね」

「……喫茶店です」

「まず、うそだろう。本当のことを言う約束だったね。おい、小松君！」

「じゃあ、そういうことにしますが、可哀そうだが……」

羽根箒が礼子の白い腋の下をヤンワリと攻める。くすぐり責めは、女体に一点の傷痕も残さない、而も極めて残忍な拷問の一つだ。

勿論、礼子は悲鳴を上げた。

「本当に喫茶店かね？ どうだね、そっちの磔のお嬢さん」

羽根箒は腋の下を一しきり責めると、白い

肌をスルスルと滑って乳房から乳首へ。

青山家の洋間で、うまそうにビールを飲んでいるのは須川幸次だ。その片手には、たった今、叔母の郁子から手渡されたばかりの、一枚の葉書。

「ねえ、おばさん。僕これからちょっと用事があるんで、今日は失礼します」

「アア、まだいいじゃないの？ 夏休みぐらいゆっくり遊んでいけば？ あとでお店の人たちも来るから、久しぶりでやらない？」

「ジャンですか？ いや、今日はちょっと。」

それからね、おばさん。この葉書、僕にくれませんか」

「そう？ いいわよ。でも、幸ちゃんのところへも来るわよ、きつと」

青山家の玄関を出る時、幸次の顔は、やや青ざめて見えた。ビールを一本や二本飲んだからといって調子が狂うほど弱くはない。理由は何にあるようだ。

「妙子。お前、サザンウッドのピアノ、ぜひ行きたいっていったね。どうだい、俺が買ってやろうか、切符……」

幸次の妹の妙子が、目のさめるようなブル

ーのムーニーを着てキッチンから出てきた。幸次とよく似た、目鼻立ちの整った、といって決して冷たい感じのない美しい少女だ。

「ほんと？！ 兄貴はやっぱり話せる」

「ただし、ね」

「そうらきた。だと思った……。なあに？

覚悟はどうに決めてました。さあどうぞ。お兄さまのためなら、どんな憂き目でも」

「本当かい？」

「私、政治家じゃあないから、うそは嫌いよ」

「よし」

幸次は、なぜかいたわるように、妹を見やっていた。均斉のとれた、小麦色の肌だった。幸い、今日は他に誰もいない。

「おタエ。お前、俺がエッチだと思うか？」

「フフ……。なにを言うかと思ったら、愚問もいいとこ、大体、エッチじゃない男なんているの？」

「冗談とちがうんだ。ねえ、おタエ。俺は、そりゃ男だし、エッチでもいい。しかし、少なくとも、異常者でないことは、認めるね」

「なんだか変ね、今日の兄貴は。わかった。寿子さんたち、帰ってきたんでしょ。それでなにかあったのね？」

「そんなことなら、まだいいんだが……。お



前、さっき、どんな辛い目でもって、確かにいったな」

「そりゃ言ったかしのないけど……」

「じゃあ、たのむ。ちょっと協力してほしいんだ。これから俺が、ちょっと気狂じみたことを、お前に対してするけれど、がまんしてくれるかい？」

「暴力？ いやよ、暴力なんて」

「ごめんよ、妙子」

逃げようとする妙子を、やにわに捻じ伏せると、幸次はかねて用意の細紐で、後ろ手に縛り上げる。柔道三段の腕前にはとても敵わず、妙子は忽ち屈伏した。

「ちょっと痛いだろうけれど、このまま、二十分でいい辛抱してくれ。理由は三十分後にきくと話す。だから、がまんしてくれ。俺はしばらくこっちを向いてる」

兄を信じ、純粹に愛してもいる妙子だけにあまりにも意表をついたこのハプニングには完全に参った形だ。

「まさか、私を誘拐する気じゃないでしょ」

「兄貴が妹を誘拐してどうするんだ」

妹の縛られ姿に背を向けながら、幸次は、寿子から叔母にあてた手紙を穴のあくように見つめている。二十分が過ぎた。

「御苦勞様。そこで、もう一つやってもらいたいことがある」

「長かったわ、この二十分。でも、さすがは兄貴。時間は正確ね」

「そりゃそうさ、これでも法医学の卵だから」

右腕だけを自由にしてもらった妙子の前に机と紙とボールペンが置かれる。

「あ、痛い。ほんとに縛るんですもの。ホラ見てよ、こんなに痕がついちゃった。手がしびれて……。ひどいわ」

「わざと、そうしてもらったんだよ。ごめんな。さて妙子。この紙にね。お前がノートのはしに書いたあの文句を書いてくれないか。最悪の……なんとかいう……」

「ああ、マリアン・アンダースンね。常に最悪の事態を予想していれば、時に幸福を感じること出来る。あれね」

縛しめを解かれたばかりの小麦色の腕が、ぎごちなく動いて、世界的黒人女性歌手の座右銘が紙面に再現された。

「ありがとう。本当に御苦勞様。苦しかったろう。もういいよ」

もどかしそうに幸次は妙子を縛しめから全く解放すると、この荒っぽい、あまりにも残

酷な実験の理由を説明する。

「そうなの、すると寿子さんたちは？」

「ウン。俺の推理では、そうなるんだ。それも身の代金目当てではないらしい。それだけにある意味ではかえって扱いにくい。どんな目に遇わされようと、とにかく生きていくければ……。ねえ妙子。この手紙をごらん。この字は、確かにあの子の字だ。しかし、正常な状態で書かれたものじゃない。それと、文面があの子らしくないし、漢字と仮名の使いわけも、いつもと違う」

「詳しいのね、仲々」

「冷かしてるどころの騒ぎじゃないんだよ。さて、どうやって、救い出すかだ」

「警察は？」

「警察に言って、大がかりに捜査をすると、犯人は捕まっても、まずいこともあるんじゃないかな」

「こんな方法は、どう？」

それからずっと、暗くなるまで、兄妹は何やらヒソヒソ相談を続けていた。

バスルームでは、今、水責めが行なわれている。責められているのは姉の寿子だ。

「言ってることが、まちまちなのは、うそだ



という何よりの証拠だ。このしたたか女め」

寿子の黒髪をひっ掴んでいるのは皆川だ。

「これだけは本当です。そんなに疑うなら、東京へ行ってよく調べればいいわ」

すぐ隣の脱衣室では、両の手首と足首を、背筋のあたりで一つにまとめられた礼子が、苦しげにあえいでいる。

「やめてえ！ もう、やめて。姉ちゃんばかりいじめないで！ カンニンして！」

手のあいている小松が、礼子の乳首をピンピンと指先ではじきながら、

「仲々姉ちゃん思いだぜ。しかし、安心しろよ。もう少ししたら、今度はお前の番だからな。楽しみに見物してな」

そのころ。

「お待ち遠様でした」

「研究所の方へ、至急運んでくれということ……どちらへ持っていけば宜しいんです？」

大庭家の玄関に若い衆が二人。一人は青いサン・グラスのやくざ風。もう一人は、浅黒く骨ばった横顔に生々しい傷痕が。応待に出ているのは、おたかばあやだ。

「あんたたち、どこから？」

「東西運輸の下請けで。なんでも、大事な荷

物を運ぶとかで、なるべく丈夫な奴を、三つとおっしゃったんですがね」

「どうも、二つしか都合がつかないんで」

おたかさんは、怪訝そうな顔つきで、

「三つだって？」

「ええ。遠方に至急運びたいからって、こちらの旦那からね」

「とりあえず、二つだけは、どうしても都合しろってわけで。おっつけもう一つ、なるべく早くお届けします」

茶箱が二つ、どきっと運びこまれた。

「その車で運ぶんだね」

「そうなんです。手伝ってくれて、旦那が」

「三つって注文だね？」

「今日は二つだけ。でも、もう一つ、夜にでも……」

「ちょっと待ってくれ。研究室はね」

と教えながら、

「私も、今、忙しいんだよ。ここでちょっと待っててよ。この先まで行ってくるだけ、すぐ帰るから」

「じゃあ、私らは現場の方へ」

「そう。先に行行ってちょうだい」

おたかは、なにかしら落着かない様子。二人の男が地下室の方へ姿を消すと、大きなバ

ッグを一つ抱えてどこかへ行ってしまった。

そこは、旧陸軍の秘密兵器研究所跡といわれてきた。雑木林にかこまれた、草深いこの一角に今、無気味な震動が起こっている。地震？ そうではなさそうだ。やがて、草むらの一角に、直径二米ほどの穴が開き、周囲の土がザザッと吸いこまれるように、滑り落ちて行く。やがて……

その穴から、血と泥にまみれた若い男が、ヨロヨロと、はい出して来た。かけつけたのは南川幸次。男は、血だらけの顔をあげて、あえぐように口ずさむ。

「礼子さんに、伝えてくれ。大庭も、皆川も殺った。俺も、死ぬ。仇討ちは終わった。二人を逃がしたのは、俺だ。俺は刑務所へは行きたくない。妹の仇討ちは、もう、あれで、十分だ。俺は、礼子さんを好きになってしまった。いじめて、いじめぬいて……、好きになった。でも、あの人は、まだ純潔だ。信じられ。礼子さんも、だ。それから、あの力メラも、フィルムも、みんな、残らず、焼けて、灰になった。そういつてくれ。俺は、どうしても、あの二人を、殺す気には、なれなかった。だから、だから、赦してくれ。俺は



もう、死ぬ。だから、だから、赦してくれ、な！」

「君は誰なんだ。名前だけでも、きかせてくれ」

「小松……。小松英介。あんたは？　もしや礼子さんの……」

「ちがう」

幸次は、ほぼ事情を察した上で、はっきり答えた。仲のいい従妹たちをひどいめに遇わせた憎い奴だが、もはや永くはあるまい。

（そうだ）

早速救急車を呼ぼうとしたが、地下室は既に猛火に包まれている。どこかで電話を、そう思ってあたりを見渡した時、上半身裸体の二人の男たちに支えられながら、男もののシャツとスラックスを着けた二人の娘が……。

青いサングラスの男と顔に傷のある男を前に、幸次が何か言いながら、しきりに頭を下げている。二人の男はニヤニヤ笑いながら、幸次の肩を叩いたり、大きな口を開けて笑ったりしている。ちょっと見には、ヤクザの脅迫におびえているあわれな被害者みたいだ。だが、ちよつと彼等の会話を聴いてみよう。「おかげ様で、助かりましたよ、先輩」

「まあ、いいよ。せいぜい、いたわってやるんだな、寿子さんたちを」

「うまいもんだろ。俺もその中、柔道の助教を止めて、どこかの映画会社で、使ってもらおうかな」

「全く、みんな、役者なんですねえ。おどろきましたよ。参った」

「いや、お前の推理はさすがだったよ。やっぱり、法医学とは大したもんだな」

「いやあ。こんなこと、誰だってわかる常識でしょう。御協力、ほんとに感謝します」

おたかばあやは語る。

「刑事さん。私は何をしたというのでしょうか。本当に何も知らなかったのです。あの旦那様や助手さんたちが、あれほど悪い人だったなんて……。あのお嬢さん方にお茶をいれて持っていたのは確かに私です。でも、あのお茶は、旦那様が京都のあるお友達から頂いた上等の品だから、お指図がない限り使わないことになっていました。あの日、お二人がみえた時、『今日のはあの上茶を』と言われて、初めて使ったのです。中味は見たところ、確かにお茶でした。お二人が気分が悪いとおっしゃった時、旦那様と私とで奥の部屋に運び

そのまま休んで頂きました。その後は全く知りません。私が翌朝早く目覚めた時、お二人はいらっしゃいませんでした。

その中、地下室でずっと研究の手伝いをしてもらうから、自分たちと一緒に、食事を運ぶように、なるべくおいしいものを作るように、とそう言われて……。ただ、不思議に思えたのは、毎日かかさず散歩に出られていた旦那様や皆川さん、小松さんが、それからずっと地下室にこもりつきり。勿論、地下には炊事場も風呂場もあり、そこだけで幾人も人が生活出来るようになっていたのです。が……。

なぜ逃げ出したかっておっしゃるのですか。あの茶箱を二つ、変な人たちが運んで来た時です。もしや、あの中に……。お嬢さんたちは殺されたのでは？　とそう思ったのです。しかも、茶箱がもう一つ来るといいますから、ひよつとして私までも……と。

食事を運んでいくと、大抵小松さんが食堂にいて、済んだら知らせるから、とそういうので、地下室の様子は殆ど分かりませんでした。旦那様もお嬢さん方も、まるつきり姿を見せませんし、おかしいといえば、ちよつとおかしかったのですが……」



青山博士の未亡人、郁子さんは語る。

「大庭がうちの娘たちに話したところによれば、主人が昔、大庭をだまして、研究の結果を秘密結社に内緒で売り渡した、というのですが、それはうそです。でなければ、大庭が一人で、そう思いこんでいるので、主人は、悪い奴にだまされて、知らない中に研究レポートを勝手に利用されてしまったのです。そして、『あなたの命が危いから、この金でしばらく身を隠すように』と言われたのです。その時主人は、既に体のあちこちを細菌に冒されていたようです。で、知人が田舎のある温泉場に安い家をつつけてくれ、そこに長いこといました。大庭が使っていた例の家も、地下室も、主人は全く関係ありません。

なぶり殺しにされたという、皆川、小松の妹たちというのは、秘密組織から派遣されたスパイで、大庭側に寝返ったため、仲間の者に捕えられ、リンチを受け、死んだのでしょう。その秘密組織にうちの主人がひそかに加わり、あの者たちを殺すように、と依頼したなどは、全く事実無根です。大庭の足が自由になったのは細菌のためでしょうね。それにも拘らず、よく散歩に出たというのは、あの地方にたくさんある雑草から、ある新薬の

エキスが抽出される可能性について、本人が色々と研究していたことによるものでしょう」

危く罠り殺しにされるところを救われ、東京に帰ってからショックが抜けず、しばらくは半病人のような日々を送っていた寿子と礼子は、夏休みが半分以上終わったころ、やっと元気をとり戻した。

「お姉ちゃん。知ってるの、ママの秘密？あの男が言ってたでしょ。ママが警察へ行ったりすると、かえって不利だって」

「ああ、あれは脅しよ。私たち、昔風に言えば、継子っていうわけだけど、そうでなく、ママとても可愛がってくれたわね。それより、私たちの本当のママは、生まれた私たちが男の子でなかったことで、自分の親たちと気まづくなったという話よ」

「青山の本家では、男の子がほしかったのね？　まるで、昔の殿様みたい」

「そのとおりなの。パパは青山のおじいさまにとっても可愛がられ、ぜひ養子に、と望まれた。でもね……」

「なに？　パパは、ママを愛してはいなかったの？」

「そうじゃないの。まだ、礼子にはわからないわね。ま、いいわ。ママは乳癌で死んだのよ。礼子を生んで間もなく。だから、覚えてないわね、ママの顔……。とっても美しい人だったのよ」

「今のママは？」

「パパがその後、務めていた病院に、しばらく入院していた患者さん。その時パパは、癌の研究に一生を捧げる決意をしていたの。その情熱にはだされて、ママは、今のママよ、病院で事務の手伝いをするようになったの。ママには愛人がいたのだけれど、白血病で死んだそうなの」

「分かったわ」

「パパが死を思いたったのは、医者力を尽くしても、到底治らない難病にかかったことを自覚した時からよ。そこでパパは、自分で自分の体に色々と生体実験を始めたのよ。ママはそんなことは、勿論知らなかったわ。時々、保養先の温泉場まで逢いに行ったの。でも、パパは日増しに衰えて、やがて、死んだわ。それを、うちのママが、少しずつ死ぬようにしむけたなんて、そんな噂が一時は……」

「うそね？」

「勿論、うそよ。その時の事情は伯父さんが



よく知ってるわ」

「わかったわ。それでいいの」

伯父とは即ち、幸次の父、南川病院長、医学博士、南川夏雄である。

20・5世紀の駄々っ子みたいな顔をしてブルドーザーが暴れ廻っている。つい最近まで



# 女性・・・ 乗馬が・・・ 好き

——そこで提案——

馬野鞍之介

て見える。彼女は時々、祈るような眼を秋晴れの空に向けながら、聞きとれないほどの小声でつぶやくのだ。

《Zaisho Shōmetsu》

《Rokkon Shōjo...》

(完)

カット・志羽 利也

さて、では乗馬趣味をたのしむためには、どれくらい必要だろうか。

デパートの、乗馬コーナーで、女性用のばあいを調べてみた。

長グツ 一〇、〇〇〇円以上

乗馬ズボン 五、〇〇〇円ノ

乗馬服 一五、〇〇〇円ノ

帽子 三、〇〇〇円ノ

ムチ 五、〇〇〇円ノ

乗馬クラブ入会金 二〇、〇〇〇円

会費月 一、五〇〇円

乗馬料(一時間) 四〇〇円

右の数字は、現在の、女性乗馬ファンの必要経費だそう。

クラブのレンタルウマは、いや。一頭買いたいというと、これが最低二〇〇万円。

○

乗馬熱が、いちだんとさかんになったようだ。

とくに、若い女性のあいだでは、危険なマ

イカーより安全なウマあそびのほうがケがないだけよいという理由から、ウマをならいだす向きが多くなったという。



要するに、乗馬を楽しむためには、一式でゼイタク言わないでも、とりあえず、

金六万円のカネが必要。

ところが、近来、若い女性の、乗馬熱は急上昇。はじめてウマにのり、ひととおり、乗りこなせるまでには、のべ二十時間は必要というから、右の経費は、さらに大きなものとなる。

あるスポーツ紙が乗馬ファンに、ナゼウマにのるか、をインタビュしたら、若い女性の一人から、

「乗馬の魅力ですか？ それは感情ある動物を自由に動かせるということ……」

との、きわめてサジステイックな回答がえってきたそうだ。

そして、若い女性の乗馬熱は、いまやブームの様相というのは、女性上位時代の、あらわれか。

千葉県下のある乗馬クラブは、ウマが十五頭。会員数は、およそ一〇〇人。

うち、女性は六〇人。

馬場の係員にきくと、ウマの扱い方は、女性のほうが激しく、ムチをうならせるのは、断然若い女性で、ウマたちも女性とみると、

おそれをなして、おとなしくなっちゃうという、ウソのような、はなし。

あるクラブに現われる美貌の女性は、年のころ二十七、八才。スラリとした、スマートな長身で、ウマをせめること二時間。そして、やっと満足した表情で、ウマからおり、シャワーを浴びるという。

彼女、さいきん離婚したとかで、日頃の不満を、ウマを叩くことで、解消するのではないかと、馬場スズメのうわさは、うるさいとか。

「ウマにまたがって、ややきつめの長グツで胴体をしめつけ、ちからいっぱい馬体をたたくときの快感は、なんともいえない。そしてツミもないウマに、手あらく拍車をかける快感もまた――」

とは、馬場でつかまえた、ある女性（デパートの商品券売場勤務）の告白。

初歩のひとは、乗って早々、馬上でシビレてしまい、失神同様で、落馬することもあるとか。だから、指導員たちは、初心者には注意を怠らないそうだ。

トイレの、レディ用の、ダストボックスには、汚れたスポンジが、よくすてられるとい

う。乗馬のさい、からだの保護にとあてたスポンジを、処分に困って、そっと捨ててゆくのであろう。

○

ところで、馬場は、比較的不便なところが多く、一時間、乗馬を楽しむために往復に七八時間というのが、ナヤミだといわれる。

やはりこれでは、かぎられた一部の、余裕のあるファンしか楽しめない、ゼイタクなスポーツということになりそう。

○

そこで提案。

なにも、数万円のカネを投じ、不便な遠方まで出かけなくても、あなたのお宅で、りっぱに乗馬を楽しむ方法があるんです。

男性のなかには、ウマになり、レディにお乗りいただくことをねがうファンは、意外と多いのです（筆者もその一人）

どうぞ、人語のよくわかる紳士的なウマをお召しください。お気に召さなければ、ムチ拍車なんでも喜んで受けます。女王さまのお気に召すまで。

（カット写真は佐野寿氏提供）





懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

## 奇妙な四角関係

花田 恵 惟 子

私が奇クを手にしたのは、ごく最近のこと  
で、何故もっと早く知らなかったのかと悔ん  
でいます。と申しますのは、私が奇クを発見  
するより、もっと、ずっと以前から私達四人  
は、奇妙な夫婦プレイをやっておりましたの  
で、奇クを早く知っていたなら、より充実し  
た生活が続けることが出来たでしょうし、ま  
た適当なお友達とも仲良く出来たことだろう  
と思います。

私は今年二十八才。十八才の頃一年ばかり  
アルサロに勤めたことはありますが、二十一  
才で現在の夫と結婚してから、ずっと人妻と  
して家庭に釘づけになっている生活です。  
夫は私より三つ年上で、三代前からの家業  
である寝具の製造販売をしております。この  
地方で私の家の家号を言いますと、殆どの人  
が「あああれか」と分かってくれる程、知名  
度の高い商売ですので、まあ生活の方は安定  
しております。もっともアルサロ勤めの私を

夫が見染めて両親の反対をおして結婚したと  
きは、一騒動も二騒動もあって、一時はアパ  
ートで別居していたこともありましたが、現  
在では両親と一緒に暮しております。

アパートの一室での若い二人きりの奔放な  
夫婦生活のあと、両親の家へ帰ってからは、  
多人数の共同生活という気苦労から、倦怠期  
も手伝ってか、夫との性生活も何となく気ま  
ずくなっていました。私達の部屋は独立して  
いて一密室にはなっていますが、バス付のマ



ンションの部屋での奔放な生活に比べると何かにつけ雲泥の差でした。

仕事の合間を盗んでは、二人でしめし合わせて抜け出し、ホテルで落ち合ったりしましたが、それもなんとなく、おっくうになりたりしていた頃、倦怠期をふっとばすような甘い生活が訪れたのです。

取引先の知人で夫が特に親しくしている人に津田という方がいるのですが、夫が独身時代、二人して私の勤めているアルサロに遊びによく来たことがあるので、私も顔は知っているのです。私達が結婚して半年ほどしてから、津田さんも結婚しました。式の時にちらっと見た奥さんは、色白のぽちゃぽちゃとしたグラマーで、津田さんはあんなタイプの女性が好きなのかなあと思ったりしました。

聞くところによると、田舎から出てきたばかりのお嬢さんで、両親のすすめによる見合結婚とか言っていました。私達のように熱烈な恋愛の末、親の反対を押し切って無理矢理家出同然の恰好で結婚したのと違って、両親兄弟姉妹や親戚一同の祝福を受けて華やかな結婚式を挙げたのです。

そんなわけで、津田さんとか夫婦と一緒に旅行してみんか、と突然夫から切り出された

ときには、私には一種の抵抗がありました。

水商売を経験したことのある私ですし、このことは津田さんを通じて奥さんに知れていることでしょう。それに私は家の都合で中学校しか行っていませんが、彼女は高校まで出ているそうなのです。彼の両親のお気に入り、田舎までわざわざ足を運んで金のわらじで探してきたというお嫁さん（これは夫からの話をきいたわけですが）だそうです。

いろいろ比較してみると、勝気な私には耐えられそうにないことが、沢山あるみたいで気がすまなかったのです。私が内気な性質だったら当然断っていたでしょうが、津田さん夫婦が大変乗気になっているという夫の言葉に、私も負けん気を出して、二組の夫婦旅行に行く決心をしてしまいました。

山中温泉への一泊旅行ということで、大阪駅から雷鳥一号に乗車しました。当然のことのように、夫と津田さんは並んで腰掛け、ポケットウイスキーをとり出し、プロ野球の話題で口から唾をとばしています。

そんなわけで、私は津田さんの奥さんと並んで席をとりました。淑やかに膝の上に合わせて乗せた色白のふっくらとした掌。どちらかといえば痩せ型で色の黒い私とは、体質や

性質も正反対のようなのです。話し合っているうち、私の彼女に対する警戒心は、すっかり霧散してしまいました。

彼女は素直で控え目な性質なので、私はすっかり気に入ってしまいました。人を疑うというようなことは微塵もなく、初対面の私を心から信用している風なのです。水商売の垢に染まった私の心は、なんととはなしに一応、人を疑ってかかる癖が身についていました。

それに引きかえ、彼女は田舎育ちとはいえ本当に純真なのです。私の話す言葉に、ほうと円らな眼をまるくして驚く様子は、まるで中学生そのままです。

そんなわけで、私達二人は列車が大聖寺駅へ着いた頃には、まるで姉妹のように仲良しになっていました。私はお喋りですので、彼女は専ら聞き役に回っていましたが、私に逆らうというようなことがてんでないのです。

夫とは些細なことで言い争いをすることがよくあります。お互いに意地を張って冷たい戦争になることもありますが、あとでよく考えてみると、どっちでもよいようなことを、互いに反対し合っていることがあります。

しかし、彼女と話し合っていると、そんなことは少しもありません。私の話すことみんな



なが彼女には驚きであるらしく、びっくりして聞いているのです。そんな彼女の聞き上手につられて、つい口をすべらして自分が結婚前、アルサロに勤めていたことを喋ってしまったのです。初耳らしく彼女は驚いた風でしたが軽蔑したような素振りも少しも見せず、それよりも、そんな生活の模様を聞きたいらしく、豊富な話題を持っている私を羨ましくさえ思っているようでした。

大聖寺駅からタクシーで予約してあった白鷺湯という旅館に着きました。シーズンをはなれていたためでしょうか、ホテルはひっそりとしていて、私達四人の外に余りお客もないうでした。川に沿った円形風呂に四人揃って入りました。

当然のように、女二人はお互いの裸体をたしかめ合うように眺めあいました。背は私の方が少し高いのですが、色は彼女の方が私より断然白いのです。洋服を着たときのスタイルには自信のある私ですが、このように裸をあらわに晒してしまうと、バストの盛り上りの乏しいのが、どうも気になって仕方ありません。でも、四人で一緒に入浴したというところが、四人それぞれに抱いていた心のわだかまりというものを解いてしまったように思え

ました。浴衣に着換えて、夕食の膳の前に坐ったとき、共に今夜はゆっくりくつろげるという気持でわくわくしていました。

夫は日本酒、洋酒、ビール、なんでもござれの根っからの酒好きで熱かんの日本酒を湯呑のがぶ飲みで、もうすっかり良い機嫌になっています。津田さんは余り強い方ではないらしく盃に十杯ばかりで真赤になっています。

私は昔鍛えた腕で相当の自信はあるのですが余り酔ってしまったのは、あとの夜の楽しみが十分味わえませんでした、ほどほどにお相手して専らお酌にまわっています。

一番手をやいたのは津田さんの奥さんでした。どうしても飲めないというのを三人がかりで色々にくどいて、一杯また一杯と無理に飲ませました。色白の目もとをほんのりと紅に染めて女の私が見ても色っぽいのです。

男の人って、がぶ飲みする女より、嫌だ嫌だという女に無理強いするのが好きらしいのですね。もっとも女の私でさえ、彼女のような純情なうぶな女なら、無理にでも飲ませたくなってしまう。

そんな彼女を見て、夫は惚々するような目つきで津田さんに向かって「こんな美人で氣だてのよい奥さんを持って幸せだな」としき

りに彼女のことをほめるのです。奥さんに、と名ざしでお酌してもらって夫は悦に入り、最大限の美辞麗句で彼女のことを讃美するのです。自分の妻をほめられて、津田さんもうやな気はしないのは当然でしょう。今度は私のことをほめるのです。

津田さんが夫と二人でアルサロ通いをしていた頃、親友の恋人だから仕方がないと諦めていたが、心の中では私のことが大好きだったと告白したので、おだやかでなくなりまして。控え目で大人しい津田さんは、夫と二人で来ても、いつも仕方なしに来たという恰好で目立たない存在だったので、私が好きだったなんて夢にも考えられませんでした。

酔っぱらった夫が逃げる奥さんの手を掴んだり抱きついたり、そんな乱痴騒ぎが始まると、津田さんも遠慮勝ちながら投げだした私の足の甲を握ってくるのでした。夫が余り奥さんに執心なので、私もいささか意地になって津田さんに抱きつくと、座布団の上に押し倒してキッスしてしまいました。

「そんなに恵惟子が気に入ったんだったら、君達二人でよろしくやったらどうだ」

私にしたらアルサロ時代のお客さんに対するサービスぐらいのつもりで津田さんにキッ



スをしたつもりでしたが、夫にしたら絶好の口実になったのでしょう。いや口実にしてしまったという方がいいかもしれません。

私と津田さんも軽い冗談だと思っていました。それが、夫が少し酔った奥さんを隣の部屋へ抱くようにして連れていったので、酒の上の座興がとんだ座興になってしまい、そして発展していったのです。

口上手の夫のことですから、きっと二人に気をきかして暫く席をはずそう、なんてことを言って連れ出したのでしょう。

部屋は隣合わせの二部屋を予約してありましたのでどちらが誰の部屋ときめてあったわけではありませんが、最初、隣の部屋でくつろいで浴衣に着換えたりしていましたので、自然、女中さんも、この部屋へ夕食を出して呉れたわけです。

夫と奥さんがいなくなると、津田さんもバツが悪くなったのか、お風呂の湯を入れてきます、と行って立ち上りました。私も鏡の前に行って乱れた髪を直していますと、ベルが鳴ってお膳を片づけてもよいかという帳場からの電話です。どうぞお願いします、と返事をした時、津田さんが酔った顔を湯気にはてらせて、いいお湯ですよ、お入りになりませ

んか、と入ってきました。

食膳の後片づけをぼんやり眺めているのも興ざめですので、酔ざましにお風呂に入れてもらうことにしました。入口の反対側に那智石を敷いた廊下があって、洗面所にトイレが向かい合わせにあります。その奥が浴室になっていて扉を開けると湯気がもうもうと一面に立ちこめています。湯量が豊富なのか、ざあざあ湯の流れる音がやかましい位です。

掛かり湯をして飛び込んでみると、岩風呂風にこしらえた湯ぶねも案外の広さです。目が慣れてくると透明な湯に浮かんだ自分の裸身がほんのりと白くすけて見えてきます。私は丸い岩の上に頭をのせると仰向けに身体を伸ばして長々と浮いていました。滝のように岩の間から湯を流しているので音も大きく、そして湯気の立ち方も激しいのでしょう。でも一定のリズムの湯音は、じっとその中に浸っていると、逆に静寂の中に浸っているのと同じような気持になるから不思議です。

夫と奥さんは今頃なにをしているのだろうか。ふとそんなことを考えると、淡い嫉妬のようなものが胸をよぎります。でも、あの大人しい奥さんのことだ、案外かしこまって二人でお茶でも飲んでいるかもしれない。或は

私達のように別々にお風呂へでも入っているかな。そんなことをぼんやり考えていた私は湯気の中から「奥さん、お背中でも流させて下さい」という津田さんの声がしたので、びっくりしてしまいました。

いつの間にか、津田さんも裸になって入ってきていたのです。お風呂に入るのに裸になるのは何の不思議はないのですが、あの控え目な津田さんが、と私は一寸からかってみたような、それでいて酒の席とはいえ、私が好きで好きで仕方がなかったという言葉で、一体どの程度のものか試してみたいような悪戯気の気持にかられました。

「あーら、津田さん、私の身体を流して下さいというの。光栄ですわ」と殊更華やいた言葉で返事して、湯しぶきをあたりに飛ばしながら洗場へ腰を下ろしました。近寄ってみると津田さんはタオルを腰にまいて膝を立てています。何か興奮を押しかくしているような風です。今まで十年近い夫との生活で、何度と一緒に入浴したことはありませんが、ついでに身体を洗ってもらったことなんかありませんでした。知人とはいえ異性の手で身体を洗ってもらったということに興味がありました。彼は背中から洗いはじめました。



お尻の方へタオルを回しているとき、耳元へ口を寄せて「奥さん、ぼくはもう奥さんが好きで、好きで」と頬へキスをしようと思いました。貴方、私の身体を洗ってくれるといったんでしょう。真面目にしないで。そうきつく叱りつけると、彼は面白い程狼狽して、ハ、ハイ、と投げだした私の脚の方へ回って石鹸をいっぱいつけて洗い出すのです。

足の指の一本一本、そして指の股にも石鹸の泡をたっぷり立てて丹念に洗うのです。足の裏のくすぐったさ。私は異性に洗わせていると思っただけでも、うっとりとしてしまうのです。腰掛けているのが堪えられないくらい、全身がだるく、手足の力が抜けてゆくのが自分でもよくわかります。

私は腰掛けをはずすと、それを枕に仰向けに寝てしまいました。熱い湯が何べんも身体中にかかれ、そして、足の指を彼が舐めているような、しゃぶっているような痺れるような気持にうっとりとしていたのは覚えていますが、全身に這いまわる生あったかい、ねばっこい触手の感覚は、夢うつつの中でぼんやりと感じたままでした。

自分で声を出したようにも思います。又手足をばたばたさせたりしたこともあったよう

にも思います。でも、今となつては、夢ともうつつとも、その時のことは思い出せないのです。どの位の時間がたっていたのかも、自分ではわかりません。気がついたとき、私はマットの上に腹這いに寝ていて、彼は私の太股から腰のあたりをマッサージしているところでした。マッサージといっても手でやる以外に彼の唇が私の肌の上を這いまわるのですから、奇妙といえば奇妙でした。

そのあとで熱い湯を掛けられるのが快く、うっとりとしてしまうのです。手足の力が抜けきってしまったて、湯の中へ入る元気もなく彼にバスタオルで拭いてもらおうと、抱えられて部屋へ戻りました。既に蒲団が敷いてあって淡いピンク色のスタンドの灯が、妙にまじめかしく目に映りました。

そうして朝まで、ぐっすり眠ってしまいました。もっとも、寝返りを打ったとき、足からませ合ったり、ぴったりと抱き合ったりキスをしたような覚えがあります。でも、それだけのことで、それ以上のことは、何もありませんでした。しかし、夫婦が互いに奥さんを交換して朝まで別々の部屋で寝てしまったということは、只ならぬことでした。

そんなわけで四人で囲む朝食の膳は、なん

となく面映ゆく、気まずい一ときでした。そこで夫が口を切りました。

夕、君達の部屋へ奥さんと二人で行ったらいないんだよ。それでお風呂かなと思って見に行つて、びっくりしたよ。お熱い最中だったんでね。そういう夫の言葉に、奥さんもうなずいています。結局こういう結果になったのは、私と津田さんの責任だと言いたげなのです。一体、どんなところを見られたのかしら。私には、さっぱり記憶はありません。

帰りの電車の中は、奇妙なカップルに変つてしまいました。私と津田さん、それに奥さんと夫とが並んで坐りました。津田さんが私にチョコレートをすすめてくれると、奥さんは密柑の皮をむいて、一つ一つきれいに掃除して夫の口に入れてやっているのです。それを夫は悦にいつて食べているのを見ると、私には嫉けてきて仕方がないのです。そして、自然、隣の津田さんに対して反抗的になってくるのでした。

その夜、帰宅して私も夫も近頃はない燃え方をしました。お喋りの夫は、奥さんと一緒に寝た夜のことを、細大洩らさず私に話して聞かせるのです。夫が満足したというところは、まあまあ聞いてもおれたのですが、奥さ



んが夫にしがみついて狂態を演じたのかと思うと、胸が煮えかえるようでした。でも、それでいて、もっともっと詳しく知りたいと思うのですから不思議な心理です。

「あんたのことはいいから、それから、奥さんはどうなったの」

せきたてるように夫の自慢話のあとをせがむ私が、案外平気なので、夫は調子にのってとくとくの喋りだすのです。

私は夫と結婚するまで数人の男を知っていました。その中で、夫は一番遅しい方で、それは太いとか長いとかいうのも、まあ影響はあるのですが、一番大切なのは持続性の問題で、夫はその点抜群でした。口もうまいしテクニシャンでもあったのです。そんな夫に奥さんが翻弄されたのかと思うと、憎らしく、いじめてやりたい気持ちになってきます。

そんなことがあって一カ月程して、夫は再び四人と一緒に旅行しようと言い出したのです。津田さん夫婦は大変乗気だから、お前の気持次第で四人の合意になるのだ、と意気込んでいますが、これは夫一人のお膳立てであるかもしれないのです。でも、私も満更嫌でもなかったのです。あれ以来、倦怠期がふっ飛んだようで、あの日の山中温泉でのことに

話が及ぶと、俄然二人共、異様なまでに張りきってしまうのです。

四人のそれぞれ都合のよい日进行调整するには少し時間がかかりました。私と奥さんの生理日はずして、それに夫と津田さんの仕事の都合を考えると、中々よい日が見つからなかったのです。

日がきまると夫が旅行社へ電話して、セツト旅行の中で適当なのがあらと予約しました。往復共全日空で南九州を巡る三泊四日の小旅行です。旅館は夫婦二人きりのデラックスの部屋が予約してあるとのことだったので費用が一人三万五千五百円というのも気にならなかったのです。三泊とも、それぞれ違った温泉の変わった部屋で——と思うと、もうなんとなく胸がわくわくして、その日が待ち遠しいのでした。

この前、山中温泉へ行った時と同じように夫と津田さんは並んで腰掛け、私と奥さんは並んで腰掛けました。空港を飛び立つと爆音のため、少しぐらいの会話は他の人に聞かれる心配がないので、私は奥さんの耳に口を寄せて話しかけました。

夫がどのようにして奥さんを愛撫したか、奥さんがどのようにに激しい反応を示したか、

夫から聞いた話をしてやりました。奥さんは顔を真赤に染めて恥かしそうにうつむいています。私はもっともっと、ひどくいじめてやりたい気持ちにかられます。

「ね、そのとき貴女、どんな気持ちだった？」

私は彼女の口から返事を求めます。でも爆音がひどいので小さな彼女のつぶやきは私に聞こえる筈はありません。私は無理に返事を要求して彼女の太股を抓ります。大きい腰をびったり狭い座席に下ろしていますので逃げることは出来ません。鹿児島飛行場へ着くまで、私は言葉でさんざん彼女をいじめ抜きました。私自身、自分の言葉で興奮していたのかもしれませんが。彼女の態度を見ていると何となく、いじめてみたくなるのです。

夫といいことをした相手の女を憎むという気持ちもたしかにあります。しかし、それ以上に、羞かしがり、当惑し、いても立ってもいられないという彼女の風情に、可愛いらしいじれったさ、可愛いくって憎いといった複雑な気持ちが、私にそんな行動を起こさせるようになったのかも知れません。

宮崎空港から貸切バスで宮崎神宮、平和台を訪れて宮崎観光ホテルに宿泊しました。ホテルのロビーで夫は、この四日間津田さんは



私とコンビになり、奥さんと夫がコンビになることを提案しました。この案には津田さん夫妻は万更でもないようでしたが、私は反対しました。第一日の夜はそれでもよいのですが、二日目は普通の夫婦のコンビ、そして三日目は奥さんと私が同じ部屋で寝るということを提唱しました。いろいろと意見が出ましたが、結局私の案に落着きました。しかし、これが又とんでもない四角関係に発展する端緒になったのですから面白いものです。

宮崎観光ホテルでの一夜は、この南九州旅行の第一夜にふさわしく素晴らしいもので、お酒も程々に切り上げると早々に各自の部屋に引き上げました。部屋割の関係で隣合わせというわけにまいりませんで、二階と三階という風に別々になってしまいましたので、却って落着いた気持でした。

例によって私が先に入浴し、身体が温まったところへ津田さんが現われて私の全身を洗うという儀式から行動が開始される筈でしたが、私が浴槽から上ろうと湯舟のふちに片足を掛けたとき、すでに彼が現われてきたのです。そして、タイルに跪くと私の足の指に口を押し当てて私の肌を伝って流れてくる湯をすすりはじめました。私は足の裏を彼の口の

前につき出して舐めさせました。擦ったい感触が私の全身をぶるぶるとふるわせます。

突然、私の心に狂暴な血がさわぎ出し、彼の顔を足で踏みつけ口の中へ拇指を捻じ込みました。そんなになされても彼はチューチューと如何にもおいしそうに吸い続けるのです。

足の指から始まって、それから小一時間ばかり、彼は口と唇とだけを使って私の全身を浄める作業をさせられました。私が思わず噛みしめた歯の間から嬌声を洩らしたのは、お脛の周りと太股のつけ根でした。殊にお尻と太股の境い目あたりは、舐められている間、鳥肌が立つくらい身ぶるいがするのです。

それからレモンを輪切りにしたので全身をマッサージさせます。掌によるマッサージと熱い目の湯を掛けさせることは私好みで命じた作業でした。うつ伏せになって背中をもませているときなど、ともすれば彼は私のアヌスに対する接吻をやり遂げたいと願うのですが、これは最後の切札のご褒美としてとっておく考えで仲々許さないのです。

さて、再び浴槽へ入ると肩から腕へかけて按摩させるのですが、お湯に浸って筋肉がやわらかくほぐれたところを、ゆっくり時間をかけて揉んでもらうと、うっとりとしてしま

います。お風呂を上ってからの後始末も彼の役目です。バスタオルで包んで足の先に至るまできれいに水気をとって終りです。

私がスプリングのよくきいたベッドの上に素裸のまま仰向けに、ながながと伸びている間、津田さんは大急ぎで入浴をすまして、あわてて私のもとへ帰ってきます。彼は私の許可があるまでベッドへ上ってくることは有されないのです。床に跪いて先ず私の足の甲に接吻をはじめます。如何にも真剣に、そして嬉しそうに足の指を舐めだすと、私は彼のそんな仕草を冷やかに眺めながら、うっとりとした境地を楽しむのです。

何の束縛もないのびやかな大空に裸のまま浮かんたような気持、暑くもなく寒くもなく、まさに快適の境地、あながち入浴の疲れとばかりはいえません。

私は彼に対してベッドに上って全身に対する按摩を命じます。身体中を揉ませながら、私は半眠半醒の状態で、うつらうつらと快い一ときを過ごします。

どの位の時間が経ったでしょうか。ふと気がついて私は枕元の時計を見て驚きました。窓の外はすでに陽が落ちて、入浴時間を加えて、あれから、もう四時間も過ぎているので



す。彼は相変わらず私の脚を揉んでいます。私の目がさめたことに気がついた彼は、真剣な表情で言いました。

「奥さん、お願いがあるのですが」

津田さんの願いというのは私が今までの結婚生活で夫から一度も受けたことのないものでした。足の指をくの字に曲げたり太股で彼の頭を締めつけたりして私は悶えに悶えぬきやがて昇夫してしまいました。そうして、お互いに秘密と秘密とをさらけだしてしまますと、相手の好みのツボというものがわかってしまいますので、一つのリズムのようなものが出来上がってしまいます。

そのあとで私は自分はアヌスに対して、このように鋭敏なのかと自分ながら驚いてしまいました。津田さんとの一夜の嵐のようなやりとりは今までの夫との生活では味わったことのない経験でした。結局、お風呂へは三回も入ったことになりました。その度毎に、私は新しくスタミナを貯えて新しく燃え上り、新しい境地を味わった上、昇天してしまったのです。夫と奥さんは一体どうしているだろうかという心配も、新しい肉体的なよろこびでふっ飛んでしまいました。

その翌日は青島、サボテン公園を訪れフェ

ニックスドライブインで昼食、夜はえびの高原ホテルで宿泊しました。風光明媚なドライブもさることながら、やはり夜が訪れるのがなんとなく楽しみでした。

今夜は私の提案通り、夫と私が一緒の部屋に泊る日なのです。座敷で夫と二人で向かい合うと、何か他人行儀でそれで新鮮な気持ちになるのが不思議です。

「どうだ、津田君は？」

夫は意外に謎めいた想像を含んで私に問いかけます。

「とっても、よかったわ」

私は夫にヤキモチをやかせてやろうと考えて、とつてもというところに特に語気を強めて媚びるように甘えて言いました。もう、それからは床の上に抱き合って転がり、寝物語にお互いの秘密をさらけ出しあいました。

夫も私もお喋りの上に、かくし立て出来ない性分ですので、自慢話のように昨夜の結果を話すのですから、奇妙な夫婦といえばまことに奇妙といえるでしょう。

夫の話によりますと、あの淑やかな奥さんが巧妙な夫のテクニクによって、何度何度も極致感を味わい、今までにこんな良かったことはなかったと涙ながらに話したという

のです。夫はそのときの奥さんの有様を、微に入り細をうがって面白おかしく話すのですが、昨夜の津田さんの様子からすると、あながち夫の自慢話ばかりではないようです。ひょっとすると、奥さんは主人からは十分な満足を与えられていないのかもしれない。

私は津田さんとの一夜のことは、ありのまま夫に話しました。肉体関係がなかったというところは夫も余り信じていないようでしたが、まあ適当に楽しんだらいいじゃないか、と一向に気にしていない風でした。しかし、お互いに浮気の告白をし合ったあとですから二人とも異様と思えるくらいの燃え方をしたのが、おかしい位でした。

ぐったりと蒲団の上にのびながら、津田さん夫婦の方は、どんな話をし、どんな燃え方をしているだろうと想像すると、一度見に行きたいと思わないでもありませんでしたが、疲れが一ぺんに出て、いつの間にかぐっすりと眠ってしまい、目がさめたら硝子窓に陽が高くて慌てて飛び起きました。

第三日はえびの高原ホテルを出発すると霧島神宮から桜島へ、そして城山観光ホテルで昼食でした。目のさめるような南国ムードの風景を満喫して、夜は指宿観光ホテルへ宿泊



しました。

今日は私の希望によって、私と奥さんが同じ部屋に、そして夫と津田さんが男同士で一緒にということにしてみました。

今までの二日は、私達にサービスしてくれたのだから、今夜はゆっくり羽をのばして、大風呂に浸るなり、ボーリングを楽しんだり或はヌードスタジオやバーをハシゴしても、私達二人は大人しく待っています。だから、気兼ねせずに遊んでらっしゃい。そう言っている私は奥さんの手を引っぱるようにして部屋へ連れ込んでしまいました。

と言いますのは、私に或る魂胆があったのです。今夜こそは上品ぶっている奥さんを徹底的にいじめ抜いて夫と共に過ごした夜のことを直接告白させてやろうと思ったのです。

いそいそとホテルを出る夫と津田さんの二人を玄関口のロビーで見送ると、奥さんを誘って婦人大浴場へ行きました。まだ宵の口なので人影もなく、のんびりと身体を洗ったり湯に浮かんだり、シャワーを浴びたりして、温泉へ遊びにきたという気分を満足するまで味わいました。

部屋へ戻ると私は彼女に気づかれぬようにそっとドアの鍵をかけておきました。

私達が出かけている間に、すでに蒲団が敷いてありました。私は掛蒲団を半ばめくって脚だけ挿し込み、三面鏡に向かって化粧直しをしている奥さん呼びました。

「ねえ、こちらへ来て、お話ししない？」

彼女は素直にうなずいて枕元へきて横坐りになりました。私はそんな彼女の上半身を抱えると蒲団の上に押し倒して頬へ頬ずりをしました。湯の匂いと甘酸っぱい体臭、それが化粧品の匂いとミックスして私の鼻をくすぐります。決して美人という顔立ちではないのですが、色白のところへ女盛りでむちむちと盛り上った肌は男好きのする瑞々しさを持っているのです。

「ねえ、私の主人といいことしたんですってねえ。どんなことしたの？」

彼女の耳へ口を寄せて、囁きました。彼女は顔を真赤に染めたまま、無言でいやいやしました。そんな態度は、私をいらいらさせるのです。フランクに、「あんたのご主人ってこれこれだったのよ」と喋りだしたら、却って私の方が尻込みしたかもしれません、なんと下品なことを聞くんだろう、というような素振りを見せられると、意地悪い質問を繰り返して無理にでも喋らせねば心がおさま

らないという気持ちになってくるのです。

「貴女、うちの主人のものを嘗めたんですってね。夫が話していたわよ」

彼女はいいやと叫んで私をはねのけようとしたが、私は膝で彼女の背中を押さえおいて腰紐を解くと両の手首を背中で括ってしまいました。両手の自由がきかず、もう逃げることは出来ないのです。私は安心して彼女を責めることが出来ます。

彼女が足をばたばたさせると、腰紐のなくなった浴衣の前が嫌でもはだけて、まんまるい乳房がむっくりと顔を出しました。それは私のに比べる遥かに肉づきがよく豊かに息づいています。私が夫から聞かされたことを彼女の口から直接喋らせようとしても、一言も話そうとしないのです。

私は彼女の脇腹をくすぐり、内股を抓り、乳房を捻って告白させようとしたが、こんなことになる、とても強情で一筋縄でゆかないのです。とうとう私は最後の手段として彼女のパンティをはぎとろうとしました。この時の彼女の抵抗は必死で、両膝を合わせて容易なことでは脱がさせない気配を示しました。二人共汗みどろになって蒲団の上をころげまわり、やっこのことで両足を抜かせた



ときは、ふうふうと大息を吐いて余りのことに、おかしい位でした。

一旦パンティを脱がされてしまうと、もう彼女は私に抗いませんでした。私はこの一争いで彼女が非常に興奮していることを自分の指先で確かめて、びっくりしました。そんな状態にある自分の身体を私に知られるので必死の抵抗をしたのでしよう。やがて私の執拗な触手に全身をゆだねてしまうと、素直に私の質問に答えるようになりました。そんな言葉のやりとりにも彼女も一緒になって一層心のたかぶりを味わうのでした。

夫が話した通り彼女の感受性は凄いもので私もびっくりする位でした。私は何度も何度も攻めたてて、彼女がぐったりとのびてしまふまで許しませんでした。

この三泊四日の旅行は四人にとって極めて楽しいものでしたが、それ以来、何かと機会がなくて時にふれて温泉マークのホテルへ連れ立って行ったこともありますが、どうも落着けなくて十分満足することが出来ませんでした。こんな時、津田さんが奇クを見つけてきて回覧するようになり、SMとかサド、マゾとかいう言葉も知りました。たしかに津田さんの行為なんかマゾのように思えます。津田

さんに古い号を集めてもらって勉強していますが、もっと早く奇クを知っていたら、より一層の楽しみを味わうことが出来たのと思います。

どなたか私達と同年輩か或は四十代五十代の方でSMプレイについて指導して下さい。友達が出来たら楽しいだろうと思います。ご夫婦か恋人とカップルで参加して下さい。幸いですが、ご都合で一人の方でも結構です。

私だけの好みですとM性のある男性の方の参加を望みたいのですが、津田さんご夫婦がどう言われるかわかりません。夫は冗談のように、そんな男が現われたら僕とお前と二人でいじめてやろうじゃないかと申していますので、私達夫婦の方へ参加される方と津田さん夫婦の方へ参加される方とあってもいいんじゃないかと思ったりしています。

夫の提案では近い中に香港やマカオへ一緒に旅行して、日中は外国の風景を楽しみ、夜は交換プレイを楽しもうと言っています。もし適当な方がありましたら、ご一緒出来たら愉快だろうと思います。やはり旅行に出ると開放的になって、身も心ものびのびとプレイ出来るような気がします。もしM男性の方で私に献身的な奉仕をしてくれる方がありましたら、費用は私が負担しますから香港旅行に参加なさいませんか。私のアイデアなんですけど、夫や津田さん夫婦にも知らせず、一緒に飛行機に乗ってもらうのです。そして香港へ着いてから、偶然逢ったようにして三人に紹介するのです。

最近、夫は津田夫人のことばかり私に話をし次の旅行も彼女とプレイ出来るのを楽しみにしているようです。寝物語で私がそのことを冷やかすと、お前も津田さんとよろしくやればいいじゃないかと言うのです。勿論津田さんとも大いに凄いプレイをやるうと思っていますが、新しい私の相手を見せつけてやって夫の鼻を明かしたいのです。

夫が私に話してきかせてくれた津田夫人とプレイの模様も書いてみたいのですが、平常書くことに慣れていませんし文章も下手なので、またの機会にゆずります。

夫と私の生活は今度の旅行の刺戟で以前にも増して密接になり、奇妙なことを相談したりしています。それは津田さんの奥さんのそのときの写真を撮ることと声を録音することです。次の旅行にはカメラとテープレコーダーを忘れないように持ってゆきましょうと二人はくそ笑んでいます。これは津田さん夫婦



には内緒です。夫はお前もモデルになるんだよ、と言っていますが、言われなくても私も凄い場面を記録してもらおうと張り切っています。夫も現像のことがあるので、とカラーのポラロイドカメラを買ってきて盛んに露出のテストをしているようです。室内でも案外

発色がよいようですので差支えのないものを奇クにも載せてもらおうと思います。夫は花田健一、三十二才、筋肉質でどちらかといえばハンサムです。私は花田恵惟子、二十八才、やや瘦型で小麦色の肌をしています。

津田さんのご主人は津田欣次、三十五才、肥満型で齡よりはふけて見える。内攻的。奥さんは津田順子、二十六才、色白のポチヤポチャ型。肌がきれいで、どちらかといえば小柄。性質は温順でおとなしいです。  
(おわり)

## 白告

# 私の奴隷生活



—カ ッ ト—

東京・赤ちゃん

中 田 裕 史

久しく描いていたマゾの夢がこのごろやっと叶えられて、私はある女王様の膝下に奴隷としてお仕えしていますので、マゾ愛好の方々にその様子の一端をお知らせしたいと思います。

その女王様との出会いは、あるヌードスタ

ジオでしたが、私はそこで恥をしのんで自分の願望のありのままを話しました。ところが意外にも相手は、それほど考えこむことなく私を奴隷にしてくれるのです。私は、はじめて現実に御主人様を持つことができた希望に宇頂天で、思いきった奉仕をしま

した。それからというものの、お互いに都合のよい時間をしめし合わせ、きまった場所に落ち合ったのち近くのホテルにはいって、そこで夢のような時をすごすのが、習慣のようになってしまいました。

私の女王様はさして美人ではありませんが私には『美人でなくてはイヤ』などという気持は、奴隷の分際では希みを抱くことすら、おそれ多いという気がありますので、却って一般的にみてあまり美しくない方が私のマゾ的な気持に合うのです。お年は分かりませんが脂ののったそのお身体から察すると、たぶん二十五、六というところでしょう。上背があり、モデルだけに、おみ脚の線は大へん、きれいです。

ホテルの一室にはいり内側から鍵を下ろしてしまおうと、その時から私はもう完全に一匹



の奴隷。女王様のどんなおいいつけにも従わなければならぬ飼犬になり下がるのです。

「サ、奴隷、お始め」と立ったままで仰言るのを合図に、私はうやうやしく近づいて、まず女王様のお身体から洋服をお脱がせするのです。

ブラジャーまでとると、あとにはパンティだけです。パンティはいつも二枚お召しになっていて、下の一枚はスケスケのナイロンブリーフです。それをクルクルと巻くようにしてお脱がせするときには、奴隷の心は、いつも思わず戦<sup>おの</sup>きます。着衣によって隠されていた女王様の本来のお姿が、真実の気高さをとり戻されて、まぶしく美しく、光り輝くからです。

ナイロンブリーフはその都度、奴隷の私に御下賜になる約束ですので、そのブリーフを押しただいて、ていねいにもと通りにし、こんどは私のはくのです。しかし、いくら約束はそうでも、勝手にはくわけではありませんせん。ちゃんと女王様が「おはき」といわれてからであることはもちろんです。

こうして仕度がすみ、女王様に従って隣の寝室にはいると、そこで早速プレイが始まります。女王様は物なれた調子でベッドに横に

なると、無言で従う奴隷に、目配せでお命じになります。もちろん奴隷の私も心得て、いち早く足下にぬかずいて御奉仕の姿勢をとります。

やがて女王様のお口から「奴隷！ サ、お始め！」というお許しが下されるのを、いまかいまかと待ち兼ねていた私は、マゾの法悦に打ちふるえながら、真心こめて犬の御奉仕を始めます。

疲れて来ても、自分を叱り叱りしながら、小止みなく続ける奉仕は、女王様のお体を清めることですが、手足をお肌に触れることはなく、舌だけの奉仕です。それでも時には女王様から「奴隷！ マッサージをおし！」とお言葉を戴くこともあります。

だいたい二〇分足らずで、いつも女王様のお身体はきれいになり、一回の御奉仕はそれで一旦おわるのですが、一回だけの御奉仕ですむことはむろんありません。お若い女王様は、それを口火として次々とお命じになり、大てい四、五回は、犬同様の御奉仕をするようになります。

それがすみと女王様は、奴隷の私に対して大ていごほうびとしてのおしおきをして下さいます。おしおきは、おみあしの裏を口一杯

に押しつけて下さったり、顔乗りや唾、ネックタールの御下賜など、さまざまです。どれもマゾの私には何よりのごほうびですが、その中でも顔乗りは、私の一番好きなおしおきです。たたみの上に仰向いて横になった私の顔が、気高くも巨大なおヒップに敷かれると、まったくのところ呼吸どころではありませんが、多くの無慈悲な女性たちに翻弄された後に、たわむれにどっしりと腰をおろした女性のヒップで、息の根をとめられてしまいたいというかねての私の夢に、このおしおきほど近いものはなく、私に最大の苦しい喜びを味あわせてくれる、ごほうびなのです。

このおしおきの味ひとつだけでも、もはや私は「私の奴隷生活」を棄てる事ができないのです。

寝室には鏡があり、時折、それに映る世にもあさましい己の姿をみて、はげしい慚愧の念にかられることもあります。一旦マゾの境地に陥ちてしまった私には、今更この世界に訣別する力はありません。はじめてのとき忠誠の誓いのつもりで女王様の全ネクターを、思い切って飲み下しましたが、そのときこの運命はきまってしまったようです。

(おわり)



## 懸賞入選作品

或る記録



## カメレオン

セト・ヨシヤ

由美に再会したのは、三年程前のことである。当時、私はサラリーマン一年生として、或る販売会社の本社詰めをしていた。

由美は高校時代の後輩で、同じテニスボールを打ち合った仲であった。一人娘の由美は私を兄とも恋人とも慕っていた様であるが、私にとって、由美は余りにも子供であった。

高校時代の私は、近所に住む二つ年上の女性に恋慕していたのである。由美のことなど眼中になかった。

だが、再会した時の由美は違っていた。

エキゾチックな彫の深い顔は、ちょっぴりキュートで、感覚的に新しく、コケティッシュな魅力も添えていた。程良く焼いた卵形の顔に、黒目勝ちの瞳が、クルクルと良く動いた。均整のとれた、しなやかな肢体は若さに溢れ、女の中に少女のあどけなさがあった。

齡は、十九。レモンの様な女であった。

私が由美の被虐癖を知ったのは、再会して間もない、夏の終りであった。

映画を観ての帰り――

「遅くなったね。友達、待ってるだろうね」

（由美は大学に通う為に上京し、友人と共同でアパートを借りていた）

「うん、大丈夫。彼女、土曜と日曜は千葉の実家へ帰るの。あたしはお留守番」

「フーン、そう――どうだい、アパート暮らしは。愉しいかい？」

「うん、まあね。時々、帰りたくなるけど、紀子も居るし、愉しいわ」

「紀子さんか。彼女とは親友なんだって？」

「うん、大の仲良しよ」

ふっくらとした頬にエクボを作り明るく言



う。私は意地悪な事を訊いてみたくなった。  
「そう、そんなに仲がいいの。君達、もしかすると、Sじゃないの？」

「エスって？」

Sと云う意味を知ってか知らずか、よく動く眼で私を覗き込む。

「またまた、トトぶって。レズビアンのことじゃないか」

——女の場合、就中、若い娘は少女期に逆戻りするの早い。少女期、つまり同性愛の時期にである。お目覚め前のジャリどもは皆、同性愛的傾向にある。女はその期間が少々長い。中には目覚めぬヤツも居る。中学や高校の女のコが、よく、お手々つないで野道を行ったりするのは、その名残りなんだ。

以上が私の言い分であった。

「やだ。あたし達、そんな仲じゃないわよ」

「じゃ、あたし達は、どんな仲だい？」

益々シニカルな質問を投げる。

「いやッ、意地悪ね。あたし達、ただの親友よ。セトさんてサディストなのね」

私は、これを待っていた。この言葉が出るのは、その方に幾分か興味がある証拠だ。勿論、私の、由美に対するこれ迄の観察が正しければである。

「ああ、僕はサディストさ。特に君の様なコにはね。もしかすると送り狼になって、今にも君を凌辱するかも」

故意と凄んだ声で言いながら、由美の肩に手をかけた。

由美は一瞬、ギクリと身を慄わせたが、

「いいわ。セトさんならユミ、我慢する」

と神妙な顔つきで言う。私はたじろいだ。

△この言葉は由美のM性から出たものか？

ただの恋愛的感情から来たものか？▽

「ハハハ、ウソだ、ウソだ。冗談だよ」

私は自分を嘲笑った。

由美は余りに、あどけなかった——

由美のアパートはS駅のすぐ傍にあった。

「じゃ、これで帰るよ。おやすみ」

私は頗る紳士であった。

が、由美は意外にも、腕を解かなかった。

「あら、寄ってかないの？」

「ン——もう九時だよ。いいのかい？」

「いいわよ、誰も居ないもん。おいしーいインスタント・コーヒー、飲ませて上げる」

無邪気に笑って、手を引いた。

アパートは、鉄筋三階建の豪華なものだった。一フロアに七つの世帯が棲んでいる。

由美達の巢は二階ツキアタリにあった。

部屋は和洋折衷の造りで、四畳半程の洋間に、硝子障子の間仕切りを隔てた六畳の和室があった。勿論、流し場と洗面所もついている。浴室が無いのが欠点だが、学生には過ぎた住居であった。

「へえ。胫っ齧りの分際で豪華な暮らし向きをしてんだなあ」

部屋の中を動物園の熊の如く歩き、訊くともなしに言った。

「うん。部屋代、高いけど二人だからたいしたことないわよ」

由美は自慢のコーヒーを作っていた。

「いや家具のことさ。まるで嫁入り道具一式と云う感じじゃないの」

「でも、それ殆ど、紀子が持って来たのよ。

あたしは実家が遠いから必要なもの以外、持って来てないわ」

「それにしてもスゲエや」

オーバーに言って、ベッドにドテーンと身を投げた。女の芳香が鼻をくすぐる。乙女の甘い香りだった。

「さあ、出来たわ。おいしいわよ」

卓に湯気の昇る器を置き、ステレオをかけた。タレガのハアランブラ宮殿の想い出が流れる。けだるいトレモロが、二人に一時の



ノスタルジアを呼んだ。

「へえ、ユミちゃん案外、ロマンチストなんだねえ」

「ううん、これは特別よ。それにあたし、ギター習ってんの」

そう言っ、壁に掛かったギターを、しゃくった。

「フーン。共喰いしてんのか」

訳の分からぬコトを言いながら、由美の前に腰掛ける。

「トモグイ？」

茶の液を吸っていた娘が長い睫を上げた。

「ン、うん。いや、ギターとかヴァイオリンと云う楽器は本来、男のものだからね」

「どうして？」

「どうしてって、そうだろ、指で撫で廻して音を出すんだからね。それに専門的には、弾くとは言わず、泣かすって言うんだ」

馬鹿げた理論に、娘は嘲笑って、

「ほら、又、冗談が始まった」

と言っ、又ぞろ拙いコーヒーを吸る。

私はムキになった。

「冗談なもんか。じゃ、あの形をよくごらん誰かに似てると思わないかい？」

「誰って？——何ともないわ」

「オトボケなさるな由美さん。ギター習ってんなら各部の名称ぐらい知ってんだろ。先ず、ヘッドが有って、それからネックと肩が有って、ウエストとヒップ。おまけに大きな穴まであいてらあ」

由美は壁のギターを、しばらく眺めていたが、耳元を心持ち染めて、

「いや、いやだわ。セトさんてエッチね、変なコトばかり言うんだもん。いやッ」

と、私の眼を避ける様にしてコーヒーを吸った。私は拙い箸のコーヒーが、何時の間にか、旨くなっていた。

「さーて、嫌われた処で退散するか」

まるで心に無いコトを言う。

「あら、もう帰るの？」

「あら帰るのって、帰りますよ。家じゃ女房と十五を頭に五人のガキが待ってんだもん」  
「フフフ、セトさんて可笑しな人ね。でも、あたし、そんなセトさん大好きよ」

「今度は大好きか、あたしやどうすりゃいいの、半分だけ帰る訳にもゆかないし。ほんじやマ、今日んところは女房に泣いて貰うか」  
言いながら、和室に入り、ゴロリと横になった。

流し場で水の音がしていた。

私は眼を閉じ、再び由美のM性について、思いを巡らす。

——一人っ子の場合、自慢に育つので、S性を持つと思われ勝ちだが、実はMになるケースが多い。由美が、そうだと言うのではないが、由美には、今迄にそう云うフシが多く見えた。

だが、皆、漠としていて何等の確証は無かった。

由美が濡れた手で、私の頬を撫でた。

「フフフ、何、考えてるの？」

「ン、ユミちゃんのコトさ。君、今でもテニス、やってんの？」

私は確証を掴む為、一計を案じた。

「うん、やってるわ」

「君はスポーツ万能だからね」

——女心に、お世辞を使う。

「それ程でもないけど大抵のコト出来るわ」

「でも、もう駄目だろ。軀が言うコト利かないだろ」

——持ち上げて置いて、いきなり引き落とす。敵は案の定、

「ユミ、まだ十九よ。お婆ちゃんみたいに言わないでッ」

娘は興奮すると、自分のコトを、ユミと呼



んだ。

「けど、君の十九は、もうすぐハタチだろ。女は十八を過ぎれば、ガタが来るさ」

——自尊心を傷つける。

「そんなコトないわよ、オリンピックの選手だって殆どの人、ハタチを過ぎてるわ。チャフラフスカだって、いいお婆ちゃんよ」

「ハハハ、全くだ。けど、チャフラフスカと比較するとこんなぞ、ちよいとしたもんだ」

私は起き上がり、大きく伸びをして、

「ほんじゃ、柔軟テストをしてやろうか。僕の真似が出来ればOKだ」

と言って、手を前に組み、その中へ両足を放り込んだ。

「何だ、簡単じゃない」

由美は私を真似ようとしたが、スカートをはいているのに気付き、

「意地悪ね。そんなコト出来ないわ」

と、可愛く睨む。私は欠伸<sup>あくび</sup>を作り、

「な、出来ないだろ。これは易しそうで仲々難かしいんだ。ユミちゃんには、ちよいと無理だったな」

と、わざと投げやりに言った。

しくじっても損のない賭だった。

「そうじゃないわ。だって——」

幼い顔を桜にして言う。

私は策謀を軌道に乗せた。

「スカートなんか気にすることないよ。ユミちゃんのお尻は、テニスで先刻、御承知さ」

「やだ。セトさんて、そんなトコばかり見たのね、いやだわ——でも、あれは仕方ないわ。それにユミ、もう子供じゃないもの」

「あッそ。で、何時から大人になったのよ」

「何時からって——」

「マ、それはゆっくり訊くとして、今でもテニスは、やってんだろ？」

「うん、やってる」

「お尻を出して——」

「け、けど、そんな時は別よ。女の羞らいつて言うのかなあ——」

「ヘッ。何とか、かんとか言っちゃって」

畳にひっくり返り、下手な口笛を吹いた。

だが、由美は可愛い女だった。

「やるわ。やればいいんでしょ。でも、見てちゃあ、いやよ」

と、長い脚を投げ出した。

半ば、諦めていた私であるが、由美の稚氣に感激し、再び、むっくり起き上がる。

「見てなきゃ、分かんないじゃないか」

「でも——羞かしいわ」

長々と投げ出した脚を見つめ、朱いフレヤスカートの裾を、しきりに引っ張る。

《作戦通りになった！》

「よし。じゃ、見ないよ」

と言って、ポケットからハンカチを取り出し、クルクルと捻じった。

由美はケゲンなマナコで、私を見ていた。

《一人っ子とは、こんなものか》

「両手の拇指を出してごらん」

「どうするの？」

「うん。ちよっとね」

桜貝を二つ並べて、軽く括り合わせた。

「さあ、やってごらん」

「でもォー」

「大丈夫、見やしないさ」

背を向けて、ライターを鳴らした。

「何だ、こんなの——簡単じゃない」

自慢そうに振り返り、舌を出す。

《当たり前だ、五十のパバアでも出来らあ》

と、思いながらも、

「どれどれ、成る程、流石はユミちゃん。蛙の小便、たいしたもんだ」

と、由美をジロジロ見廻した。由美は両脚を揃え、やや膝立ての姿勢で私を見上げた。

深い湖の色をした瞳が、思いなしに潤んで



見える。私は余りの明眸に、氣遅れがした。

確証を掴みたい氣持と、乙女の感情を損ねたくないと言う心が、しばし葛藤を続ける。

「ね、出来たでしょ。もう解いて」

由美の声が、ピストンに点火した。

「解いてって、自分で脚を抜けよ」

「いや、いや、見てんだもん」

艶やかな膝小僧を揉みながら、甘ったれた声を出す。私は不意に、由美の賢そうな額に中指を当てて力を加えた。キャッ！と叫んで由美の軀が半転し、朱のスカートが、ハラリとめくられて、真っ白いショーツが覗いた。

「いや！ バカ、バカ、セトさんのバカ」

揃えた脚をバタつかせて叫ぶ。

拇指は抜こうと思えば、すぐ抜ける筈だ。

「ほらほら、そんなに脚を振ると、余計、可愛いお尻が覗くよ」

言いながら、由美を起こし、ハンカチを解いた。由美は紅い顔に二重の臉を軽く閉じ、私の胸に居た。

「ご免ね、悪戯する積りじゃなかったけど、ユミちゃんが、あんまり可愛いので、つい。ご免よ、痛かったかい？」

拇指を撫でながら覗き込む。由美は柔らかな睫を上げて、ちょっと睨んだが、

「ううん、平気」

と、いとも気軽に吐き出した。

「怒ってないね？」

「怒ってなんかいないわ。セトさん、悪戯するの分かってたもん」

△ヤレヤレ、骨を折らせて▽

「ユミちゃん、マゾヒストなんだね」

ハッキリ言っちゃった。

由美は私の立っている膝に、両手を重ね、その上に頬を乗せて、つぶやく様に、

「そうかも知れないな——」

△据え膳、食わぬは、何とやら！▽

由美の肩に手を廻し、ほんのり染まった耳に息を吐きかけながら、

「どうだい、縛ってやろうか？」

と、小さく言った。

由美は、バツと顔を上げ、私をまじまじと見つめていたが、思いきった様に、

「うん、縛ってもいい」

と、言い放った。

私は欣喜雀躍の体で、辺りを物色したが、綺麗に片付いた部屋には糸屑も無い。

「縛ると言っても、何も無いんじゃない？」

「ううん、有るわよ」

由美は小さな押入に頭を突っ込み、豊かな

オイドを向けて、ゴソゴソ引っ掻き廻していたが、少し汚れたロープの束を取り出した。

「ユミちゃん、それは？」

「フフーン、これ紀子のなの」

「君達——そうか、そうか、そうだったの」

「でもユミ、男のの方が好き」

「男の方がって、じゃ、その経験あんの？」

少し熱が醒めて来た。私は相手の肉体を損傷する様な趣味は持たない。

「やーね、変なコト言わないでッ。ユミは、セトさんのコト言ってるのよ」

再び上昇して来た。

「ご免、ご免。ついついゲスのカン格里で」

「ユミの、こんなコト知ってるのは、紀子とセトさんだけよ」

「分かった分かった。そうムキになるなよ」

私は立ち上がり、つつましく坐している由美の背に回り「さあ、いいかい？」と覗き込んだ。由美は睫を伏せ、染まった耳の附根から繊細なスロープを描いた顎を引く。

私は手を伸ばし、由美の腕を奪う。セシル・カットの髪と広くない肩が、ピクリと動いて、そのまま、小さく慄え出した。

「怖いかい？」

「ン、うん——ちよっぴり」



「怖いことはないよ。僕は優しいからね」

つまらぬ台詞を吐きながら、慄える手首を重ね上げ、やんわりと縄をかけた。手首だけにしようと思ったが、縄を余すのが惜しく、「胸もいいかい?」と言って、返事を待たずに、フリルのついた白ブラウスの丘を高くした。長い縄は未だ余ったが、この辺が潮時だろうと涙を呑む。顔を伏せて、きっちり正座している娘の周りを一巡してから、正面に腰をおろした。娘は顔を伏せた俤である。

△この程度の縄なら、小学校の学芸会だ▽

と思い、少し気分を出す。

「ユミ、顔を上げるんだ」

凄んで見せた。由美は上気した顔を上げ、私を見る。惚れた欲目か、由美の瞳は何時見ても潤んで見えた。私は沈黙して凝視する。

由美が視線を外すのは定理。

私は畳に横臥して、由美の顔を覗き込み、「可愛いねユミちゃん。君のお尻は何となく知ってんだけど、オッパイは余り知らないんだ。でも、こうして見ると随分でっかいんだなあ。ねえ、ユミちゃん」

と言って、縄の間からとび出た丘陵の、大体この辺だろうと思う部分を指先に力を込めて弾き上げた。紅の頬で私の眼を外していた

娘は、ビクッと身を慄わせ、

「いやッ! かにんしてえ」

と、私から離れようと、にじる。

「堪忍してって、僕は何もしてないよ。ほら、そんなに動くからスカートが乱れて」言いながら、弾ける様な太腿を押え、わざと顔を低くしてスカートをズリ上げた。

「見えた見えた! 絶景かな、ユミちゃん」

「いやッ! バカバカ、エッチ!」

由美は私の手を払い、腰を上げた。

△こんな羞じらうとは!▽

「おや、遁げる積りかい。よーし」

起ち上り、慄える娘を捕える。

娘は今にも泣き出さんばかりに、

「いやあ! もう、ゆるしてー」

と、深いマナコで見つめる。

私は再び、右顧左眄する。

△このコはホントに嫌なのか——えい、面倒だ、畳んじゃえ▽

「大人しくしろ! 此処には僕と君しか居ないんだ。逆らわない方が身の為だよ」

縄目の娘に、大の男がイカサナイ脅迫だ。

「だ、だって——」

「だって、あさってもない!」

灯を暗くし、慄える娘を畳に伏せ、両足首

を押え込んだ。そろそろ啜り上げる頃だと思っっていると、嗚咽が聴けた。

「ご免ね、ユミちゃん」

由美は私を撥ねのけようと、身を揉み黄色く喚くが、私はその時、聲者であった。

△重ねて、このアパートは設備がよろしい。音の洩れる懸念なし▽

私の手は、しなやかな、小麦色に輝ける太腿を撫でながらスカートを押し上げて行った。

小麦色の膚が色褪<sup>あせ</sup>た頃、頬を畳に、咽<sup>むせ</sup>んでいる由美を見た。縄のかかった背が、吃逆<sup>しゃく</sup>っている。

「ご免よ、由美」

抵抗叶わぬ娘に、手前勝手な許しを乞い、緋のスカートをシュミーズもろとも、一気にめくり上げた。娘の脚に力が入り、洋間の洩れ灯に純白のショーツが映えた。

「かにんして、お、お願い——」

「うるさい! 静かにしろ」

喚きが、嗚咽に変わる。

由美は美しかった。私は純白の豊かな双丘を、ただうっとり凝視するのみであった。

無垢の輝光は、私の汚れた手を撥ね返す力を秘めていた。私は、手を触れた瞬間、粉々に砕け散った私を思いながら、慄える手で、



恐る恐る触れてみた。

「ダメ！ いやー！」

由美の悲鳴が私の嗜虐心を呼び醒ました。

私の手は、柔膚を掴んでいた。

「いや、いや！ かにんしてー」

由美は喚き悶えるが、それに正比して、私の炎は高く昇った。

指先が薄い布越しに、溪谷を流れ始める。

「お、お願い、ゆるして。あ、あー」

下流に流れ着くと、滝を上り再び下った。

薄いパンティに包まれたなだらかな双丘が、高い連山に変わった。

「へえ、知らなかったなあ、ユミちゃんのお尻、こういうの」

由美は臉を伏せて長い睫を濡らし、乱れた髪を小刻みに慄わせていた。腰の辺りに重ねられた手がスカートを被り、ピクピク動いている。

「さあ、もう許してやろうね」

私は大いに不満足であったが、いきなり片付けるのも拙かろうと思い、由美を許した。

由美は濡れた眼を伏せ、紅を塗った様な唇を小さく開き、透き通る程に白い齒を覗かせていた。化粧っ気の無い肌理細やかな頬が、畳の目を吸い取っていた。私はその頬を撫で

ながら、柔らかい唇を吸った。そして、その夜は、後髪を引かれながらも、ドアを押したのである――

しばらく、由美と逢わなかった。

△余り、慣れ合いになるのも面白くない▽  
と、思ったからである。

ひと月経た、土曜日の夜、私は再び、アパートを訪ねた。その夜は雨模様で、風も少し吹いていた。

ツキアタリの部屋には、錠がおりていなかった。

△不用心なヤツだ▽

と思いながら、ズカズカ入って行く。

内ドアを押すと、見覚えの顔があった。

「あら！ どうしたの、突然」

「うん、今、出張からの帰りなんだ。寮へ帰るの億却だから、ちよいと泊めて貰おうと思っただけ。いいだろう？」

濡れたコートを脱ぎながら、反応を窺う。無論、出張なんて、ウソッパチである。バッグは持っていたが、およそ縁なきモノが詰まっていた。

「ウーン。まあ、いいでしょ。その代り一泊につき五千円よ」

「へえ、この辺にはそんな安いのが居るの」  
「ン――どう言うこと？」

「いや、何、つまらん独り言でさ」

私は言って、又、ベッドに身を投げた。

「何してたんだ？」

「うん、ちょっとギターの練習をね」

言いながら、弾き始めた。

私はしばらく下手なギターを聴かされた。

△この女はスポーツは、よく出来るが、細かいコトには向かない女だ▽

「どれ、借してみな」

ギターを取り上げ、フラメンコのマラゲニヤスを乱暴に弾いた。

「フーン、流石ね」

「僕のギターはユミちゃんが女になる前からのもんだからね」

「又、始まった。ねえね、ユミの知ってる曲弾いてえ」

よく動く眼を輝かせて言う。

△これだから女子と子供はイヤなんだ。その時々で、ひとつコトしか頭に置かない▽

三連音の流れる様な曲を弾いた。

「うん、うん、知ってる、知ってる。それ、禁じられた遊びでしょ」

子供の様に身を弾ませる。



私は何とはなく、逆らってみたくなる。

「違うんだなあ。これはスペイン民謡の、愛のロマンスってんだ。禁じられた遊びと云うのは、映画の題名さ」

由美は「ヘーン」と言って、丸い小さいテーブルに両肘をつき、顎を乗せて、私の指を無心に見ている。

△オレはお前にギターを聴かせてんじゃねえぞ。お前を虐める為の指慣らしをしてんだ▽

ウォーミング・アップは終わった。

「ねえ、ね、もっと何か弾いて」

△黙って諾いてたら、朝になる▽

「ああ、又、何時かね。それよりユミ、僕が来た訳は、分かってんだろな」

大上段に振りかぶり、ストレートに打ち込んだ。と、今迄、無邪気だった娘が急に大人しくなり、顔を伏せて小さく頷いた。

△では、早速ながら▽

私はギターを放り出し、卓を脇へ押した。

「ユミちゃんのベッドは、どっち？」

由美は部屋の隅で小さくなって、和室のベッドを指さした。

「それなら、そうと何故、最初から」

自分の拙さを棚に上げて和室に入り、余り値段の高くなさそうなベッドを部屋の真ん中

に出し、不安に戦き、身を固くして慄えている娘を抱き上げ、ベッドに投げ入れた。

「いいかユミ。今日は、甘くはないぞ」

ベッドの中で身を縮めている娘を威し、バッグからロープの束を取り出して、娘の腕を奪い、手首を搦めて縄尻をベッドの枠に通して、反対側の手首を縛る。

「痛いわ。もっと、そっとして」

「よし、よし、分かった」

と言いながら、ギリギリ縛り、脚も同様にして、ベッドの上に四肢を一杯に広げて、X字型に緊束した。

由美は淡い紺地のワンピースを着ていた。

中央に白っぽいボルト・ストライプの通った粋なものだった。

だが、今は無残にめくれ上がり、ワンピースとしての役は、全く損なわれ、露になった小麦色に輝く、はちきれそうな太腿の奥から真っ白いパンティが、顔を出していた。

「ユミちゃん、勇ましいんだなあ。何時もこんな恰好して寝てんのかい？」

「いやッ。痛いわ、ね、少し縄を弛めて」

「駄目だ。しばらくは、この俤にしておろ」

邪慳に言って、バッグの中から、用意して来た鉄を取り出し、由美の顔の上で、チョッ

キン、チョッキン打ち鳴らしながら、

「いいかいユミ。ユミの着てるものは、みんな僕が貰うからね。その代り、アトで好きな物買ってやるから勘弁しなよ」

と、安月給が大口を叩くと、縄の痛みを忍び、睫を慄わせていた娘が、いきなり、

「ダメ！ ユミ、裸になんかならないわよ」

と、柳眉を逆立て、けわしく睨みつける。

「ああ、ならなくていい。僕がならすから」

「いや、いや！ 絶対に脱がないから」

「マ、好きな様に喚いてな」

△喚いてしまえば、大人しくなるだろう▽

と思いつくワンプイスの襟に鉄を入れた。

面倒なのでスリッパも一緒に挟み込んだ。

「いやあ！ お願い。裸になんかしないで」

「うるさい！ 裸にするのは、女の責めのプロローグだ。それくらい分かってるだろ」

「いや、いや、いや！」

娘は本調子で泣き、二上がりで喚く。

私は器用に手を動かした。首から股までを一直線に裂いた鉄は、再び戻って、左右の肩へ走り抜け、全ての支えを断ち切った。

「そいじゃ、アネさん。ボチボチ御開帳とい

きやすか。ようござんすね」

「お、お願い！ かんにんして——」



長い睫に涙を溜め、激しく首を振る。私は両手を伸ばし、思いつき左右に開いた。

「いやーッ！」

悲鳴と共に、白晳の膚が現われた。手脚は日焼けしているが、普断、隠れた処は天花の白だった。私は、まばゆい白月の光を浴びながら、ブラジャーに鉄を入れる。

「許してッ。もうこれで、かんにんして！」

しなやかな手脚の筋肉をピンと張り、利かぬ身を慄わせて叫ぶ。が、私は相手になる閑が無かった。鉄の手に力を入れると、ポッカリと双つの丘が浮かび上がった。仰臥の姿勢なので流れてはいるが、美事な丘陵だった。

乳首の間隔は狭く、位置も高い処にある。

鎖骨の根元から、おもむろに、肉感的な高まりを見せた双つの丘陵は、長く深い溪谷を覗かせ、息苦しく喘いでいた。私は悩ましく揺れる双丘を眺め乍ら鉄を滑り降ろす。

「いやッ！ それだけは堪忍して。お願い！ それだけは許してえ——あ、あッ！」

ベッドの女は必死に身を揉むが、詮ないことだった。四肢はガッチリと固定してある。

悶えれば悶える程、ロープに虐められ、睫の間から涙が滲む。仰臥の涙は頬を伝わず、皮肉にも耳へ流れた。私はハンカチを出して

涙を拭ってやり、そのまま口へ押し込んだ。「いくら泣いても、やめないからね。それでも、しゃぶって辛抱しなさい」

ハンカチは吐き出そうと思えば、何時でも出来た。が、娘はいじらしくも、言われた通り、噛みしめて、啼泣した。

カラフルな花柄刺繍の入った、デザインシヨートが慄えていた。

私は裁つのが惜しくなり、むっちりと艶やかな内腿に深く喰い込んで包んでいる布地をそっと撫でてみた。若い弾力ある四肢がピンと張り、可愛い呻きが洩れる。

娘は、陽を浴びた水蓮の露の如く、睫に溜めた涙を、慄わせ、光らせていた。

私は思いきって最後の鉄を通し煙草を啜えてベッドを巡った。肌理細かな白い膚と小麦色の膚が鮮麗なコントラストを見せていた。

テニスで鍛えた若い肢体は程良くしまり、触れれば弾き返す様な弾力を持ち、素晴らしい曲線を描いている。

私は紫煙を吐きながら、何度も巡った。

「いやッ、見ないで！ お願い、解いて」

娘が羞らい、ハンカチを吐き出して喚き始めた。私は煙草をゆっくり灰にしてから、娘の顔を覗き込み、優しく言った。

「さあ、ユミちゃん。どう云う風に、虐めて欲しいの？」

娘は眼を伏せ、ピンクの頬を振りながら、

「いやあ、もう許してえ」

と、漸く、鼻声を出し始めた。

私は自責の念から解かれ、

「御要望が無ければ仕方ない。行き当りばったり、慢然と、アト・ランダムに騷ろうか」と、ベッドに這い上がり、先ず常識的な処から始めた。

「ゆ、ゆるして、あッ、あーあ——」

生の娘は顔を振り振り、悶え、呻く。

両の手は、はちきれそうな、重い、弾力ある肉塊を包み、十本の指は瞬時も休まず屈伸し、唇は滑らかな若膚を流れた。朱くておいしそうな木の実がふるえる。

「お——お願い、あ、あ——」

両手と唇は、ジグザグに流れて行った。若い芳香が、身を包み込んだ。

形の良い落とし穴で、道草を食う。

「あッあ、ゆるして。ね、おねが、あ——」

ついでに後の洞窟も探険したくなった。

途端！ 由美の腰がバウンドした。

「いやッ。そんな、そんなこと——あッあ」  
 ≪こいつ、後ろのほうが大事なのか！≫



瓢箪から駒を得た私は、一流の色事師になった気分で二本目を点け、旨い煙を吸い込んだ。

「もう許して。ね、お願い。ユミを解いて」

晒しの女は涙を滲ませ、身を慄わせて訴えるが、私は煙を吹きつけ、黙秘を続けた。

女は、くどく叫んだ。

暢気な私も、些少、苛立って来た。

「うるさいなあ。ユミは、もうみーんな晒け出してんだぜ。今更、騒いだ処で、ちよっくら遅かりし、ユラの旦那よ」

「いやッ。見ないで！——手が痛いわ。ね、縄を解いて、お願い——あッあ！——」

手を見ると充血して色が変わっていた。一寸きつ過ぎたかな、と思ったが、弛めるのも面倒だ。怒鳴りつける方が早かった。

「うるせえ！ 静かにしろ。余りしつこく言うと、本当に痛い目をみるぞ！」

不意の喝破に、娘は朱の頬をベッドに擦りつける様にして、

「だって——ねえ、ユミ、本当に——本当に痛いんだもん——」

と、子供の様にしゃくり上げる。

「ご免、ご免。僕が悪かった」

私は仕方なく縄を弛めた。相当きつかった

らしく、弛める都度、呻きが洩れた。

由美は心持ちでも身動き出来る事に、平静を取り戻したが、却って、それが羞らいを増した。

「何か着せて、お願い。いや！ 見ないで」

「見ないでっても、既に見学終了済みだぜ。」

——ホラ、これが、さっき間違って切ったユミの大事なもの」

パンティの切れっ端を掴んで、鼻先に突きつけると、真っ赤な顔を振り振り、

「バカ、バカ、バカ、セトさんのバカ！」

と言って、囁り始めた。私は三度目のライターを鳴らし、コーヒークップに灰を落としてながら、輝くばかりの裸身を眺めた。

乱れた髪を憐れせ、肉感的な、白い豊かな双丘を悩ましくうねらせて咽び泣いている。

煙に飽いた私は、エチル・アルコールを取り出し、太い絵筆にたっぷり含ませて、

「さあ、ユミ。いい気分にしてやろうね」

と、言いながら、咽喉元から一直線に走らせた。娘は全身をビクッと慄かせ、

「いやッ、あ、あ、ゆるして——」

と、小さく喚いた。アルコールが体温を奪いながら、速かに蒸発して行く。

「どうだい、ユミちゃん。スーッとして、ゴ

キゲンだろ？」

「いやッ、もう、かんにんしてえ」

△フン、嬉しいクセに▽

種々、太さの異った筆は、耳の中から爪の間まで、処構わず這い廻った。

「ゆ、ゆるして——かんにんして、ああー」

娘は尽ならぬ身を揉み、呻き、悶える。

「よし、よし、もう終わったよ」

と言いつつも、可愛い臍を、しつこい程念入りに掃除する。

「どうだ、ユミ。いい気分だったろ？」

意地悪な眼つきで、涙の顔を覗き込んで訊ねてみた。由美は光った睫をシバタキながら潤んだ瞳で、羞かしそうに頷いた。

「そうか、素直でよろしい！ じゃ、ひと先ずリンカーンさんは、奴隷解放とゆくか」

自由になった娘は、ベッドの上で身を縮め無残に裂かれたワンピースで、軀を包もうとする。意地悪い私は、

「駄目だユミ。僕のモノを無断で使うな」

と、乱暴にひっぱがす。

「いやよ！ こんな尽で居るの——じゃ、ユミ、自分のを着るもん」

私の様子を窺いながら、両手で胸と前を押さえ、ベッドから降りようとする。



「何て、爽やかなヤツだろう」

と、思いながらも、つつい、虐めてみたくなる。

「ああ、降りられるもんなら、降りるがいいさ。その代り、今度こそ、ひどいめにあわせてやるから」

顔を作って睨視すると、娘は背を向け、立膝をして日焼けのない双丘をベッドに埋め、

「だってユミ。何も着てないのに」

と、肩を慄わせ、吸り始めた。

「着たって無駄だよ。またまた、鉄でチョッキンだ。それでもよければ、着な」

「ホントにいいの？——怒らない？」

いきなり振り向いて、涙に潤んだ吸い込まれそうに深い眸で見つめ、媚を見せる。

「う、うん——マ、いいだろ。けど、下だけだよ」

サディストは同時にフェミニストだった。

「じゃ、あっち向いてて。ね、お願い」

「ね、お願い。と来た」

私は背を向け、由美がベッドから降りて、二、三步運んだ頃を見計らって振り返った。

「ほオ。ユミちゃんのオヒップは、モンローウォークかい」

由美は「イヤッ！」と言って、畳に腰を落

とし、這う様にして簞笥に行き、抽斗をゴソゴソ、やりながら、

「これ、どオ？」

とか何とか言って、結構、愉しんでいる。

「甘い顔すりゃ、すぐ、つけ上がる」

「どうでもいいから、早くしろ！」

裸女は無地の白いパンティを着けた。白が好らしく、殆どの下着は白だった。

「もういいだろ？——おいで」

乳白色の、こぼれそうに豊かな双丘を両手で覆い、私の顔色を窺いながら、足を運ぶ。

素裸の由美より、パンティを着けた由美の方が、一段と美しく見えた。

足音が、キュツとしまり、太腿から腰にかけての急な膨らみは、欧米人のものだった。

小麦色に輝く膚が健康的で、しまった腓には贅肉など、まるで無い、繊麗な脚線を見せていた。

私はベッドを戻した。由美は畳の隅にチヨ

コンと坐って、両手でしっかり乳房を押え、オドオドした眼で、私を見つめる。

私は自分の方が照れ臭くなり、

「ユミちゃん、しばらく休ませてあげるね」と言いながら、由美の視線を外して畳にひ

っくり返り、熱い顔で、拙い口笛を吹いた。

裸にむかれた由美は大胆になっていた。

「ねえ、何か着せて——ねえ」

と、故意に私の傍へにじり寄り、火照った顔を覗き込む。

「このヤロー。人の弱味に、つけ込んで」

「パンティ許してやったじゃない」

「パンティだけなんて、いやあ！」

「ユミは今のまんまが、抜群だよ——最高にチャーミングだ」

「でもオ——」

「黙れ！ あんまりくどく言うのと、ギリギリ巻きにして、天井から吊るすぞ！」

乱暴に言った積りだが効き目は薄かった。

由美は黒目の勝った、可愛い眼をクリクリ動かせ、ジロジロ覗き込む。

「あーあ、これじゃ、主客転倒だ」

「よし。そいじゃ、早いこと片付けるか」

紅い顔で、ロープの束を握み、由美の背に回った。

「さあ、女囚一号。再び縛につけ！」

由美は正座した俤、項を覗かせ、乳房を覆っていた手を、小さく慄わせながらも、ゆっ

くりおろした。

「いいか女囚。ちょっと、きついぞ」

荒々しく腕を奪い、これ以上、上がるまい



と云う処まで捻じ上げ、長いロープの中を取  
って二条にし、手首をガッチリ括し上げた。

肩胛骨が浮き上がり、小麦色の腕が白い背  
中で、Wの字を書いた。

「痛いわ。ね、もっと下で縛ってー」

「うるさい！ 囚人の注文などきけるか！」

別なロープで乳房の上下を締め上げ、プツ  
クリ浮かび上った豊かな双丘を横手に見なが  
ら、手首の縄を一旦、背縄に留め

「ちよっと、痛いかも知れないよ」

と言って、背に留めた二条の縄を、<sup>あざな</sup>糾い

がら、頸に跨がせ、胸縄に搦めて、思いつき  
り引き絞った。乳房を包んだ縄が山峡で交叉  
して、白い豊かな連山が殊更にとび出した。

「い、いたい！ もっと、ゆるくしてえ」

「何だこれ位い。ユミはスポーツ万能だろ」

およそ関係のない台詞で娘を黙らせ、二条  
の縄を再び分けて、胴部を締め上げ、よくク  
ビれた腰間を一巻して、前で留めた。

計算して使った縄は、まだ残っている。

「これは、おアトの、お楽しみだ」

と言って、縛り具合をみながら、高い山の  
頂きで慄えている可愛い乳首を、ピンピン、  
弾き上げた。

「いやッ！ いたい、ゆるしてー」

大袈裟に畳に転げて叫喚する。

「何だよ、これくらい。うるさく言うとな当  
に、吊り責めにするぞ！」

「いや、いや、いや！ 嫌い。セトさんなん  
か大っ嫌いよ」

「あら、おっしゃって呉れましたね。よーし  
本当に吊るしてやるから、待ってろ」

ロープを取って、顔の上に<sup>かざ</sup>翳して見せた。

「ほら、ユミ。ホントにいいの？」

「いや！ 知らないッ。バカ、バカ、バカ、  
バカ、ヨシヤのバカ！」

ジャジャ馬娘は叫びながら、脚をバタつか  
せ、縄の身を揉んで、蹴りつけに出る。

「そうか、ユミは縄が好きなのか。それなら  
そうと、はつきり言えばいいのに」

暴れ狂う脚を搦めて、縄尻を胴縄に通して  
引き絞り、踵を豊かな臀部にピッタリ、くっ  
つけて、逆海老様に縛り上げ、

「どうだ、ネエちゃん。何とか言いな」

と、腹の下へ足を捻じ込み、ポーンと、蹴  
り上げた。娘は、ウウッ！ と言って横倒し  
になり、オタオタしながらも、

「バ、バカ、バカ、ヨシヤのバカ！ お前な  
んか死んじゃえ！」

と、顔を捻じ向けて、睨視する。

△どうだろ、この催促はー▽

「よし、よし。満足のゆく様にしてやる」

生意気な娘の背縄を掴み、恰も、カバンを  
さげるが如く、ヒョイと持ち上げ、

「ヒャーッ！ いたーい」

と、叫ぶ娘をその俛、間仕切りまで運び、  
梁に高々と吊るした。

「どうだ、満足したか」

「いやッ。く、くるしい、おろしてえ！」

「駄目だ。生意気、言った罰だ。しばらく、  
ブランコをして遊んでな」

「いやあッ。かんにんしてえ——」

煙草を点けて畳に転がり、宙に彷徨う肉塊を  
眺めた。厳しい縄は豊かな半身を四つにくび  
り、乳房を異様なまでにとび出させている。

両脚はピッタリ縛り合わされ、二つにたた  
まれたままだった。

吊り責めの女は徐々に喰い込む膚縄の感觸  
を、苦痛と悦虐の谷間に流し、真っ紅になっ  
て呻きながらも恍惚の笑みを覗かせていた。

私は足を伸ばして、大人しく浮いている肉  
塊を、乱暴にゆさぶった。

「ウウッ。アアッ、アアッ。も、もうダメ。  
おろして、ご免なさい。ユミ、もう大人しく  
するウ。かんにんして。アアッ——」



ブラブラ揺れながら、阿鼻叫喚する。

「只今、喫煙中です。しばらく、お待ちを」

「いや、いや、いやッ！　くるしい。お、おろしてえ。アッ、アッ！」

「ヘイヘイ、分かった。まったく、うるさいヤツだな、お前さんは」

喚き散らす娘を、梁から外して畳に伏せ、髪を驚攪んで引き上げた。

「イイッ、いたーい」

しなやかな肢体が、脛を支えに弧を描く。

「どうだ！　少しは骨身に泌みたかッ」

「う、うーん——」

「うん、か。——マ、いいだろ。そいじゃ特別に脚は許してやる」

「いやぁン、手も解いてえ」

「甘ったれるな！」

脚縄を解かれた娘は、畳に伏したまま挑発する様に、豊かな軀を悩ましくくねらせ、媚態を作る。

「何だよ。今度は何をして欲しいんだ？」

長い舌を出す。

「ユミの好きなこととしてやるから、はっきり言いな——何だよ？」

「——ぶたせて上げる——」

「何だといつめ、恩着せがましく言いやが

って。よし、そいじゃ、思いっきり、はりとばしてやるから、覚悟しろ」

細身のベルトを引き抜き、白いパンティを狙って、思いっきり打ちおろした。

「ヒャーッ！　いたいッ！」

「痛いかな？——よそうか？」

私はムチ責めにはさほど興味が無かった。膚を汚すのが嫌いだった。

「ううん、いい。ユミが泣くまでやって」

「ヘイヘイ。そいじゃ、こう云う風にか！」  
パンティの丘へ、続けて打ちおろした。

「ヒイッ！」

ピシッ！　と云う音と共に大きく弓なりにのけぞり、ヒイヒイ、嬉しい悲鳴を上げる。

私は数発、続けて打ち据えた。

「ヒエーッ、ヒイッ！　ああ——もっと」

△ケッ。いい気なもんだ▽

ヤツアタリ気味に胴の辺りを打ってみた。

「ヒイイ！　い、い——」

娘は俯伏せの俛、両脚をぶざまに開き、のたうち、絶え絶えの呻きを洩らす。縄のかかった柔らかな艶膚に淡紅色の筋が見る見る浮かび上った。背高く括し上げられ、充血した手が、ピクピク痙攣している。

「どうだ——もう、いいだろ？」

馬鹿馬鹿しくなり、娘の横にひっくり返った。娘は染まった頬を畳に置き、光った睫を慄わせ、ルビーの唇を弛めて、悦楽の園を彷徨していた。私は寝た尽の姿勢で、娘を抱き上げ、柔らかくうごめく唇を吸った。

「さあ、そろそろ本格的に行こうか」

「いやあ。ユミ、疲れたわ。もう許してえ」

「バカヤロー、勝手なコト言うない。ガタガタ言っていると、又、吊るぞ。今度吊るしたらいくら泣いても許さないから」

娘を威嚇して、バッグをまさぐったが無かった。肝心なものを忘れていた。

「駄目だ、ユミ。残念だけど明日にしよう」

言いながら、ベッドのマットレスを畳に敷き娘を乗せた。

厳しい縄なので、せめてもの償いだった。

「さあ——そうだ。そいじゃ、ユミの大好きなコトしてやろうか」

片膝を立て、娘の胴を乗せる。

「いやあ、かんにんして。もうユミ、大人しくしてるのにイ」

膝の上でクロールのバタ足練習が始まる。

「大人しくしてるって、舌の乾かぬ内から暴れてるじゃないか」

「だ、だって、苦しいんだもん——お腹が、



いたーい」

「チッ。いちいちうるせえガキだ」

洋間の椅子にあったスポンジの座布団を膝に敷き、再び、暴れる娘を乗せて、パンティに手をかける。

「いやあッ！ かにんしてえ」

現われた白い豊かな双丘に、幾条もの紅い筋が焼きついていた。

「オホ。前衛的ヒップ・ペインティング」

マットレスに頬を埋めている娘は、頭に血が下がったのか、羞かしいのか、真っ紅だ。

「いやいや。もういや！ かにんしてえ」

と、必死に身を揉み始めた。

私は満足しながら絵筆を並べ、細い筆から流し始めた。

「ダ、ダメーッ！ イヤイヤ、イヤ！」

由美は凄まじい叫びを上げて暴れ狂った。

私は倒れた拍子に、由美の踵でカウンターを食い、星を見ながらしばらく起き上がれなかった。

「マッタク、足クセの悪い阿魔だな」

クラクラしながら、ロープを握り、暴れる足を押さえ込んだ。

「いやッ。ゆ、許して、もう縛らないで」

「てやんでえ、こちとら生身の人間だ。眉間

でも蹴られた日にゃあ、命が死なあ」

括ろうとしたが、旨く縄がかからない。

出鱈目に搦めて、娘の横にひっくり返り、普請の悪い揺れる天井を眺めた。

「よーし、もう勘弁できねえ！」

三度目を試みる。

今度はベッドと椅子を使って、身動き出来ぬ様、ガッチリ緊束する。

「い、いやだ、ユミ。かにんしてよ。いたい。お、お願い、ゆるしてーあッあ——」

「流石にユミは万能選手だ。チャフラフスカのウルトラCより、まーだスゲェや」

身動き出来ぬのを見届けてから、筆にアルコールを含ませて運ぶ。

「いやあ！」

垂れた頭を狂おしく振り、必死の叫びを挙げる。私は大いなる満足感を覚え、澄んだ声がハスキーになる迄、筆を振るった。

「う、う——セーセトさーん」

雁字搦目の女は、動けぬ身をブルブル慄わせ、悶え狂った。私自身、めくるめく様な快感を舐めながら責め続けた。

禁断症状の女をベッドから放し、マットレスに横たえた。女は弛めた唇を慄わせ、恍惚の瞳を空に向けた儘、まじろぐ事もしない。

勿怪の幸と、白布を取り出して、弾む様な腰に巻きつけ、手に唾つけて締め上げた。

「ウッ、ウ、ウ、ウ——」

「どうした、おユミ。のびてんのか」

勇ましい娘を抱き起こして汗と涙に汚れた顔を拭いながら、

「ヤイ、おユミ。これで済んだと思うなよ」

と、底意地悪く睨みつけると、娘は濡れた睫をシバタき、深い眸を動かして、肩をブルブル慄わせながら、

「お、お願い、もうかにんして。ユミ、何でも言うコト諾きます——」

と、可愛いコトを言い出した。

「よしよし、心配しなくていい。今からユミを愉しい処へ連れてってやるから」

不安に戦き、美しい顔をひきつらせている娘の首にタオルをかけ、咽喉元で両腕を交叉してタオルを出来得る限りに深く取り、その儘、胸に引きつけ、腕を捻じりながら、力を加えた。

「ウッ、ウ、ウ——」

由美は声を上げる閑も無かった。見開いた儘、気を落としていた。

私は不本意ながら由美の柔らかな頬を可成りの力で打ち据えた。



乱暴な八喝／＼であるが、後手高く縛り上げている以上、これが至当だった。

「ウッ！ ウ、ウーン——」

蘇生した娘は、狐につままれた様な顔をして、私を見つめる。

「どうだった？」

「——ン——ユミ、どうしてたの？——」

「どうだったって、失神してたんじゃないか。」

「どうだい、フカフワしてて、雲に乗ってるみたいだったろ」

「ン、うん、そんな気がする——」

忘我の娘を、いきなり大きな姿見の前に立たせた。娘は鏡を見るなり、

「こ、こんなの、いやだ。お願い、かんにんしてえ。お願い——」

と、顔を捻じ曲げ、しゃがみ込んだ。

「そんなに嫌がることないよ。勇ましくて、いいじゃんか。みみっちいパンティよりズーッといいや。ほら、よくごらん」

「いや、いや、いやッ」

喚く娘を、間仕切りの柱に立ち縛りにして眼の前に、鏡台を据えつけた。

「お願い。かんにんして、縄を解いてえ」

鏡を見まいと、臉を固く閉じ、顔を捻じ曲げて、啼哭する。

私は煙草に火を点け、灰にし、再び点けて灰にした。

泣き喚いていた娘が、一際、高く、

「セ、セトさん！ 許して」

と、私の顔をブチ抜く程に睨視しながら、軀をブルブル慄わせた。

私は期待に胸を弾ませ、

「ユミちゃん、トイレのご用だろ？」

と、ニヤニヤしながら訊いてみた。

由美は濡れた睫をおろし、頬紅をはいた様な顔で、小さく顎を引いた。

「だったら遠慮はいらないよ。後仕末はして上げるから」

「いやあ、いや、いや。といて、お、おねがい。ほどいてえ！」

涙の顔を振り振り、汗に光って豊かな太腿を、こすり合わせて哀願する。

「よし。じゃ、ほどいてやろう」

私は、しゃがみ込み、堅く締め上げた白布に手をかけた。

「いやあッ！ 縄を解いて。お、お願い。手の方を解いてえッ」

「そ、お、じゃ、ユミの好きにしな」

ふてくされて、畳にゴロリと寝ころんだ。

由美は「イイ——」と言いながらも、しば

らく耐えていた。

「い、言う通りします、だから、早く、早くして！、早くウ」

「はい、はい、お待たせ」

緊帯を解きながら、由美を見上げた。可哀想に、顎を上げ、歯をくいしばって、

耐えていた。水を打った様な全身をブルブル慄わせ、額に滲んだ脂汗に、乱れた髪が、ベツトリと、くつついている。

由美は柱の縄を解くなり、豊かな軀で、私に体当りを食わせて、一目散にトイレに駆けつけた。が、旨く走れる道理がない。

床に転んで呻いていた。

「ほら、ユミ。大丈夫か、怪我はないかい」

「いやッ！ さわらないで。ユミ、ひとりで行くウ！」

「一人で行ってどうするの？ 戸が開かないよ。ユミは何時も、足で開けるの？」

嫌がる娘を抱き上げて、洗面所へ行き、

「いや、いやだユミ、イヤァ！」

と、喚く娘を抱きかかえた。

「いや、いや、いやッ！ 一人で出来るウ」駄々っ子の様に、足を振り振り、必死に、身を揉む。

私が、暴れる豊かな軀を支えきれず、片膝



を出して、体重を乗せた途端、駄々っ子は、「ア—ア—」と泣き出した。

私は膝にぬくもりを覚えながらも、待つより他は無かった。

済むや否や、その場に娘を放り出してスラックスを脱いだ。

何処で、どうなったのか、膝から下は、ズブ濡れだった。

「ひどいなユミ。僕のズボンはおムツじゃないよ。みろよ。あーあ、こんなに濡らしちゃって」

私の言葉に、由美は洗面所のタイルの上じゃがみ込み、可愛い項を見せ、肩を大きく波打たせて、まるで、火のついた赤ン坊の様に、激しく泣く。

「いいんだユミ。僕は何とも思ってたやしないさ。いいんだったら。ほーら、顔を上げてごらん」

素直な由美は、モミジの頬に真っ白い歯を覗かせ、涙を一杯溜めた長く柔らかな睫を慄かせ、私の胸で泣きじゃくった。

余りのいじらしさに、私は思わず目頭を熱くした。

「ご免、ご免ね、ユミ。調子にのりすぎたよ。すぐ解くからね」

私は自分がかけた緊密で、厳しい縄目を恨んだ。

いまは、少しでも早く、哀れな娘を解き放したかった。

汗に光った真珠の柔膚に、太い麻縄の跡が無残に、クッキリと残っていた。

私は雫を落としながら、有りったけのタオルでおしぼりを作り、汗にまみれた軀を拭いた。

由美は、小さく呻きながらも全身を預け、為すが尽だった。

私は己の罪を拭うが如く、何度も何度も、拭い、清めた。

(カット・志羽 利也)

## 余計なコトかも？

稿 附

セト・ヨシヤ

十二月号、読者通信に於いて、東京のS生さんが、神戸のTK嬢を上げたり、下げたりしていられますが、些少、おかタイ様に思われます。『興味本意にSMをみるな』には、何となく顎を引けますが、『自己満足の為に

本誌の頁を割くな』とか、『SMについて、もっと真剣に考えるべき』云々には、何となく頭が傾きます。

何故、自己満足がいけないのかしら？ そして、何を、どう云う風に、マジメに考える

の？ 否、考えた末に、どんな答案を出せばいいのかしら？……。

粹が身を食うではないが、およそ倒錯した性などと云うものは、考えれば考えるほど馬が猛り、精通すればするほど猿が騒ぎ、足掻けば足掻くほど泥水に塗れ、底の無い泥沼に沈んで行くんでは……と思うのですが、如何でしょうか？

お断りして置きますが、僕はS生さんには何の恨みも無く、TK嬢には何の義理も有りません。重ねてS生さんを揶揄する心算もT



K嬢を称える気持ちも有りません。併し、僕の体質で二者択一すれば、鼻の差でTK嬢のフラストレーション（違っていれば、ご免なさい）解消法に賛同、と云う事になります。例え、それが自己欺瞞の為の文章であり自己顕示が故の投稿であったとしても、猶、健康な行動、だと思っています（尤も、名の木も鼻につく）って感じは、有りや、無きや——でも、此れ正に余計な事。スミマセン）

そもそも、奇ク誌の存在価値の主たる処は読者のフラストレーションなり、ストレスなりの消化・吸収にあるのだから、K嬢の所為も、おのずから領けるのである。無論、これは第三者の、第三者的考察であり、手前流の付度であり、勝手な想像であって、K嬢の、豊かな豊かな？ 胸の内は、K嬢以外、誰ひとり知り得る処ではない……。

閑話——奇ク誌の存在価値に触れた処で悪筆の上に悪舌を重ねるが、読者には、奇ク誌を、歪んだ性（敢えて、こう呼ぶ）への、  
 『入門書』・『虎の巻』果ては『バイブル』として観ている者も居るだろう。『オレ様は美の探求者だあ！』とか、『フンドシは素敵よ』とか、何とか言っておさまっている者さえ居る。別に、それが悪いとか良いとか言うのではない。他人は他人、オレはオレだから、それはそれで結構だ。他人の、他人に害を及ぼさぬ言動なり、嗜好なりを強制、或る

いは矯正する権利は、サトウさんと云えど、持ち合わせてはいない。まして僕は、これらの意見に少なからず共鳴する者（女性の輝美なんかに、何となく魅かれる）併し、こんな台詞は、奇ク誌（同好者）の間にだけしか通用しない楽屋話だと、判っきり承知して戴きたい（承知してのコトバと知りつつも、語りの都合上、心ならず引用した。謹しんで、お詫びして置きます）。

更に苦言（愚言）を呈すなら、テメエの、ロクでもない嗜好を他に押しつけて、同好者を増やそう、なんてのは酔狂もいい処だと言える。マニアの心理としては当然過ぎる事であり、マニアにのみ課せられた一大任務？ かも知れないが、道楽も此処まで来れば、立派なもんだ（モチ、夫婦間の場合は除くよ。馬に蹴られたくないからねえ）。

兎に角、此の際、程度なり好みなりを抜いて、自分は、あくまで偏執者であり、変質者であると言う、テッテイ的認識（日常茶飯時に於て正常に見えても——）が、必要だろうと思うんですがねえ。

こんなコト言えば、『じゃあ、何処までがノーマルで、何処からがアブなんだよオ？』なんて、居直る者が出るかも知れないが、そんなヤツは、可成りの重患だと思っていれば先ずマチガイはない。

実際には、自己を知らない読者などおそら

く居ないだろう。居たとしても、極く微量であらう。

が、文字と云うのは怖いもの。ラジオよりも、テレビよりも映画よりも、イメージネーションをアップさせ、次元の壁など苦もなく破る。然して、己を知り過ぎるほど知る、分別臭いカクシヤクたる紳士でも、韋編三絶、活字に溺れて一時的にせよ、現実を離れ、虚を構える場合があると思う。況んや、僕のように青臭く、素直で純粋な？ 低能児達は、耽溺を知らず、心酔を気づかず、ついつい溺れっぱなしになるから、スワッ一大事、危険が大いにアブナイのである。ともすれば、奇ク誌（誌に限らず）によって、己を正当化しようとする、否、正当化したい欲情に駆られる。否無意識の中に正当化しているのである……同好者の声しか聴けぬ奇ク誌は、その『絶対好の場』であり、奇ク誌を『聖（性）書』として観るからであらう。

とどの詰まりをすんなり言えば、此処に読者をして、奇ク誌をフラストレーション解消の誌と観るか——他方、参考書的に観るかの問題が残る。僕のお粗末な感覚及び体質から推して、全読者（就中、若い読者）の作るパランス・シートが、後者に大きく傾いたとすれば、その時こそはじめて、判っきり、『奇ク誌は悪書』と決められよう。又、否が応でも、決めなければならぬと思う。



幸なるかな、今の処、そう云う気配は窺えない（窺いたくない）。そして奇ク誌自身、此の世智辛い世にあって、猶且つ、紙価をつり上げる事を忘れ、不必要な、週刊誌的な、阿世を嫌っている。世間様から見れば、『身の程を、わきまえた……』の一語でチョンだが、言うは易し——ちつとや、そつとじゃ出来ない事だ。僕みたいな傍若無人で皮肉が多く、デリカシーのカケラも見られぬイヤなヤツでも、これだけは真実、感涙している。——休題。

## 新発足 懸賞入告白、手記、体験▽原稿募集

### ☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

### ☆規 定☆

- 一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。
- 一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。
- 一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

聴くところによれば、S生さんは未だお若いとの事。不思議な縁で、僕もまだまだお若いのよ。

全く以って、余計なコトかも知れないが、お互いに花も実も有る若い内、つまらぬ詩歌を口吟む閑に、美田を開こうじゃん。勿論、コト有る毎、不満を字句に直すのも結構だ。ただ僕の言いたいコトを、遠慮し勝ちに言うならば「下手な思案は休むにしかず」だけ。お差すかしい乍ら（本人さんは別に羞じてはいない様子）僕は、お目醒めになった頃か

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

らの血統書付きJIS規格。真性？ S M i s tです。そして今日迄、此のキチガイが大したマチガイも起こさなかったのは一重に天稟？の軽佻浮薄さに増す処の、日頃の刹那主義のお蔭かと思っています。馬鹿は馬鹿なりに色々、得る処がございます。

あれや、これや、ちつこい針をでっかい棒にして、何となく余計なコト言ったけど、此れ全て、セコハンのオツムが感じた事、気に留めるには及ばない。第一、オレって、その日の気象状況によって、言うコト大幅に違うもんなあ——。

ついでだから、余計なコトをもうひとつ。同じく十二月号の、山口広氏の評論入危惧におびえてVには、ちよっぴり泣けた。僕は変態の変態だから、縛ったとかは倒したとか云うものより、むしろああ云う、そのケの全くない、どちらかと云えばクソマジメ的（失礼）文章に魅かれるんだなあ。S生さんの通信文を、プアーな脳細胞がストックしたのもそれ故なんだ。

時に、編集部のお兄さん。暮れに向かってお忙しい中、余計な注文で恐縮だけど、此れからも、あんなヤツを、どんどんガバチョと頼むよな。そして、出来れば、僕のヤツも頼むよ——駄目か？——いいじゃない、ついでじゃない。そんなこといって、女のコの頼みなら、何処やらを伸ばして双手を挙げて、ス



イスイニヤニヤ諾くクセに……。

言いたかないけど、僕には、今年二十二才の女盛り、それはそれは、すこぶるつきヴィーナスちゃんの妹が居るんだぜ。尤も、新車か中古かは判然としないが……。

それから、言い忘れたコトを、ひとつ。

SMを△第三の愛▽などと、可成り洒落たナンセンスなコトを言う人が居たが、どうだろねえ。

それはSMをプレイとして見るからそう云う事が、すんなり言えるのであって、仮にオマワリさんが居なければ（命のヤリトリの自由化が為された場合）忽然と、拷問、私刑・殺戮——が、横行するだろう。此れは、根の無い極論である。が、SMは飽くまで、陰惨なものだ！ 又、SEXを度外視した愛は、SMに待たずとも古今東西に存在している（無論、親族間の愛、以外に——）。

『SMは第三の愛（性）だ』という言葉の陰では、既にSMに溺れ、無意識の中での△己の正当化▽が為されている——と、診る。

自己を識り、且つ、SMなりアブ・ラブなりを、しっかりとみきわめてふまえた者は知らず、若し、この言葉を、思慮分別の浅い若者がマジメな考えで以って、平然と口走る様になったなら……。

此の辺が、僕の疑惧する処なんだ。

そして、山口氏の危惧する処でもあろう。

『反論に対して、耳を貸すこと、やぶさかでない』と云う御当人の声により、敢て、愚考を顧慮せず、駁論を並べた次第です（毒舌をお許し願います）。

話は五百四十度の回転をして、僕の、奇ク誌の読み方を言います。僕は本誌に限らず乱読の方です。従って、先ず△奇クサロン▽を幾らか丁寧に読みます。次に通信文に移り民の声を聴きます。アトは閑に任せてパラパラ拾い読みする程度です。ウソツケ！ と言われそうだが誠のホントの真実です。第一、僕が誌をテーマのオゼゼで読み始めたのはつい最近（十一月号からボチボチ）なんだから。それ迄は専ら、書店のいけすかないオヤジにハタキをかけられ乍らの坐り読みでした（マジメな本を買う旁ら）。尤も、四年程前迄は耽読していました。誌を読む度にオマンマが咽喉に通り難い程でした。若し、読者で、こんな症状が診えたなら、その人は相当のクラシケだと思っただけ（体験的見地から）。又、こう云う系統の書を読むのは、満腹時が最も適している事を附加して置きます（生理学的見地から）。

一時、SMに泥酔した僕が何故、現在の心境（幾らかマトモな）になったかは、信じ難い紆余曲折がございます。それはそれ、又、機を得て吐露（刹那主義の僕故、アテにはならないが）します。兎に角、SMはペイ中の

様なもの、並のクスリじゃ治らない、と云う事だけ触れて置きたい。そして最近、その中毒症状が復活して来た様です（嬉しいのやら悲しいのやら、ヘンな気持ち）。

此の小文は、半ば自制の為のものだと言えよう。正直？ な処、僕はスッゴク繊細なハートの持ち主なんだ。向こう三軒両隣りでは至極真面目な好青年で通っている。信じられない？——マ、それもいいさ。別に議員に立つ訳じゃないんだから。

併し、どうしてこうも支離滅裂に、余計なコトばかり言うのかねえ。当初の予定じゃ、チョコチョコと、用紙一枚くらいだったがあ。自らを、ふかく反省しなきゃ。

まだまだ言いたいコトは、キリマンジェロの雪ほど有るけど、だんだん乱れるから、此の辺でオヒラキにする。

マツタク我乍ら、いいトシ食らって、みつともないと思っっている。併し、溺れかけたオツムには一服の清涼剤となるかも知れぬ。

そして、それだけが、此の与太郎さんの、救いなのである——妄言多謝。

サーカスを観るには、ピエロが要る

唄を歌うには、プレスが肝要である

△愚者の愚言▽

嗚呼、遙かなる馬鹿——

（了）



## — 体 験 告 白 —



## 浣腸遍歴

伊 勢 竜 也

私が、生まれて初めて浣腸なるものを知ったのは、小学校三年の時のことであった。

隣家の四才になる子が、私の家で、私の母と、その子の母親とに浣腸されているところを見たのである。たぶん、その子の母親が、私の母に、その子が便秘だったのを相談してのことだったのだろうと思うが、私は初めて見るイチジク浣腸なるものに、大変に興味を覚えたのだった。たぶん、本能的に惹かれる要素が私の体内にあったのだろうが、その子の母親が、使ったイチジク浣腸のカラーをドブに捨てたのを見るなり、なかば夢中で、母の眼をかすめて拾いとったのだった。

そして、それをきれいに洗ってつくづく眺めている内に、むしろようにやってみたくなりそれに水を吸い上げて便所に持ち込み、自分一人で浣腸したのだった。

私のこの「カンチョウ」なるものに対する異常な執着心の第一歩、いや、開眼ともいえる懐しい思い出である。

私が、本物のイチジク浣腸が欲しくなつて小遣いを握りしめ、思いきって薬局にとび込んだのは、それから間もなくである。

その時のことも、はっきり憶えている。薬局の店員は、私がおずおずしながら

「あのう……浣腸を」といったのを、どう聞いたのか、すぐガラス製の浣腸器を取り出してきたのだった。私は、それが浣腸器だということまでまだ知らなかったからキョトンとしていた。店員は「三百円です」といいながら包み始めたので、私はあわてていった。「カンチョウです」「これが浣腸器ですよ」「もっと小さい……イチジクを」「ああ、イチジク浣腸か……小供用？ 大人用？」私は、その区別があることも知らなかったが、とっさに「大人用です」と答えていた。

家へ逃げるようにして帰り早速、生まれて初めての本物の浣腸に感激し、そしてその不思議な魔力に酔い、益々その魅力に引き入れられる結果になったのだった。

それからは、小遣いをハタイては薬局へ行くようになり、その使用済みのカラーは、すべて机の奥の「宝の箱」に大切に保管するようになった。

また、それからしばらく後に、遊びに行った公園の便所の近くで、偶然に眼についたイチジクの空容器にギクリとなった。そして、何か大切なものを発見したように、知らぬ間に拾い上げていた。それから、どこへ行っても、落ちていそうなところは、半ば無意識



に探し求めるようになっていた。汚いという感じなどあろうはずはなく、その嬉しさとスリルにとり憑かれていたのだ。拾い集めたものは別の箱に保管したが大小合わせて二十六コあった。それらの浣腸ガラを取り出して眺めるだけでも、なんともいえない感情が湧き上ってくるのだった。

たしか五年生になった頃だったと思うが、私の浣腸願望も進歩したらしく、百科事典や辞書によって知識を深めるようになった。また赤ちゃんの育児百科などからも、浣腸についてのこととなると、熱心にノートするようになったのも、この頃からだったようだ。おかげで、浣腸には、イチジクの他に、ガラス製浣腸器によるものや、イルリガートル浣腸などがあり、浣腸の種類として、排便浣腸、滋養浣腸等があることも知り、グリセリン、ドナン、石鹼液が浣腸液として使用されることなども知ることが出来たのだった。

ガラス製の浣腸器が欲しくてたまらなくなったのはそれからである。ポチポチ貯めた小遣いで、ようやく三十ccの浣腸器と、グリセリン溶液を手に入れた時の嬉しさ。

その頃には既に、同じ薬局で度々買うと交に思われはしまいかと思っていたらしく、わ

ざわざ遠方まで出掛け、一番最初にイチジクを買いに行った時とは逆に、「カンチヨウキを……」といったのにイチジク浣腸を差し出されて「注射器みたいなのです」といったことを覚えていいる。

その店を出るなり、廻り道して近くの山へ行き、小川の水を浣腸器に吸い上げ、グリセリンを混ぜて、大空の下で初浣腸を試みたのであった。まことにめくらめくような感激と格段の効力に狂喜したものである。

私は、その魔力を秘めた浣腸器とグリセリン溶液のピンを、その山の中に埋めて草をかぶせて隠した。家に持って帰っても置き場所に困ると思ったからであった。それからの私が、山へ日参したことはいうまでもない。人気が、山へ日参した中で、浣腸器を唯一の友だちとして一人で陶醉していたのである。

独りきりの浣腸でも別に不足を感じていなかったようであるが、中学の三年の頃になると、異性が眼につき出した。クラス委員の仕事で特に同席の度の多くなった悦子という美人が現われた故もあるが、私は、彼女の顔を見る毎に浣腸と重なるような幻想に悩まされ始めたのである。

決心した私は、彼女のいつも這入る便所を

つきとめて細工をした。そして「のぞき」を敢行し、その「排出物」を入手して、山の中の「浣腸器保管場所」に納めることまでしたのであった。結局は「恋心」というものだと思うが、このことで、望み難い、彼女と浣腸の幻想をまぎらそうとしたことが逆効果となつてしまい、その願望はますます昂って夜も眠れないことが多くなってしまったのだ。

あのガラス器具で浣腸すれば、彼女の可愛い顔は、どんな表情になるだろうか。どんなふうに見えるだろうか……などと思うと、やもたてもたまらず、ついに一計を案じた。それはなんとか彼女に便秘症状を起こさせれば私自身の手で出来ることはなからうが、浣腸することになるだろうということであった。

私は薬局で、下痢止めの錠剤を買ってきて粉末にし、学校の昼食毎に隙を見て、彼女の分に混入することを始めたのであった。

効果は四、五日目から現われたようであったが、彼女の気分悪げな表情が眼につき出したのは、さらに数日経ってからだった。そして、ついに彼女は欠席したが翌日はケロリとした顔をみせた。私のさり気ない問いに彼女は「病院へ行ってきたの。……もうすっかり気分がよくなったわ」と答えた。浣腸のこと



はいわなかったが、私は直感で成功したことを感じとって、異常に昂ぶる自分を押えかねたものであった。

浣腸の妄想は悦子ばかりでなく、映画スターや女性歌手に及び、電車やバスで乗り合したBGや女学生も、知らぬ間に幻想の対象になっていたことに気づき出したのは、高校も高学年になってからであるが、実際にちよつといたずらをしたのは、たしか高校二年の時だったと思う。私のいとこで、私より一つ年上の娘が家へ遊びに来た時のことだ。

例によって、彼女と浣腸がダブって目先にちらつき、どうにも仕方がなかった。そして入浴を利用することを思いついたのである。

いよいよ彼女が風呂場に向かう直前、私は先廻りして浴槽にイチジクのカラ四コを浮かべておいたのである。のぞいていたかったがそうもゆかず、焚き口にしゃがみ込んで様子うかがうことにした。待つこと数分『キャッ』という悲鳴に続いて『いやだわ、こんなところに浣腸なんて。フケッ!』と、一人でわめいてとび出す気配。

後で『アンタでしよう!』とどやしつけられたが、私の頭は、このきれいな彼女が、あの浣腸ガラをつまみあげただろうと思うと、

その光景の想像で一ぱいであった。

社会人となってからは、さすがにウカツなことは出来ないと思う自制があつて、もっぱら想像と、わが身に対する浣腸だけで過ごしていたのだが、近くの診療所に新たに来た看護婦さんの美貌に惹かれて患者に化けたことがあつた。化けたというより、仕立てたのだつた。以前に悪用した下痢止め薬を思い出し規定の三倍近くを服用して「便秘患者」になりすましたのである。勿論、その看護婦さんに浣腸して貰いたいための企みだった。

診察室に入ると、その看護婦さんが居て、医者も『浣腸を』といってくれ、計画は成功した、と私は内心ワクワクした。ところが、いざ別室で浣腸ということになって、浣腸器を持って入ってきたのは、なんと別の看護婦だったのである。大分年を喰った、いわゆる年増の看護婦で、私は期待していたのにガッカリしてしまったものだ。女性から浣腸して貰えることには交わりない、と自分を慰めたものの感激はまず三分の一に激減した。それでも、浣腸後に、便器を届けに来てくれたのは彼女だったから、いく分は救われたというべきだったのだろう。いずれにしても、私に他の人から、しかも異性から浣腸を受けた

のはこれが最初だったのである。

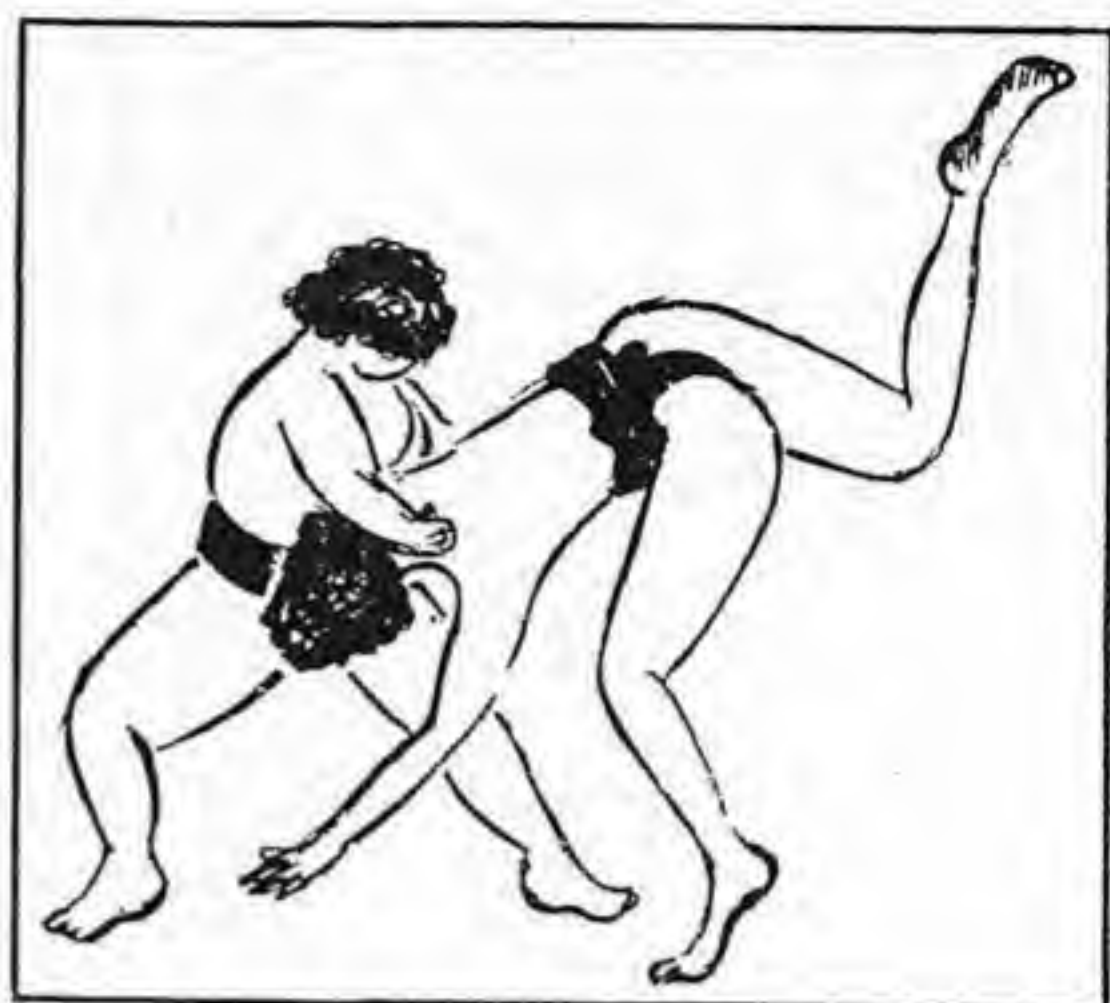
そして、実際に、自分の手で異性に浣腸をしたのは、二十七才で結婚した妻が最初のことなのである。わが伴侶となった女性は、中学時代にいたずらをしてやった女「悦子」である。

私の「浣腸」の中に、縛りが入りこんできたのもその時である。私は前述のように、早くから浣腸の魔力に憑かれていることは承知していたが、縛りを願望したことはないように思う。しかし、新婚旅行の第一夜に於て、悦子に浣腸を施すためには、なにかしら縛ったほうがいような気持ちが湧き上ってきたのだ。不思議といえはいえるが、なにか当然なことのようにして、私はいぶかる悦子を縛り上げ、用意して行った百ccのガラス浣腸器で、百%グリセリンの洗剤を与えたのであった。

わが愛妻悦子は、未だに、折ある毎にあの時の驚きを話し、懐しんでいるようだ。以来今日まで、私達の間には絶えず浣腸器が介在しているし、もはや私達の生活には欠かせないものになっている。将来もおそらく、この状態は続くことだろうと思うのである。

(おわり)





(一)

小雪まじりの寒風が吹きつける、凍てつくような夜だった。

いま、暖かい湯気の立ちこめているこの浴室で、三人の男女によって、まったく奇異な光景が展開されようとしていた……。

洗い場の腰掛けにドッカと尻を乗せてふんぞり返り、両脇から二人の女にさも気持良さそうに身体を流させているのは、この家の主好造である。年の頃四十五、六の、見るからに好色漢らしい卑猥な感じの男だった。

懸賞入選・女斗美小説

ふ

た

り

妻

( 1 )

芦 浦 素 舞 夫 (カットも)

そして、この男をかいがいしく流している二人の女こそ、この物語りの主人公である、弓枝夫人と毬子夫人の、ふたり妻にほかならなかった。弓枝夫人は、年の頃、三十一、二の、派手な顔だが、眼尻の切れ上ったチョット冷たい感じのする女だった。痩せ型のスラリとした長身で、全身それこそ抜けるような色白の身体をしていた。一方、毬子夫人は、年の頃二十八、九の親しみのある顔をした女だった。よく太って、見るからに健康そうな小麦色の身体をしていた。

やがて、好造は、「もういい」と鷹揚に頷

いて腰を上げた。そして、満々とお湯を湛えた浴槽にザンブとばかり飛び込んだ。忽ち、お湯がどっと溢れ出る……。この浴室は、好造が贅を尽して造らせたものだけに、さすがに立派なものだった。天井は、マキ板を使った舟底型の天井で、壁に大理石を貼り、床は御影石を敷き詰めてあった。唯、浴室の壁の三面に、曇り止めを施した超特大の鏡を嵌め込んであるのは、如何にも卑猥な好造らしいやり方だった。

『毬子さん。今日は貴女が負けたから、私の背中を流すのよ。さあ!』



弓枝夫人は、まるで命令する様な口調で言

いながら、毬子夫人にクルリと背を向ける。

言われるまま毬子夫人は、仕方なげに弓枝夫

人の背中を流し始めた。これを好造は、浴槽

の中からニヤニヤ笑って眺めている。さすが

に羞かしくなったのか弓枝夫人は、好造の視

線を避けるようにして、洗い場のスノコ板の

上に横坐りに坐り直す。だが結局は、反対側

の大きな鏡に映っているから同じ事である。

中腰で彼女の背中を流していた毬子夫人も、

羞かしそうに身を硬くして、流す手付きがぎ

こちなかった。

『君たちは、ほんとに好一對の身体をしてる

なあ。毬子の肉を、半分くらい弓枝に分けて

やると丁度いいんだがなあ』

好造が愉快そうに笑った。太っている毬子

夫人は顔を赧らめ、さらに身を強張らせる。

確かに好造の言った通り、弓枝夫人と毬子夫

人は、まったく異なった対照的な身体をして

いた。色白の弓枝夫人は、典型的な長身痩軀

であり、小麦色の肌をした毬子夫人は、これ

はまた典型的な肥満体だった。身長は、弓枝

夫人が一六六センチもあるのに、毬子夫人は

一五五センチしかなかった。だが体重は、弓

枝夫人が五二キロしかないのに、毬子夫人は

六三キロもあった。つまり、身長は、弓枝夫

人のほうが十センチ以上も高いのに、体重は

逆に毬子夫人が十キロ以上も重かったわけだ

ある。

弓枝夫人の身体は、どの部分を見ても長い

の一語に尽きた。首はほっそりとして長く、

肩も、肩幅の狭い撫で肩で、腕もすらりとし

て長かった。バストは大したことはなかった

が、ヒップは素晴らしく大きかった。これは

長身女性によくある傾向である。彼女はウエ

ストがよく切れているため、よけいにヒップ

が強調されており、魅力溢れる大きな尻をし

ていた。脚の線は、太腿から脛ら脛にかけて

あまり肉付きの良いほうではなかったが、足

首が細く括れており、ちょうどカモシカの脚

を思わせる様なすらりとした長い脚だった。

また、足の形も、いかにも長身女性らしい、

足指の長い、恰好の良い長い足をしていた。

彼女は背が高いので、足のサイズは十文半も

あり、女性の足としては大きいほうだったが

痩せているため足の幅は狭かった。このよう

に弓枝夫人は、ファッション・モデルでも勤

まりそんな身体をしていたのである。

一方、毬子夫人の身体は、どの部分をとっ

て見ても太かった。首は、ずんぐりとして短

く、肩も、肉付きが良くて丸味があり、腕も

むっちりとして、短かった。胸も尻もポリユ

ームがあったが、ウエストがほとんど切れて

いないため、ずん胴だった。脚も、太腿はハ

チ切れそうに肉付きがよく、美事な大根脚を

していた。足の形も、肥満女性らしいむっち

りとした足だった。サイズは九文半で、女性

の足としてはやや小さいほうだったが、太っ

ているため足の幅は実に広がった。足の指も

むっちりとして短く、可愛らしい足をしてい

た。以上のように、毬子夫人は、お世辞にも

スタイルが良いなどとは言えなかったが、彼

女の太り方は、肥満女性によくありがちなブ

クブクした脂肪太りではなく、見るからに健

康的な、いわゆる固太りだった。

こうして、弓枝夫人と毬子夫人の身体を見

較べたところ、弓枝夫人は確かに痩せ過ぎて

おり、毬子夫人は明らかに太り過ぎていた。

しかし、弓枝夫人は痩せている割には華奢

な感じがしなかったし、毬子夫人も太ってい

る割には鈍重な感じはしなかった。これは、

彼女たちがそれぞれ女学校時代に、弓枝夫人

は水泳の、毬子夫人はソフト・ボールの選手

をしていた程の、運動神経に恵まれた女性た

ちだった故もあったが、それ以上に彼女たち



が、この物語の本筋である或る破廉恥な日常生活で鍛われてきた故だったのである。

『毬子さん。身体の隅々まで、丁寧に流すのよ。それが貴女の役目なの。フフフ……』

弓枝夫人は、毬子夫人を振り向いて冷やかに笑った。毬子夫人はくやしそうに唇を噛みしめながらも、言われた通りにするよりほかなかった。毬子夫人に身体の隅々まで洗わせた弓枝夫人は、ようやく御輿を上げた。スラリとした美事な長身である。彼女は、そのまま直ぐお湯に入るかと思えば、実はそうではなかった。弓枝夫人は、毬子夫人を冷やかに見下ろしながら言った。

『毬子さん。足指の股の間は、まだ汚れが完全に落ちてないわよ！ わたしの足は汚れやすいからもっとよく洗わなきゃ駄目じゃないの！ さあ、もう一度やり直しよ！』

弓枝夫人は、足の爪先を毬子夫人の鼻先に突きつける。いかにも弓枝夫人らしい、底意地の悪いやり方である。毬子夫人もさすがにムツとした様子だった。好造はこれをニヤニヤ笑って見ているだけである。いくら役目とは言え、同性の足の裏まで洗わせられるのは耐え難い屈辱だった。だが毬子夫人は、弓枝夫人の命令に従うよりほかなかった。

毬子夫人は、弓枝夫人の足元に跪くようにして、彼女の十文半の大きな足の裏を抱きかかえ、その細長い足指の股についた汚れを、手の指先でゴシゴシ擦って洗い落とす。弓枝夫人は冷笑を浮かべて見下ろしている。

『やっとこれで綺麗になったわね。今度は、足の裏をマッサージするのよ！』

弓枝夫人はさらに次の命令を下す。まるで女王気取りである。これには、さすがに毬子夫人も腹が立った。八今日いくら自分が勝ったからといって、何もこんな事までさせなくても良さそうなものなのに……。私は、勝った日でも、せいぜい背中を流させるくらいで何もここまでは要求してない筈だわ！ そう思うと毬子夫人は、弓枝夫人の意地の悪いやり方が憎らしかった。毬子夫人は、救いを求めるように好造の顔を見た。だが彼は、ただニヤニヤ笑っているだけだった。むしろ、面白がっている様子だ。

『何をグズグズしてるのよ！ 言われた通りになさい。足の裏にはコールド・クリームをたっぷり擦り込むのよ！』

弓枝夫人は、嵩にかかって命令する。こうなれば言われた通りにするより仕方がない。毬子夫人は、再び弓枝夫人の足を押し戴くよ

うにしてその足の裏を揉み出した。まるで女王に仕える奴隷のようである。

『フフフ……くすぐったいけど、とっても良い気持だわ。もっと続けるのよ！』

弓枝夫人は、踵や土踏まずはもとより、足の裏の上部から足の爪先に至るまで、その長い足の裏を一々丹念にマッサージさせる。彼女の大きな足の裏が、だんだんピンク色に染まってきた……。弓枝夫人は、明らかに快感を楽しんでいる様子だった。『フフフ……』くすぐったそうに身をくねらせながら、時折好造と顔を合わせて、意味ありげに笑っている。二人だけの何かがありそうだった。その理由をよく知っている毬子夫人は、妬ましくてならなかった。

『おい。良い加減にしないとカゼひいちゃうぞ。早く湯に入れよ！』

マッサージがあまり長いので、さすがに好造が声を掛けた。すると突然に弓枝夫人は、『もう結構よ』と冷たく言うなり、足の爪先で毬子夫人の手を邪慳に払い除けた。いままです散々マッサージをさせておきながら……まったく勝手な仕種である。

『貴方がいい？』弓枝夫人は、好造の顔をチラッと流し眼に見ながら、すらりとした長い脚



で浴槽の縁を跨いでお湯に入った。好造は、  
「待ってました」とばかり、ニヤニヤ笑いな  
がら手を差しのべる。弓枝夫人も、されるが  
ままに寄り添う。『いやあーん、くすぐった  
いわ』好造にどこか撥ぐられたのか、弓枝夫  
人は、わざと悩ましい声を出して甘えてみせ  
る。明らかに毬子夫人への見せつけである。

浴槽の中でフザけ合っている二人の姿を、毬  
子夫人は正視することが出来なかった。

『毬子さん！ 今夜は、ご自分で身体を流さ  
なきゃならないわね！ 貴女太ってるから大  
変でしょうね。お察しするわ、ホホホ……』

洗い場の隅で一人身体を流している毬子夫  
人を、弓枝夫人が揶揄った。まるで自分が晒  
し者になつてゐるような気がして毬子夫人は、  
太った身体を恥じるように身を強張らせる。  
それからしばらくの間、好造と弓枝夫人は、  
フザけていたが、身体が温まったのか、よう  
やく風呂から上ってきた。色白の弓枝夫人の  
身体が、上気して艶めかしいピンク色に染ま  
っている……。

『毬子さん、ごゆっくりネ、私達は先に上る  
わよ。貴女は太ってるから、何度もお風呂に  
入って少しは贅肉を取った方がいいわ』

弓枝夫人は、すらりとした長身を誇るよう

に、まだ湯気の立っている裸体を、わざと毬  
子夫人の前にさらして見せる。どこまでも驕  
慢な態度だった。浴室と脱衣室は、シャレた  
ガラス戸で仕切ってあったが、立ちこめた湯  
気のために、曇りガラスが透けて見え、脱衣  
室の様子がよく分かった。何気なく脱衣室の  
方に眼をやった毬子夫人は思わずハツとして  
顔を伏せた。好造と弓枝夫人の二人が接吻し  
ているではないか。意地の悪い弓枝夫人のこ  
とである。曇りガラスが透けて見えるのを計  
算に入れて、浴室にいる毬子夫人に、わざと  
見せつけているのかも知れなかった。

『毬子さん。私達、湯冷めしない内に今夜は  
早く寝<sup>やす</sup>むわよ。貴女、お風呂から上ったら、  
私達のお布団、敷い<sup>ふ</sup>いて頂戴ネ』

弓枝夫人がガラス戸越しに声を掛けた。そ  
して、好造と縫い合うようにして脱衣室から  
出ていった。いままで散々弓枝夫人に侮辱さ  
れながらも、ジツと耐えてきた毬子夫人だっ  
たが、浴室に一人取り残されると遂にたまら  
なくなり、洗い場の床の上にワッ！ と泣き  
伏してしまった。彼女の眼から堰を切ったよ  
うに、くやし涙が溢れ出た。

△私は、どうしてこんな目に遭わねばならな  
いのかしら……▽

毬子夫人は、こんな事までさせる夫の好造  
が恨めしく、また、自分の運命が悲しかった  
と同時に彼女の胸の内には、弓枝夫人に対す  
る嫉妬と憎悪の炎が激しく燃え上った。  
△いいわ！ 明日から、あの人には絶対、負  
けないから！▽

毬子夫人は、涙をふり払い、キッ！ とし  
て顔を上げた……。

## (二)

夫の好造を巡る、弓枝夫人と毬子夫人との  
三角関係は、世間によくある本妻と妾の関係  
とは少々趣を異にしていた。

好造は、弓枝夫人と毬子夫人のいずれをも  
まだ正式には籍に入れておらず、彼女たちは  
二人共、いわゆる内縁の妻だったのである。

最初、好造が妻として迎え入れたのは、も  
ちろん年上の弓枝夫人の方だった。好造は、  
それからしばらくは彼女と二人だけの夫婦生  
活をしていたが、やがて毬子夫人を、ふたり  
目の妻として家に引っ張り込んだのである。

尤もこの時は、人一倍潔癖性の弓枝夫人の猛  
烈な反対に遭ったのは今更言うまでもなかつ  
た。また、純情な毬子夫人を少なからずとま  
どわせたが、好造は金の力にモノ言わせて、



強引に彼女を第二の妻にしてしまったのだ。確かに好造は好色漢であり、稀に見る精力絶倫な男だったので、弓枝夫人だけではもの足らなく思う故もあるにはあったが、実は、彼の本当の目的は別にあつたのである。

それは、弓枝夫人と毬子夫人に女斗美をさせることだった。もともと好造は、変態的な性格の持ち主だったが、特に、女相撲や女子レスリングなどの、女同士の格闘技に異常なまでに興味を持っていたのである。

好造は若い頃から、女斗美に関するあらゆる記事や文献を読み漁り、写真を蒐集した。また、女斗美映画は勿論のこと、女相撲や女子プロレスの興行は欠かさず観に行った。女子レスのショーをやっているキャバレーに、毎晩せっせと通いつめたこともあった。だがそれらのことは、当然ながら唯、観るだけの興味でしかなかった。

病膏盲に達した好造は、遂に馴染の芸者や行きつけのバーのホステスを口説き落ととして彼女たちに相撲を取らせたりレスリングをやらせたりしてみたが、大金を費やした割には余り大したこともなく、本当に満足するまでには至らなかった。彼女たちの女斗美には、真の意味で迫力がないのである。尤も、金の

ために渋々やっている彼女たちに、それを要求するのは土台無理な話だったのだが……。

しかし、好造の女斗美に対する慾望は、年と共に一層激しくなってきた。自分の思い通りに女斗美をさせることの出来る女性が欲しかった。そして、彼女たちに、女性特有の斗争本能をムキ出しにした肉弾相搏つ凄まじい女斗美をやらせてみたかった。だがそれを求めるには、もはや自分の妻よりほかにはなかった。

かくして好造は、もともと女斗美をさせるのが目的で、二人までも妻を持ったわけである。それ故にこそ、人並外れた背の高い弓枝夫人と人一倍太った毬子夫人の、それぞれ異なった体格の女性を、わざわざ選んだのだ。好造は毬子夫人を二人目の妻としたその日から早速、彼女たちに相撲を取らせようとした。しかし、その様な馬鹿げた事を、彼女たちが簡単に承知する筈がなかった。殊に、人一倍気位の高い弓枝夫人は、女性がお相撲するなんて！と、頑として応じなかった。だが彼女たちに女斗美をやらせることが出来なかつたら、好造としては世間の非難を浴び大金を投じてまで二人も妻を持った意味が全く無くなるのだ。好造は、脅したりすかした

りして、彼女たちに連二無二、相撲を取らせようと努力し始めた。

最初の内は拒んでいた彼女たちも、好造の余りのしつこさに根負けして、嫌々ながら相撲を取ることを承知した。好造は、雀躍りせんばかりに喜んだが、いざ取組みとなると、その内容たるや、先の芸者やホステス達の相撲よりもっとひどく、それは相撲などと呼べるような代物ではなかった。弓枝夫人も毬子夫人も、お互いに尻っぴり腰で何もせず、唯抱き合っているだけだった。

無理もない。普通の家庭に育った彼女たちに、女同士で取っ組み合いをした経験などある筈がなかった。まして、いきなり相撲を取らされたのである。彼女たちが、一体どうしているのか分らなかったのも当然だった。尤も、この事は好造も充分承知していた。好造は、彼女たちに女斗美のイロハからじっくり教え込んでいくことにした。

かくして、好造の彼女たちに対する女斗美教育が開始されたのである……。

好造は、先ず四股の踏み方、蹲踞の構え、仕切りの方法など、相撲の基本的なことから教えていった。最初、弓枝夫人と毬子夫人も好造が気まぐれで始めたことだし、いずれそ



の内、止めさせてくれるだろうと、嫌々ながらも言われた通りにやっていたが、好造は止めるどころか、日を追って女斗美教育は激しさの度を増すばかりだった。弓枝夫人も毬子夫人も、好造のあまりの熱心さに、ただ呆れ果て、彼の異常な神経を疑いはじめた。

好造は、弓枝夫人と毬子夫人に女斗美を教え込む一方、彼女たちの肉体の開発にも全力を注いだ。いくら自分が巨萬の富を有しているとは言え、彼女たちはやはり正常な神経の持ち主である。毎日羞かしい事ばかりやらされたら、嫌になってこの家から逃げ出さないと制限らない。もしそうなれば全く元も子も無くなるわけだ。だが、彼女たちを肉体の虜にさえしておけば、その心配はなかった。

好造は、その点に関しては絶対自信があった。彼は、その道の大家を誇るだけあって、人も羨む素晴らしい条件を備えていた。しかもその上、超人的なスタミナの持ち主である好造の、昼夜を間わぬ努力は意外に早く効果を上げていった……。こうなればもうシメたものである。好造は、彼女たちの肉体開発を推し進めると併行して、彼女たちに対する女斗美教育をさらに厳しくしていった。彼女たちに思いのまま女斗美をさせるためには、

一日も早く彼女たちを、完全なメトマーズに仕上げる必要があったのだ。彼女たちが自分に惹かれはじめた事を確認した好造は、遂に予てから秘かに用意していた切り札を持ち出したのである。

それは女の悲しい性<sup>さが</sup>を利用した最も残酷な方法だった。つまり、その日の女斗美に勝った方を、その夜の妻にすると言うのである。尤もそれ迄も、勝った方にはダイヤの指輪やミンクのコートなどの高級品をどしどし買いつけ、彼女たちの斗争意慾を駆り立てていたが、これは何物にも代えられぬ褒美だった。だが、これほど愛のモラルを踏み躪ったやり方はなかった。女性の身で、破廉恥な取っ組み合いをやらされた上、勝った場合のみ愛して貰えると言うのだから、弓枝夫人と毬子夫人にとってはこれ以上の侮辱はなく、その道徳を無視した非人間的なやり方には、憎みても余りあるものを覚えた。だが悲しい哉、彼女たちは、すでに好造の虜になっていた。彼女たちは、心の中では好造を憎み軽蔑しながらも、また、自分たちの動物的な本能を恥じながらも、いつしか女斗美の泥沼に引きずり込まれていった……。

それから三年、好造を巡る弓枝夫人と毬子

夫人の破廉恥な生活は、いまなお日夜続いているのだった。

### (三)

その夜、弓枝夫人は、好造の妻として狂わんばかりに激しく燃えた。彼女は、このところずっと毬子夫人に負けてばかりいて、悶々として日を送っていたのだが、今日は久し振りに勝つことが出来たのである。無理からぬことだった。これは好造にとっても同様だった。彼も、このところ、太った毬子夫人ばかりが勝ち続けているので、飽きかけていたところだったのである。当然二人の気持は新鮮さがよみがえって、互いの求め合いはいつ終るとも知れず続いた……。この頃、別の部屋では、毬子夫人が一人、悶々として寝つかれぬ夜を過ごしていた。彼女の胸は弓枝夫人への激しい嫉妬でいまにも張り裂けそうだったのである。

こうして同じ屋根の下、愛慾の明暗二筋、彼女たちの哀歓をよそに、冬の夜は深々と更けていった……。

翌朝、三人の男女は、朝の食卓にふたたび顔を合わせた。弓枝夫人は、いかにも満ち足



りた顔をしていた。媚びるように好造をチラッと流し眼に見る彼女の表情が、それをはっきり物語っている。

『毬子さん、昨夜はよく眠れて？　フフフ』

弓枝夫人は、わざと毬子夫人の顔を覗き込むようにして話し掛けた。そして、好造と顔を合わせてはクスクス笑い合う。毬子夫人は俯向いたままぐやしそうに唇を噛みしめる。おそらく昨夜は一睡もしていないらしく、眼が赤く充血していた。

窓の外は、一面の銀世界だった。

『ずいぶん積ってるなあ。多分、十センチ以上、積ってるぜ』

何気なく庭に眼をやった好造は、

『そうだ！　今日は一つ趣向を変えて、ヤマゲイコをやるうじゃないか』

何を思いついたのか突然、彼女たちを振り返った。『……？』弓枝夫人も毬子夫人も、最初、好造の言った意味が分からなかった。だが、彼の説明を聞いた途端、思わず身震いした。

山稽古とは相撲の専門用語で、土俵以外の場所で稽古することを言う。

好造は、夫人たちに相撲を取らせるため、わざわざ土蔵を改造して本格的な土俵を造っ

ており、彼女たちはいつもそこで相撲を取ら

されていたのだが、今日は山稽古、つまり、雪の降り積っている庭で相撲を取らせようと

言うのだ。彼女たちが眉をひそめるように、

まったく好造ときたら何を言い出すか分かつ

たものではなかった。いくらこの屋敷が高い

塀に囲まれ外部から覗き見される心配はない

とは言え、太陽光線の下に裸身を晒して相撲

を取るなど羞かしくて出来たものではなかつ

た。第一、冷たくてたまったものではない。

想像しただけでも背筋が寒くなる程だった。

『いくら何だって、それはあんまりですわ』

さすがの弓枝夫人も、媚を忘れて思わず抗

議した。だが好造は、一旦言い出したら後には絶対、引かない男だった。

『毬子。君は、どうだ！』

好造は、毬子夫人の方を振り返った。だが

彼女の返事は意外だった。

『いいですわ！　私はやります』

毬子夫人は、決然として言い放ったのである。

今まで、自分の方から相撲を取ろうなど

とは言ったことのない彼女だったが、今朝は違っていた。

昨日、弓枝夫人に負けた上に、

散々いじめられたのがよほど無念だったに相違ない。

毬子夫人にとって、雪の冷たさなど

もはや問題ではなかったのだ。

『毬子は、ああ言っているんだ。さあ、君も早く準備しろよ』

好造は、まだ尻込みしている弓枝夫人を盛んに、けしかける。

『弓枝さん、どうしたの。やりましょうよ』

毬子夫人にまで促されて、さすがの弓枝夫人も嫌とは言えなくなってきた。

それよりも年下の毬子夫人に挑戦されて逃げるのは、勝ち気な弓枝夫人の性格が許さなかった。

『いいわ！　やりましょ。昨日みたいに、またやつつけてやるから』

弓枝夫人は、傲然と言い返した。

『よし！　そうこなくちゃ！　そのかわり今日勝った方には、ミンクの防寒コートを買ってやるぞ。そして、朝から冬眠とシャレ込むことにするか。ワッハッハ……』

好造は、いかにも愉快そうに高笑いした。

まったく、神をも恐れぬ男である。だが、冬眠と聞いて、彼女たちの眼が異様に輝いた。

どうにもならない女の悲しいサガだった。

『さあ、早く準備するんだ！　雪の解けない内にしないと面白くないぞ』

好造は、彼女たちを急き立てる。弓枝夫人も今となっては仕方なく、渋々立ち上った。



## (四)

お互いに相手に対する激しい嫉妬と憎悪に駆られて、庭で相撲を取ることを決意した彼女たちだったが、冷たい雪の上に素足で立つてみると、肌を刺す寒さと羞かしさで、さすがに身の竦む思いだった。だが、裸身にきりと禪を締めて雪の庭に降り立った彼女たちの姿は、さすがの好造をも唸らせるほどの素晴らしいものだった。

すらりとした長身の弓枝夫人は、抜けるような色白の素肌に、目の覚めるような深紅の禪をつけている。一方、堂々たる肥満体の毬子夫人は、その小麦色の素肌に、鮮かな朱色の禪を締め込んでいた。それが、折からの朝日に映えて、雪の白さと美事なコントラストを描き出している。

『今日は土俵がないから、突き出しや押し出しでは勝負がつかないぞ。どっちか相手を雪の上に倒した方が勝ちだ。庭全体が土俵の積りで思いきりやるんだぞ。いいね!』

取り組み開始に先だって、好造は、その日のルールを宣告する。だがこれは彼女たちにとって、いつもの相撲よりもさらに苛酷な勝負だった。何が何でも相手を雪の上に組み伏

せなくてはならないのだ。特に、弓枝夫人にとっては不利な条件だった。何故ならば、彼女は、四つ相撲よりも、むしろ離れてすまふ突張りを得意としていたからである。

さて、弓枝夫人と毬子夫人は、庭の中央に三尺程の距離を隔てて向かい合った。そしていつものように四股を踏もうとしたが、雪が深いのでなかなか思うようにはいかなかった。殊に、体重の重い毬子夫人などは足が雪の中にめり込む始末である。それでも何とか、彼女たちは躊躇の姿勢をとって向かい合った。

お互いの眼をじっと見交わす二人の視線に早くも凄まじい火花が飛び散った。

『双方、油断なく見合って!』

行事役の好造の声に応じて、彼女たちは立ち上り、足の位置を決め、サガリを捌いて仕切りに入る。

肥満の毬子夫人は、いつもの通り両足を大きく開き、腰を充分割ってぐっと仕切る。彼女は太っているだけになかなか堂々たる仕切りである。これに対して長身の弓枝夫人は、足の開きも狭く、例によって腰高の仕切りだった。だが、高く持ち上げた大きなお尻に、深紅の禪が深く喰い込んでおり女相撲ならではの妖しげな魅力が好造を宇頂天にさせる。

毬子夫人の仕切りには、いつになく激しい気合いがこもっていた。斗志満々、顔面を紅潮させて上目使いに弓枝夫人の顔を睨みつける。この毬子夫人の凄まじい気迫に押されて弓枝夫人は思わず相手の視線から眼をそらしかけたが、勝ち気な彼女は、気を取り直して懸命に毬子夫人の顔を睨み返す。だが、顔面蒼白、緊張した表情で、明らかに気合い負けしている様子だ。いつもなら、ここで当然、待ったをして、二、三回の仕切り直しになるところだった。

しかし、先程からの身を切るような寒さに耐えかねたのか、*「えいっ!」*と仕掛ける毬子夫人の声につられたように、弓枝夫人は腰高のまま立ち上った。そして、いきなり相手と四つに組み合った。否、組まされたのである。いつもだったら弓枝夫人は、立ち合い激しく突張って、そう簡単には相手に組ませないのだが、今朝は、いとも易々と毬子夫人に四つ身を許してしまったのだ。

やはり最初から、相手の斗志に圧倒されていたのだろう……。

得意の右四つに組み勝った毬子夫人は、例によってすかさず寄って出ようとした。しかし深い雪に出足を妨げられて、なかなか思う



様にいかなかった。何しろ、十センチ以上も積っているのだ。だがそれでも彼女は、遮二無二、寄って出た。もちろん弓枝夫人も懸命に寄り返そうとしたが及ばず、後退を余儀なくされる。だが彼女も、深い雪に思わず足を取られた。いつもの土俵だったら、巧みに廻り込んで逃れることも出来るのだが……。

こうして、弓枝夫人と毬子夫人は、深い雪に足を取られながらも必死に揉み合った。

彼女たちが動く度に、滑らかな雪の上に彼女たちの足跡が次々と造られていった。深くめり込んでいる足跡は、言うまでもなく太っている毬子夫人のものである。行司の好造も雪に足を取られ、覚束かない足取りで彼女たちの周囲を廻る。全く御苦労な話である。雪の上の相撲でいつもと勝手が違うせいかな、なかなか勝負がつかなかった。弓枝夫人と毬子夫人は、しばらく動きを止めて互いに呼吸を計り合う……。

風一つない静かな雪の庭に、ガップリ四つに組み合ったまま、ジツとして動かない彼女たちの姿は、まさに一幅の絵だった。唯、彼女たちの激しい息使いで吐くその白い息だけが、彼女たちが動物？ であることを証明している。時折、松の枝に積っていた雪がバサ

ツと音を立てて落ちる……。

『ハッケヨイヤ！』

ジツとして動かない彼女たちをけしかけるように好造が声を掛けた。と……突然、毬子夫人が攻勢に出た！ 彼女は、長身の弓枝夫人の両腕を引きつけるや、一腰入れて彼女の身体をグイと吊り上げたのである。忽ち、体重の軽い弓枝夫人の両足が宙に浮く！ 彼女は、長い両脚をバタツかせて必死に残そうとする……。

だが毬子夫人も、折角相手を吊り上げてみたものの、雪に埋った足の運びが思うようにならなかった。第一、土俵がないから、吊り出しでは勝負がつかないのだ。吊り落として言う手もあるにはあるが、まさか女の力で、そこまで出来る筈がない。だが今日の相撲は何が何でも相手を雪の上に倒さねば勝利を納めることが出来ないのだ。

吊りを止めた毬子夫人は、今度は、投げ業で勝負に出た。右下手から強引な投げを打ったのである。尤もこの投げも、雪に足を取られていつもの様な威力はなかったが、相手を脅やかすのには、かなりの効果があった。弓枝夫人もまた雪に足を取られるため、充分足を送って残すことが出来ないのである。

毬子夫人の下手投げに、弓枝夫人の長身がグラツと傾いた！ そこをすかさず毬子夫人が、肥軀をおおるようにして猛然と寄って出た！ この激しい寄りに、相手に両腕を強く引きつけられて腰が伸び切っていた弓枝夫人は、足が纏れて大きくのけぞった！ そこを「得たりと」とばかり、毬子夫人が右差手をつきつけるようにして肥軀をあずけると、長身の弓枝夫人も遂にたまらず、腰がぐだけて雪の上に仰向けにドツと倒れた！ 毬子夫人もまた、勢い余って相手の胸の上に重ね餅、どんとばかりにのしかかる！

毬子夫人の美事な寄り倒しの勝ちである。行司の好造は、軍配をサツと彼女の方に上げた。相手の六三キロの重量で乳房を強く圧迫された弓枝夫人は、一瞬気が遠くなり、直ぐには起き上れない。だがそれにもまして、素肌の背中に渗みる雪の冷たさは、それこそ心臓が止まりそうだった。彼女は、ようやく雪の上から起き上った。唇を噛みしめた彼女のくやしそうな顔が印象的だった。

『やったわねっ！ 今度は負けないわ！ さあ、もう一度やるわよ！』

弓枝夫人は、眼をつり上げて毬子夫人に言った。



『いいわよ！ 何度でもお相手するわ！』

毬子夫人も負けずに言い返す。『さあ！

いよいよ面白くなって来たぞ』と、好造は内心、ほくそ笑んだ。

毬子夫人と弓枝夫人は再び庭の中央に向かい合って構えた。毬子夫人は、さっきの様に腰を落として仕切ろうとしたが、弓枝夫人は手も下ろさず中腰の姿勢から早くも突っかける。だが、これは明らかに無理だった。当然仕切り直しである。再び好造は、彼女たちの呼吸を合わせにかかる。

二回目、阿吽の呼吸が合った両夫人は、ほとんど同時に立ち上った！ 例によって毬子夫人が組みつこうとするのを、弓枝夫人は嫌って激しく突き放す！ そして、すかさず突張って出ようとしたが出足がなく、いつもの様な突っ張りの威力がなかった。やはり雪のせいである。それでもしばらくの間は、毬子夫人の突進を防いでいたが、結局、彼女の右差しを許してしまった。

毬子夫人は、素早く左上手で禪を引きつける！ 弓枝夫人も止むなく右下手、左上手の両禪を引き、四つ身に渡り合う！ 彼女は、又もや不意な四つに組まされたのである。体重において劣る弓枝夫人は、相撲が長引け

ば不利を免れないのだ。彼女は、素早く先制攻撃に出た！ 長い脚を飛ばせて懸命に右外掛けで攻めた。弓枝夫人は、自分の長い右脚を毬子夫人の太い左脚に絡ませるや、長身を浴びせるようにして彼女を一気に掛け倒そうとする！

もともと弓枝夫人は人一倍背が高いだけにその外掛けにはかなりの威力があったのだ。

毬子夫人は、足を踏んばり、顔を真赤にして懸命に耐える！ だが、いくら毬子夫人が腰が良いとは言え、十センチ以上の身長ハズンディは何としても苦しかった。相手の上背を利した外掛けの強襲に、ともすれば腰が砕けてしまいそうだった。遂に毬子夫人は、左上手を放し、苦しまぎれに弓枝夫人の首を巻く！ だが弓枝夫人は、委細構わず攻めたてる！ 毬子夫人は、弓なりになりながらも、右脚一本で懸命に耐えた！

お互いに軸足が雪の中にめり込め、弓枝夫人のカモシカのような脚と、毬子夫人の大根脚が激しく絡み合う。お互いに力の限りを尽しての凄まじい攻防戦だった。

やがて弓枝夫人に焦りの色が見えてきた。彼女は、ここで一挙に勝敗を決すべく、激しく外掛けを浴びせながら、毬子夫人にのしか

かった！ だが、勝ちを焦った弓枝夫人は、相手の両禪を引きつけるのを怠っていた。これがいけなかった。毬子夫人は、右脚一本で懸命に踏ん張りながら、絡まれた左脚を跳ね上げ、左腕に抱え込んでいた弓枝夫人の首を強く捻って、自ら倒れ込むようにして左にグイと切り返した！ 河津掛けである。

勝敗は一瞬にして逆転した。二人共に雪の上に倒れたが、上になっているのは、言うまでもなく毬子夫人の方だった。弓枝夫人は九閃の功を一簣に欠いだわけである。彼女の無念さは察するに余りあるものがあつた。

『もう一回やるわよ！ 今度こそ、絶対に負けないわ！』

余程くやしかったのだろう。弓枝夫人は、柳眉を逆立てて毬子夫人に迫った。

『いいわよ。いくらでもお相手するわ！』  
毬子夫人も、敢然として相手の挑戦を受ける。

## (五)

今まで夫人たちが相撲を取った場所は、雪がかなり踏み荒されたので、好造は彼女たちに別の場所に移るように命じた。夫人たちは雪の深い処では相撲が取りにくいとして、む



しろ、雪を踏み固めている元の場所を希望したが聞き入れられなかった。庭は広いんだ何も、同じ処でばかりやることもないじゃないか」と言うのが好造の言い分だったが、実は、加虐趣味の好造は、夫人たちが雪に足を取られてヨロメキながら闘うのを、わざと見たかったのである。

さて、彼女たちはやむなく場所を代えて、真新しい雪の上に対峙した。

すでに二敗を喫している弓枝夫人の表情には、焦りの色がありありと窺われた。従来、彼女たちに課せられたルールはこうだった。すなわち、彼女たちは毎日五、六回の相撲を取らされ、一つでも勝ち星の多かった方が、その日の勝者と認められ、その夜の好造のお相手をさせて貰う……と言うわけである。弓枝夫人が、かなり焦っているのも無理なかった。これに対し毬子夫人の方には、すでに二勝しているだけに余裕があった。彼女は、あと一勝で今日の勝利はほぼ確実なのである。

さて、好造の軍配かえって両夫人は立ち上った！ 立合い、弓枝夫人は、気負い込んで突っ張って出ようとしたが、やはり雪に足を取られて思う様にならなかった。それでも彼女は懸命に突っ張ったが、またしても毬子夫

人に組み止められてしまった。どうやらこの雪は、四つ相撲を得意とする毬子夫人の方に幸いしたようである。難無く相手を右四つに組み止めた彼女は、素早く先手を取って攻めて出た！

毬子夫人だって何も好き好んで相撲を取っているのではないのだ。まして、冷たい雪の上で何時までもこんな事をしていたくはなかった。彼女が一刻も早く今日の勝負のケリをつけてしまいたいと思ったのも当然である。

毬子夫人は、左上手からの強引な投げを打つ！ 弓枝夫人はグラッとしたが、懸命に右から下手投げを打ち返して残す！ だが毬子夫人は攻撃の手を緩めなかった。彼女は、あくまでも投げ業で勝負をつける積りだった。毬子夫人は相手が必死に下手投げを打ち返すのも構わず左から上手投げを連発し、最後、右差し手を抜き弓枝夫人の首を巻くや、左から強烈な上手投げを放てば、弓枝夫人も遂にたまらず、大きく一回転して雪の上にドツと投げ出された。

好造は、軍配をサッと毬子夫人に上げる。毬子夫人が三連勝。これで今日の勝負は大体決まったようである。だが、勝ち気な弓枝夫人は黙っていないかった。

『毬子さん！ 貴女まだ三勝したばかりじゃないの！ まだ勝負はついていないわ！ さあ、もう一回やるわよ！』

弓枝夫人は身体についた雪を払い落としながら毬子夫人に詰め寄った。彼女の言い分も尤もだった。いままで好造は、彼女たちに五番か七番の相撲を取らせ、勝ち点の多い方を勝者と決めていた。もし今日の相撲が七番勝負だとすると、どっちか四勝しなければ勝負が付かないわけである。尤も、加虐性のある好造としては、成るべく多く彼女たちに相撲を取らせた方が面白いのだ。彼は、もう一度彼女たちを斗わせてみることにした。

こうして彼女たちは、四たび、雪の上に睨み合った。カド番に追い込まれた弓枝夫人は眼をつり上げて必死の表情だった。彼女は仕切りもそこそこ早くも突っかけた。だが毬子夫人はこれを受けず、仕切り直しとなる。

二度目。毬子夫人は遅れず、腰を割って慎重に仕切る。こう相手に充分になられては、弓枝夫人の方が立てなかった。また仕切り直しである。

三度目。気合して彼女たちは、ほとんど同時に立ち上った！ パシッ！ 弓枝夫人は、いきなり右から相手の頬に強烈な張り手を喰



わせた。彼女としては、窮余の一策だったのだ。確かに、この奇襲は効果があつた。弓枝夫人は毬子夫人が思わずたじろぐ隙に、一気に突っ張って出ようとした。しかし、気ばかり焦って出足が伴わないため、また毬子夫人に左上手から引っ張り込まれてしまった。

勿論雪のせいもあったが、今日の弓枝夫人は明らかに精彩を欠いている様だった。だがそれでも彼女は、右差の左前陣を引いて、頭を下げて懸命に喰い下った。長身の弓枝夫人が、自分より十センチも背の低い相手の胸に頭をつけて喰い下ったのである。日頃、気位の高い彼女だったが、すでに三敗して窮地に追い込まれた今となつては、もはや体裁など構っていらなかったのだらう……。それほど弓枝夫人は必死だったのである。

これには、さすがの毬子夫人も弱った。

彼女としても、自分よりも遥かに背の高い弓枝夫人に頭をつけて喰い下られ、些か勝手が違ふのである。毬子夫人は、右上手が引けないまま、止むなく弓枝夫人の首を上から抱え込んで油断なく構える。こうなれば弓枝夫人の方も迂濶には出られなくなった。下手すると相手の重量に押し潰されてしまうのだ。

両夫人は、そのままの姿勢でジッと相手の出

方を窺った……。

最初の頃は寒さに震え鳥肌立っていた彼女たちだったが、さきほどの激しい相撲でお互いの身体は、ジットリと汗ばんでいる。

だが、疲労の度合いは、弓枝夫人の方が遙かに大きかった。彼女は、氣息奄々として毬子夫人に喰い下っている。やはり、昨夜の疲れがある故だった。相手に左上手を強く引き付けられて、苦しそうに振れている彼女の大きなお尻が、それをはっきり証明している。

だがこのままでは、ジリ貧に陥るばかりだった。弓枝夫人は、最後の力を振り絞って必死に攻めて出た。彼女は、長い両腕を伸ばして相手の太い左脚を抱えるや、懸命に渡し込もうとした。だが、毬子夫人の力が優っていた。彼女は、両手で弓枝夫人の首を挟みつけるようにして抱えるや、力まかせにグイッと左右に揺さぶった！ 合掌捻り、俗に言う徳利投げである。この手は、よほど力の差がない限り滅多に極まるものではなかったが、疲労困憊して足の纏れている弓枝夫人は、これさえも耐えることが出来なかった。彼女は、毬子夫人の荒業の前に遂にたまらず、モンドリ打って雪の上に投げ倒されてしまったのだ。

四対〇、毬子夫人の完勝だった。昨日の屈辱

に発憤した彼女の、いわば女の執念がもたらした勝利だった。さすがの好造も、それを認めるよりほかなかった。

『今日の勝負はこれまで。毬子の勝ちだ』

好造は、毬子夫人の勝ちを宣した。敗れた弓枝夫人はようやく起き上り、さも無念そうに毬子夫人を睨みつけ、好造の方を見て何か言いたそうだったが、やがて、くやし涙を隠すようにその場から走り去った。毬子夫人はほっとした表情で好造を振り返った。彼女の顔には、つい今しがたまで見せていた凄まじい表情はすでに消えていた。男に甘える女の顔である。勝った毬子夫人は、さすがに喜びの色を隠し切れない様子だった。彼女には、勝利の報酬として、このあと好造と冬眠？を共にする歓びが待っているのだ。

一方、敗戦に氣落ちした弓枝夫人は、やはり冷たい雪の上で相撲を取らされたのが祟ったのか、ついに風邪を引いて、それから数日の間、寝込んでしまった。毬子夫人が喜んだのは言うまでもない。彼女は、不戦勝という思いがけない拾い物？をしたわけである。





作

創

## 魔性のもの

前篇

保藤久人

(一)

疾走する車は、都心を遠く離れた。

いったい、どこへ行くのだろうか？

バック・シートの片隅へ身を沈め、江崎順子は、からだの奥底からせきあげてくる不安感をねじ伏せようとあせる。握り締めたこぶしに力がいり、ひしと肩がすくんだ。

ここは、どのあたりかしら？——

暗い夜道を探ろうと目をあげると、前のシートが気になる。運転席が逆になった馴れない外車は、豪華なクッションまで坐り心地が悪く、いっそう不吉な思いをつのらせる。居ても立ってもいられない、いらだたしさとは

こんな気持を指して言うのかも知れない。

あわててはいけない。落着くのよ——

強引に押しつけられた使命感をほろにがくかみ締め、運転手の手前、うわべだけでも冷静さを取りつくろおうと懸命な努力をかさねながら、順子は、緊張した自分の顔は、きつと青ざめて醜くゆがんでいるだろうと思う。だが、つきまとう不安の翳りと、空恐ろしい恐怖感を、拭い消すことはできそうもない。ひとりの女が意思を束縛され、どこか遠くへ運ばれている。未知の世界へ連れ去られていく——。そんな思いが、しきりだった。どれくらい走ったのか見当もつかないが、車は、ようやく目的地へ着いたらしい。

奥深いその建物は広い庭園に囲まれ、暗い茂みが一段と無気味だ。意識すると、冷たい風がスツと首筋を撫で、凍りつくように皮膚が栗立つ。ひとりでに身ぶるいが出た。

気がつくとき、かわいらしいボーイが彼女を出迎え、うやうやしく頭を下げている。

痛く唇をかみ、つきつめた緊迫感といっしよに、順子はボーイのあとへついていく。

広いホールは、向こう正面にシャンデリアが輝き、十数名、人々の影がよく見えた。

光が淡く、翳り深い三方には、観葉植物で背後を飾り、装いをこらしたテーブルと、ゴージャスなボックス・シートが並んでいた。

ボーイにうながされて、あいた席へすわり



順子は、そっとあたりを見まわす。

男よりも女のほうが多く、若いひとよりも中年婦人の姿が目立つ。そして、ドレスを着たひとよりも華やかな和服姿のほうが多い。

人々は、勝手気ままに群り、いかにも愉しげに談笑している。たいていの人がグラスを手にはしていた。どういう名前の飲み物なのか順子にはわからない。カクテル・グラスは形さまざま、色も有無まちまちであった。

全体のムードから察してカクテル・パーティーとでもいうのであろうか。とは言え、マスクで半顔をおおった人も多く、そのあたりに、妙に秘めやかな香りがただよっている。

ホールの中央、化粧張りのフロアリングでは、仲よく踊っている何組かの人がいた。

出席者の性別から算出して無理からぬことだが、パートナーは女性のほうが多い。女同士でチーク・ダンスをしている。その姿は、男と女のカップルを見馴れている順子の目には、変になまなましい奇異な感じを与えた。すこし浮かれて乱れた気配——。ただれた愛欲——。悪徳に類した頹廢的な甘さ——。

そんなムードも充溢していた。

しかし、順子が想像していたような乱痴気騒ぎではなく、はしゃいだ空気の中でも、お

のずと気品をにじませていた。

吉村保の話によると、今夜は、A代議士夫人、B商事の社長夫人、作家のC夫妻、重役夫人のDやE、それにテレビタレントのFもレディ同伴で参加しているはずだと言う。

一向に落着かない腰をもじもじさせて、それら人々の動きを目で追っているうち、順子の気持もいくらか静まってきた。

注意深く瞳をそそぐと、確かに、週刊誌などのグラビア写真でお馴染みの顔も混じっている。吉村保の言ったとおり、この会合は決まっていたがわしいものではなく、割合名の知れた人々の集まりであることはほぼ間違いないさそうで、自分と同じような年の若い男女が数人いて、婦人たちのお相手をしているらしいのがわかった。

順子にとって意外だったのは、面識のある「TS商事」常務夫人の姿を見たことだ。山辺常務なら吉村保の直接の上司である。

この集会への参加資格について、吉村のコネは、多分この山辺夫人の推せんによるのだろうと、おおよそのことが察せられた。

そうだわ。困ったことが起こったら、山辺夫人にすがればよい。ああ、助かった——

上流社会の婦人たちが群れつどう晴れがま

しい夜の社交場で、旧知の人にめぐり会えたのはなんと言っても心強い。山辺夫人の姿を見守りながら、順子は急に気が楽になった。

とは言うものの、その山辺夫人は、視線が合ったとき順子が腰を浮かしてはほ笑みかけても、そ知らぬふりをして行き過ぎていく。

無理もないわ。今夜は内密だもの——

順子は善意に解釈する。と、ふいに稲妻に似たひらめきが彼女の脳裏をよぎった。

彼は、山辺夫人に頼まれたのでは？——

部下の吉村に命じ、自分に奇怪な依頼をしたのは、山辺常務の意図のような気がした。

「フライデー・クラブ」と称し、  
「金曜会」とも呼ばれているこの会の目的は不明だ。

気まぐれな有閑婦人が主催する退屈しのぎの寄り合い——。そんな気配が濃厚である。

しかし、全く怪しい節がないでもない。

この邸へ着くと同時に、他人から尋ねられたときの返事を吉村から教えられていた。

「S夫人の白い花——」そう答えるのだ。

なんのことが、理由は全くわからない。だが順子は、その言葉が非常に重要な意味を持つ符牒であることを、先刻知った。

「アルファベットは？」とボーイに問われ、



その符号を言ったとたん、相手の態度は一変して気味の悪いほどうやうやしくなった。

順子はふいにハツとする。さきほどボーイからもらったメダルを、ハンドバッグの中へ入れたまま忘れてしまっていたのだ。

「あなたさまのお名前は、ホワイト・シックスです。どうぞお忘れなく。これを——」

ボーイは最敬礼をして大きなメダルをくれた。いぶし銀のような鈍い艶があった。古代の神鏡を思わせる精巧な彫刻が周囲を飾り、図柄は連鎖的な裸女のからまりだ。まん中にくつきりとへ6の白文字が浮かび、裏をかえすと、花文字でへSと刻まれていた。

順子は、持ち重りのするそのメダルをふしぎそうに眺め、止めてある金色の鎖をはずしてネックレスのように首から下げた。

さて、これからさき何が始まるのか、自分がどうなるのか、一切順子にはわからない。

人々の華麗ないろどりを慎ましく見守り、また新しく不安の影が脳裏を去来する。愛人吉村保の面影をひしと胸に抱き締め、彼女はひとりさびしく心をおのかせていた。

## (一)

江崎順子の愛人、吉村保には、病弱な妻が

いた。子どもはないが愛妻家だという噂だ。そんな相手だと知りながら、ふとしたことから肉体をゆるし、もう半年以上になる。

二十四歳——。柄は小さいほうだが、はちきれんばかり清新な肢体美にあふれる順子の周辺に、彼女にふさわしい年ごろの男性がないわけではない。むしろ積極的にプロポーズする青年の数も多い。

にもかかわらず、そのときどき、彼女はふと奇妙なむなしさを覚える。青春の情熱を愛し、激しい欲望を肯定することはできるが、自分のほうからひたむきに心を傾けることができない。われながらふしぎだった。

そんな彼女が、ある日社用で吉村保に会った。地階の喫茶室へ誘われ、熱っぽい目で見つめられたとき、突然、不可解な戦慄がつかぬき、うろたえて真ッ赤になってしまった。

もう四十に間近いその相手は、中肉中背、これといって特徴のない平凡な男なのに、妙に順子の心を惹きつけるものを持っていた。

彼女がまだ幼いころに亡くなり、遠くおぼろな記憶だが、なぜかせつなく、あざやかな印象を心の奥深くにとどめている父の面影を感じさせ、亡父をなつかしむような甘ったるさがあった。もたれてすがりつきたくなる。

すべてを投げ出して頼りたいと思う奇妙な感情が、いつとき、彼女の心を支配した。

相手の誘いに快くうなずき、一度、二度。

そこまではよかった。デイトのたびに不可解な親近感にあやつられていたが、実際には、いたずら半分の遊びのつもりであった。だが三度目のとき、黙って別れることができず、はしたなさを恥じながら男の指をかじった。

そして、うるおい豊かな湯あがりの肌に男の手を感じた瞬間、全身、じーんとする麻痺感がひろがり、彼女は思わずあえいだ。

男の手は気味が悪いほど湿っていた。胸がすっぱり包まれ、肌に吸いつきもみしだく。

順子は快さに酔った。激しく皮膚を慄かせ不覚にも首をのけぞらせてもだえた。

閉じたまぶたの裏に、亡父の面影がほのぼのと浮かぶ。妖しく這いまわる触手を暖かい慈父のものと錯覚し、奇怪な想念の中で足の爪さきをシートにめり込ませていた。

その夜が契機となり、順子と吉村のデイトは、熱く蒸れながら秘めやかにつづいた。末端まで、快楽のありかをことごとく探査するような吉村に対して、ときには鋭く反撥したが、微妙な甘さに心を奪われ、日とともに夢中になっていった。



吉村の動作に極端な変化が現われたのは百日ほど経ってからだが、そのあいだに、順子のからだはすっかり馴致されてしまった。

どうも、  
 猛毒な毒蛇さながら、習性的な機敏さで鎌首を拾って喰らいついてくる手を、どうしても拒むことができない。魅入られたように毒蛇の蹂躪を許し、毒液によってたちまちからだじゅうが燃えつきてしまうのだ。

順子は、しだいに吉村が憎らしくなってきた。相手への憎悪とともに、感受性の豊かな自分の肉体を嫌悪した。愛欲の偽証行為……ただ、肌に触れられるだけで簡単にとろけ、燃焼してしまう自分が怨めしく、自意識の苦しさに耐えかねて呪わしく思うことが多い。

順子は、羽根をもがれた蝶であった。あてやかな肢体をくねらせてもだえる。そんな自分を気ままにあやつる吉村の動向を思うと、くやしさがこみあげてきて歯をかみ鳴らす。

だが、からだは自意識を嘲笑するかのよう甘く乱れ、毒蛇の翻弄に迎合し、荒されることを欲ぶかのごとく、無条件に降伏してしまふのだった。

吉村の魔の手が秘めた目的をあらわにしたのは、それから二カ月後のことであった。

順子は男の手をもてあそんでいた。それは確かに男のものとしてはしなやかだったが、かといって別段変わり映えもなく、見た目にも武骨さがにじみでている。強いて特徴はと言えば、ねばねばした気味の悪い暖かさだろう。実は、この妙な暖気が曲者なのだ。

自分の手を順子にまかせ、表情にうつろういろどりを愉しそうにうかがっていた男は、ふいに、かわいた声で笑った。

その声音には微妙な感情がこもり、順子の心身へ新鮮な感覚をそそぎ込んでくる。

悪感とも戦慄ともつかぬおののきにあらがひ、順子は、男の手を口に入れてかじった。

アッ、ツ。顔をしかめた男のうめき声をきき、本当に食い切ってしまったといっそう力をこめた。だが、もう片方の自由な手が動く、こんどは順子のほうがなやましげにうなりはじめる。怪しい声が低くくぐもる。

「ねえ、頼みがあるんだが――」

目尻に涙の露を光らせ、歯をくいしばって懸命に耐えつづけている順子をのぞいて、吉村は耳もとでそっとささやく。

順子の五感、男の手に集中していた。妖しい波紋が漸増し、皮膚と筋肉のうごめきだけが、男のささやきに対する応答だった。

「きいてくれないのかい、ぼくの頼みを」

吉村は意地の悪い休息をした。

「ア、は、はやく、言って……。なんでも、き……わ。はやく……」

「会社のために、どうしてもきみの手助けが必要なんだ。いや、ひいてはそれが、ぼく個人の成績に関連してくる。だから……な」

「なにを……すれば……いいのよ……」

「ある会合に参加してほしいのだ」

「か、会？ それ、な、なんのこと……」

思う存分、女の間を感覚をあやつり、もたえさせながら、吉村は冷静だった。

「うん、それはね。フライデー・グループ、通称『金曜会』といって、名流夫人たちのひそかな寄り合いなんだ。そう心配することはない。立派な奥さまのお遊びだから。ただね、パートナー同伴というきまりがある。それできみに、パートナーになってもいいわ」

「あ、あなたも、いっしょ……なのね」

「いやちがう。きみの相手は『ヘサクラ商事』の女専務だ。知っているだろ。淑徳婦人の代表みたいな噂されている佐倉夫人だ。相手が男ならきみに頼んだりしないさ。だって、きみはよく知って大切なひとだものな」

「いやだわ。女のひとの相手なんて……」



吉村は不敵な笑みをたたえた。

「アーッ。やめないで……」

「じゃ、ぼくの言うことを聞いてくれる？」

男は怪しい依頼をつづける。順子の理性は首をふることで拒否を表明していた。だが、からだは相手の要求を快諾し、うれしそうに華やかなアーチを描いて、徐々に沈んだ。

「当日着ていく服は注文しておく。洋装店からきみのアパートへ届けさせよう。きみは夜の九時に指定の場所で待つんだ。迎えの車がくるはずだし、そのとき、教えたとおりに答えたらいい。ねえ、頼むよ！ こんどのが成功すれば、ぼくは自分の身のまわりを整理する。正式にふたりいっしょになろうよ」

しばしば用いられる男の奸策だが、女は、結婚という名の好餌には意外ともろい。

実現する可能性がとぼしく、明らかに男の術策だとわかっていながら、すでに魔性にたましいを蝕ばまれた順子は、声をあげて泣き吉村にしがみついていた。

「きみには絶対に迷惑をかけないよ。上流社会の夫人たちのお遊びだから、仲間入りをすればきみにとってもプラスになると思う」

女が、もはや十分に屈従したと見えわめた

吉村は、かさねて言った。

「きみならきつと気に入られると思う。なに、たあいのないことさ。何か訊かれたら差しつかえのない程度にしゃべるだけでいい」そんなことがどうして会社の利益になり、また、彼のために役立つのだろうか？

順子はしーんとして、深い目色になった。「あせらず、ゆっくりと、いい加減な相手をしてればいいんだ。ただね……」

吉村はふと声を途切らせ、女の表情をうかがった。熱っぽい瞳の凝視がつづく。

「……佐倉専務は、いつも小さな手帳……メモのようなものを持っている。できればその中を見てくださいと助かるんだが……な」

瞬間、順子は、吉村の意図と、そして真意とを悟った。が、拒絶する気力はなかった。

「専務はたいそうおフロ好きだという話だ。そういう機会を狙って……ねえ、頼む！」

再び呼びさまされてからだ火を噴き、順子は、吉村の声をうわの空できいていた。

男の意図を察した日から、危惧をいだいた順子は、悩み深い逡巡をくり返している。

彼女はハミカド工業V企画部の助手だが、企画部は社内の中枢部に属し、会社の業績に

関する重要な事項のほとんどを検討する。したがって極秘に類する事柄も意外に多い。

くわしいことは何も知らないが、勤続五年に近い経歴の途中、余計なことまで覚えてしまったよう、自分の知識に不安を感じる。

吉村のことは、彼がハミカド工業Vの得意先AT S商事Vの技術課長だから、会社同士の連携も深く、苦にもならず問題も少ない。

ところが、吉村が彼女にホステス役を依頼した相手、佐倉夫人は、AT S商事Vとはライバルのハサクラ商事Vの専務である。商売仇も同様な相手会社の重役に近づき、手帳の中を盗み見ると言うのだから、これはどう考えてみても穏やかな話ではない。ハミカド工業Vの一社員としての立場からも、両社のかかわりには釈然としない不自然さがある。

産業スパイかしら？ いやな役だわ——

いくら愛する男のためでも、自分が勤めている会社に不利益なことはしたくないのが人情だ。スパイなんかになりたくない。

吉村は、そんなことはないと言った。だが順子は、脳裏をよぎる一抹の翳りを、どうしても消してしまうことができずにいる。

また、社業隆盛という大義名分をふりかざし、目的のためには人を押しのけ、踏みこじ



り、手当たりしだいに利用しようとする男の世界に失望した。そのようなモーレッツ社員を必要とする企業の冷酷さを、理くつとしてなら肯定できても感情的には反撥を覚える。

結婚！ という言葉を口にしながら、吉村の真意はエゴイスチックな出世欲だろう。

順子は、卑劣な手段を弄する男の真実がうとましく、憎悪をこめ、唾棄したいほどの心境だった。

結果的には男の要望を受け入れてしまったが、愛する人のために、などという感懐はなく、当分、男を失いたくなかったただけだ。

そして、金曜日の今夜、指定の場所へひっそりとたたずんでいたのである。

### (三)

「あら。あまりお見かけしないけど、どちらのお嬢さまかしら？ おかわいらしい——」

妙になれなれしい声が降りかかってきて、順子は電撃されたように身をすくめた。こわばった表情で後ろを仰ぐ。と、そこに大きな麗花が一輪、艶然と咲きほころびている。

目と鼻はマスクで隠れていた。薄い感じの唇、やや大きい口、いくらか角ばった顎のあたり、女ながらに意志の強さを示すようなき

びしさがあるが、すらっとした姿態は目にも麗しく、ふしぎな色香がふきこぼれている。

大きな地紋に小さな透かし模様を散りばめた黒一色のカクテル・ドレスは、胸もとを大胆にカットし、豊かな隆起の半ばが見えた。

素肌はしっとりとうるおい、真珠のネックレスがソフトな調和美をつくり出し、むきだしの丸い肩も艶々している。

「かわいいひと！ いいわ、すてきよ」

婦人のドレスは、背中が深いVの字にえぐってあった。張りのある美肌が黒い衣裳に引立ち、妙味豊かにひとときわ輝いて見えた。

婦人の美しさに順子はぼう然としていた。

どこのだれともわからないこの婦人の容姿は、一口に言って、まさに妖艶という形容がぴったりだ。もう四十を過ぎてゐるのだろうが、姿態からは若々しい精気がたちこめ、たちまち圧倒されてしまいそうなのだ。爛熟した肉体はむんむんするが、その香りにも高尚な気品がただよい、意外にすがすがしく鼻をくすぐる。その婦人が、あでやかな微笑も新たに彼女の傍へ坐り、もの馴れたしぐさでむきだしの腕を肩へまわしてくる。

順子は怯えた小雀のように身をすくめた。「あなた、おいくつ？ ならびなの？ もう

一つ下かな。アラ、いけないわ。レディにお歳をきいたりしちゃって……ごめんなさい」

婦人の手が肩から二の腕をやさしく撫で、思いがけない同性の愛撫を受けた順子は、その感触のおどましさに総毛立った。

「いま、ちょうど花の真ッ盛りってとこね。

このみずみずしいお肌、とってもステキよ」

今夜のために吉村が新調してくれたワンピースは、シックな中にもソフトタッチの充溢した上品なものだ。もちろん、順子が初めて身につけた高級品だが、それでもこの婦人のそばに並ぶと質素に見える。だが、ごく自然にナイーブな清楚感がにじみでていた。

「ほんに、あなたってすばらしいひとだわ」婦人は卒直に順子の美点を認めて称讃している。しかも本当の年令より若く見られ、これで喜ばない女は、まずいないだろう。

しかし順子は、なぜかこの濃艶な婦人に対して生理的な嫌悪を覚え、粟立った皮膚の静まるときがない。とはいえその嫌悪感も、ひとつは妖しい美しさへの反撥かも知れない。「あの……私、ホワイト・シックスですの。

△S夫人の白い花Vですが……」

逃げ出したくなった順子は、最後の切り札……魔よけの呪文のようにメダルを見せた。



だが婦人は、順子のその声をきくと、ふいに、はなやいだ声で、けたたましく笑った。

人々の視線が一斉に走る。射るような凝視を浴びていっそう窮地に追い込まれ、順子はただ目を伏せておろおろするばかりだ。すがりような瞳で山辺夫人の姿を求めた。

「いらっしやいな、ホワイトさん！」

満面に妖しい笑みをたたえ、婦人は順子の手を取った。やや強引な動作で引かれ、順子はホールの中央へ連れ出されてしまった。

「みなさまがたに、お目にかけます」

一瞬、華やいだ喧噪が嘘のように静まり、婦人の声が、さわやに室内を流れる。

順子は、自分が見せ物同様に扱われているのを知った。くやしいと思うよりも、こみあげる羞恥にからだが慄える。うなだれて目を閉じたが、きつき鋭く迫りくる人々の好奇の瞳を意識し、全身からは火花が散る。

逃げ出そうにも、手首をしっかりとつかまれている。全身、炎にくるまれる思いで、消え入りたい風情で立ちすくんでいた。

「ごらん下さいませ。こちら、ホワイト・シックス！　＼S夫人の白い花＼ですよ」

そこからざわめきが起こり、強烈なスポット・ライト。パチパチと拍手が鳴った。

ボーイがグラスを持ってきた。赤いそのカクテルは、血の色よりも美しい。

「おめでとう！　おめでとう——」

人々は順子のそばへ歩み寄り、祝福する。何がなんだかわけがわからず、順子は、ぼう然と上気した頬をこわばらせていた。

「おめでとう！　白い花嫁さん！　今夜のヒロインは、あなたのようよ」

聞き覚えのある声がした。目をあげると、山辺夫人がニコツと癖のある笑顔を見せて、カチツとグラスを触れ合わせて行き過ぎた。

山辺夫人の後ろ姿をおどおどと見送り、順子の心に直感的にひらめくものがあった。

白い花嫁——。語韻に妙な響きがあった。

巧妙に仕組まれた無気味な罠を意識する。白い花嫁——小さくつぶやき、ふいにからだの奥底から熱いかたまりが噴きあがる。

順子は、キツとなって婦人を睨んだ。

「ホホホホ。ようやく、おわかり——？」

順子の憤りを平然と受け止め、婦人は、つと手をあげて合図をした。待ちかねたようにボーイが敬虔な態度で、かたわらへ立った。

「S夫人って、あたくしなの。ウフフフ」

婦人の喉が妖しく鳴った。おどけたそぶり、でグラスをかざし、人々へ微笑を返す。

「さ、乾盃をしましょ。アラ、そんなふうになめるのではダメよ。もっと勢いよく——」

そうだわ——と婦人は言った。白い喉をのけぞらせて、赤い液体を口へ流し込んだ。

ボーイが捧げる盆皿へゆっくりとグラスを戻し、瞬間、マスクの中の眼が燃えあがる。

ギラつく瞳に射すくめられ、順子の全身に恐怖感がつらぬく。身ぶるいがつづくウエストへ、婦人の左手が巻きついてきた。

アアア、アー　低くうめいて身もだえ、そのたびにグラスが揺れて中身がこぼれた。急速に手の力が抜け、ボーイが受け止める暇もなく、派手な音をたてて床の上に散乱した。

その音が、アトラクションの開始を告げるベルとなり、満座の視線が集中する。

衆人環視の真ツ只中で、びっくり仰天、順子は気もそぞろに、あわてふためく。

抵抗しようとする腕もろとも、すごい力で引きつけられ、順子は、豊満な婦人の胸の中で息ぐるしさにあえぐ。動転のあまり平衡感覚を失って足がもつれ、後頭部をささえられ顔が上向きになった。

イヤー！　イヤよ！　堅く唇を閉じ、無意識に首を振る順子の口もとへ、冷たい唇がかさなってきた。婦人の唇はピタッと吸いつく。



気が顛倒してめくるめく羞恥に思い乱れ、順子は、鋭い人々の好奇心と、意地の悪い鑑賞の視線を、ひしひしと全身に痛感する。

衆目を集めた異様な接吻——それは、いつか若い社員たちの談笑の中にもれ聞いた、秘密ショーとかの様態を連想させる。羞ずかしさが倍加し、強烈な恥辱感に戦慄した。

バラバラに思考が乱れる。はげしいめまいに意思を忘れ、抵抗する力がつきた。

全身に無力感が襲いかかる。虚脱した放心状態のまま、かみ締めている歯がゆるんだ。

甘い液体は香り高く、婦人の口腔であたためられ、トロリとしていた。

とぼしい理性が必死にあらがい、薄れゆく意識のどこかを疼痛が責めた。だが順子は夢うつつでゴクツと喉を鳴らし、婦人が口移しで飲ませるカクテルを飲んでしまった。

甘い味覚は口あたりがよいが、アルコールに弱い順子には、この精度の強いカクテルは恐ろしい凶器になる。カーツと胸が灼けた。

まぶたの裏に色美しい虹が見えた。小刻みなけいれんをくり返したあと、人々の拍手を遠いさざ波のように聞きながら、失神した。

順子は、甘美な夢幻の境地で遊んでいた。

魔性の毒蛇は清麗な泉……ドロドロに粘った湿地帯をわがもの顔に占有し、悠々と泳いでいる。妖しい毒蛇の戯れを見て、順子の脳髄には奥底まで麻痺感がひろがり、新鮮な快感が荒い波頭となって心身をくるむ。甘美な波調は微妙に変化し、爪さきまで流れる。

はしたなく身もだえ、羞ずかしい声をあげてむせび泣き、順子は習性的にそばのものにしがみつく。とたんにアツと息をひそめた。

つかんだものが気味悪くはずんだのだ。寸前の欲喜を忘れて順子はぼう然と自失する。

感きわまって彼女がとりすがったものは、意外にもS夫人の素肌だったのである。

#### (四)

すでに夜は終わり、シックなカーテン越しに、朝がやさしい光をさしかけていた。

同性同士が妖しくもつれる悲しくも寂しい倒錯の性を、順子は知らない訳ではない。だが、彼女が実際に体験してきたSEXの経歴から言えば、レスボスの愛は、女としての成長途上にいくらかのうるおいをもたらす、感傷的な未成熟の感覚にすぎない。異様にからまる同色の形態は、脳裏に描くだけでも背徳の意識が先だち、嫌悪的な不快感を覚える。

少なくとも順子の性的な神経の中へは、同性のはいりこむ余地がなかったはずだ。

にもかかわらず彼女は、衆人環視の中の突発的な羞恥と屈辱感に動転して思慮を失い、人形のように相手の自由になっていたのだ。

その過程の記憶をまさぐり、くやしさをよりも憤りを感じる。不覚にも痴態をさらけだしたわが身を恥じた。彼女の怒りは、自分自身へのやり場のない忿懣かも知れない。

イヤッ——夢中で悲鳴をあげた。

「なにがいやなの。悦んでいたくせに——」

みだりがましい夫人の凝視からのがれようと後ずさり、とたんに、また愕然とする。

寒々とした肌身に気づいた。いつの間にか生まれたままの姿にむかれ、しかも一糸まとわぬ素肌は、女の羞恥がうるおっている。

と、その自覚は、耐えがたい羞ずかしさもま新しく、身の置きどころにくるしむ。気が狂いそうな懊悩が、彼女の脳髄を、かき乱した。

あわてて起きあがったが、はげしいめまいと、頭芯にしみ入る異様なうずきを覚えた。

耳なりのともなう、吐気をもよおすような不快さだった。不自然なその不快感は、昨夜の



鮮烈な光芒の中から連続しているようだ。

カクテルの中に眠り薬が——と思う。その「もしや」が的中したのを痛感し、彼女の全身は、いまわしい屈辱感に慄然とする。

さして広くない佐倉夫人のプライベート・ルームは、寝台だけが馬鹿でかく、無気味な威圧感を与えて順子の心を脅かす。この部屋からのがれ出ることは不可能らしい。

そうと悟ったとき、順子の目から絶望的な悲歎の涙があふれた。血の気をなくした裸身をすくめ、身もだえはげしく啼泣する。

順子の愁声を厭った佐倉夫人は、突如、遅い女豹に化身し、けだものの本性を、むき出しにした。物も言わず足首をとらえて、中央へころがし、押しひしぐように、襲いかかった。

荒々しい波動が静まり、圧伏されたイケニエは、むなしいうごめきをくり返す。

泣き叫ぶ声は吸われて消え、悩乱の呻吟も徐々にくぐもり、甘い吐息に鼻孔があえぐ。

吉村の翻弄に溺れて馴致された彼女のからだは、執拗な夫人の戯れに屈伏した。寸前、呪わしく嫌悪した同性の意識を忘れ、みずから求めて筋肉をゆるがせ、律動美もあらわに迎合していく。暖かい雲にくるまれたような

甘美な陶醉が奥深く波及し、夫人の唇を感じたとき、それを無意識に迎え入れていた。

潤沢な蜜を吸う蝶がいる。蝶の吸管は力強く、はげしさの中にも思いやりがあった。

佐倉夫人の甘やかな戯れ——。それは、順子がふれたくない未知の分野だ。同性愛を厭う気持ちの中でも、もっとも強い反撥を感じていまわしさであった。だが、いま順子は、今日までの自分の節を曲げざるを得ない。

吉村からはもとより、過去の経歴にも類のない欲びを満喫して、はしたなくうめいた。

優美にくねり、華やかな弧状を描いた自分の肢体が、いかように乱れているのかも知らず、多彩な光芒を脳裏に見つめ、苦悶の表情から、せわしない息を吐きだした。

放縦な姿態を夫人にゆだね、順子は、新鮮な悦楽の欲喜の中で陶然としていた。

途中まで車で送られ、順子が自分のアパートへ戻ったのは、土曜日の夜半に近い。

夜に始まって夜に終った一昼夜の出来事はまさに魔界への夢遊にひとしく、閑雅なたたずまいの中にも、どこか秘密めいたにおいがする別荘の所在地がどのあたりなのか、とうとう、わからずじまいだった。

夢でないことの確かな証拠に、肉体のすみずみには、甘美の名残りとして異様なけだるさがとどまっている。意外に疲労が激しく、神経は思考が億劫<sup>おつこう</sup>なほど散乱していた。

「……で、どうだったの？ 先方じゃ、たいそう、きみの事がお気に入りだったという」  
女のあえぎが静まるのを気長に待って、吉村は、こそぐるように耳もとでささやく。

「あなた、聞いたの？ だれかに——」

「ああ、うちの常務夫人から聞いたよ」

「もういや！ あんなところ、真ッ平だわ」

「そんなにいやかい。それは困ったな」

吉村は、かれた声で笑った。魔手を散策させて、ふたたびはてり始めている女を見た。

瞳がぬれぬれとうるみ、顔ばかりでなく全身が汗ばんでほのかに色づき、順子は、健やかな女体の息吹きを発散させていた。

八金曜会Vに参加した日から三日目だった。

いつもふたりが利用する簡素なホテルの室内は、愛欲の香りが充満している。

いやよ。いやだわ—— そう言いながら順子は、すぐれた感受性をいっそう鋭敏なものにして、自分自身を診断しようとしていた。

片方は見るからに武骨そうだが、動作はき



わめて繊細である。他方は文字どおりの纖手だったが、動向には非情な熾烈さがあった。

同性に荒された彼女は、微妙な受感作用におかされて熱狂し、果ては恍惚の境地をさ迷い新鮮な快楽を感得したのだ。

その瞬間の甘さは筆舌につくしがたいが、そのあとはい知れぬむなしさに涙している。

完ぺきな充実感を満喫できず、陰陽不在の不合理と、異性の必要性を痛感したものだ。

順子はいま、われ知らずふたつのものを比べている自分の浅ましさに恥じた。とは言え彼女にとっては、ふたつながらにそれぞれ味わい深いことも確かだ。口ではいやだと言いつながら同性への嫌悪感が薄れてきている。

「どんな話をしたの？」

「あ、あなたのこと……ばかりだったわ」

「本当かい。それはまずいな。で、なんと言ったの？ 会社のこととも訊かれたのかい？」

「ううん。べつに——」

「佐倉専務はすっかりご執心らしい。金曜日以外にも会いたいから直接連絡をするって。専務のメモをチラチラ見る機会も多くなるだろうな。よろしく頼むよ。ね、きみ——」

順子は探るような目で吉村を見た。順子の意中を感じがいして、吉村は半身に構えて魔

手を乱舞させる。

「もういやだって……そう言ってるのに」

この充実感はホントに貴重だわ——

順子はわが身にひそかにうなずく。それが自己診断をした上での実感かも知れない。

## (五)

「なにを探っているのッ。また——」

音もなく浴室から顔をのぞかせた佐倉夫人は、一転、年令を感じさせない機敏な動作で濡れた全身からしずくをまき散らし、うずくまっている順子の背後へ襲いかかった。

豊満な肉体に圧倒され、仔猫の喉から哀れな悲鳴がもれた。声は低く長く、尾を引く。

「怪しいコね。このあいだから、あたしの目を盗んではゴソゴソやっている。そんな泥棒猫のような真似をするコ、大きらいよ！」

夫人は、別あつらえの趣味の薄着に爪を立てた。乱暴に引き裂き、ちぎれた布をむしりながら瞳を光らせ、すぐく興奮している。

清新な仔猫のからだは若鹿を思わす健やかさだ。みなぎる若さ、柔軟にはずむみずみずしい肢体のあらがいは、その抵抗がはげしいほど夫人の感覚にうるおいをもたらす。

実際に、元気よくピチピチはねまわる四肢

を押し伏せると、筋肉のおののきがじかに伝播してきて、心が妖しく騒ぎだす。指さきにはずむ快い感触を愉しみ、さまざまな痴夢を脳裏に遊ばせ、日に日にペット化の様態を顕著に示す白裸の肢体へ、あきることなく、本性をむき出した攻撃を加える。

すると、可憐なめすのけだものは、いつの間にか哀泣の音色を奇怪になまなましい鼻声に変え、美肌をバラ色に艶光らせながら人魚に化身し、華麗な踊りをくりひろげるのだ。

昨今の佐倉夫人にとって、この美しい人魚は、なにものにもまさる愛玩物であった。

「あたしが知らないとも思っているの。いくらかわいい順子でも、裏切り行為は赦せん。すこし折檻をしてやるから——」

「す、すみません。赦して……下さい……」

順子は、一日も早くいやなホステス役から解放されたいという一念で、あせりすぎた自分の軽率さを後悔しながら、夫人の下敷きの中で必死にもがく。

「ダメ！ 今夜は全部、白状させてやるわ」  
自分を睨みつける夫人の瞳の妖しさにおののき、順子は心の底から戦慄した。

特異なホステスを象徴するΛSと6Vのメ



ダルを大切にし、順子が金曜日ごとに指定の場所へ立つようになってから、早くも一カ月半が経過していた。金曜日以外の日でも、連絡があれば夫人と会った。

いまになって考えてみると、自分をいやらしい世界へおとし入れた相手だが、順子は、生きている実感として、真底吉村に惚れきっていた。内心では薄情な男だと呪いながら、彼女の感覚は、いいようにあやつられて満足している。

私、彼と別れるのはイヤだわ——

心のどこかが、そう叫びつづけるのだ。

吉村保を失いたくないという思いが強く、彼の奇怪な要求を拒むことができない。憎悪はしても憎しみに徹しきれず、逆に、無茶な依頼を請け入れようと決意した。そしてまたふしぎなことだが、佐倉夫人のお相手をかさねるうち、当初の嫌悪感が知らぬ間になくなり、新しい歓びを求めて、うつつをぬかす。

一方、吉村とのデートもつづけていた。

会うたびに、男は「メモを——」という。

他人の持ち物を探るなんて、常識はずれもはなはだしい不道義な行ないだろうが吉村の熱心な声をきいていると、それが男への愛情だと思ふ奇妙な錯覚におちいり、心理的な抵

抗をみずから力づくでねじ伏せ、ひそかに佐倉夫人の身辺を探りはじめていた。

吉村が言ったメモは確かにあった。

三度、四度、彼女は小さな手帳を盗み見て書いてある数字を心に刻み、それを吉村に報告した。そのときの男の喜びようは、すぐさま熱烈な魔手によって還元されるのが常だ。

今夜も夫人が入浴した隙を狙った。一瞬、男の返礼を想起して胸をはずませ、手帳の数字を睨みつけていた真ッ最中だった。

「悪いことをした罰です。覚悟はいいわね」

順子は、背中を膝で押えつけられていた。

「おとなしく両手を後ろへまわしなさい」

「ア、イヤッ。なにをなさるのです！」

「決まっているじゃない。縛っちゃうのよ」

「縛るって？ イヤ、そんなことはいやッ」

「ダメ！ きょうは赦しません。丸はだかのまま麻縄でくくって、十分にお仕置をしてあげます。さ、素直に言うことをおきき！ 暴れたら、この手、ねじって、もぐわよ」

順子は、うめく。本当に腕のつけ根が、もがれそうだ。ジーンと関節に疼痛が走る。

「観念なさい！ ムダな抵抗はやめろ！ あら、これはヘタなドラマのセリフだった」

しゃべること自体が異様な快感につながるらしい。佐倉夫人は、わざと脅迫的な文句を弄して、あらがう柔肌の感触を愉しむ。そして意外に器用なしぐさで裸身を縛った。

「はい。これで完了——」

ピシャッと、艶々した背中をひとつ打つ。

「順子！ 後ろ手に縛られるって、感じはどう？ ほら、鏡をのぞきなさい。胸に縄をかけたら、お乳がこんなにカッコよくふくらんだわ。見た目にも、ちょっとステキよ」

むりやり鏡の前へ立たされ、順子はアッと息をのむ。壁に取り付けてある螢光灯の光を満身に浴び、胸のふくらみを誇張した裸身は青白く、鈍い光沢を放っていた。と、その素肌が、みるみるバラ色に輝いていくのだ。

まるで眼前に見るヌード・ショーだった。全身が羞恥で色づいていくのがよくわかる。だが、痛々しい麻縄を素肌に食いこませているのは、まぎれもなくみじめな自分の姿だ。

順子は、大粒の涙を頬に伝わせ、泣きながら身ぶるいはげしく前かがみに崩れた。

「いけません。シャンとお立ちなさい！」

夫人は縄尻を、しっかりとつかんでいた。

「胸をはって！ そう、つぎは足を——」  
ウエストをかかえていた手がすべり、堅く



閉じ合わせた両脚をこじあげようとする。

「あア、イヤ！ ゆ、ゆるして……」

悲しそうに順子の肩がすくむ。哀切の情しきりに、たおやかな首が大きくのけぞる。

「ダメ！ よく自分のカッコを見るのよ」

夫人は左手で順子の黒髪を掴み引ッぱる。

ツ、ツッ！ 順子は、せつなくうめく。

「言うことをきかないと、むしっちゃう！」

本当に引きむしるような力がこもった。

ヒッ。イイイ、イターッ——

痛苦になげく順子の表情をのぞき見て愉しみ、夫人は、耳もとへ妖しい声を吹きこむ。

耐えかねて反抗の氣力を失い、順子はしだいにおとなしくなってしまうた。

「そうです。ゆっくりと……」

顔をクシャクシャにゆがめ、絶え間のない

悪感で順子の全身は、おじおじとわななく。

「まだ不十分だわ。もっと、思いきり——」

とうとう順子は、夫人の望みどおりのポーズをとられ、足をふんばった。

「動いちゃダメよ。逃げようなんて、そんな

気をおこしたらメチャメチャにしてやる！」

夫人の声は恐ろしく、本当に乱暴を働きかねない。順子は肌を粟立てておびえる。

椅子を持ってきた夫人は、後ろから足のあ

いだへ押しこみ、恐怖におののく順子のからだを椅子の背中へ縛りつけた。

「いじめるのは後まわしよ。さきにいつものように泣いてちょうだい。いい声で……」

華々しくあばかれたわが姿を見つめ、うちのめされた敗北感の中で順子はのたうつ。

「お立ち！ こんどはそのまま、部屋じゅう

ぐるぐる歩いてちょうだい！ ほら、こうし

てお尻をビシビシ叩かれながら……よ」

ぐったりとした順子を見おろし、夫人は、肉満ちた双つの丘へ縄尻を叩きつけた。

「アッ。いやです。かんにんして下さい」

「では歩くのはやめにしてすわってみる？」

このテーブルの上で生きた置物におなり」

夫人は、分厚いクッションを置いた。

「足をかけて、自分であがりなさい」

順子は、ウツと息をつめる。

高さ十分なテーブルへ足をかければ——。

その瞬間のポーズを思うと心の臓が凍る。

だが順子は、齒を食いしばって片足をのつけた。と案の定、夫人は床上にある、もう片

方の足の甲を踏みつけて手を伸ばした。

「そのままよ。じっとしていらっしゃい！」

ピシッと言葉鋭くきめつける。

「ゆ、ゆるして……下さい。もう……」

順子は身をもみ、悲しくもだえた。

「じゃ、もっと素直になると約束できる？」

「は、はい。な、な、なり……ます……」

「よろしい。ではあぐらを組みなさい。あ、それでいいわ。ほら、うまいぐあいになった

でしょ。そういうポーズじゃないと意味がないもの。ウフウフフ」

佐倉夫人は、順子を後ろ手に縛った背中の縄尻を二筋に分け、首根ッコを挟みつけて前へまわした。さらに容赦のない手さばきで、かさなっている足首に巻きつけてつなぐ。

「ホントは、首に縄をかけてからだを二つ折りにしてしまうそうよ。エビ縛りだってさ。

でも、それではあんまり可哀想なもの」

出来あがった置物を四方から眺める。

「あたし、汗を流してきます。いくらなんでも、これじゃはしたないものね。オホホホ。

順子は、べつです。そのほうが立派よ」

両手と両足を肩越しにつながれ、クッションに腰を沈めた無残な姿が、鏡の中にあざやかに映えた。

順子は、あまりにもすすまじい恥辱に恐怖し、首うなだれて、しくしくと泣いていた。





## S Mに耽溺する心 小杉 千恵

人肌を想わすような初冬の生暖かな陽ざしが縁側にさし込んでくる午後でした。家族全員が出払って私はお留守番を申しつかけておりこれ幸いと戸締りをして誰にも邪魔されずに独りでS Mの幻想に耽るにはもってこいの日でした。仰ぎみる西六甲の連山は、あち

らこちらに花崗岩の山肌をむきだしその山裾には赤や青い屋根の新築住宅がひしめきあっています。その中で特に密集した辺りの一軒が私の住む家で、ブロックで囲まれた申訳程度の庭に三本の椿が植えられ僅かに家としての体裁を保っているに過ぎないのです。

私はタンスのカギをあけて先日お小使いをはたいて新開地の古本屋さんで買ってきた三十三年度の奇ク増刊号を開きました。頁を繰るうち私は身体中が熱くなるようなグラビアに出くわしました。

塚本鉄三先生の野外撮影で全裸の美しいモデルが中型犬と一緒に写っていたからです。大変お尻の線の美しいモデルさんで、すべすべとした肌と長毛種の犬の毛の感触が同時に私に伝ってくるような気がしました。こちらに美しい双臀を向けて犬の方に正面を向けたモデルの一番羞しい一点に犬の視線が固定されているフォトもあり私はたまらなくなってしまうしました。恐らく中型犬はあの敏感な鼻でモデル嬢の甘酸っぱいような匂いを嗅ぎ、その匂いの個所に黒い瞳を向けたのに違いありません。私の脳裏にはM女の幻想が躍っていました。庭で日向ぼっこをし

ていた太郎を縁側から私の部屋へ引き上げドアを閉めました。太郎は雑種のおとなしい中型の雄犬です。とまどう太郎を尻目に、私は鏡の前で服を脱ぎパンティ一枚の姿になりました。鏡には24才の現在まで一度も異性に触れさせたことのない柔肌がミルク色にぬめぬめと光っておりました。

鏡の方にお尻を向けて白い布切れをうしろの方だけずらせて休をねじってみました。モデルさんに勝るとも劣らない私の双丘が鏡にうつっています。私は姿見の前で立位のまま正面に向き直り白い布切れにそっと手をかけました。太郎がおそろのおそろ近づいてきて私の足もとで尾を振ってまいります。

私は胸がどきどきしてまいりました。いくら物言わぬ愛犬の前だとはいえ鏡の前で布切れをひきおろすのは羞かしい事でした。窓の外を若い男女が楽しそうに笑いながら通り過ぎるのが聞えました。

S Mの魅力から逃れ得ないと悟ったからには誰かが私に忠告して下さったように中途半端な考えは止めてS Mに対して真剣に取り組んでいかなければならないと考え直し且つそのために先ず自分自身の感覚を調教の上、M性を身体

奥底からの悦びに育てあげなければならぬと理屈つけながら、私は最後の白い布切れを、ゆっくりと鏡の前でずり下げてしまいました。姿見に立位でそれを映する私はいつものこととはいいいながら身体中が桜色に染まって足元に太郎の息吹きを感じて、より、一層身体が熱くなるのを意識しました。

太郎は喜んで私に飛びついてこようとしますので、その爪先を避けて横から抱きかかえました。雑種犬らしい剛毛が私の肌にちかちかと擦ったような、かゆいような異様な刺激を与えます。女性は裸になっているというだけで平常でない心になるものでしょうか。

私は塚本鉄三先生が関谷富佐子さんを撮影なさったのを11月号で見、中河恵子さんあたりをモデルに使って、もう一度いぬと美女の写真を発表して頂きたいと思うのです。美女が卓上で開股羞恥縛りを受け、その横から大型犬が覗き込んでいるというような構図は無理な注文でしょうか。それからついでお願ひしておきますが、「花と蛇」の静子夫人も是非人工妊娠する前に、いぬと愉しませてあげて下さい。S Mの耽溺性は、ここに極まると私は思います。



## S M 夫婦 雑感

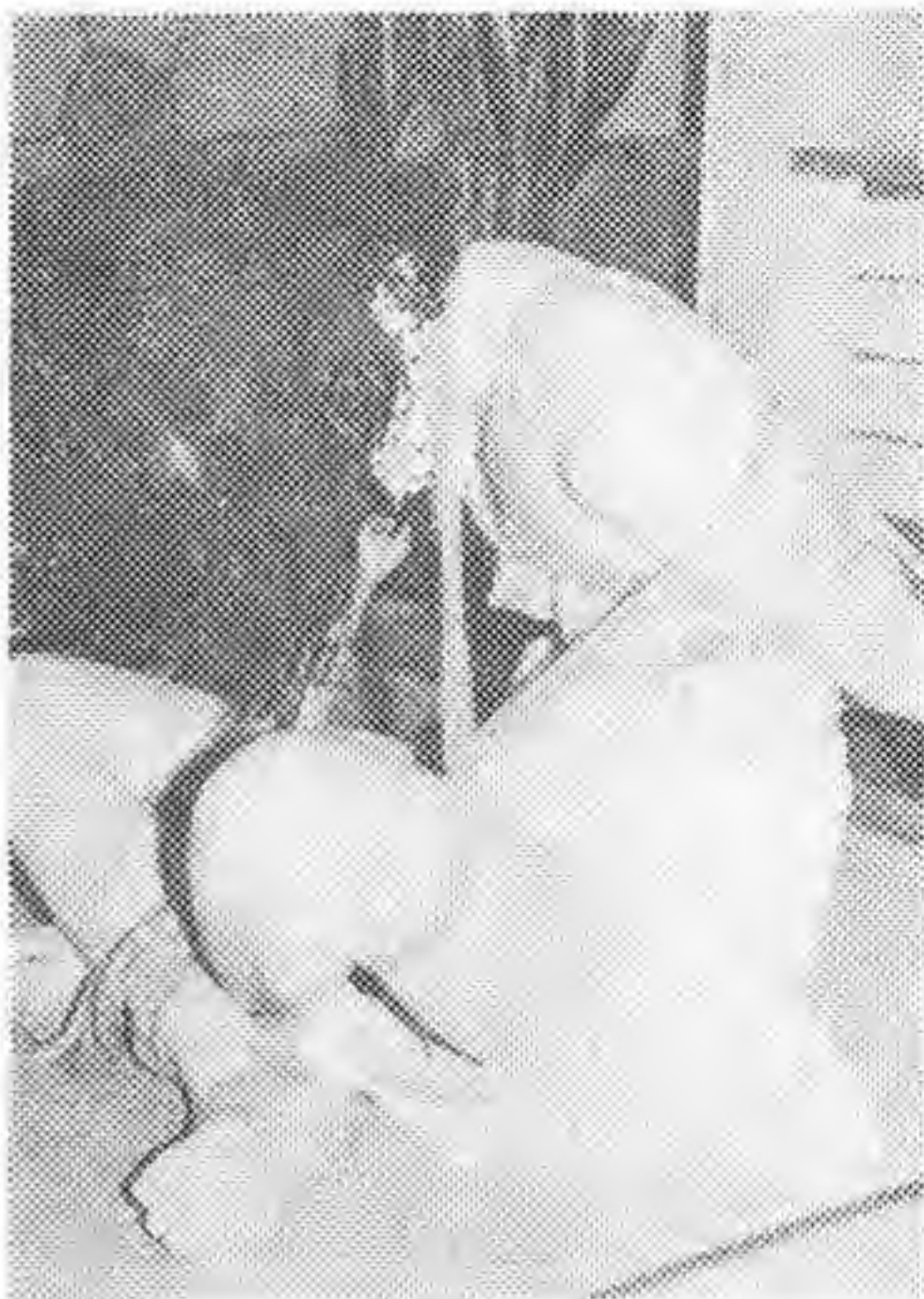
変りばえしない……

夫婦プレイ……

長田 実

奇クサロンには数多くのS M夫婦の記事が掲載されてきていますが、いずれもあまり変りばえしないものが多いようです。

プレイを始めた当初には興味しんしんで、どんなことをしても目新しく思えることでも、ある程度進めば、マンネリになってしまいうものです。その度に変ったアイデアを考え様とするのですが、すぐ



に投稿して、変わった提案や紹介などもしてきましたが、同好者の投稿や紹介文で、これはと思って読ませて貰ったものというのはありません。

私の現在の考えでは、変りばえしないマンネリ夫婦プレイを心機一転させる方法としては、交換プレイ以外にないように思います。それぞれ同程度の経験ある同好者の夫婦が、自分達の方法を紹介したり交換してプレイすることによって、また、その動機や方法を話し合ってゆくことによって、目新しいものが見付け得るのではないのでしょうか。

しかし、交換プレイということ

になると、S M愛好夫婦だからといって、どなたの夫婦でもよいという訳にはゆかず、数々の条件が付くのは当然で、非常に困難なことです。それが、それだけにもし、あらゆる条件が合致した場合には、満足出来るプレイが何時までも続くのではないかと思えます。

最近の週刊誌にも、夫婦交換についての記事が出ていましたが、社会が平和になってきて、個人や夫婦が自分たちだけのことしか考えない状態になれば、ありきたりに飽いて、ついこんなことも流行してくるのでしょうか。

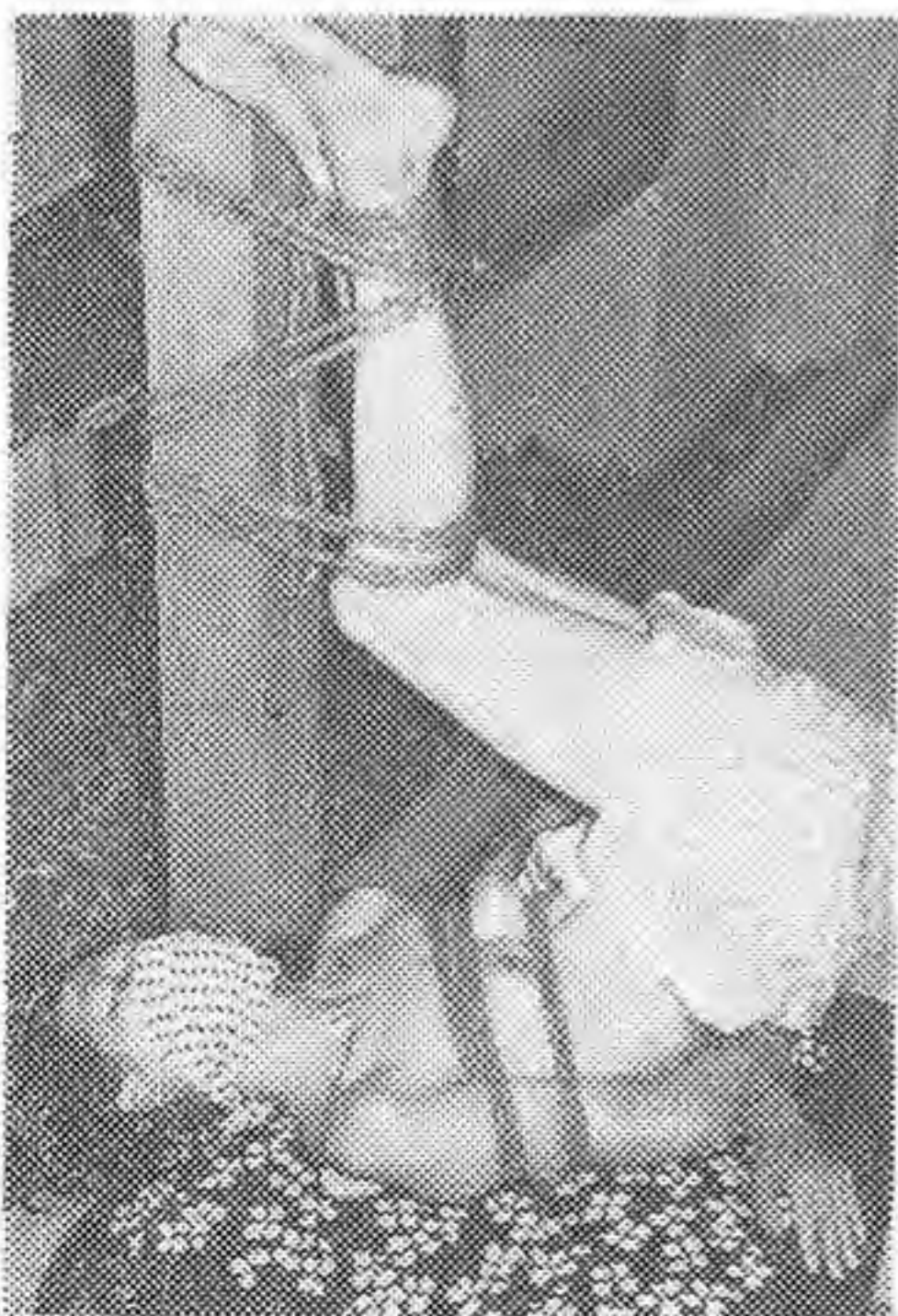
S Mに関する経験を単行本にして売り出した女性がありますが、その本を

読んでみると、私達の経験から考えて、あの程度ではS M経験とはいえないように思います。時流に乗って、S M

を利用したとしか思えません。私達夫婦も、マンネリ打開のために、共に種々研究しているつもりですが、同封の写真のようにこれといった特徴は出てこず、変りばえは一向にしません。出来れば同好者が集い、研究してゆきたいものです。

また、先月号のサロン欄に提案されていたように、読者の写真欄を設けてほしいものです。

前述のような、同好者夫婦同志の交換プレイ、もしくは交流などは、スリルと興味はどなたも感じることでしょうし、困難があるだけに魅力的だと思えますが、どんなものでしょう。





# サロシ楽我記

第六十七回

辻村 隆



ハプニングとは、

正にこういう時に使う言葉であろうか。

十月二十八日の朝刊を開いて、テレビ欄を何気なくみていた私は、その夜の11PMに、自分の名前が

麗々しく出ているのを発見してギョツとする。イレブンに出演する

事は、前回でも予告していたが、

二十八日にビデオどりして十一月

四日に放映されることになってい

たのに、ぶっつけ本番に変更とは

思いもかけぬ次第であった。同好

者や知人に十一月四日と知らせ

あるだけに大慌てであるが、今更

仕方がない。テレビ欄をみて気が

ついたら見て貰えるだろうとタカ

をくくって、大半は已むなく放置

してしまった。心ならずも嘘をつ

いた恰好である。

当夜のゲストは、土曜ショウでチヨクチヨクお顔を拝見した福田和彦先生と私の二人。残酷ショウは、秋山夫妻、それにタイトルカ

ら始まる前座のSMめいたショウ

の女性ペア、京めぐみ、大崎京子

とこれだけである。タイトルは予

定通り『サド侯爵もびっくり?』

例の問題映画サドの『ジユステ

イーヌ』は鬼六さんと談志師匠の

方で先鞭をつけられたから、ここ

らは、数日前新聞で話題になった

『悪徳の栄え』のワイセツの有罪

になった問題を中心にテーマをと

り上げていた。

11PMの簡単なシナリオを手渡

されて、パラパラとめくると、福

田先生と私の喋る箇所は全部、空

白である。適当に喋ってくれとい

う意向らしい。あらかじめテーマ

が分かっていたなら、もっと「悪

徳の栄え」の有罪判決のニュース

を熟読しておくのだったがと悔ん

だが、アトの祭りである。まあ何

とかなるだろうと腹を据えたら、

案外リラックスして、私なりに喋

ることを、考えておく。藤本さん

と二回許り簡単な打合せをすましただけで、リハーサルともいえないものを済ませて、あとは本番を



待つ許りであった。大阪東淀川区十三の、木川劇場に出演中の秋山夫妻も午後九時半到着。リハーサルに八分間熱演したら、テレビ局のスタッフ一同、魂消てしまっしばしシユンとして声もない。ショウはそれ程に迫真力があって素晴らしかったが、如何せんテレビコードという厄介な奴があつて、スタッフは彼等夫妻に、もう少しお手柔らかにと頼んでいたが、流石に秋山夫妻、手を抜いたらSMの残酷ショウの価値なしと突っぱ

ね、ようやく五分ぐらいにショウを短縮することで折合い、あとはテレビカメラで加減することになった。強烈なシーンはカメラ前面の菊花にピントを合わせてボカすという手段で本番は終わったが、テレビではこれが精一杯という処だろう。

藤本義一さんの司会によるリードで、まあまあ大過なく終わったものの、所詮はSM談義、深く追求することは許されない。フォトの資料も十数枚提供したが、渚マリと佐々木耳環生のSM二枚の写真のみで終ってしまった。オッパイがみえてはいけない、おしりの割れめが見えてはいけない、強烈すぎていけないうと、色々制約があれば、已むなく無難なものしか仕方がない。テレビにとり上げるのと自体無理なテーマを、何とかやってのけられたのは、これも時代の流れというものであろうか。

気の毒だったのは新宮のA氏である。M派代表と大張切りに張切っておられたのに、結局お呼びでなかった。ディレクターにそれとなく理由をきくと、張切りすぎての勇み足で、テレビ局が頼みもせぬのに、あれやこれやと、彼のいう女王様やM同好者へ声をかけす





銀の鞭が、熟練した技で、ローズ秋山の肌を打たず、前座ショウの女性二人の、踊りのような鞭打ちの最後の一撃が、したたかに相手の肩を叩いたのは皮肉であった。余程痛かったのか、肩と脇腹をかかえてポロポロ涙を流していたのは気の毒であった。(掲載フォト二枚は当夜のスナップである)

× × ×

奇クが月刊誌という立場から、時には不自由なこともある。十月十七日頃、東映の京都撮影所の宣伝課か

ら、部厚い一通の速達が舞込み、何事ならんと開封すると、十月二十九日封切の『恐怖奇形人間』のPR依頼であった。週刊誌なら早速にでも精しく紹介するのだが、今更仕方がない。今月号では封切後で、ニュースバリューも薄れてはいるが、三作も協力させて戴いた石井輝男監督の奇抜な作品だけに、やはり興味は他人事でなくそそられる。

江戸川乱歩全集と銘打って、乱歩の小説の中から『パノラマ島綺談』『孤島の鬼』『人間椅子』

『屋根裏の散歩者』などを抜萃してアレンジした、怪奇ロマンの耽美作品である。出演者はおなじみの石井学校の優等生のスターさん達で、主演の女優が『責め地獄』で行方を眩ました由美てる子だけに何か彼女のその後の動きに肉体派を感じるのである。前作の『猟奇女犯罪史』でも高橋お伝の大役をもらっているから、遁走ニューフェイス、どうなってるのでしょう。

スチールが到着してから、二度ばかり撮影所よりお電話があったが、生憎といつも不在の時で、その用件は分からなかったが或いは一度撮影の状況など見ておいてほしかったのかも知れない。映画の試写をみていないので、内容云々は出来ないが、早速同好のドクタ1氏より第一報入って、かなりグロがっているが、それなりに面白いとタイコ持ちしてきた。唯、彼の医師という観点からみたシナリオの欠陥を一つ指摘していた。物語は大正十三年というのに、精神病院に監禁された医大生(吉田輝雄扮)がインターンであるという。映画の中で、三度ばかりインターンの言葉が出てくるが、この当時インターン制度は絶対な

かったと強調していた。奇しくもその時代と同じ大正十三年生まれのドクター氏が医師になった三年ぐらい前からこの制度が出来たというのだが、観る人によってはそんな点に気付くところが面白かった。暗黒舞踏の土方異が主人公の奇形人間で妖しい雰囲気をつりまいている。一時映画界を離れて、テイチクから歌手として再デビューした尾花ミキが、その後パッとせず、又ぞろ映画に戻って斬りさかれる娘の端役で出演している。能登半島に長期ロケして、裏日本の風光をとり入れ、ふんだんに異妖な耽美調を描いた『怪奇シリーズ』の第一作である。シャム双生児をはじめ、体中ぶだらけの関節人間、自分の手足を喰う共食人間、体中生殖器だらけのセックス人間、半獣人間、内臓人間、一寸法師、せむしなど、奇形人間がふんだんに出てくる異様さに、気の弱い人は失神しそうである。(スチールは東映宣伝部提供のS M的なものだけ抜萃した)

× × ×

カメラ・ハントの回顧を書く気になって絶えて久しくなっていた女性達の、その後の消息を求めて奔走するうち、つい懐かしさから

ぎ、自分の一存で出ましよう出ましようと誘ったらしい。芳野眉美さんにもテレビへ一緒に出てプレイしましょうといったというのだが、過ぎたるは及ばざるが如し。出演の選抜はテレビ局にあるのだから、これではチョットということになったらしい。結局A氏はシヨックからか11PMも見る気になれず、翌々日、がっかりした声で私宅に一泊したお礼を、元氣なく電話でのべてこられたが、慰める言葉もなかった。

激しく鞭うった秋山美智夫氏の





焼けぼっ杭に火がついて、二、三の女性と、かりそめのひとときを持つ仕儀になってしまった。年令の成長と共に、女体も熟して、ハントした当時、青麦のような女人もすっかり色づいて、触れなば落ちん風情を示し、しきりに往時を偲んで懐かしがってくる。寝ていた子を起こす様な結果になって申訳けないような気持の反面そうして私に慕情を示してくれる女性には、矢張り嬉しさが先に立

って、つい知らず知らず甘い言葉をかけ、挙句の果ては濡れてしまふのである。しかし、結婚して幸せな家庭をつくっている人もいて、きっぱりと断わってくる人や、便りするものが怖くて、所在も判っきりしているのにウンともスンともいって来ぬ女人もいる。正に世はさまざま、よろめく人、はねつける人、迷惑がる人等々、何か人生の輪舞をみているようである。元来が寡筆でハントの執筆が手一杯の今、かなり回顧の資料は溜りつつも第二回が発表出来るのは何時の日のことか——。思えば私も随分とツミをつくったものである。

× × ×

11PMで藤本義一さんと雑談していた折、SMの範疇の、いずれに属すべきか不明のものが、かなりある事を指摘された。奇クに発表のすべてをおしなべてアブノーマルと片付けてしまえばそれ迄で、行為的な人間はアブニストと呼べばいいと喋っていたが、例えば「覗き趣味」はSかMかとなるとチョット説明しにくくなる。そのくせ、案外こ



の趣味の方が多いのである。

女斗美はどちら？

ホモは？

レスボスは？

自虐は？

と、こうなると話はだんだんむつかしくなる。うけとる側の感覚により、その人の内潜する意志によつてしかきめられそうもない。SM時代が到来すると、こうした論議が、いよいよ活潑になるかもしれない。この道一筋で、コツコツ三十年間、ひたすらに追究をつづけて来た私にとって、こうした話題が大っぴらに論議されること自体に、奇妙な時代の倒錯を感じるのである。



私のような存在が、良風を毒する者として、おえらい婦人の方のヒンシユクを買っているらしいが、一旦生を享けてこの世に生まれ出ようとする幼い魂を中絶、搔摑という手段で、案外易々として殺している女人の残酷性を、どう説明すればいいのか。プレイの対象に美を発見してそれを追及し、耽美するのも、藤本氏の謂う一種のゲームであるならば、幼い魂の抹殺に較べて、それは遙かに許容されてよい、人それぞれの好みではなからうか。



## 「S M」の芸術化 花柳 龍

S Mの経験の浅い小生などがこの様な事を言う、「新参者のくせに偉そうな事を又カスナ！」などと先輩諸氏に叱られてしまいうだ。だから多くは語らない。

小生が初めてKK誌を知ったのは今年の二月である。以来現在までの八カ月間、狂った様にS Mの關係書に目を通し、最近になってようやく自論を持つに至った訳であるが、その愚論をチョッピリ書かせて頂きたいと思うのである。

S Mの本質は何と言ってもハートにあると思われる。プレイと称する種々雑多な行為はあくまでも本質を得んがための手段にすぎないのではないか？

例えば、ここにAとBの二つの池があると仮定して、Bの池の水がなくなり、Aの水を移動させねばならない場合、AとBを結ぶ水路を作らねばならない。しかし、目的はあくまでもBの池に水を満たすことであって、水路を作るのは、目的を果たそうとする手段の一つに過ぎないのである。

S Mに就いても、同様のことが

言えるのではあるまいか。目的はあくまでも異性を支配し、異性に支配されることであって、プレイと言う行為は、そうした本来の目的を達成するための手段であると思われる。が、KK誌に登場する数々の告白、体験、創作などの中には、そう言う本来の目的をどこかに置き忘れ、ハート（即ち情緒）のないプレイのみに終始しているものはない訳ではないと思う。

勿論、斬新なプレイ、斬新な告白等は読む者の胸を生々と波打たせるには違いない。だがそれも、自分がこうされた場合、自分がこうした場合には……と言う風な想像が伴うためであったり、また別な場合には自分はどうしたことが出来ないから、他人がしているのを読んで満足すると言う代理行為であったりして、作品自体には何らの完全性も見られないものも、ない訳ではない。それに加えて、KK誌はS Mの専門雑誌であって巷に氾濫するそこいらの性的読物とは異なっているのである。

小生は漫才師の人生行路氏では

ないが、あえて声を大にして叫びたい。「諸君よ、真なるS Mに帰ろう！ 真なるS Mに帰ってこそ我々が追求すべき、本当のS Mの課題が待ちうけているのである。我々は同志の旗印の下に集い、共に手をつなぎながらそれを追求して行こうではないか！ S Mの青い鳥を！」……と。

いくらS Mと言えども、性的課題には違いない。しかし、現在の社会的モラルからすれば、ややともしれば圧迫され、迫害され、蔑視されている。いわんや常識人から見れば、S Mとは、正常な性愛に劣る行為であるとされている。

だとすれば、S Mには正常な性愛以上の不潔感、猥雑感が伴っているのは当然のことである。KK誌を飾る告白や体験談の中にも、猥雑感を伴うものが、多少はあるかも知れない。それではS Mの性質を持つ人間は（興味本位の人間を除いて）一歩たりとも正常な性愛に近づいてはおらず、尚も最低の蔑視に耐えることを余儀なくされているのである。果たしてそれで良いのであろうか？ 小生はあえて貴方に尋ねたい。「あなたは正常な性愛の人間に自己のS M性質を軽蔑されて、しかもそれを、当

然の事として甘受されるのでしょうか？」と。小生は嫌だ！ そんなことはマッピラだ！ 客のいないのを確かめてから、泥棒のようにコソコソと本屋に入っていく。

そんなことは嫌なことだ！

ではどうすれば正常な性愛に近づき、それを追い越せるのか？

それには、二つの方法があると思う。要するに、地球上の大部分の人間がS M性質となること。だが

現在では未だこれは無理だろう。とすれば、S Mの芸術化！ S M

作品を清純なマスに掛け、良いものだけを通過させる。常識人に、

「S Mと言うのはこんなに素敵で素晴らしいのですヨ」と言って示

せるものを作れば良い。下手なヌード写真とポッティチェリの描

いた裸婦を比較してみればよく判

るであろう。どちらも裸婦には違

いない、けれどもポッティチェ

リの描くヌードは官能的雰囲気

を保ちつつ何ら猥雑な個所がない。

我々はS Mを芸術の次元にまで高揚させ、そしてそこで再びサ

イズムとマゾヒズムの花を咲かさ

ねばならないと思うのである。

同好者の皆さん、我々の力でど

うにか理想に近づけるように努力

してみようではありませんか！



## 始めて

## 女体を縛る

浅田 守

十一月号で辻村先生に対する短  
信往来で彼女の裸体が誌上にのっ  
ているのを見て少なからず興奮し  
ました。私一人のペットである彼  
女の裸体が、多くの人々に見られ  
るというのは、興味のあることデ  
す。今後はサロン宛に私のプレイ  
など御報告したいと存じます。

扱て、その後N嬢とのプレイは  
益々発展状態にあります。特に、  
「花と蛇」を貸し与えたところ、  
その影響は若い女性にとってはシ  
ョックであり強烈であったようで  
す。当初は会社に於て羞恥感をあ  
らわしておりましたが次第に興味  
を感じたらしく、時々私との会話  
の中に「スゴイ」とか「可哀想」  
とかもらしていました。結局三週  
間も手元に置いて読破したとのこ  
とです。中でも一番感じたのは小  
夜子に対するプレイで股間縛り、  
義夫とのプレイに凄さを感じたと  
のことでした。しかし浣腸責めは  
大分嫌っていますので、私もこれ  
から苦勞することと思います。



先日、初めて彼女に縛りを試み  
ました。愛撫の後、放心した彼女  
に恐る恐る試みましたが、思った  
ほど抵抗もなく応じました。只、  
股間縛りとわかると少々抗がいま  
したが結果はごらんの通りです。  
若々しく美しい肢体の彼女とS  
Mの世界に溺れてみようと思っ  
ています。このN嬢こそ、神が与え  
たジュリエットと思っています。  
彼女の願いで顔を写せないのは  
残念ですが、今後教育しだいでは  
辻村先生のカメラハントにされた  
らと願っております。

## 奇クに望むこと

栗原美智子

私のつたない文章をのせていた  
だき、また春川ナミオさまのさし  
絵と一緒にしてくださいまして、  
ほんとうにありがとうございます。  
ただ、一部削除されているのが  
残念でもあり、物たらない感じ  
がします。

私の文章が下手なためなのか、  
うるさい検閲のためか判りませ  
んが、私のよりもっとモーレッツな表  
現は、ほかの雑誌や週刊誌に一杯  
のっていると思うのですが。奇ク  
だけはできるだけリアルな記事を  
のせるようにおねがいします。

夫も、とてもよい言葉を考え出  
したのになあなんて、言っていま  
した。検閲で奇クにご迷惑おかけ  
きませんけど……。

私はいつも奇クを読む度に思  
うんですけど、アメリカでもフラン  
スでもイタリーでも、そのほか各  
国で奇クと同じようなSM月刊誌  
があると思いますので、ときどき  
参考となる記事を、ぜひ、のせて  
いただきたいと思います。

西欧では昔から、お尻のムチ打  
ちなんか有名ですし、フランスで

はお尻コンクールと云うのも毎年  
開かれていたそうだし、サド侯  
爵の発生地でもあり、フランスあ  
たりのSM近況は、私たち日本人  
にとっても、大へん参考となる例  
が沢山にあるのではないでしょ  
うか。緊縛にしても浣腸にしても、  
そのほかのSMプレイにしても、  
歴史の古い西欧のことですから、  
なにか私たちが見聞するわが国の  
マンネリズム化のSMプレイを啓  
発する、新鮮なプレイなり道具が  
あるのではないのでしょうか。

どんなプレイをするかは私と彼  
が決めることですし、私としては  
今後プレイを末長く楽しむために  
も、今の状態でマンネリ化しない  
ため、外国でのフレッシュな、又  
古来からのものであっても未知の  
プレイの記事を、奇クでぜひ紹介  
してもらいたいです。

彼には罰として私の不用になっ  
たものをのませることは愛夫記で  
も書きましたが、最近チクロや有  
害食品が問題になっているので、  
わが家も保健衛生にはとくに気を  
つけることにしまして、現在では



## 提 案

ネオ・

ゴムマニア

菅原 敏夫



ゴムマニアにとって、その夜明けともいえる一九六九年度も去り新たな年一九七〇年度を迎えたわけだが、今年こそゴムマニアにとって「栄光の年」にしたいものだと思う。

一年を振り返ってみて去年ほど充実した年はなかった。毎号発刊される度に『ゴム』の活字に触れ得て、非常に楽しかった。ザッと数えても読者通信を除き一、二、五、六、九、十、十二と七号に亘り掲載され、近年まれなほどバラエティーに富んだ作品が誌上を賑わし、ブーム到来を覚えた年であった。

はからずも、小生の呼びかけが口火を切った結果になったが、梅川幸子嬢をはじめ諸氏のアピールと、稀少価値的存在であるゴムマニアの希望を理解し、誌上採用した編集部が努力に負うところが多かったと思う。

十数年この方、ゴムの道をつつ走って来た小生ではあるが、もうそろそろゴムマニアの団結で黄金時代を築いてもいいのではないだろうか。過去にも度々このような時期があったが、悲しいかな個人プレイに過ぎず、金字塔を打ち建てることは出来なかった。

今後の方向として、ゴムマニアがどうあるべきかを示すためにもその転換期にきている現在、そこにはゴムマニア諸氏の誌上競作以外にないと思う。そうすることによってネオ・ゴムマニアとしての存在価値が生まれてくるのではないだろうか。とはいえ小生ごときにしてもマンネリの泥沼に首までつかり、性懲りもなく超大作ならぬ「超愚作」を延々と書き続け腕き苦しんでいる昨今である。

今後の課題としては、過去に、その流れるような文体、華麗なタッチで一世を風靡した津田亜紀子

沸かして温かくしたり、冷蔵庫でうんと冷たくして殺菌するようにしています。

彼は、それに玉子を入れたり、お砂糖など入れて私の甘露を満喫しています。

最近になって彼は、私の大きい方も欲しがりはじめましたので形のよいのをえらんで、トンカツやコロケのように麦粉パンコのはかに色々調味料や栄養保健食を添加し、又、唐揚げにして、私も愛妻にふさわしいお料理づくりをしています。こういうことは彼の身体に悪いかとも思いましたが、どちらも精力剤の役目と、私自身が彼

嬢のカムバックと、新人女性の台頭に期待したい。

ネオ・ゴムマニアの実験的試みとして、小生個人の利害に関係なく、広い意味での新人発掘を前提に、次の如き要項でプレイメイトを探究してみてもどうだろう。

一、年令、職業その他一切不問。ゴムに対して好奇心、愛着、情熱等をもっている方。

二、日時場所：毎週土曜日PM六時〜七時（時間厳守）デパート屋上。

の為に出来るだけカロリーや滋養のある飲食物を摂取していますし何よりも彼が願望し大喜びしていますから、彼の心身に大へん役立っているものと確信しています。

自然食天然食が最近クローズアップされていますが、この点でも私と彼は適合していると思いますし、愛夫記でも云った通り、わが家のヌーディスト村は自然にかえったアダムとイヴの現代版を、私と彼は実行していると思います。世界のSM誌から、何か私たちが参考になる記事を、ぜひ、奇クが掲載していただくことを望んで止みません。

三、指定スタイル：（A）表皮革レザーロングコート＋同ロングブーツ。（B）エナメル、又はビニールロングコート＋ハイレイン・ブーツ。

四、確認方法：小生の過去発表作品の中の一節程度の質問応答。

右の要項による私示は発刊号から、その効力を発し、その日から三カ月をもって終了とする。——というような案を持っているのだが、ご意見をお聞かせ願いたい。



# 関谷夫人の絶叫

△十一月号を読んで▽ 吉井作一郎



十月号では「花と蛇」が休載となりいささか寂しい気がしていましたが、十一月号を開いてそんな不満は一ぺんにけし飛んでしまった。「カメラ・ハント」は私好みのフオートが数多く、その上、中河嬢の妊婦腹、そして関谷夫人のフオートまでが登場するに及んでは、私の眼前に大好物のごちそうが、ずらりと盛りだくさんに勢揃いした観があった。

関谷夫人。私は此の女性には全く感謝したい気持である。素晴しい裸身を惜し気もなくみせてくれるということは、たとえ彼女が自ら求める行為であったとしても、私にとっては、得難い正真正銘のM女性として、私は彼女にお礼を云いたい気持になる。私がSMの中でも、臀部への鞭打ちという特異な快楽の存在するのを知ったのは、彼女によるところ大である。関谷夫人の両手吊り鞭打ちのフオート程、私のSの血を沸かせてくれたものはない。痛打にうねり、眉根を寄せてのけぞった彼女の表情こそは、SMの極致と思える程の魅力を私に覚えさせたのである。物言わぬフオートから妙なるメロディーのように彼女の呻きや絶叫が聞こえそうな気持になったのは私のみではないであらう。それ程

に彼女の表情はリアルでありSMのムードをたたえていると思うのである。

最近の奇巧は「花と蛇」「カメラ・ハント」を始めとし、いわゆる羞恥責めが流行のようである。私も羞恥責めが嫌いというわけではない。しかし関谷夫人のフオートを見ると、羞恥責めには、どうも何かしら一本足りないような気持がしてならない。

同じ縛るにしても女性がなんの抵抗もなく縛られ、そしてカメラにおさまるだけでは、読んで字の通りのプレイであって、ただそれだけのことである。かすかな抵抗によって醸し出される羞恥のムードそんなものが欲しい気がする。単なる縛りのポーズでは土偶に等しい。

そこへいくと関谷夫人のフオートは全く見事な迫真力がある。巨大とも思える豊臀にくっきりと彩られた鞭のあと。そしてきりきりと肌に食いこんだであろう縄の紋章。それらは今でも私の眼に灼きついて離れない。

妻の裸身に縄をからませ乍らも絶えず関谷夫人の悦虐の表情を思い描き、一層縄に力をこめる今日此の頃である。

## 編集部だより

○先月号のこの欄で十一月四日の11PMに辻村隆氏が出演される予定と書いたが、十月二十八日のビデオ撮りと予定されていた日が、本番の放送となってしまった。新聞の番組欄によって『サド侯爵もびっくり?』の放送を見られた読者の方も多いことと思う。

○十二月号の「読者通信」の巻頭で余田曉子さんからの便りを発表したところ、姫路市の或る愛読者の方から人妻の浮気を奨励するような文章は没にするか訂正して発表する様にとのお叱りを受けた。住所氏名を明記しての真面目なお便りに接し御厚意には心からお礼を申上げる。通信の採用については十分注意しているが今後共一層慎重に取扱うよう心掛けたい。

○昭和元禄の平和感を満喫する現在ではあるが、セックスの面では多くの欲求不満が内燃していることが数々の通信の中に見受けられる。疎外された人達の共通の広場としての『読者通信』欄は大いに井戸端会議的な雑談に依って賑わしてゆきたいものである。



# 女装M者の・・・

・・願　い

中　村　純



女装の責めプレイを願う私にとって、十二月号はともうれしかった。井風呂秋於さまの『女装の家・責めの部屋』は、じゅうぶん満足させてくれました。この作品はノンフィクションなのでしょいか。最近の奇クとして女装の責めプレイものをとりあげたことは本



イは人によって相違はありましようが、私としては受け身の立場からプレイの窮極はセックスであり、そして虐められながらのものであると考えています。このような観点から222ページのフォト

当にうれしいことで、今後このようなものを是非とりあげてほしい。井風呂さまのカット写真は女装技術のすばらしさに敬服しており、作品内容からみて、いろいろな責めプレイをご経験されているように思え、うらやましい限りです。一度ご指導いただければと勝手なことを考えています。

辻村隆さまの『SMカメラ・ハント』は大好きな一つで楽しみます。十二月号の『回想記・追憶の甘き花びらの群れ』は、こんごどのようなモデルが登場し、どのようにハントしたかが楽しく期待されます。第一回ではサトウケイ子の巻に心がひかれました。恐らく辻村さまにしても忘れ得ぬモデル嬢ではなかったでしょう。虐められながらのセックスに走ろうとするケイ子嬢の願望には女装Mの私としてもわかります。SMプレ

十月二十九日の11PM『サド侯爵もびっくり』を拝見し辻村さまの人柄がうかがえました。けれども一般視聴者が対象だけに奥歯にはさまった表現は致し方はありませんが、われわれとしてはもの足りなさがありました。秋山夫妻の残酷ショーも実演にくらべると、すさまじさも、かなり割り引きされていったといえます。

○今月号から愈々新年号である。創刊以来すでに二十余年、必ずしも歓迎されない社会環境の中に於てよく続いたものである。新年号から内容一新とはいかなくとも、せめて表紙の構成だけでもと考えるて変えて貰った。内容の方もSとM二篇の力作新連載によって一段と迫力を増してきたと思うが、更に告白手記などの新鮮な文章を逐次掲載してゆきたいと思う。

○新しく事業を起すと、うまくいってもうまくいかなかったり、まことに猫の手も借りたい程忙しいものである。鬼プロを創設された鬼六先生は八花と蛇Vの連載だけではどんなに忙しくとも続けてゆきたいと言っておられたが、今月号は締切までには残念ながら、とうとう間に合わなかった。エネルギーの消耗の激しい労作であるだけに体力の充実が先決問題であろう。

○ここまで書いた時、鬼六先生より速達到着。今回は続篇六十回記念として長枚数を仕上げるつもりだったのだが映画と舞台の台本とプロジュースに追いまわされ息つく間もない忙しさとなり遂に休載のやむなきに至った。二カ月休んで三月号には百枚程度の作品を発表出来るとのこと故乞ご期待。



秋山夫妻

## 『残酷ショー』見学記

香川実乗

奇ク12月号『サロン楽我記』で辻村氏もふれておられるが、秋山夫妻の残酷ショー（昭和42年8月号、SMカメラ・ハント「真夜中の宴」）を读者諸兄姉は覚えておられるであろうか。

私も昨年8月京都の大宮劇場へ見に行ったのだが、あの時には、正直に言って、辻村氏の麗文程に



は感動しなかった。導入部の夫人のソロには流石と思わせられたものの、下ツン姿の夫人に対する操り、鞭打、蠟燭責めは、舞台と客席が遠すぎるためか、もうひとつ迫力に乏しかった。

辻村氏と箕田氏だけを観客に行なわれた第三景などは、到底しのぶべくもなかった。

ところが10月10日、出かけたダイコー・ミュージックにおけるショーこそは全観客を堪能させるに十分なものであった。

試みにその記憶をたどってみると、午後2時45分、第1回の開演時刻である。

舞台には白いシーツを縫いつけたマットレスが敷かれ、その横に鞭、ピンクの鴉鳥の羽、太い蠟燭が置かれている。

やがて足先から上半身は首、及び手首まで続いたコンビネーションの網タイツ、腰にロングスカートを結んだ夫人が、背中に回した



右手に、直径10cm位いの天眼鏡を隠しもって登場。ハテナ天眼鏡トハ、集光デ火傷責デモ……と思っている中、傍らのベッドの上にボンと載せると、踊り始めた。

ヤレヤレ去年ト変ワリバエシナイナ……。と、夫人の身につけたツンパが網のようである。

衣裳ハ変ツタナとみつめている中に、曲踊りを終えた夫人は、スカーフをほどき背中の中のアスナーをおろし、両手を網タイツからぬくと下へおろしてゆき、片足を抜くと、マットの上で片足の先に残った網タイツを握って逆海老形にぐっと反った。

背後の観客のざわめき。

網タイツを脱ぎ終ると、天眼鏡を手にした夫人は客席に近づき、最前列の観客に天眼鏡を手渡し、

フロアに腰を落として開股した。網ツンパの要部には朱色の布で縁取られた隋円形の窓が、そして豊かに肥厚した……顔を覗かせている。やがて夫人は右手の人差指と中指で……。

円型のステージを一巡した夫人は、やがてマット上にぐったりと横臥している所へ、幕陰より出番をはかっていた秋山氏がサタンの衣裳をつけ右手に蠟燭の点った大型のブランドーグラス、左手に縄を持って登場。

グラスを置いて夫人を抱き起こすとみるや悲鳴と共に夫人がとび離れるが既に夫人の右手首には、しっかり縄が喰い入り夫人の身体はジリジリと引き戻されてゆく。夫人の右手は背後にねじあげられその上に左手首をかさねると乳房の上下に二巻三巻。

夫人は唯アッアッと喘ぐのみ。背後で一旦縄留めすると夫人を斜めに抱いて口吻、舌を吸引し縄と縄の間からピョコンとび出した乳房をもみしだく。思わず夫人の膝の力が抜けかけるとツンパを下へ押し下げる。



夫人は「やめて」と身悶えし、脚を強くこすりあわせるが、後手に縛られた身では抵抗ははかなくズルズルと膝下まで押し下げられてしまう。あきらめたように左足をツンパから抜くと、秋山氏の左手は背後から、右手は前方から夫人を襲う。思わず夫人の口から呻きがもれて、股が開いた瞬間、2条の縄は、双丘の谷間から前方に抜けた。

その縄をつかんで強く前後に往復すると夫人の口から歓喜の嬌声がとび出し後手の不自由な身体を必死で爪先立つ。

夫人を抱いてマットの上に俯伏せにすると右足首に結びつけて逆



海老に留める。

次いで仰向かせ、羽毛で突出した乳首を撫でると、「ソレハヤメテ、ヤメテエ」と絶叫して自由な左足を地団駄ふんで悶え、思わず秋山氏を蹴とばす。

この反抗にステージの端までよろめいた秋山氏は、怒りの形相で鞭を手にすると夫人の身体をマットの端に寄せ、大きく鞭を振りかざして上腹部を3発4発。パシッと鞭の先端が当たった床の上の、塩ビプレート

の破片が飛び散った。夫人は鞭の当る度に悲鳴と共に弓形に身を反らす。ついで秋山氏はブランドーグラスの蝋燭から手にした太い蝋燭に火をうつすと



夫人の左乳首の上からポトポトと蝋涙を落とす。「あつ熱い熱い」と夫人は悲鳴と共に必死で上半身を起こし蝋燭の火を吹き消した。再び火をつけた秋山氏は今度は息の届かぬ下半身に身を移し、夫人の左足をぐっと押し捻げるとポタポタボタと蝋涙の雨。

夫人は身をもんで「殺スツモリッ」と、叫喚と共にのけぞり、身を縮める。

秋山氏の手にある蝋燭はしつように夫人を追いながら、熱い涙を注ぎかける。

白い肢体がくねり、もだえ、異



常な妖美をかもし出し、その夫人の不自由な身悶えは、正に瀕死の白鳥を想起させる。

やがて夫人の絶叫もたえだえになりはじめ、動きも緩漫になってきたところで、夫人の身体を右横に向け尻の上に蝋涙を落とした後エイッと気合諸共蝋燭の火を太股に押しつけて消す。

夫人は「ヒーッ」と、するどい悲鳴を一声、ぐったり失神してしまふ。

秋山氏は夫人の頭を抱き起こして失神を確かめると、ゆっくりと縄を解いてゆく。

辻村氏のカメラハントに比べれば、その時間も短く責めは少ないがコイトスこそなかったものの、夫妻がかつて「楽屋は前技で舞台は本番」と述べられた如く、愛妻の全てを衆目に晒したこの新しい残酷ショーこそは、正に夫婦プレーの極致ではあるまいか。

ローズ秋山夫人の剃毛の事実をはっきり認識したが、帰路電車の中で反芻していた時であったという事実が、この感動を示す一つの証左ではないかと思う。





沼正三氏の「手帖」に想う

## ある真面目な

## たわごと

須 渾 朔

馬族氏、鬼山氏等、古え？の奇クM派を随喜させた俊秀諸氏のカムバック（他の分野でも蛙腹幻想家羽村氏等を含めて）が、話題を呼んだ最近の奇クだが、それに付けても今尚、強い印象を禁じ得ぬ沼正三氏の「手帖」

もう大分前に「三島氏の肝入りで、「家畜人ヤプー」と共に某大出版社から堂々上梓」なんて記事に眼を輝かせ、ひそかに小おどろしたものが、中止になったらしく落胆。ところが、最近「血と薔薇」なんていう豪華誌出現。しかもその何号目かの「次号予告欄」に、何と沼正三「家畜人ヤプー」とある。

実を言えば、「ヤプー」というのは難解、いささかピンと来なかった大作故、かわりに「手帖」ならどんなにすてきか、なんて思い

ながらも、それでもその誌の次号の出るのを、今か今かと毎日のように、胸わくつかせ心待ちしたものの。しかるに「好事魔多し」？「血と薔薇」はさっぱり店頭に出現せぬ。後で、さては廃刊かと気づいて、がっかり。

そんな私が、先日古本屋で白表紙時代の「奇ク」一冊を見つけ、思わず胸おどらせ手にとり、価を見れば百五十円。それもその筈でひどく汚れていささか哀れな位。バラバラとめくれば、なんと「手帖」ものっている。これこれとばかり買い求め、再び胸ときめかし、「あるマゾヒストの手帖から」を読めば、これはやはり私の記憶にない。もともと奇クの旧号、沼氏ののがのっているのは殆ど読んでいた筈なのに、やはり落とし

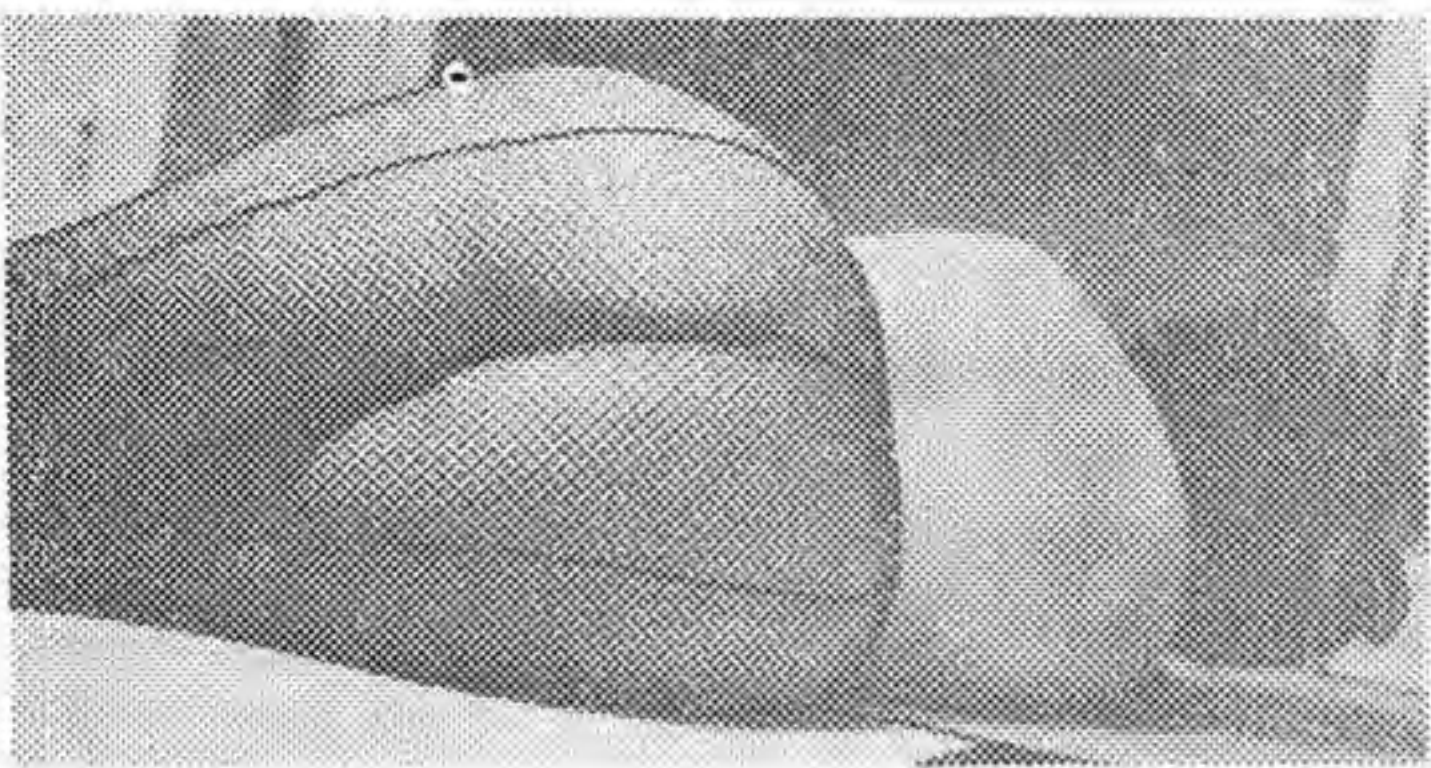
時々自己嫌悪におちいり捨て去ったりもするので）したりで、後日古本屋を廻っても、もとよりある筈もなく、後悔しても後の祭り、なんて思い出も、もう一昔前になつてしまつたが、そんな身にとり、やはり記憶にない。何故かこの号に限り読んでなかった。一九五九年の9月号を手に入れたことは全く感激の極。（言うまでもなく沼氏の記事以外は、私には興味がない）書かれてあることも、「谷崎文学」「日本人M派の外人女性崇拜」今更乍ら、氏の慧眼に感激した。

いみじくも、M趣味、M性向にふれようとしないう「谷崎文学論」の空しさ。日本趣味へと転向脱皮した、という谷崎の心理が全くとうかい（頓悔）である、と指摘されてあつて実にうれしくなつた。世に、有名無名批評家などによる「谷崎文学論」は少なくない。だがその殆どが「細雪」なんかを中心とする後期の所謂、文化勲章的名作とか、「刺青」「少年」etcの、初期作品ばかりに親切で、中期の悪魔派的作品、特に本牧も「愛なき人々」「愛すればこそ」「本牧夜話」etc）や、「饒太郎」などにはふれず、たとえふれ

たとて「消化が悪い」（消化が悪いとは全くこっけいで、だからこそ、生々しくて面白いし、端的に作者のマゾ資質が表現されているわけだし、又アブ誌の評論に於て文学的？ 価値判断が、アブより優先している評価、評論は全くナセンスという他ないが）とか、「慾求不満者の幻想」とか、まるで一言で切り捨ててかえりみないのが、ピンと来ない（もっとも、後期の作品中「芦刈」や「卍」の傑作ぶりには感激の他なく、これは三者関係、逆転趣味なんか私がエキサイトさせるためでもあるが）ものであつたので、沼氏のよ

うな慧眼、博学の士が存在してくれたことはやはり奇クの功罪中、功績の筆頭と感激の他はない。洗練の極を行く「芦刈」や、かえつてその冗慢さが関西弁に実にマッチした傑作「卍」なんかに感激しながら、そのドミナが、作者にしてみれば、実は本来なら西洋女性であるべきを、已むを得ず（又は、却つてそうでない人種女性にすりかえる積極的とうかい？さで）そうなっている、そんな私共のもどかしさを、僅かにいやしてくるものと言えは意外に少なく、「本牧もの」位しかないのだ





「網の中」 赤畑 修造

から、所謂作品の価値は余り高くないとはいっても、せめて本誌位ではもう少し、「本牧もの」(M派が悪魔派、S派を装う、又はM派のもつ特有のサディスティック一見矛盾しているようだが、な傾向がうまく表現されており、

S作家の書くサディスティックな表現とは又異質のSであり、「本牧もの」の場合には、より外人くさい女性こそ上位に君臨させるようになっており、より日本人的な女性をいじめさせるようになってくる。このパターンに、逆転の要素が加わるケースは一番面白い)や「饒太郎」(三者関係Mのパターンそのものであり、もちろん、「逆転趣味」がエキサイトされるし、「消化が悪い」からこそ得がたいので、とうかいは皆無だから好感が持てるのだ)について書かれても、思ったりするのだが、どうだろうか。

西洋女性崇拜M派でありながらその作品群中、そのドミナが正真正銘の西洋女性の登場するものがごく少ないのも現代の我々から見ると一種の意外な驚きだが、この理由はよく判る気もする。(もちろん戦前の制約下故というのは当然だが)「混血児のような」日本人ばなれした「日本女性という、一種のパターン化したドミナの輩出は、谷崎文学の場合意味深長的で、しかもM派には判りやすいものがある。これなど、沼氏のいみじくも指摘された「日本M特有のM」と考える。(黄色下等人

間が、白人のバリツとした女性なんぞ求めたがったって、考えただけで笑止であり、いや、そんな自分の内部を発表するだけでバカにされるにきまつていると思うのが、氏のいみじくも指摘された、日本人M派特有の、マゾらしい、自己卑劣化とデリカシイで、故にそれが無理ならせめて混血児を、とこれは又一種のM的てれかくしも混じっている)

沼氏が指摘された如く、(田沼醜男氏の告白も、谷崎の趣向と近似)西洋人と結婚した、日本女性(高名な女優)にドミナを感じるの、言う迄もなく三者関係的Mを空想的に満足させるから、と考え得るが、田沼氏におききたいと以前考えたことがあるが、彼女が離婚、日本人と再婚後もまだドミナを感じるかと言うことだ。

又その旧号「手帖」には、文豪谷崎と三島氏の会話が引用してあり、「今でも西洋人、特に女性崇拜は存在しますか?」なんて質問に「ええ、あります」と、答える。これについて「今でも」はおかしい、と沼氏は、いみじくも書いておられる。

ところで、一言つけ加えさせて貰うと、男色傾向のない(と思わ

れる)谷崎に、「特に」は変で、崇拜の対象となるのは西洋女性のみにあり、西洋人の男は、三者関係的Mという世界での助演者にすぎないのではないか?

かくて、沼氏の、古い記事を見つけ、感激の余り、とりとめないたわごとを並べてしまったが、ついでにもうひとつ、よく谷崎文学には「ユーモアもなく、思想もない」だなんてばかり書かれてあったものだが、その色濃い、逆転趣味、下剋上趣味、これは「小さな王国」なんか読むと、よく、田沼氏作品に傑作があったが、ゲバ女学生におしまくられる教師だなんて、何ともマゾ的な、今や、珍しくもない新聞記事が思い出され、一寸ばかりこっけいという他はない。そして、今流行のブラック・ユーモア(この本当の意味はよく知らないが)というものが、残酷な笑いを必ず伴うものという意味から「小さな王国」に限らず、多くの谷崎文学のもつ、悦虐世界そのものが、人間の持つ、根元的なもの、(この場合、Mを追及することに)思想であり、「ユーモアそのもの」という気がするのであるが……。

(おわり)



# 短 信 往 来

英 堅 守 さんへ

苦 木 桃 太 郎

私は人には云えない羞かしい趣向を持ち長い間、悶々と独り過ごして参りましたが11月号で英堅守さんの勇気あるお便りを読み、私も同感の意を表することによっておさえ続けてきた鬱憤を発散させて頂くことに致します。英さんはズバリ小学生の裸が見たいとおっしゃっており、躊躇無く特異きわる関心を吐露なさっておりますが、私が、私もまけずに包み隠さず、ぶっつけてみたいと思います。

未完成な女体にしか興味が無いという根本的な趣向は全く、英さんと私は一致しておりますが、私が美少女にしか関心がないという点と、英さんが小学生好みである点に対して、私が中学生好みで、精々小学生なら高学年に限るという点が相違しているようです。美少女で素裸にすることはありませんが、白いパンティ姿でも満足できるといふところまで、英さんと私は類似しており、楽しい限りで

す。但し、私は手を触れたり、極端な行動に走ったりして可愛い妖精の心を傷つけることは絶対に致しません。ただ、そっと盗み見したり、盗み撮りするだけで大満足なのです。それに萬一を考え、盗み撮りした写真は絶対に人には見せません。あらぬ場所での盗み撮りが、神をもおそれぬ行為であることはよくわかっていふのです。が、眺めただけではすぐに記憶が薄れてしまうのが惜しくて、総てを賭け苦勞している私の気持は、マニヤなら理解して下さると思います。その代りと云えばおかしいかも知れませんが、コレクトした写真は迷惑のかわらないように大事に秘蔵しております。数年がかりで海辺や山や温泉などでハントした素晴らしい写真は数百枚に及び、私はこれらをそっと宝物にしているわけです。

今年の傑作は、露天風呂に面した旅館の2階から閃光球の不必要な電子カメラに望遠レンズを設置して、岩によじ登ったり、四つん這いになったりして戯れる中一と小五ぐらいの姉妹を撮ったフォトだと思ひます。旅先の解放感と、もの珍しさにひかれて父親と露天風呂に來たのでしよう。



僕のイメージ画集「健康」 室井亜砂路

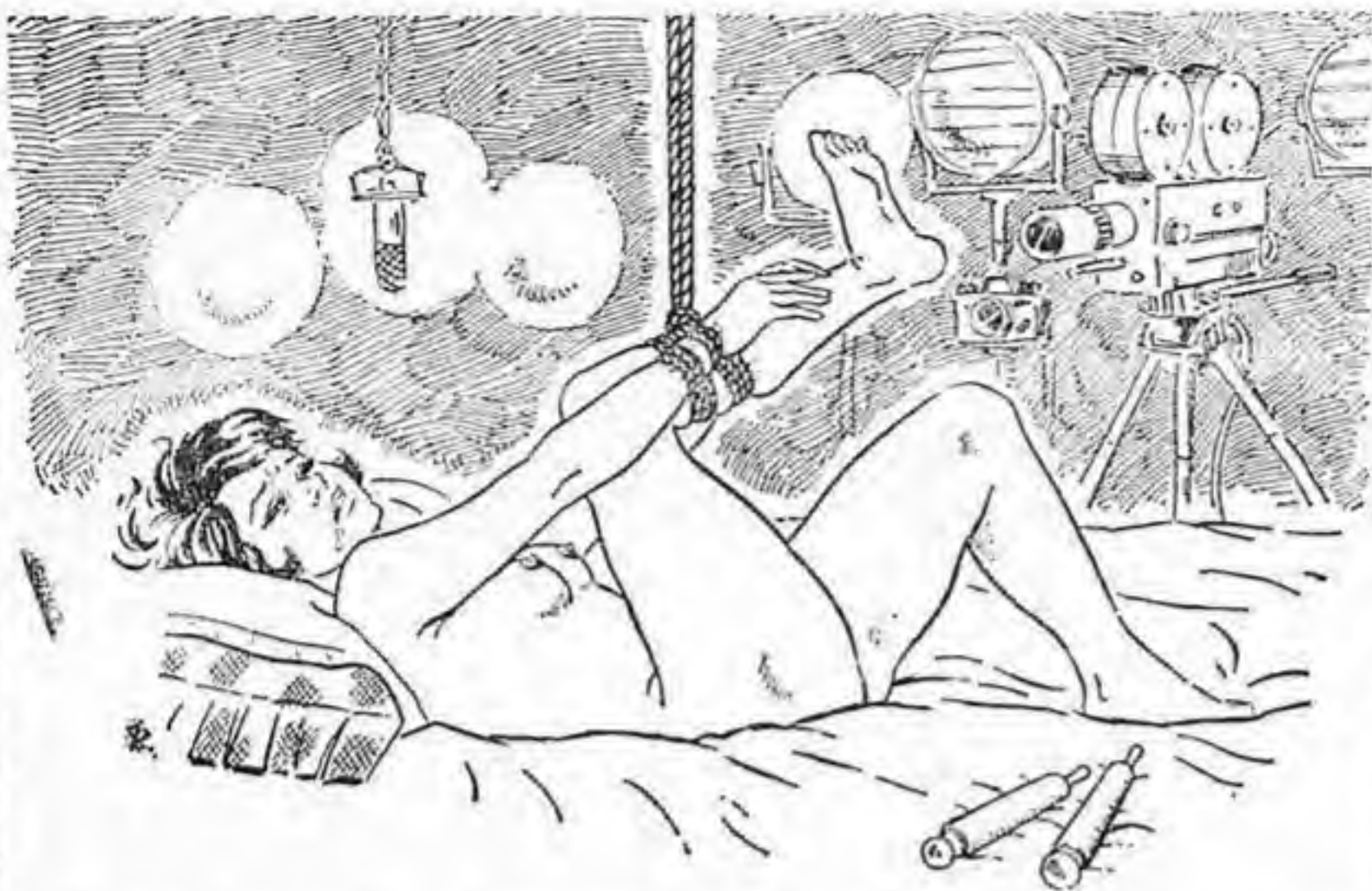
機会があれば、いつも私は旅の恥はかき捨てとばかり、あのお腹の可愛い笑窪を遠慮せず充分に鑑賞させて戴くことにきめております。父親の方が戸惑い狼狽して、現代娘達は平気で、なかには温泉の滑り台まで見事なポーズで滑って呉れるのがいます。それこそ、下に男が首まで湯に浸って、ようと、われ関せずです。だから私にとっては温泉旅行はこたえられないのです。

山では、機会の少ないのは当然

ですが、根気よく待つことにしております。誰だって生理的要求はあるんですから……。フォトは困難ですが、うまく調子があえば、白いズロースをひきあげる姿態程度ならハントできることもあります。このぐらいではたよりないものです。が、その代わり少女の去った跡には、水玉を輝かした青草や木の葉が私を待っております。

この反対に、海辺での機会の多いのは当然ですが、やはり一番良い時間は、帰り仕度の頃です。





Sコレクション 「黄金の苦悶」 豪 城二



私のイメージ画 「受難の妖夢」 辻 梶太郎

最近の話なのですが、小学生のフ  
オトをものにして帰ろうとした時  
に、黄色い小さなテントの蔭で私  
好みの中二ぐらいの女の子が水着  
を脱いで白パンティをはこうとし  
ているのに、ばったり出くわしま

した。フィルム完了後を、私がど  
れだけ残念に思ったかは、同趣味  
の方ならご理解いただけると思い  
ます。  
海辺を放浪するこのハンターは  
いつも首からキャップをはずした

愛機を下げて、美しい獲物を見付  
けたら、ファインダーを覗かずと  
も、馴れたカメラさばきで、常に  
見事にキャッチするのですが、い  
かにせん、フィルム終了のカメラ  
では涙を飲むばかりでした。

この機会は逃してしまいました  
が、まだまだ、私の手文庫の中に  
は、ローティーンの美少女達が多  
勢、瞬間的な羞恥ポーズを写真と  
いう冷たい虫びんで止められて  
ひしめいております。山の木影で  
しゃがみこむ少女の生姿も、露天  
風呂の岩の上に這い登る少女も、  
濡れた水着を足先よりぬぎ去ろう  
としている娘も、一瞬のストップ  
モーションと共に固定され、永久  
に一葉の紙の上に標本化された上  
で私の目を愉しませ続けてくれる  
のです。

英さんのお書きになった創作と  
私の一番末の妹の写真と交換して  
頂けませんか。私の妹は13才です  
が、眠っている時に白い小さな布  
ぎれを少しばかりずらせて写した  
ものです。私の現像焼付けにして  
は上出来で、とても鮮明に撮れて  
います。私の交換希望作品は羞恥  
責め小説ですが、あまり堅苦しく  
ならず、オトイレの落書きのよ  
うに気楽に書いたもので、結構で  
す。英さん以外の方でも、妹さん  
やお嬢さんの写真と交換して下さ  
る方があれば、お願いします。但  
し、ご家族以外の写真は、物議を  
かますと迷惑しますからお断わり  
致します。私のコレクションにご  
協力いただけませんか。



## 〔秘蔵版特選 S M 資料〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

入墨女賊仰向け木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よひ V

全裸入墨女賊拷問折檻

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よせ V

女賊笞打ち白洲糾問

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よゆ V

入墨女賊ハリツケ拷問

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よめ V

入墨女賊海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よす V

入墨女賊全裸四這い木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よも V

入墨女賊逆さ吊り仕置

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よき V

女賊全裸大の字磔処刑

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△よさ V

女囚拷問 木馬責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もと V

女囚石抱き算盤責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もへ V

美人女囚海老責め拷問

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もに V

白洲女囚竹棒羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もち V

美人女囚笞打ち折檻

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もほ V

女囚開股羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もぬ V

美貌女囚土壇で胴斬り

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もり V

艶美女囚白洲に悶える

大手札三枚一組 四〇〇円  
美木乃々子 略号△もは V

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
東浦ひかる 略号△なの V

猿ぐつわにあえぐ裸女

大手札三枚一組 四〇〇円  
東浦ひかる 略号△なむ V

女奴隷を弄ぶ二人の女

大手札八枚一組 一二〇〇円  
大塚・東浦・木村 略号△きあ V

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円  
大塚・東浦 略号△きす V

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大塚・東浦 略号△きせ V

豊満な乳房を責める女

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚・東浦 略号△きそ V

女奴隷を飼育する美女

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚・東浦 略号△きて V

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 七〇〇円  
大塚・東浦 略号△きと V

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 三〇〇円  
大塚・東浦 略号△きな V

可憐な牝犬の調教

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めあ V

足舐めをたのしむマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めく V

足舐めを強要されたマソ女

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めゆ V

足舐め訓練を受ける牝犬

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めや V

愛玩用牝犬の生態

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△めえ V

足首縛りの表情美

大手札三枚一組 四〇〇円  
一宮百合子 略号△あひ V

美しき足首の縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
一宮百合子 略号△あは V

素足を縛られる快感

大手札三枚一組 四〇〇円  
一宮百合子 略号△あふ V

生ゴムの猿ぐつわに喘ぐ

大手札四枚一組 五〇〇円  
木村 洋子 略号△むこ V

股間縛り恍惚境場面

大手札三枚一組 四〇〇円  
一宮百合子 略号△るね V

鼻責めいたぶられ集

大手札四枚一組 五〇〇円  
一宮百合子 略号△るえ V

首縄股間膝頭縛り

大手札五枚一組 六〇〇円  
一宮百合子 略号△るそ V

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△はね V

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一二〇〇円  
山原清子外一名 略号△はた V

乳房責め五態

大手札五枚一組 六〇〇円  
山原 清子 略号△てら V

全裸女麻縄強烈縛り

大手札十枚一組 一五〇〇円  
山原 清子 略号△いね V

刺青裸女を踏みにじる

大手札八枚一組 一〇〇〇円  
山原 清子 略号△いつ V

洋髪全裸刺青強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△いこ V

可憐島田髻全裸縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△いみ V

黒フンドシ高手小手縛り

大手札八枚一組 一二〇〇円  
山原 清子 略号△ひろ V

刺青女体エビ責め地獄

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△ほか V

文身女体股間縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
山原 清子 略号△ほき V



# 「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組百態 大手札型印画紙(9×13) 極鮮明焼付

各組 一組一枚(送料共)

四組四枚 五〇〇円  
十組十枚 一〇〇〇円  
二十組二十枚 一八〇〇円  
五十組五十枚 四〇〇〇円  
百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-91)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号  
天星社宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)  
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)  
3 八の字の開股縛(左近麻里子)  
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)  
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)  
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)  
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)  
8 白肌輝く股間責(山原 清子)  
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)  
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)  
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)  
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)  
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)  
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)  
16 縛の全裸を見て(金原奈加子)  
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)  
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)  
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)  
20 後手縛を見せる(川越美佐子)  
21 鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)  
22 逞ましき臀部晒(左近麻里子)  
23 真白の柔肌責め(左近麻里子)  
24 ムチ責めの果て(安井喜久子)  
25 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)  
26 湯責めにあう女(山原 清子)  
27 変型高手小手縛(川越美佐子)  
28 洋子をいじめて(木村 洋子)  
29 緊縛のホステス(佐々木真弓)  
30 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)  
31 均齊のとれた体(佐々木真弓)  
32 蛾涙責めの熱演(ローズ秋山)  
33 脚吊りで責める(ローズ秋山)  
34 片足吊りの狂態(大塚 啓子)  
35 猿轡の開股縛り(木村 洋子)  
36 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)  
37 妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

38 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)  
39 縛られた洋裁生(長井葉津子)  
40 椅子開股羞恥責(左近麻里子)  
41 責め抜いた拳句(安井喜久子)  
42 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)  
43 全裸の股間縛り(山原 清子)  
44 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)  
45 パンティを剥く(大塚 啓子)  
46 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)  
47 猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)  
48 全裸高手小手縛(長井葉津子)  
49 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)  
50 後手の嚴重縛り(左近麻里子)  
51 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)  
52 炸裂する革ムチ(安井喜久子)  
53 剥がされた布片(金原奈加子)  
54 浴槽と荒縄の責(山原 清子)  
55 髪吊りの擦り責(ローズ秋山)  
56 高手小手の裸女(左近麻里子)  
57 海老縛りに泣く(関谷富佐子)  
58 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)  
59 悶える全身縛り(一宮百合子)  
60 伸びやかな素足(一宮百合子)  
61 卓上の人身御供(左近麻里子)  
62 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)  
63 股間縛を羞らう(金原奈加子)  
64 宙吊りにもがく(木村 洋子)  
65 裸身を晒す表情(金原奈加子)  
66 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)  
67 全裸をもがく女(ローズ秋山)  
68 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛猿轡(左近麻里子)  
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)  
71 縄のブラジャー(左近麻里子)  
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)  
73 逆エビで責める(ローズ秋山)  
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)  
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)  
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)  
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)  
78 豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)  
79 あどけなき表情(金原奈加子)  
80 厳しい縄目の肌(金原奈加子)  
81 白肌にむごき縄(左近麻里子)  
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)  
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)  
84 美しき全裸肢体(佐々木真弓)  
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)  
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)  
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)  
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)  
89 股裂きで責める(ローズ秋山)  
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)  
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)  
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)  
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)  
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)  
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)  
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)  
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)  
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)  
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)  
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)



〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円

猪 吊り三態

梨花悠紀子 略号(いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

大手札三枚一組 略号(ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

玉田美佐子 略号(ねと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号(てい) 四〇〇円

全裸アゲラ縛り

長野 良子 略号(てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号(てほ) 四〇〇円

強烈エビ責め

松本アサ子 略号(まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

絹川 文子 略号(りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号(ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

関谷富佐子 略号(ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

長野 良子 略号(へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フォト

栗本ミチ子 略号(いな) 四〇〇円

強烈エビ縛り

大手札三枚一組 略号(もい) 四〇〇円

乳房責の苦悶

関谷富佐子 略号(もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

関谷富佐子 略号(もた) 五〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(むち) 五〇〇円

裸身の晒し

大手札三枚一組 略号(わあ) 四〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号(せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

長野 良子 略号(そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

大手札三枚一組 略号(とう) 四〇〇円

色輝の開股縛り

長野 良子 略号(いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 略号(はす) 四〇〇円

乳房しばり

長野 良子 略号(うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大手札五枚一組 略号(うい) 六〇〇円

木馬責三態

大手札三枚一組 略号(もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大手札二枚一組 略号(いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原 清子 略号(もの) 四〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

山原 清子 略号(はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原・鈴木 略号(はた) 一二〇〇円

碧玉裸身緊縛

刑部 典子 略号(のん) 四〇〇円

くすぐり責め地獄

大手札三枚一組 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟涙責め

大手札四枚一組 略号(きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大手札五枚一組 略号(きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大手札五枚一組 略号(きて) 七〇〇円

凌辱されるマソ女

大手札五枚一組 略号(きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大手札二枚一組 略号(きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大手札三枚一組 略号(なの) 四〇〇円

猿くつわにあえぐ裸女

東浦ひかる 略号(なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号(ゆり) 五〇〇円



## ☆浣腸関連資料の部☆

## 只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かみ)

## 強制 空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かく)

## 百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かな)

## 浣腸 責の極致

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かむ)

## 女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)  
梨花悠紀子 略号 (れち)

## 強制 女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
絹川 文代 略号 (きか)

## イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)  
梨花悠紀子 略号 (いるり)

## 太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
東浦ひかる 略号 (かふ)

## 自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (ゆか)

## 浣腸器と女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
絹川 文代 略号 (ほの)

## エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るい)

## イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るは)

## 女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ほは)

## 進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ほい)

## 浣腸 後の排便

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (へき)

## 便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (へか)

## 浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
山原 清子 略号 (かる)

## 浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (一三〇〇円)  
山原 清子 略号 (かへ)

## 浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 (一二〇〇円)  
山原 清子 略号 (かに)

## イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けか)

## オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けひ)

## オシメとカバー

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けふ)

## オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けま)

## 浣腸後カバー装着

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (けさ)

## 浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (のけ)

## 高圧 空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (むい)

## 浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (むは)

## 施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (むろ)

## 浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
遠藤百合子 略号 (ゆか)

## 自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ちぬ)

## 浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ちり)

## 浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ちら)

## 浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かね)

## グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かて)

## シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かた)

## イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かち)

## アーヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 (七〇〇円)  
山原・東浦 略号 (かの)

## 浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
山原 清子 略号 (うも)

## 浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
山原 清子 略号 (うわ)

## 浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬる)

## 施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)  
美木乃々子 略号 (ぬか)

## 捜入された嘴管

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るて)

## 襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (るち)

## 女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)  
大塚 啓子 略号 (ると)





秋冷の候御社益々御清栄のこと  
をお喜び申し上げます。12月号読者  
通信にて尼崎の高浜満六氏が11月  
号誌上の「鳥獣戯画」について、  
謙遜されているようですが、私は  
『肥満』主題については相当多数  
の同好の士より歓迎されているこ  
とを確信致しております。何卒、  
今後共、同主題について大いに健  
筆を揮って頂きたく、ここに切に  
お願い申し上げます。

(東京都・梨木風人)

初めておたよりします。一寒村  
に住む20才の女性です。私の住む  
田舎町でもミニスカートが増えま  
した。私も極端なミニをはいてい  
ますが超ミニの娘を見ると同性の  
くせにドキドキするのです。やっ  
たなアという気がします。自分で  
も変だと感じていますが、うらや  
ましいというような、しっとりの気  
持もします。自分ではミニの奥を  
わざと見せびらかしたり、時には  
畑でわざと見られるようポーズを  
したり自分ながら楽しんでいますが  
他の人が超ミニでいると、心がお  
だやかでないのです。近頃はお友  
達を作っては、いろいろのことを  
やっていきますが殆どのお友達が恥  
かしがりながら、しまいに本当  
に欲ぶから楽しいと思います。で  
も世間の狭い田舎では、それでも  
相手が少なくなってきたようで私  
は都会に出たいと考えています。  
超ミニで、白い長ソックスや小麦  
色のストッキングをはいて都会の  
舗道を歩いてみたいと思います。  
私は靴とストッキングだけつけた  
ままの裸になると興奮します。そ  
の方が恥かしいような気持ちになる  
のですがきれいな見えるのです。  
私は都会に出たいと思っています

が、学校で勉強してないから字も  
下手だし、文章もうまく書けませ  
ん。只とりえといったら脚が長い  
ことと年が若いということだけ。  
奇クは実に楽しいですわ。SMの  
男性が私を呼んで下さるなら明日  
にでも、とんで行きます。

(兵庫県城崎郡香住町・坪井満子)

しょう。女性自身から湧き出る汗  
と分泌物にさいなまれ、ギューギ  
ュー締めつけられるとき、私は是  
非共パンティになりたいのです。  
二十二、三才位のグラマーのS性  
のある女性のパンティこそ私のな  
りたい最大の欲望です。

(東京・マゾ狂男)

私は憐れなマゾ男です。女性に  
対してノーマルなセックスは少し  
も感ぜず常に女性を女王様として  
崇め自分は遥か下の方に坐して尊  
い美しい女性の姿を仰ぎつつ無上  
の喜びにひたっております。殊に  
乗馬クラブで若いグラマーの女性  
が馬上ゆたかに跨っているとき私  
は柵の間から女性を仰ぎ見てはち  
切れんばかりの太股の下に黒の拍  
車のついたおみ足を涎をたらさん  
ばかりに見つめるのが一番幸福で  
す。その時、女性が馬上からジロ  
リと私の顔を見さげられる時の喜  
びは何にもたとえようもありません。  
私の希望は女性が馬に跨って  
いる時のパンティになりたいので  
す。女性の尻の下で馬の歩む度に  
グイグイしめつけられるパンティ  
考えただけでも心が躍ります。特  
に夏の暑い日ざかりの馬上に於け  
るパンティは、どんなに苦しいで

御誌のことについてお願いがあ  
ります。私達夫婦は結婚して五年  
になります。子供がありませんの  
で、主人はよく私を縛ります。主  
人は御誌を毎月買っておりますが  
どうやらそれを参考にして夜にな  
ると私を縛るようなのです。それ  
で私はこの本に対して腹が立って  
くるのです。私は主人におもちゃ  
にされているように思えてがまん  
が出来ず、思わず書いてしまいま  
す。本を書く人も売る人も悪いの  
ではなく、読む人がもう少し考え  
てみるとよいのではないかと思う  
のです。でも私には御誌の文章を  
書く人の気持はわかりません。私  
のような女性もいるということを  
よくお考え下さい。

(静岡・石津くに子)

小生はまだ独身ですが、結婚し  
て年とってからでもフンドシで一生



通したいと考えているフンドシマニヤです。更に女性については妊婦に対して、大なる関心を持っています。昭和四十三年三月号の奇クサロン誌上で「ある願望に托して」という告白を発表して本誌の緊縛モデルになりたいとM女性としての本心を明かした金原奈加子は立派です。八月号のカメラハントで妊婦として登場したのには益々感心いたしました。小生はこのような妊婦の写真に対して真面目に人生を考えている青年の一人です。本誌の自肅の徹底に誓って、一層の活躍を祈ります。

(神奈川・石井登)

弘前市の牧田静夫様。朝夕めっきり涼しくなまってまいり、紅葉も見事な季節になりました。初めての方にこんなお便りを書く失礼をお許し下さいませ。身近くに奇ク

### 〇 御送金についてお願い

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、小替為、定額小為替、振替等の方法もご利用下さい。封書の場合には切手代用でも結構ですが、なるべく小額切手に願います。

の愛読者がいようとは夢にも思いませんでしたので、おどろきと嬉しさで胸が一杯です。出来まじたらこれからお附合ひして頂けたらと思います。実は私は三十二才の人妻で、子供が二人あります。身長一四六センチ、体重は五七キロ。でっぴりと肥った男性が好きです。貴男とお友達になれる日をお待ちしております。

(大館市・藤原明子)

一寸、Mのたわごと、又真実？を書きたくなったので書かして下さい。こんなM性向の男はいるでしょうか。一寸おかしいでしょうか。自分が現在、最も強く感ずるMの幻は、女学生による男子への凌辱です。かつて大分前、本誌に載っていた「悦虐回想録」のような状態です。この名作により、私のMは激しく火を噴きました。忘れることのできない作品です。最近、古本屋で再び手にして求めました。何回、読みかえしても、私の心は激しくMの世界にさまよいます。清純な制服の女学生を憧れすぎる戦中派のせいでしょうか。男女七才にして席を同じゅうせずという、教育のせいでしょうか。現実には、そのような事実は女上

位の昭和元祿でもないかもしれませんが、制服の女学生が男の子を秘密の土蔵の中に閉じ込めて自由を奪い、一人乃至、数人の友人と散々に責める状況を夢見ます。あらゆる激しい凌辱に男の子は半死半生になり、完全に彼女達の前に屈伏、一生奴隷として奉仕することを誓約させられるというテーマは、思っただけでも、私のM心は激しく高鳴ります。四十才近い自分が全く年甲斐もなく、こんな空

想に身を任せるとは、お恥かしい次第です。(群馬・福島則夫)

〇 金原奈加子様。貴女の数枚の写真を見て、ぜひ、お逢いしたいと願う者です。編集長のご紹介ご承諾の上、一度でレナラクをいただけたらと思うのですが、如何でしょうか？ 編集部の方、どうかよろしく、とり計らっていただきますのですが……。もちろん秘密は厳守いたします。

## △飼育の愉しみ▽小池美喜嬢分譲写真

本誌九月号のSMカメラハントで紹介された純情可憐な小池美喜嬢の緊縛姿態を好事家に限りごらんにいれます。女優とかヌードダンサーにない素人じみた初々しさを彼女の中から見つけて下さい。

### 全裸正面の縄掛け

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
小池美喜 略号 八れろV

羞らいたを含んだ幼い膨らみに情容赦なく縄目が喰い込んで素肌がわなわなとふるえている。

### 柔肌の高手小手縛

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
小池美喜 略号 八れろV

生れて初めて縛られる高手小手に後手首を高々と掲げながら、むちむちとした全裸の肌を染めた。

### 後手首を縛られて

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
小池美喜 略号 八れろV

瑞々しい全裸の肌を惜しげもなく晒して柔軟な後手首を背後で背負った少女のあどけなき表情。

### 飼育された美少女

大手札一組 略号 四〇〇円  
小池美喜 略号 八れろV

自分の裸身を縛られるという好奇心がいつとはなしに興味に変化してきた美喜嬢の縛られ姿態。



(埼玉・木村生)

貴誌、益々御発展、一読者として嬉しい限りです。今月号も豊富な内容でありがとうございます。今月の読者通信に載りました東京大田区の、春川さと子様の文章を一読して是が非でも彼女の求めるM男子となりたい。もしこれが果たされたら、暗い自分から脱し、バラ色の日々を過ごせるだろうと心から思っております。編集部の方皆さん、春川さと子様よりの「現物」おわけ下さい。そして春川さと子様をご紹介下さいませよう、重ねてお願い致します。決して不真面目な気持ちからではありません。

(静岡・宇田和美)

小生は今年、満二十七才になります。書店にて奇クを拝見し、今までにない内容の本によるこんで拝見いたしました。今後も毎月、愛読したいと思ひます。小生はマニヤとまではゆきませんが、フンドシ愛用者の一人です。父もフンドシ党です。明治生まれです。で、当然といえば当然ですが、海軍時代には皆、フンドシ党だったそうです。専ら三角フンドシ愛用ですが、これが一番良いように思

います。一般に市販されているパンツとかサポーター等があります。が、健康的にも余り良いとは思えません。それから腰巻愛用も、小生には健康に良いとは思えません。ので、三角フンドシを愛用しています。赤いサラン綿で、自分で作っています。赤いフンドシというのも中々乙なものです。人間は原始時代の裸生活の時でも前部をかくすようにしています。が、南洋の土民やアメリカのインディオも日本人そっくりのフンドシをしめていると聞きます。日本には古来から国技として相撲がありますが、相撲をとる力士は、あの長いまわしをしめています。日本人には断然フンドシです。若い青年諸君、フンドシをしめ給え。緊縛一番と言うではないですか。

(浦和市・沼沢省一)

本誌が何だか丸みを帯びてきたような感じが致します。今まではとにかく、ほん放、野性的な意欲が十分に見受けられました。昨今の青少年問題等の自粛にひっかかったかもしれないが、私自身、このことが、ずいぶんこたえたようです。編集者、作者の方々の考え方が変わったのかしませんが

安井・中河・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト

開股羞恥責めの姿態

大手札四枚一組 略号八しうV 五〇〇円

髪吊りで強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 略号八したV 五〇〇円

片足首引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号八しちV 五〇〇円

尻立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 略号八しつV 五〇〇円

柔肌に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号八してV 五〇〇円

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号八しとV 五〇〇円

貞操帯着用鞭打ち

大手札四枚一組 略号八しやV 五〇〇円

痛打にもかく美女体

大手札四枚一組 略号八しゆV 五〇〇円

あぐら縛りの羞恥責

大手札四枚一組 略号八しよV 五〇〇円

片脚挙げで晒す裸身

大手札三枚一組 略号八とはV 四〇〇円

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号八とにV 四〇〇円

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号八とほV 四〇〇円

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号八とへV 四〇〇円

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号八とちV 四〇〇円

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号八とりV 四〇〇円

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号八とぬV 四〇〇円

菱縄縛りで床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号八とるV 四〇〇円

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号八とかV 四〇〇円

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号八とまV 四〇〇円

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号八とみV 四〇〇円

浣腸責め的美態開陳

大手札三枚一組 略号八とめV 四〇〇円

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号八ともV 四〇〇円



最近、私の心を満たしてくれものが全く影をひそめたのは残念です。私も変わり者かもしれないが以前は本誌を見る度、わくわくしたものです。私は昭和四十年頃から町にある出店の本屋から本誌を入手して、何気なく開けて見ていましたところ、何とビックリしました。私自身、女性の鼻に非常に興味を持ち、それを自分の手で責めてみたい、さわってみたい気持ちでいた時です。しかし、このことは、本当に書かれたり写真に撮っていたりしたものなんか全く知らなかったし、あるとは思っていませんでした。ところが何と、本誌には鼻責めの文、写真、絵等が載っているのです。このとき、いても立ってもいられず、早速、家へ持って帰り、独りで何度も何度も夜の更けるのも知らず、読み明かしたものです。分譲写真もまだ豊富にありましたので、早速注文して未だに大切に保存しているのです。毎号とってよいほど、鼻責めの記事の載っていた旧号を思い出せば思い出すほど懐しく、今は淋しい限りです。鼻責めのファンの方、大いにハッスルしようではありませんか。大塚啓子さん、山原清子さん、遠藤百合子さん、

並木乃々子さん、長野良子さん、増田みゆきさん。最近では中河恵子さん、一宮百合子さんなどの、まことに美しい鼻を思う存分に責めて下さった写真が、なつかしいです。特に強烈なのは、夫婦で鼻責めを楽しんでいらっしゃる増田みゆきさんです。夫にされる鼻責めは、全く我々鼻責めファンを、しんそこ惚れさせます。あの強烈な鼻孔責め、鼻吊具を両鼻孔に引っかけ、小じまりした増田みゆきさんの、あの可愛らしい鼻を思いきり吊り上げると、鼻の孔はすぐく拡大され、前に全部、露呈するのです。これは全く鼻責めの中でも魅力のあるものです。鼻孔へのローソク責め、鼻孔への異物挿入、鼻孔への開孔器による拡大。全く思っただけでも、ぞくぞくするよくなものばかりです。最近是新趣向のモデルさんの出現で誌上を賑わしています。鼻責め写真だけは見当りません。撮って下さい。鼻責め写真をファンは待ちのぞんでいます。

(埼玉・鼻責めマニア)

奇ク愛読の皆さん、お元気ですか。小生は毎月、奇クを楽しく拝見しているM男です。小生のM性

### 可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆめV

### 立縛り正面裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆえV

### 両手吊り全裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆひV

### 雁字搦目後手縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆあV

### 股間縛り柔肌責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆもV

### 猿ぐつわ開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆにV

### 豊満な臀部強烈責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆほV

### 強制全裸開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆみV

### 股間縛りで悶える

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆるV

### 全裸縛りに羞らう

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
金原奈加子 略号 八ゆへV

### 私の妊娠腹を見てね

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八ゆわV

### 縛られた妊婦横臥す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八ゆよV

### 被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八ゆぬV

### 尚も見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円  
中河恵子 略号 八ゆるV

### 股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よれV

### 両手吊り正面裸晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よそV

### 全裸高小手の麗身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よのV

### 全裸股間縛りの媚態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よやV

### 強烈な変型エビ縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よいV

### 正座猿ぐつわの仕置

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よふV

### 凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よえV

### 女体二つ折り縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よぬV

### あぐら縛り全裸晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よあV

### イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
長井葉津子 略号 八よたV



の一つに女性による顔面騎乗願望があります。少し前になりますが今年の六月号の「被虐の陶醉者」における、作者が受けられた顔面騎乗の記事、非常に楽しく、また羨ましく読ませて頂きました。街で豊満なヒップの女性に逢うときあの女性のお尻の下じきにされたいと願ひ、自転車に乗った女性に逢うとき、あのサドルの代りに小生の顔をおいてくれないかなあとあこがれます。一口に顔面騎乗といいますが、実際には大変なことだと思います。小生が顔面騎乗にあこがれるのは、一つはその巨大なお尻の重みによって押しつぶされる苦しみに快感を覚え、もう一つは、その強烈な臭いに酔いしれることです。東区の女王様を始めとするS女性の方、どうか小生のこの願ひをかなえて下さい。小生の顔を座ぶとんの代りにして思いきり敷きつぶして下さい。そして気も遠くなるような臭い目に合わせて下さい。小生は貴女の巨大なお尻の下に敷かれ、息も絶え絶えに苦しめられ、その気も遠くなるような臭いにむせび感泣することでしょう。(京都・マゾ男性)

新田英雄様。最近、貴殿の奥様

のプレイフォトが拝めなくなり、遺憾に思っております。ゆう子夫人の如き美女を妻とされた貴殿はお羨ましい限りです。成熟しきった艶なる妖しさは、他に類をみない肉体だと思ひます。乳房責めがお好きなようですが、私の最も好む奥様の、あの太い、むっちりとした腿を左右に開いて羞恥に悶える肢態のフォトを発表していただきたいと願っております。

(神戸市葦合区・谷郁夫)

同好の皆様、初めてお便りいたします。私は結婚七年目の主婦でございます。夫三十二才、私二十九才で円満な夫婦生活を過ごしております。私は新婚一年目、夫の裸体すら、まともに見られぬ頃、夫が文通で知り合った近くの中年夫婦に誘われて「夫婦交換」という凄惨な体験をさせられたのです。全裸にされ中年夫婦の行爲を見せられ、つぎにそのご主人に抱かれた姿を夫に見られる恥かしさ。この羞恥心が快感に変化するのに時間は長くかかりませんでした。あの日から私たちは年に二―三回、数組のご夫婦と夢のような会合を持つことにしております。でも、この種の交際は、余ほど慎重に、

「緊縛女体美のシリーズ」

大手札印画紙焼付

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

両手吊りに悶える女体

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

鞭は柔肌を炸裂する

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

投げだす白い緊縛裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札三枚一組 略号 五〇〇円

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

柱の前に緊縛された全裸

大手札三枚一組 略号 五〇〇円

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円

中河 恵子

略号 八はひ



相互の社会生活、家庭生活をおびやかすことのないよう、内密にすめねばなりません。相手を信頼する上に立ってこそ、初めて真実の友情が生まれ、安心して夫婦交換という冒険が実現するのではないでしようか。夫は野外とか映画館トイレ等でのプレイを望みますが、その点のみ私と意見が一致いたしません。どなたか野外での露出による羞恥責めプレイを好む女性の方、私ともども夫の相手をしてやっていただけないものでしょうか。また私を可愛がって下さるレス趣味の年上の奥さま……私と共に夫に責められてみませんか。夫がカメラ趣味のため、DPEを自分でやっておりますので、ご夫婦のプレイフォトを写したものの処置にお困りの方は、ご遠慮なくお申し出下さい。秘密厳守にて、ご協力してさし上げます。レス趣味夫婦プレイ趣味等、お持ちのご夫婦、またはお姉さま、お便り下さいませ。

○

(悩める妻より)

始めてお便り致します。私は責められる事に喜びを感じるマゾの女性です。特に私の好むのは流腸と除毛です。両方とも何度も経験がありますが、あのしびれるよう

な快感は、何ものにもまさるものでしょう。流腸を受けるときは大てい赤子がオシメをかえてもらうときのようなポースをとられます。そして灼きつくような視線を感じながら、注入を受けます。意地の悪い責手になります。わざとゆっくり時間をかけて流腸し私の反応を目撃して喜びます。私は、どうすることもできず、はづかしい姿をさらしてしまいうのです。また除毛されるときは冷たい剃刀の刃の滑っていく感触も、たえられません。どなたか失神するような激しい羞恥責めにかけて下さいませ。

○

(横浜・藤田春枝)

奇ク愛読者の皆様、いかがお過ごしですか。小生は愛読して二年になる青年です。いつも奇クを手にするたびに今度こそお便りをと思ひますが、ついに書けず、今日になってしまいました。小生はSM両性の持主ですが、特に体に傷をつけるような責めは余り好まず目下、縛りのポーズを楽しんでおります。東京に参りまして、特に相手がなく、一人で淋しくてなりません。奇ク読者の女性の方で優しく縛って楽しみ、また縛られて楽しむ方、どうかお便り下さいませ。

開股縛りに喜ぶする女

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はわV

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はふV

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はほV

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はあV

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 四〇〇円  
中河 恵子 略号△はうV

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はさV

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はめV

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はしV

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 五〇〇円  
中河 恵子 略号△はもV

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△はむV

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△はめV

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△はもV

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 四〇〇円  
関谷富佐子 略号△はさV

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△はしV

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△はすV

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 四〇〇円  
大島 照代 略号△はせV

両手吊りであえく女体

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△はゆV

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 四〇〇円  
大島 照代 略号△はたV

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△はちV

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△はつV

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△はてV

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 五〇〇円  
大島 照代 略号△はとV



せ。できますれば東京にお住いの方、よろしくお願い致します。

(東京・こうじ)

岡山近藤次郎様、おたより嬉しく拝見しました。私もプレーを夢にまで描いております。でも結婚後までもない二十才の人妻ですから、絶対に秘密を守って下さり、時間も日中に限ります。場所は市外で真面目なSMプレーに終始すること、純粋なSMプレーとはいえ、羞恥責めを主題とし、傷跡の残るようなプレーは困ります。上半身をグルグル巻きに縛り上げられ、両足を大きく思いきり広げて鑑賞に供せられることを考えるのと恥かしくて気絶しそうです。貴方やマニヤの方の優しいお便りをお待ちしております。

(神戸・磯部美加)

小杉君が十一月号に記載された通信のノー下着で超ミニスカートの新ブラは、私が有田君に贈る予定の服装と計画にそっくりそのままです。最近の若い女性の服装は、私の好みをそのまま表現したようで、本当に喜ばなければならぬのですが、実は反対に何となく、しっくりしません。今年にな

ってからはミニが特にひどくなりまたスリッパをつけられない女性も急に増えたようです。しかし何となく魅力を感じないのは、女性が女性でなく中性化してしまったことです。またミニにしても殆どの女性が、暑い夏にもかかわらずストッキングをはいております。自分を美しくしたい女性の気持は理解できますが、腕と同様、手入をすれば、ストッキングをつけなくともよいと思います。小杉君、ノー下着でミニスカートの新ブラは、夏だからできることで、これから寒くなつてからも同じ服装のできるのがほんとうのMと考えます。最近、厳冬でもオーバーを着ない女性がふえてきました。美しくありたいと願う女性にとって普通かもしれないませんが、この意味では、ミニスカートで半袖とはゆかなくとも七分袖でノー下着、ノーストッキングで散歩してみても如何ですか。昨今、これに近い女性を見受けましたから、Mである小杉君有田君などは当然、実行することでしょうね。これに関するご意見がありましたら寄稿して下さい。私の経験から得た考えでも申し上げたいと思います。

(芦屋・山本 陸)

最新撮影総天然色  
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てきV

後手裸身柱縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てかV

縄目にあえぐ裸女

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てくV

豊麗な裸身をくびる縄目

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八てこV

後手高小手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
大塚 啓子 略号八てまV

長襦袢の緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てみV

緋の腰巻緊縛色模様

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てむV

猿ぐつわに呻く女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てめV

柱宙吊り強烈縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てもV

ポリウムを縛りあげる

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てんV

縄に苦悶する裸女を狙う

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
東浦ひかる 略号八てるV

真紅の腰巻着用品姿

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
大塚 啓子 略号八うおV

縄に悶える緊縛色模様

大手札二枚一組 略号八〇〇円  
東浦・大塚 略号八うてV

真紅の腰巻着用品縛り

大手札四枚一組 略号一二〇〇円  
大塚 啓子 略号八うこV

華麗なる緊縛裸身

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るむV

みだらな開股縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るのV

責めに疲れた諦観

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るおV

真紅の腰巻姿で緊縛

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るまV

羞らいの真正面縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るけV

若肌に喰い込む縄目

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るふV

高手小手後手縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
一宮百合子 略号八るやV

股間縛りの開股姿

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れよV

羞らいの股間縛り

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円  
中河 恵子 略号八れにV



○秋冷の候となりましたが編集部の方々や辻村隆氏をはじめ先達の諸兄姉には益々御発展のことと御察しいたします。私は初めてお便りをするS好みの三十五才の男性です。貴誌を知ってから約十年になりますが、その間、私のSMに對する興味は、ある時期には強く心の表面に顔を出して語る友や、プレーの良きパートナーのなきが故に、淋しさややる瀬なさを感じさせ、ある時期には、あわただしい日常生活に追われて心の片隅に姿をかくしてしまふといったような陰と陽との繰り返しでした。しかし最近また強くSMに心ひかれるようになり、貴誌を買い集めては読みふけております。私も、これからは広く同好の方々と御交際ねがい、大いにSMを楽しみたいと思います。結婚生活五年になります、妻は全くSMに興味を示しません。本年三月号の藤原笑子さんへ。良いお友達が見つかりましたか。近くに貴女のような同好の方がおられるのを知って、大変、嬉しく思われます。ぜひ一度御逢いして楽しく語りたいと思います。が如何でしょうか。それから十一月号の森川信也様。私は運

転免許を取得してから十五年になり、運転には自信があります。私でも良ければ御利用下さい。  
(門真市・ミスター・サド)

○梅川幸子様、お元気ですか。九月号「私の最近のゴムプレイ」楽しく拝読しました。お手伝いさんとゴムプレイを楽しんでおられるとのことですが、よきパートナーとめぐり逢われたことを私情をヌキにして私にも嬉しい限りです。つきまして私のささやかな希望的提案としては、女主人の貴女が親子ほども年の違う、お手伝いさんに逆の立場で、家事その他、全ての雑用奉仕を強いられる形でプレイし、その体験を告白的手記に、更には、それを素材に飛躍発展させ、短編創作として誌上に公開されてみては如何なものでしょう。つぎに、十月号「ゴム雨具責め雑考」にて久方振りにカムバックした森中雨奇男様。夫唱婦随にてプレイを楽しんでおられるとのこと羨ましい限りですね。ゴムプレイはかなり過酷なゲームですので、少しでも緊縛、ムチ打ち等の苦痛をやわらげるために、より多くのゴム衣裳を着用し、プレイを楽しんでみては如何でしょうか。奥様

### 双胎臨月腹強烈写真

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れやV

### 双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れゆV

### 臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円  
増田みゆき 略号八れえV

### 黒縄縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
中河恵子 略号八れぬV

### 立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れねV

### 開股された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れのV

### 豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
木村洋子 略号八れむV

### 柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やかV

### 高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やきV

### 緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やくV

### 脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やもV

### 縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やしV

### 腰一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
山原清子 略号八やみV

### 女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円  
大塚・東浦 略号八なるV

### 恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 一〇〇〇円  
中河恵子 略号八ぬめV

### 孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 一〇〇〇円  
中河恵子 略号八ぬねV

### 八の字の開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しいV

### 足枷強制開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しみV

### 全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しけV

### 両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しこV

### 両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しらV

### 豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しれV

### 大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
愛知葉子 略号八しわV

### お申込みは大阪阿倍野局私書箱

第14号(天星社宛へ願います)



には内臓がお悪いとのことですが健康には充分、気をつけて下さって今後も益々御発展されるようお祈りします。(東京・菅原敏夫)

○

最近読者通信にも女斗美ファンが目立ちませんが、健在なのでしょう。土俵四股平さん、加茂三千彦さん、雪崎京人さん、円山景三さん、岡平吉夫さん、雄松比良彦さん、奮斗士好太さん、その他の方々、お元気でしょうか。先月号で海野さんの小文を拝見、うれしく存じました。女権美も鈴木ゆり子さんのような、いろいろの権でなく、やはり布一枚をまわしてしめこむ六尺か、又は勝負のいでたち、相撲権に限るのではないかと思います。越中権が全く魅力がないように、Gストリングのようなもので権に入れるのは一寸どうかと思われます。さて女すもうの方ですが、女すもうなる特別のものが風俗文献上、特別の地位をしめていますことは一般のジャーナリズムには案外、知られてないと思います。つまり、単なるストリップの趣向と思われるにいます。三百年の伝統があることは知られていません。映画でもシバリは益々お盛んなのに、女す

もうは「女系図」一発のみとは情けなく、村松梢風の「仇討女角力」でも映画化されないものかと思っています。本誌でも女斗図はいろいろ見ましたが海野さんの図は味があつて実に上手です。そこで又あらたな趣向で毎号一枚ずつでもよろしいから「海野美津男作女すもう四十八手」というような連載を出してもらえませんか。別に勝負のきまりに限らず、仕切り躊躇、チリ、手水、四股などもよいと思います。スペースも、余りとりなくとも結構ですから、ぜひ実現して下さい。雪崎京人さんの御提供のS・Eさんのものも大分、前から愛蔵しております。それから円山景三さんの女すもうの勝負の文章がよろしい。ぜひまた載せて下さい。雄松比良彦さんのスポーツ女子相撲の考案もよかったです。奮斗士好太さんの連載に期待しております。

(千葉・手古奈居士)

○

初めて、お便りします。私は、ふんどしマニアです。九月号の鈴木ゆり子様の「ふんどし物語」は大変に参考になりました。十月号が手に入りませんでしたので、続きを拝見できなかったのが非常に

全裸後手柔肌縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こよ	△
乳房強烈膨隆責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こわ	△
海老責めに苦悶する	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こお	△
全裸の緊縛全身晒し	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こる	△
煙草責めに喘ぐ女	大手札二枚一組	略号	三〇〇円
佐々木真弓	略号	△こぬ	△
緊縛麗姿に映えるライト	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こほ	△
臀部強調後手縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△ころ	△
羞恥に悶える全裸緊縛	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こに	△
ホステスの緊縛姿態	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こち	△
二つ折りで責める女体	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐々木真弓	略号	△こへ	△
残念です。ところで私は、以前から、ふんどしマニアでありながら「ふんどし愛用者」の仲間入りできないのが悩みのたねとなっております。同じ権にしても六尺権の	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
左近麻里子	略号	△こて	△
脈打つ全裸の臨月腹	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河 恵子	略号	△こふ	△
臨月腹の革紐股間縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河 恵子	略号	△こや	△
猿轡の臨月妊婦腹縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
中河 恵子	略号	△この	△
卓上の股間縛り狂態	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	△こそ	△
羞恥の足挙げ責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	△これ	△
悦虐責めの女体終着駅	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
長井葉津子	略号	△こた	△
片足挙げる鞭打ち責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	略号	△こら	△
柔肌に弾ける惨酷な答	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
関谷富佐子	略号	△こな	△
あぐら縛りの女体鑑賞	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
佐近麻里子	略号	△こえ	△
対談用に縛られた女	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
左近麻里子	略号	△こて	△



ない解説が載っているだけで、その締め方となると何も教えてはくれません。野坂昭如著「真夜中のマリア」によると、その締め方にも幾通りもあるそうですが、ご存知の方は、お教え下さい。図解でお教えねがいましたら幸いです。

（横浜・中島正雄）

福岡の緒方則子様。その後お元氣ですか。あなたのお呼びかけが忘れられません。ぼくも、もし、あなたとお会いすることができたとして、先ずあなたは、主人となるべきぼくを観察し、奴隷となる決心がついたら、持参の奴隷契約書にサインして押印するのです。その後は、あなたはぼくを先生と呼ぶなければなりません。だってぼくは、あなたの調教師になったのですから。それから、奴隷のあなたは、調教用の犬の首輪と鎖、錠を買いに行かせられるのです。二人になると、いよいよ雌犬としての調教です。先ず犬首輪に鎖が装着されます。それだけでも犬は頬を赤くするでしょう。そして両手を後手錠にした後に、くすぐり責めます。そしてその後は本格的な調教になります。則子様。プレイバシーは絶対、守ります。どう

か会って下さい。

（広島・伊藤和登）

谷山久美子さん、貴女が突如、四十三年五月号に勇気ある姿を現わされ、早や一年半の月日が流れました。同じ岡山住人の女性の貴女が今一度、奇クの誌上であのM性を見せてもらえたら……。いや岡山市五十万市民の中で、私のように貴女のような女性をさがし求めている者は一人、二人ではないはず。今、貴女は、どこでどうしていらっしゃる。もう幸せな御結婚を……。谷山久美子さん、どうぞ一度、勇気を出して自称S男の私に便りを下さいませんか。SMの世界を知った者には、その人しか理解は与えてくれないものです。ぜひぜひ、お便りを下さいお待ちしています。申しおくれましたが、小生は三十二才で、全くなたい仕事をしています。

（岡山キク同人会・S男）

貴誌を愛読して早や一年が過ぎようとしております。初めて奇クを手にしたとき、立っていられないほどの興奮をおぼえました。私は二十二才になる、内気で平凡な会社員です。東京の留美子様。私

は先天的マゾです。貴女の叩いたりする肉体的苦痛を与えるものは好まないという意見に賛成です。どうか私を、貴女の奴隷として思うまま恥かしめて下さい。喜んで貴女のタンツボ男として仕える所存です。また貴女の専用トイレとして、使用していただきたいのです。ときにはトイレットペーパーとしてお使い下さい。女王様、どうか私の願いをお聞きとどけ下さい。

（東京・マゾ志願者）

大阪東区の女王様、初めてお便りします。小生は二十才で家事手伝いです。Mです。女王様、どうか奴隷にして下さい。私は、まだプレイの経験がありませんが、どんなことでも、女王様の意のままにして下さい。馬やタンツボにさせたり、浣腸をされオムツカバーをつけさせられたり、人間トイレになって後始末までやらされたりいろいろ恥かしい目にあわされることを望んでおります。全裸にされ、縛られた私に、如何なる恥かしめや責めをなさってもかまいません。奴隷として忠実に従い一生懸命に奉仕します。途中で弱音は絶対に言いません。ただ女王様、私の最大の願いは、女王様のお尻

の下に顔を敷かれて、思う存分、いやっというほど、お尻の臭いを嗅がされることです。それと、女王様のオナラを直接、顔にふきつけられ、クサイ目に合わせられることです。どうか女王様、飼育して下さい。絶対忠実に従います。それでは、お呼びかけを待ち、飼育されることを願いつつ拙文を終わります。

（札幌・池田一夫）

私は、二十八才のフェティマニヤ。奇クにはフェティを喜ばすフオトが殆どないので遺憾に思う。白いパンティは同好の者にとって宝物。それを膝小僧迄下ろしたり、足首から脱ぎ下ろして娘の、フオトは素敵だ。他の雑誌では、よく見られるポーズだが奇クには殆どない。カメラハントで以前に谷ナオミが超ミニから白いパンティを覗かせていたぐらいのものである。奇クにぜひお願いしたいと思う。フェティマニヤの分野を充分にとりいれて欲しい。ミッドナイトという外国雑誌に、ナイロンストッキングと白いビキニパンティの娘が、ひげのある男に後ろから抱きあげられているのを、正面からフオトしたのがあった。私は思いきり足を上げさせ、



## 次号(二月号)は十二月二十五日に発売いたします

緊縛と白いパンティをアレンジしたり、縛られた女体よりパンティやズロースがずり下ろされて、中途半端なところで引っかかるように放置されているのが大好きだ。パンティに憑かれた男のために、もっと小型パンティだけの、ありとあらゆる羞恥責め緊縛をとりあげ、思いつき開いた縛りを載せてくれることを夢見ている。

(芦屋市・毛蟹太一郎)

○ 二十六才の貿易商社マンです。奇クを愛読して数年、私は奇クを読む都度に溜息が出ます。と言いますのは、実際にSMプレイを実行し体験された方は、ほんとうに羨ましいですね。私は、いつも空想ばかりで体験したことは一度もありません。現在、私は二DK団地に住み、二十六才の年令相応の知識行動、経済的にも少し余裕があります。この年になりますと、いくつかの結婚ばなしがあります。が、私はその気にはなれません。私は普通の女性には興味ありません。少しS的な女性に強くひかれます。私の心情として、どうせ短

い人生、この人生を楽しく少しでも自分の欲望が満たされ、有意義な毎日を過ごせることができればどんなに楽しいかと思えます。人には余り言えないこの悩み、奇クを通じて告白いたします。日頃心身とも健全な毎日を過ごしておりますが、私はM性のためS的女性に非常に憧れております。私はこのS的女性に献身的な奉仕をすることを夢に思っております。愛読者の女性の方、お便り下さい。年令は四十才ぐらまでの女性なら結構です。私は身長一六五センチ体重五四キロ、容姿には自信があります。(明石市・谷田宗二)

○ 名古屋に住む切腹マニアです。切腹マニアの読者が少ないのでしょうか。奇クに切腹に関する記事や写真の少ないのを残念に思います。かなり前の号に、切腹マニアの少年と美しい召使の切腹プレイそして最後に倉の中で、切腹の絵図をみながら切腹して果てるという小説がありました。あのような大作はもう出ないのでしょうか。私も一つ、切腹をテーマにしたもの

のを書こうと思っています。許されない男女が、お互いに相手の腹を切り裂き、溢れ出る腸を交換して自分の腹に入れて血の海の中に息絶える場面。毒殺されようとした妊婦が、胎児に毒のまわらぬうちに、苦しい息の下で自分の腹を切り裂き、お腹の赤ちゃんを取り出し、乳母の手に渡して息絶える場面等を想像するだけでゾクゾクしてきます。しかし、切腹場面や、こまかい心理描写のためにはぜひ切腹プレイの相手、それも女性が必要です。想定した場面にふさわしい心理状態となってプレイし、それをカメラやテープに収め資料にしたいと存じます。私は切腹こそSとMが混然一体となった極致だと思います。奇ク誌上を切腹マニアのために飾るために、同好の方の出現をお待ちします。

(名古屋・斎藤 浩)

○ 東京都の佐藤一郎さまや、大阪豊中の谷中治さま、どうかお友達になつて下さい。千恵は後手に緊縛され、豊かな乳房の上下をグルグル巻きにされて、身をおおうものは、そのいましめの紐だけという姿を晒します。塩水をドンドン飲まされた挙句の果て、耐え難い

尿意に襲われるのです。羞恥に悶え、仰臥開脚の肢態を晒す私に、貴方がたは美容のための浣腸を施すといえます。私は屈辱に悶えながら、甘い感覚に太腿をふるわすのです。どなたか私のお友達になつて下さる方はいらっしゃいませんか。(神戸市・小杉千恵)

○ 小杉千恵様。相交らずの御健筆嬉しく思っています。寒くなるにつけ、貴女様の聖香に溢れたパンティの一部の布で、マスクのガーゼ代りに出来たら……そんな幻想を追っています。パンティの汚れたのは何枚でも手に入りますけれど、相手が直接、私に渡してくれなければ価値がありません。また相手が自分の使用していた品を私が着用していることを認めなければなりません。本人が自分で汚したものを私に使わせることによつて味わう羞恥心が必要なのです。私は自分がハレンチを好むと同時に、その相手にもハレンチの心を湧現させたいと思います。たとえば千恵様がアンネ処理後の布やパットを私に送って下さる。そしてたまたま私の部屋を訪れた千恵様が、自分のそれが壁にピンでとめてあって、千恵様の分身と、書いて



であるのを見られたとすれば、また別の意味で大きく羞恥心をかきたてられることと思います。

（岐阜・座頭孝司）

○ 美美子小母様、しばらく御無沙汰いたしております。私が仙台を離れている間にも、小母様は益々肥満体になっていくようですね。今、七十五キロとか、しかし私はそんな体では満足いたしません。八十キロ、いや、それ以上に肥満体にならなければ私、いや、すべての男性が満足しないでしょう。小母様は幸せな人。この世のすべての男性が小母様を責めたくてう

ずいているのに、それを知りながら、わざと知らない素振り。だから私は、大好きな仙台を離れてしまったのです。私は町を歩いて肥満女性を見ると、仙台に帰って小母様をメチャクチャに責めたててみたくなります。私は、もう小母様から離れられなくなってしまいました。でも私がいない間に、妊娠されたとか。それを知ったときは悲しかったけれど多少は喜びがありました。太鼓のようなお腹がますます大きくなりますものね。小母様、私は十二月の始めに帰郷します。それまでは、お仕事を無理しないように、お達者で……。

○ （東京・美川秀雄）  
秋も深まり読書の候となりました。毎晩、おそくまで奇クを読んでは、色々空想にふけております。いつも思うのですが、一度ゴムマニヤのための特集号を出して頂けませんか。それが不可能でしたら妊婦マニヤやフンドシマニヤなどのものと合併して特集号としたら如何でしょうか。最近の女性週刊誌に、梶山季之氏のSM小説が出ていますが、とても面白いと思います。我々ゴムマニヤは、一度でもあのような目にあつてみたいと願っています。でも、あ

れを読んだ若い女性は、どんな気持ちを持ったのだろうか？ と思っています。

○ （尼崎・藤田公一）  
私は十月号「受診羞恥譜」で初めて皆様にお目にかかりました。年令三十六才、身長一七〇センチ体重七〇キロ、身体は誠に丈夫ですが顔には自信がありません。これを機会に皆様のお仲間入りをさせて下さい。私は、あの検診以来もっともっと恥かしい姿態で検査をされ、また種々の施術を受けたいと希望しております。どなたか私の願いをかなえて下さい。

（小林 武）

# 本誌既刊号在庫一覧表

既刊雑誌在庫案内

○本誌既刊雑誌は左記一覧表の通り在庫しておりますが、40年に発行のものについては在庫の僅少な御注文願います。

○従来、雑誌の送料は当社にて負担しておりますが、今後は三カ月以上予約注文以外（既刊号は含まず）は一部につき送料二〇円の御負担を願います。多数一括してお求めの際は八小包〆にて発送申し上げます。

昭和41年3月号	昭和41年2月号	昭和41年1月号	昭和40年12月号	昭和40年11月号	昭和40年10月号	昭和40年9月号	昭和40年8月号	昭和40年7月号	昭和40年6月号	昭和40年5月号	昭和40年4月号
(送共三二〇〇円)	(送共三二〇〇円)	(送共三二〇〇円)	(送共三二〇〇円)	(送共三二〇〇円)	(送共三二〇〇円)	(送共三二〇〇円)	(送共三二〇〇円)	(送共三二〇〇円)	(送共三二〇〇円)	(送共三二〇〇円)	(送共三二〇〇円)

昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	昭和	
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	--



☆編集後記☆

○1月号というので、新年のつもりになろうとしても、現実のカレンダーは十一月ってんだから、どうにも具合の悪いもんですナア。多少とも「気を新たにした」ことを汲んでいただいて、マ「本年度」もどうぞよろしく。

○巻頭の『SMと風土』……葉月由紀夫氏の解析根拠の当否はともかく、ウルサイ集計をやられたもの。さぞ根気も要ったこととでござんしょう。いや、参考にナリヤシタ。

○替え歌ってヤツ。いつの世にも、どの方面でも出てくるもの。どうも日本人には、こういう才能が備っているらしいですナ。それほどあの歌は、ピンとくるものがあるんでしょ。うが、あれに限らず、その気になって聴きや

あほとんどの恋歌が、そうじゃないんでしょ  
うかね。牧高志先生、せっかくのメイ作だけ  
れど、あまりお歌いにならないほうが……。  
いえ、歌詞のことではありません、ハイ。  
○『複数プレイ……』で、松山壮吉氏が志向  
していられること。なるほど、最近の某婦人  
雑誌、某週刊誌に載ってましたナア。本誌に  
も告白が寄せられましたが、そりゃ誰だって  
気はあるんじゃないでしょうか？ そう出来  
りゃあワルかねえナ……ッテ。しかし我が国  
ではまだまだ……。だからこそ願望するんだ  
って？ なるほど、ごもっともサマで。

○辻村センセー。あれやこれやでお忙しいの  
に糖尿と妖精との二面、いや三面作戦。両手  
に花とはさぞ重かったでしょうナ。いいんで  
すかねそんなモテテ。いえお体のコトです。

〔懸賞原稿募集〕

△體驗、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これ  
 と思う作品は必ず誌上に取り  
 上げます。腕試しの意味で奮  
 って御投稿願います。採用篇  
 には賞金十万円迄贈呈。

△感想、論評、批判▽

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二十円以上の賞金を呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、  
単行本或はその他見聞などで  
特に興味をお持ちになった事  
項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採  
 用篇には本誌三月分以上又は  
 二千元以上の賞金贈呈。  
 ◎御送付下さいました原稿は  
 原則として返却の求めに応じ  
 ないことになっております故  
 悪しからず御諒承願います。  
 ◎本文記事中に各種の「懸賞  
 原稿募集」を致しております  
 故、御応募の方は項目を御明  
 記の上御送稿下さい。  
 △読者通信原稿▽

△読者通信原稿▽

卷末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放しています。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の栞 ☆

予約に限り

一月分(1冊)	三五〇円	送20円	▽
三月分(3冊)	一〇五〇円	送共	▽
半年分(6冊)	二一〇〇円	送共	▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

一月号

〔第二十四卷第一号〕  
〔通刊第二百六十一号〕

昭和四十四年十二月二十日  
昭和四十五年一月一日  
印刷  
発行

印刷  
発行

編纂人 杉吉北  
發行人 田原俊  
印刷人 虹屋稔夫

夫稔兒

郵便番号558  
発行所 暁出版株式会社  
△振替口座大阪四二七八三番  
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)  
(昭和四十二年四月二一日)  
国鉄大局特別扱承認雑誌第二一〇号

(昭和三年四月二〇日)第三種郵便物認可  
(昭和四年四月二一日)  
国鉄大局特別取扱承認雜誌第二一〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に關する各條例に指定されないうやう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として發行を企圖しておるります關係上、十八才未満の方には絶對販賣下さらさないやう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。